

H I S T O R Y
O F
E U R O P E A N M O R A L S

F R O M A U G U S T U S T O C H A R L E M A G N E

B Y

W I L L I A M E D W A R D H A R T P O L E L E C K Y

T H E T H I R D E D I T I O N

1890.

ヨーロッパの道德の歴史

アウグストウスからシャルルマーニュまで

ウイリアム・エドワード・ハートポール・レッキー著

第三版

1890年

一巻

グーテンベルグ・プロジェクト

<https://www.gutenberg.org/files/39273/39273-h/39273-h.html#toc3>

インターネット・アーカイブ

<https://archive.org/details/historyofeuropen01leck/page/n18/mode/1up>

二巻

グーテンベルグ・プロジェクト

<https://www.gutenberg.org/files/39535/39535-h/39535-h.html>

インターネット・アーカイブ

<https://archive.org/details/historyofeuropen02leck/page/n10/mode/1up>

目次

序文	1
第一章 道徳の自然史	7
第二章 異教徒の帝国	157
第三章 ローマの改宗	323
第四章 コンスタンティヌスからシャルルマーニュまで	444
第五章 女性の立場	693

序文

道徳（*モラル）の歴史家が最も関心を寄せる問題は、道徳の水準とタイプに起こった変化である（*第一、第二の問題）。私は前者を、いわゆる徳が異なる時代に命じられ、実践されていた程度と理解しようと思う。また後者を、異なる時代に異なる徳に与えられていた相対的な重要性と理解しようと思う。たとえばプリニウス（*大はAD23―79、小はAD61―113）の時代のローマ人、ヘンリー8世（*1491―1547）の時代のイギリス人、そして現代のイギリス人は慈愛（*humanity）を徳とし、その反対を悪徳とすることでは皆同じだろうが、慈愛深い気質にふさわしい行いについての判断は大きく異なるだろう。最初の時代の慈愛深い人物はチューダー朝のイギリス人でさえ残虐で野蛮と見なした剣闘士の競技を心から楽しんだだろう。そして今ではチューダー朝の人々が黙認していた多くのスポーツが非難される番になっている。また、このような水準の変化に加えて、徳に与えられる優先順位の絶え間ない変化というものがある。例えば愛国心、貞節、慈善、謙遜といった徳は、ある時代には至高で超越的に重要なものとされ、徳の高い人格の真の基礎とされた。しかし他の時代には背景に追いやられ、高貴な生活の小さな美点に数えられてきた。英雄的な徳、愛情豊かな徳、そして特に宗教的な徳と呼ばれるものはそれぞれグループになって、異なる時代に異なる度合いの名声を得てきた。そしてこうした道徳のタイプの変化の性質、原因、および結果は、歴史の最も重要な分野の一つである。

しかし、ある時代の道徳的状況を推し量るにはモラリストたちの理想を調べるだけでは十分ではない。その理想が国民の間でどの程度実現されていたかについても調べなければならない（*第三の問題）。国家の腐敗はしばしば指導者の放縦で利己的な倫理観を反映している。しかし時にその反動を生み、モラリストたちを社会の一般的精神とは正反対の禁欲主義へと駆り立てることがある。道徳の指導者たちが同胞に働きかける手段はその性質と効果において大きく異なっている。そして最高の道徳教育の時代は、しばしば最高の一般的実践レベルの時代ではない。一種の徳の貴族を私たちは見出すことがある。その指導と行動において最も洗練された卓越性（*excellence）を示すが、社会の大衆には目に見えないような影響力をほとんど持たない人々である。またそれほど英雄的ではないモラリストが社会のあらゆる部分に影響を及ぼしていることもある。したがって、歴史家は指導者によって説かれた道徳のタイプと基準に加えて、人々の実践的な道徳を調査しなければならない。

この三つはアウグストゥス帝（*在位BC27―AD14）とシャルルマーニュ（*AD742―814）の間のヨーロッパの道徳の歴史を検討する際に私が特に重視した問題である。この研究の前段階として、私は道徳の性質と義務に関して対立する二つの学説について少し長く論じた。また後で自然な発展が特殊な要因によってどの程度影響を受けたかを確かめることができるよう、ど

のような徳が文明の各段階に特に相応しかったかを示すよう努めた。次に異教徒帝国の道徳的歴史をたどり、ストア派、折衷派、エジプト派の哲学を検討し、それらがどのような点で社会の一般的な状態の産物あるいは表現であったかを示し、立法や文学の多くの部門におけるその影響を追跡し、皇帝や哲学者のあらゆる努力を阻んだ根深い腐敗の原因を究明した。次に注目すべきはヨーロッパにおけるキリスト教信仰の勝利である。このテーマを扱うにあたって、私は大体において純粹に神学的または論争的な性格を持つすべての考察、パレスチナにおける信仰の起源に関するすべての議論、およびその教義における最高のタイプに関する議論を排除し、教会をシンプルにヨーロッパに影響力を行使する道徳的な主体とみなすよう努めた。私はこの制限の中で、異教徒の帝国の状況がどのように教会の成長を妨げ、あるいは助けたか、教会が遭遇しなければならなかった敵対者の性質、繁栄、禁欲的熱意、野蛮人の侵略の影響下で起こった変化、そして教会が社会の道徳的条件を決定した多くの方法について考察した。人命の尊厳に対する意識の高まり、慈善活動の歴史、聖職者の伝説の形成、禁欲主義の市民的、家庭的な徳への影響、修道院の道徳的影響、知性に関する倫理、衰退するキリスト教帝国とそれに取って代わった蛮族の王国の徳と悪徳、世俗の階級制度のゆるやかな神聖化、十字軍で頂点に達した軍事的キリスト教の第一段階、これらすべてを多少なりとも詳細に考察した。そして女性の地位と男女関係に関する道徳的な問題に起こった変化を検討して本書の結びとした。

このように数多くの主題を調査していると、稀にはあるが、以前の著作で辿った道筋と交差することがある。そこで二、三の事例では、そこで簡単に言及した事実を躊躇なく繰り返すことにした。不可欠な付帯条件を省略して主題を提示したり、不必要に自分の著作を持ち出して常に不愉快なエゴイズムのようなものに陥ったりするよりは、そうした方が良いと考えたのである。私が辿った時代の歴史は私の知る限り、私が採用した視点と全く同じ視点で書かれたことはない。しかし、もちろん私はほとんどの場合、これまで何度も十分に調査されてきた、見慣れた領域を移動してきただけである。この著作に独創性があるとなれば、掘り起こした事実よりも、それらをどのようにグループ化し、どのような意義づけをしたかということだろう。私は助けを得た、より重要な著作物に感謝しようと努めた。もし必ずしもそうでなかったとしても、それは私が扱った主題に関連する特別な歴史書が非常に多いため、またあまりにも多くの参考文献でページを埋め尽くしたくなかったため、そしておそらく場合によっては歴史の一分野に深く関わってきた誰しもにとって、時に自分自身の考察から生まれたアイデアと書物から得たアイデアとの区別が困難にならざるを得ないため、と読者が考えて下さると信じている。

特別に言及しなければならぬ一人の論者がいる。というのも、その名前はこの後のページでたびたび私の脳裏に浮かび、その記憶は他の誰よりも頻繁に、そしてこの数ヶ月はより悲しく私の脳裏をよぎったからである。最近亡くなったミルマン首席司祭（*ヘンリー・ハートポール、179

1—1868、セントポール大聖堂首席司祭）の著作は輝かしいものであって、数も多い。しかし、その知識の驚くべき広がりと同様性、彼が多くの領域に持ち込んだ穏やかで明快でデリケートな判断力、最も幸せな逸話と、最も輝かしく、しかも最も優しいユーモアで沸き立つ彼の会話の無類の優雅さと機転に完全に触れられたのは、彼の友情という大きな特権を持つ者だけだった。そしておそらく個々の能力より注目すべきだったのは、彼の心と性格の見事なハーモニーとシンメトリーであって、そこには不釣り合い、奇抜さ、誇張が全くないため、時には天才でさえ華麗な病気のように見えてしまうほどだった。彼をよく知るすべての人にとって彼を言葉にできないほど尊い人物にした、さらに高い特質を忘れることはできない——真理に対する熱烈な愛、幅広い寛容、人と物に対する大きく寛大で力強い判断力、対立するそれぞれの党派に潜在する善に対するほとんどの本能的な知覚、単なる派閥の争いの騒々しい勝利やはかない人気への軽蔑、過去のイメージに思いを馳せるときの優しく感動的な愛情、極度に老いてなお、自分の時代の進歩的な運動に対する最も鋭い、最も希望ある洞察力、周囲の若い人々の信頼を獲得し、その考えを読む稀有な力である。このような著述家が他のどの分野よりも無知、幼稚さ、不誠実さによって歪められてきた歴史学に身を捧げたことは英文学における最も幸福な事実の一つであると私は考えている。そして以下の著作の多くの部分において（時に彼の見解から乖離することもあるが）私は大いに彼の研究を利用させてもらった。

この本はさまざまな方面からさまざまな理由で多くの、そしておそらく怒りに満ちた反論に遭う可能性があることは否定できない。この本は現在英国で極めて大きな影響力を持つ道徳哲学の一派と強く対立するものである。そしてその記述には多くの欠陥が発見されるだろうことに加えて、この本の計画そのものが多くの人々を不愉快にするに違いない。この主題は必然的に英国の論者が触れることが極めて困難な問題を含んでいる。そして歴史のこの主題が関係する部分は少なからず虚偽と情熱によって不明瞭にされてきたのである。私はこの本に判事的な公平さを持ち込もうと努めた。そして、いかに不完全なものだったとしても、その試みは読者にとって全く無意味なものにはならないと信じている。

1869年5月ロンドンにて

第一章 道德の自然史

道德の性質と基礎に関する簡単な調査は、ヨーロッパの道德的進歩の考察にとって当然のことであり、実際ほとんど欠くことのできない前置きと思われる。しかし残念なことに、こうした研究は深刻な困難と隣り合わせである。その理由の一つは、道德哲学の体系が示す細部の極端な多様性であり、もう一つはそれらを二つの対立するグループに分ける、原理的な対立関係である。道德的区別（*moral distinctions）の最高の調整者と見なされる直観と有用性の対立的主張から生じたこの大論争は、プラトン（*BC427-347）とアリストテレス（*BC384-322）の分裂の中にその痕跡をかすかに見ることができかもしれない。それはストア派とエピクロス（*BC341-270）派の分裂によってさらにはっきりした。しかしそれが完全に明確に定義されたのは近代になって、一方のカドワース（*ラルフ、1617-1688）、クラーク（*サミュエル、1675-1729）、バトラー（*アルバン、1710-1773）、他方のホップズ（*トマス、1588-1679）、エルヴェシウス（*クロード・アドリアン、1715-1771）、ベンサム（*ジェレミ、1748-1832）のような論者の影響によって、それに依存している問題の重要性が完全に理解されるようになってからのことである。

この問題を取り扱う際に遭遇しなければならない広範な知的困難とは別に、個人的な種類の困難

があり、これはすぐにでも解決することが望ましいだろう。ある種のモラリストたちは自分たちが提唱する原理が不道德な結果をもたらすという非難を受けると、それを自分たちの人格に対する非難として憤慨する傾向がある。この論争の特殊性はことの性質上、すべてのモラリストが自分の反対者の見解に対してそのような告発をせざるを得ないということである。道徳哲学の仕事は私たちの道徳的感情を説明しその正当性を示すこと、言い換えれば私たちがどのようにして義務観念を持つようになったかを示し、それに基づいて行動する理由を私たちに与えることである。一つの体系を否定するモラリストは義務という概念や義務を遂行する動機が決してその原理に従って生まれなかったことを示すよう求められる。功利主義者は、彼の敵対者は存在しない能力に基づいて道徳の全システムを組み立てており、地域や時代によって道徳的義務を変化させるような原理を採用し、すべての倫理をぼんやりした感情へと分解していると非難する。直観的なモラリストは後に説明する理由のために功利主義理論は深く不道德なものであると信じている。しかしこのような非難がモラリストの人格に及ぶものと考えるのであれば、道徳理論が人生の中で実際に占める位置を全く誤解していることになる。私たちの道徳的感情は私たちの倫理体系から生じるのではなく、ずっと前に生じているものである。そして私たちがそれらについて推論し始めるのは通常、私たちの人格が十分に形成された後である。推論が非常に不完全であっても、それをした人間の性格が不完全ではないのはあり得ることであり、また非常によくあることなのである。

道徳に関する二つの対立的な理論は多くの名前で知られ、多くのグループに細分化されている。大体においてストア派、直観派、独立派、感情派が一方に、エピクロス派、帰納派、功利主義派、利己主義派が他方に属すると説明される。前者のモラリストは、その意見を最も大まかに述べるなら、人間には博愛、貞節、誠実など、ある性質が他の性質より優れていることを感知する生得（* natural、自然）の力があり、それらを培い、その反対を抑制するべきであると考えている。言い換えれば人間の性質の構造上、正しいという概念は義務感を伴うということである。ある行動の方針が私たちの義務であると言うことはそれ自体で、そしてあらゆる帰結とは無関係に、それを実践するための分かりやすく十分な理由であり、私たちは直観から私たちの義務の第一原理を導き出すのである、と主張する。反対派のモラリストは人間がそのような生得の知覚を持ち合わせていることを否定する。人間には本来、美点と欠点、感覚と行動の相対的優位性に関する知識は全くなく、人間の幸福に資する生活習慣の観察のみがこれらの概念を導き出すと主張するのである。行為を善とするものはそれが人間の幸福を増大させる、あるいは苦痛を減少させることである。悪はその逆である。したがって「最大多数の最大幸福」を得ることは、そうしたモラリストの最高の目的であって、徳の最高のタイプであり表現なのである。

しかし、この後者の学派がそこから先へ進まなかったなら、すべてのモラリストが引き受けなければならぬ仕事を彼らが成し遂げられなかったことは明らかである。経験によってある種の行為

が人類の幸福に資することが示され、その結果これらの行為が至高のものと見なされることがある、
というのは容易に理解できる。しかしなぜそのような行為をしなければならぬのか、という疑問
が残る。もし徳のある行為とは経験によってそれが社会にとって有用なことが示されているもので
あると信じ、また同時に二つの利益が衝突したとき、自分の幸福よりも他人の幸福を追求する生得
の義務があると信じている人々は決して帰納的モラリストの名に値しないだろう。彼らはバトラー
やカドワースのように道徳的能力や道徳的義務感を真に認めていることになるからである。そして
実際、何人かの直観的モラリストはこれと非常によく似た立場をとってきた。例えば現代における
「道徳感覚（* a moral sense）」の学説のまさに創始者であり、おそらく他のどのモ
ラリストよりも強力に徳の無私の性格を擁護してきたハッチソン（*フランシス、1694—17
46）は、すべての徳は博愛、すなわち他者の幸福の追求である、と分析した。しかし彼は博愛の
素晴らしさと義務は「道徳感覚」によって私たちに明らかにされる、と主張した。同じようにヒュ
ーム（*デイヴィッド、1711—1776）は有用性をすべての徳の基準であり本質的要素であ
るとした。ここまでは間違いなく功利主義者である。しかし彼はまた、私たちの徳の追求は無私の
ものであり、それは理性とは別の生得の賛否の感情（*要注目）から生じ、徳や悪徳を凝視したと
きに私たちの中に立ち上がる独特の感覚、すなわち嗜好（* taste）によって作り出される、
とも主張している。同様の学説は最近ではマッキントッシュ（*ジェームズ、1765—1832）
に提唱されている。多くの人は、これが功利主義的道徳体系の完全な説明だと考えている。功利主

義的道德体系はすべての行為と気質をその結果によって判断し、人間の幸福を促進する傾向に比例して道徳的であり、減少させる傾向に比例して不道徳であると宣告するものである。しかし、このような要約は明らかに不十分である。なぜならそれは、すべてのモラリストが答えなければならぬ二つの問いのうちの一つにしか答えていないからである。道徳の理論は何が義務であるか、だけではなく、どのようにして私たちが義務というものが存在すると考えるようになったか、についても説明しなければならぬ。また、単に私たちが追求すべき行動指針が何であるかを説明するだけでなく、この「べき（*ヒュームの法則…isからoughtを導き出すことはできない）」という言葉の意味は何か、そしてこの言葉が表している観念をどのような源泉から得ているのかについても説明しなければならぬのである。

私たちの道徳はすべて経験の産物であることを証明しようと試みた人々は、この課題から尻込みすることなく、彼らに開かれた一つの道に果敢に踏み込んできた。快樂（*Pleasure）や苦痛の予感とは異なる、根源的義務感のようなものが存在する、という考え方を彼らは単なる想像上の幻想として扱う。ある行為を行うべきという意味は、それを行わなければ苦しむということだけである。幸福を得たい、苦痛を避けたいという願望だけが行動の唯一のあり得る動機なのである。私たちが徳のある行動をとるべき理由、言い換えれば他人の利益を求めべき理由は全体として、そのような行いが最大の幸福をもたらすからであり、それが唯一の理由なのである。

すなわち道徳を経験に基づくものとする学説の一般的な主張がここにある。何が徳であり何が悪徳であるかと問うならば、前者は人間の幸福を増やし、苦痛を減らすものであり、後者は逆の効果をもたらすものであるという答えが返ってくる。徳の動機は何かと問えば、それは賢明な自己利益であると答えが返ってくる。しかし幸福、有用性、利益という言葉は多くの異なる種類の楽しみ（*enjoyment）を含んでおり、この理論に多くの異なる修正を加えてきた。

これらの理論の中で最も低俗で最も胸が悪くなるものは、おそらくマンデヴィル（*バーナード・デ、1670—1733）が「道徳の起源に関する探究」の中で唱えたものだろう。この論者によれば、徳は第一に支配者の狡猾さから生まれたものとのことである。支配者たちは人々を統治するため、彼らに自分の情熱にふけるのではなく、それを抑制し、共同体の利益のためにすべてを捧げるのは尊いことである、と説かなければならないと考えた。彼らは虚栄心に働きかけることによってこの目的を果たした。彼らは人間の本性は動物の本性よりも高貴なものであり、共同体への献身が人間を特別に偉大なものにする、と人々を説得した。彫像や称号や名譽によって、レグルス（*マルクス・アティリウス、BC250没、カルタゴの捕虜となって仮釈放でローマに帰るが徹底抗戦を主張した後、約束通りカルタゴに戻って拷問死する）やデキウス（*プブリウス・ムス、BC340没、ラティウム戦争で戦勝のために自らを生贄に捧げた）のような人物を絶えず褒め称

え、無益な享樂に溺れる人々を低俗で卑しい階級と表現することによって、彼らはついに激しい競争心に火をつけ、最も勇ましい行動を鼓舞するほどに人々の虚栄心をたきつけた。そしてすぐに新しい影響が現れた。他人の尊敬という快樂を得るために自分の情熱を抑えることから始めた人々は、この抑制によって過度の放縱から当然もたらされる多くの苦痛を避けられることに気がついた。そしてこの発見が徳への新しい動機づけとなったのである。さらに共同体の各構成員は自分自身が他人の自己犠牲から利益を得ていること、また自分が他人を気にせず私益を追求するならば、同じように行動する人物がなによりも自分の前に立ち塞がることを発見し、自己犠牲の素晴らしさという觀念を世に広める二つの理由を手にした。この結果、人々は社会にとって有害なものを「悪徳」と呼び、有益なものを「徳」として称えることに同意した、というわけである。

マンデヴィルの見解は発表された当時はその本質的な価値以上の注目を集めた。しかし現在では急速に忘却の彼方へと沈下しつつある。この著者は「ミツバチの寓話」と呼ばれる詩と、それに付けたコメントの中で私が述べたものと全く相反する命題を唱えた。「私的悪徳は公的利益」と主張し、非常に弱々しく、時には非常にグロテスクな長い議論によって、悪徳は人類にとって最高度に有益であることを証明しようとしたのである。しかし、はるかに偉大な論者がすでに道德の体系を打ち立てていた。それはいくらか反感を買うことが少なかったとはいえ、マンデヴィルの理念に勝るとも劣らず利己的なものだった。ホッブズの徳の本質と起源に関する見解は、それほど大きな変化も

なしに狭義の功利主義者と呼ばれる一派によって受け入れられてきた。

こうした論者たちによれば、自分自身の利益だけが私たちを支配しているのである。彼らは快樂こそが唯一の善であり、道徳的な善と道徳的な悪とは快樂をもたらず法則に私たちが自発的に従うこと以外の何ものでもない、と断言している。善を単に善として愛することは不可能である。私たちが神の善について語るとき、それは神が私たちに善をなすことだけを意味する。敬虔さとは、私たちに良いことも悪いこともする力を持つ者が、私たちに良いことだけをするという確信にほかならない。敬虔の快樂は、私たちが神から快樂を受けると信じていることから生じ、敬虔の苦しみは、私たちが神から苦しみを受けると信じていることから生じる。この論者たちによれば私たちの優しささえも、すべて自己愛の一形態だそうである。例えば慈善行為は部分的には他人の尊敬を得たいという欲求から、部分的に自分が与えた好意が報われることへの期待から、部分的に私たちが自分の欲求だけではなく、他人の欲求をも満たせることの証明による権力意識の満足から生じているのである。憐れみとは、自分に降りかかるかもしれない悲しみを他人の悲しみを見ることによって鮮明に実感することから生じる感情である。私たちは特に災難に相応しくない人々を憐れむが、それは私たちが自身がその範疇に属していると考えからである。そして、いかなる予測も不可能な苦しみの光景は、私たち自身にも起こりうることを最も強く想起させるのである。友情とは、友人が必要としているものに対するセンスである。（*すなわち取引である）

このような人間の性質の概念からどのような道徳の体系が生じるかを予知するのは容易なことである。どのような性格、感情、行動も自ずと他より優れているものではなく、人間が未開の状態にある限り、道徳は存在しない。しかし幸いなことに私たちは皆、自分の快楽の多くを他人に依存している。協力と組織化は私たちの幸福に不可欠であり、これらは私たちの欲望に何らかの抑制をかけることなしには不可能である。この抑制を確保するために制定されたのが法律であり、それは報酬と罰に支えられて、共同体の利益に配慮することを個人の利益としてしているのである。ホップズによれば、人間の気質は非常に無秩序なものであり、それを抑制することの重要性は非常に超越的であるため、絶対的な政府のみが善である。君主の命令は至高のものであり、したがって道徳の法でなければならぬ。この学派の他のモラリストたちはこの考え方を否定しながらも、倫理学の構想の中で、立法に非常に大きな際立った地位を与えている。なぜなら、私たちの行動はすべて私たちの利益によって決まり、徳とは単に私たち自身の利益が共同体の利益に一致することであり、賢明な立法はこの一致を確保するための主な手段であるため、モラリストと立法者の機能はほぼ同じなのである。（*エルヴェシウス）しかし刑法の賞罰に加えて、世論から生じるもの―名声や悪名、私たちへの友情や敵意―も徳の側に組み入れられる。法律の教育的影響力、共同体のさまざまな構成員の利害の一致に対する認識の高まりは、「平和で友好的かつ快適な生活の手段」（*ホップズ）であるすべての資質に好意的な世論を作り出す。正義、感謝、謙虚、公平、慈悲のようなものである。

純潔や貞節も、それだけを考へるならば最も粗野で最も無分別な欲望より優れてゐるとは言へない。しかし社會の幸福に資することが示されるため、結果として徳となる。このような世論の教育は文明化とともに絶えず強化され、次第に人々の性格を作り上げ、益々無欲で無私で英雄的なものにする。利他的、無私的、英雄的な人物とは、もちろん自分の快樂の追求に熱中するが、その快樂の中に他人の幸せも含まれるような方法で追及する人物であると説明されている。（*ベイン）

自分の利益を追求することに慎重な人物は、完全に徳の高い人生を送ることができ、というのは非常に古い主張である。宗教的な動機を輕視する傾向が最も強い、功利主義者たちのほとんどがこの見解を採っている。また、彼らがすべての人間は必然的に自分自身の幸福だけを追求するものであると主張するとき、別の道筋から、すべての悪徳は無知であるというプラトンの古い學說に戻ることができる。分別を持って快樂を追求することは徳であり、無分別に快樂を追求することは悪徳である。徳とは一種の賢明さであり、悪徳とは愚昧または誤算にほかならない。（*ベンサム）人類の道徳の状態を改善するための方法は二つある。そしてたつた二つしかない。第一は、各人の利益をますます他の人の利益に一致させることであり、第二は、人が自分の本當の利益を知ることが妨げている無知を払拭することである。（*エルヴェシウス、ベンサム）貞節や眞実、あるいは私たちが徳とみなすその他のものが、全体として驅逐するよりも多くの苦痛を生み出し、あるいは人に与えるよりも多くの快樂を奪うならば、それらは徳ではなく悪徳だろう。（*ベンサム、プラトン、

ホラテイウス)もし徳と認められているものを実践することが自分自身の利益にならないことが示されるなら、それらを実践する義務はすべて直ちになくなるだろう。(＊ペイリー)倫理学の構想の全てはエピクロス以下の四つの規範から展開することができる。苦痛をもたらさない快楽は、受け入れられなければならない。快楽を生み出さない苦痛は避けなければならない。より大きな快楽を妨げ、あるいはより大きな苦痛を生むような快楽は避けなければならない。耐えなければならぬのは、より大きな苦痛を避け、より大きな快楽を確保するための苦痛だけである。

ここまで私は現世的な動機以外にはほとんど触れてこなかった。この学派の最も著名な人々の多くはこれで十分だと考えているが、他の人々には―私が思うに、これから見るような―別の意見を持つ大きな理由があるのである。彼らの明らかな拠り所はあの世での報酬と罰である。従って彼らはこれを徳の動機として提示する。利己心の理論のすべての修正のうち、これだけが一定不変な、議論の余地がないほどに妥当な、徳への私心ある動機を備えていると言うことができる。もし人々が全知全能の裁判官によって与えられる無限の罰と無限の報酬という概念を受け入れるならば、間違ひなくそれは悪徳よりも徳を実践する強い理由となるだろう。したがって同等の報酬の見込みなしに快楽を犠牲にすることは単なる狂気の沙汰であり、理性を持つ存在の名に値しないと強調する一方、来世においてははるかに大きな楽しみで報われるのだから、現世の楽しみは犠牲にしてもよい、というのがこういう論者たちの主張である。天国に入り、地獄から逃れることが私たちのすべての

行動の源泉であるべきである。そして徳とは単に打算を死後にまで拡張したものである。この打算こそ私たちが「宗教的動機」と呼んでいるものである。徳の高貴さや卓越性が私たちを奮い立たせるといふ考えは異教徒の単なる妄想に過ぎないのである。

単なる打算によって考察するならば、考えられる反論は二つだけである。天国に入るために必要な徳の量が明らかにされていないため、地上ではいくつかの悪徳を平気で楽しめると言えるだろう。しかしこれに対しては、必要条件が不確かだからこそ熱心な敬虔さが用心になるのである、またあらゆる功罪に適合する報酬と罰の尺度はおそらく段階的に存在するのである、という反論がある。また現在の快樂は少なくとも確かなものであるが、あの世の快樂は同様に確かなものではない、とも言えるだろう。これに対してはあの世で与えられる報酬や罰は非常に大きいので、通常の分別の法則に従うなら、もしそれが現実である可能性が少しでもあれば、賢者はそれを見据えて自分の行動を律するはずである、という答えが返ってくる。

しかし、こうした論者の中には功利主義の大きな流れからある程度乖離して、道徳律の基礎は功利ではなく、神の意志あるいは恣意的な決定であると宣言する人々もいた。この見解はスコラ学者のオツカム（*1285—1347）や同年代の他の論者によって提唱されたが、現代では多くの信奉者を見つけ、さまざまな動機によって擁護されている。ある者は法は単に立法者が宣言したも

のに過ぎないという哲学的な理由から、ある者は道徳を神学に永久に従属させたいという願いから、またある者は神によって承認されたとされる明らかに不道徳な行為から生じるキリスト教への反論に答えるために、またある者はカルヴァン主義の強い影響を受けて功利主義道徳に深く反発し、同時に人間の性質の全的墮落を固く確信して、いかなる信頼しうる道徳感覚の存在も認めないことによつて、この見解を支持してきたのである。

しかし大半の場合、これらの論者は実質的に功利主義者であることがわかる。神の意志をどのようにして知ることができるのかと問われると、彼らはそれが明示的な啓示に含まれていない限り、功利の法則によつて発見されなければならない、と答える。なぜなら自然は神が最高に慈悲深く、人間の幸福を望んでいることを立証しているからである。したがつてその目的に向かうあらゆる行為は神の意志に適っているのである。なぜ神の意志に従わなければならないか、という問いに対する答えは二つしかない。一つは、私たちは創造主に対して感謝の念を抱く生得的な義務を負っているから、という直観的モラリストの答えである。もう一つは、創造主は無限の報酬と罰を自由に与えられるから、という利己的モラリストの答えである。通常は後者の答えが採用されているようである。最も著名なメンバーがこの学派の意見を非常に簡潔にまとめている。「人間の善が臣民、神の意志が支配者、永遠の幸福がすべての徳の動機であり目的である。」（*後出ペイリー）

帰納的学派のモラリストの特徴は、私たちの性質の高い部分と低い部分を区別し、私たちに義務の法則の存在やそれが命じる行為を明らかにする、自然すなわち生来の道徳的感覚や能力の存在の完全な否定であることを私たちは見てきた。これらの論者の唯一の前提が、一般的に求められている幸福は望ましいものであるということ、彼らが行為や感覚に認める唯一の価値は人間の幸福を促進する傾向であるということ、そして彼らがあり得ると考える徳の高い行為の唯一の動機は行為者の現実の、あるいは想定される幸福であることを私たちは見てきた。道徳における拘束力はその義務をこのように構成しているということである。そして、それを離れて「べき」という言葉は全く意味をなさない。私たちが見てきたように、これらの拘束力にはさまざまな種類と重要度のものがある。ペイリー（*ウイリアム、1743—1805）は他のものも認めはするものの、宗教的なものを計り知れないほどに重要であると考え、それを徳の唯一の動機とした。ロック（*ジョン、1632—1704）はこれらを神の賞と罰、法的罰、社会的罰に分け、ベンサムは肉体的、政治的、モラル的あるいは社会的、宗教的なものに分けた。一つ目は悪徳の報いである肉体の害、二つ目は立法者の法令、三つ目は社会的交際の中での快樂と苦痛、四つ目は来世での賞と罰である。

十六世紀から十七世紀にかけてのイギリスにおける道徳規範を経験から導き出す人々と、理性の直観、特別な能力、道徳的感覚、あるいは共感の力から導き出す人々との間の論争は、主に人間の本性における無私の要素の存在に関わるものだった。この存在の実在性はシャフツベリー（*アン

ソニー・アシュレー・クーパー、1621—1683）によって主張され、ハッチソンによって前例のない、そして私が思うに、抗しがたい力によって立証された。同じ問題はバトラー、ヒューム、アダム・スミス（*1723—1790）の著作においてかなりの位置を占めている。ホッブズ派の利己主義は、ある程度緩和されているが、ベンサムは著作のあらゆるページに見出すことができる。しかし彼の弟子の数人はこの点において師から大きく逸脱した。そして彼らの手によって功利主義全体のトーンと色合いが変化した。この変容をもたらした二つの要因は私たちの無私の、すなわち共感的感覚の認識と、観念の連合の学説である。

人間の性質は他人の喜びを見て自然に喜びを得るようにできている、ということとは普通の観察者にとつて考え得る限り最も明白な事実の一つかもしれない。しかしホッブズはこの事実をきつぱりと否定した。そして前世紀の大部分においてエルヴェシウス派の論者たちの間で、家庭や社会における全ての愛情は単に愛する側の必要の命ずるところである、という証明の試みが流行していたのはこれまで見てきたとおりである。ベンサムは共感の快楽と苦痛の現実性を認めていたが、自分の哲学の全ての精神に従つてそれらができるだけ背後に追いやった。そしてすでに述べたように彼が承認する徳の要約に加えなかつたのである。しかし、その後の同学派のメンバーたちはそれらを生じる源泉について意見を異にしてはいても、それらを完全に認識する傾向にある。一つの学派によれば、私たちの善意の愛情は利己的な感覚から、以下に説明するような方法で観念の連合によつて

導き出されたものだということである。もう一つの学派によれば、それらは私たちの本性の構造に元々備わっているものである。それがどのように発生したにせよ、その存在は認められ、その育成は道徳の主要な目的であり、その行使から得られる快楽は徳への主要な動機となる。この点に関する直観的モラリストとそのライバルとの相違は二種類ある。両者とも人間の本性には善意と悪意の両方の感情が存在し、私たちはその一方を他方と区別する生得の力を持つていることを認めている。しかし一方が他方より優れていると認識する生得の力をもっていることを前者は主張し、後者は否定する。両学派とも私たちが他者への博愛の行為に快楽を感じることは認めている。しかし前者の学派の論者の多くはその快楽は求めることなくして得られたものであると主張し、後者の学派の論者はそれを得たいという欲望が行動の動機であると主張するのである。

しかし、功利主義的徳徳の体系の中で最も独創的で、同時に最も影響力があるのは、その特徴をハートリー（*デイヴィッド、1705—1757）の連合の学説に負うものである。この学説は倫理学の近代的成果のなかで功利主義者側において、直観主義者のいうところの生得的徳徳観念（*innate moral ideas）と区別される生得的徳徳能力（*innate moral faculties）の学説に相当する重要な位置を占めている。この理論は古代人にはまったく知られていなかったわけではない。しかし彼らはそれがどれくらい拡張できうるかということや、そこから推定されうる重要な結果を認識していなかった。アリストテレスにもその痕跡

が見られる。またエピクロス派の中にはこれを友情に応用して、私たちはまず友人が私たちに与えてくれる快楽のために友人を愛するが、やがて有用性を考慮することなく、彼自身ゆえに彼を愛するようにになると主張する者もいた。近代人の中でロツクは「観念の連合」という言葉を考案したという功績があるが、彼はそれを明らかに風変わりな共感や反感にだけ適用している。しかし、ハツチソンはハートリーの学説とこの学派が好んで用いた実例の両方を先取りした。私たちはあるものをそれ自体喜ばしいものとして欲し、別のものを単なる喜ばしいものを得るための手段として欲する、としたのである。そして後者を「二次的欲望」と呼んで、前者と同じくらい強力になる場合があることを指摘したのである。「例えば私たちは富や権力が欲望を満たすことを理解すると同時にそれらを欲するようになる。こうして、富と権力という欲望が普遍的なものになる。なぜなら、それらは私たちのすべての欲望を満足させる手段だからである。」今ではほとんど忘れられてしまったが、ゲイ（*ジョン、1699—1745）という名の聖職者は、自分の理論の最初の示唆をハートリーから得たとする短い論文によって、同じ原理をはるかに先に進めた。そして実際、そこにはその最も価値ある部分があつきりと打ち出されている。ゲイは人間に生来の道徳感覚や博愛の原理が存在するという点においてハツチソンとは全く意見を異にする。しかし彼は成人した人間が道徳感覚を持つていることを証明するハツチソンの議論は抗しがたいものであることを認めた。そしてこの事実とロツクの教えを「二次的欲望」説によって調和させようと試みたのである。私たちは推論において常に第一原理や公理に立ち返るわけではなく、ときに自明ではなくとも証明が可能とわかっ

ている命題から出発することもある、と彼は言う。同じように私たちが自分の行動を正当化しようとするとき、その唯一の究極の根拠である幸福をもたらす意図ばかりに訴えるのではなく、その行動が既知の「幸福への手段」のいくつかを生み出すことで満足するのである。これらの「幸福への手段」は正しい行動の動機として訴え続けられるうちに、意図とは無関係に固有の価値を持つ目的と見なされるようになる。このようにして私たちは自分の利益とは無関係なときでも徳を愛し、称賛するようになるのである。（*ここまでゲイの見解）

こうした見解を拡大・精緻化したハートリーの大著は1747年に出版された。この著作には感情がどのように精神に作用するかという、今では立ち入る必要のない多くの生理学的思索が含まれている。そしてプリーストリー（*ジョセフ、1733―1804）やベルシャム（*トーマス、1750―1829）には熱狂的に、そしてタッカー（*エイブラハム、1705―1774）にはある程度受け入れられたものの、その純粹な倫理的思索は今世紀になって一部の有力な功利主義者に取り上げられるまで大きな力を持つことはなかったと私は考えている。その真偽はともかく、マンデヴィルやホッブズのもののような低俗で卑しい人間観から出発して、新しい要素や高貴な要素を一つも導入せずに、哲学的鍊金術の奇妙なプロセスによって、この本来の利己主義から最も勇壯で最も精妙な徳を進化させると宣言するシステムの知的壮大さには称賛を惜しむことはできない。この偉業達成の方法は、一般に欲望という情熱によって説明される。金銭そのものはまったく立派

なもの、楽しいものではない。しかし私たちの欲望の対象の多くを調達する手段であるため、私たちの心の中で快樂の觀念と結び付けられ、それ自体が愛されるようになる。金銭への愛がお金で手に入るすべてのものへの愛を完全に消し去り、取って代わることは可能である。守銭奴は金銭の何分の一かを手放すよりも、それらすべてを諦めようとするのである。

同じ現象を他の多くの形で発見できるとのことである。例えば私たちは権力を求める。それが私たちに多くの欲望を満たす手段を与えてくれるからである。権力はそれらの欲望を連想させ、ついにはそれ自体が熱烈に愛されるようになるのである。稱賛は誉める人物の愛情を示し、私たちが他人の愛情を得ていることの印になる。最初は手段として価値を持っていたものが、やがて目的としても求められるようになる。そして、その熱意は決して自分の耳に届くことのない死後の稱賛のため、私たちがこの世のあらゆるものを犠牲にするほどのものとなる。そして連想の力はさらに遠くまで及ぶだろう。私たちが稱賛を好むのはそれが私たちにある種の利益をもたらすからである。そして私たちはやがてその利益よりも稱賛を愛するようになる。同じような経過で私たちの愛情は自然に、あるいは一般的に私たちに稱賛をもたらすものに移っていく。私たちはついに稱賛に値するものを稱賛以上に愛し、それを放棄するくらいなら永遠の汚名にすら耐えるようになるだろう。私たちのすべての道徳的感情はこのような過程を経て生じる、とのことである。人間には生得の善意の感覺というものはない。しかし幼児はその快樂を母親の觀念（*idea）と、少年は家族の

観念と、人間は自分の階級、教会、国、そしてついには全人類の観念と結びつけることを学び、それぞれの場合において、やがて独自の愛情が形成されるのである。他人の苦しみを見ると子供は自分の苦しみを思い出し、親は幼児の想像力に訴えてこれをさらに強める。さらに「何人かの子供と一緒に教育されると、一人の子供の痛み、快樂の否定、悲しみが次第にある程度まで全員に及ぶ」こうして他人の苦しみが自分の観念と結び付けられ、憐れみの感情が生じるのである。博愛と正義は私たちの心の中で仲間の尊敬、互恵、将来の報酬の希望と結びついている。これらのものは最初これらに結びついているものゆえに、最終的にはそれ自身ゆえに愛されるのである。一方、反対の連想の流れは、悪意と不正に対する反発を生み出す。全体として、このようにして徳は私たちの愛情の最高の対象となるのである。私たちのすべての快樂のうち、徳と呼ばれる行為から得られるものは、他のどの源泉から得られるものよりも多いのである。他人の徳の高い行為は私たちに数え切れないほどの利益をもたらす。自分の徳は人々に尊敬されることと好意によって報われる。すべての称賛の形容詞は徳に、すべての非難の形容詞は悪徳に使われる。宗教は一方に無限の快樂の期待を、他方に無限の苦しみの恐怖を結びつけることを教えている。こうして徳は楽しいことという概念と特別に結びつくようになる。徳はやがてこれらとは無関係に、またそれ以上に愛されるようになり、それを実践することに快樂の輝きを感じ、それを犯すことに激しい苦痛を感じるようになるのである。こうして生まれた良心は私たちの生活の支配原理となり、それに背くくらいならこの世のあらゆるものを犠牲にするようになった私たちは、観念の連合によって、ヒロイズムの最も高い

領域へと昇っていくのである。（*というのがハートリーの主張である）

このある意味では空想的であると私が考える独創的な理論の影響力は、その信奉者の能力よりも、数に左右されている。それはイギリス国外ではほとんど知られていないと思われるが、イギリスでは非常に多様な考え方を持つ人々を大いに魅了し、他の形の帰納理論に対する反論のいくつかを間違ひなく言い抜けることができる。例えば、直観的モラリストが私たちの道徳的判断は瞬間的であり、共感や反感の明白な衝動の下に行われるため、功利主義者が還元する利害関係の冷徹な計算からは最もかけ離れていると主張すると、私たちの判断の近因となる感情を生み出すには観念の連合だけで十分だと返答できるのである。この学派のモラリストの中でハートリーの弟子だけが良心を人間の本性の重要な要素として認め、先々を考えることなく、徳そのものを幸福の一つの形として愛することが可能であると主張している。この理論が教育に帰する計り知れない価値は、教育に並外れた実践的重要性を与える。私たちが罪と徳の間でバランスをとるとき、私たちの意志は必然的により大きな快樂の方に傾く、とこの理論は言う。もし私たちが徳よりも悪徳に多くの快樂を見出すなら、私たちは必然的に悪に傾く。もし悪よりも徳のほうに快樂を見出すなら、私たちは不可避免的に善のほうに引き寄せられる。しかしこのような動機の強さは、幼少期の観念の連合によって計り知れないほど強められるだろう。幼い頃から称賛や快樂の観念を徳と関連付けることに慣れていれば、私たちは容易に徳の動機に屈し、悪徳に対してそうであれば悪徳の動機に屈するだろう。こ

のように一方または他方の動機に容易に屈することが性質を作るのである。この性質はこうしたモラリストによれば教育の産物であり、観念の連合によってもたらされる、完全に人工的なものだということである。

この理論は洗練された、堂々たるもののように見えるかもしれない。しかし本質的には依然として利己的なものであることが分かるだろう。徳への愛によってこの世のあらゆるものを犠牲にするときでさえ、善人は自分の最大の楽しみを求めているだけであり、自分が見送ったものよりも多くの快樂を与える一種の精神的贅沢を満喫しているのである。ちょうど守銭奴があらゆる形の消費よりも蓄積に多くの快樂を見出すのと同じである。確かにこの環境からこの理論を解放しようとする試みが一つあった。しかし私には全く無益なものと思われる。人は最初、快樂を得るために有害な過食にふけるが、その習慣が身につくと快樂を得られなくなった後もそれを続け、同様の法則が徳の習慣の場合にも働くと言われてきた。しかしある習慣を身につけた人が、それが積極的な楽しみを与えなくなった後もそれを実践し続けるのは、それをやめると激しい精神的苦痛にも等しい落ち着かなさや不安が生じるからである。その苦痛を避けることが行動の動機になっているのである。

私が注釈に記した文章を熟読された読者は、功利主義の論者たちが利己主義という誹りを彼らの体系に対する中傷として、どれだけの義憤に基づいて非難しているかを理解できるだろう。人が苦

しみを避け、可能な限り大きな楽しみを得るために行うすべての行為を利己的すなわち私利的であると表現することは、こじつけでも不自然でもない私は考えている。もしそう表現するならば、利己的という言葉はこの体系のすべての部門に当てはまる。同時に、最後に指摘した功利主義者の洗練された快樂主義とホッブズ、マンデヴィル、ペイリーの著作の間には大きな違いがあることも認めなければならない。また少なからぬ直觀的モラリストやストア派のモラリストが、徳から得られる快樂について、これらの論者とほとんど変わらない言葉で語っていることも認めなければならない。歸納的學派の初期メンバーの主な目的はすべての最も高貴な行為を粗雑で利己的な要素に分解することによって、人間の本性を自分たちの水準まで低下させることだった。この學派の後期メンバーのうち、より影響力のある何人かの主な目的は、幸福と利益に関する彼らの概念を最高のヒロイズムの發露を包含するような形へと昇華させることだった。これまで見てきたように彼らは良心は実在するものであり、私たちの人生の最高の指針となるべきものであるということを完全に認めているが、それは元來利己主義から生まれ、觀念の連合の影響下で變化したものであると主張している。また彼らは共感的な感情の実在を認めるが、その源泉は通常同じもの（*觀念の連合）に由来していると言うのである。確かに彼らはその原則に矛盾せずに、言葉の嚴密な意味での無私の行為の可能性を認めることはできない。しかし彼らは、人が他人のために自分を犠牲にすることに最高の快樂を見出すことは十分に可能であり、徳と快樂の結合はそれが習慣的に自発的で打算のない行動につながるときにのみ完全である、そして罪を犯すことにその結果得られる快樂より

も多くの苦痛を感じない人間は健全な道徳的状态にはない、と主張するのである。理論そのものの原理は変わっていないがこうした論者の手にかかって、その精神は完全に変化してしまったのである。

このように帰納的理論のさまざまな修正について、簡潔ではあるが明確かつ正確に説明できたと思うので、私はこれに対して提起された、あるいは提起されうる主要ないくつかの反論に進むことにしよう。そして私たちの道徳的感覚は私たちの構造の本質的な部分であって教育によって発達するが、教育に由来するものではないと信じる人々の意見を定義し、弁護することに努め、その進化の道筋を調査してこの章を終えることにしたい。そうすることによって道徳の自然史をある程度理解し、その後の章において道徳の正常な進歩が宗教的または政治的な機関によってどの程度加速、または遅延されたかを判断することが可能になるだろう。

「心理学とは発達した意識にすぎない。」（*サー・ウィリアム・ハミルトン、1788—1856）とはよく言ったものである。モリストが私たちは徳と呼ぶものはその評価をもつばら有用性から得ており、それを実践する動機は行為者の利益や快楽にあると主張するとき、私たちの最初の疑問は当然、この理論が人間の感情や言葉とどこまで一致しているかということである。しかしこの基準で検証するならば、功利主義ほどきっぱりと断罪された学説はない。そのすべての場面にお

いて、またすべての主張において、それは共通の言葉と共通の感情に真つ向から対立しているのである。あらゆる国、あらゆる時代において、一方の利益と実用、他方の徳という理念は多くの人々によって完全に異なるものと見なされてきたし、あらゆる言語がその区別を認めている。名譽、正義、正しさ、徳、およびあらゆる言語におけるこれらに相当する用語は、慎重、賢さ、または利益という用語とは本質的かつ明白に異なる考えを心に抱かせるものである。この二つの行動指針は一致することもあるが、決して交じり合うことはなく相反するものであると想像することには少しの困難もない。人が高い名譽意識や強い道徳的感情に支配されていると私たちが言うとき、それは彼が打算的に自分自身の利益や社会の利益を追求していることを意味しない。人類の普遍的な感情は自己犠牲を称賛に値する行為の本質的要素と見なす。自己犠牲とは見返りの快樂を期待することなく、意図的に最も快樂的ではない道を歩むことを意味する。利己的な行為は、罪はなくとも、徳とはなりえない。すべての善行を利己的な動機のせいにすることは徳の歪曲ではなく否定である。エピクロス主義者が大衆の前で自分の人生の目的は自分自身の幸福の追求であると宣言したなら憤慨と軽蔑の声が上がらないわけがない。利己的な理論によると（*有用性だけが）行動の唯一の合理的で実際のな動機であるという―このことを、その人格を卑しめ、貶めることなく、意識的に自分のすべての事業の計画の目的にすることは、誰もできない。自分の内面を見ようが、敵や味方の行動を調べようが、歴史やフィクションの登場人物を裁こうが、この問題に対する私たちの感情は同じである。個人的な楽しみへの欲求が善行の動機であると信じられるのと全く同じ分量だけ、その

行為者の功績は縮小される。もし私たちがその動機を完全に利己的なものであると信じるなら、その功績は完全に失われる。もし、私たちがその動機を全く利己的なものでないと信じるなら、その功績はまったく純粹なものである。それゆえプロメテウス（*人類に火を与えたため、三万年間ワシに肝臓を啄まれるという刑罰を受けた）の、すなわち全能の神の悪意に絶え間ない苦しみを受ける徳、あるいは来世の報酬を期待しない無神論者が共同体の利益にならない意見を棄てるのではなく、それを真実であると信じたために恐ろしい死を遂げたことが称賛されるのである。すべての時代、すべての国、すべての人々の判断が、これまでに行われたあらゆる高貴な行為の特徴であったと宣言したこの自己犠牲を利己的モラリストは否定する。もし意識の光によって私たちの道徳的存在の法則を読み解こうとする哲学が、哲学体系を構築しようとはせず、ただ意識に従ってきただけの人類の大多数が到達した結論と真っ向から対立することが明らかになるならば、一般的な倫理用語によるほとんどの区別は全く意味のないものになってしまう。そして、このことは少なくともその真実に対する強烈な傲慢であると言えるだろう。モリエール（*1622―1673、フランスの俳優、劇作家）の主人公が生涯、散文体というものを知らずにそれを話していたとしたら、それは単に散文とは何なのかを理解していなかったということである。この場合、私たちは人が全ての語彙を使って論じていた自分の人生の主たる原理について完全な錯覚に陥っていたことを認めなければならぬ。

このような場合、求める快樂が野卑で物質的な楽しみではなく、徳を實踐したという満足の場合はまた別であると言われている。もし徳の高い人物の動機の一つが、自分が払った犠牲を補って余りあるほどの強烈な満足がその行為の後に待っているという確信であると人々が（*実際に納得できないが）納得できたなら、その違いは思ったほど大きなものではないと私は思う。しかし実際――そして、思うにこのテーマに関する人々の意見の根底にある意識として――徳の快樂はそれが追いつめる対象ではないという明確な条件下でのみ得られるものである。この種の現象を私たちは皆知っている。例えば祈りはすべての超自然的な介入とは別に、人間の本性の法則によって祈祷者の心に非常に有益な影響を与えることがよく知られている。熱烈な真剣さ、揺るぎない信仰、そして目に見えない存在の存在を鮮明に実感しながら祈りを捧げる人の心は、それ自体が自分の幸福と道徳的資質の向上に極めて有益な状態にまで高められているのである。しかしそれ以上の何も期待していない人物は決してこの境地に達することはできない。自分の請願に応答があることを信じもせず、望みもしない者がそのような精神状態になることはあり得ない。聖母像の前でプロテスタントが、異教徒の偶像の前でキリスト教徒が、そこに達することはありえない。もし祈りがこの利益のためだけに捧げられるなら、それは絶対的に不毛なものであり、すぐに終息してしまふだろう。また同様に、ある政治経済学者たちは慈善のために金銭を与えるのは無駄である以上に悪いことであり、社会にとって明らかに有害であると主張している。しかし彼らはさらに、私たちの博愛の情を満足させることは私たちにあって喜ばしいことであり、この源泉から得られる快樂は私たちの贈り物か

ら生じる悪よりも非常に大きいかもしれない、したがって私たちが「最大幸福の原則」に従って隣人をわずかに傷つけることでこの自分たちの大きな満足を買うことは正しい、と言っている。この功利主義的倫理学の非常に特徴的な標本に関する政治経済学については、後で検討することにしよう。ここでは、この動機のためだけに意識的に博愛を実践する人物は目当てとする快楽を得ることができない、ということを観察するだけで十分である。私たちは自分が善を行ったという思いから楽しみを得る。もし自分が害を与えていると信じ、それを自覚していたならそのような楽しみを得ることはできない。同じことが良心の充足にも顕著に当てはまる。義務を果たせばそれだけで満足感が得られるが、精神的な快楽の期待のためだけに義務を果たすのであれば、良心はその取引の承認を拒否するのである。

人間の性質の道徳的な部分と、その他の部分との間には、種類と程度の両方において大きな区別があるということは最も顕著な事実である。しかし功利主義的な原則に照らせば、このことはまったく説明がつかない。もし徳の卓越性が人間の幸福を促進する実用性や傾向のみにあるとするなら、私たちの通常の道徳観念とはまったくかけ離れた行為の数々を列聖（*canonise）せざるを得ないだろう。社会の生理を明らかにする政治経済学や哲学史は、いわゆる有徳の行為よりも、利己的な行為の方がはるかに人類の幸福と福祉を発展させている、という全体的な傾向を示している。国家の繁栄と文明の進歩は主として、自己の利益を忠実に追求しながらも、無意識のうちに共

同体の利益を促進した人々の努力によるものである。人に蓄財をさせる利己的な本能は、人に施しをさせる思いやりある本能よりも最終的に世界に多くの利益を与えている。ある偉大な歴史家は社会にとって知的発達は道徳的発達よりも重要であると力説した。しかし、これらを隔てる区別の真実が真剣に問われたことがあっただろうか。読者はおそらく、その区別の鍵は動機にあると叫ばれるだろう。しかし、行為者の動機は行為の道徳性に絶対的に影響を与えない、というのは功利主義学派のパラドックスの一つである。ベンサムによればあり得る動機はただ一つ、自分自身の楽しみを追求することである。このテストによって評価するならば最も有徳の行為も、最も悪徳の行為も、最も無関心な行為もまったく同じことになる。したがって動機の調査は私たちの道徳的判断から完全に排除されるべきなのである。どんなテストを採用しようとも、人類が徳に与えたユニークで卓越した地位を説明する難しさは残るだろう。傾向によって判断するならば、夢にも徳と見なされたことのないような数多くの物や行為が人間の幸福に大きく寄与している。動機で判断するならば、私たちが論評しようとしているモラリスト（*功利主義者）は打算的な動機と有徳の動機との属性の違いをすべて否定している。意図で判断するならば、真実や貞節が人類の幸福にどれほど貢献しようとも、それらの徳が博愛的な意図によって培われたのではないことは確かである。

直観的モラリストの推論は、ある行為を正当化する際に、それに人類の幸福を促進する傾向があると訴えることによって、絶えず自分たちの原則を放棄するという罪を犯している、とよく言われ

る。またこの告発は通常、そうした傾向を持たない自明の徳を示してみよ、という挑戦を伴う。最初の異議に対しては、直観的なモラリストは博愛や慈善、言い換えれば人間の幸福の促進が義務であることを夢にも疑おうとはしない、と短く答えられるだろう。彼はそれがその通りであるというだけでなく、自分たちは直接的な直観によってこの事実に到達したのであって、そのような行動が自分の利益につながるという発見によって到達したのではない、と主張する。しかし彼はこのような徳の部門を心から承認し、徳を擁護するためにその有益な効果を主張する完全な権利を有する一方で、すべての徳がこの単一の原理に還元されうるとは認めない。人類の一般的な感情によって、彼は慈愛をそれが世の中の役に立つというだけの理由で良いものだと考えている。同じく人類の一般的な感情によって、彼は貞節と真理には幸福に資する影響とは別の、独立した価値があると信じている。公認されているすべての徳が人間に幸福をもたらすかどうか、という質問に答えることはより難しい。なぜなら行為の遠隔的な帰趨を推定することは通常きわめて困難であり、人類の一般的な認識では、道徳が非常に明確であっても、その結果はしばしば非常に不明瞭だからである。功利主義の論者はその大変な精度の高さを自慢するが、彼らが公言するところの道徳を測る基準はそれ自体、定義することも正確に説明することもまったくできないものである。幸福は最も曖昧で定義できない言葉の一つである。そして「可能な限り最大の幸福」とはどのようなもののかを、誰も正確に言うことはできない。二つの国家でさえ、おそらく二人の個人でさえ、意見が同じということはないだろう。また、たとえすべての有徳の行為が疑いなく有用であったとしても、その徳が

その有用性（*功利性）に由来するものであるとは決して言えない。

一般に私たちが有徳と呼ぶ行為は、本人はともかく、少なくとも全体として人類に幸福をもたらすということは容易に認められるだろう。しかしそれらは功利主義の原理においてその行為に与えられているユニークな位置づけが示唆するような、有用性の独占性や優位性を決して持っていないということはすで見たとおりである。さらに行為をその結果によって詳細に評価するならば、たちまち非常に驚くべき結論に至ることもつけ加えて良いだろう。第一に、徳は人類の幸福を促進するからこそ善であり、悪徳は人類の幸福を損なうからこそ悪であるとするならば、卓越性または犯罪性の程度は、有用性の程度、あるいはその逆と厳密に比例しなければならないことは明らかだろう。社会のあらゆる行為、あらゆる気質、あらゆる階級、あらゆる状態は人間の幸福を増進させ、あるいは減少させる程度に応じて、道徳的尺度の上に正確にその位置を占めなければならぬ。さて、ほとんど名前を挙げることもできないような最も怪しからぬ官能のいくつかの形が、気質の欠陥、怠慢、判断の軽率さなどと同じくらいの不幸を引き起こすかどうかはきわめて疑問である。自分の能力を信じず、争いから謙虚に身を引く、控えめで遠慮がちで内気な性質は、あらゆる闘争に駆り立てられ、あらゆる能力を開発する大胆で傲慢な性質の自己主張よりも全体として世界に対して生み出す利益が少ないことは疑いようがない。感謝は間違いなく人生の交わりを和らげ、甘美にするために大いに貢献してきた。しかしそれとともに復讐の感情は何世紀にもわたって社会の無秩序に

対する一つの防波堤であったし、現在でも犯罪を抑制する主要な手段の一つである。公職の大舞台で、特に情熱が激しく奮い立つ大混乱の時期に世の中に最も利益をもたらすのは繊細な宗教的罪悪感(*scrupulosity)と誠実な公平さを備えた人間でもなければ、偽装や先送りのできない一途な宗教熱心家でもない。むしろ目的に対しては真剣だが、手段に対しては無節操で、良心の束縛からも熱意の盲点からも等しく自由で、その時代の情熱や偏見に部分的に身を委ねることで統治する敏腕政治家のほうである。しかし、現代の論者がいかに成功した英雄を偶像化しようとも、また大いなる寛容と厳正な節操のために戦いの指導者にはなり得ない、はるかに気高い人々を軽蔑し嘲笑しようとも、こうした場合に功利性を損なう繊細な誠実さを悪徳であると主張する人はまだほとんどいないのである。実用性が唯一の徳の尺度であるならば、引き起こす害悪よりも防ぐ害悪の方が大きいどのような人たちに対しても私たちが道徳的に顔をしかめることは理解できない。しかし、そのような原理によって功利主義の殿堂に奇妙な巫女を見つけることができるかもしれない。聖アウグステイヌ(*ヒツポの、AD354―430)は言った" *Aufermerit rices de rebu humanis, turbaveris omnia libidinius*." (*人間社会から娼婦を排除しなさい。あなたを悩ませているのはそのすべての情欲なのである)

自分の人生を一貫して功利主義によって律することを目指す質問者がいたとしよう。彼は自分の

利益と義務との明白な乖離から生じるこの学派の最初の大きな困難を克服し、そうした乖離は存在しないと自分自身に言い聞かせ、それに応じて義務の追求を自分の唯一の目的としたとしよう。そして彼がどのような道を行くかを考えてみよう。彼は人間の行為に幸福以外の目的や規則があると考えてるのは純粹な幻想であること、その結果を離れて本質的に良いもの、本質的に悪いものはないこと、有用な行為が悪であるはずがないこと、有用性はその行為の価値を成すものであり、測るための尺度であることを吹きこまれている。彼の最初の観察の一つは、世間が犯罪と呼ぶ殺人、窃盗、虚偽などの行為は大多数の場合において間違いなく有害であるが、非常に多くの特別な場合に明らかに善を生み出すように見えるということだろう。では、なぜこのような場合に実行してはならないのか、と彼は尋ねるだろう。答えはこうである、なぜなら私たちは行為の直接的な影響だけでなく遠隔的な影響も考慮しなければならず、特定の場合には虚偽や殺人さえも有益に見えるかもしれないが、生命と財産の神聖さを維持し、真実性の高い水準を守ることが人類の最も重要な利益の一つだからである。しかし、この回答は明らかに不十分である。回答者は世間で犯罪と呼ばれる一つの行為が社会の大きな防波堤を弱体化させる度合いが、それが生み出す直接的な善と釣り合うものであることを示さなければならない。釣り合わないならば天秤は幸福の側に傾き、殺人や窃盗や虚偽は有用であり、したがって功利主義の原理によれば徳になるであろう。さて公的な行為の場合であっても、無名の個人の例がもたらす効果は通常小さいが、その行為が完全な秘密裏に完遂されるならば、その例がもたらす悪しき効果は全くないだろう。人々が犯罪と呼ぶものを秘密裏に実行す

る許可を人々に与えることは危険であると言われてきた。これは功利主義者がこうした原理を宣言すべきではない非常に正当な理由かもしれない。しかし彼がそれに基づいて行動しない理由にはならない。ある人が有用な行為が犯罪であるはずがないと確信し、犯罪と呼ばれるものを犯すことによつて直ちに大きな有用性のある目的を達成することができ、その行為が前例となることなく、結果として道徳の一般水準に影響を及ぼさないことが完全に確実な、絶対的な秘密が確保できるならば、実用主義の原理に基づいてその実行は正しい、と言う論証は確かに可能だろう。もし私たちが徳と呼ぶものが役に立つからこそ徳であるとするならば、それは役に立つときのみ徳となり得るのである。したがつて多数者の行為の道徳性の問題はそれらが発見される確率に依存するはずである。そして、ちよつとした巧妙な偽善は単なる見た目だけではなく現実に、しばしば悪徳を徳に変えてしまう。こうした結論から逃れるためにもつともらしく試みられた唯一の反論は、その行為は実行者の性質を損なう、言い換えるなら別の機会に社会にとつて概して有害な行動をさせやすくするという主張だった。しかし第一に、一つの行為が目下の大きな美点を打ち消すほどの影響を性質に与えることはない。特に私たちが考えてきたように、その行為が正しいと信じられているものに対する反逆ではなく、道徳の一つの確かな規則に則っていると完全に信じられている場合にはそうである。また第二にその行為が習慣となる限り、それはあらゆる場合にその有用性を正確かつ詳細に計算した上で行動を決定する習慣と言つていいだろうが、これはまさに功利主義の徳の理想といえるものである。

もしこの質問者が強い想像力を持ち、孤独を愛する人物ならば、彼が想像の世界に長く住むことに慣れているというのはありがちなことである。この世界には喜びや悲しみ、誘惑や罪など、彼にとって生身の人間と同じくらいリアルな存在が住んでいる。人間の本性にある普通の感情に従って、彼は想像上の罪と長い間苦闘してきたかもしれないが、それを行動の罪に変えるよう真剣に誘惑されたことはない。しかし彼の新しい哲学は彼の心を慰めるのに見事に相応しいであろう。もし自責の念が起こらないなら、最も悪質な想像への耽溺は快楽であり、この耽溺が行動に結びつかないなら、それは明らかな利益であり、したがって称賛されるべきものである。ある過程が想像の中で遂行され続けても、それに見合う行動に結びつかないことに彼はすぐに気付くだろう。そして実際フィクションに対する主な反論の一つは、想像上の存在のために絶えず同情心を用いることは、明らかに人を積極的に現実的な慈愛に向かわせないということである。

さらに話を進めると、このモラリストは功利主義の計算において非常に大きな役割を果たす遠隔結果説を正当化する理由をすぐに見出すだろう。人間を殺すことは、たとえその犯罪が大きな有用性を生むと思われる場合でも犯罪であると言われる。なぜなら殺人の事例はすべて、生命の尊厳を弱体化させるからである。しかし経験上、人間がある特定の人間の生命に完全に無関心であることは可能であり、その無関心が他の部分にまで及ばないことが可能である。例えば古代ギリシャでは

貧しい両親が子供を殺したり市場で売ったりすることが最も絶対的な冷淡さをもって継続的に行われていたが、成人の生命の尊厳に何の影響も与えなかった。同様に宗教的な不正直さと呼ばれるもの、あるいは有用な迷信と見なされるものを、それが誤りであることを意識しながら、あるいは少なくともそれを無効としうる事実を抑圧したり誤魔化したりして伝播する習慣は何ら産業的（* industrial、以下この訳語は「勤勉な」というニュアンスを含むこととする）不正直さを意味しないのである。投機における極端な不正直さとビジネスにおける細心の正直さの同居は最もありふれたものである。もし功利主義的理論に一致する悪があるとしたら、それは残酷さだろう。しかし動物に対する残酷さは人間に対する残酷さにつながることなく存在しうる。動物の苦しみが主要な要素になっている見世物が人格に有害な影響を及ぼす場合でさえ、それが最終的にもたらず人間の不幸の分量が、それが直ちに与える情熱的な楽しみとまったく同等であるかどうかは十二分に疑わしい。（*と言うのが功利主義的理論である）

しかしこの考察は、功利主義理論の新たな、そして私にはほとんどグロテスクとしか思えない展開に注目することを必要にする。長い間あまりに軽視されてきた動物に対する人間の義務は、直観的モラリストの原則に基づけば容易に説明し、正当化することができる。（*功利主義論者によると）私たちの境遇や性格は私たちが接触するすべてのものに対して、多くのさまざまな愛着を抱かせ、私たちの良心はこれらの愛着が善であるか悪であるかを判断する。私たちは親切や慈愛が良い愛着

であると感じ、またそれは異なる階層に異なる程度で存在すると感じる。この義務は子供を生んだ責任のある親や、親に恩義を感じている子供だけでなく、そのような特別な絆のない兄弟にも適用されるのである。だから私たちは同胞に対して他人よりも強い関心を持たないことは不自然であり、間違っていると思う。同じように私たちは動物に対して示すのが自然であって正しい慈愛と、私たち自身の種に対して示すべき慈愛との間には大きな隔たりがあると感じるのである。強い博愛主義は人肉食と共存できないし、犠牲者の皮を手に入れるため、あるいは些細な不便から解放されるために、人間の命を奪うことに何のためらいもない人物は、その慈悲（*benevolence）を称賛されることはほとんどないだろう。しかし、自分の食物、快楽、便宜のために動物の命を犠牲にすることに何のためらいもない人間は、動物に対して非常に慈愛深い（*humane）と見なしでも良いかもしれない。

前世紀末になるとイギリスでは動物に対する慈愛を支持する精力的な運動が起こり、当時勢力を伸ばしていた功利主義のモラリストたちは、その時代の精神を受け止め、それを拡大するために非常に名誉ある努力をした。しかし人間の幸福を増進すること以外に徳の目的を認めない理論では、この運動に適切な基盤を与えることができないことは明らかである。そこで最近のこの学派のメンバーにはその理論を拡大し、この楽しみや苦しみが人間のものか動物のものかということには全く関係なく、その行為が幸福という最終結果をもたらす場合には徳があり、苦痛という最終結果をも

たらず場合には悪であると主張している。言い換えれば彼らは動物に対する人間の義務を同じ人間に対する人間の義務と全く同じに扱い、（*行為する側の）人間にとってより大きな幸福を生み出さないような苦しみを獣に与えることは正しくないと主張しているのである。

この理論に対する最初の反論は、帰納学派の原理に基づいてどうやってこの理論に到達できるのかが理解しにくいということである。ここまで見てきたように、この論者たちによれば博愛は利害関係から始まる。私たちは何よりも自分にとって有益であるがために他人（*を憤慨させないため）に善を行うが、その習慣の力は最終的に利害とは無関係に作用することがある。しかし残忍さに憤慨することのない（*狩猟の対象としての）動物の場合には、このような利己利益の根拠はほとんどの場合存在しない。しかし、おそらくは観念の連合がこの難問を解決し、人間の社会的関係から生まれた博愛の習慣がついに動物界にも及ぶのかもしれない。しかし動物に対する義務が人間に対する義務と同様に扱われるようになることを私は予想しないし、（非人道的と非難される危険があったとしても）望まないと断言しておかなければならない。それによって得られる快樂が、動物の生命を奪うことによって得られる快樂と同じく、動物に与える苦痛を上回ると確認できない限り、誰も動物の皮の服を着たり、動物の肉を食べたりしなくなる時代が来るなどと想像できないからである。このような計算の下で功利主義者が動物の肉を食べ続けなければならないなら、彼の原理はさらに進んだ結論に達するかもしれないが、私は正直言ってそれには反対である。スウィフト（*ジヨナ

サン、1667—1745) が半ば餓死状態の住民が余った赤ん坊を食用にすることを支持する有名なエッセイを書いていたとき、より進んだモリストによれば子供を食べると羊を食べるのはまったく同じことであり、一つのケースは他のケースと同じであり、その食事が全体として苦痛よりも快楽を生み出すかどうかだけが唯一の問題である、と知らされていたなら、その発見は彼の仕事は大いに楽なものにしていたはずである。

功利主義的原理がその論理的帰結を完全に推し進めれば、時に主張されるように、通常の道徳観念とは決して一致しないこと、それどころかそれ自身が説明しようとしている道徳感情とは全く、とんでもなく相反する結論に至ることを示すために、私が提示した考察は十分だろう。私はそれが特に革命的なものになると信じている二つの大きな分野について非常に簡単に言及して、議論のこの部分を締めくくるところにしようと思う。

その第一は貞操の分野である。この徳に関する問題については詳細に書く必要があるのだろうが、そうすればこの著作の中で私が望む以上の長さになってしまう。現時点ではただ純潔の本質的な卓越性や気高さに関するあらゆる概念が追放された精神を想像し、そのような精神で、アテネの栄光の時代やイギリスの王政復古期のような官能がほとんど抑制されていなかった時代と、道徳が厳格だった時代とを、功利的基準で比較することを読者にお願ひするだけにしよう。これらの社会の中

でどれが道徳的に最も優れていたかという問題を解決するのは、どれが最大の楽しみと最小の苦しみを生み出したかということだけなのである。家庭生活の快樂、より自由な社会的交流から生まれる快樂、貞操の掟を破った者に与えられる苦しみの程度、それぞれの生活様式における幸福と人々の行く末が、比較するべき主要要素になるだろう。このように比較した結果、楽しみバランスが間違いなく厳格な社会の側に大きく傾いて、その優位を正当化するなどと誰が信じられるだろうか。

第二の領域は思索的な真理の領域である。迷信に対する断固たる敵意を最も尊重しているは功利主義者たちである。しかし彼らの原理がそのことを正当化できるかどうかは大いに疑問である。多くの迷信は奴隸的な「神々への畏れ」というギリシャの概念に間違いなく当てはまり、人類に言いようのない不幸を生み出してきた。しかしそれとは別の傾向のものも非常に数多く存在する。迷信は私たちの希望にも恐怖にも等しく訴えかける。迷信はしばしば心の奥の切なる願いに応え、それを満足させる。理性が可能性や確率しか与えないときに、迷信は確信を与える。想像力が喜ぶような概念を与えてくれる。時には道徳的な真理に新しい承認を与えることさえある。自分だけが満たすことのできる欲求や、自分だけが鎮めることのできる恐怖を生み出し、しばしば幸福の本質的な要素となる。その慰めの力が最も感じられるのは、それが最も必要とされる物憂い時や困難な時である。私たちは知識よりも幻想に多くを負っている。おそらく全体として建設的な想像力は、思索の領域において主に批判的で破壊的な理性よりも私たちの幸福に大きく貢献しているのである。危

陰や困難の時に野蠻人が自信たっぷり胸に抱く粗末なお守りや、神聖で守護的な力を持つと信じられている貧しい田舎家の聖画像は、人間の最も暗い苦しみの時に、哲学の最も壮大な理論が与えられるものよりも、もっと真実の慰めを与えることができる。心の第一の欲求は寄りかかるものを見つかることである。幸福とは環境の問題ではなく感覚の問題である。そして一般的な心にとって、苦痛や悩みをもたらす疑念を排除することは幸福の第一条件の一つである。信仰のシステムは虚偽で迷信的で反動的なものであっても、それが大勢の人々に万物の鍵と信じるべきものを与え、賢明な理性の慰めが空言に過ぎない、苦悩に満ちた死別の時に彼らを慰め、病にあって死が近づいてくる陰鬱な時に彼らの弱弱しくよろめく心を支えるならば、人間の幸福に資するだろう。信心深く迷信深い性質は墮落するかもしれないが、迷信が迫害や恐ろしい形を取らない多くの場合にはそれは不幸ではない。また功利主義的倫理では不幸のない墮落はあり得ない。批評精神が広く存在すれば心地よい信念はすべて残り、痛みを伴う信念だけが消えるという想像は最も重大な誤りだろう。心に無知の自覚と疑念の激痛を受け入れるということは、多くの苦しみを背負い、それに耐えることである。その苦しみは（*迷信の否定へ）移行した後も続くかもしれない。ルター（*マルティン、1483-1546）の妻は自分が捨てた感覚的な信仰を悲しげに振り返りながら「昔の信仰ではとても頻りに、とても熱心に祈ったのに、今の祈りはあまりに少なく、あまりに冷たいのはなぜでしょう？」と言った。セラピオンという老修道士は擬人化論の異端を信じていたが、兄弟修道士によって全能の神に人間の姿をとらせることの愚かさを確信させられた、と言われている。彼は

謙虚に理性をカトリックの信仰に従わせた。しかし彼が祈るためにひざまずくと、彼が想像し長年
にわたって愛情を注いできたイメージが消えてしまった。そして老人は泣き出して「あなたは私の
神を奪った。」と叫んだのである。

これらは意見（*opinion、見解、世論）の歴史に関心を持つすべての人々にとって、実
に痛々しい事実だろう。喜ばしい虚偽を広く伝えたり、少なくともそれを続けさせたりすることが
しばしば追加する幸福と、その消滅が一般的にもたらさずにはおかない苦しみの可能性を合理的に
否定することはほとんど不可能である。人々が教えられたことを批判的に見直すことを常に正当化
することを可能とする一つの、たった一つの適切な理由がある。それは意見を単なる精神的な贅沢
品と見なすのではなく、真理を実用性とは別の、またそれに優る目的と見なすべきであり、それが
快樂につながるが苦痛につながるが、それを追求することは道徳的義務である、という確信で
ある。古代がピタゴラス（*BC582-496）に帰した多くの賢明な言葉の中でおそらく最も
注目すべきなのは、彼が徳を二つの枝に分けたことである―真実であること、そして善を行うこと。

功利主義者によると徳への唯一の動機をなす制裁のうち、ここまで述べてきたように、例外なく
適切なものが一つある。人が宗教的制裁を採用するならば、常に徳に有利なように利害のバランス
をとることができる。しかし現代の功利主義者の大多数は、大胆にも自らの理論をあらゆる神学的

考察から切り離している。そこで私は二、三の指摘をもってこの制裁を退けよう。

第一に、神の恣意的な意志を道徳の唯一の規則と見なすならば、神の属性を私たちの称賛に値するものと表現することが完全に無意味になるのは明白である。神の善さについて語ることは神の行いがそれに適うような善という性質の存在を意味するか、あるいは意味のない同語反復であるかのいずれかである。その意志と行為が完全性の唯一の基準や定義である存在の完全な善性を、なぜ私たちは称賛しなければならないのか。あるいはどのように称賛できるのだろうか。神の恣意的な意志が道徳の唯一の規則である、そして将来の報酬と罰の予見がそれに従う唯一の理由である、と説く理論は二つの部分から成っている。前者は神の善を消滅させ、後者は人の徳を消滅させる。

第二の同様に明白な指摘は、これらの神学者が将来の報酬の希望と将来の罰の恐怖を正しいことを行う唯一の理由としている一方で、これらの報酬と罰の存在を信じる私たちの最も強い理由の一つは得点(*merit)と失点(*demerit)に関する根深い感情であるということである。現在の状況が多くの特不公平であること、(*天国で)報いを受けるべき道にはしばしば苦しみが伴い、(*地獄で)罰を受けるべき道には幸福が伴うことが、人を来世の応報を推し量る方向へ導くのである。意識の不毛を脱するなら、この推論はもはや成り立たないだろう。

第三の指摘は、これも同じように真実であると私は考えるが、同じように快く受け入れていただけないかもしれない。それは道徳的能力というものに同意できないなら、功利主義的な神学者が仮定する創造主の至高の善性は、自然からは全く証明できないということである。私たちは陽光に輝く昆虫の喜び、動物界に惜しみなく与えられた保護の本能、親の子に対する優しさ、小さな子供たちの幸せ、自然の美しさと恵みに示されている博愛について語る。しかし、この光景には別の面があるのではないだろうか？恐ろしい病氣、数え切れないほどの略奪と苦しみ、体内に住みつき、知覚あるものの苦悶を糧とする腸内寄生虫、犠牲者の足掻きを喜んで長引かせる猫の癡猛な本能、被造物の無垢な部分の間に現れるあらゆる莫大な不幸の形、これらもまた自然のなせる業ではないのだろうか？私たちは神の真実性について語る。世界の知的進歩の歴史の全ては、自然の虚偽から自らを解放とうとする人間の知性の一つの長い闘いに他ならないのではないだろうか。未開人の目に触れるあらゆる物体は彼の好奇心を呼び覚ますが、ただ単に彼を致命的な過ちに誘い込むだけである。彼の世界の周りを回る小さな光のように見える太陽、彼の道を照らすためだけに作られたように見える月と星、ダイモーンの実在の概念を抗しがたいほど示唆する奇妙な幻想的な病氣、盲目的な力ではなく、特定の靈的作用の産物に見える自然の恐ろしい現象、これらのすべては致命的、必然的、不可避的に彼を迷信に追いやるのである。こうして生まれた迷信は長い時代に渡って世界を血で染めてきた。今では不可避の自然の法則であるとわかつているものに対して、何百万という祈りが空しく捧げられてきた。人類の長い幼児期が、自然の欺瞞的な外観によって普遍的に運命づ

けられている致命的な誤りから、人間の心は長年の努力の末に自らを解放したのである。

そして富の法則においては、物事の現実と外見とがいかに異なっていることだろうか。何世紀にもわたって最も強力な知性をとて自然に絡め取った、国家間の利益の明白な対立に関する誤りが引き起こした戦争、それが引き起こした苦み、惨めさを誰が推し量ることができようか。そして、現代において科学が遅ればせながらようやくそれを払拭しに來たのである。

これらのことに、私たちはどう答えればよいのだろうか。もし私たちがあるものはそれ自身の性質として善であり、他のものはそれ自身の性質として悪であるという知識を全く持っていないとしたら、この自然の光景からどうして完全な創造主の概念に至ることができのだろうか？たとえ被造物の中に善意が優勢であることを発見できたとしても、自然の入り混じった属性はその設計者の入り混じった属性の反映と考えるべきだろう。私たちの至高の卓越性に関する知識、創造主の存在に関する最良の証拠は物質的な世界からではなく、私たち自身の道徳的な性質から得られているのである。それは理性によるものではなく、信念によるものである。言い換えれば、それは理性と同様に真に私たちの存在の一部であって、理性が決して教えることのできなかつた道徳的な善の至高の超越的な卓越性を私たちに教え、この感覚の世界を不満として立ち上がり、別の領域に適応しようとするその願望のまさにその強さによって自らを証明し、同時に私たちの中の神の要素の証拠と

私たちの前にある未来の兆しとなっている、本能的または道徳的性質から湧き出ているものである。

これらのことは理論よりもむしろ感覚の領域に属するものである。その真理を最も深く確信している人々は、おそらく議論によってその確信の強さを十分に言い表すことができないと感じるだろう。しかし、あらゆる時代の最良で偉大な人々の記録された経験、地上のものの人間の本性を満足させることについての無力さ、個人と国家の両方においてこの願望を純粹で英雄的な生命が燃やし、利己的で腐敗した生命が曇らせたという明白な傾向、いかなる哲学と懷疑論もこれらを永久に抑制することができなかったという歴史的事実を指摘するだろう。私たちの道徳的本性の線は上を向いている。宗教と倫理の共通の根源はそこにある。たとえそれが実際には私たちの性質の中の最も弱い要素ではあっても、正しく至高で、威厳があり、信頼できるものだと教えてくれるものと同じ意識が、それが神聖なものであることを教えてくれるからである。人類を支配してきたすべての高貴な宗教は、その教えがこの性質と親和していること、一般的な宗教用語が正しく表現するように「心に」語りかけること、自己利益ではなく、すべての魂に潜在する自己犠牲という神聖な要素に訴えかけることによってそうしてきたのである。この道徳的性質の実在は、自然神学の一つの大きな問題である。なぜならそれは私たち自身とより高い存在の関係を含むからである。これがないのであれば造物主の存在は単なる考古学の問題であり、宗教は単なる想像力の働きに過ぎない。

私は喜んで功利主義の世間的な制裁に戻ろう。その信奉者の大半はこれらの制裁は彼らの理論を立証するのに十分なものであると断言する。つまり言葉を変えるなら、正しく理解された場合、私たちの義務は私たちの利益と非常に厳密に一致するため、完全に賢明な者は必然的に完全に有徳の者になる、ということである。身体的な悪徳は最終的に身体を弱め、苦しみをもたらす。浪費は破壊に、抑えられない情欲は家庭の平和の喪失に、他人の利益を無視することは社会的・法的処罰につながる。一方、最も道徳的なものは最も平穏な気質でもある。博愛は私たちの最も真実の快樂の一つであり、徳は習慣によって楽しみに不可欠なものとなるだろう。一財産を築いた店主が、それでもカウンターに立ち続けることがあるのは、その日課が彼の幸福にとって必要なものとなったからである。そのように「道徳的英雄」は初め単なる自分の快樂の道具であった徳を、それ自体を他の何よりも貴重なものとして実践し続けることができるだろう。（*というのが功利主義者の主張である）

徳と利益は完全に一致するというこの理論は、常にモラリストたちの常套句であり、徳を打算と捉えることを望まない多くの人々によって提唱されてきたが、一定の真実を含んでいることは間違いない。しかしそれはごく大まかな真実に過ぎない。それはすべての国に全体的にあてはまるわけではない。贅沢で女々しい悪徳が国民性を腐敗させ、衰弱させることは間違いない。しかし一貫した強欲、野心、利己主義、詐欺が国の繁栄を大いに助けることがあるのは古代ローマの歴史や少な

からぬ近代君主制国家が十分に証明しているからである。それ（*徳と利益が一致するという理論）は世論による制限がなく、力が正義の唯一の尺度であるような不完全な社会組織には当てはまらない。また人類の最も文明化された部分にもごく不完全にしか当てはまらない。確かに洗練された社会において、ある程度の低い水準の徳が繁栄に不可欠であることを示し、抑制されない情熱の害悪を描き、社会の法律に背くよりも従う方が良いことを証明するのは簡単である。（*徳と利益は一致する）しかし犯罪者や酔っぱらいから目を転じて、周囲の人々の平均的なモラルと同じか、それをわずかに上回り、自分の健康にも評判にも害のない小さな悪習にふける人物と、自分の時代や階級のものよりもはるかに高い基準を真剣に、そして苦心して取り入れている人物を比較するならば、別の結論に行き着くはずである。（*徳と利益は一致しない）正直は最良の方策であると言われる——ただし、この事實は警察力の状況に大きく依存する——が、英雄的な徳は別の基盤の上に成り立っているはずである。どのような形であれ、幸福が人生の最高の目的であるとすれば、中庸は私たちの存在に対して最も強調されるべき勧告である。しかし中庸は悪徳と同じくヒロイズムと対立するものである。中庸によって培われたすべての知的または道徳的な卓越性は一般的に幸福を生み出す傾向を持っている。しかし大変な完璧さによって培われたならば、大抵のものはその逆の傾向を持つようになる。例えば知性の快楽の広大な領域に対して十分に開かれた心は、間違ひなく無尽蔵の楽しみの原資を確保している。しかし、それゆえに最高の知的卓越こそ幸福に最も有利な条件であると推論する人物は、残念ながら欺かれることになるだろう。懸命な知的努力に伴う神経過敏の

病、無知と空虚さから来る徒勞感、深遠な研究の後によく起る幻滅と瓦解は「多くの知恵は多くの悲しみであり、知識を増やすことは悲しみを増やすことである」(*聖書、コヘレトの言葉1章18節)という哲人王(*ソロモン、BC1011-931)の言葉の悲痛な木魂で文学を満たしているのである。知者たちの人生はほとんどの場合、古い神話の意識的、意図的な実現だった―知恵の木と生命の木が並んでいた。そして彼らは生命の木よりも知恵の木を選んだのである。

またそれは道徳の領域でも同じである。幸福に最も資する徳は明らかに、多くの苦痛なしに実現でき、多くの努力なしに持続できるものである。法的小よび物理的な罰則はより粗悪で極端な形の悪徳にのみ適用されるものである。社会的な罰則は徳の最も高い形に向かうかも知れない。功利主義者がいつかすべての非社会的感覚を圧倒するほど強くなると断言する、人類との一体化の感情そのものが、人間が一貫して幸福なまま、非常に有徳なものであれ非常に悪徳なものであれ、社会の一般感情との調和を欠くような道を選ぶことをますます不可能にしてしまうだろう。完全に有徳な心の静寂は最高の幸福の形であり、大切な長所としてだけではなく、社会から称賛されることについても好ましい、ということが理論上は言えるだろうが、誰もその状態に完全に到達することはできず、大抵は近づくことすら困難である。悪しき情熱や衝動が非常に強いことに苦しむ人に、彼の性質が今と根本的に違っていたなら、もっと幸せだっただろうと言うのは無益なことである。もし幸福を目的とするならば、彼は自分という存在の現状を考慮して自分の行動を制御しなければなら

ない。そして悪徳との妥協が彼の平和を最も促進するだろうことに、疑いの余地はほとんどないだろう。道徳の利己的理論（*功利的に生きることが有徳である）は気質の中に徳があるときだけ適用されるのであり、気質に逆らって維持される、はるかに高い徳の形には適用されないのである。（*気質に逆らって悪徳を避け、不幸になることがある）私たちは間違いなく自分の良い傾向を育てることにある種の快楽を感じるが、悪い傾向を抑えることに同じような快楽は決して感じない。あることを決意し、その反対の欲望を抱きながら生涯を終える人がいる。このような場合、徳は明らかに幸福の犠牲を伴う。なぜなら生得の傾向に抵抗することによって生じる苦しみは、それを適度に満足させることによって生じるものよりもはるかに大きいからである。

まったくの真実は、この世に関する限り、最も徳の高い生き方を追求することは常に人間の幸福に資するというのは、最も明白に甚だしく間違った主張だということである。環境や性格によって、ある者は自分の最高の幸福を同類の幸福に見いだし、他の者は同類の不幸に見いだすようになる。そして、もし後者が自分の利益に従って行動するならば、功利主義者はたとえその結果をどんなに嘆いたとしても、彼を責めたり非難したりする権利はない。なぜなら、彼は自分の最大の幸福を追い求めているのであり、功利主義者の目で見ると、これは何らかの形で人間の本性を動かすことができる最高の、より正確に言えば唯一の動機だからである。

また通常、悪事に間違ひなく伴う動揺や苦痛はその罪の巨大さとは全く比例しないということも指摘できる。神経系の錯乱や、先延ばしや不決断の習慣を主な原因とする苛立ち易い気性は、心を蝕む最悪の悪徳より多くの苦しみをもたらすことが多い。

しかしこの苦痛と快楽の計算は、ある要素の欠落ゆえに不完全なものとと言えるかもしれない。ある悪に向かう生来の非常に強い衝動を持っている人は生来の傾向を抑えるために苦心するよりも、その悪を控えめに用心深く満足することによって、その性質を鎮めるだろう。それでもその人には自分の行為を裁く良心があり、その疼きや承認はバランスを是正する以上に、激しい苦痛や快楽をもたらすのである。もちろん直観的モラリストは長い間、彼の学派がほぼ単独で主張してきたと言える良心の实在や、それが与える快楽や苦痛を否定することはない。しかし彼はそうした苦痛や快楽が、私たちの行為に比例して徳の適切な基礎になるほど強力なものであることを全く否定する。そしてその立場を証明するために意識というものを持ち出す。良心は、もともと備わっていた能力と見なすにせよ、観念の連合の産物と見なすにせよ、二つの異なる機能を發揮する。善と悪の違いを指摘すること、そして、その命令に違反したときには然るべき苦しみと不安を与えることである。第一の機能は生涯を通じて持続的に發揮される。第二の機能はある特別な状況下でのみ發揮される。有能な人間が自分が間違ったことをしていると意識せずに、著しい墮落と罪の人生を送るといふのはほとんどあり得ないことである。しかし、意識が彼の平穩に明らかな影響を与えることなしに、

彼がそうするというのは極めてあり得ることである。カーライル氏（*1795—1881）が言うように良心の状態は肝臓の状態ほどには人間の幸福に影響を及ぼさない。痛みの原因として考えたとき、良心の呵責は嫌悪の感覚と非常によく似ている。ジョンソン博士の主張というものがある（*獣になれば人間であることの苦しみから逃れることができる）が、肉屋の仕事には言いようのない苦痛と嫌悪が伴うため、もし他の方法で食肉を得ることができれば、永久にそれを放棄するだろう人々が数多く存在することを私はあえて主張するものである。しかしこの仕事に慣れた人々にとって、この嫌悪感には既に消滅したものに過ぎない。彼らの感情や計算の中にはないのである。またほとんどの人が屠殺場に根気強く通うことで、同様の無関心さを獲得できることには疑いの余地がない。このように良心の呵責は些細な軽率な行為や不従順な行為を行った繊細で細心で有徳な少女にとっては疑いなく非常に現実的で重要な苦痛であるが、年を取って面の皮が厚くなった犯罪者にとっては最も完全に興味のない問題なのである。

さて人が観念の連合によって、本来苦痛であるはずのものを快樂とし、本来快樂であるはずのものを苦痛とする感覚を獲得することは間違いないと考えられる。しかし、なぜこの感覚を尊重しなければならぬのか、という疑問がたちまち湧き起こる。私たちは帰納的理論には生得の義務といったものは存在しないということを見てきた。人は自分の幸福を追求することだけを考えて人生に踏み出す。私たちの本性の構造、および社会的関係の親密さに起因する徳の体系の全体は、直接に

快樂につながる何らかの道を避け、直接にはその逆となる道を行くことが人間の幸福のために必要である、という觀察された事実から生じているのである。ハートリーの道徳化学がいかにかそれを偽装し変容させようとも、利己心こそが徳の究極の動機なのである。するべき、と、するべきでない、は快樂を得るか失うかの予測以外の何ものをも意味しない。ある種の行動が他人の幸福を増進し、別の行動が他人の幸福を損なうという事実は、これらのモラリストの最終的分析において、そうした道筋が私たちに最大の幸福をもたらすのでない限り、前者を追求し後者を回避する理由にはなり得ない。その幸福は社会が私たち自身に及ぼす作用から生じるかもしれないし、私たちの生来の情け深い気質から生じるかもしれないし、また観念の連合、つまり自分自身が作り出した習慣の力から生じるかもしれない。しかし、いずれにしても私たちは自身の幸福だけが行動のあり得る、考え得るただ一つの動機なのである。これが人間の本性の眞の姿であるとすれば、すべての人間にとって合理的な道は、可能な限り最大の楽しみを得られるように自分の性質を修正することである。もし人がそれが防ぐ以上の苦痛を与えたり、それが与える以上の快樂を奪うような観念の連合を形成したり、習慣を身につけたりしたならば、彼の合理的な方針はその結合を解消し、その習慣を消し去ることである。これは功利主義的な語彙の中でその言葉が持ちうる唯一の意味によれば彼がする「べき」ことである。もしそうしないならば彼は軽率という罪を犯すことになる。軽率というのは功利主義が悪に対して一貫して浴びせることが可能な唯一の非難である。

いま述べたような気質の人物が、自分の平穩に最も役立つであろう方針を厳しく非難し妨げる良心的感覚を黙らせるなら、それは幸福のためになり、また確かな力になることは自明だろう。そして実際、良心はそれが命じる行動方針を別にすれば、全体として快樂よりも苦痛の原因になっていないだろうかということ、大いに疑問である。良心の呵責は良心の承認よりも感じられやすい。徳の高い人物が自分の優れた功績を喜んで振り返る自己満足は道徳哲学者の著作において頻繁に語られている。しかし、それは最も穏やかなことが最も完全な性質であることが稀で、良心の感受性が少なくとも道徳的成長に比例して強くなり、最良の人物では常に慎み深さと謙遜の感覚が自己満足の横溢を抑制している実際の生活の場ではほとんど見られない。（*実生活において良心の承認は人をあまり幸福にしない）

あらゆる健全な道徳と宗教の体系において徳の動機は、心がそれに集中すればするほど、より強力になる。徳の動機が働かなくなるのはそれが見失われたとき、情熱によって不明瞭になったり、実行されなくなったり、忘れられたりしたときである。しかし功利主義的な徳の概念の特異性は、それが分析の溶解力にまったく抵抗できないこと、そして心がその起源と本質を理解すればするほど、性格に対するその影響力は減少せざるを得ないことである。感覚的な快樂は常に分析の力に逆らうことができる。なぜならそれらは私たちの存在の中に本当の基盤を持っているからである。それらは物事の永遠の本質の中にその基盤を持っているのである。しかしこの学派によれば、私たち

が徳の実践から得る快楽はまったく異なる基盤の上に成り立っているのである。それは気まぐれで人工的な連想、習慣、想像力による手段と目的の混同、社会がそれ自身にとって有益な資質や行為に与えるある種の尊厳の結果である。このことが感じられるかぎり、つまり心が徳の観念を生得の卓越性と義務の観念から切り離し、そのつながりの純粹に人工的な性格に気づくかぎり、ちようどそれに比例した分量だけ道徳的動機の強制力は消失することになる。行為や性質を幸福を増減する傾向によって判断するという功利主義の習慣や、人間は常に自分の行動の規則がすべての理性的存在に法として採用されるような行動をするべきであるというカント（*イマヌエル、1724—1804）の格言は人生の指針として非常に有用なものかもしれない。しかし、それらが道徳的な重みを持つためには道徳的な義務感、すなわちもし発見されるものならば、義務は私たちの生活の指針になる正当な権利を持っているという意識が前提でなければならぬ。そして理性の目で見たとき、この要素は単なる人工的な観念の連合が決して備えていないものである。

読者が忍耐力を持って、この私の退屈な長い議論につきあって下さったのであれば、功利主義理論は多くの最も純粹な人々や、ほとんど英雄的とも言える徳を持った人々によって支持されていることは間違いないものの、それを論理的な結論にまで進めるならば、道徳を破壊し、特に自己犠牲とヒロイズムにとって極めて高度に不利なことが判明すると結論されたであろう。功利主義理論はもしこれらを説明したとしても、正当化することはできない。また単なる幸福の目的と手段の混同

の中から見つかった良心は批判という溶剤に全く抵抗することができないだろう。この良心論はそれが説明しようとしている現象について正しく、あるいは適切に述べていると認める直観的なモラリストはいないだろう。モラリストの仕事が単に人間の持つある感情の発生を説明することと考えるのは、よくある、完全な間違いである。すべてのモラルの根底には、好き嫌いや快楽や苦痛とは明らかに異なる知的判断がある。愚かな、しかし全く罪のない行為によって自分の地位を傷つけた人、あるいは不注意に社会的規則に違反した人は、あたかも罪を犯したかのように自責の念や恥辱の感情を味わうかもしれない。しかし彼は同時に自分の行為が道徳的非難の対象ではないこと、非難される根拠は別のものであり、より低い種類のものであることをはつきりと自覚しているのである。良心の本質的かつ独特の特徴であって、それを人間の本性の他のすべての部分と区別する、義務と正当な優越性の感覚は、観念の連合では全く説明できない。ある行為が快いものであるということ、人々をその行為に駆り立てる感情が弱まることによつてある量の苦痛が生じるということは、人々が自分たちはそれを追求すべきであるというときに意味していることとは明らかに異なる。ハートリーの徳は要するに想像力の病に過ぎないのである。それは社会にとつて貪欲よりも好都合かもしれないが、同じように形成され、まったく同程度の拘束力を持つのである。

これらの考察は、自己利益と区別して義務を語ることは意味がない、という一般的な功利主義者の反論に対する答えとなるだろう。なぜならそれをしないことによつて何の悪い結果も生じないの

に、何かをする義務があると云うのは不合理だからである。報酬や罰は義務を遂行するために必要なものであることは間違いないが、義務を構成するためには必要なものではない。この区別はそれが本当かどうかは別として、いづれにせよ哲学者ではないすべての人に自明と思われろという強みを持つている。こうして植民者の一団が新しい領土を占有すると、未占有の土地を自分たちの間で分割する、また彼らは野蛮な住民を殺害したり、欲望を満たすために使役したりする。どちらの行為にも完全に罰則はないが、一方は無罪で、他方は誤りであると考えられている。合法的な政府はその法令を罰則によって裏付け、土地を専有し、原住民を保護する。あるケースでは法律が義務を発生させ、かつ強制するが、他のケースではただ単に強制する。直観的モラリストはただ、人間にはある種の行動方針が他よりも高く、気高く、優れていると認識する力があり、私たちの存在の構造上、快楽やその逆の予測とは属性において異なるこの事実（*fact）は、行動の動機となりうるし、そうあるべきで、絶えずそうである、と主張しているだけである。低い方の道を選ぶ人物が出る可能性を疑うことはできず、この場合私たちは彼は罰に値すると言う。また彼が罰されないならそれを不当と言うのである。もし彼に報酬や罰を与える権力が存在しなかったとしても、彼の行為が無関心に見過ごされることはないだろう。それらは非難する者がいなくても恥ずべきこと、称賛する者がいなくても立派なこととして、根本的に卑しいとか、気高いとか、わかりやすく表現されるだろう。

人間には幸福以外のものを選ぶ力があるというのは結局のところ、意識の証拠に委ねるしかない命題である。最終的にどれほどの幸福につながるかに関係なく、徳を追い求めることがこの選択の第一の実例であることは、一様に徳と利益の動機の属性を別のものと見なしてきた人類の共通の声によって立証されている。そして実際、強い情念と強い義務感との間に対立がない場合でも、徳の高さを楽しみみの尺度で測ることは不可能である。最高の性質が最も幸福であることは稀である。ペトロニウス・アルビテル（*ガイウス、AD20—66、「サティリコン」の著者）はおそらくマルクス・アウレリウス帝（*在位AD161—180、哲人皇帝）よりも幸福な人間だっただろう。十八世紀の間、キリスト教の宗教的本能は「悲しみの人」の姿にその理想を見出していたのである。

今、私が主張したような理由から直観的モラリストたちは功利主義者の原理を否定するのである。直感的モラリストは人類の幸福に及ぼす自らの行動の影響が、その道徳的な資質を決定する上で最も重要な要素であることを確かに認めている。しかし、生得の道徳的感覚がなかったなら、人類の幸福が私たち自身の幸福と乖離したとき、人類の幸福を求めるのが自分の義務であるということに私たちは気づかなかつただろう、と彼らは主張する。そして徳がもともと有用性から発展したものであることも、必然的に有用性に比例するものであることも否定するのである。彼らは社会の現状において、少なくとも徳の道と繁栄の道との間に一般的な一致があることを認めている。しかし徳

の義務は考えうるどんな事態の変動も破壊できないような性質のものであり、この世の政府が最高の善意ではなく最高の悪意に属していてもそれは続くだろうと主張するのである。徳とは計算や習慣以上のものであると彼らは信じている。その基本原理を逆に考えることは不可能である。同質の感情を混同する傾向が強いかかわらず、人間の認識において義務の感覚と有用性の感覚は完全に区別されており、私たちは同じ行為に含まれる別々の成分を認識することが十分に可能である。勇敢だが危険な敵に対する敬意、有用な裏切り者に対する軽蔑、死ぬ間際の後に残る人々の利益に対する配慮、故意と過失の明らかな区別、軽率さの自覚と罪悪感の自覚との明確な区別、利益の追求は常に義務感によって抑制されるべきであり、そのため利己的動機と道德的動機は本質的に対立するという確信、前者が存在すれば後者は必然的に弱まるという確信、名誉や恩義のために自分の利益を犠牲にすることを求められたとき、先々の計算をして立ち止まる人物に対する憤り、人間の本性の他のあらゆる感情とは異なる自責の念――いわば人類の普遍的で自然な感情、そのすべてが私たちの徳への愛情を自分の利益への愛情から遠く切り離すよう、一致して導くのである。快楽と苦痛は行動の究極の根拠であって、前者を求め後者を避ける理由は、そうするのが私たちの本性の構造であるから、という他ないように、善と悪という言葉は究極の理解しやすい動機を表していること、これらの動機は他のものとは属性が異なること、高次のものであって、義務の感覚を伴うことを私たちは認識しているのである。これらの事実を除外した道德の体系は意識によって明らかにされている心の状態を正確かつ適切に描くことができない。あらゆる時代の人々の良心は、見

返りとして何らかの、あるいは別の形の快楽を得るために快楽を犠牲にすることは、利子をつけて金を貸すことが慈善であるという考えと同様に、私たちの考える徳に当てはまらないというキケロ（*マルクス・トゥツリウス、BC106—43）の主張に共鳴したことだろう。私たちの徳の評価は、純粹な無私の観念を前提としている。これこそが私たちが英雄的行為に想いを馳せる時に抱く感情の根源である。私たちは結果として苦痛や災難、精神的な苦しみ、早すぎる死が生じ、その墓を輝かせる未来の報酬の見込みがなかったとしても、人間は正しいと信じることを追求することができると感じる。これは私たちの存在の最高の特権であり、人間の本性と神の接点なのである。

功利主義学派の影響力は、それを支持する直接的な論拠に加えて、それに好意的ないくつかの非常に強力な道德的、知的素因に多くを負っている—第一はこの後検討することになるが、社会のある条件下で顕在化した、この学派が生み出そうとする資質の助けになるような傾向であり、第二は統一性と精密さが多くの人の心に及ぼすほとんど抗しがたい魅力である。前世紀の感覚の学派（*功利派）に大きな人気を与えたのは、人間のさまざまな能力と複雑な動作を単一の原理やプロセスに還元することによって人間の性質を単純化したいという、この欲求だった。その学派の形而上学者のほとんどが人間の性質の二元性を否定するようになった。ボネ（*シャルル、1720—1793）とコンディヤック（*エティエンヌ・ボノ・ドゥ、1714—1780）は人間を完全に代表するものとして、観念の通路としての五感を備え、感覚の産物を変換するためにのみ使用される

能力を持つ、生きた彫像を提唱するに至った。このことはエルヴェシウスの、すべての人間の本来の能力はまったく同じであり、私たちが天才と呼ぶものと愚か者と呼ぶものの違いはすべて環境の違いから生じているのであって、人間と動物の違いは主として人間の手の構造から生じているのである、という主張を導いた。道徳の分野において一元化の理論は非常にもしっかりしたものであるが、また非常に危険なものであると私は考える。なぜなら人間の道徳的感情はお互いに作用し合い、それぞれが多くの変容を遂げるため、考えうる状況下で他のすべての感情の親とならないような感情はほとんど存在しないからである。ホッブズが自利の哲学の名において、同情は、他人の災難を感じることによって生じる、自分自身の将来の災難の想像にすぎないと主張したとき、ハッチソンが慈愛の哲学の名において、放縦の悪は私たちを他者への暴力に駆り立て、私たちが彼らに善を行う能力を弱めることであると主張したとき、人間の本性の卓越性を擁護する他のモラリストたちが、哀れみは人間の快樂の中で断固として最高のものであり、それを満足させたいという欲求が野蛮な行いの原因であると主張したとき、これらの理論は突飛なものであるにせよ、そこには間違いなく心理学的真実の萌芽が見られるのである。確かに将来の災難を極度に心配する人物が他人の災難を見てショックを受けるのは事実だろう。実際、慈愛という非常に強烈で吸引力のある感情はそれ自体、それを満足させる力を損なういかなる習慣からも人を遠ざけるに十分である。哀れみに一定の快樂が伴うことは事実である。そして哀れみの快樂が強くなりすぎたがために、罪を犯してまでそれを求めるようになることもありうる。これらの理論の誤りはその動機が持ちうる効力を誇張して

いることではない。人間の本性におけるその動機の実際の強度を誇張し、彼らが説明しようとしている結果がどのようにして得られたのかという過程について間違っていることである。道徳哲学における観察の機能は、その過程がどのように形づくられたかを理性が演繹的に決定することに任せて、ただ単に私たちの道徳的感情を証明することではない。むしろ、それが形づくられたすべての段階を通してそれらを追跡することである。

ここで私は、道徳哲学において用いられる他の多くの用語と同様、帰納的という用語には重大な誤解を生む可能性があることに気がつく。この言葉は何が正しくて何が間違っているかを教えてくれる道徳的な感覚や能力の存在を信じず、そうした考えの起源はさまざまな行いが真の幸福を促進したり損なったりする傾向についての私たちの経験だけである、と主張するモリストに用いることが適切である。しかし、私たちの道徳的観念の起源が何なのかを帰納や経験によって確認するべきと考えているのは帰納的モリストのみ、と推測されることがあるようである。しかし私はこれを完全な間違いと考える。道徳の基礎は道徳理論の基礎とは別個の問題である。道徳的能力の存在を主張する人々は時に言われるように、この主張を彼等の議論の第一原理（*first principle）他のものから推論することができない命題）と仮定しているのではなく、反対派が用い得るどんなものよりもかなり厳しい帰納の過程を経て、この主張に到達しているのである。彼らは既存の道徳的感覚を調べ、分析し、分類し、それらの感覚がどの点で他のものと一致し、ある

いは異なっているかを確認し、それらの様々な段階を追跡し、それらが分解不可能であって、他のすべてのものとは違う属性のものであることを示せたと考えた後に、ようやくそれらを特別な能力によるものとしているのである。

私たちはこの言葉を、四肢と胴体のような関係を心に対して持っている、明確に定義された器官を意味するものと考えがちである。しかしそのような器官の存在についても、そのような物質的なイメージが適切なのかどうか、私たちは何も知らない。自分自身の中に意志、物質とはまったく異なる特性を持つ知的、感情的な現象の群れを感じるがゆえに、私たちは意志を持ち、考え、感じ、それ自身の行動をかなり正確に査定できる非物質的な存在を推論するのである。ここでは能力という言葉を単に査定という意味で使っている。もし私たちが道徳的能力と美的能力は別のものであると言うなら、それは心が道徳的な卓越性についての何らかの判断と、美的な卓越性についての何らかの判断をすること、そしてこの二つの心的プロセスは明確に区別される、ということを行っているに過ぎない。道徳的知覚を人間の本性のどの部分に帰すべきかを問うことは、それがどのような心的現象の系列に最もよく似ているかを問うことに過ぎない。

この単純な、しかししばしば無視される考察を心に留めておくならば、直観的モラリストたちの見かけ上の不一致は、最初そう思われたであろうほどには深いものではないように思える。なぜな

ら各派閥はただ単に道徳的判断力の何か一つの特徴を説明しているに過ぎないからである。例えばバトラーは道徳的判断力に含まれる義務感を強調し、このことが道徳的判断を他のすべての感情と区別すると主張し、従って道徳的判断力は良心という最高の権威を持つ特別な能力である、としている。アダム・スミスや他の多くの論者は特にその共感的性格に重きを置いていた。私たちは生まれつき慈愛に惹かれ、残酷さに反発する。このモラリストたちによるとこの本能的で非理性的な感情が善と悪の間の差異をつくっているとのことである。しかしイギリス人でカントの先駆者であるカドワースはこのような分析の不十分さをすでに予見していたし、後の形而上学者たちはより完全にそれを示している。正義、慈愛、真実、およびその類いの徳は、単に私たちを惹きつける力があるだけではなく、それらが本質的に不変の善であること、それらの性質は私たちの気質に依存せず、相関関係もないこと、それらが悪徳になり、その逆が徳になることは不可能で想像もできないことを私たちは知的にも認識しているのである。ゆえにこれらを理性の直観という。クラークは同じ理性の直観の学派を発展させ、また人間の性質をそれぞれ程度の異なる尊厳を持つ力や能力の階層と、優越と劣後の適切な秩序と考えるモラリストたちに倣って、徳は物事の本質との調和によって成り立つと主張した。（*国教会の司祭、科学と神学と道徳を調和させようとした）ウォラストン（*ウイリアム、1659—1724）はそれ（*物事の本質）を真実に、ハッチソンは博愛に限定しようとした。彼がロックの哲学への敬意から「道徳的感覚」と呼び、シャフツベリーが道徳的「嗜好」と呼んだものによって博愛は認識され、承認されるのである、とハッチソンは主張した。シャフツ

ベリーとヘンリー・モア（*1614—1687）によればこの嗜好を満足させる快樂こそが徳の動機ということである。道徳的な感覚や能力という学説はリード（*トマス、1710—1796）の倫理学の基礎となった。ヒューム（*功利派とされることもある）は徳の特質はその有用性にあるが、人間の感情はこれとは全く無関係である、そして私たちは自分たちの本性に刻み込まれた道徳的感覚によって何が徳であるかを知るのであり、この感覚が他者に有益なすべての行為を本能的に承認させるのであると主張した。バトラーによって投げかけられた示唆的なヒント（*道徳的判断力は良心と言う最高権力を持つ）を發展させ、私たちの道徳的判断力は単純なものではなく、理性の判断力と心の感情の両方を含む複雑なものであることを主張することによって彼はクラークとシャフツベリーの学派（*ともに直観派）の統合の基礎を築いた。この事実は後の論者によってさらに説明され、この二つの要素が異なる種類の徳にさまざまな度合いで適用されることが観察されている。ケイムズ卿（*ヘンリー・ヒューム、1696—1782）によれば善悪に対する私たちは知的認識は正義や真実といった、いわゆる「完全義務」、言い換えればその違反が明確な犯罪となるような性質の徳に最も嚴格に適用される。一方、惹かれるとか愛するといった感情は、博愛や慈善といった不完全義務の徳に最も強く示されるのである。ハッチソンやシャフツベリー同様、ケイムズ卿も私たちの道徳的判断力と審美的判断力の類似性に気づいている。

この類推は私たちがこれまで詳察してきたものとは大きく異なる思想の領域を切り開くものであ

る。善と美の間に密接な関係があるということは常に感じられてきた。それゆえにギリシャ語で善と美は同じ言葉で表され、プラトンの哲学において道德的な美は原型であつて、すべての目に見える美はその影や像に過ぎないとされていたのである。私たちは皆、道德的な美という言葉には厳密な妥当性があると感じてゐる。私たちは美の形にはさまざまなものがあり、それはさまざま道德的資質に自然に対応してゐると感じてゐる。そして詩や雄弁の魅力の多くはこの調和の上に成立してゐるのである。私たちは頭上の空のように、あるものを美しいと、直接、即座に、直感的に認識することがある。この美の認識はその有用性の認識とは全く違つて、他から導き出せるようなものではあり得ない。それは太っ腹な、あるいは英雄的行為が呼び起こす瞬間的で非理性的な称賛と驚くほどよく似てゐる、と私たちは感じる。また私たち自身の心の動きを注意深く観察すると、美学的判断力には直感や知的認識、そして魅了されたり感嘆したりするという感情が含まれており、これらは道德的判断力を構成するものと非常によく似てゐることが分かる。幸福という觀念がそれは望まれるべきものであること、義務という觀念がそれを果たされるべきものであることを意味するように、美という觀念もまたそれが称賛されるべきものであることを意味する。またそれぞれのケースで発見できる均一性の程度と種類の間には驚くべき対応関係がある。善と悪、美と醜の間に違いがあるというのはいずれも普遍的と感じられる命題である。善は悪に勝り、美は醜に勝るということは、同様に疑いの余地のないことである。さらに進んでこれらの性質の本質を定義しようとするると確かに細部の大きな多様性に出会ふが、はるかに大量の實質的な単一性に出会ふのである。イ

ーリアスや詩篇のような詩は最も異質な場所に生まれ、約3,000年のあらゆる変転を経て人々の称賛を集めてきた。音楽の魅力、女性の顔つきの調和、星空や海や山の威厳、小川のせせらぎや黄昏の影の穏やかな美しさは、初期の世界の想像力が初めて自らを文字で表現したときにも現在と同じように感じられたものである。同じように最も遠い時代から伝わってきた英雄や徳のタイプが人類の称賛を集めている。私たちは最も古い歴史家が明らかにした称賛や非難の感情に共感し、最も古代のモラリストはすべての人々の心の琴線に触れることができるのである。大筋は変わっていない。正義が悪であるとか不正義が徳であるとか、夏の夕焼けが不快であるとか、人体の爛れが美しいなどと主張した人物はいない。また審美的な称賛の対象は常に、気高いものと美しいものという二つの大きなクラスに分けられていた。これらは倫理学においてはつきりと、英雄的なものと愛情豊かなものに相当する。

また徳や美の判断に存在する疑いのない多様性を調べてみると、いずれの場合もその大部分が文明の程度の違いに起因していることがすぐにわかる。道徳的水準は一定の範囲内で社会の発展とともに規則正しく変化する。粗野な文明では非常に高く評価されていた徳が組織化された社会では比較的無価値になることがある。また逆に前者では従属的なものとみなされていた徳が後者では主要な徳になることもある。また高度に洗練された心でしか認識することができない徳というものもある。たとえば慈悲と野蛮、節制と不節制の違いなどという、徳と悪徳の問題は時に単なる程度の間

題であり、文明のある段階における水準が別の段階よりはるかに高いことがある。同じように文明が進むと、美の大まかな特徴に対する認識は変わらなくとも、嗜好は着実に変化していくものである。何も教えられていない人々が控えめな色合いよりも派手な色合いを、形よりも色を、上品なスタイルよりも華美なスタイルを、発作的な態度や巨大な人物、強い感情を好むということは、かなり確信を持って言えるだろう。文化がもたらす洗練の影響が最も顕著なのはそれが生み出す嗜好の基準である。そしてある民族の文明度を測るのに最も適した指標は彼らが持っている美の概念、実現しようとするタイプや理想である。

しかし道徳的判断や美的判断の多様性の多くは偶発的な原因に起因している。大きな称賛を受けたり、大きな影響力を持ったりする人は外見の特徴が目立ったり、特徴的な服装をしたりすることがある。彼はたちまち数え切れないほどに模倣されるだろう。こうして美に対する生得の感覚は徐々に損なわれ、目と嗜好は誤った人工的な基準に順応し、ついに人は最も絶対的な自発性によってそうした基準に従う判断をするようになるのである。同様に何らかの偶然の状況が平凡な行為を特別な名譽に高めた場合、宗教システムがそれを徳とし、あるいは悪徳という烙印を押した場合、人の良心はやがてその宣告に順応する。そしてこの誤りを正すためには地域の法廷の外に向かって訴えなければならぬのである。またすべての国民はその特殊な環境と立場のために美と徳の両方についてある特定のタイプを好む傾向がある。そして当然ながら自国のタイプを他のすべての型よ

りも称揚する。作物が実らない山中に住み、強大な敵に囲まれ、最も毅然たる規律と警戒心と勇氣だけに頼って独立を維持している貧しい小国の徳は、侵略される恐れのない、商業の中心に位置する豊かな国民のそれとはいくらか異なるだろう。前者は後者にとって言いようもなく恐ろしい野蛮な行為や裏切り行為に非常に寛大だろうし、後者が比較的軽視する特定の規律の徳を非常に高く評価するだろう。そのため、黒人国家の美の概念は白人国家のものとは異なるだろう。熱帯の空の輝きや北の海の荒々しい壮大さ、大きな山々や広い平原の様子は崇高さや美しさのイメージを国民に与えるだけでなく、国民の基準を形成し、判断に影響を与えるだろう。その土地の風習や習慣は私たちの最も古い記憶と深く結びついており、ついに私たちはそれを本質的に尊いものと見なすようになる。そして最も些細な事柄でさえも、その結びつきを解消するには一定の努力が必要となる。小説家（*サミュエル・テイラー・コールリッジ、1772—1834）によるフランスの軍服に対するイギリス人下士官の侮蔑の描写には多くのウィットと同時に、多くの知恵があった。「青衛兵と砲兵を除けば、連隊服に青色は全く馬鹿げている」そしてフランスに対するほとんどのイギリス人の混乱した第一印象の中には、肉屋のような格好をした小作農の凶暴な風体に対する半ば本能的な嫌悪感が存在する、と私は思っている。

「美や壮大さ、その他の嗜好と呼ばれるあらゆる感情は、行動に至ることはなく、楽しい熟視に終わる。これが、ある観点から見れば間違いないそれらに準えられるだろう道徳的感情との本質的

な違いである。」（*マツキントツシュ）と言われている。私はこの見解を全く受け入れられない。私たちの審美的判断は嗜好という性質を持っている。この判断はある種類のものを別のものよりも好むように私たちを導き、他の要素が同じである場合には行動の根拠になる。一緒に暮らす人、住む地域、私たちを取り囲むものを選ぶとき、私たちはその逆のものよりも美しいものを好む。美と醜の選択が問題となるあらゆる場合においてそれを打ち消す動機が介在しない限り、前者を選び、後者を避けるのである。人生にはこのような問題が生じない出来事が無数にあることは間違いない。そして道徳的判断を求められない出来事もまた非常に多い。私たちが言いたいのは、人間は強い道徳的原理に動かされていて、目の前に自然にやって来る道徳的判断を伴うあらゆるケースにおいてその命令に従って選択を行うということ、人がその動機に従うなら特別な行動をとるということである。この命題は私たちの美意識に関しても完全に真理であると主張することができる。その強さに比例して美意識は通常の生活で私たちの進路を指導し、固有の方針を決定する。私たちは有用性のために道徳的な美しさの感覚よりも、物質的な美しさの感覚をはるかに容易に犠牲にすることができる。不誠実な行為をするよりは、不格好な家を建てることに私たちは容易に同意するだろう。しかしある種の苦痛を感じることなく、美しいものよりただ単に不格好なものを自ら選ぶことはできない。そしてハートリーの学派によればこの種の苦痛こそが良心の正確な語義（*definition）なのである。また、美に対して強い感覚を持ち、それを蹂躪するくらいなら死を選ぶような人間を想像することはまったく難しいことではない。

こうしたことを考えるなら、多くのモラリストが道徳的な卓越性をシンプルに美の最高の形とみなし、道徳的修養を嗜好の最高の洗練とみなしたことは驚くにはあたらない。私が思うにこのような見方は徳を有用性に分解する理論よりもはるかに妥当であって、ギリシャのモラリストやシャフツベリーの学派はこれらの観念の間には極めて密接な関係があることを十分に証明しているが、この理論の不十分さを示すだろう二つの考察がある。私たちは「美しい」という形容詞を慈愛、敬意、献身などの徳に使うことの妥当性をはっきりと意識している。しかし、私たちがそれを正直さや誠実さといった完全な責任を伴う義務に使うことは同じ様に妥当ではない。美の感覚とそれに続く愛情は、単に正直でまっすぐな人間を作り上げるシンプルな義務の過程よりも、むしろ熱意と感情に伴うものである。加えてストア派やバトラーが示したように、私たちの本性における良心の位置はまったくユニークなものであって、道徳と美の追求を明らかに区別している。私たちの感覚や欲望はそれぞれ限られた範囲でしか働かないが、良心は私たちの存在全体の構造を概観し、私たちのさまざまな情熱や欲望の満足に制限を設ける。良心にはそれらをすべて判断し抑制する特権が与えられているため、私たちの本性の他の原理とは程度ではなく、種類において異なっているのである。従って最も自然な欲望に従っている場合であっても、これに反するやり方は不自然であることが私たちにをはっきりと感じられるのである。その力は微々たるものかもしれないが、その権利は議論の余地のないものであって「もし権利があつて力があれば、世界を支配することができるだろう。」

(*バトラー)すべての興味、情熱、嗜好とは異なり、それらに優るこの能力こそが徳を人生の最高の法則とし、それが触発する魅力の感覚に命令的な性格を付しているのである。キケロが内なる神、ストア派が理性の主権、聖パウロが自然の法則、バトラーが良心の覇権と表現したのもこの能力である。

上記の推論に現れた、私たちの本性の高次の部分と低次の部分の区別は直観的な道徳体系において非常に重要な位置を占めている。しかしこれは例証によって弁護するしかないものである。論者にできるのは、こうした区別が最も明白と思われる事例を選んで読者の感覚に委ねることだけである。少し例を挙げるならば、私たちは快樂ですらも楽しみのみ量だけで測るのではないということ、そこには高次の、低次のという形容詞によって合理的に説明できるような種類の違いがある、というだけで十分ではないだろうか。

もし、感覚を介さずに純粹に合理的なプロセスから自らの概念を導き出した別の世界からやって来た存在が私たちの世界に降りてきて人間の性質の原理を調べたとしたなら、味覚と聴覚という二つの感覚から得られる快樂に対する人々の価値判断の違いは、彼が最も異常だと思い、また絶対に理解できない点だろうと私は想像する。前者には何らかの食べ物が味覚に作用することで生じる楽しみが含まれる。後者は音楽の魅力である。これらの快樂はいずれも自然なものであって洗練によ

って大いに高めることができ、いずれの場合も快樂は鮮烈かもしれないが、非常に一時的であり、いずれの場合も必ずしも悪い結果を招くものではない。しかし、間違いなくこれほど多くの類似点があるにもかかわらず、實際の世界に目を向けたとき、この二つの楽しみの中に比較が全く滑稽なほどの地位の差があることに気がつく。ではこの差は何によってもたらされるのだろうか。音楽から得られる楽しみの強さ（*同士の間）には多くの場合、このような優劣はない。私たちは皆これらの快樂を比較する際にその強さ、持続時間、結果などの考察とは異なる要素があることを意識している。私たちは自然に一方にかすかな羞恥の念を抱き、他方には名譽の念を抱く。味覺の快樂に非常に敏感な人物はどこか信用に値しない、と見なされる。人は食べることがとても好きだと自慢することはないが、音楽がとても好きだと認めることをためらわない。前者の趣味はその人を低くし、後者の趣味はその人自身の目にも、隣人の目にも、その人を高くする。

また明るい性格で、教養はあるがあまり気難しくない人が、上手な悲劇や上手な道化を演じているときの自分の感情や周囲の人々の表情を観察するなら、後者の場合の自分の楽しみは前者の場合よりも混じり気がなく強烈だったという結論に至るだろう。彼は倦怠を感じず、ペーソスの楽しみに必然的に伴う痛みに耐えることもなく、鮮明で夢中な楽しみを経験し、隣人の激しい反応の中に同じ感情を見たのである。しかし悲劇から得られる快樂は道化から得られる快樂よりも高次のものであることを彼は容易に認める。時に彼は二者のどちらを選ぶか迷うこともあるだろう。彼を一方

に導くのは単なる楽しみへの愛である。彼をもう一方に向かわせるのはそのより高貴な性質の感覺 (* s e n s e) である。

同様の区別は他の部門でも觀察されるだろう。男女の関わりを除けば、より強烈な快感は美の完成形よりもグロテスクなものや奇抜なものから得られるのが普通だろう。美から得られる快感はその性質上、暴力的なものではなく、ほとんどの場合、憂鬱と混ざり合っている。美しい風景に深い感動を覚えた人が極端な高揚感に包まれることはまずない。憂鬱の影が彼の心を支配する。彼の目は涙で満たされる。漠然とした、満たされない憧れが彼の魂を満たしている。このような楽しみは悩ましかったり壊れてしまったりするものではあるが、奇妙な事物の陳列から得られるものより高い種類のものであると評価することをためらう人はほとんどいない。

もし快樂が私たちの追求の唯一の目的であり、その素晴らしさが、それがもたらす楽しみ量の量のみによって測られるとしたら、最小のコストで目的を達する者が最も賢明とされるのは最も明らかなことだろう。しかし文明の全ての過程はまったく逆の方向に向かっている。子供は最も単純なものから最も強烈な、最も絶妙な楽しみを得る。花、人形、粗野な遊び、最も美的でない物語があれば十分に魅了されるのである。教養のない農民は最も荒っぽい話や最も下品な機知に夢中になる。教養が増すとほとんどの場合、選り好みが生まれ、快樂をより精巧にすることが必要とされる。私

たちは子供の頃の楽しみを続けている人物に対してある種の不信感を抱く。私たちがある種の娯楽から快樂を得るといふ事実そのものが、ある種の不面目となる。なぜならそれが私たちの性質の高貴さと調和していないと感じるからである。

社会についての評価はこの点で個人についての評価と似ている。スペインのような停滞した未開発の国と産業文明の中心地における大衆生活のモデルを比較して、実際に実現された楽しみの量や平均は半文明社会より文明社会で大きい、と自信を持って言える人はほとんどいないだろう。未発達の状態が必ずしも不幸な性質とは限らないし、私たちは幸福を測る正確な尺度を持っていないが、少なくともその程度が成功の程度と一致しないことは確かだろう。後進社会の人々の嗜好や習慣は、狭い領域にあるいくつかの快樂に自らを適応させ、おそらくより文明化された人々がより広い範囲でそうするのと同じくらい完全な満足をその中に見出すだろう。そして前者の境遇に単調さからくる退屈がいくらかあるとすれば、後者の境遇にはずっと多くの不満の種がある。高度に文明化された人間の優越性は、主として彼が存在のより高い位置に属しているという事実にある。なぜなら彼は自分の存在の目的により近づいており、より多くの自分の能力を行動に移しているからである。そしてこのことはそれ自体が目的なのである。たとえ、ありえないことではないが、下等動物が人間より、文明人よりも半野蛮人が幸福であったとしても、獣であるよりは人間である方がよく、あらゆる事業と知識の流れから隔絶されたどこかの停滞した国に生まれるよりは、文明の激しい闘争

のなかに生まれる方がましである。功利主義が美化することを喜ぶ物質文明にも、単なる楽しみの哲学では説明のつかない要素があるのである。

また人類の全体的な声が、快樂と見なされる精神的快樂に肉体的快樂よりも莫大で議論の余地のない優越性を与えている理由を尋ねるなら、快樂の価値はすべてそれが与える楽しみの量で決まるという仮説は適切な、あるいは満足な答えにはならないだろう。前者は後者よりも変化に富み、長続きするが、一方で到達するためにより多くの努力を要し、はるかに狭い領域にしか拡散しないと
言われていることは正しい。野原でのスポーツ（*狩獵）やその他の肉体的な楽しみから主に快樂を得る人々と、最高の知的源泉から快樂を得る人々を比べても、楽しみが主に動物的である少年期と主に知的なものである青年期を比べても、世界がこれらの快樂の間に大きな距離を置くことの正当性を幸福の総量の違いに見出すことはできないだろう。完璧な幸福の理想を描こうとする画家や小説家は、学識の深い研究者にそれを見出すことはないだろう。身体とあらゆる精神状態との関係についての疑問には立ち入らないことにするが、一般に身体の状態の方が精神的な状態よりも私たちの楽しみに大きな影響を与えるということは言えるかもしれない。大多数の人間の幸福は精神的あるいは道徳的な原因よりもはるかに、肉体的な条件から生じ、しばしば肉体的な楽しみを再生産すると推定される、健康状態や気質に影響される。そして急な肉体的苦痛はいかなる精神的苦痛よりも私たちの天性の全てのエネルギーを無力化する。最初の麻酔薬を發明したアメリカ人は、人類

の真の幸福にソクラテス（*BC470—399）からミル（*ジョン・スチュアート、1806—1873）に至るまでのすべての道徳的哲学者より大きな貢献をしたのかも知れない。精神的な理由は人に我慢や、苦痛に耐えることを教えるだろうし、痛みを緩和することさえできるだろう。しかし肉体的な理由から一見したところ大抵の苦しみをほとんど感じないような性質がある。昔の哲人は「哲学は何の役に立つのか？」と問われたとき「哲学は人に死に方を教える」と答え、その言葉を尊い死によって証明したと言われる。しかし感じるものが少なく、気づくことの微かな、鈍い動物的な性質が、哲学が辛うじて肩を並べられるほどの穏やかさで死に立ち向かえることは千の戦場で、千の絞首台で、シナやインドの広大な地域で証明されてきた。人間の性質の精神的な部分は、人間を最も幸福にするがゆえに肉体的な部分より優れているとされるのではない、というのが真実である。その優位性は別の種類のものであって、高次と低次という表現で分かりやすく表現できさる。

そしてもう一つ、私たちの道徳的感情を満足させることによって得られる快樂のうち、私たちが自然に最も上位に位置づけるものがある。ペイリーの学説に反して、人類の大多数は気前よく振舞う快樂は菓子を食べる快樂の何倍にも勝ると思うだろう。前者が想像を絶するほど強烈なものだからではない。それはより高次のものだからである。

この種類の区別は、ほとんどの功利主義の論者によって無視されるか否定されてきた。最近これをその体系に導入する試みがなされたが、明らかにその原理とは相容れないようである。この区別の存在を認めるならば、私たちの意志は最も多くの楽しみを生み出すものへと必然的に傾くことからは程遠く、私たちは快樂においてさえ、より高い、全く異なる性質を認識し、楽しみではなくその性質を選択の対象とする力を持つことになる。もし人が二つの快樂のどちらかを選ぶ際に、結果の考察とは距離を置いて、最も楽しみを与えないと知っている方を、より大きな価値や気高さゆえに好ましいものとして意図的に選択することがあり得るとしたら、彼の行為は完全に不合理であるか、「最大幸福」の哲学では説明できない判断原理に基づいていることは確かだろう。その哲学（*功利主義）に従うなら、人間の性質の別々の部分、思考や感情の別々の領域に高次、低次という言葉を使用する場合、より多い、あるいはより少ない楽しみを生み出す、という以外の意味はありえない。しかし、一旦快樂の評価において量の違いだけでなく、質の違いも認めるならばすべては変わってしまう。その場合、これらの快樂に関係する私たちの性質のさまざまな部分は、互いに高次、低次という言葉で明確に正しく説明できる別種の関係を持っていることは明らかである。私たちの理性が私たちの存在のこの階層性を直観的かつ直接に明らかにすると主張は、直観的モラリストの最大学派の基本的立場である。この論者たちによれば、私たちの性質の中の道徳的、知的なもの、動物的なものよりも優れている、善意の情愛は利己的なものよりも優れている、良心が私たちの存在の他の部分に対して正当な優位性を持っていると言うとき、この言葉は理解可能である

がゆえに、恣意的でも幻想的でも気まぐれなものでもない。このような上下関係が示されるとき、それは私たち誰もが持つ感情と一致し、私たちの判断の自然な道筋、私たちの習慣的で巧まざる言い回しと一致するのである。

生得的な道徳的知覚の理論に対抗する議論は二種類ある。一つはすでに言及したが、私たちの道徳的判断はすべて有用性の動機に分解できることを示そうとするものである。そしてもう一つは、異なる国や文明の段階における判断の多様性である、これは生得的道徳的能力を仮定した場合、全く説明不可能であるとされている。このような多様性は私が主張する学説の大きな障害であり、また道徳の歴史の非常に重要な部分なので、私がそれについていくらか詳しく言及することに支障はないだろう。

第一に道徳的判断の多様性は道徳的なものではなく、純粹に知的な原因から生じる場合が多い。たとえば神学者たちが利息付きの融資は自然の法則に反しており、明らかに強奪であると宣告したとき、この誤りは明らかに金銭の用途についての間違った考え方から生じたものである。彼らは金銭は何も生み出さないものであり、借りた金を返した者はその取引から受けた利益をすべて帳消しにしたのである、と信じていた。最初のキリスト教のモラリストたちがこの問題を扱った時、特殊な事情で利子が極端に高くなり、その結果貧しい人々にとって極端に過酷のものになった、この事

実が偏見を強めたことは間違いない。しかし高利貸しに対する非難の根本は単なる経済学的な誤りだった。金銭は生産的なものであって、貸した金によって借り手は富の源泉を生み出すことができ、それは貸した金額が返された後も継続するものであることが人々に理解されるようになる、彼らはこの利益のために支払いを要求するのは何ら不正義ではないことを認識し、高利貸しは非難されなくなるか、明確な命令に基づいた場合にのみ非難されるようになったのである。

こうして再び子宮内の胎児がいつ別個の存在としての性質、したがって権利を獲得するのかという生理学的考察が中絶の犯罪性の問題に大きな影響を与えることになったのである。古代の人々の一般的な意見は、胎児は母親の一部でしかなく、母親は自分の体の腫瘍を焼灼すると同じように胎児を消滅させる権利を有するというものだったようである。プラトンもアリストテレスもこの習慣を認めていた。ローマ法にはウルピアヌス（*AD170-228、法学者）の時代まで、故意の中絶を禁止する法令はなかった。ストア派は乳児は呼吸が始まったときにその魂を受け取ると考えていた。ユステイニアヌス帝（*在位AD360-363）の法典ではその受胎後四十日で命ある存在とされた。現代の法律では受胎の瞬間から別個の存在として扱われている。このような問題の答えは私たちの道徳的判断に影響するとはいえ、完全に道徳的感覚の範囲外に求めなければならぬことは明らかである。

次に良心の直接の指示による義務と、明確な命令に基づく義務には大きな区別がある。窃盗、殺人、虚偽、姦通を悪とする根拠は、金曜日に肉を食べること、日曜日に働くこと、宗教的集会を疎かにすることを人々が罪と宣告する根拠とは異なる属性に基づくものである。良心が後者の群の罪を犯した者に対して向ける非難は純粹に仮想的なものである。良心は神の命令への服従を命じているが、その命令が何であるかという決定は理性に委ねているのである。これら二つのクラスの義務の区別は、ほんの少し考えるだけで明らかになるものである。そして、その相対的な重要度の変化は宗教史の最も重要な部分の一つを成している。

これと密接な関係があるのは、古来の習慣がその古さゆえに、あるいは手段と目的の混同によってついには宗教的な敬意の対象となることから生じる多様性である。ローマ共和国において女性の純潔を守るための多くの予防策の中に女性がワインを味わうことさえも禁じる法令があった。この非常に分かりやすい法律は初期の教育によって強調され、ついには習慣と伝統的な敬意によって人々の道徳感情に組み込まれ、その違反はとんでもない犯罪と見なされるようになったのである。アウルス・ゲッリウス（*AD 125—180）は、カトー（*大カトー、マルクス・ポリキウス、ケンソリウス、BC 234—149）が「夫は妻に対して絶対的な権威を持っており、妻がワインを飲んだり姦通したりといった恥ずべき行為をした場合、それを非難し処罰するのは夫である」と言った、という一節を残している。伝統に対する畏敬の念が薄れ、人々が古い慣習をその価値に基

づいて判断する勇氣を持つようになると、彼らはこの信条を着実に熟考し、それを原初の要素に還元し、その行為と結びついていた観念と分離することができた。このようにして彼らの良心が明らかにした、道徳に関するすべての推論の基礎になっていく大きな道徳的法則や感情のいづれとも、それ（*女性の飲酒）が必ずしも対立するものではないことを認識することができたのである。

より深刻な異常の根底には、辛抱強い分析によって容易に暴くことができる、観念の連合の混乱がある。例えば、単なる虚栄心や名声への愛、領土への貪欲さに駆られて、徒に何千もの死や苦しみ、遺族を生み出した征服者が巻き起こした称賛や深い敬愛の念と、おそらく極度の貧困や耐え難い虐待の圧力の下で貧しく無知な人物が犯した、たった一件の殺人や強盗が生み出した嫌悪感を対比させることは、道徳の歴史を深く考察する者にとって最も不面目なことだろう。通常一般大衆がその物質的な成果によって測る非凡の才と力の魅力、その人物が自国にもたらした利益、神の干渉によって戦いの勝敗が決まるという信仰、したがって軍事的成功は神の恩恵の証拠であるということと、そして王位が神聖なものであるということは、すべて間違いなく共謀して征服者の生涯の残酷さを隠してきたのである。しかし、おそらくその背後には別のより深い力がある。戦争に付随するあらゆる悪にもかわらず、戦争に確かな道徳的な威厳を授けているのは、それが引き起こす英雄的な自己犠牲である。おそらく教会を唯一の例外として、戦争は欲得の動機が最も力を持たない領域であり、業績が厳格な義務によって評価され測られることが最も少ない領域であり、無私の熱意

に最も大きな機会が与えられる領域なのである。戦場は非常に超越的かつ非常に劇的な自己犠牲の行為の場であり、そのすべての恐怖と犯罪性にもかかわらず、最も激しい道徳的熱意を呼び起こすものである。しかし、旗のため、すなわち彼らの首領のために命を捧げた多くの人々のこと考える時に生まれるこの感覚は、それを向けるべき明確な対象を必要とする。名もなき大勢の戦闘員たちは想像力を刺激しない。彼らは視界の中で、紛れもない生きた姿として目につくこともなければ、気づかれることもない。そのため最も目立つその首領が戦士の代表になるのである。殉教者の光輪が彼の頭上に降りる。こうして運命の皮肉にも見える混乱によって、何千人もの自己犠牲によって呼び起こされた情熱が、その途方もないエゴイズムがその犠牲を必要とした、まさにその人物の周りに神聖な光を放ったのである。

道徳的逆説のもう一つの形は、実際的な宗教は私たちが意識的に道徳的矛盾を許容するように私たちの道徳的認識を上書きすることがあるという事実に由来する。この点において私たちの知的能力と道徳的能力は厳密に平行な関係にある。今もなおキリスト教会の少なくとも四分の三が公言しており、また何世紀ものあいだ教会全体において堅固なものだった信仰がある。ある夜、キリスト教の教祖が晩餐のテーブルに着いてから、自らの体を手に取り、それを裂いて弟子たちに配り、彼らはそれを食べ始めたのだが、同じ体は無傷のままテーブルに付いており、その後すぐにゲッセマネの園へ向かっていったというものである。このような教義が信じられているということは、それ

を支持している人々の能力がこの記述に矛盾や当然の馬鹿馬鹿しさを感じないような性質のものであることを意味しない。形而上学的な実体の概念の曖昧さから派生するよく知られた議論は、この困難をほんの少ししか和らげない。矛盾は明らかに認識されているが、それは教会の教えの一部として信仰によって受け入れられているのである。

(*彼らによれば) 全質変化 (*聖餐のパンとワインがキリストの体に変わること) が理性的な秩序の中にあるように、洗礼を受けていない幼児を呪うアウグスティヌス派の教義と、永罰 (*神から見捨てられること) のカルヴァン派の教義は、道徳的な秩序の中にあるのである。これらの教義はしばしば言われているように、異教徒の信仰に見られるどの教義よりも残酷なものである。そして、もしそれらがキリスト教の本質的な部分なのであれば、タキトウス (* A D 55 — 120) がこの信仰に使った「悪質な迷信」という言葉は十分に正当化できると言っても過言ではあるまい。生後わずかな時間しか生きられず、聖水をかけられる前に死んでしまう小さな子供には、祖先が6,000年前に禁断の果実を食べたことに対する責任があること、先祖の贖罪のために完全に蘇生して永遠の火の深淵に投げ入れられるのは完全な正義であること、また完全な正義と完全な慈悲の持ち主である創造主が全ての特性を発揮して、永遠に覆すことのできない、言語に絶する、無限の拷問を受ける運命の生命体を意図的に存在させるといふことなどは、あまりに途方もなく馬鹿馬鹿しいと同時に、あまりに言葉にできないほど非道な主張であるため、それを採用するなら人々

が道徳的認識の普遍性を疑うのは当然である。このような教えは、実際には単なるダイモーニズムであって、その最も極端な形である。この教えは想像力が絶対に凌駕できないような不正な行為や野蛮な行為、人間の残虐性の最も極悪非道な不行跡でさえ取るに足りないものになるような行為、神学者が悪魔に帰する行為よりも実際にはかなり悪い行為を創造主に帰しているのである。もし、これらの行為の本質を鮮明に認識しながら、それを生得的に完全な善の現れとする人々がいたとしたら、生得の道徳的認識に基づいた倫理体系は全くの誤りということになるだろう。しかし、幸いにもそうではない。これらの教義を受け入れている人々は、靈感を受けた教会や論者が説いているから信じているのである。また彼らはまだ使徒の無謬性に疑問を呈することを、考え得る限りの誹りによって神の徳性を毀損することより非宗教的と考える段階にある。そのため、自分の本性である道徳的感情を押し殺すことを義務と考え、称賛されるべきへりくだりの実践と考える。そしてついには、悪魔の属性を彼に認めることをためらったなら、神は非常に怒るだろう、と考えることになるのである。だが、彼らの道徳的感覚はそうした観念によって損なわれていないわけではない。とはいえ、通常のテーマについて隣人のそれと全く異なるわけではない。彼らは、慈愛に欠けるがゆえにカリグラ帝（*在位AD371-41）やネロ帝（*在位AD54-68）の生涯に反感を抱くことさえできる。彼らの神学的価値判断において正義と慈悲は分離している。彼らは教義を一種の道徳的奇跡と受け止めている。そしてある神学者の一派が常にしているように、明らかに自己矛盾した主張を明言するとき、彼らはそれを神秘、そして信仰の機会と呼ぶのである。

この例では、はっきりした道徳的矛盾が意識的に許されている。迫害の場合には、教義的神学体系の一部として受け入れられている非常に不道徳な主張から、完全に道徳的かつ論理的な帰着が導かれている。犯罪者を罰する際に考慮されるべき二つの要素は、その罪の凶悪さと、彼が与えた損害である。最大の罪と最大の損害が合わさったとき、最大の罰が与えられるのは当然のことである。殺人者を死刑にした人物が道徳的能力を持っていないと主張されることはない。したがって神学者たちがある意見を持つ人間は大変罪深く、もし彼がその意見を広めたならば彼の仲間が地獄に落ちると信じたならば、彼らがこの異端者を死刑にしなければならぬと結論することには何の道徳的問題もなかった。利己的な理由が迫害を悪よりも異端に向けさせたのかもしれない。しかし、誤謬の罪と教会の無謬性というカトリックの教義はそれを正当化するには十分なものだった。

このように合理的、あるいはその他の根拠によって受け入れられ、賞罰の見込みに支持されている教義体系は良心のそれとは別の倫理規範を教えることがある。そしてこの場合、良心の声は無視されるか、もみ消されるかのどちらかだろう。良心の声が誤らされることがあるのもまた事実である。たとえば神学者たちが長い間、探求の習慣よりも軽信の習慣を吹き込むなら、偏見を分析するよりも大事にした方がよい、率直にその価値を調べるより教えられたことに対するあらゆる疑念をもみ消した方がよいと人々に説くなら、ついにはあらゆる公平性と知的誠実さに本能的、習慣的に

反発するような心的習慣をつくることに成功するだろう。もし人がある義務に絶えず違反するならば、ついにはその義務を感じなくなるだろう。しかし、このことが倫理的探求に大きな困難をもたらしたとしても、道徳的知覚の实在に対する反論にはなりえない。なぜなら、単純にそれは私たちの全ての力が従う法則だからである。悪しき知的教育は間違った、あるいは不完全な知識だけではなく、間違った判断の傾向や習慣を生み出すだろう。悪しき美学教育は、間違った嗜好の規範を生み出すだろう。身体の酷使は私たちの身体的知覚の一部を劣化させ、損なうことさえあるだろう。前二者のケースでは正誤の基準を決定するため、多くの条件下の多くの人々の経験に頼らなければならぬ。また病んだ器官を正常に戻すためには長く困難な訓練が必要である。私たちは個別の道徳的問題を推論（*reasoning）によって解決することができる。しかし、その推論とは直観によって私たちに明らかにされる特定の道徳的原理に訴えることなのである。

私が想像するに、人間にはある種の生得の道徳的感覚があると認めることに多くの人が見出す最大の困難は、それがソクラテスのダイモーンのような、特定のケースで具体的に絶対に確実な知識を与えてくれる神秘的な仲介者の存在を意味する、という推測に由来するのだろう。しかしそれは完全な誤りである。この（*生得の道徳的感覚の）学派の意見は必然的に二つの命題に集約される。第一は人間の意志は快楽と苦痛の法則だけに支配されているのではなく、義務の法則にも支配されているということである。第二は義務という概念の基礎は、私たちの感情的存在を構成する様々な

感覚、傾向、衝動の中には、本質的に善であつて奨励すべきものと、本質的に悪であつて抑制すべきものがある、という直観的認識だということである。善意は悪意に優り、眞実は偽りに、正義は不正に、感謝は恩知らずに、貞潔は官能に優ることを直感的に意識するのは心理的事実であり、あらゆる時代と国において、徳は低次ではなく、高次の感覚の方を向いてきたというのが彼らの主張である。また、義務感があまりに弱く、ほとんど感じられないことがある。その場合は人間の本性の低次の部分が優位に立つだろう。社会のある条件によつて人が道徳的向上のために抱く熱望が、完全に一つか二つの分野に向けられるということもあり得る。たとえば古代ギリシヤでは市民的、知的な徳が非常に高く評価されたが、貞節の徳はほとんど顧みられなかった。私たちの高次の本性の異なる部分が、ある意味で対立することもある。たとえば非常に強い正義感が私たちの博愛的な感情を抑制するような場合である。道徳律に従わない行為によつて何らかの目に見えない存在の機嫌をとるよう、教義上のシステムが命じることもある。特殊な状況が影響し、多くの異なる動機が交錯して、道徳的な進化を不明瞭にし、複雑にすることもある。しかしこれらすべての上に、一つの大きな眞理がある。人がより聖なる、より良い存在になりたいと願うとき、より邪悪に、より不実に、より不貞になることでそうなれると思う者はいない。これらの感覚の領域において完全になることを望む者はみな善意、眞実、貞節へと駆り立てられるのである。

さてこの理論によれば、異なる時代にあり得るであろう道徳的な一致は、基準や行動の一致では

なく、傾向の一致であることは明白である。人間は自分へ愛着に比べて、善意への愛着が非常に劣った状態でこの世に生を受ける。そしてこの順序を逆転させることが道徳の機能なのである。すべての利己的感覚を消滅させることは、個人には不可能であり、もしそれが全体的なものになれば社会は崩壊するだろう。道徳の問題は常に比率や程度の問題のほゞである。ある時、善意の愛情は単に家族を包むだけであるが、やがてその輪はまずその階級を、次に国家を、次に国家連合を、そして全人類を包み込み、最後に人間による動物の扱い方に影響を与える。これらの各段階において前の段階とは異なる基準が形成されるが、いずれの場合も同じ傾向が徳と認識される。

この事実の中に、直観主義学派に対して絶えず自信たつぷりに展開される圧倒的多数の異論に対する、単純、かつ私には決定的と思われる回答がある。年老いた親を殺す未開人がいること、文明国でも嬰兒殺しが平然と行われてきたこと、最高のローマ人たちが剣闘士シヨールには何の問題もないと考えたこと、政治的あるいは復讐的暗殺が何世紀にもわたって認められてきたこと、奴隷制度があるときは尊ばれ、あるときは非難されてきたことは、同じ行為がある時代には無罪、別の時代には犯罪と見なされる場合があるということの疑いなしの証拠である。しかし多くの場合、見かけ上の異常さを説明したり酌量したりする特定の環境が歴史的検証によって明らかにされることは間違いない。剣闘士シヨールがもともと宗教的動機から始まった人身御供の一つの形だったこと、未開人の粗野な遊牧生活では、老齢で無力な部族のメンバーを養うことが不可能だったこと、両親の殺害

は殺人者と犠牲者の双方にとって慈悲の行為と見なされたこと、効果的な司法当局が組織される以前には私的復讐が犯罪に対する唯一の防衛であり、政治的暗殺が横領に対する防衛であったということ、窃盗の犯罪性に対する一部の野蛮人の鈍感さは、すべてのものを共有する彼らの習慣に起因すること、窃盗を合法とするスバルタの法律は民間の軍事的機敏さの涵養をいくらか意図していたが、主に蓄財の防止を意図していたこと、奴隷制度の導入の動機は捕虜を殺さないための征服者の慈悲だったことはしばしば示されている。これらはすべて真実であるがもう一つ、より一般的な答えがある。すべての時代の人々が彼らの時代の道徳的原理の妥当性について合意していたなどとは考えられないし、主張されてもいない。主張されているのは、これらの原理はそれ自体同じものだけである。私たちの目に極悪非道の残虐行為と映るもののいくつかは、それに反論するために持ち出される普遍的認識である慈悲心の命ずるところのものである。またそうでない場合でも推測されるのは、慈悲の水準が非常に低かったということである。しかしそれでもなお慈悲は徳とされ、残虐は悪徳とされていた。

この点において私は原型となる（*original）道徳的能力を仮定したならば進歩的な道徳というものはあり得ないという主張がいかに完全に間違っているかを示すことができる。このような主張には二つの非常に単純な答えがある。第一に、直観的モラリストはある種の資質を必然的に徳の高いものであると主張するものの、それらが作用する程度、言い換えれば義務の水準、が

徐々に高くなる可能性を完全に認めているのである。第二に、直観的モラリストはすべての徳を有用性に分解することを拒んではいても、反対派と同様に博愛、すなわち人間の幸福の促進が徳であること、したがって人類の真の利益をより明確に示す発見は私たちの義務の本質に新しい光を当てるだろうことを完全に認めているのである。（*新しい発見の肯定は、当然進歩の肯定である）

私が人間性に関して主張した事柄は男女のさまざまな関係にも同じように当てはまる。男性の情欲がまったく自由であれば、複数の妻との共同生活も、あらゆる風変わりな官能の形態も認められることだろう。この点で人間が自分の性質を改善しようとするとき、その目的は官能の主権を縮小し、制限することだろう。しかしこの改善過程には明らかでない限界がある。第一に種の継続は官能的な行為によってのみ可能である。次にこの情欲の強さと人間の弱さは非常に卓越しているため、モラリストはすべての社会で、特に長い間情欲に自由な機会が与えられていた社会では、種の繁殖という単純な欲求によらない大量の放縦が生じるという事実を考慮に入れなければならない。そこで近親相姦を禁止し、妻たちの共同生活を通常の一夫多妻制に置き換えれば、道徳的な向上がもたらされ、徳の基準が形成されるだろう。しかしこの基準はすぐに新たな進歩の出発点となる。ユダヤの律法を調べてみるなら、立法者は姦淫を禁止し、婚姻の親等を規定すると同時に、妻の過剰な増加を戒めつつも一夫多妻制を認めていることがわかる。ギリシャでは例外はないわけではないが一夫一婦制が施行されていた。しかし同時に好ましくない影響が発生したため、男性たちは高い道徳

基準に達することはできなかった。そして彼らには結婚の制限を超えたほとんどあらゆる形の放縱が許されていた。ローマでは道徳水準ははるかに高かった。一夫一婦制が確立していた。女性の道徳の理想はキリスト教諸国と同じくらい高い位置に置かれていた。しかし男性の間で不自然な恋愛や不倫は良くないこととされていたが、結婚前の単なる不品行はほとんど悪いこととされていない。カトリックでは結婚は種の繁殖のための手段であると同時に、人間の弱さに対する讓歩であるという二重の視点で捉えられている。そして他のすべての官能的な楽しみは厳しく禁止されている。

こういう場合、人が情欲を抑えるために努力する程度と低次の本性に讓歩する程度には大きな差があるが、徳の方向性には差がないのである。姦通や子作りの場合にも利益や実用性の問題が介入することは間違いないが、一般的な物事はまったく別の考え方の上に立って進んでいることに私たちは気づく。すべての人々の感覚とすべての民族の言葉、この欲求はその最も正当な満足においてさえ、ペールをかけられ、視界から隠されるべきものであるという、しばしば弱まるが完全に消えることはない感情、上品と下品という名の下に知られているすべてのものが、私たちの本性である官能的な部分には、何か品位を落とすものがある、自然に恥の感覚がつきまとうものがある、完全な純粹さの概念にそぐわないものがある、神聖な存在にふさわしいとは言えないものがある、という生来の、直感的、本能的な認識を私たちが持っていることを一致して証明している。かつてこのよ

うな認識を全く持たない人物がいたであろうかということは疑問である。また統一性に対する最も執拗な情熱以外に、人がこれを単なる利害関係の打算に帰すよう促すものは何もない。私が説明した動き全体の根底にあるのはこの感覚または本能であり、カトリック教会に熱心に奨励されている、完全な禁欲を神聖なものとする感覚を生み出し、遙かな時空を超え、様々な信条を経て今に至っているのもこの感覚である。ユダヤのナザレ派やエッセネ派、エジプトやインドの司祭、タターの修道院、アジアの神話に数多く登場する奇跡の処女の物語にそれを見出すことができる。たとえばシナの伝説では地球上に男が一人、女が一人しかいなかったとき、女は地上に人を住ませるためにさえ処女を捨てることを拒んだ。その純粹さをたたえた神々は彼女に恋人の眼差しで妊娠することを許し、処女の母親が人類の親となったということである。官能にふける古代ギリシャにおいて、貞操はアテネとアルテミスに与えられた卓越した神聖さの属性だった。「ゼウスの貞節な娘よ、」アイスキュロス（*BC525—456、ギリシャ悲劇詩人）において嘆願者たちが祈っている。「その穏やかな眼差しは決して乱されることがない、われらを見守り給え！ 処女よ、処女たちを守りたまえ。」パルテノン神殿すなわち処女宮はアテネで最も高貴な宗教建築物だった。司祭のいくつかの位階と巫女のいくつかの位階では禁欲が必須条件だった。プラトンはその道徳体系の基礎を人間の本性の身体的または感覚的な部分と、精神的または理性的な部分との区別に置いた。そして前者を人間の墮落の印、後者を人間の尊嚴の印とした。ピタゴラスの学派全体は貞操を主要な徳のひとつとし、修道院制度の創設に力を尽くした。物質的な汚れのない魂を結びつける天空のアフロディテ

の概念は、地上のアフロディテすなわち欲望の守護神の概念と並存していた。そして、彫刻家が情欲の過剰さに迎合しようとした時代があったとしても、彼らの技巧はそれを洗練し理想化することによって発揮された時代もあったのである。ストラボン（*BC64—24、ギリシャ系の歴史家）はトラキア（*バルカン半島東部）に独身と厳格な生活によって完成を目指す人々の共同体が存在したことに触れている。プルタルコス（*AD46—119、ギリシャ人著述家）は「断ち物によって神を敬う」ために一年間ワインと女性を断つことを誓ったある哲学者を称賛している。ローマでは宗教的な畏敬の念は特に結婚生活に集中していた。ペナテス（*貯蔵庫の神）に与えられた大きな榮譽は家庭生活の宗教的承認だった。またローマの女性たちの間では、伝説によると地上にいるとき夫以外の男の顔を見ることがなく、名前も知らなかった理想的な妻、ボナ・ディアへの信仰が盛んだったという。「祭壇と家庭のために」というのがローマ兵の鬨の声だった。しかしこれらすべての上に、より高い理想の痕跡を見出すことができる。ウエスタ（*かまどの神）の処女たちに与えられた極度の尊厳の中にそれを見出すことができるのである。その禁欲は恐ろしい罰則によって守られ、国家の繁栄と密接に関係しているとされ、その祈りは奇跡的な力を持つと信じられていた。ローマの通りを走ることは皇后にさえ許されていなかったが、彼女たちには許されていた。私たちはクラウディアの伝説の中にそれを見出すことができる。神々の母の像を乗せた船がテヴェレ川に座礁したとき、彼女は自分の帯を船首に取り付け、強い男たちが動かそうとしても無駄だったその巨大な重量を処女の手で引いて自分の貞操の疑いを晴らしたのである。処女にしばしば与えられる

予言の才能、処女を死刑から守る法律、結婚そのものを欠陥と表現したスタティウス（*AD45—96、ローマの詩人）の言葉にもそのようなものが見出せる。キリスト教は処女性を女性の理想とすることを信仰の大きな魅力にしてきた。カトリックの修道院制度は何千人もの人々を活動的な仕事から引き離すように構築されている。その取り消すことのできない誓いは多くの苦しみと少なからぬ犯罪につながったことに疑いはない。私たちの混じり合った本性の普通の進展への異議は、しばしば想像力の重大な異常をもたらし、非常に高い道徳的価値を持つ家庭的な愛情や共感を禁止した。しかし人間の純粹に動物的な側面は低く、劣った側面であるという中心概念において、私はそれが人間の生得の感情を完全に忠実に反映したものであると信じている。

これらの考察に別の性質の考察をいくつか加えることができる。他の国々が貞操を善とみなしていたのと同じ意味で、古代のある国々が一夫多妻制を善とみなしていたというのは真実ではない。ある状態を許容しようとするのと、それを神聖なものにしようとするとの間には大きな差異がある。イスラム教徒が天国に官能的なイメージを描くのは、それが彼らの聖なる理想だからではない。彼らが地上を徳の領域、天国を単なる享楽の領域と見なしているからである。もしならぬかの異教徒の国々が官能を神格化したとすれば、それは単なる自然の力の神格化であり、その中でも多産のエネルギーは最も顕著なものの一つであり、宗教の最も初期の形態の一つであって、神を道徳的理想と同一視するよりもずっと前からあったものだからである。処女にある種の汚名を着せた

国々があつたとしても、それは彼らが官能を貞操よりも本質的に神聖視したからではなく、世界における自国の地位が主に戦士の数に依存する貧弱な好戦的民族は当然、人口の増加の奨励を主目的とするからである。特に古代のユダヤ人はそうだった。彼らは極端な人口増加を国の繁栄と不可分の関係にあると常に考え、その宗教は本質的に愛国的なものだった。そして、自らがメシアの祖先になる可能性が出産に特別な尊厳を与えていたのだった。しかしユダヤ人の中でもエッセネ派は純潔を神聖な理想とみなしていた。

ある時代には正当とされていた行為が別の時代には不道徳なものとされた、という理由で道徳的認識の生得論に対してロツクの時代から絶えず提起されてきた反論はまったく空しいものであることを、いまや読者は理解されただろう。到達した卓越性の水準は異なっている、どの時代においても徳は同じ感覚から培われたものだったことに気づくなら、これらの議論はすべて全く価値を失うのである。高さと低さ、高貴さと低劣さ、純粹と不純という言葉は、善と悪、徳と悪徳という言葉よりもはるかに忠実に道徳的事実を示している。道徳的な特質は絶対的で不変なものであるという観念がある。それらは完全に相対的で一時的なものであるというもう一つの観念がある。私たちの道徳的感覚に明らかに大きく反する行為、その感覚が養われる最も初期の段階においてさえも間違っていると思なされる行為がある。真実と虚偽の区別のように、その性質上、単なる徳の度合いとは別の明確な定義が即座に生じる区別もあるが、このような場合でも、時代が求める綿密さには

大きな差がある。しかしはつきりと命じられていることは別として、人がそれらの行為を単に良いとか悪いとかではなく、明確に善と悪と呼ぶことを可能にする唯一の外的な規則は、私が思うに、社会の基準である。マンデヴィルが想像したような恣意的な基準ではなく、私たちの道徳的能力が私たちの性質のより高い部分、すなわち徳のある部分であると教えるものを培うことによって社会が到達した水準である。これを下回る者は徳の本質的な素質を遮断しているのである。これを達成しただけの者は自分の良心において、言い換えれば自分の道徳的成長の基準によって正当化されなかったとしても、いかなる外的規則に関しても自分の義務を果たしていることになる。これを超える者はそれを行うことは徳であるが、怠ることは悪徳ではない領域に入っているのである――カトリック神学者の間で「完全性の勧告（*counsel of perfection、清貧、貞潔、従順）」として知られる領域である。奴隷制度、戦争における捕虜の虐殺、剣闘士のショー、一夫多妻制が本質的に間違っているかどうかということほど、無益な議論はないと私は考える。現在では間違っているかもしれないが―かつてはそうではなかった―そして昔の人物が自分の例を挙げてこれらの一つや二つを認めたとしても、彼は罪を犯したことになる。私たちが主張する不変の命題はこうである―慈悲は常に高潔な性質である―人間の本性の官能的な部分は常に低い部分である。

しかしこの時点で当然ながら非常に難しい問題が発生する。私たちの道徳的性質は知的または身

体的性質より優れていることを認め、また私たちの存在の構造上、私たちには自分の性質を完全に
発展させる義務があることを認め、道徳的動機の優位性を確かなものと認めたとする。それでも、
いかに大きな物質的または知的な利益をもってしても、いかに小さな道徳的な損失をも正当に贖え
ないほどに、私たちの存在のさまざまな部分の間の格差は大きいのだろうか、という疑問がまだ残
る。これは決疑論（*教父たちの告解の指針として始まった実践的判定法）の大問題であり、聖職
者たちが目的は手段を正当化するか（*天国に入るための免罪符は正しいか）、を問うことによつて
言い表す問題である。またこの問題について神学者の間には、絶対に実現不可能で、誰も実際の生
活に適用することを夢想したことのない教義が存在する。それはたとえ最善の意図によつて提唱さ
れたものだったとしても、実行に移したなら最も初歩的な文明とすら全く相容れないだろう。つま
り、疑いのような罪はたとえ最も些細なものであつても、その本質と結果において言いようのな
いほど恐ろしいものであつて、考えうる物質的、知的利益はそれに対抗することができない、罪を
犯すくらいなら、罪を犯させないどのような災難にも耐えて、全人類が苦しみながら滅びた方が良
い、と言う教義である。もしそうであれば、人類の最高の目的が罪のないことであることは明らか
であり、この目的のための手段が欲望の絶対的な抑制であることも同様に明らかである。欲望の輪
を広げることは、必然的に誘惑を増やすことであり、したがつて罪の数を増やすことになる。欲望
の絶対的抑制は確かに（*本物の）道徳的な水準を引き上げるかもしれない。（*罪を犯さないだけ
が道徳的に高い状態ではなくなるため）不活発になつて罪を犯さないのは道徳的に高い状態ではな

いからである。しかし、もしすべての罪が神学者たちが主張する通りのものであり、もしそれが永遠の苦悶に値するものであって、それを犯すのが世界の破滅そのよりも悪であるほど想像を絶するほどに恐ろしいことであるとすれば、道徳的な利益でさえそれと全く釣り合わないものになってしまう。道徳的な気風を高めることや、帰依の深さや法悦は一瞬たりとも天秤にかけられることはない。この教義が実際の生活に適用された場合、その結果は非常に法外なものとなるので、それらを簡単に記すだけで反論できる。君主が戦争の結果を計算するとき、その戦争によって引き起こされる一つの罪、一つの負傷兵の冒瀆、一つの鶏小屋の強奪、一人の女性の純潔の侵害は、その国の全商業の破滅、最も貴重な地方の損失、すべての権力の崩壊よりも大きな災難と考なければならぬ、ということになる。彼は軍隊の編成によって必ず生じる不品行の増加という弊害は、その軍隊が回避しうるいかなる物質的、政治的災害よりも計り知れないほど大きな災難であると信じなければならぬ。それが悪徳の抑制に最も弱く、最も一時的な影響しか与えないなら、自分の国を荒廃させる最も恐ろしい疫病や飢饉は喜ばしいことであると信じなければならぬ。自分の国民が大都市に集まることは彼らの罪を一つ増やすことに他ならず、どのような知的、物質的利益があったとしても、都市の建設は恐るべき惨事であると信じなければならぬ。この原理に従うなら人生のあらゆる苦心、多人数を集めるあらゆる娯楽、ほとんどすべての芸術、欲望を目覚めさせたり刺激したりする富の獲得は悪である。なぜならこれらはすべて何らかの罪の源となる。そしてその利益はほんどの場合純粹に現世的なものだからである。文明の構造全体は私たちがしばしば正確に予見でき

るある種の道徳的な悪を犠牲にしても、知的、物質的能力を培うのは良いことだという信念の上に成り立っている。製造業を起業する人物が、彼の事業によってその都市の飲酒や不品行がどれくらい増加するかを確実に予測できるようになる時が来るかもしれない。それでも彼はその事業を進め、人類はそれを善と判断するだろう。

この問題に関する神学的教義は多くの人々に信奉されていながら、そのあまりの厳しさゆえに、先述のように誰にも実行されておらず、一貫して守られていない。しかし他のすべての利益に対する道徳の有意性に関する人類の実際的な判断は非常に多様である。そしてこの多様性は直観的モラリストに対する最も深刻な反論の一つである。神学的な罪の価値判断に最も近い実践的なアプローチは苦行者（*初期キリスト教の禁欲主義者）たちの中に見出すことができる。彼らの体系の全ては、罪は超越的に恐ろしいものであって地上の利益とは何の比例関係も、あるいは明らかな関係もないという信念に基づいている。この信念から出発して苦行者は罪を犯さないようにすることを人生の唯一の目的とする。それゆえ彼は社会のすべての活動を避け、すべての世俗的な目的と野心を捨て、修行を続けることによって自然な欲望を鈍らせ、宗教的な課題に完全に埋没する生活を送るよう努力するのである。そして彼のこのすべての行動は合理的で一貫している。罪の重大さをこのように考える人物の自然な行動は、誘惑となりうるすべての外的影響を何としても避け、自分自身の欲求や感情をできる限り減退させることである。神学者たちはこの点を過大視することによって

人間の道徳的本質を麻痺させてしまう。なぜなら罪の削減はいかに重要なことではあっても、道徳的進歩の一部分に過ぎないからである。これが不釣り合いに傑出することを強いられた時には常に、飼いならされた弱弱しい骨抜き性の性質、すべての熱情と気力の欠如が見られる。そしてこの傾向は通常、優しさ(*gentleness、柔和さ、寛容さ)という徳が極端に傑出することによってさらに悪化してきた。それは本当は強い性質と激しい情熱を持った人々が到達するものであるはずだが、明らかにどこか弱々しく熱情のない性格に似合いのものになってしまっている。

禁欲的な慣習は明らかに急速に失われつつあり、その衰退はそれが表していた道徳観念の衰退の顕著な証拠である。しかし、現存する同じ事柄に関する多くの問題には、判断を複雑なものにする多様性が見られる。それはカトリックの聖職者が通常採用している教育システムは罪を予防することを最大の目的とし、常時厳しく監視することをその手段としているのと対照的に、イギリスのパブリック・スクールの教育システムは罪を犯す可能性を低くするにも、非常に細やかな宗教的罪悪感を育てるにも最も適していなかったとしても、あらゆる能力の健全な伸展を意図しており、それが一般的に認められているというところに見て取れる。それは異なる時代の善良な人々が虚偽であると感じた宗教的見解に対してとった大きく異なる態度の中にも見出すことができる。ある人々は宗教改革者のように、迷信的な儀式に参加することを拒否し、いかなる場合にも、いかなる代償を払っても、彼らが嘘と見なしたものへの抗議を差し控えることを拒んだ。他の人々は古代のほとんど

の、そして現代のいくらかの哲学者や政治家たちのように、最も絶対的な個人的不信仰と迷信的儀式の熱心な遵守を両立し、人々にとって有益であったり彼らの慰めになったりする妄想を妨げる人々を強く非難した。一方、三番目の人々は抗議することなく、静かにその儀式から身を引き、著述によって自分たちの意見を自由に表現することを望んだ。しかし同時に準備ができていない心に無造作にそれを押し付けようとすると、あらゆる転向の勧誘を差し控えた。早婚をめぐって政治経済学者とカトリックの司祭は頻繁に対立する。前者は快適さの水準を下げないことが物質的な幸福の必須条件であるという理由で反対する。後者は打算的な動機のために多くの人が結婚を延期することとは多くの罪を生む元であるという理由で擁護する。それは、それ自体は完全に無害なものであっても、悪の源泉やきつかけとなる娯楽に対して、異なる社会で示される寛容さの著しい多様性の中に最も顕著に見出すことができる。スコットランドのピューリタンを一方の極端な例として、（*大英）帝国のパリ風の社交界を他方のそれとするなら、おそらく平均的なイギリス人はそれらから等距離にいる。これらの違いは大きなものだが、原理ではなく程度の違いなのである。たまに単発の泥酔事件の誘因となることがある氏族の集会やハイランド・ゲームス（*毎夏の力比べ大会）をすべて規制することをピューリタンは真剣に望まない。もっとも、そうしたとしても他の罪が犯されることを防止できたという証明ができるはずもない。フランス人はどんなに楽しみが伴おうとも、許容されるべきではない一定の不道德というものがあることを疑わないだろう。しかし、一方（*不道德）は専ら見世物の道徳的な性質に、他方（*楽しみ）は魅力的な性質に関わるものである。

この両者の間には多くのグラデーションがあり、それは競馬場、舞踏会、劇場、コンサートの功罪をめぐる頻繁な論争の中に見られる。ではどこに線を引くべきなのか、ということが問われるだろう。ある娯楽がその過程の中に存在する悪のために有害になる、と判断する地点をどのような規則によって決めれば良いのだろうか。

これらの質問に対して、直観的モラリストはそのような線は引けない、そのような規則は存在しないと答えざるを得ない。私たちの道徳的性質の色彩は、言葉を用いたはつきりした線で区切られることはほとんどない。それらはほとんど気づかれないうちに薄れ、互いに混ざり合うため、移行の正確な地点を示すことは不可能である。人間の目的は自然がそれ自身に与えた調和と均整の中で、自らの存在を完全に発展させることである。そして、そのような発展は彼の人生の最高の優勢な動機が道徳的なものであることを意味する。いかなる社会や個人においても、もしこの優位性が存在しないならば、その社会や個人は病的で異常な状態にある。ただし、人間の本性の道徳的部分の優位性は疑う余地がないとはいえ、それは無制限なものではなく不確かなものである。そして世間一般の基準は常に同じではない。モラリストは一般的原理を打ち立てることしかできない。その適用方法を定めるの個人の感覚や社会の一般的な感情である。

このような問題に関して直観的理論につきまとう曖昧さは常に対立学派のメンバーによって強調

されてきた。彼らは「最大幸福の原理」というはっきりした決まり文句を主張し、それによって大胆に合法と違法の境界線を引き、道徳的論争を感覚の領域から実証の領域に移すことができる、としている。この主張は功利主義学派の大きな魅力になっているが、私が誤解していなければ、最も下劣な詐欺の一つである。私たちは最も多様な素材商品の価値を正確さと確信を持って比較する。なぜなら価値という言葉は交換価値を意味しており、私たちは交換の共通の尺度を持って比較するのである。しかし、私たちが異なる種類の有用性や幸福を比較するための尺度を探しても無駄である。例えば非常に身近な例として、のどかな田舎から港町への遊覧列車が悪よりも善を多く生み出すかどうか、道徳的原理に従う人物はそれに賛成すべきか反対すべきか、という問題を取り上げてみよう。それは何千もの人々に罪のない健康的な楽しみを与え、人々の考え方の幅をある程度広げる。それがなかったなら犯されなかった罪を防いだとは言い難いし、多くの泥酔の事案を引き起こしている。それはここまで見てきた神学の教義によれば、リスボンの地震やコレラ禍よりも恐ろしい惨事であるが、現世に与える影響は通常一過性のものである。それはしばしば、より深刻な悪徳の手段を、そして時に小さからざる手段を生み出す。何百人もの女性がこの遊覧列車で初めて純潔を失う、というのもありうることである。ここには多くの長所と短所がある。前者は知的、物質的なものであり、後者は道徳的なものである。ほとんどすべてのモラリストは、少数の不道徳な事例によって遊覧列車が全体としては良いものであることを否定できない、と認めるだろう。しかし非常に多くの事例があったなら、バランスが反対に傾くことは全員が認めるだろう。直観的モラリストは、

道徳的な悪が物質的な利益を上回る場所に自ら正確な線を引くことはできない、と告白している。ベンサムが決まり文句を導入することでこの問題がどのように改善されるのか、私には理解できない。功利主義者はこの問題を単なる多数決の問題に矮小化したり、ある女性の破滅とお相手のその日の楽しみを天秤にかけるような皮肉を持ちあわせたりはしていないだろう。このような場合に明確な境界線を引くことができない、ということは直観的モラリストに対する反論にはならない。なぜならその不可能性は彼ら自身も最大限に共有しているからである。

ここまで見てきたように功利主義的モラリストが関心を寄せる利益には二種類のものがある――究極の動機と信じる私的利益と、すべての徳の目的と信じる公的利益である。前者について直観的モラリストは利己的な行為が有徳の、すなわち価値あるものになりうることを否定する。ある人が窃盗を犯そうとしたとき、突然警官の存在に気づいて、逮捕と処罰を恐れたために犯すはずだった罪を犯さなかったとしたら、このことは人の目には道徳的価値を持つと映らないだろう。そしてもし彼が部分的に良心的な動機、部分的に恐怖によって決意したのだとしたら、後者の要素の強さに応じて彼の徳の価値は減じられるだろう。しかし、利己的な考えは有徳の考えとは明らかに対立するとはいえず、それが究極的に純粹に道徳的な力を持つてないと考えるのは誤りである。まず、よく整備された脅しと罰のシステムは、それなしにはほとんど不可能だったであろう明確な定義によって徳の道をはっきりと示している。次に、動機の対立によって心が揺らいだとき、報酬や罰を予想す

ることによって徳の動機が強化されたり、支援されたりしてその勝利が確実になるのはよくあることである。そしてこの動機が勝利するたびにその強さは増し、反対の原理は弱まる。こうして未来の他の助けを受けない徳の勝利をより起こりやすくする、道徳的完成に向けた一歩が踏み出されるのである。

社会の利益に関しては二つの別個の主張がある。第一は、他人の幸福を追求することは間違いない一つの徳であるが、それが徳のすべてではないというものである。言い換えればたとえ人類にとって有益なものであっても、それゆえに徳なのではなく、その有用性に比例したり依存したりしない、本質的な卓越性を持つ徳というものが存在することである。第二は、これらの徳を犠牲にすることを正当化するような、極端で圧倒的な有用性の動機が時折生じることである。この犠牲はさまざま方法で払われる――たとえば、ある人物がそれ自体は完全に罪のないものであって大きな物質的利益を生み出すが、ある程度の罪をも生み出すことをよく知りながら事業を引き受けるとき、また自分が真実でないと考える信念を、並外れて有用であると考えるがゆえに抗議せず、黙認するとき、また他人のために、しかも非常に切迫した状況下でまったくの虚偽を口にするとき、例えば無実の人の命を救うにはその手段しかないときに払われるのである。しかしこのような場合に極端な有用性への動機が道徳的動機に優先するという事実は、後者が前者とは種類が異なること、後者がより高い性質のものであること、後者は有用性とは性質が異なるばかりではなく、む

しろ対立するものでありながら適切かつ正当である行動の動機をもたらず場合があるという事実と何ら矛盾しない。金と銀は別種の金属である。金は銀よりも価値が高い。金は非常に少量でも非常に大量の銀と交換することができるのである。

自然な (*natural、生得的な) 道徳的認識の理論に対する反論のうち、私が注目しなければならぬ最後のものは、自然という言葉の非常に有害なあいまいさから生じている。自然人 (*natural man) という言葉は、原始的または野蛮な状態の人間と同義とされることもあれば、文明人の中の人為的な習慣や後天的に習得されたもの以外の、生得的なものすべてを表しているとされることもある。この曖昧さはとりわけ危険なものである。なぜならそれは興味本位の哲学に欠けている最も法外な行き過ぎの一つを意味するからである——つまり野蛮人と文明人の違いは単なる獲得 (*acquisition) の差であつて、発達 (*development) の差ではまったくないという考え方である。この考え方にしたがつて原初の (*original) 道徳的分別を否定する人々は、旅行者の記録から道徳的感情 (*moral sentiment) を持っていないように見える未開人の例を探し出し、それらを自分たちの立場を証明する決定的な証拠として提示してきたのである。しかしこのような話が極めて信頼できないものであることは十分に明らかだろう。ほとんどの場合、それらは批判力がなく哲学的ではない旅行者が集めたものである。彼らは説明しようとする人々の言葉も、内面生活もほとんど知らず、情報は単にその国を横

断することを得たものであり、誇示されない徳よりも、道徳的な矛盾に驚き、目撃した風変わりな部分を装飾し誇張するのが常であって、その起源を調べることは非常に稀である。この種の証拠を最も強く主張した前世紀のフランスのモラリストたちが歴史上の全ての著述家の中で最も奇妙な妄想の餌食でもあったことを忘れてはならない。自分が触れたことのないものは信じなかった使徒の真の弟子であると主張し、その容赦ない批判が人間の性質の最も神聖な感覚と伝統的信仰のすべての教義を委縮させる効果を持っていた、こうした断固たる懐疑論者たちは理想が夢ではなくなった一つの幸福な国を発見していた。その純粹で理性的な道徳が偏見と熱狂の雲を一掃し、ヨーロッパの無知と迷信の上に、ほとんどまばゆいばかりの輝きをもって輝いているある人々を彼らは指し示すことができたのである。シナとシナ人が彼らの心の前に現れたときにヴォルテール（*1694—1778）は嘲ることを忘れ、エルヴェシウスは熱狂した。そして彼らはローマやキリスト教の徳が実現できなかった行動原理を実現しているのはこの半野蛮の民族である、とするのが常だった。

しかしこうした考察をさておき、こうした論者たちが頼っている未開人の生活の描写を信用できるものと仮定しても、そのためにこれらを持ち出した論点を彼らは証明することはできない。私が弁護しているモラリストたちは、私たちは自分たちの性質の高次の部分と低次の部分とを区別する生得的な力を持っている、と主張している。しかし心の目は身体の目と同じように閉ざされることがある。道徳的、理性的な能力は同じように休眠状態になってしまうことがある。人々が完全に感

覚を満足させることに没頭するなら必ずそうなるだろう。人間は植物に似ていて、生得の力を完全に發揮するためには好ましい土壌が必要である。理性的な力や道徳的な力がそこにあり、行動するよう刺激されたなら、それぞれが備えた機能を發揮するだろう。もし、理性を本能と区別する日進月歩のエネルギーや、徳を打ち立てようとする道徳的願望をまったく持たない未開人がいることが証明されたとしても、彼らの本性に理性や道徳の能力がないことの証明にはならないだろう。もし猿が知らず、感じず、行わないだろうことを、知らず、感じず、行わない野蛮な段階が人間にあることを示せたとしても、彼を獣のレベルにまで引き下げるにはそれだけでは不十分だろう。両者の間にはまだ大きな隔たりがある――一方は發達のための知的能力を持っており、他方は持っていないのである。好ましい環境下において野蛮人は理性的、進歩的、かつ道徳的な人間になる。しかし、このような変化はどのような環境下においても猿には起こりえない。ドングリの中から檜の葉を探し出すのは石の中で探し出すのと同様に難しいことである。しかしドングリは檜の木に変わることがあるが、石は常に石であり続ける。

ここまでのページにおいて、二つの大きな学派の性質を十分はつきりと示すことができただろうと私は信じている――すべての人間は幸福を欲するという原初的な真理から出発し、この事実からすべての倫理学を展開しようとする学派と、私たちの道徳体系を、私たちの本質のある部分が他の部分より優れているという直感的な認識の中にまでさかのぼろうとする学派である。私たちの道徳的

概念の起源に関するこの相違が、私たちの観念がもつばら感覚に由来するのか、それとも部分的には心そのものに由来するのか、という非常に広大な形而上学的問題の一部であることは明らかである。古代における後者の理論は主にプラトン派の前世の教義に代表される。この教義は、心には生後の経験では説明できない特定の概念や観念を自らの奥底から引き出す力がある、したがってそれは前世で獲得されたに違いないという確信に基づいている。十七世紀にはこれは生得的観念の学説という形をとった。この理論はチャーベリーのハーバート卿（*1583—1648）によって発表されたが、ロックに批判されてほとんど消滅してしまった。しかし人間には外から受け入れた考えとは別のある種的能力があつて、つぼみが特定の花へと必ず展開するように、それ自身の展開によつてある種の観念を持つことができるだけではなく、必ずそれに到達するに違いないという理論は、依然として思索の世界において際立った地位を占めている。そしてその可能性は動物における本能の範囲と有効性に関する最近の観察によつて大きく強化されている。ロック自身がこの区別について混乱した認識を持つていたことが彼のエッセイの中の数行から伺えるが、この区別は以前の論者には全く知られていないものだった。またロックの哲学が発表された後、この区別はシャフツベリーやライプニッツ（*1646—1716）によつて明確に提示された。そして、カントが私たちの認識における形式と内容の区別、プリアリに受け入れる観念とポステリアリに受け入れる観念との区別を確立するずっと前に、バークリー（*ジョージ、1635—1753）はそれに偶然気づいていたのである。この観念の源泉の有無が一方の十八世紀のイギリスやフランスの帰納的哲

学と、もう一方のドイツやスコットランドの哲学、十九世紀のフランスの折衷主義との対立の基礎になつてゐる。前者の学派の傾向は、人間の心の活動的な力をできる限り限定し、外的環境の主権をできる限り強調しようとするものである。後者の学派は、特に人間の本性の直観的側面に注目する。そして理性の確かな直観、人間のすべての推論において前提とされ、感覚に分解することができない特定のカテゴリー、すなわち原初の觀念の存在を主張してゐる。先の学派の自慢は、その徹底的な分析によつていかなる心的現象も未解決のままにしておかないことである。そしてその魅力はそれが極端な単純さによつて達成しうることである。後の学派は、能力すなわち原初の原理の数を増やし、主に私たちの理解の性質に注意を集中し、私たちの意志と知性の両方の主導権を非常に強く主張するのである。

感覚に基づく哲学と、有用性に基づく道德のこのような関係は古い時代にも見ることができ。アリストテレスは徳の有用性を強調したことで古代の人々の間で際立つてゐた。そしてロッキ派の標語となつた有名な決まり文句（* * * いかなる人物の知識も、彼の経験を超えるものではない）はアリストテレスの著作から採られたものである。ロッキ自身は生得的な道德感覚の学説に対する反論に特別な研究を捧げた。それを未開人の間に存在する不道德な習慣の一覽表によつて覆そうとしたのである。また彼が道德の学説において時折見せたためらいは、内省を觀念の源泉と認めたことが彼の形而上学に投げかけた曖昧さと符合しないわけではない。彼の敵対者ライプニッツが快樂を

道徳的な行為の目的としていたとしても、それは他人の幸福を期待することから生まれる洗練された快樂に過ぎなかった。しかしコンデイヤックとその追隨者たちが、内省をロックが置いた位置から取り除き、感覺の哲学をその最もシンプルな表現に制限し、スコットランドとドイツの論者たちがその反対学派の原理を精緻化したとき、両者の道徳的傾向は疑いなく明らかになったのである。感覺の哲学には常に利益の道徳が伴い、觀念論的哲学には常に道徳的能力の存在の主張が伴った。そして私たちの觀念の起源に関する一般的な理論の影響を受けた全ての力は、倫理學の理論にそれ相應の影響を与えた。

ベーコン（*フランシス、1561—1626）をたちまち最高の代表者とすると同時に主要な行為者の一人とした現代思想の大きな動きは、主にソクラテスの天才によってもたらされた古代思想の動きと著しい類似性を示し、同時に著しい対照をなしていると言われていることは正しい。ソクラテスは実用の名のもとに古代の知性を、長い間没頭していた空想的宇宙起源論の研究から、人間の道徳的性質の研究へと向かわせたのである。ベーコンも同じく実用の名のもとに近代の知性を、スコラ學者たちの無益な形而上學的思索から自然科学へ転換させようと努力した。新しく発見された研究手段、彼がとった健全な手段、そして素晴らしい知性集団が、この自然科学に速やかにかつてなかったほどの推進力を与えたのである。この運動は、おそらくガッセンデイ（*ピエール、1592—1655）やロックの直接的な教え以上に、近代諸国における感覺の哲学の台頭に間接的

に影響を与えたのだろう。そしてそれは古代と現代の歴史の最も重要な相違点のいくつかと関連している。古代人の間では人間の心は、主としてその法則が永久に揺れ動くと思われる哲学的な思索に向けられていた。一方近代人の間でそれは、むしろその法則が永久に進歩し続ける自然科学や発明に向かう傾向がある。古代人の間では国力、そしてほとんどの場合は国の独立さえも高い知的または心的（*moral、道徳的）資質の絶え間ないエネルギーを意味していた。国民のヒロイズムや精神が衰えたとき、文明にしばしば伴う、氣力を弱める哲学や倦怠が訪れたとき、たちまち体系の全体が揺れ動き、王権は別の国家に移り、同じ歴史が別の場所で再現されるのである。ある偉大な国は確かに超絶的な美しさを持つ芸術や文学の作品、心がそのレベルに達したときにのみ役立つ哲学、向上心のある人々のヒロイズムを刺激するような先例、時には破滅への道を阻むような警告を後継者に遺した。しかし、これらはすべて心を通してのみ作用するものだった。一方、現代では宗教的な力を除けば文明人の優位性の主な原因は、いったん発見されれば決して消え去ることのない発明の中に見出される。そしてその効果は結果的に心的生活の高下からは大きく切り離されたものとなる。古代において社会の正常な発展を最も妨げる、あるいは加速させる原因は偉大な人物の出現だったが、近代では偉大な発明の出現だった。印刷は過去の知的業績を保証し、将来の進歩を確実に保証するものである。火薬と軍用機械は野蛮人の勝利を不可能なものとした。蒸気機関は各国民を最も緊密な絆で結んだ。無数の機械仕掛けは私たちの文明のあらゆる発展を彩ってきた産業的要素に決定的な優位を与えてきた。結果として心的動機の持続的なエネルギーよりも、発明

(＊独創)的な技術の勝利が近代社会の主な特色をはるかに際立たせることになった。

今や自分の心と歴史の流れを注意深く考える人々には、自然科学の研究、発明的技術、産業的事業という三つの事柄は、ある国で一つの傾向が長く続けば、他も自然に続いていくような形で結びついていることがはっきり分かるだろう。この関係は部分的に原因と結果の関係であって、これらのいずれかの分野での成功は他の分野での成功を容易にする。自然の法則の知識は最も重要な発明の多くの基礎であり、それ自体が研究手段の助けを借りて獲得されるものである。そして産業は明らかに両者の恩恵を受けている。しかしこうした関係以外にも一致したつながりがある。これらの三つの型(＊cast)は思考の同じ特色や習慣によって発達して来たものである。これらはすべて、理論的思考に対して実践的思考、演繹的思考に対して帰納的すなわち経験的思考、空想的や野心的であることに対して慎重さと堅実さ、自然に観念に留まる心に対して自然に物質へと向かう心の傾向、と一般的に呼ばれるものを示している。古代人の間では、すべての自然現象は神の気まぐれな支配によるものであるという信仰が生み出した(＊Project GutenbergではProducedが抜けている)自然科学に対する嫌悪感と、奴隷制度が生み出した産業的事業に対する嫌悪感が共に働いて哲学的傾向を助長した。しかし現代人の間では自然科学と産業的生活の習慣は絶えず互いに影響し合っている。

現代の知的傾向はそれがもたらす物質的繁栄と、それが確保する絶え間ない進歩の両方において古代のそれよりもはるかに優れていることに疑問の余地はないだろう。しかしその一方で、この優位は品位や人格の気高さを犠牲にして贖われたものであることも、同様に疑いない事実であろう。精神的、道徳的資質の育成が第一の目標とされ、心とその利益が感覚（*sense*）的なものから最も遠ざけられたときに、偉大な人物が最も頻繁に現れ、ヒロイズムの水準が最も高くなるのである。この場合にも、もう一つの場合と同様に、一致の法則が最高に当てはまる。物質の特性に最も集中している心はすべての観念を感覚から導き出す傾向がある。一方、自然に心自体の働きに留まっている心は観念的哲学に傾く。そして広く行われている道徳の体系はこの区別に大きく依存しているのである。

次に私たちは倫理に関する限り、二つの偉大な道徳学派がもたらす対立の実際の重要性は、両者を隔てる知的な深淵から推測されるより小さいものであるということを指摘できるだろう。モラリストは社会の空気の中で成長し、他の人々に共通する全ての感覚を経験している。彼らが道徳の起源についてどのような理論を展開しようと、彼らは共通して世間一般の道徳原理を正しいと認め、これらの原理が自分たちの体系によって説明でき―それがいつも成功するとは限らないことを私は示そうとしたが―正当化できることを証明しようと努力する。両学派の大きな違いは彼らが説く徳目の違いではなく、それぞれの徳に割り当てる重要性の度合いや、提示し奨励する心の型の違いな

のである。アダム・スミスが述べたように、ストア派のような自制心を卓越性の理想とする体系は特に英雄的資質に有利であり、ハッチソンのような徳を博愛に分解する体系は愛情豊かな資質に、功利的体系は産業的な徳に有利である。これら三つの道徳的卓越性の形のいずれかが特に顕著な社会は、自然にそれに一致する倫理学の理論の方向へ向かう傾向を持っている。しかし一方、この理論は一度形成されたなら、それが誘発した道徳的傾向に作用し、それを強化する。エピクロス派とストア派はそれぞれ自分たちに有利な偉大な歴史的事実を主張することができる。ギリシャの他のすべての学派がその創始者の教えを修正したり放棄したりしたとき、アテネのエピクロスの弟子たちは受け継いだ信念を汚さず、変えずに守ったのである。一方、ローマ帝国ではほとんどすべての偉大な人物、自由特権（*以下 liberty をこう訳する。free、freedom を自由と訳する。）のためのほとんどすべての努力はストア派から生まれ、エピクロス主義は常に腐敗と専制と一体だった。直観学派は明確で単純な外的基準を持たないためしばしば迷信や神秘主義と同化し、幻想的で非理性的で非実用的なものになりやすいことが知られている。一方利益を重視し、功利主義的な体系に絶えず打算を介入させることは理想を抑圧し、性格を卑劣で非英雄的なものにする傾向がある。前者は道徳に主導権を与えて人生の格調と水準を高める。後者は周囲の環境が性格に及ぼす影響を明らかにし、最も重要な実践的改革をもたらす。こうしてそれぞれの学派はある意味で互いの学派を矯正し、補完するものであることが証明されている。それぞれが極端な結果に陥ったときには、害悪が生じて敵の再登場を招くのである。

ここまで、人が自分の道徳的感覚を調査し、分類するための理論の性質と傾向についてある程度長く考察した。次にこれらの感覚が何ゆえに発展するのかという過程、言い換えれば、社会に自らの道徳的水準を高めさせ、どのような種類の徳を好むかを決めさせる原因についての考察に移ろう。この問題に関する私の考察はやや雑多な性格を持つことになる。しかしそれらはすべて、道徳の歴史を構成する変化の本質を示し、後続の章に詳細に適用されうるいくつかの一般的原理を私たちに与えることになる、と私は信じている。

社会の組織が高度になればなるほど、英雄的な徳や禁欲的な徳を犠牲にして愛情豊かな徳や社会的な徳が培われるということは十分に明らかである。苦しみに勇敢に耐えることはおそらく人間の徳の最初の形であって、未開人の生活において自然の衝動に反して、その逆よりも高い、あるいは高貴であると信じて取られる行動方針の顕著な一例である。混乱した、無秩序で戦争の多い社会では偉大な勇氣と偉大な忍耐の行為は非常に頻繁なものであって、物事の行方を非常に大きく左右する。しかし共同体の組織化に比例してその発揮の場と、発揮されたときの影響は等しく制限を受ける。これに加えて文明の嗜好や習慣、快適さを促進し、苦痛を軽減するために考案された無数の発明は社会の流れをヒロイズムとはまったく別の方向に導き、人格を洗練し柔軟にはするものの、どこか骨抜きにしてしまうのである。再び、禁欲主義―この言葉は単に修道院制度だけでなく、高度

な聖性を培うために世間から離脱するあらゆる努力を含むこととする―は、いくぶん粗野で、その中では孤立が頻繁かつ容易な社会に自然に属するものである。人々が非常に緊密な協力関係で結ばれ、産業が非常に盛んになり、物質的な富と贅沢な享樂への衝動が強くなると、徳は主として、あるいはもっぱら社会の利益の観点から注視されるようになる。この傾向は立法による教育の力によってさらに強められ、道徳的特質を心に非常に深く刻みつける。しかし、それと同時に人々を道徳的特質を外的で功利的な基準のみによって評価することに慣れさせる。律法（*モーゼの十戒）の第一表（*神に対する義務、一条から四条）が第二表（*市民的義務、五条から十条）に道を譲るのである。善はそれ自身ゆえにではなく、目的のための手段として愛される。人々を高潔で博愛的にするために必要とされる徳はすべて社会にとって最高度に有益である。しかし、単に道徳的で愛情豊かな性格とは違って、聖人的、靈的な人格をつくる資質は、幸福を促進する直接的、一様、かつ明白な同様の傾向を持たないため、ほとんど評価されていない。動物的性質が最上のものであった未開人の暮らしの中には、こうした高い資質は見られない。非常に精巧な物質文明において、一般的な環境はそれを作り出すにもその真価を認めるにも好都合ではない。それは通常、中間的段階に位置していた。

一方、洗練された社会の自然な産物である一定の徳も存在する。あらゆる地域的、特殊な事情に関わらず、人々が野蛮あるいは半文明の状態から高度に組織化された状態に移行すれば、必然的に

合法的な復讐の範囲は消滅または縮小し、懲罰の権限は被害者から社会に任命された熱情のない法廷へと移り、勇ましい仕事から平和的な仕事への代替が進み、洗練された知的嗜好が入ってきて野蛮さが興を添えている娯楽に次第に取って代わり、すべての階級と国家の間のつながりが急速に増大し、また知的洗練によって想像力が強化される。この力を実感力と呼んでも良いだろう。この能力が主に私たちの道徳的性質と知的性質を結びつけているのである。私たちが苦しみを哀れむためには、それを実感しなければならぬ。そして私たちの同情の強さは通常、実感の生々しさに比例している。南米の最も恐ろしい大災害、地震、難破、戦闘は、私たちの目の前の一個人の際立った死よりも僅かな同情しか呼ばないだろう。目立った死刑囚に通常寄せられる並外れた同情、君主に集中する愛着や熱意、そして私たちの歴史判断の目に余る無定見の主な理由はここにあるはずである。マケドニア人が奴隷として売った30,000人のテバイ人、ティルスで磔にした2,000人の捕虜、ローマ人が殺して名声を得た1,100,000人の兵士よりも、アレクサンドロスやカエサルが見せたいくらかの寛大さの記憶の方に私たちの心は動かされる。歴史上の偉大な悲劇は曖昧さという薄いシートに包まれていて、私たちの心に鮮明なイメージを呼び起こすことはない。それらを生き生きと蘇らせることができるのは歴史家の非凡な才能による偉大な努力だけである。ほとんどの人々にとって、セントヘレナ島の捕虜が看守との口論で見せた苛立ち、彼の飽くなきエゴイズムが墓場へ追い立てた名もなき数千の人々よりも大きな力を持つ。私たちの性質の弱さはタイムール(*1336-1405、タイムール朝創始者)、バヤズイト(*1360-1403、

オスマン帝国皇帝)、チングスハンの剣の下で死んだ無数の人々の悲しみよりも、捕虜になったどこかの王女の涙や、歴史の流れに翻弄された、取るに足りない伝記の中の出来事に心を動かされることである。

私たちの博愛的感覚がこのように想像力の奴隷であるとすれば、また実感することが同情するための必要条件であるとすれば、この実感する能力の範囲と力を増大させるあらゆる影響が愛情豊かな資質にとって好ましいことは明らかである。そして、そのために最も大きな効果を持っているのは教育であることも同様に明らかである。無学な人間にとって、自分とは無縁のあらゆる階級、国家、思考方法、存在を実感するのは不可能なことである。一方、すべての知識の増大は洞察力の増強をもたらし、従って共感を増強する。しかし知識の追加はこの変化の最も小さな部分に過ぎない。実感する力そのものが強化されるのである。彼が読むあらゆる書物、取り組むあらゆる知的課題は、彼の直接的な感覚を超え、その実感を新しい領域へと拡大し、他人の思考、感覚、性格を想像によって野蛮人には想像もつかないほど鮮やかに再現することを彼に習慣づける。それゆえ洗練された精神には最もデリケートな感情の濃淡を識別し、それに適応できる機転が大いに生まれる。またそれゆえその文明度に比例して、残酷さを実感し、それに反発する敏感な慈悲心が人に生まれるのである。

しかし、ここで重要な区別をしなければならない。残酷という名の下には、その原因も、その結果の大部分もまったく異なる二種類の悪が存在する。冷淡さと残忍さから生じるものと、執念深さから生じるものである。前者は主に硬質で、鈍重で、やや不活発な性格に属し、強国や征服的な国、温帯に最も多く現れ、非常に大きな割合で実能力の欠如に起因している。後者はむしろ女性的な属性であり、抑圧され苦しんでいる社会、情熱的な性格、熱帯によく見られる。大きな執念はしばしば大きな哀れみ（*tenderness）と結びつき、大きな冷淡さは大きな寛大さと結びつくが、執念深い性格が寛大であることは稀であり、残忍な性格が哀れみ深いことはなおさら稀である。古代ローマ人は冷淡さと寛大さが見事に融合していたが、不思議なことに現代のイタリア人の性格は明らかに反対の組み合わせに傾いている。思うに、どちらの残酷さも文明が進むにつれて縮小していくが、その理由と程度は異なる。冷酷な残忍さは洗練された想像力の前に消え去る。執念深い残酷さは私的な復讐に代わって刑罰制度が導入されることによって縮小する。

苦しみの実感を容易にし、それゆえに同情を生み出す同じ知的洗練は、性格と意見の実感をも容易にし、それゆえ慈悲を生み出すのである。世の中の無慈悲な判断の大部分は想像力の欠如に起因するものではないだろうか。宗派間の強い憎しみの主な原因は、大抵の人々が敵対する体系をその信奉者の視点から見ることができず、彼らが抱く熱意に加われないことである。この知的共感力は一般的に大きく洗練された精神に伴うものであり、その存在はいたる所で論争に伴う怨恨を和らげ

る。私たちの犯罪者に対する評価は往々にして過剰に厳しくなりがちであるが、それは想像力が心的状態よりも行動の方をより容易に実感できるからである。泥酔の突発や暴力行為を想像することは誰にでもできる。しかしそのことの素因となった生まれつきの性質を、生来非常に真面目だったり非常に穏やかだったりする人々はほとんど想像することができない。有徳の人たちの中で育った善良な人物が恐ろしい犯罪の記事を読んだなら、彼はその環境を思い描くことに想像力を使い果たし「もし私がそのような行いをしたら、どの程度の罪になるのだろうか」と自問することで犯罪者の罪を推し量るのである。経験したことのない情熱の力を正しく理解し、自分たちの性格とは根本的に異なるタイプを想像し、とりわけ悪質な教育が必然的に生み出す道徳的気質の無法さや鈍感さを正しく評価するには想像の力が必要である。しかし、これは人間の才能の中で最も稀なものである。自分自身の行いを判断するときさえ、この想像力の弱さが露呈することがある。老人は若い頃の愚かな行いを思い出したとしても、そのときの感情を実感する力を失っているため、自身の過去に対して非常に不当な態度をとることがある。強力な悪の情熱の持ち主が生来徳の高い人物に心を開くことを難しくしているのは、後者の徳というよりも、後者の無知である。それは自ら感じたことのない情熱の力を後者が理解できるはずがない、という確信である。清き全き神による裁きという考えを心に許容させるのは、清さと全知という属性の結合だけである。なぜなら完全な知識には完全な実感の力が含まれるからである。私たちの分析が進み、実感する力が養われるほど、私たちは環境が性格と意見の双方に与える影響や、道德のばらつきに対する私たちの最初の見立ての過

大きを感じられるようになる。強い反感はこうして徐々に和らいでいく。人は慈愛によって多くを得るが、熱意によって何かを失う。

私たちはこの考え方をさらに一步先に進めることができるのではないだろうか。私たちの感情を支配する想像力は初期の弱い段階では、擬人化された具体的な形を除いて、観念を把握する力はほとんどない。そして抽象化する力は、知的進歩の最も良い尺度の一つである。文字の始まりは象形文字や象徴的な絵であり、信仰の始まりはフェティシズムや偶像崇拜であり、雄弁の始まりは絵画的、感覚的、比喩的なものであり、哲学の始まりは神話である。最初の段階において想像力は個人に集中し、抽象化の努力によって次第に制度、すなわちはつきりと定義された組織へと向上していく。道徳的、知的原理を把握できるようになるのは非常に高度な段階に達してからのことである。それゆえに忠誠心、愛国心、国際的大義はそれぞれ精神的進歩の三つの連続的な段階にふさわしい道徳的熱意の三つの形なのである。そして、これらは宗教史の三つの段階の中心に位置する偶像崇拜、教会感覚、精神修養と一定の類似性がある、と私は考えている。

この種の一般化がおおよそその真実以上のものを示すことができないことは、読者も容易に理解されるだろう。私たちの道徳的進歩の法則に関する知識は気候の法則に関する知識に似ている。私たちは赤道に近づいたり遠ざかったりするとき予想される気温について、一般的な法則を定める。

そして経験はそれが大体正しいことを示している。しかし高原、山脈、あるいは沿岸部で計算が多少狂うのはよくあることである。このように道徳的变化の歴史においても、宗教的または政治的制度、地理的条件、伝統、反感、親近感などの無数の個別の作用が一定の妨害、加速、または偏向の力を及ぼして、通常の発展をいくらか修飾するのである。私は単に道徳の自然史というものがあることを主張しているだけである。それは明確で規則的な秩序であって、私たちの道徳的感覚はそれに沿って展開してゆくことである。言い換えれば、未開の人々の環境や精神状態から自然に生まれる一定の徳のグループがあり、そして文明の正常かつ相応しい産物である別の徳のグループがある、ということである。未開人の徳は文明人にも徳と認識されているが、同じ完全さで発揮されるわけでもなく、義務の尺度の中で同じ地位を与えられているわけでもない。これらの道徳的变化のうち最も明白なものは、積極的および消極的ヒロイズムのゆるやかな退廃、同情と慈愛の高まり、忠誠心から愛国心と自由特権への熱意の移行である。

文明とともに高まる徳のもう一つの形は真実性（*veracity*）である。この言葉は単に直接的な虚偽を避ける、という以上のものを含んでいると考えなければならない。人は通常の交際の中で意図的に虚偽を口にするときだけでなく、事件の説明の中で重要な事実を伏せたり、隠そうとしたり、その根拠を良心に諮ることなく断固たる主張をするとき、真実に背いていることを容易に理解できる。おそらく真実性の義務の最も初期の形は誓いの遵守であって、これは初期の宗教に

おいて大変重要な位置を占めていた。その後の文明の進歩に伴って真実性の三つの形が相次いで説かれるようになった。それぞれを産業的、政治的、哲学的真実性と呼んで良いだろう。一つ目の真実性とは私たちが正直な人というときの一般的な意味、つまり発言の正確さや約束への忠実さのことである。ときに軍人精神に伴う強い名誉意識に支えられている場合もあるが、この真実性は通常、産業国家に特有の徳である。なぜなら産業界は欺瞞の誘惑に満ちているが、相互の信頼、そのための厳密な真実性はこうした職業において超越的に重要なものであって、人々の心中でそれまでになかった価値を獲得するからである。真実性は道徳的タイプの中で第一の徳となる。そしてそれを欠く人格はいかなる種類の承認も得られない。真実性は善人と悪人を見分ける他のいかなるテストよりも重要なものとなる。したがって私たちは、商業的詐欺が非常に多い場所でも、理屈の上では真実性が最高の徳であると本心から認められていること、そして道徳的卓越を目指すすべての人が培おうとする最高の徳の一つであることを観察できる。おそらくこのことが、イタリア、スペイン、アイルランドなどの産業精神に欠ける国民と比べたときの、強い産業精神に貫かれた国民の主な道徳的優位性になっているのだろう。前者の国民の通常の特徴は、性格のある種のだらしなさや移り気、誇張の傾向、小さなことでの不誠実さ、約束を守らないことである。そして、このことから産業的生活の習慣によって教育された英国人は容易に、彼らには道徳的原理がまったくないと推測してしまう。しかし、より大きな哲学とより深い経験はその誤りを払拭する。産業精神が浸透していない国では、それが浸透している国のように、人々が徳の一覧表の中で真実性に卓越した地位を与えて

いないことに気づくのである。それは道徳の基礎と見なされていない。そして――産業社会ではほとんどありえないことだが――それらの国々では日頃小さなことについて不正直で不誠実ではあっても、深い宗教的感覚に動かされ、最も困難で最も痛みを伴う徳のいくつかを一貫して実践することによってその人生に美を添えている人を見つけることが可能であり、また一般的でさえある。神に対する信頼、極度の貧困と苦しみの中の満足と忍従、信者仲間を助けるための最も純粋な優しさと最も誠実な心構え、どんな迫害や賄賂にも揺るがない自分の宗教的見解への固執、英雄的、超越的、長期的自己犠牲の力が、常習的に嘘をつき詐欺をはたらく人々の中に見られる国があるのである。

産業的な真実性の促進はおそらく製造業の発展が道徳に与える唯一の好ましい影響である。しかし、この徳が政治的な真実性、言い換えれば論争のある問題においてすべての意見、議論、事実が完全かつ公正に述べられることを望む公平無私の問題に一致して成長することなく、非常に完全な形で存在することはあり得る。一般に「フェアプレー」と呼ばれるこの習慣は特に自由な共同体の特徴であり、政治生活によって最も顕著に育まれるものである。討論の実践はある事件において一方を抑圧することは不当であるという感覚を生み出し、それは次第に知的生活のあらゆる形を通じて拡散する。そして国民性の本質的な要素となる。しかしこうしたことよりもさらに高い知的な徳の形がある。拡大した知的文化、特に哲学的な研究によって人々はついに、それ自体のために真実を追求し、党派精神、偏見、情熱から自らを解放すること、そして真実を愛するを通じて論

争における公正な精神を養うことを義務と考えるようになる。彼らは派閥人ではなく哲学者の知性を、党派人ではなく政治家の知性を目指すのである。

三つの真実の精神のうち、後の二つは高度に文明化された社会のみに属するもの、と言えるかもしれない。特に最後のものは洗練された心でなければ到底到達できないものであって、人間の心に咲く最も新しい徳の花の一つである。しかし政治的、哲学的な真実性の成長は神学者たちの妨害によつて不自然に遅らせられてきた。彼らは何世紀にもわたつて自分たちの見解に異を唱えるすべての著作物を弾圧することを政策の主目的とし、この力が使えなくなると心と判断力の公平性をあらゆる方法で挫き、それを罪の概念と関連づけるようになったのである。

産業的生活の道徳的影響についてはすでに述べたが、ここで二つだけ付け加えておこう。第一に産業精神は―儉約家と投機家という―まったく異なるタイプの性格を生み出すということである。どちらのタイプも物質的な快適さに対する強い価値観と強い欲求から生まれるが、その徳と悪徳の両方において大いに異なっているのである。一方のタイプの主な特徴は慎重さであり、他方のそれは冒険心である。儉約は人生の最良の調整装置の一つである。それは秩序、節制、節度、自制、たゆまぬ勤勉さ、その他、立派で尊敬すべきという言葉に相応しいあらゆる徳を生み出す。しかし、それは同時に熱意や生き生きとした共感を抱くことができない、しかも面の不寛容な性格をつくる

傾向も持っている。一方、投機的な性格は落ち着きがなく、熱情的で、不確実であり、大きな、目立ちやすい悪徳に陥りやすく、決まりきった仕事には耐えられない。しかし強い感覚、大いなる寛容さや決断には決して不向きではない。産業精神がこの二つのうちどちらの形をとるかはその地域の環境にかかっている。儉約は主に商業の大きな流れの外に置かれた人々や、富がゆっくりとした地道な産業によってしか得られない立場の人々の間で盛んである。一方、投機的性格は事業と富の大きな中心地において最も一般的である。

第二に産業的な習慣は道徳のタイプの中で、先見力に新しい地位を与えると見えるだろう。神学的な信仰の初期段階では、人は自分に起こるあらゆる出来事を神の特別な命令の結果と考え、食料や衣服の問題を神意に委ねて、将来のために何の予防措置もとらないことを信仰の試練とし、義務の一つの形と見なすことがある。他方産業文明では、分別ある先見力は単に正当であるだけでなく、義務、それもきわめて高度の義務とみなされる。産業型の善き男性は可能な限り家族を守るようになるまで結婚しないことを義務と考える。もし子供がいれば単に自分の収入と当面の必要との関係によってのみならず、息子の教育、娘の持参金、家族の各メンバーの将来の必要とキャリアを常に考慮して、出費を調節するのである。常に先見力を持つことが彼の全人生を導く原理である。民衆の文明度を測るのに最も好都合な事柄は、文明の民衆への浸透度である。古い教義は事実上消費している。そしてそれは、私たちのいかなる努力も先見力も回避できないことは諦めて受け入れ

なければならぬ、という意味にしか解釈されていない。

このような変化は文明が進むにつれて、人類の敬虔な精神を減退させるいくつかの影響のひとつに過ぎない。功利主義的体系の中で敬虔さはせいぜい非常に疑わしい地位しか占めていない。なぜなら宗教的迷信や政治的隷属という形でこの敬虔さから芽生えた大きな害悪が、幸福よりも不幸を生んでいないかということは極めて疑わしいからである。しかしそれが生み出す幸福や進歩によって評価される、その地位にいかにも疑問があろうとも、敬虔な精神に欠けている人格が最高度の卓越に到達することはありえない、というのはほとんどの人が意識していることだろう。それは道徳的な善のあらゆる形の中で、美しいという形容詞が最も力強く使われるものである。しかし、私の間違っていなければ、文明の進展はその成長にとって全体として不利なものである。というのも敬虔さは常に依存しているという感覚からものだからである。それは自分に降りかかるすべての出来事が直接かつ特別に定められたものであり、それゆえすべての出来事は道徳的な重要性を持っている、と人々が信じている宗教的思想環境において育まれるものである。あらゆる前兆的な自然現象が神の直接的な介入の結果であると考えられ、その結果、謙虚さと畏怖の念が呼び起こされるような科学知識しかない状態において、それは培われる。政治生活の場面において君主に対する忠誠心や畏敬の念が支配的な情熱であるとき、王室から枝分かれした貴族階級がすべての村に恭順と従属の習慣を広め、革命的精神、民主的精神、懐疑的精神がどれも存在しないとき、それは助長される。全

ての信仰や環境の大きな変化には感情の変化が伴う。自由特権の自己主張、民主主義による社会の平等化、批判の解剖刀、人々の関係を単純な契約へと縮小する経済革命、人口の集中、多くの古来の絆を断ち切る移動手段、これらはすべて伝統の力が壊れる前、信仰の純潔が汚される前に存在していた徳のタイプとは相容れないものである。博愛、真つすぐさ、冒険心、知的誠実、自由への愛、迷信への嫌悪が私たちの周りで育っている。しかし私たちは自分を信じず、他者を信じる、単純な、慎み深い、敬虔な、そればかりかイクシーオン（*ケンタウロス族の祖）が雲に愛情を注いだように、自らの錯覚そのものを私たちの性質の中の何らかの最も純粹な徳の源としていた、過去の最も美しい性格を無駄に探し回っているのである。自然の莊嚴な秩序に思いを馳せたとき、畏敬の念を抱く人は少なくない。しかし人類の大多数にとっては、それを支配する不変の法則の発見が現象からその道德的意義を奪ってこと、敬虔な感覚が育まれてきた社会的、政治的領域のほとんどすべてが過ぎ去ってしまったことは、嘆かわしいが疑いようのない事実である。その最も美しい表現はアメリカ人や近代フランス人のような、時代の風潮に最も完全に身を投じた国民には見られない。むしろシユタイアーマルク（*オーストリア南部）やチロルのような人里離れた地方にある。その美術的表現は現代の才能の作品ではなく、中世の大聖堂の中に見出される。大聖堂は時間にとともに円熟したが、損なわれたわけではなく、過去数世紀を経てなお、その不滅の美しさで今も私たちに熟視しているのである。人間の歴史の他のあらゆる時代と同様に、迷信的な時代にはその独特の徳がある。それは進歩の新しい段階に到達する前に必ず衰退しなければならないものである。

男女の關係における徳と悪徳は、そのテーマが明らかにデリケートなものであり、その自然史が特殊な理由から極めて曖昧にされているため、一般論として扱うことは困難である。私たちがここまで見てきた道徳的な進化において、最も強力なのは通常の影響力であり、環境による混乱と修飾の重要度はまったく補助的なものである。愛情豊かな徳の拡大、ヒロイズムと忠誠心の衰退、産業習慣の成長は、ほとんどすべての文明で必ず起こる変化から生じるものである。したがってこの動きの大まかな特徴はほとんどすべての国において実質的に同じものである。しかしながら官能の歴史においては、奴隸制度、宗教的教義、結婚に関わる法律などの特別な原因が最も強力に作用してきた。キリスト教がこの分野に及ぼした大きな変化については後で検討することにした。本章ではこの悪徳の性質と、文明のさまざまな段階がその経過に及ぼす影響についての二、三のごく大まかな論評に留めたいと思う。

現代の論者の中で人気のある、私生児の統計によって国家の不道徳性を判断する方法は最も大きな誤謬である、と私は考えている。単なる売春を比較対象から除外するという、この方法の明らかな欠陥とは別に、この方法は多数の私生児が情欲の激しさとはまったく別の原因によって生じているという事実を完全に無視しているからである。たとえばイングランドの多くの田舎では結婚の儀式には過去の不品行を消し去る遡及的な徳があるという考えが広まっている。（*不品行の罪は結婚

式で拭われるのだから、その権利はなるべく留保しておくのが得策である。大陸の一部の人々が法的または宗教的儀式的拘束を受けずに永久的な関係を持つという習慣も同じである。このような事実がいかに深く非難され嘆かれようと、このような事実はそれが最も目立つ国々で情欲が暴走していることを最も顕著に示している、と推論するのは明らかに不合理だろう。私生児の数で見た場合、長い間道徳的に最低の地位にあったスウェーデンについては、結婚に関する法的困難が主な原因だったようである。実際の激しい情欲の表現においてさえ、統計にはまったく表れない違いがある。フランス人の性格の最も忌まわしい特徴である粗雑で皮肉で仰々しい官能、スペイン人やイタリア人の夢見がちで物憂げで審美的な官能、どこかの北の国の密かで遠慮勝ちな官能は、すべて同じ悪徳ではあるが、大きく異なる感覚であり、大きく異なる影響を一般的な気質に及ぼしているのである。

氣候が公衆道徳に大きな影響を与え、情熱を刺激したり和らげたりすることは間違いないだろう。それに加えて屋内や屋外での生活の流行、美人のタイプの決定によって氣候は間接的に女性の地位、性格、嗜好に大きな影響を与えている。北方諸国では美の主流は形よりもむしろ色に依存している。それは主に顔色の新鮮さと優美さから成り、過酷な労働と絶え間ない日光への曝露によって必然的に毀損されてしまうものである。したがって大変貧しい人々の中に最高の完成型を見ることは稀である。しかし南方のタイプは本質的に民主的である。激しい太陽の光はその魅力を芳醇にし、成熟

させるだけである。その最も完璧な実例は宮殿でも掘っ立て小屋でも同様に見られる。そして、この美の拡散の影響は人々のマナーと道德の両方に見出すことができる。

このような徳の形は野蛮ではなくとも半文明的な人々において自然に最も完全に見られる。（*例えはイタリア人男性は見境なく女性を口説くと言われる）しかし非常に洗練された文明はその成長にあまり好都合ではないようである。官能は若者と古い国々の悪癖である。気だるいエピキュリアニズムは高度な知的、あるいは社会的文明を獲得したものの、政治的原因によってそのエネルギーを発揮する適切な場がない国々の通常の状態である。ある人々の巨万の富から生じる誘惑と、他の人々の贅沢や刺激的な快楽への熱狂的な憧れから生じる誘惑はすべての大きな町に存在していて、女性の徳にとって特に致命的なものである。そして文明の大衆的娯楽はすべて同じ方向に向かう傾向がある。野蛮人の最高の楽しみである荒っぽい戦闘は残酷性を生み出す。洗練された人々の演劇や芸術の趣味や社交の習慣は官能を生み出す。教育は多くの貧しい女性を、より高い身分の男性の友人にふさわしく、同じ身分の男性にはふさわしくないような洗練された段階へと引き上げる。産業活動は確かに自製の習慣の促進、特に軍人の放縦の抑制に良い影響を与える。しかし一方、結婚の延期を奨励することによって誘惑を大いに増大させる。そして共同体の間では個人の間よりも、道徳的な格差が自制心の差より誘惑の差に起因するところがはるかに大きい。人間の大きな集団では、誘惑がある程度増加すると常に悪徳も増加する。ただし必ずしも悪徳に比例して増加するとは

限らない。残念ながらその過剰な増加を抑制する手段の中で、自発的な節制が歴史的に及ぼした力は非常に小さい。決定的なものには肉体的、そして道徳的な害悪である。そしてこの二つは相反する重みを成しているため、不幸にも一方の減少が起こると他方が増加することが非常に多い。アイルランドの農民の間ではほぼ全国的に行われている早婚の習慣が可能にしたものは、女性の貞操の高い水準と、女性の名誉を貴ぶ激しく嫉妬深い感受性だけだった。その多くの欠点やいくつかの悪徳のために、アイルランドの貧しさは長い間ヨーロッパで傑出していたのである。実際、こうした結婚こそが国民の先見力のなさの最も顕著な証拠であって、産業の繁栄にとって最も致命的な障害の一つなのである。アイルランドの農民がより貞節でなかったなら、より裕福になっていたことだろう。今世紀この国土を荒廃させたあの恐ろしい飢饉（*1845—1849、ジャガイモの飢饉、人口6,000,000人中死者1000,000人）が、罪を犯さないことよりも生活費を蓄えることを重視する人々の上に起こっていたなら、リムリック（*アイルランド西部）やスキブリーン（*同最南部）の荒涼とした丘で文字通り餓死した多くの人々はまだ生きていたかもしれない。

しかしアイルランドの例は道徳的感覚の影響力が、それを生み出した事情を超えて作用する可能性のある顕著な例を示している。大陸の全ての国（*国教会誕生後のイングランドでは聖職者の結婚には問題がない）で折に触れて発生した独身の誓いの危険性を証明する道徳的スキャンダルが、アイルランドの歴史上の聖職者には完全に、そして私が思うに比類なく存在しなかったことは最も

特異な事実であろう。政府がプロテスタントであるため聖職者の安全を守る（*ために悪用される）特別な審問法がないこと、聖職者の教区民へのほとんど無限の影響力、また疑われる正当な理由が存在するならばアイルランド世論の激しい宗派心によってそれが確実に誇張されることから、この方面におけるアイルランドの司祭の疑いない清廉さはさらに注目し値する。この事実を説明するために気候に関する考察はまったく不十分である。しかしその主な原因は十分に明らかだと私は思う。情欲が芽生えた最初の段階で結婚するという習慣は、司祭たちの大部分の出身母体であるアイルランドの農民の間に、乱れた性的放縱の悪に対する極めて強い感覚を生み出しているのである。そしてそれは永遠の独身に拘束されている人々にさえも力を持っているのである。

先の考察から明らかのように、徳と悪徳の根本的な性質は不変である。しかし、社会が進歩するにつれて、異なる徳に相応なものとして理論上与えられる価値と、それらが実現される完全さの両方において永続的で、ある意味で秩序ある、必然的な変化が存在するのである。また、社会に道徳的な向上というものが存在しようとも、大規模なものには混じりけのない向上というものはほとんど存在しない、あるいは決して存在しない、ということが分かるだろう。私たちは失うものより多くのものを得ているのかもしれない。しかし、常に何かを失っているのである。文明の進歩とともに絶え間なく消えていく徳がある。そして最も下の段階にあるものでさえその特有の長所を持っている。善良な人間にとって暴君のくびきの下で苦悶する抑圧された国民の姿ほど哀れで恐ろしい光

景はない。しかし情熱的で無条件の自己犠牲と英雄的な勇氣、そして真の友愛の感情が、これほど壮大に發揮される状況は他にない。そして自由特権の勝利がこのような形の人類の道徳的なパフォーマンスを低下させるだけでなく、道徳的な能力を弱めることさえありそうである。戦争が恐ろしい悪であることは間違いない。しかしそれは平和な時代には枯れて朽ち果ててしまう大いなる徳の種まきである。ギャンブルのテーブルを囲むときでさえ、より熟練した愛好者の間では一種の道徳的神経、冷静に負けに耐え、欲望の力を制御する能力が育まれるのである。ただし、これが他の分野で等しく完璧に發揮されることはほとんどない。

現存する国家にはまだ非常に多様な文明があつて、空間を移動すれば過去の文明のほとんどすべての段階の生きた代表者と接触することになるため、ほとんど時間を移動するようなものである。しかし、知識の比類なき普及と単純化、移動手段のさらに驚くべき進歩、そして明らかにヨーロッパを広大な中央集権的、民主主義的國家の連合体へと変えつつある政治的、軍事的要因を前に、こうした相違は急速に失われつつある。主な変化は全体として有益であると信じる人々にとってさえ、この革命には憂慮すべきことがたくさんある。ヨーロッパの地図から間もなく姿を消すだろう小さな国々は、財政的繁栄、住民の物質的幸福、そして多くのケースで政治的自由特権、平和を愛すること、知的進歩においてほとんどの大帝國よりはるかに優れていることに加え、近代文明に極めて欠けている満足、安らぎ、過去への敬意といった精神の主な避難場所の一つとなっている。そして

その安全はいかなる時代においても最も曖昧さのない国際道徳の尺度である。修道院制度は肥大しすぎると害になる。しかし、それはあるタイプの性格に特に適した隠れ家を提供することで、間違はなく世界の幸福に寄与してきた。そしてあの執念深く近視眼的な革命はヨーロッパからこれを消滅させ、現代の行き過ぎた産業主義を正す最良の方法の一つを消し去ろうとしているのである。一人の国民が現存の進歩の最も進んだタイプに到達することは本人の利益になる。しかし、すべての国民が同じタイプに到達することが、たとえそれが最も進んだタイプであったとしても、社会全体の利益となるかどうかは極めて疑問である。完全な道徳的発達には非常に多様な環境の影響力が絶対に必要なのである。従って階級代表制の大きな政治的利点の一つは、ある階級が排他的な、あるいは圧倒的に優勢な力を持った場合に発揮するより、はるかに多様な才能と道徳的資質の両方を政治の世界にもたらすことである。また文明の程度が違う混成の帝国では異なる種類の卓越性が生まれて互いに反応し合、補完し合う。インドやオーストラリアの荒っぽい仕事の中から、イギリスになくてはならないタイプの人物が得られるのである。

私が今述べたことが、近年非常に多くの人々の関心を集めている、知的進歩と道徳的進歩の関係という大きな問題に何らかの光を当てるのに十分なものであることを望んでいる。人類の進歩の歴史はその注意をもつばら知的な要素だけに集中すべきである、なぜなら道徳の歴史などというものは存在せず、道徳は本質的に静止しており、この点では最も粗野な野蛮人も私たちと同じくらい

に進歩していたのだから、と主張されてきた。この見解に対して私は、道德の根本的要素と呼ばれるものは不変であるが、求められる水準には絶え間ない変化があり、特定の徳の相対的な価値にも変化があり、これらの変化は歴史全体の最も重要な分野の一つである、と主張してきた。このような変化は実際に起こっていて、世界において極めて大きな役割を果たしているが、それは知識の変化が生んだ道德の変化、すなわち知的原因による結果である、と主張している論者もいる。ここまで見えてきたように、この見解はいくらかの真実を含んでいるが、非常に限定的にしか受け入れられないものだろう。知的業績において最も優れていた個人や時代が道德的に最も優れていたわけではなく、高度な知的、物質的文明がしばしば多くの墮落と共存してきたことは最も明らかな事実の一つである。ある点において知的成長のための条件は道德的成長には不利である。大都市は常に進歩と啓蒙の中心であって一人が集まることは物質的、知的進歩の最も重要な原因の一つである。しかし大きな町は悪の種まき場である。そしてそれが何らかの特有の等価値の徳を開花させるかどうかは極めて疑問である。社会的な徳でさえ、人がより親密な関係で暮らしている小さな集団の中でこそ、より育まれるものだからである。道德的熱意の最も輝かしい爆発の多くは圧倒的な確信の力によるものである。しかしそれは間違いの可能性、矛盾する議論、環境の制限を鋭敏に察知することのできる非常に洗練された心には滅多に見られないものである。文明は全体として、悪を制するよりも犯罪を制することに成功してきた。文明はより優しい、慈善的、社会的な徳に好都合であり、また奴隷制がない場合には産業的な徳に非常に好都合であり、知的な徳の特別な養育者である。し

かし一般に、自己犠牲、熱意、尊敬、貞節を生み出すには等しく不都合である。

しかし文明によってもたらされる道徳的变化は、究極的には主に知的な要因に帰することができ。なぜなら知的な原因は文明的生活の全体構造の根底に横たわっているからである。ここまで見てきたように知的な要因は直接的に作用することもある。しかし、それらが生み出した生活習慣がそれらの代わりに新しい義務の概念を生み出す、という間接的な影響しか及ぼさないことの方が多いのである。人間の道徳はその持論よりもその実践によって支配されている。徳のタイプはまず環境によって形成される。そしてその後、人はそれを原型として理論を作り上げていく。例えばある国を軍事的にし、別の国を産業的にする地理的、またはその他の事情は、それぞれが実感する卓越性のタイプを生み出す。そして、それに対応するさまざまな徳の相対的重みに関する概念も他所で生み出されたものとは大きく異なるだろう。また二つの集団の知識の量が実質的に同等であったとしてもこのようなことは起こるだろう。

この問題について私のテーマの性質が必要とする限り十分に論じた。そこで歴史についての道徳的判断に非常に多く見られるいくつかの誤りを指摘し、そして道徳的タイプの性質から推測される、いくつかの重要な帰結についても明らかにするよう努めてこの章を終えようと思う。

政治的判断において、ほとんどの人の道徳的基準は自分自身の利益に関係する私的な問題よりはるかに低い、というのにはありがちなことである。私生活では最も細心な誠実さの模範である人物が、政治的な不正や最も悪質な暴力行為を正当化したり弁解したりするのは最もありふれたことである。そのようなことを是認したからといって、その人々の一般的な道徳感情までを厳しく論じるなら、私たちは完全な間違いを犯しているだろう。また奇妙な道徳的逆説によって、政治的犯罪が国民の徳と密接に結びついていることも稀ではない。従順で、穏やかで忠実な国民は、まさにこれらの資質のために専制的な政府の支配を受ける。しかしこの制御不能な権力が支配者たちに最も有害な影響を及ぼさないことはない。そして彼らの数々の略奪と侵略の行為は、歴史の中で彼らが代表している国民のものとされ、国民性は完全に誤解されてしまう。また徳と悪徳の両方において、世の中に顕著に現れる特定の種類のものがある一方で、少なくとも同等の影響力を持ちながら歴史の注目をほとんど浴びない種類のものもある。例えば宗派間の対立、恐ろしい迫害、進歩に対する盲目的な憎悪、あらゆる苛立たしい除斥や拘禁に対する狭量な支持、激しい階級的利己主義、知的、政治的迷信の長期にわたる頑固なまでの擁護、教会史の主な特徴である幼稚であるが気まぐれな、教義上の細かな違いや服装や燭台についての激しい論争ゆえに、非常に不当なことではあるが、人は聖職者のタイプを自然に知的にも道徳的にもほとんど最低ランクのタイプに位置づけるようになるだろう。実際のところ、こうしたものが大胆な浮き彫りになって歴史のページに並んでいる、聖職者の影響の表出なのである。教区における聖職者の文明的、教化的影響力、無知な人々を教育し、

過ちを犯した人々を導き、悲しむ人々を慰め、疫病の恐怖に立ち向かい、臨終の時に神聖な力を発する、単純で仰々しくなく、無私の熱意、その小さな領域で悪しき情熱を静め、慣習を和らげ、周囲を向上させ、清める無数の行い―これらすべては詳細に観察する人物にとつては非常に明白なことであるが、歴史の記録において同じように鮮やかに目立つことはなく、歴史家たちには絶えず忘れられているのである。ある団体の性格から、それを構成するメンバーの性格を論じることは常に危険である。しかし、聖職者たちの歴史はこの判断方法が最も誤っているケースである。なぜなら見かけ上これほどまでに特有の優れた点が無く、団体の行動においてこれほどまでに心的、道徳的欠陥がひどく目立つ階級は他にないからである。また国によって徳の動機は大きく異なっており、ある国の尺度を別の国に用いると深刻な誤解が生じる。例えばフランス人の最高の国民的徳は強い共感の力である。それは彼らのいくつかの最も美しい知的資質、社会的習慣、ヨーロッパにおける比類なき影響力の基盤になっている。国境を越えて自由のための偉大な闘いにこれほど不断に、鮮やかに共感している国民は他にないだろう。他のいかなる文学も外国の思想についてこれほど幅広く普遍的な才能を示し、これほど巧みに解説し、これほど寛大に評価することはないだろう。苦しんでいる国民を支援するための無私の戦争が、これほど多くの支持を得る国は他にないだろう。フランスの国家的な罪は数多く、また悲痛なものではあるが、フランスは多くを愛したがために多くを許されるだろう。（*ルカによる福音書7章47節）一方アングロサクソンの諸国民は時に強く、しかし瞬間的に熱狂することはあっても、常に並外れて狭量であり、鑑識眼がなく、共感もしない。

彼らの国民的な徳の大きな源泉は義務感であり、共感や好意、熱意や成功というあらゆる動機とは無関係に、正しいと信じる道を進む力である。他の国々は美しいとされる多くの資質や、偉大とされるいくつかの資質において彼らをはるかに凌駕している。アングロサクソン民族の長所は、他のどの民族よりもワシントン（*ジョージ、1731—1799）やハムデン（*ジョン、1594—1643、清教徒革命時の政治家）のような特徴を持つ人物を生み出したことである。彼らは確かに栄光には無頓着だったが、名誉を大変重んじていた。道徳的に清廉であるという最高の尊厳を人生を導く原理としていた。そして、最も困難な状況においても、野心の誘惑や情熱の嵐が彼らを自らの義務であると信じる道から髪の毛一筋も逸脱させないことを証明したのである。これはローマ人の一特にマルクス・アウレリウスの一特徴でもあった。奴隷制に反対するイギリスの疲れを知らない、仰々しくなく、そして栄光なき聖戦は、おそらく国家の歴史の中の三枚か四枚の完全に高潔なページの中の一枚と見なすことができるだろう。

なんらかの徳が他の徳の否定であるとは言えない。しかし、徳はタイプの統一性に不可欠な相性、すなわち親和性の原則に従って自然にグループ化されることは間違いない事実である。このように英雄的な徳、愛情豊かな徳、産業的な徳、知的な徳は別々のグループを作っている。あるグループの発展が他のグループの存在と実際に相容れないとまではいかなくとも、その傑出とは相容れない場合がある。激しい産業精神に活気づけられた社会で満足が、軍事的な社会で服従や危害に対する

寛容が、また信仰が善の本質とされている社会で知的な徳が主役になることはできない。それぞれのこうした環境は、特定の種類の徳の特別な領域なのである。ある道徳的タイプに特有の美しさは、それを構成する要素よりも、それらの要素が組み合わされる比率に依存する。ソクラテス、カトー、バイヤール（*ピエール・テレール、セニョール・ド、1476—1524、騎士）、フェネロン（*フランソワ、1651—1716、神学者）、そして聖フランチェスコ（*1182—1226）の性格はすべて美しいが彼らは属性において違っているのであって、シンプルに卓越性の度合いが違っているのではない。カトーに聖フランチェスコ特有の魅力を、あるいは聖フランチェスコにカトーのそれを分け与えようとするのは、アポロンとラオコーンの美を一つの像に、あるいは黄昏と真昼の太陽の美を一つの風景に統合しようとするのと同じく滑稽なことだろう。古代のストア派や現代のイギリス人からプライドを取り去ったなら、その最も高貴な徳の多くの基礎を破壊することになるだろう。しかし謙遜は修道士の道徳的資質のまさに原理と根本だった。女性にとって徳である資質で、男性にとって徳ではないものはない。しかし完璧な女性をつくる徳の傾向や秩序は、完全な男性をつくるにはまったく適さないだろう。この点で道徳は肉体のタイプと似ている。男の美しさは女の美しさではなく、子供の美しさは大人の美しさではなく、イタリア人女性の美しさはイギリス人女性の美しさではない。全てのタイプの顔つきが美しいものではないように、全ての性格が善いものではない。しかし、美の種類がたくさんあるように、善の種類もたくさんあるのである。

この最も重要な真理はやや異なる形で述べることができる。ある人が何かの徳に著しく欠けるときは、もちろんその人の人格が不完全であるということになるが、必ずしも他の点において道徳的で高潔ではないということにはならないのである。しかし通常は、基本的な(*rudimentary)徳と呼ぶべきものが一つある。そしてそれは道徳的な卓越性の第一の条件として、顕著な形で世の中に提示されるため、それをまったく無視する人物は道徳の修養にまったく無関心であると推論しても差し支えないだろう。基本的な徳は時代、国家、階級によって異なる。例えば古代の偉大な共和国で愛国心は基本的なものだった。なぜなら、それは最も明白で最も不可欠な義務として非常に熱心に培われたからである。私たちには、より個人的な徳と国益への完全な無関心とが共存しているかもしれない。修道院時代には、また騎士道時代にはいくらか違った形で、敬虔な服従の精神が基本的なものであり、あらゆる道徳的進歩の基礎となった。しかし今や私たちは道徳的エネルギーが他の方向に向かって培われたために、基本的な徳を持っていない善良な人物を頻繁に見かけるようになった。一般的な誠実さと正直さはすでに述べたように、産業社会では基本的な徳であるが、他の社会ではそうではない。少なくともイギリスでは貞節は女性の基本的な徳であるが、男性の間ではほとんど基本的な徳とはいえない。そして全ての時代において、そして今でもすべての国々において女性の間で基本的な徳とはいえない。道徳史家にとって各時代における基本的な徳を発見するのは最も重要な仕事である。なぜならそれは他のすべての徳に与えられる地位を大きく調整するからである。

ここまで私が述べてきたことから、どんなに素晴らしいものであったとしても、すべての人が必ず適合しなければならぬモデルとして、単一の性格を絶対的なものとして推奨し過ぎるのはかなり危険なことが分かるだろう。性格はその種類自体において完璧でありうるかもしれない。しかし、すべての種類の完璧さを擁する性格は到底ありえない。なぜならここまで見てきたように、あるタイプの完成度はそれを構成する徳たちのみならず、それらに割り当てられた地位と卓越性によっても決定されるものだからである。理想に期待されるのは、その種類自体において完璧であること、そしてその時代に最も必要とされ、人類に最も広く役立つタイプを示すことである。ストア派が示したタイプが英雄的な資質を称揚するものであったのと同様に、キリスト教が示すタイプは愛情豊かであることを称揚するものである。これはキリスト教がストア派よりも文明の主宰者としてふさわしい理由の一つである。社会が組織化され、文明化されればされるほど愛情豊かな資質が発揮され、英雄的資質が発揮される余地が少なくなるからである。

すべての人格を一つの型に押し込めようとする道徳的不寛容の歴史は、それにふさわしく吟味されたことはなかったように思われる。そしてこの後、頻繁にそれに言及することになるだろう。人が自分の嗜好や卓越性をすべての善きものの尺度とし、それと大きく異なるものをすべて不完全なもの、低いもの、あるいは二次的な価値しか持たないもの、と断定するのがいかにありふれたこと

かは誰でも気づいているだろう。これは通常自惚れのせいとされている。しかしおそらくほとんどの場合、想像力の弱さ、つまりほとんどの人にとって、自分とは根本的に異なる人格を思い浮かべるのが難しいことに起因している部分が大いなのだろう。善良な人物は通常、自分と異なるタイプのはるかに完全な性格より、同じタイプの非常に不完全な性格の方にはるかに共感できるものである。歴史的な原因や折々の利益の不一致と同様に、特に人種の違いが国籍の違いと一致する場合に、友好的な国際親善の実現が極めて困難な原因はここにあるのではないだろうか。それぞれの国民には異なるタイプの卓越性がある。そしてそれぞれ、自国民において最も優れていて、隣国民おいてしばしば最も欠けている徳を並外れて重んじるものである。また自国民が最も陥りにくく、隣国民が最も陥りやすい悪徳に対しては特別な反感を抱く。こうして軽蔑と嫌悪が入り混じった感覚が生じる。この感覚は賢明な人物ほどすぐに解放されるものである。しかし、それが一般大衆の感情なのである。

各個人の性格のタイプは部分的には生来の気質に依存し、部分的には外的状況に依存する。好戦的社會、洗練された社會、産業社會はそれぞれ固有の資質を呼び起こし、それを必要とし、それにふさわしいタイプを生み出す。もし異なるタイプの人間が生まれたなら―例えば優しさや柔和の徳を最高度に發揮するように生まれついた人物が激しい軍事社會に生まれたなら―彼は適切な行動機會を見つけることができず、彼はその時代と衝突し、彼のタイプは不愉快なものと思なされるだろ

う。このような対立の結果として、彼は単に相応に評価されないというだけではなく、別の環境で発揮できたであろう彼の固有の徳を發揮することもできないだろう。教育の力、社会の習慣、人類の一般の見解、さらには彼自身の義務感など―すべてが彼に不利に働くだろう。彼の周囲の全ての卓越性の最も高い模範はすべて別のタイプであるがゆえに、自分の存在を向上させようとする努力そのものが、彼を優れたものにしようとしていた生得の資質を鈍化させるだろう。一方、生まれつき英雄的な資質を持つ人間がヒロイズムを非常に重視する社会に生まれた場合、彼はより高く評価されるだけでなく、好条件が重なることでそのヒロイズムを他の方法では不可能なほどに高いレベルにまで到達させることができるだろう。このように環境の変化はタイプの変化を生み出し、それゆえ道徳史に将来性が生じ、それを一般史と結合させる必要性も生じるのである。宗教は道徳的指導者と考えられるが、その道徳的教えがその時代の傾向に合致しているときにのみ実践され効果を發揮する。もしその一部が合致しなれば、その部分は公然と放棄されるか、修正されるか、あるいは暗黙のうちに無視されることになる。古代人においてはエピクロス派とストア派が共存して全く異なる二つの徳の原型を世に問うたことで、非常に驚くべき方法で別個の卓越性を認識することが可能になったのである。なぜならこれらの学派はそれぞれしばしば優位に立ったが、どちらも他方を完全に滅ぼしたり、信用を失墜させたりすることには成功しなかったからである。

人間の道徳的条件を構成する二つの要素のうち、私たちの一般的な知識はほとんど一方に限られ

ている。私たちは政治的、社会的、あるいは知的な原因が性格に作用する方法について多くを知っているが、生まれつきの氣質を支配する法則、個人や民族の生得の道徳的多样性の理由や程度についてはほとんど何も知らないのである。しかしこの問題を考えるほとんどの人は、医学の進歩によってさまざまな道徳的素質の物理的原因が明らかになり、この点に関する非常に大きな知識が私たちの手の届くところにやってくる、と結論するだろう。人間の知識の大きな部門の中で、医学は得られた成果が最も明らかに不完全で暫定的なものであり、理解されていない可能性の分野が最も広いものであり、前世紀に機関車やその他の産業上の発明に向けられたように、人間の心がこれに向けられたならば最も素晴らしい結果が期待できるものである。最も致命的な病気の原因についてのほとんど絶対的とも言える私たちの無知と、ほとんどすべての最良の医学的処置は経験的なものであることがしばしば認識されてきた。吸入の医学はまだ初期段階にあるが、自然は吸入によってほとんどの病気を生み出し、ほとんどの治療を行うのである。電気の持つ医学的な力は、あらゆる作用の中で最も生命に近いものであるにも関わらず、ほとんど未解明である。麻酔薬の発見は現代において計り知れないほど重要な分野を切り開いた。また、ある種の身体的条件下で可能であることが証明された外部からの暗示による感覚や感情の流れの全体の制御は、苦痛の軽減にさらに貢献するだろうし、ベーコンが医師たちの技術の結末として提案した安楽死にもおそらく貢献することだろう。しかし博愛主義者と哲学者の両方の目から見てこの分野、あるいはおそらく他のどの分野においても最も期待されるのは、私たちの身体的性質と道徳的性質との関係の研究における成果だろう。

うと私は考えている。道徳的病理学を科学に昇華させ、すでになされた多くの断片的な観察結果を
発展させ、体系化し、応用する人物はおそらく人類の優れた知性たちの中に位置づけられるだろう。
中世の修道士の断食や瀉血、官能的な情熱を和らげたり刺激したりする薬、神経疾患の治療、狂気
や去勢がもたらす道徳的影響、骨相学の研究、身体の発達の連続した段階に伴う道徳的变化、時に
人格全体の様相を永久に変えてしまい、人格を通じてすべての知的判断力に作用してしまった病氣
の症例、などがこの種の科学が扱う事実になるだろう。心と身体は非常に密接に結びついている。
唯物論に最も熱心に抗議する人々でさえ、それらが絶えず互いに作用し合っていることは容易に認
めている。脈拍を速め、頬を青ざめさせたり紅潮させたりする突然の感情や、恐怖の効果によって
流行病に罹りやすくなることは、心が身体に作用する身近な実例である。また身体が氣質によって
より強力で永続的な影響は無数の観察によって証明されている。この働きは私たちの道徳的構造の
あらゆる部分に及んでいて、あらゆる情熱や人格の傾向には身体的な素因があつて、もし私たちが
これらに精通するならば、現在の身体疾患の治療と同様に多種多様な道徳的病弊を医学によって体
系的に治療することができるのであるだろう。このような知識はその計り知れない実用的な重要性に加え
て、私たちの道徳的資質同士の親子関係に新しい光を当て、氣候の道徳的影響を余すところなく扱
うことを可能とし、そして人種の影響という大きな問題を個々の観察者の漠然とした印象ではなく、
実験という確固たる基礎の上に置くという大きな哲学的価値を持つだろう。そして歴史家の労苦を
補完するものになるだろう。

しかし、おそらくそのような発見は、まだ到達からほど遠いものである。そしてその議論はこの著作の範囲に収まるものではない。私の目下の目的は外的環境が道徳に及ぼした作用を追跡すること、異なる時代に理想的なものとして提起された道徳的なタイプはどのようなものであったか、それらが実際にどの程度実践されたか、そしてどのような原因によって修正され、損なわれ、消滅してきたかを調査することである。

第二章 異教徒の帝国

古代文明の倫理的な教えを研究する人物が最初に心打たれる事実、それがいかに不完全なものだったか、民間信仰がそれに与えていた影響がいかにわずかなものだったか、ということである。神々の行動の中に道德観念が探し求められたことはなかった。そしてキリスト教の勝利のずっと前に、多神教は人類の洗練された知性に大きな影響を与えなくなっていたのである。

ギリシャでは最も古い時代から、神話の伝説とは全く違った自然宗教の足跡を探し出すことができる。ギリシャの最初の劇作家たちはゼウスの最高権威と普遍的な神意を非常に強調していたため、キリスト教の教父たちは一般的にそれを直接の靈感か、ユダヤ教の著作の知識によるものとし、後のカドワースの学派の神学者たちはそれをもとに人類は元々一神教であったとする論陣を張ったのである。哲学者たちは広く流布している伝説を常に軽蔑し、敵視していた。神々について作り話をしたためにヘシオドス（*BC7世紀頃、神統記）が地獄で鉄の柱に縛られ、ホメロス（*BC9世紀）が蛇に囲まれた木に吊るされているのを見た、とピタゴラスは語った。プラトンは同じ理由で彼の共和国から詩人たちを追放した。ステイルポン（*BC360―280）は生け贄の制度全体を嘲笑するようになり、ペイディアス（*BC490―430）が彫ったアテネが女神であることを否定したため、アテネから追放された。クセノパネス（*BC570―478）によれば、そ

それぞれの民族はその民族特有のタイプの神々を持っており、エチオピア人の神々は黒く、トラキア人の神々は色白で青い目をしているという。神々の存在についてディアゴラス（*BC5世紀）とテオドルス（*B340-250）は否定し、プロタゴラス（*BC490-420）は疑問を呈したと言われている。また、エピクロス派は彼らは人間の問題にはまったく無関係であると考え、ピュロン（*B360-270）派は私たちの能力では人間や神についてのいかなる確かな知識も得ることはできない、と宣言した。キニコス派のアンティステネス（*BC446-366）は人気の神は多いが、自然の神はただ一人であると説いた。ストア派はアリストテレスによって支持された、ピタゴラスのものとされる見解を複製し、自然の全てに存在する魂を信じていた。しかし、この見解を採っているいくつかの近代学派とは違って、彼らは神意の教義と神の自意識を強く主張していた。

ローマ共和国と帝国では知的発展の最初の成果として、哲学者の間にも同様の一般的な懐疑論が生まれ、教育のある階級はエピクロス派のような公然あるいは事実上の無神論者と、ストア派やプラトン派のような純粹神論者に急速に分かれた。ルクレティウス（*ティトゥス、カルス、BC99-55）やペトロニウスに代表される最初の論者は、神々を単に恐怖が創造したものとみなし、あらゆる形の摂理を否定し、世界は原子の結合に、生命は自然発生に起因するとし、あらゆる形の宗教的信仰を想像力の幻想として追放することを哲学の最大の目的と考えていた。他の人々は多か

れ少なかれ汎神論的な神の概念を持ち、神意の存在を主張したが、一般的な伝説を非常に軽蔑的に扱って様々な方法で説明しようとした。最初の体系的な説明の理論はシチリア人のエウヘメルス（*BC4—3世紀）によるもので、その著作はエンニウス（*BC239—169）によって翻訳された。神々はもともと王たちであって、自分はその歴史と系譜を突き止めた、と彼は主張した。そして彼らは死後に人間によって神格化されたものとした。もう一つの試みはローマの懷疑主義の最初の時期に一般に普及したものであって、ストア派の一部によるものである。彼らは神々を神性のさまざまな属性の擬人化、あるいは自然のさまざまな力の擬人化と捉えた。ネプチューンは海、プルートは火、ヘラクレスは神の力、ミネルバは知恵、ケレスは肥沃なエネルギーを象徴していたのである。帝政期より100年以上も前に（**?）ウアロ（*マルクス・ティレンティウス、BC116—27）は「世界の魂は神であり、その各部分は真の神性である」と宣言していたのである。ウエルギリウス（*BC70—19）とマニリウス（*マルクス、BC1世紀）は普遍的な精神、すべての生命の原理、すべての地球に行き渡り生気を与えている動きの原因を非常に美しい文章で表現している。またプリニウスは言っている「世界と空は、その中に万物が包まれており、永遠で巨大な、決して生まれえない、決して滅びない神と見なされなければならない。これを超えるものを求めることは人間にとって何の利益もなく、それは人間の能力の限界を超えるものである。」キケロは神とは物質から解放された心であるというプラトンの高次の概念を採用し、セネカは、「ユピテル、宇宙の守護者、支配者、魂、精神、この現世の主、支配者、…万物がそれに依存している

原因の原因、∴その知恵は世界がその航路を外れないよう見張っている。∴すべてのものはそこから生じ、その精神によって私たちは生き、∴それは目に見えるものすべてを構成している。」と壮大な言葉で称えた。ストイシズムの偉大な詩人であるルカヌス（*マルクス・アンナエウス、AD 39—65）はユピテルを、徳と宇宙を王座とする威厳ある、すべてに行き渡る精神として描写したとき、自らの詩歌をさらに高め、彼の学派の感情をより正確に表現する人物となった。クインティリアヌス（*マルクス・ファイビウス、AD 35—100）は一人の人間の笏の下に世界が服従していることを、それが神の支配の姿であるという理由で擁護した。他の哲学者たちはユピテル・マクシマスの最高権威を主張し、他の神々を単なる管理的、天使的機能、あるいはプラトン主義者が表現したようにダイモーンの地位に引き下げることで満足したのである。ストア派の何人かによれば最後の大災害が宇宙と蘇生した人間の魂とこれらすべての小さな神々を焼き尽くし、全被造物が偉大な親霊に吸収されて神がすべての中のものであるというものである。子供たちや老女たちはケルベロス（*地獄の番犬）やフューリー（*復讐の女神）を嘲笑し、単なる善悪の観念の喩えとして扱った。キケロの神学では民衆の神々は捨てられ、託宣は反論され嘲笑され、占いの全システムは政治的な詐欺とされ、奇跡の源は想像力の過多と判断力の病気にあるとされた。コンスタンティヌス帝（*在位AD 306—312…西方副帝、AD 312—324…西方正帝、AD 324—327…全ローマ皇帝）の時代以前には、神託に反発する多くの書物が書かれていた。そのうちの大部分は実際に消滅しており、最も優れた論者たちはこの消滅を人々の軽信が減退したことの証拠、

そして託宣がその軽信の結果だったことの証明であると正しく評価した。ストア派は直接的な宗教的議論から距離を置くことを習慣としていた。そして幸運の贈り物には意味がなく、善人は自分の良心に満足すべきであり、成功ではなく義務を人生の目的にするべきであるという理由から、それについて門人たちに質問させなかった。カトーは二人の卜占官が重々しく会見できることを不思議に思った。ローマの將軍セルトリウスは戦場で頻繁に吉兆を偽造して戦力にした。ローマの知恵者たちは好んで占いを嘲笑の対象とした。初期のギリシャのモラリストが不道德な行いを神々に帰する俗説に対して放った非難は後世の哲学者たちによって長く繰り返され、オウイデウス（*BC 43生）はこうした作り事をあざ笑って『変身』のテーマとし、彼の最も不道德な詩においてユピテルを悪の手本として名指ししている。ホラティウスはイザヤ書とは似ても似つかない皮肉で、まだ形のない丸太をベンチにするか神にするか悩む大工の姿を描いている。キケロ、プルタルコス、ティルスのマクシムス（*AD 2世紀前半）、ディオーン・クリュソストモス（*AD 45—115）は偶像崇拜を非難するか、あるいは単に神々のしるしや象徴であり、無知な人々の信仰を手助けするのに適しているという理由で像の使用を擁護した。セネカとピタゴラスの全学派は生け贄に異議を唱えた。

こうした例はローマの哲学者たちが国家公認の宗教からいかに遠く離れていたか、また彼らの道徳的生活の源泉を他の場所に求めることがいかに必要だったかを示すに十分であろう。学識ある

人々の見解は決して俗人の意見を忠実に反映するものではなく、またキリスト教の夜明けや印刷術の発明以前は両者の間の隔たりは現在よりもさらに大きかったのである。ルクレティウスの無神論的熱狂やカルネアデス（*BC214—129）の弟子の一部の懐疑的熱狂は例外的な現象であり、古代の哲学者の大多数は私的な場で、あるいは少数の人に読まれる著作の中で最も自由に思索しながら、彼らが軽蔑する宗教儀礼を容認し、実践し、擁護さえしていたのである。異なる国民や知識の水準にふさわしい多くの異なる道が同じ神性に収束すると信じられ、最も誤った宗教さえそれが良い性質を形成し、徳のある行動を促すならば良いものとされた。デルフィの神託は、最良の宗教はその人物自身の都市の宗教であると述べている。ポリュビオス（*BC200頃）のギリシャの歴史家）とハリカルナッソス（*アナトリア半島の南西海岸にあった古代ギリシャの都市）のディオニュシオス（*BC60—BC7）は、すべての宗教を単に政治的な機関とみなしていたが、ローマ人の献身と彼らの信仰が比較的純粋なものであることを絶賛している。ウァロは、民衆が知らない方が都合のよい宗教的真理と、民衆が真実と信じるべき偽りが存在するという信念を公言した。学究的なキケロとエピクロス派のカエサルは、ともに宗教の高官だった。ストア派はすべての人は自国の宗教的儀式を正しく行うべきであると説いた。

しかしローマの宗教はその最盛期においてさえ、立派な道德的規律のシステムだったが、決して独立した道德的熱意の源ではなかった。それは国家の創造物であり、政治的感覚から着想を得たも

のだった。ローマの神々はギリシャのように奔放で不遜な空想の産物ではなく、エジプトのように自然の力を象徴するものでもない。そのほとんどは単純な暗喩であり、さまざまな徳を擬人化したもの、あるいは産業のさまざまな部門を保護するために想像された責任者の神だった。この宗教は誓いの神聖さを確立し、特定の徳に公式に聖別を与え、それらが発揮された特別な事例を記念するものだった。その地域的人格は愛国心を強め、死者への崇拜は魂の不滅に対する漠然とした信仰を育み、家族における父親の優位性を維持し、結婚を多くの堂々とした厳粛な儀式で囲み、支配する神意に深く従順で、神聖な儀式を注意深く守る単純で敬虔な性格を作り出した。しかしこれらのことはすべて純粹に利己的なものだった。それは単に繁栄を得るため、災いを避けるため、そして未来を読むための方法だった。古代ローマは多くの英雄を生んだが聖人を生まなかった。その自己犠牲は愛国的だったが宗教的ではなかった。その宗教はその儀式が人々の最良の習慣のいくつかと混じり合い、それを強化することはあっても、独立した指導者でもなければ、靈感の源泉でもなかった。

しかし、こうした習慣や宗教的な敬虔さは共和国の末期と帝国の幕開けの特徴となった不道德と腐敗の中ですぐに姿を消した。監察官が熱心に、そしてしばしば圧制的に押しつけていた断固たる生活の質素さに贅沢が取って替わった。それはマンリウス（*グナエウス、ウルソ、BC189に執政官就任）の軍隊がアジアから帰還した後初めて現れ、カルタゴ、コリント、マケドニアのほ

ぼ同時征服後に巨大化し、アントニウス（*マルクス、BC83—30）の事例からさらなる刺激を受け、ついには帝政下で東洋の底抜け騒ぎが決して超えることができないほどに過剰なまでに膨れ上がったのである。共和国の社会的・政治的システムの完全な破壊、内戦による無政府状態、新しい哲学、習慣、神々をもたらしつつ増え続ける異国人の流入によって古い徳の絆はすべて失われ、消滅してしまった。単なる多くの礼拝形式の並置が最も懐疑的な文学や最も大胆な哲学によってもたらされることのなかったものをもたらしただけである。宗教の道徳的な力はほとんど消滅してしまっただけだ。敬虔な感覚はほとんど消滅してしまっただけである。自分の艦隊が難破したため、アウグストゥスは厳かにネプチューンの像を降格した。ゲルマニクス（*ローマ市民に絶大な人気のある軍人・政治家だったが三十歳で病死した）が死ぬと民衆は神々の祭壇に石を投げたり、それを倒したりした。神聖という観念が一般的な神性からあまりにもかけ離れていたため、最も墮落した者でさえ声に出すことを恥じるような祈りが捧げられるという苦情が絶えなくなった。帝国の腐敗の中に、私たちは哲学者や皇帝による数多くの高貴な改革の努力を見ることができるとは、しかし古い宗教の道徳的影響の痕跡はほとんど見つけられない。皇帝たちの神格化はその墮落を完成させた。外国の神々はローマの神々と同一視され、その不道徳な伝説はすべて国家の信仰と結びつけられた。劇場は懐疑論の領域を大きく広げた。キケロは、神々は実在の存在ではあるが人間のことに興味を示さない、というエンニウスの台詞を聞いた民衆の同意の喝采について触れている。プルタルコスも、劇場でデリアナの罪の陳述の後で観客が憤慨して立ち上がり、俳優に向かつて「あなたの娘があなたが描い

た通りになりますように！」と叫んだと語っている。後に聖アウグスティヌスや他の神父たちは、神殿で崇拜している神々を劇場で笑いものにする異教徒たちを長い間嘲笑っていた。人々は依然として迷信深かったが、新しい宗教として特別な力を持つお守りや護符、あるいは未来を占う魔術に頼るようになった。また、宗教史において非常に重要な位置を占める一種の迷信的懷疑論もかなりの程度存在した。神々は存在しない、あるいは神々は人間の問題に干渉しないと宣言しながら、同時にすべての予兆、占い、夢、奇跡に対する絶対的な信仰を公言する人々が大勢いた。彗星、流星、地震、怪物的な奇形児の誕生など、数え切れないほどの自然現象は一種のオカルト的、魔術的な効力を持ち、それによって人間の運命を予兆し、場合によっては影響を及ぼすものとされたのである。大プリニウスは、彼の時代には人間の全運命はその誕生を支配する星によって決定される、神はこれを定めて人間の問題に決して干渉しない、予兆が現実になるのはこの運命の予定のためである、という信仰が学者と俗人の中で急速に広まっていたことを指摘している。後世の帝国の歴史家の一人は、神々の存在を否定する多くの人々が、それでも、まず暦をよく調べて水星の位置や月が蟹座からのどのくらい離れているかを確かめなければ、安全に人前に出たり、食事や入浴をしたりできないと信じていた、と述べている。おそらく田舎の農民の間のものを除いて、共和国末期と帝国の最初の一世紀のローマには迷信的なものを除いて宗教はほとんど存在していなかった。そして当時の真の道徳的影響を調べようとするならば、ギリシャから輸入された偉大な哲学の学派に目を向けなければならぬだろう。

ゼノン（*BC335—263）とエピクロスの対立する体系が人類の道德の歴史において、とりわけ異教の帝国の末期において占める位置が大きいため、その創始者たちの創造的才能を誇張してしまいがちであるが、実際には彼らは世の中に常に存在していた優れたタイプに定義や知的表現を与えたに過ぎなかった。厳格で、まっすぐで、自制心があり、勇気があつて、純粋な義務感に駆り立てられ、高い自己犠牲の努力をすることができ、他人の弱さにやや不寛容で、通常の社会生活ではやや厳しく同情的ではないが、自分の行く道に嵐が吹き荒れると、英雄的威厳を増し、自ら真実と信じる大義を捨てるよりは命を捨てる覚悟を持つている人々が常にいた。また、気性が穏やかで人当たりが良く、穏やかで慈悲深く、柔軟で、友人には誠心、敵には寛容、心は利己的だが可能な限り自分の満足を他人のそれと結びつけようとする人、あらゆる熱狂、神秘主義、理想主義、迷信を嫌い、人格の深さも自己犠牲もないが、見事に楽しみを分け与えて受け取り、人生を安楽にし、かつ調和させるのに見事に適した人々も常にいたのである。前者は本来のストア派であり、後者はエピクロス派である。そして、もし彼らが最高善（*summum bonum）や情緒（*affectio）について推論を進めるならば、いずれの場合も彼らの性格がその持論を決定するのは当然すぎることである。前者は自制心を他のすべての資質よりも高く評価し、情緒を軽んじ、義務と利益の観念を遠く分離しようとする。一方、後者は体系的に英雄的なものよりも心地のよいものを、神秘的なものよりも実用的なものを好む。

しかしこのような問題では通常、性格が意見を決定することは間違いなく事実であるが、性格自体が国情に大きく支配されることもまた事実である。ギリシャや小アジアの洗練された芸術的で官能的な文明はエピクロス派のタイプの優れた実例を容易に生み出すことができたが、ローマは最も古い時代からストイシズムの本場だった。ローマ人は哲学を理屈で説明するよりもずっと前に、それを行動に移して見せていた、そして彼らの思索の時代には最も高貴な精神が自然にこの学説に傾倒していたのである。戦いの成功が富や機械の才に依存せず、愛国的熱意の絶え間ないエネルギーと軍事的規律の不屈の維持に依存する時代に、絶え間ない戦争に従事していた大国では、国民の性格の全ての力がある一定のタイプの生産に傾いた。子供に対する父親、妻に対する夫、奴隷に対する主人の絶対的な権威の中に、戦場において非常に強力であることが証明されたものと同じ規律の習慣を見いだすことができる。愛国心と軍事的名誉はローマ人の心の中で切っても切れない関係にあった。この二つが国民の熱意の源であり、国民の偉大さに関する概念の主要成分だった。これらが後に至高のものと判明するその道徳理論を不可避的に決定したのである。

さて、戦争は多くの風紀を乱すような影響をもたらすが、少なくとも常にヒロイズムの偉大な学校だった。それは人に死に方を教える。それは個人的な利害ではなく、名誉と熱意の影響の下で行われる崇高な行為という理念に心を慣れさせる。それは性格の強さを最大限に引き出し、同時の行

動に必要な自制に人を慣れさせ、恐怖を抑え、感情をしつかりと制御することを強いるのである。愛国心はまた、その個人的な望みを自分の住む社会の利益より下位に位置付けるよう彼らを導く。人生の視野を広げ、過去の偉人の中に身を置き、英雄的な人生を学ぶことよって道徳的な力を獲得し、遠い未来の展望を通して、自分が去った後も続く組織の幸福を絶えず望むよう、人に教えるのである。こうした力はすべて、ローマ時代の生活において今では決して再現できないほどに発達していた。こうした理由よってこの時点で戦争は英雄的な徳の学校以上のものだった。神学的な強い情熱が何もない中で、愛国心は超越的な力を発揮していた。帝国のほとんどすべての長い期間と、都市の貴族的な組織によつて形成された指揮の習慣は国民の性格の向上と誇りに貢献した。

こうした考察から、ローマ人の環境は必然的にある種の人格を生み出す傾向があり、その本質的な特性はストイシズムのタイプであったことは十分に明らかだろう。人間がさまざまな資質の比較的な卓越性を評価する際に自分の性格に最も一致するものに最高の賛辞を与えるという傾向に加えて、この事実は伝記的要素が大きな位置を占めていた古代の倫理教育において大きな重要性を持つに至った。キリスト教における理想は一般に超自然的な存在か、超自然的な存在と絶えず結びついていた人物だった。そしてこれらの人物は通常ユダヤ人か、その人生の性質がほとんどの人間の共通から切り離され、民族性をできる限り拭い去られているような聖人だった。ギリシャ人やローマ人の間では、徳の模範はたいてい同胞だった。同じ道徳的雰囲気の中で生き、同じ目的のために闘

い、同じ活動範囲で名声を得た人々は、その称賛者と同じ強度ですべての国民性を示していたのである。歴史は今ではほとんど失われてしまった教訓的な性格を帯びていた。あらゆるモラリストの最初の仕事の一つは、自分が強いる規範を説明するための人格の特性を集めることだった。ウアレリウス・マクシムス（*AD1世紀の歴史家）はさまざまな道徳的資質の一覧表をつくり、自国や外国の歴史から得た豊富な例によってそれぞれを説明する本を書くことによって古代の指導者たちの方法を忠実に再現した。

プルタルコスが言った「私たちが事業を始めるとき、責任を負うとき、あるいは災難に遭うときはいつでも、私たちの時代あるいは過ぎ去った時代の偉大な人物の例を目の前に置き、プラトンやエパミノンダス（*BC420―362、スパルタを破ったテーバイの将軍）、リュクルゴス（*BC390―324、アテネの雄弁家）やアゲシラオス（*BC444―360、スパルタ王）ならどう行動しただろうか」と自問するのである。これらの偉人たちを精確な鏡のように見ることで、私たちは自分の言動の欠点を改善することができる：哲学を学ぶ者は難局を訪れたり、情熱に心をかき乱されたりするたびに、その徳を称賛されている人々の姿を思い浮かべる、そしてそれを想起することによってよろめく歩みが支えられ、「転落が防がれるのである。」

こうした文言は古代のモラリストの文章に絶えず登場する。そしてこのことは国民の卓越性の最

高のタイプが道德哲学の有力な学派をいかに自然に決定したかを示している。また国の歴史の英雄的な時代の影響が後の、全く異なる発展段階にある最高の精神に及ぶことをも示している。したがって帝政期には国民生活の状況が大きく変化したにもかかわらず、ストア派が依然として哲学的宗教であり、道德的熱意の大きな源泉であり調整者であったことは驚くべきことではなかった。エピクロス主義は確かに帝政期に広く普及したが、それは崩壊の原理か悪徳の弁明、あるいはせいぜい強い道德的熱意に動かされない静謐で無関心な性質の宗教に過ぎなかった。エピクロス自身が最も高潔な人物であったこと、彼の教義は当初、先行するキュレネ派の粗野な官能性とは注意深く區別されていたこと、理論的にはほとんどすべての徳を認めていたこと、この学派が卓越の最高位に達することがなかったとしても、少なくとも無害な生活を送り、師に熱心に献身し、特にその友情の温かさと変わらなさに知られる弟子たちを多く生み出したことは事実である。しかし安楽と快樂に高い価値を置く学派は軍事的専制政治の無政府状態の中で徳を教える指導者を襲う恐ろしい困難と闘うには全く適しておらず、その成功にとってローマ人の徳と悪徳は等しく致命的なものだった。ローマの卓越した偉大な理想はすべて別のタイプに属するものだった。デキウスやレグルスのような人物が出てくることはエピクロス社会では不可能だっただろう。たとえ彼らの原動力が死後の名声に対する欲求より高貴なものではなかったとしても、エピクロス社会の抜け目のない、穏やかで感傷を排した功利主義に満ちた道德的空気の中ではその欲求は決して強くならなかっただろう。一方エピクロス主義者が多かれ少なかれ洗練された快樂と、人間の真の幸福を構成するものについて

の高貴な概念を区別していたことはローマ人には理解しがたかった。彼らは楽しみを犠牲にすることを知っていたが、楽しみを追求するとき、最も粗野な形に自然に引き寄せられるのである。それゆえエピクロス主義の布教はさっぱり効果が上がらなかった。その教えの反愛国主義的傾向はコスモポリタニズムの台頭に必要な国家感覚の破壊に貢献した。一方その神学的信仰に対する強い異議はルクレティウスの才能と熱意に支えられて衰退しつつある信念に力強い影響を与えた。

エピクロス主義の作用がこうしたものだったため、倫理的な教えの建設的あるいは積極的な側面はほとんどストア主義に委ねられた。ストア主義の体系の一部に強く反対する哲学者は何人かいたが、彼らの努力は通常、その極端で過酷な特徴を修正する以上のものではなかったからである。ストア派は徳こそが目指すべき唯一の正当な目的であること、そして徳は理性を完全に優位に立たせ、情緒を完全に消滅させるものであるという二つの基本原則を主張している。ストア派は徳こそが目指すべき唯一の正当な目的であること、そして徳は理性を完全に優位に立たせ、情緒を完全に消去するものであるという二つの基本原則を主張した。プラトンの見解を主に学んだペリパトス派（*逍遙学派、アリストテレスの学校リュケイオンの学徒の総称）や他の多くの哲学者たちはこれらの原則の過大視を和らげようと努めた。彼らは徳は利害とは全く別のものであり、人生の主要な動機であるべきであることを認めたが、幸福もまた善であり、それに対する一定の配慮は正当なものであると主張した。彼らは徳において理性が感情に対して優位にあることを認めたが、制限され

た範囲内で情緒を行使することを認めた。しかしストア派の主な特徴である無私の理想と理性の支配は認められている。そしてそれぞれが古代の卓越性の概念の重要な一面を表しているため、これから私たちはそれを検証していかなければならない。

第一に、愛国的な熱狂が引き出した自己犠牲の高い精神は知的にも表現されているということ。私たちは容易に見ることが出来る。愛国主義の精神は非常に多くの、また非常に崇高な英雄的行為を呼び起こすが、その報酬として個人の不死を提示しないという独特の性質がある。人間のヒロイズムのすべての形の中で、それはおそらく最も無私のものである。スパルタ人やローマ人は祖国を愛するがゆえに祖国のために命を落とした。死の間際に殉教者の希望に満ちた恍惚の表情は見られなかった。彼は自分のすべての持ち物を放棄して自分が信じた通り永遠に目を閉じ、この世でも来世でも報酬を求めなかった。死後の名声という報酬と呼ばれるものの中で最も洗練された精神的な希望でさえ、最も著名な指導者たちにしか存在し得ないのである。古代の徳の体系の頂点あるいは理想を形成したのはこのような性質の实例であり、それらは自然に利益と義務の概念を非常にはっきりと深く区別するよう人々を導いた。実際、義務を構成するものについての概念は古代ではしばしば非常に不完全だったが、あらゆる利己心の変型とは区別されるものとしての義務が人生の最高の動機でなければならぬ、という確信は後のどの学派よりもストア派によって明確に強く主張されたというのが本当のところだろう。

読者はおそらく前章から、道徳の指導者が人々を徳に導くために持ち出す四つの動機があることを理解されただろう。彼らは徳の高い人生には繁栄が訪れ、悪徳の人生は逆の結果を呼ぶという出来事の性質を論じるだろう―彼らは物事の通常の推移を指摘し、現世での利益と、来世での賞罰のための特別な神意が存在すると主張することによってこの命題を証明するだろう。来世の議論に関する限り、このような教えの効力は特定の神学的教義が強く根付いているかどうかにかかっている。一方、現世の動機の効力は社会がどの程度、どのような方法で組織されているかにかかっている。なぜなら完全に高潔な生活が繁栄への一般的傾向ですらない社会が存在することは間違いないからである。また特殊な環境や個人の性格がこうした教えの受け止め方に大きく影響するだろう。またキケロが言ったように「ある有用性が作り出したものを、別の有用性がしばしば破壊する」だろう。

また心にとっての悪は体にとっての病気のようなものであり、ゆえに徳のある状態は健康な状態である、と彼らは論じるだろう。身体の健康とは痛みがない、あるいは少なくとも不快な状態がないこととして、それ自体が望ましいのと同様、秩序ある高潔な心はそれ自体のために、またそれによる外的利益とは無関係に幸福の条件とすることができる。また情熱と悪徳に悩まされている心的状態は、繁栄の追求の障害となるというより、それ自体が本質的に苦痛で邪魔なので避けた方がよいだろう、と。徳と悪徳を健康や病気の状態と捉え、一方はそれ自体を善とし、他方はそれ自体を

悪とするこの概念はプラトンの倫理学の基本的命題だった。この概念はストア派にも認められていたが、その位置づけは補足的なものに過ぎなかった。そして多かれ少なかれ、後続のすべての体系に受け継がれている。これは自己訓練の大きく向上的な概念に特に好都合である。なぜならそれは人を個々の徳や悪徳の行為よりも、それらが生じる心の常の状態についての思索へと導くからである。

第三に、徳のある行為を意図的に行った後に生じる快感を動機として提示することによって徳を支持することが可能である。この感情は個別の行為の後の個別のそれぞれの満足感である。したがって悪意や心をかき乱す衝動の消滅から生じる日常の気分の平穏とは容易に分離することができる。「善を行うことの贅沢さ」を楽しむようにという一般的で熱心な勧告に含意されているのはこの理論であり、特に博愛の行為を強く勧める。その場合、生み出された幸福への共感とその気持ちを強めるが、この快樂はあらゆる種類の徳に伴うものである。

これら三つの行動の動機はその究極の目的が行為者の幸福にある、という共通の特徴をもっている。第一の動機はその幸福を外的環境に求め、第二と第三の動機は心理的条件に求める。しかし第四の動機というものがあり、これはモラリストの直観派の特徴であって反対派の躓きの石となっている。私たちは義務という概念がそれ自体、利己主義のあらゆる洗練や変型とはまったく別の最高

の自然な行動の動機を提供する、と主張するのである。この動機と共に働く力は周囲の状況やあらゆる形式の信条とはまったく無関係である。それはキリスト教を信仰する者にも拒む者にも、来世を信じる者にも魂の死を信じる者にも等しく当てはまる。それは幸と不幸、賞と罰とは全く異なる性質の問題である。人々はある特定の生き方を自分の存在の生得的な目的と感じ、たとえ幸福を犠牲にしても、それを追求する義務があると感じる。彼らはある行為を本質的に善良で高貴なもの、他の行為を本質的に卑しいものと感じ、この認識ゆえにあらゆる楽しみの観点とは関係なく一方を追求し、他方を避けるようになるのである。

前章でより詳細に論じたこれらの区別を再び私が取り上げたのは、ここで見直している哲学の一派が、これらの動機の中のものより高いものが心に及ぼす力について、あらゆる歴史的事例のうちで最も完璧なものを提供しているからである。ストイシズムにおいて粗野な私利私欲は絶対的に非難された。自らの力の及ばないものにはすべて中立であるべきこと、心をあらゆる幸運の贈り物から引き離すのがすべての精神的訓練の目的であること、それゆえに打算を徳の動機から完全に排除しなければならぬことが、この哲学者たちの最高の原理の一つだった。この原理を実行するために、彼らは人事の虚栄と独立心の威厳を絶えず強調し、他の学派ほどではなくとも賢者の無表情な平静の誇張に耽った。ローマ帝国において、ストイシズムは他のどの時代にも増してそうした教えに不利と思われる時代に栄えた。タキトゥスが強調した言葉を借りるなら「徳は死の宣告」だった時代

もある。暴力がこれほど完全な勝利を収めた時代はなく、物質的利益への渴望がこれほど激しかった時代はなく、悪徳がこれほど仰々しく美化された時代はほとんどなかった。しかし、こうした状況の中でストア派は妥協でもなく、民衆の行き過ぎを抑えようとするものでもなく、むしろその厳かな高潔さによって、一般的な事例や彼ら自身の利益が命じうるすべてのものに対する極端なアンチテーゼである哲学を教えたのである。そしてこれらの人々は、来るべき栄光の予感に燃えている情熱的な狂信者ではなかった。彼らは魂の不滅の信念を行動の動機から断固として排除した人々だった。キケロの美しい推論と、この理論の中に永続する神秘に執着するプルタルコスのような少数の人々の宗教的信仰にもかかわらず、ローマに初めて哲学が導入されたとき一緒に入ってきた懐疑論と、タルタロス（*冥界のさらに下にある奈落）やステイクス（*現世と冥界の間の川）に関する古い神話の消滅と、民衆へのエピクロス主義の普及の中に、この理論は非常に低く沈み込んでしまった。キケロの著作の中で対談者が、プラトンの著作を前にして自分はそれを信じ、実感することができるが、本を閉じると推論はその力を失い、精神の世界は青白く非現実的なものになってしまうと述べたとき、おそらく彼は一般的な感覚を言い表していたのである。エンニウスが「神々は人間の問題に関与しない」と宣言して劇場の喝采を浴びれば、カエサルも元老院で「死はすべてのものの終わりである」と主張しても反感を買わず、ほとんど異議を唱えられなかった。おそらくローマの最も偉大な学者であるプリニウスはエピクロスの全学派の感情を取り入れて、来世を信じることは狂気の一形態であり、愚かで悪質な幻想であると述べている。ストア派の見解は揺れ動く、不

確かなものだった。彼らの最初の学説は、人間の魂には来世があり、独立した存在ではあるが、永遠の存在ではなく、世界を破壊しすべての形あるものを自然の全存在の魂に吸収する最後の大火まで存続する、というものだった。しかしクリュシッポス（*BC280—207）はクレアンテス（*BC331—232）がすべての人に存在するとしたこの来世を最も優秀で高貴な魂に限定した。そしてローマのストア派の間ではこれさえも大いに疑問視された。人間の魂は神から切り離された断片であるという信仰は自然に、死後にそれが親霊に再吸収されるという信仰につながった。徳のほかには善はない、という理論は報われない功績や罰せられない罪が招く来世についての議論をストア派から奪った。そして善人は報酬とは無関係に行動すべきであると主張した熱心さが、一部のユダヤ人思想家がそうであったと言われるように、彼らを来世の報酬の否定に傾かせたのである。ローマのストア派の創始者パナティウス（*BC185—109）は魂は肉体とともに滅びると主張し、彼の意見にエピクテトス（*AD50—135）やコルヌトゥス（*ルキウス・アンナエウス、AD60頃活躍）も従った。セネカはこの問題で矛盾していた。マルクス・アウレリウスには漠然とした悲痛な願望以上のものはなかった。来世を信じる人々は、それを微かで不確かなものとして信じ、たとえ事実として受け入れたとしても、それを動機として持ち出すことは避けたのである。ストア派の倫理体系全体は、自己犠牲を他に並ぶもののないほどの地位に置き、比肩するものはほとんどないほどの影響力を行使したが、それは来世の教義の助力なしに発展したものだ。異教徒の古代はパナティウスの著作の発展型を自認するキケロの「義務について」よりも高

貴な道徳的論説を遺さなかった。またそれは野蛮で悪名高い主人の病弱で奇形の奴隷であり、人生の後半には市民権を得たが、すぐにドミティアヌス帝（*在位AD81―96）によって追放されたエピクテトスほどに壮大な模範を残さなかった。彼は人間の不幸の淵を測り、単なる変質のように死を待ち望みながらも、神の存在の感覚に満たされ、その生涯は神意への賛歌であり続けた。そして同時代の人々にとってほとんど人間の善の理想と思われた彼の著作とその模範は、あらゆる時代と激変を乗り越えて慰めの力を失っていない。

しかしローマのモラリストたちにもっと大きな影響を与えていたのは、別の形の不死だった。名声、特に死後の名声―つまり「高貴な心の最後の弱点」―に対する欲求は、ローマのヒロイズムの源泉の中で並外れて突出しており、古代の最も偉大なモラリストたちがほとんど免れ得なかったあの芝居がかった、過度に張り詰めた言葉づかいの原因だった。しかし一部の人々のように、異教徒たちは徳を世間から隠し、自ら不名誉に甘んじるといふ考えに至らなかったと推論するならば、それは全くの誤りだろう。義務感から大衆の好意の強い潮流に逆らい、軍人にとって最も致命的な世評を国のために引き受けたファビウス（*クイントゥス、マクシムス、BC275―203、第二次ポエニ戦争で決戦を回避し続けて批判されたが、持久戦でローマを勝利に導いた）、怒れる群衆の嘲笑、侮辱、嘲笑の中でも動じなかったカトー（*大、凱旋將軍の不正を告発して非難された）ほど古代において高く評価された人物はいなかった。キケロはストア派の原理を説明して「たとえ神々

や人間の目から隠されたとしても」すべての悪を避けるべきであり、誇示することなく、他人の目から遠く離れて行われる行為ほど称賛に値するものはないことを学んでいないなら真の哲学に到達したとは言えないと宣言している。ストア派の書物には同じ趣旨の文章がたくさんある。「見解ではなく、良心に従う。」「自分の徳が知られることを望む者は、徳のためではなく名声のために苦心しているのである。」「良心の呵責に耐えかねて名声を犠牲にするのが最も徳の高い者である。」「私は称賛されることから尻込みしないがそれを目的や権利の条件とすることは拒否する。」「人を喜ばせるために何事かをするのであれば、あなたは自分の階級から転落したのである。」「悪い評判であっても高貴に獲得したのなら喜ばしいものである。」「偉大な男は打ち負かされ塵に伏してなお偉大である。」「神々しくありながら世に知られない人物があり得ることを忘れるな。」「美しいものはそれが自体が美しいのであって、人間の称賛はその特性に何も付け加えない。」「マルクス・アウレリウスはピタゴラスの例にならって死について絶えず考え、想像力を働かせて過ぎ去った社会全体を思い起こすことによる、死後の名声の虚しさの实感を精神修養の特別な目的としたのである。小プリニウスは友人の一人を「見栄のために何もせず、すべてを良心のために、徳の報酬を人間の称賛に求めず、それ自体に求める」人物と表現して、ストア派の理想を忠実に描き出した。またストア派の人々は徳の義務と魅力の区別をあまり強調することはなかった。この点で彼らはより洗練されたエピクロス派と一線を画していた。エピクロス派はしばしば、単に快樂が私たちの行動の究極の目的であるのは当然で疑わないこととして、目的とする快樂の種類を最も高度なものに昇華しようと

した。しかしストア派は断固としてこれを否定した。「快樂は道連れではあっても道案内ではない。」と主張したのである。「私たちは徳が快樂を与えるがゆえにそれを愛するのではない。私たちが徳を愛するがゆえにそれは快樂を与えるのである。」「たとえ神々や人々がその行為を見過ごしたとしても賢者は罪を犯さない。罰や恥を恐れるがゆえに罪を犯さないのではない。それは正義と善なるものに對する欲求と義務ゆえである。」「徳に對して報酬を求めるのは、目が見ることに對して、あるいは足が歩くことに對して報酬を求めようなものである。」「善を行うとき人間は「ブドウを実らせたブドウの木のように、適切な果実を实らせた後はそれ以上何も求めない」べきである。この指導者たちによれば、人生の目的は生においても死においても安らぎを得ることではない。人生の目的は自らの義務を果たし、眞実を語ることである。

私が注目したストア派の第二の特徴は、理性の絶对的優位に道を開くための情緒の完全な抑圧である。私がこれまで述べてきたストア派とエピクロス派の性質にほぼ対応する性格には―意志が優位に立つものと、欲望を最上位に置くものという―二つの大きな区分がある。前者のクラスの善人とは、自分の情熱や性向から、あるいは自分を取り巻く環境から反対の道を歩む強い誘惑があるにもかかわらず、意志が義務感に導かれて自分が正しいと信じる道を歩む人物である。後者のクラスの善人とは、その共感と欲望が本能的に徳の高い目的に向かうように幸福にできている人物のことである。前者の性格は、厳密に言えば美点という理念と結びつけることができる唯一のものであり、

また継続的かつ英雄的な自己犠牲の高い努力を可能とする唯一のものである。前者の性格は、厳密に言えば美点という理念と結びつけることができる唯一のものであり、また継続的かつ英雄的な自己犠牲の高い努力を可能とする唯一のものである。しかし一方で、おそらく鍛錬された徳では決して到達できない、強制されない欲望の自発的な行動の魅力というものがある。生まれつきの気質によつて貪欲に駆り立てられ、慈善を行うたびに苦痛を感じながらも、義務感のために一貫して物惜しみをしない人物は私たちの非常に高い称賛に値する。しかし気前良くすることに努力を要せず、それが彼の感情の自然な満足である人物は私たちの愛情をはるかに大きく引きつける。この二つの性格に対応する二つの異なる教育理論がある。一つは主に意志を強化することであり、もう一つは欲望を導くことである。前者の主な例は、古代のスパルタやストア派のシステムであり、中世の禁欲主義も若干の修正を加えたものである。これらのシステムの目的は人間が苦痛に耐え、明白で良く知られた欲望を抑え、楽しみを放棄し、感情に対する絶対的な支配を確立できるようにすることだった。一方で現代ほど普及していなかった教育方法がある。それは徳を魅力的にすること、徳を想像や繁栄のあらゆる魅力と関連づけること、そうして願望を無意識のうちに望む方向に引き寄せることに努力を傾けるものである。前者のシステムが意志の強い努力を必要とし、それを引き出す波乱の軍事社会に特に適しており、したがって英雄的徳の特別な領域であるように、後者は本来静穏で高度に組織化された文明に属し、したがって愛情豊かな資質に非常に好都合であり、文明が進むにつれ、結果として英雄的なタイプはますます稀となり、自己寛容的な類の善がより一般的にな

るだろう。古代社会の状況は前者のタイプへと彼らを導いたが、ストア派はその理論を情緒は病的な性質のものである、と極端に表現した―現代の形而上学者がしばしば用いる、神の愛や怒りなどというものは単なる比喩表現であることを証明するのと同様の論拠によって彼らはこの理論を正当化したのである。動揺は必然的に不完全なものであり、従ってどのような形においても完全な存在はそれを持たない、と彼らは主張した。私たちは理性が知的存在の最高の力であり、指図する力であるべきであると明確に直観しているが、感情の扇動によって行われるあらゆる行為は理性の支配から外れている。したがって意志は徳の方向に習慣的に行動するように教育されるべきであるが、感情は徳の方向に最も適しているようなものでさえ絶対的に禁じられるべきである、と推論されたのである。例えばセネカは寛容と憐憫の区別を詳しく説明し、前者は最高の徳の一つであり、後者は全くの悪徳であるとしている。寛容とは刑罰を適用する際の常の優しさの性質であるとセネカは言うのである。これは発生した刑罰の一部を免除する穏健さであり、厳格さを求める常の性質である残酷さとは正反対のものである。一方、憐憫と寛容の関係は迷信と宗教の関係と同じようなものである。苦しみを見てたじろぐのは、弱々しい心の優柔不断である。寛容は分別の行為であるが、憐憫は分別を乱す。寛容は苦しみと罪との釣り合いを裁定する。憐憫は苦しみだけを考え、その原因については何も考えない。寛容さは高潔な努力のただ中においては完全なまでに情熱がない。憐憫は理性的でない感情である。寛容さは賢者の本質的な特性であり、憐憫は弱い女性や病んだ心だけに似合うものである。「賢者は泣く者を慰めるが、共に泣くことはない。難破した者を助け、追放

された者を歓待し、貧しい者に施しを与え、母の涙に息子を返し、捕虜を闘技場から救い、犯罪者を葬ることさえある。しかしこのすべてにおいて彼の心と表情はともに平穩であろう。彼は憐憫を感じない。彼は援助し、善を行う。なぜなら彼は仲間を助け、人類の幸福のために働き、一人ひとりに自分の役割を果たすために生まれてきたのだから。彼の表情と魂は物乞いの萎びた足、ぼろぼろの服、曲がってやせ細った体を見ても何の感情も表さないだろう。しかし彼はその価値のある人々を助け、神々と同じく、不幸な人々へと心を向けるだろう。他人の目の涙を見て潤むのは病んだ目だけであり、他人が笑うといつも笑い、他人があくびをするとあくびをするのは、真の共感ではなく、神経の弱さに過ぎないのである。（*以上セネカの言）

キケロは、ストア派のモットーと言っても良いかもしれない文章で、ホメロスは「人間の特質を神々に帰した。それは神の特質を人間に授けるより良い事だった。」と書いている。ここに引用した注目すべき一節は、ストア派がこの模倣を極限まで推し進めたことを示すのに役立つ。実際、異教徒とキリスト教徒の間で栄えたさまざまな徳を比較すると、前者では意志と判断が、後者では感情が最も流行した卓越性のタイプであったことに必ず気がつく。愛情よりも友情、慈愛よりも歓待、感じやすさよりも度量の大きさ、共感よりも寛容、というのが古代の善の性格だった。ストア派は他のどの学派よりも感情の抑制を重視し、理性的で情熱的でない慈善の範囲を大幅に拡大することによって、人間の本性の博愛的側面がこうむった傷を埋め合わせるために熱心に努力した。彼らは

最も強調された言葉で、すべての人々の友愛と、その結果としての各人が他人の幸福のために自分の人生を捧げる義務とを説いた。彼らはこの一般的な理論を一連の詳細な教訓に発展させたが、その慈愛の範囲、深さ、美しさにおいてこれを超えるものはなかった。彼らはその思いやりを犯罪にまで広げ、すべての罪は無知であるというプラトンの逆説を採用し、それを不随意の病氣として扱い、懲罰の唯一の正当な根拠は予防効果であると宣言した。しかし、理論的には、彼らの原理を最も広範で積極的な博愛といかに完全に調和させることができたとしても、人間存在の感情的側面全体に対する戦いを宣告し、人間の徳を一種の威厳ある自己中心主義に貶めるシステムの実際的な悪を完全に打ち消すことはできなかった。例えば自分の息子が死んだことを知らされたとき、アナクサゴラス（*BC五世紀の哲学者）はただ「私は不死の子を産んだとは思わなかった」としか言わなかった。また自分の国が滅び、故郷の町が占領され、娘たちが奴隷や妾として連れ去られたとき、賢者は環境に左右されないゆえに自分は何も失わなかった、とステイルポンは豪語していた。そこに博愛の骨組みや理論はあっても、活力となる精神がないのである。夫や父親は妻や子供の死に完全に無関心でいるべきであり、哲学者は苦しんでいる友人を慰めるために見せかけの同情で涙を流すことはあっても、本当の感情が自分の胸に入り込むことはあってはならないと教える人々は、真の博愛の宗教を見つけることはできなかったし、永続的な宗教も見つけられなかったのである。痛みや病を悪と認めない人物は、他人のそれを和らげることに熱心ではないだろう。

實際、すべての徳は自然との一致であると説いたストア派は、この点において彼ら自身の原理に大いに反していた。理性によって私たちに明らかにされた人間の本性は複合的なものであり、種類と尊厳において異なる多くの部分からなる構造体であり、多くの力が異なる地位で支配または従属するように共存することを意図した階層構造である。人間の本性の高い部分を全体の本性とすることは人間性を回復することではなく、切断することであり、この切断が試みられたときに重大な悪が生まれなかったことはない。ストア派は博愛主義者として、団結への情熱によって、自然が博愛の主要な源泉にしようとした感情たちの根絶へと導かれた。また思弁的な哲学者として、同じ欲求のために哀れな逆説の長い連鎖に巻き込まれた。すべての徳は対等である、より正確には同じものである、すべての悪徳は対等である、私たちの意志に影響を与えないものは悪ではない、従って痛みや死別は悪ではない、という彼らの有名な理論はローマのストア派によって部分的に釈明され、しばしば無視された。しかしそれでも彼らの教えが何か不自然で気取ったものに見えるほど、十分に目立つものだった。その性質の中の一つのものだけを尊び、一つの面だけを伸ばしてきたために彼らの心は狭くなり、視野は狭くなった。例えばエピクロス派は迷信を払拭するために自然を研究するよう人々を促し、古代の精神の進歩に対する主要な障害の一つであった物理学への無知を正そうと努めたが、ストア派はほとんどの場合、徳を追求する以外の学問を軽んじたのである。エピクロス派の詩人は人類の永遠の進歩を壮大な言葉で描いたが、ストア派は本質的に懐旧的で、過ぎ去った時代の単純さを回復するための無駄な骨折りに力を使い果たした。ゼノンの学派はこれまで生

きてきた中で最も優秀で偉大な人物を多く輩出した。しかしその記録には高潔な言葉が行動に裏切られた例や、何らかの形において最も疑いなく超越した徳を示しながら、他の形において人類の平均よりはるかに低かった人物の例がかなり多く見られることも認めなければならない。哲学者ではないものの、哲学者の模範とされた大カトーは奴隷に対する非人道的な態度において際立っていた。ブルトウス（*マルクス・ユニウス、BC85—42）は当時最も法外な高利貸しの一人で、サラムスの何人かの市民は彼の要求した額を払えないために投獄され、餓死している。ストイシズムが提唱した飾りのない質素な生活をサルスティウス（*ガイウス、クリスプス、BC86—35）ほど雄弁に語った者はいなかったが、彼は腐敗した時代においてその強欲さで悪名高かった。セネカ自身、体的に神経質で臆病なところがあり、崇高な哲学によって自らを支えようと努めたが必ずしも成功したとはいえなかった。彼は極めて困難な状況下で徳の大義を導き、その死は最も高貴な古代の記録の一つである。しかし彼の生涯は追従にまみれ、欲望から自由ではなかったことにおいて際立っており、残念ながらネロの最悪の犯罪の一つを隠すために筆を走らせたことは事実である。ルカヌスの勇気は迫害によって著しく損なわれ、彼が「パルサリア」の中でネロに贈った追従はマルティアリス（*マルクス・ウアレリウス、AD40—102）のエピグラムと並んで、おそらくローマ文学が身を落としたおべっかの極限と言っても良いだろう。

ストア派の主な目的は哲学の普及だったが、彼らが要求した高い自制心によって、その体系は大

多数の人間や通常の事情には極めて不向きなものとなってしまうのである。人生は歴史であって詩ではない。それは主に小さな事柄で出来ているのであって、偉大なヒロイズムの閃光によって照らされることはめったになく、大きな危険によって破られることも、大きな努力を要求されることも滅多にないのである。社会を支配するための道徳体系は一般的な性格と多様な動機に適応しなければならぬ。それは、決して英雄的なレベルに達することができない性質の人々にも影響を与えられなければならない。根絶したり一変させたりできない部分を、染め上げ、修正し、緩和しなければならぬ。キリスト教では常に人間の普通の感情を逆なでしたり、消し去ったりするために、絶え間ない苦痛を伴う努力を続けている少数の人たちがいる。しかし多くの場合、宗教的原理が心に及ぼす影響は非常に現実的なものであるにもかかわらず、深刻な緊張や闘争を引き起こすような性質のものではない。（*宗教的原理によって）獲得された一定の自発的な衝動の中にそのことを見ることができぬ。それは性格を柔らかくし、想像力を純化して方向づけ、習慣的な思考様式に無意識のうちに溶け込み、革命を起こすことなく、あらゆる行動様式に傾向と偏りを与えるのである。しかしストア派は単なる英雄の学派だった。それは徳や悪徳のグラデーションを認めない。それは一般人の徳が主に依存するあらゆる感情、あらゆる自発性、あらゆる混じり合った動機、あらゆる原理、感覚、衝動を非難したのである。それは最高の緊張状態にある道徳的性質にのみ作用しうるものであり、したがって当然ながら大衆からは拒絶された。

この自製の哲学の中心的な概念は人間の尊厳だった。内面を見つめ、自らの称賛を求めさせる自尊心は、外面を見て、他者の見解に従って自分の振る舞いを決める虚栄とは違って、ストア派では許されていただけでなく、その主な道徳的原動力でさえあった。別のところで述べたように、この体系において徳の感覚はキリスト教における罪の感覚とほぼ同じ位置を占めている。古代人の概念では罪は単なる病気だった。それを正すのは賢人の役目であるが、その事情についてあれこれ考えたりはしなかった。エピクテトスや他の人々が人間が死に臨む際の適切な心構えについて残した多くの論考の中に、過去の罪に対する悔い改めは全く含まれていないし、それが人格に及ぼす純化と浄化の力に古代人が気づいていたとも思えない。また道徳的病弊の實在は十分に認識されており、高遠で実際には達成不可能な理想が絶えず提案されていた一方で、人間の性質の本質的な素晴らしさを疑う者はおらず、人間が自らの意志で高度な徳を身につける可能性を疑う者はほとんどいなかった。この最後の点で、ローマのモラリストの教えとギリシャの詩人の教えには大きな違いがあった。ホメロスは勇気や怒りなどを常に天の直接の靈感と表現している。運命論の偉大な詩人であるアイスキュロス（*BC525—456）は人間のあらゆる情熱を、ゼウスの動かしえない意志によって作り上げられた大きな目的の鎖の中の一つの輪に過ぎないと考えている。クリュテムネストラをアガ멤ノンを殺害するよう仕向けたさまじな動機を描いた彼の作品ほど、詩の中で壮大なものはないだろう―殺された娘の復讐、アイギストスへの愛、過去の夫婦の義務違反への憤り、カサンドラへの嫉妬、これらすべてが夫の命に手をかけた激しい憎悪に溶け込んでいたのである。カ

サンドラの莊嚴な歌は、すべての情熱の混乱以上に、この行為が天命であり、罪の種から湧き出た血の収穫であり、不幸なアトレウス一族に永遠にまわりつく運命にある古代の呪いの成就であると宣言している。殺された王の遺体の前で、人間の最も荒々しい情熱の激発の前で、居合わせた人々は伏して叫んだ。「ゼウスの思し召しである―ゼウスは最高の支配者であり、すべてを司る神である。ゼウスの思し召しなしに何がこの世に起こるだろうか。」

しかしこの種の問題はローマの哲学にはほとんど、あるいはまったく存在しなかった。人間界の問題や、幸運の贈り物の配分は、神意の管理下にある、と認識されていた。しかし人間は自分の感覚の主人であり、神々と比較されるような卓越した存在になることができた。今でこそ大胆に見えるかもしれないが、このような考え方はローマのモラリストたちのほとんどの学派に共通するものだった。折衷主義者のキケロは「私たちは当然のように自らの徳を誇っているが、もしそれが私たち自身からではなく、神から来たものであるならば誇ることはできないだろう。」と述べている。

「人は皆、運は神から、知恵は自分から来るものであると判断している。」エピクロス派のホラテイウスはその最も高貴な頌歌の中で、自らの徳を信じ、世界の破滅にも動じない正しい人間を描写して、ユピテルが与奪するものだけを祈るようにと説いている。「彼は生命と富を与える。私は自分のために平静な心を確保する。」「徳の自覚を授けられた心の平静」というのがエピクロス派の師に

よる至高の幸福の表現だった。ルクレティウスは格調高い一節の中でエピク羅斯を神とし、彼の前では民衆の神々は取るに足らない存在であると豪語している。セレスは人間に小麦を与え、バッカスはワインを与えたが、エピク羅斯は徳の原理を与えたと言うのである。ヘラクレスは怪物を征服し、エピク羅斯は悪徳を征服した。ユウエナリス（*ユニウス・デキムス、AD 60—128、風刺詩人）は言った「健康な肉体に健康な精神を宿すよう祈れ。死を恐れない勇敢な魂を求めよ……しかし、自分自身で得られるものもある。」セネカは言った「災難、損失、中傷は徳の前では太陽の前の蠟燭のように消えてしまう。」「ある点において賢者は神より優れている。神は恐れを抱かないことをその性質に負っているが、賢者は自分自身に負っているのである。崇高な境地！彼は人間の弱さを神の安全に結びつけているのである。」彼は他の所で書いている「不死を除けば、賢者は神に等しい。」「賢者の特徴は自らの善悪のすべてを自分自身の中に求めることである。」とエピクテトスは付け加えた。「その理性的な性質に関する限り、彼は神々に何ら劣っていない。」

しかしストアイズムには人間と神との関係に対するこの見方を大きく修正し、時には積極的に否定するような、別の思想の傾向も見られるようになった。ストア派の神学は定義が不明確で、不確かだ、幾分矛盾した汎神論だった。神性は特に神意と道德的善の二つの側面から崇拜され、人間の魂は「神性の分離した断片」、あるいは少なくとも聖なるエネルギーに満たされ、そして伴われている存在とみなされていた。キケロは「いと高きところからの靈感なしに偉大な人物はなかった。」と

言い、セネカは「神にとって閉ざされたものはない。神は私たちの良心の中に存在する。神は私たちの思考に介入する。」と言った。彼は他の所で書いている。「ルキリウス（*ガイウス、BC2世紀の風刺作家）よ、汝に告ぐ。私たちの内には私たちの善悪の行いの監視者、守護者である聖なる霊が宿っている：人は神なしでは善良であることができない。神の助けなしに誰が運命を凌ぐことができるか。神は高貴で高遠な助言を与える。神（何の神か私には分からないが）は、すべての善良な人間の中に宿っている。」マルクス・アウレリウスは言った「汝の内なる神に、男らしい存在、市民、持ち場においてラツパが鳴ればすぐに命を捨てられる兵士を捧げよ。」「私たちの内なる神を信じ、純粋な崇拜によって彼を称えるだけで十分である。」

このような文言はストア派の著作には少なくない。しかし、より一般的には徳は神を模倣する人間の行為として示されている。これがプラトンの「神に従え」という格言の意味である。そしてストア派はこれを絶えず繰り返し、最も感動的で美しい敬神の多くの文言を展開し、さらに神意の定めに対する最も絶対的で疑念なき服従の義務を付け加えたのである。この後者の点に関する彼らの理論は人間の感情的な側面に対する彼らの反感とよく一致していた。「泣くこと、不平を言うこと、うめくことは、反逆である」「恐れること、悲しむこと、怒ることは、脱走兵になることである」「あなたは役者にすぎず、主人が決めた役を演じているに過ぎないということを忘れてはならない。それは短いかもしれないし、長いかもしれない。貧乏人を演じろと言われたら心して演じよ。身体

障害者、行政官、私人、いずれの場合も自分の役を立派に演じよ。」「何物も失ったとは言わず、返したと言え。妻や子が死んでも返した、農場を奪われても返したのである。それは不敬虔な男の手に落ちるだろう。自らの力によってそれを与え給うた神がそれを回収されるというのは、あなたにとってどういうことなのだろうか？」「神は善良な人間を栄えさせておかない。試練を与え、強くして自分のために準備されるのである。」「神は自ら認められる者、愛される者を鍛え、試し、行使される。しかし神に甘やかされているような者には将来に悪しき事が待っている。」マルクス・アウレリウスは従順な感謝の気持ち美しく爆発させながら叫んでいる「ある者はアテネについて言った。ああ、親愛なるケクロプス（*伝説上のアテネの初代の王）の都よ！しかし世界について、ああ、親愛なるユピテルの都よ！と言えないだろうか？…世界よ、汝にふさわしいものはすべて、私にふさわしいものである。」（*「MEDITATIONS」には色々な英訳があるがGutenberg Project版を翻訳して挿入した）

こうした無限に追加できそうな引用は、ストア派が神意の概念の拡張によって彼らの教えの一面に疑いなく見られる傲慢さの緩和に成功したことを示すのに役に立つ。しかし、この試みによってもう一つの危険が生じた。この危険こそあらゆる時代の道徳体系の非常に多くを挫折させてきたものである。このような神意の命令への絶対的服従を命じ、情緒を禁じ、弟子たちを周囲の環境から完全に独立した存在とする教義は、ほとんどの社会において必ず静寂主義に陥り、積極的な徳とは

絶対に相容れないことが証明されてきた。しかし幸いなことに、古代文明では徳の観念は早い時期から政治活動の観念と不可分に結びついていたので、長い間この危険は完全に回避されていた。古代において国家は、人々の思考の中で現代では決して到達できないほどに重要な位置を占めていた。愛国心の力は道徳的、知的生活のあらゆる性質に及んでいた。最も深遠な哲学者、最も純粹なモラリスト、最も卓越した詩人は軍人や政治家だった。それゆえ古代の倫理体系においては時に市民的な徳の過度の優越が起こり、また最も忌まわしい逆説も少なからず生じた。プラトンは妻の共同生活を提唱したが、その主な理由は生まれる子供が専ら国家と結びつくようにするためだった。アリストテレスはギリシャ人と野蛮人の差異を自分の道徳規範の基礎としたと言ってもよいだろう。十七世紀の論者たちはスパルタの法律をベネチア憲法と同様に理想的なものとして絶賛し続けた。一方、思索の領域と政治活動の領域との接触は、ある面で古代の哲学に非常に有益な影響を与えた。愛国心は義務の物差しの中でほとんどいつも重要な位置を占めていた。このことは現代の指導者たちが愛国心を軽視したり疑ったりしていることと著しい対照をなしている。確かにアナクサゴラス（*科学的考察をしたがために不敬の罪で訴えられ、アテネを去ることを余儀なくされた）が自分の本當の国として天を指さし、死後の世界に降りるのはどの国からでも同じなのだから追放は悪いことではない、と宣言したとのことである。こうした感情はエピクロス派やキニコス派に存在しなかったわけではないが、一般的な風潮とは正反対のものだった。愛国心は道徳的な義務であり、最高位の義務であるとされた。私たちの祖国への愛は、最も近い近親者への愛よりもさらに神聖で

深いものであり、そのために死ぬことさえためらう者は、善人と呼ばれる資格がない、とキケロが高貴な一節の中で主張したとき、彼は古代の一般的な見解を繰り返したただけだったのである。

このように愛国心が強調された結果、古代の倫理学の多くは実践的な性格を持つようになった。実際、モリストたちはしばしば人に野心を抑えるよう勧め、政治的逆境にある人を慰め、まっすぐな人物が一時的に公事から身を引くべき状況があると説いていることに私たちは気づく。しかし政治生活に参加する一般的な義務は強調され、静寂主義的な人生論の虚しさはただ主張されるだけでなく、いくらか誇張さえされていた。キケロは「すべての徳は行動にある。」と宣言している。小プリニウスはストア派のエウフラテス（*AD35—118）に、公務のために自分の哲学的探求に割ける時間が少ない、と嘆いたことがあった。しかしエウフラテスは答えた。公務の執行と正義の運営は哲学の一部を、それも最も重要な一部をなしているのである、なぜなら公事に携わることには学派の教えを実践することに他ならないのだから、と。人類は一つの身体であり、手足はそれぞれに専ら、そして継続的に全体の利益を視野に入れて行動すべきである、というのがストア派の基本的な行動原理だった。マルクス・アウレリウスはこの党派の最も純粋な精神の持ち主であり、十九年間にわたって文明世界を有効に支配していた。トラセア（*パエツス、AD?—66、ローマの元老院議員、自殺を命じられた）、ヘルウィディウス（*AD1世紀の政治家、処刑された）、コルヌトゥス（*ルキウス・アナエウス、1世紀、追放された）その他ストイシズムを信条として取

り入れた多くの人々は、その教えに従って生き、多くの場合死に、専制政治の最も暗い時代に祖国の自由特権のために闘ったのである。

このような高い義務感を持ち、激情を完全に抑え、徳と威厳の冷静な感覚のうちに人生を過ごしてきた人々が、弱い人間の悪夢である迷信的な恐怖に襲われることはほとんどなかっただろう。死への備えは哲学の主要な目的のひとつであると考えられていた。来るべき変化について考えることは、幸運の贈り物から心を切り離す助けになった。そして迷信的な恐怖をすべて消滅させることによって、ストア派の理想である自らを頼みとするタイプの威厳が完成したのである。しかし、死について彼らより雄弁に語り、より平静な勇気で臨んだ哲学者たちがいなかったことは確かであるが、彼らの絶え間ない論争が死を不健康に際立たせ、その人生観全体を幾分色褪せさせてしまったことは否定しがたい。ペーコンが言ったように「ストア派は死にあまりにも多くのものを支払い、その準備によって死をより恐ろしいものにしてしまった。」スピノザ（*1632—1677、オランダの哲学者）の格言には深い知恵がある。「賢者の研究にふさわしいのは、いかに死ぬかということではなく、いかに生きるかということである」、「賢者が最も考えない主題は死である。」活き活きと自分を全うする生活は終末への最上の準備である。そして死がもたらす災いの大部分は、その予期にあるのだから、絶え間ない瞑想によってその恐怖を取り除こうとする試みは、ほとんど必然的にその目的を達成することができない。その一方で不自然に緊張した、熱っぽい、悲劇的な性格をつく

り出し、人間の進歩に不可欠な野心と熱意を消滅させ、愛情を冷まし、涸れさせてしまうこともま
れではない。

中世のアイルランドにまつわる多くの半異教的伝説の中で、最も美しいもののひとつは「生と死
の島」に関するものである。ミュンスター（*南西部）のある湖に二つの島があったと言う。一つ
の島には死が決して立ち入ることができなかったが、そこには老いと病、人生の倦怠、恐ろしい苦
しみの発作がすべてあった。そしてこれらゆえに住民は不死に倦み、もう一つの島を安息の楽園と
して見るようになった。彼らは暗い水の上へ帆船で乗り出した。彼らは岸に辿りついた。そして安
らいだ。

この伝説はキリスト教よりも異教徒の精神にはるかに近く、実際は（*不死を手に入れたが不老
を手に入れるのを忘れた）テイトノスの神話の別の形に過ぎないが、ストア派の代表者たちが死を
どのように見なしていたかを非常に忠実に表している。魂の将来の運命に関する古代の哲学者の判
断には、多くの見解や確信の相違があったが、死を単に自然の休息と見なし、それに伴う恐怖を想
像力の病弊によるものとすることで一致している。死は現在の私たちを苦しめない唯一の悪であ
る、と彼らは言った。私たちが存在する間は死はなく、死が訪れると私たちは存在しなくなる。死
を単に生の後にあるものとするのは間違った考えであって、それは生の前にあるものでもある。そ

これは私たちが生まれる前と同じになることである。消された蠟燭は火をつける前と同じ状態なのであり、死んだ人は生まれていない人と同じ状態なのである。死はすべての悲しみの終着点である。死は幸福を保証し、苦しみを終わらせる。それは奴隷を残酷な主人から解放し、牢屋の扉を開け、痛みを鎮め、貧しさとの戦いを終わらせる。それは自然の最後にして最高の恩恵である。人間をすべての心配事から解放するからである。悪くてもそれは私たちが楽しんできた宴の終わりに過ぎない。それは望まれようと、疎んじられようと、呪いでも悪でもなく、単に私たちの存在をその最初の成分に分解だけのするものであって、喜んで従わなければならない私たちの自然の法則なのである。

アカデミアのクラントール（*BC?—275）が創始したとされ、キケロ、プルタルコス、その他のストア派の著作の中で大きな位置を占める「慰めの言葉」という美しい文献の主な話題はこういうものだったのである。キケロはプラトンのすべての学派と同じく、この主題に魂の不滅性についての非常に確固とした不変の言及を追加している。プルタルコスは同じ理論を同じように確信していたが、自身の「慰めの言葉」の中ではそれに地味な地位しか与えていない。またそれは哲学的根拠ではなく、神託の証言とバツカスの秘儀に基づくものだった。この教義はストア派では仄かで不確かな光しか当てられておらず、主題として取り上げられることは滅多にないか、全くなかった。しかしキリスト教の宗教文献から異教の哲学へと目を向ける研究者にとって最も印象深いのは、

後者には死の刑罰的性格に関する概念がまったく存在しないことである。ソクラテスによれば、死は生命を消滅させるか、あるいは肉体の束縛から解放するかのどちらかである。前者の場合も死は祝福であり、後者の場合は最大の恩恵である。エピクロスは言った「死は重要なものではないという考え方に慣れよ。すべての善とすべての悪は感情によって成り立つ。そして死が感情の喪失以外の何ものかというのか？」キケロは言った「魂は死後も残る。あるいは死によって滅びる。もし残るなら幸福である。滅びても惨めではない。」セネカは弟の死についてポリュビオスを慰め、このように考えるよう勧めた「もし死者に何らかの感覚があるとすれば、私の弟はいわば人生の牢獄から解放され、ついに自由特権を満喫して、より高いところから自然の驚異と人間のすべての行為を見下ろし、彼が長い間虚しく理解しようとしていた神的な事柄をよりはっきりと見ているだろう。しかし、幸福か無かのどちらかである人物のために、どうして私が苦しまなければならないのだろう。幸福な者の運命を嘆くのは嫉妬であり、実体のない者の運命を嘆くのは狂気である。」

しかし、ギリシヤやローマの哲学者たちがこの点において一致していたにもかかわらず、民衆の心には強い反対の流れがあった。ギリシヤ語で迷信とは、文字通り神やダイモンを恐れることを意味する。哲学者たちは、俗人が死後の終わりのない苦しみを恐れて、死について考えることに慣れてくると描写することがある。ギリシヤにはこのテーマに関する神話が沢山ある。初期のギリシヤの壺には、中世のプレスコ画のような地獄の責め苦の場面が描かれることがあった。エピクロス

主義が迷信的な恐怖の束縛から人間の心を解放するものとして歓喜をもって迎えられたことは、その軛がいかに苛酷なものであったかを示している。ルクレティウスの詩の中に、キケロや他のラテン系モラリストの一節の中に時折、とりわけプルタルコスPlutarchusの論文「迷信について」の中に、共和制後期から帝国期にかけてもこうした恐怖が民衆に深い影響を与えていたことが窺える。迷信を打ち砕くことは哲学の最高の役割であるとされた。プルタルコスはそれを神に対する最悪の中傷であり、無神論よりも悪質で、不道徳な神話もたらした悪しき結果であると非難し、別の教訓を与える伝説を喜んで取り上げた。例えばこのような物語である。アルゴスのある祭りのとき、ユノの像を神殿に運ぶはずの馬が止まってしまったので巫女の息子たちが自ら車の軛を引いた。母親は彼らの敬虔さを称賛して、何であれ人間にとって最高の恩恵を施すよう女神に祈った。祈りは叶えられ―彼らは眠り込んで死んでしまった。同じくデルフィのアポロ神殿の建築家たちも、最も良い報酬を選んで与えるよう神に祈った。それに対して神託は七日間を歓楽のうちに過ごすべし、その翌日の夜に報酬を与えようと告げた。彼らも眠ったまま死んでしまった。白鳥はアポロに奉納された。その死に際の歌には予言的な力があると信じられていたからである。スペインのケルト人は寺院を建て、死を称える賛美歌を歌った。善良な人間が自分の人生を振り返るとき、それを恥じることなく、積極的な満足感を持って眺めることができること、あるいは英雄的な死に対する人間の敬意は創造主の意思の予測であることに疑問を呈した古代の哲学者はいなかった。ソクラテスや古代の多くの賢人たちの最期に顕著だった平穏な勇氣、あらゆる後悔の念の完全な欠如はこの確信に起因するもの

であろう。宗教の歴史の中で、この点における信仰心の性格の根本的な変化ほど驚くべき事実はない。ギリシャの七賢人の一人、キロン（*BC7―6世紀）はその生涯の終わりに弟子たちを自分の周りに集めた。そして自分の長い人生の中で、死に際して悲しむべき行いが一つしか思い出せないことを喜んだ。それは複雑なジレンマの中で、友人への愛が彼の正義感を少しばかり曖昧にってしまったことだった。テイトゥス（*五賢帝の一人）は死の床で自分を責めるような行いはたった一つしか思い出せないと宣言した。（*それが何なのかは明かされなかった）アントニヌス・ピウス帝（*在位AD138―161）が生きていた最後の夜、護民官がその夜の合い言葉を尋ねて来た。瀕死の皇帝は「平常心」という言葉を与えた。ユリアヌスは消えゆく信仰の最後の偉大な代表者であり、同じ威厳ある系統を受け継いでいた。怒れる司祭たちの呪いと彼が愛した大義の差し迫った破滅の中で、彼は自分の徳を自覚しながら穏やかに死んだのである。古代が記録する最も最も恐れを知らない彼の死は、新しく生じた教義に対する哲学的異教徒の最後の抗議だった。

ある論者たちは、古代の哲学者がキリスト教倫理を先取りしていた多くの点を示す際に、キリスト教が単なる異教の最高の教えの発展形、あるいは権威ある確認であるかのように、あるいはそれが追加したものは少なくとも異教世界の最良の純粹な精神がそれを知っていれば喜んで受け入れたであろう性質のものであるかのように表現するのが通例である。この考え方は多くのプロテスタントの教えに当てはめるなら多くの真実を含んでいるが、初期キリスト教会や中世のカトリックの教え

に当てはめるなら著しく誇張されているか、完全な間違いである。哲学者たちが最も重要視したテーマについて、彼らの一致した結論はカトリシズムの教えの極端なアンチテーゼだった。哲学者たちは死は「法則であって罰ではない」と教えた。神父たちは死はアダムの罪がこの世にもたらした罰であり、それが有害な植物の出現や物質界のあらゆる異変の原因でもあり、時には太陽光の減弱さえも引き起こすと主張した。前者は死は苦しみの終わりであると説いた。彼らは肉体が灰になった人々にさらに物理的な害悪が待ち受けているという考えを愚かさの極みと嘲笑した。そして彼らは自ら信じる通り、迷信的な恐怖の最終的な消滅が近づいていることを力強い雄弁を振るって語った。後者は人類の大多数にとって、死は果てしなく続く耐え難い拷問の始まりに過ぎないと説いた。その前では地上の最もひどい責め苦さえ取るに足りないものになるほどの拷問―どのような勇気も立ち向かうことのできない拷問―不死の存在以外には耐えられない拷問である。前者は人間をその意志が罪を犯すまでは純粹無垢な存在とし、後者は生まれた瞬間から罪の宣告を受けた存在とする。前者の偉大な論者（*プルタルコス）は言った「幼くして死んだ子供のために葬儀の犠牲を捧げることはなく、大人の葬儀で行われる儀式もその墓で行われることはない。幼児には地上や現世への愛着がないと信じられているからである。…より良い生活、より幸せな住処へと旅立った純粹な魂を嘆くことは不信心であるがゆえに法は彼らを記念することを禁じるのである。」初期キリスト教神学の著名な唱道者（*アウグスティヌス）は言った「キリストの秘跡を受けずに死んだ幼児はキリストのうちに生き返ると言う者は、使徒の教えに反すると同時に、教会全体を非難するもので

ある。：そしてキリストのうちに生き返らない者は使徒が語る、一人の人間が犯したために、すべての人間に宣告されるようになった罪、の宣告を受けなければならない。全キリスト教徒が信じている通り、幼児は生まれながらにしてこの罪に責任があるのである。」一方の党派は人間は自らの徳によって、そのみによって神に受け入れられるのであって、あらゆる犠牲、儀式、形式は無意味であり、神の眞の崇拜は神の善を認識し模倣することであると宣言し、その基礎を人間の道徳的性質に置こうと努めた。もう一方の党派によれば、教会の教えを盲目的に信じ、教会が命じる儀式を正しく守らなければ、人間の徳の最も英雄的な努力も永遠の断罪の宣告を回避するには不十分である。哲学者たちは一致して神の怒りと復讐、そしてその手による来世の拷問を否定し、司祭たちは反対意見を同様に非難されるべきものと考えていた。

これらは古代の哲学の基本原理に関わるものであり、根本的な相違点である。異教徒の哲学者の主な目的は想像力が死の周囲に投げかけた恐怖を払拭することであり、この最後の恐怖の原因を消し去ることによって人間の自由特権を確保することだった。カトリックの司祭たちの主な目的は死それ自体をできるだけ忌まわしく、恐ろしいものとし、その恐怖からの脱出は彼らの支配に完全に服従しなければ期待できないとすることによって、死を政治の道具に変えることだった。踊ったり警告したりする骸骨、その他の死の忌まわしい陰気な安らぎのないイメージを増殖させ、火葬を土葬に置き換え、腐敗のおぞましさに想像力を集中させ、とりわけ不可視の世界に悪魔の幻影や耐え

難い拷問を登場させることによって、カトリック教会は死それ自体を言いようもなく恐ろしいものにし、それによって死が人間に与える慰めに対抗することに成功したのである。伝説、儀式、芸術、教義、すべてがこの目的のために共謀した。その奇跡の歴史はその成功の明白な証拠である。迷信の大半は二つの中心の周りに群がっていた―死への恐怖と、人生のあらゆる現象は特別な靈的介入の結果であるという信仰である。古代人の迷信はたいてい後者の種類のものだった。占い、予言、戦争への介入、儀式を怠ったことの報いである不思議な出来事、国家や支配者の運勢における重大な出来事などは通常こうした形をとっていた。中世ではこうした迷信は非常に一般的だったが、最も顕著な迷信は煉獄や地獄の幻影、目に見える悪魔との戦い、あるいは悪魔の仕業という形をとっていた。暗闇には言うことを聞かない子供をさらうお化けがいっぱいいると信じ込ませて子供を支配する母親たちのように、また大人でも完全に解消することのできない観念の連合を作り出すことにしばしば成功する人物のように、カトリックの司祭たちは自らの力の基礎をこの弱点に置くことを決意していた。そして彼らは教育、文学、芸術に対する絶対的支配を長く続けることで、古代哲学の教えを完全に覆し、死の恐怖を何世紀にも渡って空想上の悪夢にすることに成功したのである。

しかしこの状況には別の側面もある。最良の異教徒が死に対して抱いていた漠然とした不安は教会の教えの前に消え去った。そしてしばしば希望に満ちた狂喜に取って代わられたが、後に煉獄の教義がこれを鎮めることに大きく貢献した。しかしカトリックの死に対する考え方の正当性や、死

が人間の幸福に及ぼす影響についてどう考えるかは別として、それが異教徒の哲学者のそれと根本的に違っていることは明らかである。人間は不完全であるばかりでなく墮落した存在であり、死はその罪に対する罰である、というのは人類にとって極めて新しい教義だった。そしてそれは世界の道徳史に最も重大な性格を持った影響力を及ぼしたのである。

古典的な死の概念とカトリックの死の概念との大きな乖離は、それぞれの体系の自殺に対する態度に非常にはっきりと現れている。これはおそらく一方の古代、とくにローマのストア派の教えと、他方のほとんどすべての近代のモラリストの教えのあらゆる対照の中で、もっとも顕著なものである。確かに古代人はその行為に決して全会一致で賛成していたわけではない。古代の最も賢明な言葉の多くを語っているピタゴラスは「指揮官、すなわち神の命令なしに、人生の守備隊や駐屯地を離れること」を禁じたと言われている。プラトンも同様のことを言ったが、法律がそれを必要とする場合、また人が耐え難い災難に見舞われた場合、あるいは貧困のどん底に沈んだ場合には自殺を認めている。アリストテレスは自殺は国家を傷つけることになるため、市民的な根拠からこれを非難した。ギリシャの自殺者の名簿は長くはないが、そこにはゼノンやクレアンテスのような有名な名前がある。自殺はより重要な位置を占めていたローマでも、その合法性は決して公理とは受け入れられておらず、レグルスの物語は、それが歴史であれ伝説であれ、かつて（*自殺による逃避ではなく）苦痛に耐えるのが最高の理想だったことを示している。ウェルギリウスは自殺者の来世を

陰鬱な色調で描いている。キケロはピタゴラスの理論を強く主張したが、カトー（*小、マルクス・ポルキウス、ウティケンシス、BC95―46）の自殺は称賛している。アプレイウス（*AD124―170、ルキウス）はプラトンの哲学を解説して「賢者は神の意志によらない限り肉体を捨てることはない。」と教えた。カエサルやオウィディウスなどは、極度の苦痛の中では生を軽んじることは容易であり、真の勇氣はそれに耐えることであると主張した。ストア派には、人は義務から逃れることはできないという信念と、すべての人は自分の命を処分する権利を持っているという信念が共存していた。セネカは自殺を強く擁護したが、それを悪いと考える者もいたことを認め、彼自身も弟子たちの間に生じた「自殺への情熱」と呼ばれるものを和らげようとした。セネカは自殺を強く擁護したが、それを悪いと考える者もいたことを認め、彼自身も弟子たちの間に生じた「自殺への情熱」と呼ばれるものを和らげようとした。マルクス・アウレリウスはこの問題について少しばかり揺らいでおり、すべての人は好きなきに命を捨てる権利があると主張したり、人間は神の兵士であり、持ち場を放棄することは犯罪であるというプラトン主義に傾いたりしている。プロティノス（*AD204―270、レバノン生まれ）とポルピュリオス（*AD234―305、エジプト生まれ）は、すべての自殺に強く反対した。

しかしこのような意見があったにしても、古代の自殺観が私たちのものと広範かつ強力に対立していることに疑問の余地はないだろう。哲学のほとんどの学派では一般的に自殺は是認されており、

自殺を非難する学派でさえ、自殺を現在のような極度の大罪とすることはなかったようである。このことは第一に古代の死に対する観念のためである。また社会が自殺を容認するようになると、その行為は不名誉なものではなくなり、その実際の犯罪性の多くを失うことを忘れてはならない。自殺が現代において遺族にもたらす汚名と苦痛だけが自殺者の罪のすべてではない（*自殺自体が罪である）と最も固く信じている人たちも、それらが自殺の罪をとて最も重いものにしていくということは容易に認めるだろう。古代にはそれらが存在しなかった。エピクロスは「死が訪れることを好むか、それとも自ら死に向かうか、よく考えること」を人に勧めた。弟子の中でこの学派の著名な詩人ルクレティウスは自らの手で死に、暴君殺しのカツシウス（*ガイウス・ロンギヌス、BC 86―42、カエサル暗殺の首謀者）、キケロの友人アッティカス（*ティトウス・ポンポニウス、BC 110―32）、放蕩者ペトロニウス、哲学者ディオドロス（*クロノス？、BC?―284）も同様だった。プリニウスは人間が墓へと飛び去る力をもっていることについて、人間の運命は少なくともこの点では神の運命より優れていると述べた。そして疲れた人物が迅速かつ無痛で死ぬるような薬草で世界が満たされていることは神意の賜物の最大の証拠の一つであると指摘した。キケロについて少し触れただけで私たちの目の前に現れる、最も印象的な人物の一人は古代の人々に「死の弁士」と呼ばれたヘゲシアス（*BC 4―3世紀）である。快樂の追求を理性的存在の唯一の目的とするキュレネ派の著名なメンバーである彼は、人生は不安に満ち、快樂ははかなく、不純物であり、人間にとって最も幸せな運命は死であると説いた。彼の雄弁の力、彼が墓の周辺に放った強

烈な魅力は弟子たちにその理論の結果を歓喜とともに受け入れさせ、多くの人々が自殺によって世の中からの悩みから解放された。その感染力は非常に大きく、プトレマイオスが哲学者をアレクサンドリアから追放せざるを得なかったほどだったと言われている。

しかし、自殺が最も脚光を浴び、その哲学が最も十分に練り上げられたのは、ローマ帝国とローマのストア派の間のことだった。クルティウス（*マルクス、BC362没、地震のあとフロ・ロマーノに巨大な深い穴が空いた。ト占官は神々がローマの最も貴重な財産を要求していると告げた。彼はローマ人の武器と勇氣こそがそれである、として完全武装して穴に飛び込み、ローマは救われた。）やデキウスのそのように、早い時期から自己を犠牲にすることは宗教的儀式とみなされていた。それはよく示唆されているようにおそらく人身御供の習慣の名残であって、異教の終焉に向かつて多くの力が同じ方向へと働いた。前述のようにストア派の理想になり、その劇的な自殺が彼らの雄弁の人氣のテーマになったカトーの例、剣闘士のシヨーが大変盛んになったことで生じた死に対する冷淡さ、同胞を殺すよりも、征服者の快楽に奉仕するよりも、自分の槍を自分の首に突き刺すか、自由に至る他のもっと恐ろしい道を見つけた蛮族の捕虜たちの多くの例、政治犯に自分の刑を執行させる習慣、そして何よりもカエサルのがまぐれで残酷な専制によって自殺が異常なまでに注目を集めるようになったのである。ネロの治世に、セネカが虐げられた者の唯一の避難所、よろめく心の最後の防波堤として自殺にしがみついた情熱的な喜びほど感動的なものはないだ

ろう。「人生を罰でなくするもの、運命のしかめっ面の下に立ち、自分の心を揺らすことなく、それに自己を支配させることができるものは死のみである。私には頼れる存在がいる。目の前には様々な形の十字架が見える：拷問台や鞭、あらゆる手足や急所に使う拷問道具も見えるが、死も見える。それは私の野蛮な敵や高慢な同胞の向こう側に立っている。私がほんの一步進んで自由特権を手にするのができれば、苦役の辛さは消え去る。人生のあらゆる危害に対して、私は死という避難場所を持っているのである。」「どこを見ても悪の終わりがある。あそこに大きく口を開けた絶壁が見える―そこから自由特権へと降りて行けるだろう。海、川、井戸―その底に自由特権があるのが見えるだろう：自由への道を探すのか？―身体中の血管に見つけることができるだろう。」「拷問による死と素朴で心地よい死のどちらかを選べるのなら、なぜ私は後者を選んではいけないのだろうか。私が航海する船と住む家を選ぶように、私は生を去る際の死を選ぶだろう：死ほど私たちが望みどおりに振舞うべき事柄はない。剣であれ、縄であれ、血管に忍び入る毒であれ、自分の衝動のままに生を離れ、自分の道を進み、隷属の鎖を断ち切るのだ。人はその生において他人の称賛を求めべきであり、その死は自分自身にのみ関わるものである。それは彼をもっとも喜ばせることである：人生には一つの入り口と多くの出口があること、永遠の法が定める最良のものはこれである。私はすべての苦悩から解放され、すべての束縛を振り払うことができるのに、なぜ病気の苦しみや人間の暴虐に耐えなければならぬのか。人生が悪しきものでないのはこの理由によるのであり、またこの理由のみによるのである―だれにも生きる義務などない。人の運命は幸福なものである。な

ぜなら不幸であり続けることは自分の選択だからである。生きていて楽しいと思うなら生きれば良い。そうでないなら来たところへ帰る権利がある。」

これらの引用は非常に多くの中からいくつか選んだものに過ぎないが、ローマのストア派の最も影響力のある指導者が自殺を擁護した情熱を十分に示すものである。一般的な問題として法律は自殺を権利として認めていたが、ある時期から二つのわずかな制限が課されるようになった。政治的犯罪で告発された者の多くは遺体を晒される不名誉と財産の没収を防ぐため、裁判前に自殺することが慣例となっていたが、ドミティアヌスは被告の自殺はその判決と同じ結果を招くべきであると定めてこの方策を封じた。後にハドリアヌス帝（*在位AD117―138）はローマ兵の自殺を脱走と同様に扱った。こうした例外を除いては、その自由特権は絶対的なものだったと思われる、その行為は最も多様な動機のもとに行われた。二度目の内乱の原因になるのを避けるために自殺したと言われているオト帝（*在位AD69）は、カトーの自殺に匹敵するほどの壮大な称賛を浴びた。ダキア戦争では敵がローマの名将ロンギヌスを捕らえ、トラヤヌス帝（*在位AD98―117）から降伏の条件を引き出そうとしたが、ロンギヌスは毒を飲んで皇帝を窮地から解放した。オトの死後、兵士の一部は悲しみと敬愛のあまり、彼の亡骸の前で自殺し、またアグリッピナ（*小AD15―59）の解放奴隷も皇后の葬儀の際に自殺した。共和制の崩壊前、戦車競技においてある党派の熱狂的な一員が、お気に入りの御者の死体が焼かれている薪の上に身を投げ、炎の中で死

んでしまった。あるローマ人は幸運に恵まれ、君主の寵愛を受けていたがティベリウス帝（*在位AD14―37）の治世に自害した。帝国の犯罪を目の当たりにすることに耐えられなかったのである。また他の者は不治の病に冒されていたが、少なくとも自由に死ねるようにとドミティアヌスの死まで自殺を延期し、暴君が暗殺されると機嫌よく墓へ急いだ。キニコス派のペレグリヌス（*プロテウス、BC?―165）は、人生に疲れたので決めた日に旅立つと宣言し、大勢の参列者の前で火葬の薪に登った。しかし多くの場合、死は「病気の最後の医者」であって、自殺は耐えがたい苦痛からの正当な救済であると考えられていた。エピクテトスは言った。「何にもまして、扉が開いていることを忘れてはならない。遊んでいる少年たちよりも臆病になってはならない。少年たちは遊びが楽しくなくなると、もう遊ばないと宣言する。あなたがたもあらゆることがあなたがたに重くのしかかり始めたら退くがいい。しかし留まるのなら不平を言ってはならない。」セネカは老いの極みを待っている者は「臆病者とかけ離れた存在」ではない、「瓶の底の澱まで飲み干す者は当然ワインの中毒者と見なされるように」と断言した。そして付け加えた「老齢が私の良い部分を残しているなら私はそれを手放さないだろう。しかし、もしそれが私の心を揺さぶり始め、その能力を一つずつ消し去り、私に生命ではなく息を残しているだけなら、私は腐った、ぐらつく建物から離れるだろう。私は病気が治るかもしれない、私の心に障害を残さないのなら、死によって病から逃れることはないだろう。私は痛みのために自分自身に手を下さない、なぜならそのように死ぬことは征服されることだからである。しかし、もし私が助かる望みなしに苦しまなければならぬ」と

知ったなら、痛みそのものに対する恐れのためではなく、それが私の生きる目的のすべてを妨げるがゆえに私は旅立つだろう。」ムソニアスは言った「家賃を支払われない家主がドアを引き抜き、垂木を取り去り井戸を埋めるように、私はこの小さな体から追い出されるようだ。私にそれを与えた自然が、目と耳と手と足を一つずつ取り去っていく。だから私はこれ以上長居せず、宴会を辞するようによく出て行こう。」

自殺は安楽死であり、病による苦しみの短縮であり、老いの衰えに対する保証であるという考え方は哲学的な論説にとどまらなかった。これが頻繁に実践されたことを示す証拠がたくさんある。このように自分の人生を短縮した人々の中に最後のラテン詩人の一人であるシリウス・イタリクス（*AD 26—101）がいる。小プリニウスは友人が病に倒れたとき、冷静かつ慎重に自分の進むべき道を決めたことに対して最も熱い称賛の言葉を述べている。彼は病気が危険で長引くだけなら友人の希望通りに自重し、もし望みがないなら自分の手で死のうと決心したのである。彼はローマ人らしい穏やかな勇氣をもってこの処置の妥当性を説き、医師たちの会議を招集して、どちらの運命にも中立な精神で冷静に彼らの宣告を待った。同じ論者は恐ろしい病気がかかって体中がただれた塊のようになってしまった男のことに言及している。彼の妻はこの病気が不治の病であることを確信して夫にその苦しみを短くするよう勧め、彼を励ましてその試みへと奮い立たせ、彼と共に墓に入ることを自分の特権と主張したのである。夫と妻は互いに結び合って湖に投身した。セネカ

は手紙の中でローマの自殺者の死の床についての詳しい描写を残している。哲学の教えを長い間嘲笑してきたが、ついには転向者の情熱とともに哲学を受け入れた、驚くべき能力と非常に真面目な性格の青年トゥリウス・マルセリヌスは、不治ではないものの長引く重病に悩まされ、ついに自殺を決意した。彼は周囲に友人を集めた。そしてその多くは彼に生き続けるよう懇願した。しかしその中に一人のストア派の哲学者がいて、セネカが言うところの最も高貴な言葉で彼に語りかけた。彼は、あたかも生きていることが非常に重要な問題であるかのように、自分が決めようとしている問題を重く見すぎないように、と諭した。そして、生命は私たちも奴隷や動物も同様に持っているものだが、本当に価値ある高貴な死はそうではないと主張し、自殺を薦めて論を結んだ。マルセリヌスは自ら望んだとおりの忠告を喜んで受け入れた。友人の助言に従って、彼は忠実な奴隷たちに贈り物を配り、死別が近づいていることを慰め、三日間一切の食事を断ち、ついに体力が完全に尽きると、温かい風呂に入り、静かに息を引き取った。彼の最後の息には人生を退く際の満足感が表れていた。

自殺の理論はまさにローマのストア派の最高到達点だった。哲学者の誇り高く、自立した、確固たる性格は、苦しみや絶望の極限から逃れるための確実な手段があると感じたときにだけ維持することができたのである。徳は単なる利害関係から生まれるものではない。しかし、いまだかつて義務の理想とともに幸福の理想を提示しない偉大な体系が栄えたことはない。ストア派は人々に少し

も望まず、何も恐れないことを教えた。それは死を積極的な至福への道として鮮やかな色で飾り立てなかった。しかし苦しみを終わらせるものとして、死をからあらゆる恐怖を取り除くよう努めた。運命の嵐からの避難所、老いと苦痛からの迅速な脱出手段を人が見つけたとき、人生の苦味は大きく取り除かれた。刑罰というより、むしろ救済とみなされるようになったとき、死は恐ろしいものではなくなった。ストア派の体系において生と死は同じ基調にあった。人間の徳の神格化、罪の観念の完全な欠如、屈辱を最悪の汚点と見なす誇り高く頑固な意志が各個人に等しく見られた。その種のタイプはそれ自身、完璧なものだった。最高点にまで伸長し、最も高貴な目的に向けられたときの、人間の自尊心に伴うすべての徳と威厳がここに示されたのである。謙虚さや謙遜に伴うものはすべて欠けていた。

私は調査のこの段階で少し立ち止まって、先の議論の主要なステップを簡単に振り返ってみたい。そうすることによって、多くの詳細や引用が時として不明瞭にしていた関連性を明確に浮かび上がらせたいと思っている。そうすることでストイシズムがどのような点で既存の社会が生み出した結果であり、どのような点で有効な力だったか、その影響がどの程度キリスト教倫理への道を準備し、どの程度それと対立していたかが一目瞭然になるだろう。

他の人々と同様に、ローマ人の間にも徳の性質と承認に関するはっきりとした知的観念が形成され

る前に、非常に明確な道徳的卓越性のタイプが生まれていたことを私たちは見てきた。人の性格は主にその営みに支配されるものである。そして共和国は完全に軍事的成功を目指して組織されていたために、軍事社会のあらゆる徳と悪徳を持つていたのである。また一つの時代でもそうだが、特に古代の戦乱の状況下では軍隊生活は愛情豊かな徳には非常に不利で、英雄的な徳には非常に有利なことを私たちは見てきた。ローマ人は武力に非常に高い価値を置いていた。常に他者を苦しめることに携わっているため、その自然な、ありのままの慈悲心は非常に低いものだった。彼らの道徳的感情はほとんど政治に制限されており、自分の階級、自分の国、そして同盟国に対してのみ、さまざまに強さで働いていた。不屈の誇りがその性格の最も卓越した要素だった。実際、戦勝国の軍隊が謙虚だったり、遠慮がちだったり、侮辱に寛容だったり、二番手に甘んじたりするなど、ほとんど言葉の矛盾である。外国人との関係における愛国の精神は、統治者との関係における政治的自由特権の精神に似た、不断の油断ない自己主張の精神である。そしてどちらも高い道徳性と大きな献身に非常に合致している。しかし、その影響が強く浸透している社会で真の謙虚さの美点が栄えることはほとんど見られない。ローマ人の目に最も好ましく映ったのは、単純で、強力で、重厚だが、木目の粗い卓越性だった。動機の機微、感覚の洗練、感受性の細やかさなどは、ほとんど評価されることがなかった。

これは情勢の暗い面である。一方、傭兵的な考え方を持たず、素晴らしい献身の実例を他のどの

国よりも頻繁に示したそのメンバーたちが作り上げた国民性は早くから英雄的なレベルに達していた。絶えず死に直面していたため、勇気をもってそれに立ち向かうことが徳の最大の試練だった。人々は素朴で、質素で、高潔で、勤勉な習慣を持っていた。社会のあらゆる年齢と階級に厳しい規律が浸透しており、意志はほとんど比類がないほどに鍛えられ、情熱を抑え、苦しみや対立に耐え、不人気な目的に向かって着実に、恐れを知らずに進んでゆくよう鍛えられていたのである。義務感是非常に広く行き渡っていた。そして都市の利益に対する深い愛着が多くの徳を生み出した。

ローマ人の知的教養が哲学的な議論を生み、多くのギリシャ人教授が部分的に政治的な出来事、部分的にスキピオ・エミリアヌス（*BC2世紀のローマの執政官）の庇護に引きつけられてローマにやってきて、ゼノンやエピクロスの大学派や、その周辺の多くの小学派が彼らの信条を持ち込んだ時代に、ローマ人が到達していた卓越性のタイプはこういうものだった。エピクロス主義は既存の徳のタイプとは本質的に対立するものだったため、大きく広がりはしたが、徳の学派の地位には到達しなかった。ロードス島のパナテイウスや、その後すぐにシリアのポシドニウス（*BC135-51、パナテイウスの弟子）によって教えられたストア派は教養ある階級の真の宗教となった。それは徳の原理を提供し、当時の最も高貴な文学を彩り、道徳的熱意のすべての発展を導いたのである。

ストア派の倫理体系は、最も高い意味で独立した道德の体系だった。私たちの理性が自然の確かな法を明かしてくれること、そして賞罰、幸不幸といったあらゆる動機とは無関係にこの法に従おうとする願望は可能かつ十分な徳の動機になる、というのがその教えだった。またそれは最も高い意味において規律の体系でもあった。理性の完全な制御の下に行動する意志だけが唯一の徳の原理であり、人間の存在の感情的な部分はすべて病的なものである、とそれは教えていた。したがって意志に尊厳を与えて強化し、欲望を卑しいものとして抑圧するというのがその全体的な傾向だった。さらに人間は極めて高い道德的卓越性に到達できること、現世の向こうに恐れるべきものはまったくないこと、人格の尊厳と一貫性のためには狼狽せず死を見つめる必要があること、望むなら死を早める権利があることが説かれていた。

この倫理体系が、彼らの置かれた環境が作り上げた、ローマ人の性格に完全に合致していたことは容易に理解できる。また環境の力によって最初にそれが優位に立ったこと、それが生み出した意志のエネルギーが、変化してしまった社会の風潮に対する強力な抵抗を可能にしたであろうことも明らかである。このことはローマのストア派の歴史に顕著に見られた。一方の帝国の強烈であからさまな墮落を、他方の時流のまさに中心でほとんどの著名なストア派哲学者たちが占めていた高い地位を思うなら、セネカとその学派の著作の厳かな純粹さはおそらく歴史の中のユニークな事実だろう。後の時代にも知的な輝きと全体的な墮落が同時に起こったことは何度もあったが、このよう

な道徳的現象は再現されなかった。レオ10世の時代にも、フランスの摂政時代にも、ルイ15世の時代にも、イタリアやパリの文明の中心に高い道徳的な教えを見つけてはできない。これらの時代の真の指導者はドイツやスイスの辺鄙な町に現れた宗教改革者たち、あるいはジュネーブ近郊の閑居から出てきて、まばゆいばかりのほとんど比類のない雄弁の輝きと、しばしば熱狂的、逆説的、非実践的ではあっても、超越的な威厳と最も陶酔的な純粹さと美しさにあふれた道徳教育でヨーロッパを魅了した病める隠遁者だった。墮落した社会ではその中心に育った最高の道徳的指導者でさえ、周囲の悪徳の伝染を自覚していた。彼らの理想は墮落し、厳格さは緩み、訴えかけるのは浅ましく卑俗な動機であり、人格評価は動揺する不確かなもので、教えのすべては妥協的なものだった。しかし、古代ローマで徳の指導者たちが周囲の腐敗に対して弱々しい行動しか取らなかったとしても、少なくとも彼ら自身の信条は汚れないものだった。カエサルの光り輝く才能は敗れたカトーの道徳的な威厳を覆い隠すことはなかったし、内戦や政治的動揺の劇的な変動の中でも道徳的卓越性の最高権威は決して忘れられることはなかった。リウイウス（*ティトウス、BC1世紀の歴史家）の雄弁は主に徳の描写に使われ、タキトゥスの雄弁は悪徳の烙印を押すのに使われた。ストア派は周囲の墮落のために自分たちの水準を下げることはなかった。そして彼らの教えの中になんらかの広く愛されていた楽しみを探すとすれば、それは墓の静謐さについてつぶさに論じる情熱の激しさの中にしか見つけることができない。

しかし道徳体系は悪徳に対する防波堤になるだけでは十分ではなく、文明の進歩が生み出す道徳的共感の伸張と洗練を認められなければならない。悪に対する敵意が剛直であることは、決して善の概念を拡大する能力を意味しない。ローマにストア派の信条が輸入されてからキリスト教が台頭するまでの間に、政治的变化によって道徳観念は極めて重要な変容を遂げた。そして新しい要素がどこまでストア派の理想と合体するか、またそれが本質的に異なるタイプの理想にどこまで取って代わる傾向があるかが問題になった。この政治と道徳観念の変化は二重構造になっていたが、非常に密接に関連していた。つまり英雄的資質とは異なる、情け深い、すなわち愛情豊かな資質がますます注目されるようになり、そして最初はある階級や民族だけを対象としていた道徳的共感が、多くの人工的障壁の破壊によって、ついにはすべての階級とすべての民族を包むに至ったのである。この変化の原因―キリスト教の勝利の最も重要な前兆―は非常に複雑で数が多いが、この動きの概要を数ページで明らかにすることは十分に可能だろうと私は思っている。

それはギリシャ征服の結果としてギリシャ文明とラテン文明が統合されたとき、ローマ帝国で生まれたものである。ギリシャ人の一般的な慈愛は常にローマ人のそれとは比較にならないほど大きなものだった。彼らの芸術と文学が持つ洗練の力、剣闘士の競技を楽しまないこと、そして征服欲が比較的少なかったことが彼らを半野蛮な征服者たちから大きく隔てており、その理想とする人格に独特の柔和さと優しさを与えていたのである。ペリクレス（*BC495―429、アテネの政

治家、将軍）は死の床に集まった友人たちが、彼はもう意識がないものと思いながら、その素晴らしい功績を語っていたとき、自分が名声を得るための最高の資格を彼らは忘れてしていると告げた。「私のために喪服を着たアテネ人はまだいない。」自分を追放した者たちに危険や苦しみを与えて自分を呼び戻すことを決して強要しないように、と神々に祈ったアリストイデス（*BC 530—468、同）、不当に断罪されたとき、息子に決して自分の死の復讐をしないよう諭したフォークオン（*BC 402—318、同）、これらはすべてローマの影響が生み出したものよりも穏やかな性格を示している。エウリピデス（*BC 480—406、三大悲劇詩人の一人）の劇は古代世界にとって、より穏やかな徳の最高の美しさを最初に大きく啓示したものだ。アテネで栄えた多くの祭祀の中でひとときわ目立ち、他のどの祭壇よりも尊ばれた祭壇があった。周囲には信者たちが群れていたが、そこには神の像も教義のシンボルもなかった。それは隣れみ（*Pity）に捧げられたものだ。そして慈悲（*Mercy）の至高の尊厳を人類で最初に主張したものととして古代世界全体で大いに尊ばれた。

ギリシャの精神は非常に早い時期からその慈愛において際立っていたが、当初はローマの精神と同様にコスモポリタニズムからは程遠いものだった。プリニキウス（*BC 6—5世紀、ギリシャ悲劇作家）が「ミレトス（*小アジア南西岸）の包囲」でギリシャ人に対する野蛮人の勝利を描いたため罰金を課せられたことはよく知られている。彼の後継者であるエスキルス（*BC 525—

456) はペルシャ王と廷臣たちに彼ら自身を野蛮人と言わせ続けるならば、あらゆる演出上の妥当性が侵されてしまうと考えた。ソクラテスは確かに自らを世界市民と宣言した。しかしアリストテレスはギリシヤ人は野蛮人に対して野獣に負う以上の義務を負わないと説いた。また自分の愛は自分の国を越えてギリシヤの全ての人々に及ぶ、と宣言した別の哲学者の共感行き過ぎと思われる。しかしソクラテスの死後 (*BC399) 間もなく起こった哲学的議論の溶解と分解 (*ゼノンとエピクロスの分裂など?) は、政治的な事件 (*BC334、アレクサンドロス東征) にも助けられ、この (*地域的) 感情を強力に破壊することになった。ギリシヤ哲学をエジプトと結びつける伝統、その後ピュロンやアナクサルコス (*前者は後者の弟子、二人ともアレクサンドロス東征に同行) が傾倒したとされるインド学派への称賛、政治生活への無関心を説くことで一致するキニコス主義とエピクロス主義の流行、人気の国家宗教の完全な解体、狭い地域感情と優れた知識や成熟した文明の両立の困難がこの変化の知的な原因だった。アレクサンドロス (*3世、BC356-323) がスパルタとアテネの歴史の栄光を世界帝国というビジョンで消し去り、征服した国々に征服者の特権を授け、アレクサンドリアに商業交流と哲学的折衷主義の大きな中心を作り上げたとき、 (*ギリシヤ精神の) 拡大の動きは大きな政治的刺激を受けたのである。

したがってローマでギリシヤの思想が広まるならば、狭い国民感覚が二重の方法で消失することは明らかである。それはローマ人ではない人々、そしてすでに地域感情から大きく解放されていた

人々の台頭である。ギリシャ人が数世紀にわたって素晴らしい文学を持っていた時代にローマ人はそれを持たなかったこと、文学的な目的のためにラテン語はまだあまりにも粗末なものだったため、ローマ人が純粹に軍事的な状態から知的文明圏に浮上した時期にギリシャの思想が台頭したこともまた明らかである。ローマ最古の自国の歴史家であるファビウス・ピクトル（*クイントゥス、BC254―?）とキンキウス・アリメントゥス（*ルキウス、BC200頃活躍）はともにギリシヤ語で執筆した。エンニウスの詩やマルクス・カトー（*大カトー）の「起源論」はラテン語の改良と定着に大きく貢献し、その先例はすぐには途絶えなかった。ギリシヤ征服の後、ローマの政治的優位とギリシヤの知的優位はともに普遍的なものだった。征服した側の人々は先に述べたような影響のために愛国心が大きく損なわれていたが、新しい状況を容易に受け入れ、保守派の激しい努力にもかかわらず、ギリシヤの風俗、感情、思想がすぐにすべての階級に浸透し、ローマの生活のあらゆる形を作り上げた。鋭い観察者が気づいたように、大カトーはすべてのギリシヤ人哲学者をローマから追放することを望んでいた。小カトーはギリシヤの哲学者たちを最も親しい友人とした。ローマの徳を最高に表現していたのはストア派だった。ローマの悪徳はエピクロスの名の下に身を隠していた。シチリアのディオドロス（*BC1世紀）とポリュビオスは、ギリシヤ語で初めて世界史の輪郭を描いた。ハリカルナッソスのディオニュシオスはローマの古代を研究した。ギリシヤの芸術家とギリシヤの建築家が都市に押し寄せたが、前者はローマに影響されて理想を捨て、肖像画を描くようになった。そして後者は高貴なコリント式の柱を粗悪品の混合物へと劣化させてしま

った。突如活気を取り戻した劇場は今や全面的にギリシャ人の借り物になっていた。エンニウスとパキユヴィウス（*マルクス、BC220—130）はエウリピデスを模倣し、カエリシウス（*カラクテの、BC50—?）、プラウトゥス（*BC254—184）、テレティウス（*プブリウス、アフエル、BC195—159）、ナエウイス（*グナエウス、BC270—201）は主にメナンドロス（*BC342—291）に傾倒した。ルクレティウスの時代には恋する女性を口説くためにギリシャ語が使われていた。ギリシャ文学を生業とする奴隷には莫大な高値がつき、首都の魅力はアテネ社会の輝かしい人々のほとんどをローマに引き寄せた。

ギリシャの知性と風俗が完全に優位に立つと、昔ながらのローマ人の単純さは消滅し、同時にローマ人の共感も広がっていった。そしてそれと同じくらい強い力が、長い間貴族と平民の間に越えられない壁を築いてきた、貴族的感覚と階級感覚を打ち砕こうとしていた。彼らの長い争いは内戦、ユリウス・カエサル、そして帝政へと進んだ。そしてこれらの変化が古い境界線の大部分を消し去ったのである。対外戦争は独自の国民的性格を強烈に発展させ、国民の意識を国内の変化から逸らすものであり、通常は保守的精神に好都合である。しかし内戦は本質的に革命的なものである。それはあらゆる階級の壁を乗り越え、エネルギーと才能に最高の褒賞を与えるからである。この真理を示す非常に顕著な、まったく前例のない二つの事例がローマで起こった。ウェンティディウス・パッスス（*BC89—38）はその軍事的手腕とユリウス・カエサル、後にはアントニウ

スの友情によってラバ追いの地位からローマ軍の指揮官に昇進し、ついには執政官にまで上り詰めた（*BC43）。また紀元前40年頃にスペイン人のコルネリウス・バルブス（*ルキウス、BC1世紀）もこれを成し遂げた。アウグストゥスは最も貴族的な皇帝だったが、独身主義を阻止するため、元老院議員以外のすべての市民に解放奴隷の女性との婚姻を許可した。帝国はいくつかの点で貴族階級の権力にとって明らかに不都合だった。帝国はほとんどの部分において本質的に民主的だった。それは大衆の人気を得ており、貴族と特権の共通の中心だった元老院を崩壊させたのである。新しい専制的な権力はすべての階級に等しく作用し、彼らを平等な隷属状態へと追いやった。皇帝たちは多くの場合、反乱の産物であり、その政策は彼らの出自に支配されていた。彼らの警戒心は多くの貴族を苦しめ、他の貴族は慣習的に行われるようになった公開競技や、公職についていないために駆り立てられた贅沢によって破滅した。そして新たに生まれた存在がすべての相対的重要性を低下させた。富の支配権は新たな場所に移り始めた。皇帝に奨励されたデイレータ、すなわち政治的密告者たちは彼らが非難した人物から没収された財産によって豊かになり、大きな影響力を持つようになった。カリグラの治世から数代にわたって最も力を持っていた市民は解放奴隷たちだった。彼らは宮廷の主要な役職を占め、通常は皇帝に対して完全な優位に立っていた。彼らを通じて嘆願書を提出することはできなかった。皇帝の好意は彼らの手で分配された。時に彼らは皇帝を退位させた。彼らは革命の連続の中でもその権力を揺るぎなく保持した。富でも、権力でも、取り巻きの数でも、生前の宮殿と死後の墓の豪華さでも、彼らは他のすべての人々を凌駕していた。

そして初期のローマ貴族たちが知り合いになることを恥としただろう人々は、彼らの好意を得るための最も誇り高い闘いを見たのだった。

こうした影響に加えて、似たような他の多くの影響も見ることができよう。グラックス（*BC2世紀に護民官となった政治家兄弟）が提唱した植民地政策はナルボンヌ（*フランス南西海岸部）で実行された。そしてユリウス・カエサルの後期にはこの属州のガリア人が元老院に議席を獲得し、ローマ人を驚かせ反発させた。帝国が広大だったため、多数の軍隊が遠い属州に長きにわたって駐留する必要があった。そうして身についた外国の習慣がローマ軍の排他的な感覚の破壊を開始し、その後の蛮族の入隊でそれは完了した。公開競技、膨大な贅沢、権力・富・才能の集中は、ローマを莫大で絶え間ない見知らぬ人々の集まりの中心地、帝国のあらゆる哲学と宗教の焦点とした。その住民はすぐに、あらゆる国民、習慣、言語、信条、あらゆる程度の徳と悪徳、洗練と野蛮、懷疑と軽信が混ざり合い影響し合う、定まった形のない、異質な成分からなる集団と化した。旅行は十九世紀以前のどの時代よりも容易に、そしておそらく頻繁に行われるようになった。文明世界全体が一つのルールに従ったことで、移動の主な障害は取り除かれた。近代国家がほとんど匹敵できず、決して越えることのできない見事な道路が全帝国に張り巡らされ、早馬のリレーによって旅行者は驚くほどの速さで進むことができるようになった。カルタゴの艦隊が破壊された後、ほとんど完全に海賊の支配下に置かれていた海は、ポンペイウス（*BC106―48）によって掃討さ

れた。地中海のヨーロッパの海岸とアレクサンドリアの港は船でゴった返していた。ローマ人は政治、軍事、商業の所用で、あるいは健康や知識、楽しみを求めて帝国の全域を行き交った。コモ（*北イタリア）やテンペ（*ギリシャ中部東岸近くの渓谷）の魅力的な美しさ、バイア（*ナポリ近郊）やコリント（*ペロポネソス半島基部）の豪華な風俗、アレクサンドリアの学校、商業、気候、神殿、シチリアの過ごしやすい冬、アテネやナイルの芸術的な驚異や歴史的な回想、ガリアの大きな植民地の利益が何千ものローマ人を魅了した。ローマの贅沢は最果ての地の産物を必要とし、円形闘技場のための動物の需要がローマの事業を最も荒廃した砂漠にまで拡大した。首都はさまざまな信条に寛容だったため、この都市はすぐに世界の縮図になった。ほとんどあらゆる種類のいんちきや信仰が野放しにされ、大勢の改宗者を誇っていた。外国の思想があらゆる形で台頭してきた。ローマの知的発展を主導してきたギリシャはハドリアヌスの好意的な政策の下で新たな影響力を獲得し、ギリシャ語は初期の論者の言葉だったと同様、後期の論者の言葉となった。エジプトの宗教と哲学は、最も熱狂的な関心と呼んだ。アウグストゥスの治世には早くも何千人ものユダヤ人がローマに居住し、その習慣と信条は人々の間に広く浸透していた。カルタゴ人のアプレイウス、ガリア人のフロラス（*?*）、ファヴォリヌス（*AD80—160）、スペイン人のルカヌス、コルメラ（*ルキウス・ユニウス・モデラトゥス、AD4—70）、マルティアリス（*マルクス・ウアレリウス、AD38—104）、セネカ（*スペイン、コルドバ出身）、クインティリアヌス（*スペイン北部出身）などは、それぞれの分野でローマの文学や哲学に高い地位を占めてい

た。

これに符合する革命が奴隷の世界で起きていた。医師や彫刻家の多くが奴隷だったこと、奴隷階級に三、四人の著名な著述家が現れたこと、ギリシヤから輸入された多数の文学奴隷、内戦中や帝国の最悪の時期のいくつかに奴隷が提供した勇氣、忍耐、主人への献身などの素晴らしい実例が、奴隷階級と自由階級の間の溝を埋めていたが、同じ傾向は解放奴隷の膨大な人数と圧倒的な影響力によってさらに力強く刺激されたのである。ローマの体制の規模は巨大で、頻繁に変動しており、また戦争のたびに無数の捕虜が奴隷にされていたため、奴隷の解放は頻繁かつ容易に行われ、すぐにそれは忠実な奉仕の通常の帰結とみなされるようになった。多くの奴隷が主人に常に許可されていた貯蓄をはたいて自由を買った。また解放後に労働でその代価を支払った者もいた。ある主人は小麦の分配における自分の役職を得るために、ある者は苦しめた奴隷に自分の犯罪を暴露されるのを防ぐために、ある者は虚栄心ゆえに自分の葬儀に長い解放奴隷の列が出席することを望んで奴隷を解放したが、非常に多かったケースは単なる忠実な奉仕の報酬としての解放だった。解放奴隷はまだ元の主人のパトロネージ（*庇護）と呼ばれるものの下にあった。彼は後の時代には封建的な絆と呼ばれるものによって主人に縛られており、貴族の政治的、社会的重要性はクライアント（*追隨者）の数に非常に大きく依存していた。解放奴隷の子供たちもパトロンと同じ関係にあり、自由の剥奪や制約がすべてなくなるのは三代目からだった。こうした制度ゆえに奴隷解放はしばしば

主人の利益になった。主人はその生涯に何度も奴隷解放を行った。死の床で、あるいは遺言によって、絶えず大勢の奴隷が解放された。アウグストゥスがその権限の制限が必要であると考えてるほどに、遺言による奴隷解放は大規模なものになっていった。彼はいくつかの制限を設けた。その中で最も重要だったのは誰も遺言によって百人を超える奴隷を解放してはならない、というものだった。一度、奴隷を特定の服装で区別しようという提案があった。しかし彼らに自分たちの戦力が明らかになったなら都市を思いのままにされてしまうほどにその数が多かつたため、その提案は退けられた。奴隷でない人たちの間でも、すぐに奴隷制度に由来する集団が優勢になった。自由人の大多数は自分自身が奴隷だったか、奴隷の子孫だったと思われる。そしてこのような汚れた血筋を持つ人々が国家のあらゆる役職に就いていたのである。よく言われるように「全世界からの人間の循環があった。ローマは彼らを奴隷として受け入れ、ローマ人として送り返したのである。」

共和政の時代からいかに大きな変化があったかは明らかである。それは長い間単一の階級が最高の地位を独占し、監察官があらゆる形の贅沢とそのひけらかしを厳しく抑制し、ほんの微かな異国の流儀さえ人々の断固とした単純さを損なうことがないように修辞家（*rhetorician*）が都市から追放され、大災害の後に首都をウェイイ（*エトルリアの都市）に移すという提案が、ローマの神々をカピトリノ以外の場所で拝んだり、神官や巫女が城壁の外へ移住したりすることは不敬である、という理由で拒否された時代だった。

全体の融合や平等を目指すこれらの傾向の多くは、環境のストレスから生じた盲目的な力であり、人間の先見性によるものではなく、別の目的のために働いた力だった。しかし明確な政治理論がこの動きを加速させるのにはかなりの役割を果たしたことは認めなければならない。共和国の政策は征服の政策、帝国の政策は保全の政策と大別できるだろう。ローマ人は広大な領土を獲得したが、すべての一等国家が解決を迫られる大きな問題に直面した―どうすれば言語、習慣、性格、伝統の異なる多くの共同体を単一の支配者の下に平和的に留め置けるのだろうか。近代においてこの困難には地方議会が最もうまく対処してきた。地方議会は「分断の線」、すなわち反発心が形成されうる核を提供したとしても、他方では、併合された人々に大きな自治権、地方世論の中心と安全弁、地域的な野心の領域、独自の地域性に適した制度の階層を与えるという貴重な利点を有しているのである。他のいかなる体制も複合体である帝国を、これほどまでに緊張、努力、屈辱なしに継続させることはできず、その避けがたい最終的な分解をこれほどまでに危険と動揺なしに成し遂げることはできない。しかし英国の政治家にとって特別な栄光である地方議会はもっぱら近代文明に属するものである。ローマの懐柔方法は、まず被征服者の習慣、宗教、自治体の自由を最も寛大に許容し、その後徐々に征服者の特権を認めさせるというものだった。帝国の防衛を大幅に彼らに委ね、国務を彼らに開放し、特に何世紀にもわたってローマの住民に固く制限され、その後イタリアとアルプスの手前側のゴール人にだけ許容されていたローマ市民権を彼らに与えることによって、皇帝たち

は帝位に就こうとしたのである。その過程は非常に緩やかなものだったが、スペイン人のトラヤヌスと解放奴隷の息子ペルティナクス（*在位AD193）が帝位に就き、カラカラ帝（*在位AD209-217）の勅令がローマ市民の権利を帝国のすべての地方に拡大したとき、全ての政治的な奴隷解放運動は完成に至ったのである。

パナティウスとコンスタンティヌスの間の時代に、コスモポリタニズムへの抗しがたい風潮が見られることは、ここまでのスケッチから明らかだろう。この集中性は、それを構成する諸々の影響の数、力、一致を考えるなら、まさに歴史上に類のないものだった。この運動は宗教、哲学、政治、産業、軍事、家庭生活のあらゆる分野に及んだ。人々の性格は完全に変容し、すべての制度のランドマークは取り除かれ、すべての組織の原理は逆転した。出来事が人格を支配する、すなわち古い習慣や交際を消滅させ、そうしてほとんどの場合に国の制度や状況の表現、あるいは最終的な道徳の結果である優れた国民のタイプを変えてしまう様子について、これほど顕著な例は他にないだろう。この動きの影響は多くの点で間違いなく害悪であり、帝国の風紀紊乱を招くとして反対した大カトリーヤタキトゥスのような優れた人物もいた。しかし、それは罪を増やしたとしても、必然的に徳に独特の性格を与えた。あらゆるものが階級間の分裂や国家間の警戒心や不和を深めるように相助けている社会で形成された卓越の概念を、世界的な交流と合併の時代にそのまま維持することは不可能だったのである。第一期の道徳の表現は、明らかに狭い軍事的、愛国的な徳に、第二期のそ

れは広い博愛と共感に見出すことができる。

ストア派の哲学はこのような共感の広がりを導くのに見事に適していた。この哲学は、いつの時代にも愛国者の主要な学派だったが、同時に最も早い段階から、最も明確な方法で人類の友愛を認めていたのである。ストア派は徳だけが善であり、他のものはすべて重要ではないと説いた。この立場から彼らは生まれや階級、国や富は人生の単なる偶然であり、徳だけが人を他人に優越させるものであると推論した。彼らはまた、神とは宇宙に命を与え、人間の魂の中に特に鮮明に現れる遍在の霊である、と説いた。そしてすべての人間は同じ神の霊に加わることによって一体になっている仲間であると結論した。この二つの理論はストア派の初期の教えの一部だったが、それはローマの指導者たちの特別な名誉であり、私が述べてきた事態の明らかな結果であって、その事態を完全に救済したものである。現存する「人類に対する博愛」の義務についての最も古く最も強い主張の一つは、キケロの義務に関する論文に見られるが、これは明らかにストアイズムに基づくものだった。キケロは一代にわたって合併の動きが急速に進んでいた時期に執筆し、ストア派の倫理学をほとんど無制限に採用しながら、後にキリスト教会が主張したのと同様の、普遍的兄弟愛の理論をはっきりと主張していた。「この世界全体は神々と人間の共通の都市と見なされなければならぬ」と彼は言う。「人々は人々のために生まれたのであり、彼らはそれぞれ他人を助けなければならぬ。」「人は誰であれ全ての人の幸福を願うよう自然は定めている。それが誰であれ、それが人

であるがゆえにその幸福を願うよう定めているのである。「人を自分の都市に対する義務に限定し、他の都市の住民に対する義務から解放することは、人類の普遍的な社会を破壊することである。」

「自然は私たちを人間を愛するように傾けている。そしてこれが法の基礎である。」同じ原理は後のストア派でも強調を強めながら繰り返された。彼らはテレンティウス（*ブブリウス、アフエル、BC195—159、ローマの劇作家）がメナンドロスから翻訳した有名な台詞を取り入れ、何人をも自分とは無関係とってはならないと主張した。マルクス（*前出ルカヌス）は「人類が武器を捨て、すべての国が愛を学ぶ」ときについて、キリスト教の詩人のように熱く語った。セネカは言った「あなたの周りの宇宙、神と人のすべての物事は一つなのである。私たちは一つの大きな体の一部なのである。自然は同じ材料から、同じ運命のために私たちを生んだのだから、私たちは親戚なのである。それは私たちにお互いへの愛を植え付け、社会生活を営むように私たちを作ったのである。」

「ローマの騎士、解放奴隷、奴隷とは何ぞや？それは野心や権利の侵害から生じた呼び名に過ぎない。」エピクテトスは言った「あなたは市民であり、世界の一部である。手や足が理性を持ち、自然の法則を理解していれば、体の他の部分と関係のないことはしないし、願わないように、市民の義務は自分の利益と他人の利益を別のものと考えないことである。」

マルクス・アウレリウスは言った「アントニヌス朝の一員として、私の国はローマである。一人の人間として、私の国は世界である。」

ここまでではストア派はこの時代の道徳的要求に完全に応えているように見える。ローマ帝国の環境が人間を成熟させたために生まれた普遍的な兄弟愛の理論を、これ以上誠実に承認し、これ以上美しく強く主張することは不可能だろう。プラトンは、人は自分一人で生まれてきたのではなく、一部を祖国に、一部を両親に、一部を友人に負っていると述べた。ローマのストア派はより広い視野に立って、人間は自分自身のためではなく、全世界のために生まれてきたのであると宣言した。そして彼らの理論はその学派の本来の原理と完全に一致するものだった。

しかしストア派は文明の拡大の動きを代表することはできても、同様に文明の軟化の動きを代表することはできなかつた。その情緒に対する非難、その厳格で張り詰めた理想は単純な軍事時代の闘争には見事に適していたが、アントニヌス朝の穏やかな風俗と贅沢な嗜好には不向きだった。ストア派のように享樂ではなく徳こそが至高の善であると信じ、徳はただ啓発された意志が欲望を制御することによって成り立つと信じるが、同時に博愛の情に自由な領域を与え、道徳の体系全てにより宗教的、神秘的な色合いを与える一群の論者が現れ始めた。さまざまに思索的理論を公言し、折衷主義者、周縁主義者、プラトン主義者など、さまざまに名前と呼ばれた彼らは、ストア派のほど強くも崇高でもなく、忍耐や英雄主義には不向きで、意志のエネルギーも際立っていなかったが、はるかに優しく人を引きつける徳性を作り上げる、あるいは代表していることで一致していた。道徳のタイプにおいて力の徳が後退し、愛情の徳が前進し始めた。苦しみに対する無感覚はも

はや装われず、不屈の強さはもはや偶像化されず、弱さと悲しみにもそれぞれにふさわしい徳があると感じられるようになった。こうした論者たちの作品には、強く生き生きとした感覚なくして思ひ浮かび得ないようなデリケートなタッチが溢れている。プリニウスが奴隷の死について書いた有名な手紙や、ストア派が友人の死に対する無関心を誇示していることに対する頻繁な抗議など、単純で素朴な悲哀が人間の最も繊細な琴線に触れる多くの事例においてこうしたことが見受けられる。プルタルコスが娘の死後に妻に慰めの手紙を書いたとき、幼いわが子のある無邪気な性格の記憶が胸に迫ったがためにストア派のあらゆる常套句に背を向けたことを私たちは見る――「あの子は乳母に自分の人形にも乳を与えてくれるよう頼んだのだ。彼女はとても愛情深かったので、自分に喜びを与えてくれるものすべてが自分の持つている最高のものを分かち合ってくれたいことを望んだのだ。」

プルタルコスのモラリストとしての名声は伝記記者としての名声によって不当に覆い隠されているのではないかと思うが、この運動の指導者と見なすのが妥当だろう。彼の道徳に関する著作を、より厳格な学派の最も多弁な説明者であるセネカの著作と比較することは有益かもしれない。セネカは自意識過剰で、芝居がかっていて、過緊張であることが少なくない。彼の教えには何か通俗的説教師のような気取った響きがある。その短い文章の不完全な融合は彼の文体にバラバラな、いわば粒状の特性を与えており、カリグラはそれをセメントなしの砂に例えて喜んだ。しかし彼はしばしば雄弁の威厳、思想と表現の両方において壮大さを發揮し、これに匹敵するモラリストはほとん

どいかなかった。プルタルコスが莊嚴さにおいてはるかに彼に劣るが、より持続的で、落ち着きがあり、一様に心地よい。彼は古代のモンテーニュ（*ミシェル・ド、1533—1592）であり、その才能は主題のまわりで戯れ、優美に光彩を放つ。彼は多くの場合、非常に生き生きとした独創的な例証を好むが、その数が多すぎるために、時にそれは彼の論説の飾りというよりむしろ肌合いいに見えることさえある。プルタルコスのすべての著作の特徴は穩やかで優しい精神と、逆説や誇張、過度の卑屈さを排した判断力である。プルタルコスは慰めのモチーフを集めることに、セネカは慰めを必要としない人物をつくること最も秀でている。プルタルコスには女性的なところがあるが、セネカはすべてにおいて男性的である。前者の著作はフルートの音色に似ており、古代人はこのフルートに、情熱を鎮め、悲しみの雲を忘れ去らせ、穩やかな説得によって人を徳の道に引き込む力を見出した。後者の著作は、勇ましい勇氣で魂を燃え立たせるラツパの音色に似ている。前者は子供の死を嘆く母親を慰めるのに最も適しており、後者はたじろいだり、幻想を抱いたりすることなく避けがたい運命に立ち向かう勇者を奮い立たせるのに最も適しているのである。

セネカが残した、悪徳の平等性や情緒の害悪といったストア派の特徴的な理論に関する緻密な書簡は、今では歴史的な興味の対象でしかない。しかし彼の著作の全般的な論調はそれらを永遠に重要なものとしている。なぜなら、それらはストア派の消滅以来、文筆において適切に表現されたことのない種々の卓越性を反映し、育むものだからである。一方、プルタルコスの道徳的な論

調は主に愛情豊かな徳の強調から成るものであり、キリスト教徒の論者たちによって覆い隠されたり超えられたりしているが、哲学と道徳に対する彼の確かな貢献はセネカのそれより重要なものである。彼は迷信に関する最も優れた著作の一つと、神意に関する最も独創的な著作の一つを現代に残している。彼はおそらくピタゴラス派の転生論とは別の普遍的な博愛の大原則のもとに、動物への慈愛を非常に強く主張した最初の論者であり、また女性の卓越性と女性の愛情の神聖さに対する高い意識において同時代の誰よりも注目すべき人物である。

ローマ人はいつの時代も哲学の体系的論理的、思索的な一貫性よりも実践的な傾向を重んじていた。彼らの目に映ったストア派の最大の魅力の一つは、その主な目的が考え方の体系の構築ではなく、生活様式の提言だったことだった。またストイシズムそのものはパナテイウスによって単純化されて初めてローマの性格に適合するようになったのである。ストイシズムは高度な文明には不向きな硬さから完全に解放されることはなかった。しかし新しい理論を混合することによってそれを和らげることを殆どためらわなかった、後のストア派によって大きく修正された。セネカ自身は決して純粋なストア派ではなかった。エピクテトスがそれに近いとすれば、それは彼が極度の苦難を受けたため（*解放奴隷であり、片足が不自由であり、追放されたこともある）不屈の精神と忍耐の重要性について同時代の人々よりも思いを巡らせたからだろう。マルクス・アウレリウスは最も多彩な学派の門人たちに囲まれていた。そして彼のストア哲学はより穏やかでより宗教的なプラト

ン主義の精神の影響を強く受けていた。ストア派は他のすべての人々と同様に時代の道徳的潮流を感じていたが、他の人々ほど容易にそれに屈することはなかった。トラセアはその時代において前の時代のカトーのような地位を占めていた。しかし、この偉大な原型のような陰しきや硬さは彼にはほとんど見られない。もし後期ストア派の著作に先人のそれと同じ要素が見られるとしても、少なくともそれらの要素の混合の割合は違っているのである。

第一に、ストア派はより宗教的にならざるを得なかった。ストア派の性格は他のすべての優れた人々と同様、常に敬虔なものであったが、その敬虔さはキリスト教徒のそれとは大きく違っていた。それは神よりも徳に、特に偉大な人物が示した徳に集中していた。ルカヌスが英雄を称え、「神々は征服者の主張の味方だが、カトー（*カエサルに敗れたが、命を許されることを王者の徳を受け入れるものと拒んで自刃した）は被征服者の主張の味方である」と豪語したとき、あるいはセネカが「スツラ（*反対勢力をすべて倒して独裁政治を敷いた）の幸運」を「神々の犯罪」と表現したとき、現代の耳にはひどく冒瀆的に聞こえるこれらの文言に対して、不満のつぶやきはなかったようである。このように賢者を神と対等なものとして主張する大胆な言葉を私たちは見えてきた。一方、あらゆる成功の条件から離れた徳や、とりわけカトーのような、強い道徳的信念によって力、才能、環境に立ち向かい、不成功に終わりながらも勇敢に闘った人物に対する敬愛はおそらく後のどの時代よりも堅固で情熱的なものだっただろう。すでに示したように、神意に絶対的に服従する義務は

絶えず説かれ、すべての徳は神性の一部または発露であるという汎神論的観念がしばしば主張されていた。しかし依然としてストア派の体系の中心は人間であり、その理想にこそ彼らの敬意と熱愛は向けられていたのである。後期ストア派ではこの視点が徐々に変化してゆく。正式に汎神論的な概念を放棄することなく、哲学者たちの言葉は紛れもない自分の神性をはるかに明白に認めるようになったのである。エピクテトスやマルクス・アウレリウスのすべての著作は最も深い宗教的な感覚に満たされている。前者は述べた「まず学ぶべきことは、神が存在すること、神は全宇宙を知ろしめすこと、そしてそれが私たちの行為だけでなく、思考や感覚にも及んでいることである：神々を喜ばせようとする者は、生きている限り神々に似るように努力しなければならぬ。神が誠実であるように誠実であり、神が自由であるように自由であり、神が情け深いように情け深く、神が寛大であるように寛大でなければならぬ。」「神を創造主とし父とし守護者とするなら、すべての悲しみと恐れから解放されるのではないだろうか?」「ドアを閉め部屋を暗くしたとき、私は一人だと自分に言い聞かせてはいけない。神はあなたの部屋におり、またあなたと伴にある。彼らは暗がりではあなたの行動を見ることができないと思ってはならない。老人であり、不具者である私に神を賛美すること以外に何ができようか。もし私がナイチンゲールなら、ナイチンゲールの務めを果たし、もし白鳥なら、白鳥の務めを果たすだろう。しかし私は理性的な存在である。私の使命は神を賛美することであり、私はそれを全うする。また命ある限りこの仕事から尻込みすることはない。ともに賛美の歌に加わることをあなた方にも強くお勧めする。」

マルクス・アウレリウスの「自省録」にも同じ宗教的性格がさらに大きく表れているように思われる。しかし皇帝の倫理はある点で奴隷の倫理と大きく異なっている。エピクテトスには人間の尊厳に対する最も強い感覚が常に見られる。神の子として、最も高貴な徳に到達することができ存在として、彼は自らを最高点にまで高らしめた。そして弟子たちに高慢にならないようにと戒めたまさにその一節によって最も高らしめたのだった。ペイディアスによるオリンピアのゼウス像が示しているのは傲慢さではなく、完璧な自信と強さの曇りない平穏さである、と教えたのである。またマルクス・アウレリウスは人間の力よりもむしろ弱さに目を向けた。その自省にはキリスト教徒のへり下りほどではなくとも、少なくとも最も優しく感動的な慎みの精神が息づいている。実際、彼は自分自身を殺人者や姦通者にするように大げさに非難することを常とした後代の聖人たちとは違っていた。彼は人間の徳を現実のものとして認め、自分がそれに到達した程度について神意に感謝することをためらわなかった。しかし、彼は常に自分の性格の弱点を容赦ない厳しさで見直し、あらゆる徳の指導者からのうるさい非難を受け入れ、さらには最高権力者の立場にありながら、あらゆる傲慢と自尊の感情を監視するためにそれを求めていた。自分の心を畏怖させ、抑制する卓越した理想を目指していたのである。

後期ストア派のもう一つの注目すべき特徴は、内省的な性格を強めていたことである。カトー

やキケロの哲学では、徳はほとんど行動によってのみ示されるものだった。後期ストア派では自己点検と思考の純化が絶えず説かれていた。一部の論者は弁明するよりも説明する方が容易であるという頑固さゆえに、それに反する非常に明確な証拠を無視して、これらの徳をキリスト教だけに属するものとする。そしてそれらが後期ローマのモラリストの中で紛れもなく占めていた地位は、新しい信仰の直接的または間接的影響によるものであると、何の証拠もなく主張する。それらはギリシヤ人に完全に知られていたのである、という明白な事実がある。プラトンもゼノンも夢はしばしば人間の性質の潜在的傾向を明らかにするという理由で、自分の夢を研究するよう人々に勧めている。ピタゴラスは弟子たちに毎日、眠る前に自分自身を省みるよう促し、この習慣はすぐにピタゴラス派の修養の一部と認識されるようになった。それは共和制が終わる前にその学派とともにローマに導入された。それはキケロやホラティウスの時代には知られていた。セネカの師の一人で、主にキリスト教時代以前に活躍したピタゴラス派の哲学者セクスティウス（*クイントゥス、BC 70—?）は毎日、一部の時間を自己点検に充てる習慣を持っていた。セネカは当初ピタゴラスの教義に傾倒していたが、その実践はセクスティウスから学んだ、と明言している。東方の信条の侵入に伴ってピタゴラス哲学がますます脚光を浴び、帝国が政治生活の道を閉ざしたことによって、人々の注意は自然に行動から感情に向かうようになった。また後期ストア派では共感や情緒に許される自由が大きくなったため、徳の感情的な部分が大きく脚光を浴びることになったのである。セネカの手紙は一種の道徳的な薬であり、その大部分は性格のさまざまな弱点を癒すために使われて

いる。またプルタルコスは「道徳的進歩の兆候」に関する美しい論説の中で感覚の育成をデリケートな技量で扱っている。形式的な儀式ではなく、純粹な心で神に仕えることが著述の常識になった。そして自己点検は最も認知された義務の一つになった。エピックテトスは想像力を浄化するように促し、美しい女性を見ても「彼女の夫は幸せ者だ！」と心の中で叫んではならない、とした。マルクス・アウレリウスの自省はとりわけ終始、自己点検の訓練であり、思考を監視する義務が絶えず説かれていた。

プルタルコスが言うところによれば、ストア派は本来厳格で曲げられない性格の持ち主には時として有害な硬化作用を及ぼすが、本来穏やかで従順な性格の持ち主には心の支えとして特に有用であることが証明されている。この真理の実例としてローマのストア派の最後にして最も完璧な代表者であるマルクス・アウレリウスの生涯と著作以上のものではない。単純で、子供のような、非常に愛情豊かな性格で、知力や本来の意志の力はあまりなく、活動的で公的な生活よりも瞑想や思索、孤独や友情に傾き、王者の華やかさを深く嫌い、元々学問への志向が強かったが、ゼノンの強化する哲学を最良の形で受け入れ、この哲学によって彼はおそらくこの世界に現れた中で、最も完全に高潔な人物に近い存在になった。十九年間の治世の波瀾万丈の出来事に試され、ひどく腐敗した社会と、放縦で悪名高い都市を支配したが、彼の人格の完璧さは中傷さえも黙らせ、人々の自然な感情は彼を人というよりむしろ神として称賛したのである。内面的な生活に関して私たちがこれほど

までに確信を持って語れる人物は、これまでほとんど存在しなかった。彼の「自省録」は最も印象的な本の一つであると同時に、宗教的文学全体の中で最も真実な本の一つである。その大部分は陣営の混乱の中で、あわただしく途切れ途切れで、時にはほとんど理解不能の文で書かれた、文学的技巧も整理もされていない無骨な断片的メモからなっているが、最も鋭い誠実さに貫かれた語り口で、彼自身のイメージの一つを用いるならば、裸を隠すためのベールを必要としない星のような純粹さを持つ、とでも本当に言うべき彼の魂の闘争、疑念、意図を記録している。誰もが認める全文明世界の支配者だった彼は、トラセアやヘルウイディウス、カトーやブルトウスといった人物を手本とし、すべての市民が平等な自由国家と、市民の自由特権尊重を第一の義務とする王権、という概念の実現を目標にしたのだった。彼の生涯は絶え間ない活動の中にあった。彼は軍とともに帝国の遠い地方にあって十二年近く不在だった。そして彼の政治的能力が疑問視されたのは、おそらく大いに正当なことではあったが、彼がその偉大な地位の職務を遂行するのに費やした不断の熱意を否定することは不可能である。しかし女性や隠遁した宗教家がしばしば示す、細やかな徳、デリケートな道徳的機転、些細な良心の咎めといったものをはるかに押し進めながら、これほどまでに活動的な生活との接触に耐えられた人物はほとんどいない。嫉妬深い二人の修辞学者が討論しているときに彼らの友情を破壊しかねない反論を控えるよう説得したときの憂慮、ハンガリーのキャンペーンで自分にできる限りのすべての道徳的義務を思い出し、最も無名な家庭教師にまでも捧げた注意深い感謝の気持ち、自分の行動においてあらゆる杓子定規とマンネリズムを避け、あらゆる官能的な

想像を心から排除しようとする熱望、純粹さの義務に対する深い感覺、自ら陥っていた傾眠の習慣を正そうとする努力、そしてそれに屈したときの自己非難は、文明世界の最高支配者であり、最も巨大な利益の方向に絶えず携わっていた人物が示したものであることを思い起こすなら、言いようもなく感動的なものだろうと私は考える。しかしマルクス・アウレリウスにおいて特に注目しているのは、彼の博愛主義に狂信的なものがまったくないことである。人類を改善しようと心から願っている専制君主は当然、立法によって社会を自分たちが善と信じる道に押し込めようと骨を折るものであり、このような動機で行動する人物は時として人類の害悪となる。フィリペ2世とカトリックのイザベルは良心に従って、ネロとドミティアヌスが欲望に従ったときよりも、より多くの苦しみ（*宗教戦争）を与えた。しかしマルクス・アウレリウスはその誘惑にしっかりと立ち向かった。彼は書いてある「プラトンの共和国を実現しようなどと決して思っていない。人類を多少なりとも改善しただけで十分であり、その改善を重要なことではないと考えてはならない。人の意見を変えることができるのは誰なのか？感情が変わることがないなら不承不承の奴隷と偽善者以外の何が生まれるのか。」彼は純粹な慈愛の精神に触発されて多くの法律を公布した。剣闘士シヨを緩和した。政治的自由の最後の防波堤である元老院に常に敬意を払って接した。知識と道德教育を民衆に広めるための多くの哲学の講座を寄付した。蔓延する過度の贅沢を宮廷が模範となって正そうと努めた。そして自らの生涯によって活動的で良心的な行政官の完全な模範を示した。しかし彼は厳しい法律によって民衆をその自然のままの生活から追い出すという軽率な行動はとらなかつた。彼

は臣民の腐敗を痛感し、悲痛な、しかし穏やかな忍耐をもってそれに耐えていた。この点においてストア派から離れたギリシャの指導者たちの穏やかな精神がうかがえる。しかし彼は特に、すべての悪は無知から生じる、というストア派の理論から自分の生き方を導き出し、この理論に繰り返し立ち返ることによってそのすべての判断に悲しくも優しい慈愛を与えたのだった。「人は人のために作られた。ならば彼らを正せ、あるいは支えよ。」「彼らが悪しきことをするならば、それは明らかに無知からくるものである。」「あなたにそれができるなら彼らを正せ。できないなら、彼らのために發揮すべき忍耐力を与えられていることを思い出せ。」「医者の人が熱に苦しむのを不思議がつているのは恥ずべきことである。」「不死の神々は数え切れないほどの長い年月、大変な数の、これほど邪悪な人間たちに対して怒ることなく耐え忍び、さらに祝福で包みさえしているのである。しかしとても短い命しか持たない汝はすでに疲れているのではないか？それは汝自身が邪悪だからではないか？」「正義、節制、善良さ、その他すべての徳を魂は気づかないうちに失くしてしまう。このことをいつも覚えておかなければならない。そうすれば全人類に優しくなれるだろう。」「人が自分を傷つけた人物を愛するのは正しいことである。人はみな自分の親族であり、人は無知と無自覚のために罪を犯すのであり、そして私たちはみなすぐに死んでしまうことを思い出すなら、そうするようになるだろう。」

マルクス・アウレリウスの徳の特徴はその時代に帝国内に広がっていたギリシャ精神による軟化

の影響を示してはいるが、その本質において厳格な、ローマ的なものだった。神意に対する敬虔な感謝には満ちていたが、ヘブライ人の徳の原理であり、ユダヤ人の論者に人心を支配する非常に大きな力を与えた、強いへりくだりと深く微妙な宗教的感覚は彼の中には見られない。彼の「自省録」は自然に直観的に生み出された善きものであるが、そこにはギリシャの道徳の主要な動機であり、その後プロティノスの著作によってローマ世界に広く知られるようになった、徳の審美的な感覚が見られない。多くの優れたローマ人と同様に、彼の徳の原理は義務感であり、それに従うことが私たちの存在の目的であり目標である、自然の法の存在に対する確信だった。二次的な動機については、彼はほとんど意識していなかったようである。宗教的な信念の中で最も強かったのは監督者である神意に対する確信だった。しかしそれさえも時折覆い隠されることがあった。来世というテーマにおいて彼の心は憂鬱な疑念の中を漂っていた。彼は死後の名声に対する欲望をきちんと抑えることを自らの義務と考えていた。彼の学派のほとんどの論者は死を悲しみの終末としてとらえ、その恐怖を払拭するために死について考え続けた。しかしマルクス・アウレリウスは死を主に、この世の事物の空しさを示す最後の大きなデモンストレーションと表現している。これほど行動的で寛ぎのない徳が、これほどわずかな熱意と結びつき、これほど小さな成功の幻想に支えられているのは実にまれなことである。「真に価値があるのはただ一つ——真実と正義を守り、嘘つきや不正義な人間の中であって怒らずに生きることである。」と彼は書いた。

その表情には高揚も落胆も現れることはない、と言われるほどに彼は自分の感情を支配していた。しかし彼の内面の記録を目の前にしている私たちは彼の心を覆っている深い憂鬱を察知するのに苦勞はしないし、彼の晩年は数多くの様々な悲しみによって暗いものになった。彼が心から愛し、深く慕っていた彼の妻は、歴史家が伝える宮廷のスキヤンダルを信じるならば彼の愛情にふさわしい人物ではなかったが、墓へと先立ってしまった。成長した彼の唯一の息子は、後に彼を最悪の支配者の一人とした悪癖をすでに示していた。若いころに彼を指導し、彼が優しい友情とともにまわりついていた哲学者たちは一人一人と姿を消した。そしてその代わりになる新しい人々が出てこなかった。自己犠牲的な徳の長い治世の後、彼は帝国の退廃がますます明白になっていくのを見た。ストア派は東洋の迷信への情熱の前に急速に衰退していった。蛮族は一時的に撃退されたが、再び辺境を脅かしており、彼らの将来の勝利を予見するのは難しいことではなかった。再生に取り組むには民衆の大部分はあまりにも無気力で、あまりにも腐敗していた。恐るべき悪疫が、続いて数多くの小さな災難が降りかかり、悲惨と恐慌が多くの方々に広がった。このような惨禍の中、皇帝は死に至る病に倒れたが、いつものように穏やかな勇氣をもって耐え抜き、ほぼ最後の言葉でさえも彼は自分のことを忘れ、常に臣民の境遇を案じていたことを示していた。死の直前、彼は従者を下がらせ、最後に息子と面会した後、長い間そうして生きてきたように、一人で死んでいった。

こうして異教徒の中で最も純粹で優しい精神、後期ストア派の最も完璧な鑑である人物が雲と闇

の中へと沈み込んだのである。彼の中では、この学派の硬さ、険しさ、傲慢さは完全に消え去り、その逆説が生みがちな情緒は大きく和らげられていた。狂信も迷信も幻想もなく、彼の全生涯はシンプルで揺るぎない義務感に支配されていた。ストア派が長い間低迷させていた観照的、感情的な徳はその地位を取り戻したが、活動的な徳はまだ衰えてはいなかった。英雄の徳は依然として深く尊ばれていたが、理想のタイプの中で穏やかさと優しさが新たに重要度を増した。

しかし、このように環境の力が古代の倫理的観念を新しい方向に発展させている間に、ローマの人々の大部分は単なる倫理的な教えでは十分に矯正できないほどの墮落に陥ってしまった。記録されている帝国の道徳的状况は、いくつかの点で最もぞつとするようなものの一つである。そして論者たちはこの現象を説明するためにその事情を調査するよりも、その巨大さを描き出したり、誇張したりすることの方がはるかに多かった。しかし、そのような事情が存在したことに疑いはない。国民の生得的な性質が共和国の最盛期より帝政期で悪かったと信じる理由はない。国民の墮落には他のすべての現象と同様、明確な原因がある。そして、この例においてそれを発見するのは難しいことではない。

ローマ人の徳は国家の制度によって形成された軍事的、愛国的なものであって、宗教的な教えは単なる付随物に過ぎなかったことはすでに述べた。内政、軍事、検閲の規律は国民の一般的な貧困

や農業への従事と相まって、最もシンプルで最も飾らない習慣を作り出した。また一方で市民的自由特権の制度は名誉ある野心に十分な領域を提供していた。貴族は自由な国家の最高組織であり、同時に護民官に手引きされた手強い反対勢力に絶えず直面していたため、熱心に公的活動に専念していた。周囲のイタリア諸国、後のカルタゴとの危険な競争は絶え間ない警戒を必要とし、それを揺るぎないものにしていった。ローマの教育は英雄的な愛国心を引き出すよう巧みに設計されていた。そして過去の偉人たちは想像によって理想的な姿になった。宗教は儀式や伝説によってその地域的感覚を高め、多くの有用で家庭的な慣習を設け、誓いの神聖さを教え、常に神に監視されているという意識を育てることによって、全体的な性格に深さと厳粛さを与えた。

このような力が国民的な徳のタイプを形成していたのであるが、文明の進歩によって、ほとんどそのすべてが腐敗し、変質してしまつたのである。懷疑論が高まり、外国の迷信が多数侵入する中で、国内の土着宗教は優位性を失つた。また儉約令や検閲制度によって長く維持されてきた簡素な風俗は、バビロニアのような贅沢なものに取って代わられた。貴族の尊厳はその特権とともに消え去つた。愛国的なエネルギーと熱意はあらゆる種類の言語、習慣、民族を包含する世界帝国の中で息絶えた。

貧しさと闘う社会の徳が、贅沢さが増すにつれて消えてしまうのは必然的なことである。しかし

社会の正常な状態においては、それらは異なる種類の徳に取って代わられる。より穏やかな風俗と拡大した博愛が文明の流れに乗り、より大きな知的活動とより拡大した産業活動はそれらが必要とする道徳的資質に新たな重要性を与え、政治的興味の範囲が広がる。そして、もし特権から生じる徳が減少したなら、平等から生じる徳が増加する。

しかしローマには正常な発展を阻害する三つの大きな原因があった―帝政、奴隸制度、剣闘士シヨである。これらはそれぞれ、人々の道徳に最も広く、最も悪質な影響を及ぼした。その影響の全ての波及効果を辿るならば、本書に与えられた制限をはるかに超えてしまうだろう。しかし、私はその性質と一般的な性格を簡潔に説明することに努めたいと思う。

ローマ帝国の原理は典型的な独裁制だった。共和国の諸々の役職は消滅したわけではなかったが、次第に一人の人間に集中していった。元老院は表向きの最高権力を保持していたが、実際には単なる皇帝の隷属者であって、皇帝の権力を制御することは事実上不可能だった。共和国末期に国家に対する陰謀を告発するよう奨励されていた政治的スパイや私的告発者たちは、アウグストゥスの時代に皇帝に対する陰謀を告発し始めた。ティベリウスの時代に非常に増加し、没収された財産の一部を与えらるという約束に刺激されたこの階級は、すべての有力政治家、さらにはすべての富豪を脅かすようになった。貴族は次第に弱体化し、破滅し、あるいは公生活の危険のために私的な贅沢な

乱痴気騒ぎへと追いやられていった。貧しい人々の歓心は自由特権の拡大や、永続的な繁栄によってではなく、小麦の無償配給や公の競技で買われ、皇帝は自らを神聖な存在とするために、神格化という宗教的な手段を採った。

この迷信は現在でも王族に与えられる称号にその痕跡が見られるが、まったくの政治家の思いつきだったわけではなかった。神格化された人物は古代の信仰において長く重要な地位を占めていた。そして都市の創設者が住民に崇拜されるのは頻繁なことだった。教養ある人々にとって君主に神格を贈ることは単なるお世辞であって、彼の命を狙う無数の陰謀や、彼の記憶に対する容赦ない批判を何ら妨げるものではなかった。しかし政治家の意図を超えて、民衆の敬愛の念は皇帝を何らかの特別な神意の庇護の下にある存在と捉えることが少なくない。アウグストゥスの周りにはたちまち奇跡の物語が群がってきた。アウグストゥスの生まれ故郷は世界の支配者を生み出す運命にある、という神託があったとされた。アウグストゥスは幼い頃、見えない手によってゆりかごから運ばれ、聳え立つ塔の上に置かれ、そこで朝日に顔を向けているところを発見された。祖父の家の周りで鳴っていた蛙を叱ると、蛙は永遠に静かになった。驚が彼の手からパンを奪って空中に舞い上がり、降りてきて再び彼に差し出した。また別の驚は、月桂樹の枝をくちばしにくわえた鶏を彼の足元に落とした。皇帝が生まれたベッドで他の男が眠ろうとしたとき、見えない手が不敬な侵入者を引きずり出した。レイトリウスという名の貴族は姦通で断罪されたが、自分はアウグストゥスが生まれ

た場所の幸運な所有者である、と減刑を訴えた。テイベリウスはキシクスというアジアの町の特権を奪ったが、その主な理由はアウグストゥスの崇拜を怠ったことだった。迷信的な時代に顕著な人物がしばしば伝説の核となった経緯は、部分的には疑いなく政治的なものだったが、部分的には自然発生的なものでもあった。帝位の篡奪や通常の継承の断絶はすべて一連の奇跡によって暗示された。そして皇帝が死のうとするときには常に、天と地の両方にはっきりとした予兆があった。

皇帝たちのほとんどは疑いなく神としての栄誉を空疎な演出と受け止めていた。そして共和国の誇る英雄たちが決して超えることができないような気取らない嗜好や性格を紫衣の下に示した者も少なくなかった。ウエスパシアヌス帝（*同69―79）は死の間際に、自分の力が弱まっていくのを感じつつ「私は神になっていくような気がする。」と近づいてくる自分の地位について悲し気に冗談を言ったという。アレクサンデル・セウエルス帝（*在位AD222―235）やユリアヌス帝（*在位361―363）は、月並みな追従の言葉を受け入れようとしなかった。しかしそれを拒否しなかった皇帝たちの多くも、現代の君主が嘆願の言辞や宮廷の儀式を見るようにそれを見ていたことが分かっている。ネロでさえ皇帝の地位に酔うことなく、絶えず歌手や俳優としての勝利を求めた。そしてその虚栄心を刺激したのは神の特権ではなく、芸術的な技量だった。しかしカリグラは文字通り錯乱していたようで、自分の神性を重大な事実として受け入れ、多くのユピテル像の頭部を自分の頭像に取り替えた。そして剣闘士のショーを中断させた雷雨の中で怒り狂って席か

ら立ち上がり、血迷った身振りで天に対する呪詛を叫び、帝国の分断は本当に耐え難い、ユピテルか自分か、どちらかがすぐに倒れなければならない、と宣言したと言われている。ヘリオガバルス帝（*在位AD218―222）は彼の伝記記者の言葉を信じるならば、人間的なものと神的なものをも混同し、醜悪で冒瀆的な酒神祭を行い、あらゆる宗教を自分への崇拜に統合しようと考えた。

この神格化の奇妙な帰結は、皇帝の像が神々の像のような神聖な性格を持つようになったことである。皇帝像は奴隸や抑圧された人々の避難所と認識された。そしてそれらに対するわずかな不敬も極悪な犯罪として激しい怒りを買った。ティベリウス帝の時代には奴隸や犯罪者は皇帝の像を手に持ち、それに守られ、免責されながら、主人や裁判官に反抗的で傲慢な言葉の奔流を浴びせることに慣れていた。同じ皇帝の時代に、酔っ払った男が輪の中に皇帝の肖像が彫られている何らかの家具にたまたま触れたところ、すぐにスパイに告発された。この治世には皇帝像を設置した庭を売った者が大逆罪に問われた。アウグストゥスの像の近くで奴隸を殴ったり、服を脱がせたり、彼の肖像が彫られた金を持って売春宿に入ったりすることは死刑に相当するとされた。また後の時代には、ドミティアヌスの像の前で服を脱いだ女性が実際に処刑されたと言われている。

このように傲慢と権力の頂点に上り詰めた人物、すなわち深刻な腐敗状態にある社会の中で無制限の権限を行使した人物が、しばしば最も大それたな浪費の罪を犯したことは容易に想像できるだ

ろう。特に帝国の最初の時代にはまだ伝統がなく、経験によって帝位の危険性が知られていなかったため、その地位を占めた者の中に、その高さに頭脳が打ち震え、一種の精神錯乱に陥った者たちがいた。スエトニウスの著作は、当時パラテイーンに出現した墮落の深淵、恐ろしく、耐え難い残酷さ、これまで想像されたこともなく、口にするのも憚られるような欲望の放埒の永遠の証言として残されている。またそれは異教徒社会が陥った道徳的混沌に恐ろしい光を投げかけて、帝国を墮落させた力の十分な証拠を見せてくれる。皇帝たちの中にはこれまでこの世に生まれた中で最低の人物もいたのと同様に最高の人物もいたことは事実である。しかし悪は監視され緩和されても、決して根絶されることはなかった。宮廷の腐敗、スパイという職業の形成、贅沢の奨励、小麦の分配、競技の増加など、悪の強さの程度はさまざまだった。しかし帝国の存在そのものが、古代の偉大な共和国の道徳のタイプを生んだ政治生活の習慣を作り出すことを妨げたのだった。自由特権はしばしば神学体系には非常に不利であるが、最終的にはほとんど常に道徳に有利である。人を悪から遠ざけるために工夫された最も効果的な方法は、より高い野心に自由な機会を与えることだからである。ローマ帝国にはこのような機会がまったくなく、長く続いた政治的慣習がなかったため、道徳的状况は皇帝の性格によって大きく変動した。

奴隷制度がもたらした結果は、おそらくもっと深刻なものだった。主人の専制的で凶暴な心的態度を助長するという明らかな効果に加え、すべての労働に汚名を着せ、同時に貧しい自由民を墮落

させ、貧しくしたのである。近代社会では産業的生活の謹直で規則的な習慣を身につけた、影響力のある多数の中産階級の形成が国民道德の最大の保証になっている。そうした階級が存在するところではその上の階級の混乱は間違いなく有害ではあっても、決して社会にとって致命的なものとはならない。イングラントで王政復古の後に起こったような、上流階級の墮落の大爆発の影響は表層的なものにとどまることがほとんどである。貴族はこれ見よがしに悪徳の限りを尽くすかもしれない。しかし織機、勘定台、あるいは鋤で働く大多数の人々は彼らに影響されることなく、その職業の条件が強いる生活習慣によって全体的な墮落から守られているのである。古代ローマの腐敗の最も恐ろしい特徴は、それが社会のあらゆる階層に及んでいたことだった。最も単純な機械類しか存在していなかったため、製造業とそれがもたらす巨大な産業的生活は未知のものだった。貧しい市民は立派に生計を立てることができるとほとんどすべての分野が完全に、あるいは少なくとも非常に大きな割合で奴隷に占められていることに気づいた。また職業に頑強な嫌悪感を持つようになった。その結果、俳優、無言劇俳優、雇われ剣闘士、政治スパイ、男娼、占星術師、宗教詐欺師、偽哲学者など、自由人階級の不安定で一時的な生計を支える腐敗した職業が非常に増え、その結果、（*貴族が平民を庇護する）クライアント制度は巨大なものになってしまった。すべての金持ちには、その費用で生活し、その情欲に奉仕し、その虚栄心を満足させることに生涯を費やす、依存者の一団に取り囲まれた。そして何より小麦や、時には金銭の公的な配給が行われ、全てのローマの貧しい自由民は生活必需品に関して政府の無償支援を受けていた。この配給を迅速かつ気前よく行うことが

帝国の政策の主な目的であり、その結果は最も法外な貧民法や最も過度な慈善事業より悪いものだった。人口の大半はなんの根拠もなく与えられる小麦を恩恵としてではなく、権利として受け取り、それによって絶対的な怠惰を支援されたのである。そして無償の公的娯楽が彼らをさらに労働から遠ざけた。

こうした影響のために人口は急減した。イタリアには生産的な事業がほとんどなくなった。そして前例がないほどにさまざまな原因が重なって、悪質な独身主義が常態化した。アウグストゥスの時代にはすでにその弊害が明らかになっていた。そして後の皇帝たちの治世において貴族たちはより全体的に公的生活から遠ざかったため、あらゆる官能的放縦へと追いやられてしまった。その自由特権が失われて以来、ギリシヤは小アジアやエジプトの主要都市と同様に最も荒んだ腐敗の中心地になった。そしてギリシヤや東洋の捕虜はローマに無数にいた。イオニアの奴隷は飛びぬけて美しく、アレクサンドリアの奴隷は凝り固まって飽きのきた放蕩者の色あせた感覚さえも刺激する巧みな技術で有名で、すべての貴族の家の装飾、若者の仲間、指導者になった。結婚に対する嫌悪感はとても一般的なもので、裕福な独身男性の遺産を確保しようとおべっかに明け暮れる男たちの数が増え、悪名が高くなった。奴隷の集団はそれ自体が悪の温床であって、触れるものすべてを汚染していた。一方、競技の魅力、そして特に遊民のたまり場になった公衆浴場はイタリアの気候の魅力と一般的な粗末な住宅建築と相まって、貧しい市民を室内の生活から引き離すことに成功した。

怠惰と娯楽、そして最低限の暮らしだけが望まれていた。また富裕層で墮胎、あらゆる階層で嬰兒殺しや遺棄が一般的に行われていたため、さらに人口が減少した。

こうした状況に置かれた人々の公的精神の喪失は完全かつ必然だった。共和制の時代、ある執政官が「自由特権のことだけを考える者がローマ人にふさわしい」という理由で、勇敢なイタリア人にローマ市民権を認めるよう主張したことがある。帝国では、すべての自由特権は競技や小麦と喜んで交換された。そして最悪の暴君もこうした手段で人望を得ることができた。共和国においてマリウス（*ガイウス、BC157―86）が自ら追放した人々の家を略奪のために開放したとき、人々は高貴な節制によってその行為を非難した。その許可を利用してするローマ人は誰一人いなかった。帝国では、ウイテッリウス帝（*在位AD69）とウエスパシアヌスの両軍が都市の所有権を争っていたとき、退廃したローマ人は剣闘士の見世物のように喜んで集まり、捨てられた家を略奪し、浅はかな喝采でどちらの軍をも励まし、逃亡者を引きずり出して殺害し、国の災いを祭りに変えてしまったのである。国民性の墮落は永久的なものだった。ストア派の教えも、両アントニヌス帝の統治も、キリスト教の勝利も、これを回復することはできなかった。自由特権に無関心なローマ人は、現在も当時と同様に怠惰な暮らしと公的な見世物だけを求めている。ローマ皇帝たちの時代における小麦の配給や円形闘技場の競技は、現代のローマでは無数の修道院や宗教的野外劇に当たる。

このように帝国の首都で公的精神が衰退している間、その模範によって消え残っている炎を再燃させるような独立勢力や対抗勢力が存在しなかったことも忘れてはならない。近代ヨーロッパでは、文明の水準は同じでも、政府の形や国民生活の状況が異なる多くの国家が存在するため、ある程度の愛国心と自由特権の永続性が確保されている。ある国でこれらが滅んでも、別の国では存続する。そしてそれぞれの国民はその競争心や模範によって周囲の人々に影響を与えるのである。しかし文明化した世界全体から成る帝国には、こうした政治的相互作用は働かない。宗教的、社会的、知的、道徳的な生活において外国の思想をはっきりと認めることができるが、奴隷化された地方に中央の政治生活を再燃させる力はない。そして文明においてイタリアに肩を並べていた地方でさえもその墮落と卑屈さにおいてイタリアを凌駕していたのである。

しかし帝国の道徳が依存していた状況を見直すなら、依然として二つの非常に重要な中心、または徳の苗床があり、それについて言及することが必要である。それは農業への従事と軍隊の規律である。ロムルスという言葉とされる非常に初期の言い伝えは、戦争と農業だけが市民の名誉ある仕事である、と宣言していた。そして人々の間に節制と高潔な習慣を形成する上で後者の影響力をいくらか評価しても過大評価にはならないだろう。現存する大カトーの唯一の著作の主題は、この点である。ウエルギリウスはそれを彼の詩の輝きで飾った。ローマの宗教の大部分はその舞台を象徴し、その

活動を聖別することを意図していた。ウァロは、カウパーが英語詩に取り入れた「天意は田園をつくり、人為は街をつくる」という美しい文言で極めてローマ的な感情を表現している。ウェスパシアヌスの改革は主に地方の農業従事者の地位向上だった。全ての中で最も完璧なローマ皇帝だったアントニヌスは、在位中ずっと熱心に農業をしていた。

遠く離れた地方に関する限り、帝国の制度は全体的に良いものだったと思われる。共和国末期を辱め、キケロの憤怒の雄弁によって不滅のものとなった属州総督のスキャンダラスな強欲さは皇帝の監督の下で終焉するか、少なくとも大きく減退したようである。十分な自治体の自由、良い道路、そしてほとんどの場合、賢明で節度ある統治者たちによって、帝国の遠方の地域には大きな繁栄が約束された。しかしイタリアでは農業とそれに伴う生活習慣が急速に、そして致命的に衰退していった。小農業経営者はすぐに絶望的な負債へと滑り落ちていった。奴隷制度が富裕層に与えた多大な利益は、次第にイタリアのほとんどすべての農地を富裕層の手に委ねるようになった。経営者でなくなった農民は、奴隷労働者に仕事を奪われて雇われ農民にもなれなかった。一方、小麦の無償配給が彼を容易に大都市に引き寄せるようになった。こうした配給の規模は大きかったため、支配者たちは小麦を遠方の国、特にアフリカやシチリアから年貢の形で得るようになり、イタリアでは小麦はほとんど栽培されなくなった。土地は荒れ果て、あるいは奴隷によって耕され、あるいは牧草地に変えられた。そして広大な地域で自由農民が完全に消滅した。

このイタリアの道徳的状況に深い影響を与えた大革命は、長い間差し迫っていたものだった。貧しい農民の借金と、貴族たちの征服した領土を独占しようとする傾向は、共和国に最も激しい争いを引き起こした。そして帝国の初期にはイタリアの農地に降りかかった胴枯れ病が絶えず哀れなほど嘆かれた。リウイウス、ウアロ、コルメラ、プリニウスは最も強い言葉でこのことに触れている。またタキトウスは、かつて遠い地方に小麦を供給していたイタリアがクラウディウス帝（*在位AD 41―54）の治世にはすでに生活必需品を風と波に頼るようになっていた、と述べている。この弊害はほとんど絶望的なものだった。風向きやその他の偶然による小麦の輸送の中断は首都に深刻な困窮をもたらした。もし何らかの不幸で小麦の大産地が帝国から切り離された場合に生じる災難を想像するなら、政治家はぞっとしたことだろう。しかし前述のように奴隷制度と小麦の無償配給の力が複合的に作用し、イタリア農業復興のためのあらゆる努力は失敗に終わった。そして奴隷制度は廃止できないほど深く根付いていた。配給の停止、あるいは制限の後でさえ起こったであろう惨事や反乱に敢えて遭遇しようとする皇帝はいなかった。この悪弊を改善するため、多くの真剣な取り組みがなされた。アレクサンデル・セウエルス帝（*在位AD 208―235）は貧しい人々に土地を購入するための資金を提供し、土地の生産物から無利子で徐々に支払いを受けた。ペルティナクス帝（*在位AD 193）は耕作することを唯一の条件として貧しい人々を所有者として荒れた土地に住ませた。マルクス・アウレリウスが始め、アウレリアヌス帝（*在位AD 27

0—275)とウァレンティニアヌス帝(*I世の在位はAD364—378)が続けたのは、多数の蛮族の捕虜をイタリアの土地に定住させ、奴隷として耕させるといふ制度だった。この大きな外來の要素がイタリアの中心部に持ち込まれたことが、結局は帝国を崩壊させる原因の一つになったのである。また、この時期に初めておぼろげながら農奴すなわち農地への隷属という境遇を見ることができ、そしてこれはその後奴隷制度を吸収し、数世紀にわたってヨーロッパの一般的な境遇になった。しかし、イタリアの農業を破壊しつつあった経済的、道徳的原因是に抵抗できないほどに強く、農業が促進する単純な生活習慣は後の帝国ではほとんど、あるいは全く通用しなくなっていた。

軍人の生活においても、それほど急速ではなかったにせよ、最終的には完全な退廃が起こった。ローマの軍隊は最初、上流階級からしか招集されず、兵役は実際の戦争の間だけで、しかも無給だった。しかし共和制が終焉を迎える前に、こうした状況は消失した。軍人の給与はウェイイ包囲のときに制定されたと言われている。ローマとカルタゴが敵対していた時代に入隊したスペイン人の一部は、ローマが外国人傭兵を採用した最初の例になった。マリウスは新兵の財産資格を廃止した。スペインやアジア諸国での長い滞在中で規律は次第に緩んだ。そしてローマにおける東洋の贅沢の経過をたどった歴史家が、それはまず兵士によって都市に持ち込まれた、という不吉な事実を強調したことは正しかった。内戦は古い軍事的伝統の破壊に貢献したが、もし有能な將軍によって指

揮されていたなら、軍の規律よりも愛国心に影響を与えていたことだろう。アウグストゥスは軍事システム全体を再編成し、プラエトリアニ（*親衛隊）として知られる、いくつかの特権を与えられた兵士の集団をローマに常駐させ、他の軍団は主に辺境に集められた。アウグストゥスの長い治世とテイベリウスの治世の間、両部門は静穏であったが、カリグラが直属の兵士に殺されると長い不服従の時代が始まった。クラウディウスは賄賂によって兵士たちから自分の安全を買うという、致命的な実例を最初に作ったとされている。地方の軍隊はすぐにローマ以外の場所で皇帝を選出できることに気づいた。そしてガルバ帝（*在位AD68―69）、オト、ウィテッリウス、ウエスパシアヌスはすべて反乱の産物だった。しかし悪弊が回復する見込みはなかった。ウエスパシアヌスとトラヤヌスは非常に厳格な規律を施行し、成功を収めた。皇帝たちはより頻繁に陣営を訪れるようになった。兵士たちの数は少なく、しばらく動乱は鎮まった。帝国の最悪の時代の歴史は、非常に困難な状況下において勇敢な兵士たちが一途に自分の義務を果たそうとした実例に満ちている、という事実が指摘されている。しかし歴史家はすぐに、アジアの官能的な都市が軍団に与えた深い影響に再び気づくことになる。イタリヤから何年も離れた彼らは民族の誇りを失い、忠誠心は君主から將軍に移った。そして帝国の笏が次々と無能な支配者の手に渡ったとき、彼らはいつも指揮官に反乱を促し、ついには帝国を軍事的無政府状態に陥らせたのである。身についた贅沢な習慣によるものではないこの悪弊は、帝国の分割によって各軍が皇帝の直接の監督下に置かれたことで改善された。後年、キリスト教が兵士の不服従を減じたことは確かだが、それは同時に軍事的熱情をも

滅じたのかもしれない。しかし、他のさらに強力な原因が作用してローマを軍事的に没落させようとしていた。ほとんどの皇帝が人気取りのために奨励した帝国の政策が生み出した不活発な習慣は、軍隊生活の苦難に対する深い嫌悪をもたらした。長い間イタリア人に制限されていたプラエトリアニ親衛隊も、セプティムス・セウエルス帝以降は辺境の軍団から選ばれた。イタリアは通常の兵役から解放されていたため、これらの人々はもっぱら地方で募集され、無数の蛮族に助成金が支給されたのである。この変化の政治的、軍事的帰結は十分に明らかである。大砲がなく、野蛮人に対する文明国の軍事的優位性が現在よりもはるかに低かった時代に、イタリア人は実際の戦争にまったく不慣れで、何よりも軍事規律と相容れない習慣を身につけていた。帝国を脅かし、最後には崩壊させた蛮族の多くは、実際にローマの将軍に訓練を受けていた。道徳的な結果も同様に明白である――軍事的規律は農業労働と同様、イタリアの道徳的な力の中に何の役割も果たさなくなったのである。

私が列挙した事柄を正しく評価する人々にとって、帝国の没落と道徳的衰退は何ら驚くべきことではない。しかし、帝国の苦悩がこれほど長引いたこと、異教徒とキリスト教徒の両方から多数の善人と偉人が生まれ、彼らが疑いもなく幅広い影響を及ぼしていたことを不思議に思うのは当然かもしれない。徳のある習慣が自然に形成されるはずの、ほとんどすべての制度や仕事が汚されたり破壊されたりする一方で、恐るべき力が作用して人々を悪に駆り立てていたのである。金持ちは最

も名譽ある野心の道（*政治）から排除されていた。そして彼らのあらゆる情熱を燃え立たせる無数の寄生虫に取り囲まれて、気がついたときには悪徳の自発的な奉仕者であつて、しばしばその指導者にもなる、無数の奴隷たちの絶対的な主人になつていたのである。貧しい人々は産業を嫌い、あらゆる知的資源に恵まれず、習慣的に怠惰な生活を送り、卑屈な隷属を幸運への普通の道と見なしていた。しかし両階級の主な娯楽が流血の光景、人間の死、時には拷問だつたことを思い返すなら、その様子は実に恐ろしいものになる。

剣闘士競技は現代人の感覚からすると、その残虐性においてほとんど信じがたいようなローマ社会の特色の一つである。文明の発達した時代に男性だけでなく女性も――高い道德規範を公言するだけでなく、非常に良く実行していた男女が――人間の殺戮を習慣的な娯楽としていたこと、このすべてが何世紀にもわたつて、ほとんど抗議も受けずに続けられていたということは道德史において最も驚くべき事実の一つである。しかし、これは完全に正常なことである。そして生得的な道德的知覚の理論と何ら矛盾するものではない。同時に痛ましくも非常に深い関心に対する倫理的探求の分野を切り開くものでもある。

ローマで長い間、興趣と影響力において他のあらゆる娯楽を凌駕してきたこの競技は、もともと偉大な人物の墓で挙行される宗教儀式であつて、祖先の霊（*Manes）を鎮めるための人間の

生け贄だった。その後、それは勇敢な死の光景を絶えず見せることによって軍事的精神を維持する手段として擁護された。そしてこの目的のために、戦争に出発する兵士たちに剣闘士ショーを見ることが慣例となった。このような機能に加えて剣闘競技は大きな政治的重要性を持っていた。というのも、通常の自由特権の機関がすべて麻痺しているか廃止されていた時代には、支配者は闘技場で何万人もの臣下に会うのが常だった。彼らはこの機会を利用して請願を提出し、不満を表明し、君主やその大臣を自由に非難することができたのである。この競技はエトルリアが起源とされ、紀元前264年にブルトゥスという男の二人の息子が父親の葬儀で三組の剣闘士を闘わせた時、初めてローマに伝わったのである。そして共和制が終わる頃には大きな公的行事で、さらに恐ろしいことには貴族の宴会でよく行われるようになった。カエサルとポンペイウスの敵対関係はその数を大幅に増やした。それぞれがこの手段で民衆と親睦を深めようとしたのである。ポンペイウスは人間対動物という新しい形の戦いを導入した。カエサルは競技を男性の葬儀に限定していた古い慣習を廃止した。そしてカエサルの娘は墓を人間の血で汚された最初のローマ女性になった。この改革に加えて、カエサルはそれまで競技が行われていた仮設の建物を木製の常設円形闘技場に置き換え、貴重な絹の日除けで観客を覆い、あるときは死刑囚に銀の槍で戦うことを強い、元老院がその数を法律で制限しなければならぬほど多くの剣闘士を都市に呼び寄せた。帝政初期には、スタティリウス・タウルス（*BC60-10、執政官）が最初の石造りの円形闘技場を建設した。アウグストゥスは一度に戦う人数を120人以下とするよう、いかなるプラエトル（*法務官）も一年に二

回以上競技を開かないよう命じた。テイベリウスは再び戦闘員の最大数を定めたが、これらの制限の試みにもかかわらず、競技はすぐに最も巨大な規模になった。有力者が死んだ親族を悼むために、公職に就くときに、征服者が人気を得るために、またすべて公の慶事があるたびに、そして社会的地位を得ようとする金持ちの商人がそれを習慣的に行っていた。また剣闘士の競技は公衆浴場の呼び物でもあった。イタリアのすべての主要都市には剣闘士の学校が―しばしば富裕な市民の私有地に―あり、奴隷や犯罪者のほか、数年の期限付きで自ら応募してきた自由民で賑わっていた。多くの人々の目には、勝者に支払われる多額の賞金、貴族や度々の皇帝の後援、さらには成功した剣闘士に集中する大衆の熱狂が、この職業のあらゆる危険性に勝ると映ったのである。すぐに観客も戦闘員も生命に完全に冷淡になった。剣闘士を供給する「ラニスタ」は重要な職業になった。彷徨う剣闘士の一団がイタリアを出て、地方の円形闘技場で活躍するようになった。競技の影響は次第にローマ人の生活の構造全体に及んでいった。会話の中で競技は普通のことになった。子供たちは遊びの中でそれを真似た。ウェスタに仕える乙女たちは闘技場の上座に座っていた。コロッセオは80,000人以上の観客を収容することができたと言われており、帝国のいかなる華麗な記念碑をも凌駕していた。そして現在でも異教徒のローマの最も印象的で最も独特な遺物である。

地方でも同じような熱狂が繰り広げられた。ガリアからシリアまで、ローマの影響力が及ぶ全ての場所に血のスペクタクルが導入された。そして多くの国の円形闘技場の巨大な遺跡はその廃墟の

壮大さによって、それが追い求められた規模を今なお証言している。ティベリウスの治世には郊外の町ファイデネーの円形闘技場が倒壊し、20,000人以上が死亡したと言われている。ネロの時代、シラクサ人は剣闘士の数を制限する法律の適用を特別に免除された。ティトウス（*ウエスバシアヌス）がユダヤから連れてきた膨大な捕虜のうち、かなりの人数が地方の競技に送られた。アンテリオコス・エピファネス（*シリア王、在位BC175―163）によって導入されたシリアでは、当初は快樂よりもむしろ恐怖をもたらした。しかし柔弱なシリア人はすぐに熱狂的に楽しむようになった。アグリッパ（*ユダヤ王、在位AD37―92、1世と2世がいる）は一度、ベリユトスの円形闘技場で千四百人を戦わせたことがあった。ギリシャだけはある程度例外だった。アテネにこの見世物が導入されようとしたとき、キニコス派（*英語cynic、皮肉な）の哲学者デモナクス（*AD70―170）は「まず憐れみの祭壇を倒さなければならぬ」と叫び、民衆のよりよい感情に訴えることに成功したのである。その後、競技はアテネに伝わってティアナのアポロニウス（*BC4―AD98）によって禁止されたと言われている。非常に多くの外国人が住んでいたコリントを除いて、ギリシャは全体的な熱狂を共有することはなかったようである。

このような嗜好の最初の結果の一つは、通常の文明化に伴う穏やかで洗練された娯楽が人々にまったく不向きになったことである。命がけの闘いの激しい浮沈を見慣れた人々にとって、強い興奮を呼び起こさないような見世物は退屈だった。円形闘技場や野外大円形競技場の見世物に比肩する

娯楽は、女神フロラの祭り、無言劇のポーズ、バレエなど、官能的情熱に強く訴えかけるものだけだった。ローマの喜劇は確かに短い期間繁栄したが、それはただ同様のものを扱っていたからに過ぎない。プラウトウスの主な登場人物は女術と高級娼婦であり、より控えめなテレンティウスは同等の人気を得ることはなかった。様々な形の悪徳は絶えず作用し、互いに影響し合う傾向がある。そして円形闘技場が必然的に生み出したであろう興奮への激しい渴望が、タキトゥスやスエトニウスが描写した官能の乱行を刺激した力は小さくなかったことだろう。

剣闘士の試合とともに喜劇が多少栄えたとしても、悲劇ほどではなかった。確かに悲劇の役者は闘技場で目撃されたものよりも激しい苦悩や壮大なヒロイズムを表現することができる。彼の使命は昼の光の中にあるものを描くことではなく、人間の心の中にあるものを描くことである。彼の身振り、声調、外見は、彼が演じる人物が決して示したことがないようなものである。しかし彼はその人物が感じたであろう、しかし十分に現すことができなかったであろう感情を完全な激しさで観客に見せてくれる。しかし円形闘技場の激しいリアリズムに慣れた人々にとって、舞台の理想化された苦しみは印象的なものではなかった。シドンやリストリ（*ともに19世紀の女優）がどんなに天才的な演技をしても、生きた人間が血を流して彼らの足元に倒れ込むのを見続けてきた観客の心を動かすことはできなかっただろう。舞台の最も重要な機能の一つは、嫌悪の感受性を最高度に引き上げることである。ホラティウスがメデア（*ギリシャ神話に登場する女性）は舞台上で自分の

子供を殺してはならないと言ったとき、彼は単なる恣意的なルールを言ったのではなく、この演劇の展開から必然的に生じるルールについて言ったのである。流血の光景にショックを受け、気分を害するのは洗練された教養ある嗜好の本質的な特性である。（*観衆が舞台上の殺人にショックを受けなくなるのは望ましいことではない）そしていくぶん危険なまでに感情と演技を切り離し、理想化された苦しみに人々の同情心を浪費させる演劇は、この感受性を最高度に発達させることによって少なくとも極端な形の残虐行為に対する障壁になっているのである。一方、剣闘士の試合はあらゆる嫌悪感を、それゆえあらゆる洗練された嗜好を消滅させ、演劇の永続的な勝利を不可能なものにしたのである。

人間の苦しみを見たときに生じる本能的な衝撃や自然な嫌悪感は、動物の苦しみを見たときに生じるものと一般的に異なるものではないことは、過去と現在の経験によって十分に明らかである。後者はそれに慣れていない人にとって強烈な苦痛である。前者は習慣によって頻繁に絶対的に無意味な問題になる。もし一方のケースで感じる嫌悪感が他方のケースよりも大きいとすれば、それは私たちに自分たちの種を重んじるよう命じる生来の感情のせいではなく、単に私たちの想像力が動物よりも人間の苦しみを理解することが容易なためであり、また教育が一方のケースにおける感情を他方のそれよりもはるかに強めているからなのである。しかし人間が同胞のある一群を殺すことを犯罪ではないとみなすなら、すぐに野生動物を殺すときと同じように何のためらいもなく殺すよ

うになるというのは最も明確に立証されている事実である。これが未開人の通常の状態である。植民地人とレッド・インディアンとは現在でもしばしば、猛獣を撃つのとまったく同じく、平然と互いを撃ち合う。そして戦争の歴史全体は——特に戦争が現在よりも野蛮な原理に基づいて行われていた時代において——この事実を示す例証になるのである。したがって現代において驚くべきことではあっても、ローマの観客たちが人間の虐殺を完全な平静さで観賞していたのはまったく不自然なことではない。幼少期から闘牛場に連れていかれるスペイン人は慣れない外国人が見ると恐怖に震える光景をも、すぐに平然と、あるいは楽しんで眺めることができるようになる。そしてそれが人間の苦痛の光景だったとしても、同じプロセスは同様に有効だろう。

このような冷淡さを私たちは今、憤りとともに振り返る。しかし理解することは難しくとも、慣れによってそれを共有するほどに無感覚にならない人間はほとんどいないということはおそらく本当だろう。最も慈悲深い人物が、これらの競技が公然と罪のないものとされる国に住んでいたなら、ごく幼い頃にこの競技に連れて行かれ、それをロマンスの最初期の夢と結びつけることに慣れ、その後をただ感情の戯れに任せていたなら、最初の恐怖の発作はすぐに収まり、それに続く嫌悪感も次第に弱まり、興味の感情が喚起され、おそらくそれだけが支配する時が来ただろう。しかし人間の苦痛を見ることに対するこの絶対的な冷淡ささえも、剣闘士の試合から生じる悪のすべてではない。ある種の人々は自分の利益とは関係なく、ただ単に苦しみを苦しみとして見つめることにリア

ルで生き生きとした快樂を感じられるようにできている、という主張は悪徳を正当な利己心を置き換えたもの、または誇張したものに過ぎないと考える人々に強く否定されてきたし、この現象の实在を認めている他の人々もこれを非常にまれで例外的な病氣として扱ってきた。現在の社会では少なくとも極端な形のものは一そうであることが当然望まれているのだろう。しかし少年たちの習性を観察したことがある人なら、少なくともいくらかの痛みを与えて楽しむのは十分に一般的なことであるという意見に疑問を呈さないだろう。また犠牲者が知覚を持つ生き物でなかったなら、大人の男性のスポーツすべてがまったく同じ熱心さで行われるかどうかはわからない。しかし残酷な刑罰が一般的だったすべての社会において間違いなく際立っていたのは、人間の本性のこの側面だった。クラウディウスは剣闘士のショーで死にゆく者たちの表情を見るのが特別な楽しみだったと言われている。というのも彼は彼らの苦悩の変化を観察することに芸術的な快樂を覚えるようになったからである。剣闘士が倒れたとき、観客は助命か殺害かを親指の合図で示すのが通例だった。後者の場合、興行主は経済的な理由で人々の裁定を受け入れるのをためらったりはしなかった。

これに加えて単なる新しさへの欲求が人々をあらゆる過剰な、あるいは洗練された野蛮に駆り立てたのである。単純な戦闘がやがて退屈になると、衰えた関心を喚起するため、ありとあらゆる残酷行為が考案された。あるときは鎖でつながれた熊と牛が砂の上を激しく転がり回った。またあるときは野獣の皮をかぶった犯罪者が赤熱した鉄や、先端に燃える松脂の付いた投げ矢で狂わされた

牛の前に放り出された。カリグラの時代には一日で四百頭の熊が殺され、クラウディウスの時代には三百頭の熊が殺された。ネロの時代には四百頭の虎が雄牛や象と戦い、四百頭の熊と三百頭のライオンが兵士によって屠られた。ティトウスによるコロッセオの献堂では一日で五千頭の動物が死んだ。トラヤヌスの下では、競技は百二十三日間連続で行われた。ライオン、虎、象、サイ、カバ、キリン、雄牛、雄鹿、さらにはワニや大蛇までもが、見世物に新味を加えるために使われた。また人間のいかなる形の苦痛にも不足はなかった。ゴルディアヌス一世（*在位AD238）は造営官のときに十二回の見世物を行い、それぞれに百五十から五百組の剣闘士が登場した。アウレリアヌスの凱旋では八百組が戦った。トラヤヌスの競技会では一万人が戦った。ネロは夜間、キリスト教徒の遺体に松脂で火をつけて庭を照らしていた。ドミティアヌスのもとでは弱々しい小人の軍隊が戦うことを余儀なくされた。また女性剣闘士が闘技場に降りてきて死んだことも一度や二度ではなかった。架空の人物になぞらえられた犯罪者は十字架に磔にされ、熊に引き裂かれた。またスカエウオラ（*敵に捕らえられたとき、平然と火の中に手を突っ込んで勇気を示した古代ローマの若者）に見立てられた者は、本物の炎に手をかざすことを強要された。そしてヘラクレス（*毒の痛みに耐えかね薪で焼かれて自殺）に擬された者は生きのまま薪の上で焼かれた。血への渴望があまりに強かったため、小麦の分配を怠る君主より競技を怠る君主の方が不人気だった。そしてネロこそ、この点で気前が良かったがために、おそらくローマの大衆に最も愛された君主だっただろう。ヘリオガバルス帝（*在位AD218―222）とガレリウス帝（*在位AD293―305）東方副

帝、AD305―311…正帝）は、犯罪者が野獣に引き裂かれる光景を楽しみながら食事をしていたと伝えられている。後者については「彼は人間の血を見ずに食事をしたことがない」と言われている。

このような事実をしつかりと見つめることは、私たちにとって良いことである。これらの事実は、人間の本性が沈むことのできる墮落の深淵を単なる哲学的論考よりも鮮明に示している。それは私たちが到達した道徳的進歩の真実性の印象的な証拠である。そしてそれはキリスト教が世界に及ぼした更生の力がある程度評価することを可能とする。剣闘士競技の廃止は完全にキリスト教の仕事だからである。哲学者は確かにそれを嘆き、優しい人はその悪影響を避けたかもしれない。しかし大衆にとっては魅力があり、それを打ち負かすことができたのは新しい宗教だけだった。

またこの魅力は驚くべきものでもなかった。これほどまでに強い吸引力を持つ要素が組み合わせられたページェントはかつてなかったからである。壮大な野外大円形闘技場、集まった宮廷の豪華な衣装、巨大な群衆の中を目に見えて駆け巡る熱狂の伝播、期待に満ちた息もつかせぬ沈黙、八万の舌から同時に湧き上がり、都市の最果てまでこだまする野生の歓声、戦いの素早い交替、示された素晴らしい勇氣ある行動はすべて、想像力を陶醉させるにふさわしいものだった。剣闘士の数々の罪と隷属は、彼を取り巻く栄光の輝きの中でしばし忘れ去られた。ローマ人が徳の筆頭とみなした

勇気を最高度に表現し、無数の人々の視線を集め、この世界の大都市の話題の中心となり、勝利すればモザイク画や彫刻の中で不滅のものとなる運命にある彼は、しばしば英雄的な威厳を身にまとうことになる。剣闘士スパルタクス（*AD?—71）は三年間、ローマの最も勇敢な軍隊に立ち向かった。ローマの最も偉大な將軍たちは自分の護衛に剣闘士を選んだ。剣闘士の一団は死に際しても忠実で、他の誰も彼を見捨てたとき、倒れたアントニウスの後を追った。情熱に震える美しい瞳が戦いを見下ろしていた。そしてローマで最も高貴な女性たち、さらには皇后さえもが勝者の愛を切望することが知られていた。剣闘士たちは試合がめつたに行われなことを嘆き、闘技場に降りることが許されないと激しく不平を言い、最も強力な敵以外と戦うことを蔑み、傷の手当てを受ける大声で笑い、ついに塵の中に倒れたときには勝者の剣に平然と喉を差し出したという話が残っている。彼らの周囲には非常に激しい熱狂が集まり、特別な法律が必要になるほどだった。そして時にはその法律も、貴族がその隊列に加わることを防ぐには不十分だった。彼らに決して死ぬことを失敗させなかった静かな勇氣は、哲学者たちに最も印象的な事例を提供した。戦いの前に要求される厳しい節制は、ローマの生活の放縦さと鮮やかな対照をなし、剣闘士に道德的な威厳さえ与えていた。また教父たちが全ての異教徒の中でキリスト教徒に最も近いモデルに剣闘士を選んだことは、非常に示唆的な事実である。聖アウグスティヌスは、友人の一人が見世物に引き込まれ、罪深いものと知っているその魅力から目を閉じて逃れようとしたときのことを語っている。突然の叫び声とともにその決意は崩れ、彼は二度と目を離すことができなくなってしまった。

円形闘技場の影響が民衆を完全に支配するようになった一方で、ローマ人に道德的感覚を宥めるための言い訳がなかったわけでもなかった。競技は先に述べたように元来―死者の宗教的儀式における―人身御供だった。そして剣闘士の死はホメロスの時代に墓で生け贄として捧げられた受動的な犠牲者の死よりも、名譽で慈悲深いものであると主張されたのである。戦闘員は職業的剣闘士、奴隸、犯罪者、または軍の捕虜だった。最初の者の運命は自発的なものだった。二番目の者は長く自由人の保護の下にあるか、外にあった。しかし、共感の輪が広がり、ローマ人が奴隸を「第二の人間」と見なすようになる。彼らに競技をさせることの残酷性が認識され、皇帝の勅令によってそれは禁じられた。三番目は死刑囚だった。しかし勝った剣闘士は少なくとも恩赦を受けることがあったため、戦いの許可はむしろ慈悲と見なされた。初期のローマ人が現代人のように四番目の者の運命を恐怖することはなかった。征服者が捕虜を殺戮する権利はほとんど誰もが認めていたからである。しかしローマ帝国のモラリストの中で、競技をある程度制限することを望むより先に踏み込む者は極めて少数だった。罪人の死さえも見世物にして民衆の娯楽とするのは恐ろしく、不道德なことであるという立場にはローマのどの学派も到達しておらず、ごく少数の個人が到達していただけだった。キケロは「剣闘士の見世物が残酷で非人間的に見える人もいる」と述べ、さらに「今のやり方がそうでないかどうかは知らないが、罪人が戦うことを強いられるとき、その苦痛と死を人々に見せるよりも良い戒めはないだろう。」と述べている。セネカの言葉がより称賛に値するもの

だったことは事実である。彼は情熱的な雄弁を用いて競技を糾弾した。彼は戦闘員たちの罪を根拠とする議論に憤然と反論した。こうした娯楽はあらゆる形態と変化において、獣的で、野蛮で、憎むべきものであると断じた。プルタルコスにはさらに踏み込んで、野獣の戦いを非難した。なぜなら人間はすべての意識ある生き物と共感の絆を持つべきであり、血と苦しみのショーは必然的かつ本質的に退廃的なものだからである。これらの例に加え、内戦に関する詩において見世物を非難したペトロニウス、ヴィエンヌ（*現フランス中部の都市）の住民に見世物を許可せず、皇帝の諫言に「ローマでもこのような見世物を廃止することができればどれだけ幸せなことでしょう！」と答えたユニアス・マウリクス（*AD1世紀の元老院議員アルレヌス・ルスティクスの兄弟）、さらに鈍い剣で剣闘士を戦わせて一時的に彼らを比較的安全にしたマルクス・アウレリウスが挙げられるだろう。しかし、この時代の最も目につく最も残酷な特徴に対して異教徒が抗議した例は、すでに述べたアテネ人の諫めとともに、ほとんどこれだけしか残っていない。ローマの風俗の全ての分野を手厳しい風刺で網羅し、奴隷に対するあらゆる残酷行為を激しく非難したユウエナリス（AD60-140）は、剣闘士ショーに何度も注目した。しかしそれが慈悲に反するとは一度も言っていない。それを記録した偉大な歴史家たちの中で、誰一人として自分が野蛮なことを記録していると意識していた者はいなかった。そして快樂に向かう風潮の高まりと危険な集団の過剰な増殖以上の害悪をそこに見出した者はいなかったようである。ローマ人は人を優しく慈愛深くするのではなく、勇敢で恐れを知らぬ者にしようとした。そして優しさを犠牲にしても死の恐怖に立ち向かう心を

鍛えるシヨは、称賛されるべきものとその目に映っていた。テイトウスとトラヤヌスの治世では、おそらく短時間に最も多くのシヨが行われた。二人とも際立って寛容な人物だったが、一方の治世では3,000人、他方では10,000人の剣闘士が戦うことを強いられたという事実が彼らの人格にわずかな影を落とすことになる。ローマ人も想像しなかったようである。スエトニウスはテイトウスの人柄の良さを示す一例として、剣闘士の戦いの最中に民衆と冗談を交わすのが常だったことを挙げている。そしてプリニウスは特にトラヤヌスを称賛しているが、それは彼が人格を弱めるようなものではなく、人を「気高い負傷と死の軽視」に駆り立てるシヨを推奨したからである。この論者は多くの点で優しさと慈愛に優れていたが、ヴェローナの人々の見世物の要求に応じた友人を熱く称賛し、次のような驚くべき一文を書いている。「これほど多くの求めがあったにもかかわらずかわらず拒否するのは毅然とした態度ではなく、残酷である。」四世紀の終わりにも、その時代の最も尊敬すべき異教徒の一人とみなされていた長官シンマコス（*クイントウス・アウレリウス、AD345-402）が、息子の祝い事で戦わせるためにサクソン人の囚人を集めた。彼らは獄中で自ら縊死し、シンマコスは彼らの「不敬な手」によって自分に降りかかった不幸を嘆いた。しかしソクラテスの忍耐と哲学の教訓を思い起こして気持ちを鎮めようとした。

私はローマ人の生活のこの側面の極端な残酷性を隠したり、軽んじたりする気は毛頭ない。しかしそこにはある種のごく自然な誇張があり、それに対して私たちは警戒する必要がある。人間の本

性には、とりわけ博愛の情の行使には、不平等、矛盾、異常があり、理論家はそれを必ずしも考慮に入れていない。古代ローマで剣闘士の戦いを楽しんだ人間は、同じような見世物を楽しんだ現代人と同じように非人間的であると考えるなら、それは全くの誤りだろう。自分の慈悲深い時代の基準より少しばかり劣る人間は、もっと野蛮な時代の基準に適合していた人間より、実際にはずっと悪いことが多い。たとえ後者が、前者が恐怖で尻込みするようなことを完璧な平静さで行っていたとしてもである。私たちは善意と悪意の両方の感覚を局在化する力を、時に推測されるよりもはるかに強く持っている。ある人物がある特定の集団に対して非常に親切だったり、非常に厳しかったりする場合、これは通常、そして全体として当然その人物の一般的な性格を示す指標とみなされる。しかしこの推論は絶対に確実なものではなく、容易に行き過ぎてしまう。自分の親切心のすべてを一つの集団に費やし、その外側のすべてを完全に冷淡に扱うように見える人々がいる。またある集団を自分の共感の埒外と見なし、他の領域では生き生きとした不変の愛情を示す人々もいる。野蛮な習慣には微塵の抵抗もなく従うが、習慣によって神聖化されていない同じように野蛮な行為を全く受け入れない人々がたくさんいる。私たちの情緒はその性質上、非常に気まぐれなので、最も妥当と思われる推論を経験の列挙によって修正することが常に必要なのである。たとえば動物に対する残酷さは当然人間に対する残酷さにつながる心の習慣の前兆であり、それを促進するというのは疑いのない、非常に重要な真実である。一方、動物に対して優しい慈悲深い性格は、一般に穏やかで愛情豊かな性格を伴う。しかしこの原理を慈愛の絶対的な基準として採用するなら、すぐに誤り

に氣付くことになる。ドミティアヌスがハエを殺して野蛮な性癖を満足させたという、いささか陳腐な逸話がある。それに対してスピノザは人類の中で最も純粹で、最も穩やかで、最も慈悲深い人物の一人だったが、彼の人生のほとんど唯一の娯樂はハエを蜘蛛の巣に入れて、その鬭争と死を觀察することだったと言われている。フランス革命の間、人間の苦しみに最も絶對的に冷淡だった人々の非常に多くが動物に深い愛情を持っていたことが知られている。フルニエ(*クロード、レリテイエ、1745—1825)はリス、クートン(*ジョルジュ・オーギュスト、1755—1794)はスパニエル、パニス(*エティエンヌ・ジャン、1757—1832)は二羽のキジ、シヨメット(*ピエール・ガスパール、1763—1794)は鳥、マラー(*ジャン・ポール、1743—1793)は鳩を大切にしていた。ベーコンは残酷な民族であるトルコ人が、それでも動物たちに対する優しさにおいて際立っていることに氣がついた。そして長い嘴の家禽に猿轡をしたために石で打たれそうになったキリスト教徒の少年の例について触れている。エジプトには引退した猫のための病院があり、最も忌まわしい昆虫でさえ優しく扱われるが、人間の命はまるで重要でないかのように扱われ、人間の苦しみはほとんど注意を引かない。このような対照は東洋のすべての国で多かれ少なかれ見られる。一方、スペインでは鬭牛への激しい情熱が最も活動的な博愛と最も愛情豊かな氣質と両立することを、旅行者は異口同音に述べている。また別の分野に目を向けるなら、征服者はその野心のために大勢の人間を完璧な無慈悲さで犠牲にするが、孤立した個人の扱いにおいては常に温情が目につくということも珍しくない。この種の異常は、ローマ人の中に絶

えず現れている。闘技場の砂が人間の血で赤く染まるのを喜んで見下ろしていた同じ人たちが、テレンティウスの有名なセリフが人間の普遍的な兄弟愛を宣言したとき、劇場で拍手喝采したのである。元老院がある貴族を殺害した犯人を発見できず、その400人の奴隷を死刑にすることを決定したとき、民衆はその判決に表立って反抗した。アウグストウスの時代、自分の息子を折檻して死なせてしまったエリクソという騎士は、憤慨した民衆によって八つ裂きにされそうになった。ある元老院議員がその愛人が見物できるような時間に処刑を行ったという理由で、大カトーは彼の地位を剥奪した。円形闘技場にも、穏やかな精神の痕跡が残っていた。ドルスス（*ネロ）は血を見ることを目に見える形で喜んだことで人々の不興を買い、カリグラは死を見ることに好奇心を持ちすぎていた。カラカラは少年時代、犯罪者の処刑に涙を流して熱狂的な称賛を得た。ローマで最も人氣のある見世物のひとつが綱渡りだった。そして当時も現在と同様、綱は地上から非常に高い位置に張られ、見かけ上、そして実際に危険であることがその興行に悪趣味を添えていたのである。マルクス・アウレリウスの治世に事故が起こり、皇帝はいつものような細やかな慈愛を發揮して、下に綱や敷物を置かずに綱渡りをすることを禁止した。コロッセオで捕虜の血が水のように流れていたローマ帝国の最悪の時代の一世紀以上にわたって、どのキリスト教国も採用していなかったこの予防措置が続いたというのは非常に不思議な事実である。慈愛の水準は非常に低かった。しかしその感情は、その発露において気まぐれで一貫性がなかったものの、まだ明白だった。

私の上記のスケッチはローマのモリストたちとローマ人の間に存在した大きな隔たりを示すのに十分であろう。一方には倫理体系がある。その教えの範囲と美しさ、それが訴える動機の崇高さ、迷信的要素からの完全な解放を考慮するなら、それに匹敵するものはあつたかもしれないが、それを超えるものはなかったと言つて過言ではないだろう。他方には、道徳的な制度や職業や信条がほとんどなく、必然的に全般的な墮落をもたらす経済的、政治的システムの下に存在し、最も残酷な娯楽に熱中している社会がある。道徳律は理論的包容性において拡大していたが、実際の適用において縮小していた。初期のローマ人は非常に狭く不完全な義務基準を持っていたが、彼らの愛国心、軍事制度、そして強いられた生活の簡素化がその道徳基準を本質的に普及させていた。後期ローマ人は義務について非常に高度で精神的な観念を獲得していたが、弟子のグループを抱えた哲学者、あるいは数少ない読者を抱えた論者には民衆との接点がほとんどなかったのである。古代の哲学者たちの大きな現実的問題は、いかにして大衆に働きかけるかということだった。徳のなんたるかを人々に告げ、その美しさを讃えるだけでは不十分である。もし国民の人格を形成し、常習的な悪を根絶しようとするなら、それ以上のことをしなければならぬ。

この問題にローマのストア派は対応できなかった。この問題にローマのストア派は対応できなかった。しかし、彼らは自分の力を発揮することはしたし、その努力は社会の病弊には全く不十分であつたが、決して軽蔑すべきものではなかった。第一に、彼らは多くの偉大で優れた支配者を育て、

彼らは徳の大義のためにその地位の影響力をすべて行使した。多くの場合、これらの改革は最初の悪い皇帝が即位すると廃止されたが、少なくともいくつかは残った。アクティウムの戦い（*BC 31）からガルバの治世）までの間に最も度を越していた食卓の贅沢が、この時期から縮小し始めたことが観察されている。この変化は主に、多くの地方議員を導入してローマ貴族制度をいくらか改革し、宮廷を最も厳しい儉約の模範とした、ウエスパシアヌスによるものとされている。ネルウア帝（*在位AD96―98）の即位からマルクス・アウレリウスの死までの八十四年間は一様に他の専制君主制国家が追従できないほどの善政が敷かれていた。当時君臨していた五人の皇帝は、いずれも史上最高の統治者たちの一人に数えられるにふさわしい。トラヤヌスとハドリアヌスは、個人的な性格において最も不完全だったが、偉大で傑出した才能を持つ人物だった。アントニヌスとマルクス・アウレリウスは政治家としてはそれほど優れていなかったが、これまでに玉座についた中で最も完全に高潔な人物だった。この時期の四十年間、文明世界全体は完全に途切れることのない平和に支配されていた。蛮族の侵攻はまだ始まっていなかった。帝国を構成するさまざまな民族は、完全な内政と完全な知的自由に満足し、政治的自由特権にはまったく関心を示さなかった。そして現在では三百万人以上の兵士が守っている地域を、三十万人あまりの兵士が守っていたのである。

このような状況を作り出す上でストア派は帝国の主要な道徳の担い手として圧倒的とまではいか

ないまでも、かなりの影響力をもっていた。他の方面ではその影響力はより明白で排他的だった。「賢者は公的生活に参加すべきである」というのがこの学派の基本的な格言だった。それゆえストア派が栄えれば愛国心が復活しないことはありえなかった。新プラトン主義者を夢見る神秘主義者に、カトリック信者を役立たずの隠者に変えたのと同じ道徳的衝動が、ストア派を祖国のための危険な最前線へと駆り立てたのである。ローマの徳のランドマークが次々と水没し、贅沢と懷疑論と外国の習慣と外国の信仰が国民生活の骨組み全体を腐食している間、失効した自由特権の最後の発作の中で、その崩壊のすぐ後に始まった悪徳の恐ろしいカーニバルの中で、ストア派は変わることなく過去の代表者であり支持者だった。カトー、トラセア、ヘルウイディウス、ブルトウスといった人物に導かれ、徳の党という高貴な称号を得た党は、専制と変節の最も暗い時期にローマの徳とローマの自由特権の旗を掲げた。宗教的な熱意を政治に持ち込むすべての人々と同様、彼らはしばしば偏狭で不寛容、社会の必然的な変化には盲目で、妥協ができず、乱暴で不適當な要求もした。しかし彼らの高貴な節操と勇氣はその誤りを償って余りあるものだった。彼らの生活の厳かな純粹さと死の英雄的な莊重さは、ネロやドミティアヌスの下でもローマの自由特権の伝統を守り続けた。このような人々が存在する限り、すべてが失われることはないと考えられていた。自由の集結地点、新たに芽吹くかもしれない徳の種、帝国の専制と腐敗に対する生きた抗議がまだあったのである。

ストア派が民衆道徳に与えた第三の、さらに重要な貢献はローマの法学の形成だった。ギリシャ

とローマがその支配権をめぐって争った多くの知的努力の中で、これは後者の優位に議論の余地がない唯一のものだろう。ローマ人の詩人が「諸国民を支配していること」を同胞の最高の誉れとしたことは正しかった。そして彼らの行政における非凡な才能は、今に至るまで歴史上に比類がない。法に対する深い敬意は長い間、彼らの主要な道徳的特徴の一つだった。そしてそれを早い時期から教え込むため、ローマの教育制度の一環として子供たちに十表の法を暗記させることが義務付けられていた。しかし共和国の法律は民衆を支配的する、地方的、軍事的、聖職的精神の契約の表現であって、帝国の政治的、知的拡大には必ずしも適していなかった。アウグストゥス時代にストア派のラベオ（*マルクス・アンティステイウス、BC?—11）によって始められた刷新は、ハドリヌスとセウエルスの時代にも熱心に続けられ、テオドシウス（*2世、東帝、在位AD408—450）とユスティニアヌスの有名な編纂物によって世に出た。この運動において二つの部分を観察しなければならない。ローマの偉大な法律家たちによって、法学者の理想—特定の法律を制定する目標—とでもいうべき、ある種の一般的な指導のルールが定められた。法が言及していかないか、または曖昧な場合に、裁判官を導くための公平（*equity）の原理である。また特定のケースに対応するための明確な制定法も存在した。前者の部分はシンブルにストア派から借用したものであった。その理論と方法は哲学の学校の狭い輪から抜け出して、文明世界の道徳的な目印と公認されるようになった。ストア派と初期のローマ思想の根本的な違いは、前者があらゆる階級や国家の制約を超越あるいは圧倒する人類の団結の絆の存在を主張していたことだった。ストア派の方法の

本質的な特徴は自然の法則の存在を主張することであり、哲学の目的はそれに従うことだった。この信条はローマの法律家たちによって、最も無制限に語られた。ウルピアヌスは「自然法に関する限り、すべての人間は平等である」と言った。パウルス（*ジュリアス、プルデンティシムス、AD 1—2世紀）は「自然は私たちの間に確かな関係を築いた。」と言った。ウルピアヌスは「自然法によって全ての人間は生まれながらにして自由である。」と宣言した。フロレンティヌス（*4世紀末の政治家）は奴隸制を「ある人間が自然の法に反して、他の人間の支配下に置かれる国法上の習慣」と定義した。こうした原理に従ってローマの法律家の間では、奴隸か自由かの二者択一が問題になるような疑わしい事件では裁判官の判断は後者をとるべし、というのが格言となった。

ローマの法律は二重の意味で哲学の子だった。第一にそれは哲学的モデルの上に築かれたものであって、社会の既存の要求に合わせた単なる経験的な制度ではなかった。抽象的な正義の原理を定め、それに法律を従わせようとしたのである。そして第二に、これらの原理はストア派から直接借用されたものだった。この学派がローマのモラリストの間に占めていた際立った地位、彼らの公共の問題への積極的な介入、またその用語の正確さと簡潔さが法律家たちに気に入られていた。そしてこのとき法律と哲学の精神が融合したことは今なお感じることができるといえる。後世の最も道徳的で、そして最も影響力があり、しかし最も空想的な政治的思索の基礎となった、あらゆる人間の制定法を超えた自然の法の存在の明確な認識は、主にストア派とローマの法律家たちの功績とするべきで

ある。またローマ法の研究の復活は宗教改革に先立つリバイバルの重要な要素であった。

これらの原理が実際の立法にどのように適用されたかを詳細に追うことは本書の目的ではない。ストア派の普遍的、人道的原理がある程度浸透していない部門はほとんどなかったというだけで十分である。政治の世界では、すでに見たようにローマの市民権はそれに付随する保護と法的特権とともに、小さな階級の独占物だったが、徐々に、しかし非常に広く拡散した。家庭においては、古い法律が家族の父親に与えていた権力は消失こそしなかったものの大幅に縮小された。そして以下に少しばかり言及する価値のある重要な革新が帝国の社会制度に導入された。

道徳の年表において家庭の徳が他のすべてのものに優先するのは当然である。その初期の段階にはたった一つの条項しかなかった――家長に対する絶対的な服従の義務である。義務の相互性を感じられ、文明の全体的な傾向が家族のメンバー間の格差の縮小に向かうのは、後にいくらかの愛情が生まれた後の事である。私は後の章で妻が単なる奴隷から、夫の仲間になり対等な存在になった過程をたどるつもりである。父親と子供との関係は教育の中に愛情が占める新しい立場によって大きく変化する。教育は未開の国では主に権威に、文明社会では共感に立脚している。ローマでは家長の絶対的な権威は、立法者が支持するべき目標である規律と服従の体系全体の中心であり原型だった。親孝行は第一の義務として強いられていた。ウェルギリウスによればこれは民族の始祖が驚く

ほど身に着けていた徳だった。老人に払われる表面的な尊敬の念はスパルタと比べても、ほとんど劣ることはなかった。親が子供に対してこれほど大きな権限を持つ国は他にない、というのが法律家たちの誇りだった。子はまさに父親の絶対的な奴隷であり、父親はいつでもその命を奪い、その全財産を処分する権利を持っていた。子が父親の存命中にこの束縛から解放されることはなかった。五十歳の男、執政官、將軍、護民官も、この点では幼児と同じ立場にあり、いつ父親の命令によって、労働から得られるすべての収入を奪われ、最も下等な仕事に追いやられ、あるいは死刑にされるかもしれない。

この法律が少なくともその存在の後期においてその目的に失敗していたことにはほとんど疑いの余地がないだろう。これほどまでに不幸な家庭を生む間違った教育はないだろう――親は子供の信頼を得ようとする前に、服従を命じようとしたのである。これがローマの立法者が親に指し示した道だった。それは当然の帰結として、若者の共感を冷めさせ、憤慨を引き起こした。親孝行は全ての徳の中で、おそらくローマの歴史に現れる頻度が最も少ないものである。プラウトウス（*BC254―184）の劇においてそれは王政復古期（*謹厳な清教徒政権の反動で放縱な時代であったとされる）英国の劇作家が夫婦の貞節を扱ったような頻度でしか扱われていない。テイペリウスの治世の歴史家は、内戦は妻の夫への献身、奴隷の主人への献身、息子の父への裏切りや無関心などの多くの実例を提供することで等しく注目に値すると述べている。

異教徒の帝国時代に行われた改革は家族を再構築するものではなかったが、少なくともその専制性を大きく緩和した。この問題に関する感覚の重大な変化は、古代ローマ人の子供を死に至らしめた親への敬意ゆえの尻込みしながらの黙認と、アウグストゥス政権下でエリクソの行為が引き起こした憤りとの対比に見て取れる。ハドリアヌスは自分の息子を暗殺した人物を明らかに専制的な権力を用いて追放した。嬰兒殺しは禁止されていたが、真剣に抑制されてはいなかった。しかし成人した子供を死刑にする権利はアレクサンデル・セウエルスが正式に父親から取り上げるずっと前から廃れていた。また子供の財産権もわずかながら保護されていた。嫡出の子たちの相続分がなかったため遺言が無効とされた例もいくつか記録されている。またハドリアヌスは二人の前任者が弱々しく始めた政策を引き継いで、息子が自ら軍務で獲得したものの全てについて絶対的な所有権を与えた。ディオクレティアヌス帝（*在位AD 284―305）は父親が子供を売ることをいかなる場合にも違法とした。

奴隷制度の分野では法制度の改革はより重要なものだった。この制度は実にローマの道德史のあらゆる場面で私たちを待ち受けているものであって、本章でもすでに二回この制度について言及している。私はローマ人の生活において奴隷の要素が非常に重要であったことが、帝国の哲学の特徴である共感の拡大の原因の一つだったこと、また奴隷制度は非常に強力なものであって、いくつか

の異なる道筋で自由人階級の腐敗の原因になったことを示した。奴隷自身の状態については三つの時期に分けられると考えるとよいだろう。共和国の初期の単純な時代には一家の長は奴隷の絶対的な主人だった。しかし環境が専制の弊害をかなり緩和していた。奴隷の数は非常に少なかった。ローマの所有者は通常一人か二人の奴隷しか持ってなかった。彼らは土を耕すのを手伝い、主人が出征で不在のときは財産を管理した。当時の質素な習慣の中で、主人は奴隷と最も親密な関係を築いていた。主人と奴隷は労働と食事を共にし、主人の奴隷に対する支配はほとんどの場合、息子に対するものと同んど変わらなかっただろう。このような環境下で奴隷に対する大きな蛮行は常に有り得たが、一般的なものではなかっただろう。また宗教による保護が習慣の力に加わっていた。労働の神であるヘラクレスは奴隷の特別な保護者だった。スパルタはかつてヘロート（*共有奴隷）たちを裏切つて殺したため、その報復としてネプチューンが起こした地震によってほとんど破壊されてしまったという伝説がある。ローマではかつてユピテルがある男に夢の中で、公の競技における奴隷の残酷な扱いに対する神の怒りを元老院に告げるよう命じた、と言われている。権威ある法律によって奴隷たちは宗教的祭事の際の野外労働を免除されていた。特に彼らのために設けられたサトゥルナリア（*農神祭）とマトロナリア（*出産の女神の祭）はローマで最も人気のある祝日であつて、これらの日には奴隷が主人と同じテーブルにつくのが慣例だった。

しかしこの時代にも時には大きな残虐行為があつたことだろう。極端な虐待には監察官が干渉し

ただろうが、法律はあらゆることを許可していた。初期ローマ人の貴族的感覚は日々の労働を共にすることによっていくらか矯正されていたが、時に自分以外のすべての階級に対する激しい蔑視となつて噴出した。前期ローマ人の典型と考えられる大カトーは、奴隷を単に富を得るための道具と語っていた。そして老いたり弱ったりした奴隷は役に立たないものとして売るよう、その教えと模範によつて主人たちに勧めた。

次の時代には奴隷の状態は大きく悪化していた。ローマの勝利、特に東方での勝利は無数の奴隷と最も放縦な贅沢を都市に持ち込んだ。そして主人の専制は法律で制限されないままであり、以前からそれを緩和してきた生活習慣は消滅していたのである。同時に人々の良心的感情も致命的に損なわれていた。そして多くの新しい動機が一緒になつて悪に拍車をかけた。剣闘士シヨーへの情熱が始まり、苦しみを与えることに対する野蛮な冷淡さを絶えず生み出していた。シチリアの奴隷戦争とスパルタクスの反乱はイタリアの中心を揺るがし、すべての家庭がその衝撃を感じた。「奴隷のように多い敵」というのがローマの諺になった。蛮族の捕虜の激しい闘争は恐るべき罰による報いを受け、反乱を起こした何千人もの奴隷が十字架の上で死んだ。市民の安全を確保するために、主人が殺された場合、その家の奴隷のうち鎖につながれている者と病気で全く無力な者以外はすべて死刑に処する、という残虐な法律が制定された。

また最も忌まわしい野蛮な行爲も数多く行われた。フラミニウス（*ガイウス、ネポス、BC?—217）は客の好奇心を満たすために見世物として奴隷を殺すよう命じた、ウェディウス・ポリオ（*政治家、BC?—15）は奴隷の肉を魚に食べさせた、アウグストゥスは可愛がっていたウズラを殺して食べた奴隷に十字架刑を宣告したという有名な逸話は記録に残る最も極端な例である。ただしローマの婦人が気まぐれで罪もない使用人を十字架につけるよう命じたというユウエナリスの有名な描写は歴史的事実ではないだろう。しかし共和国末期から帝政初期にかけての奴隷の生活について、他にも非常に恐ろしい光景を垣間見ることができるといえる。法律は奴隷の結婚を全く承認していなかった。彼らにとって姦淫、近親相姦、一夫多妻という言葉は法的な意味を持たなかった。法廷において彼らの証言は一般に拷問によって得られたものしか採用されなかった。犯罪ゆえに処刑されるとき、彼らの死は最も恐ろしい種類のものであった。エルガストゥーラすなわち主人の私的な牢獄はしばしば彼らの唯一の寢床になった。年老いた奴隷や病弱な奴隷はよくテヴェレ川に浮かぶ島に捨てられて死んでいった。鎖でつながれて門番をしていた奴隷、また鎖につながれて畑を耕していた奴隷の記録もある。オウイデイウスやユウエナリスは、使用人の顔を引き裂き、ブローチの長いピンをその肉に突き刺した獰猛なローマ女性たちについて書いている。共和国末期には主人は奴隷を剣闘士として、あるいは野獣と闘う戦士として売ることができるといえる完全な権利を有していた。

これらはすべて非常に恐ろしいことだが、この状況には別の側面があったことを忘れてはならな

い。多くの教会系の論者は帝国の異教徒社会を一種の伏魔殿として描くのが通例である。この目的のために彼らは私が引用した事実、そのほとんどがローマの風刺作家や歴史家によって語られた最も極端でぞっとするような残虐行為の実例を収集するのである。彼らはそれを奴隷階級の通常の扱いの公正な見本として紹介する。そして主張されるであろう多くの緩和的な事実を考察から完全に締め出しているのである。奴隷の結婚は法的に認められてはいなくとも慣習によって承認されており、その家族を引き離すことは一般的ではなかったようである。すでに触れた二つの習慣が古代の奴隷制度を現代のそれと大きく区別している。ペキュリウムすなわち奴隷の私有財産を主人は十分に認めていた。奴隷の死後、その一部または全部が主人に戻るのが普通だったが、中には奴隷の遺言による処分を認める主人もいた。奴隷の解放は都市の人口に深刻な影響を与えるほどに行われた。キケロによると勤勉で行いの良い捕虜は、一般的に六年すれば自由になることを期待できたようである。個々のひどい残虐行為は疑いなく存在した。しかし世論はそれを強く非難した。そしてセネカは奴隷を不当に扱う主人は街頭で指さされ、侮辱されたと証言している。奴隷は必ずしも後世に見られるような劣悪な存在ではなかった。ローマ人の病気を治した医者も、息子の教育を任せた家庭教師も、都市で称賛を浴びた芸術家も通常は奴隷だった。奴隷たちは時に家庭で主人と仲良く、いつも同じ食卓を囲み、主人の最も温かい愛情を受けていた。キケロの奴隷であり、後に解放奴隷になったテイロは主人の手紙を編纂した。そしてその中にはキケロから彼に宛てた最も誠実でデリケートな友情の言葉が残されている。小プリニウスが何人かの奴隷の死に対する深い悲しみを吐露

し、死ぬ前に彼らを解放したので、少なくとも彼らは自由の身で死んだのであると考えて自分を慰めようとした手紙については既に述べた。エピクテトスは奴隷だったが、たちまち皇帝の友情を得るようになった。奴隷の増殖は彼らを主人の共感から遠ざけたが、少なくともほとんどの場合、彼らの負担を軽減したに違いない。奴隷の証人に拷問を加えるのは恐ろしいことではあるが、滅多にないことで、法律によって注意深く制限されていた。多くの悪習が育まれたことは間違いない。しかし、それでも内戦や帝国の年代記には奴隷たちの忠実さを示す最も素晴らしい実例がふんだんにある。多くの場合、奴隷は主人を裏切るよりも自由特権の恩恵を断って最も恐ろしい拷問に立ち向かい、他のすべての人々が主人を見捨てたときに逃亡に同行し、危険から救うために不屈の勇气と不断の工夫を示し、ある場合には意図的に自分を犠牲にして主人の命を救ったのである。このことは実際にしばらくの間、ローマの卓越した徳だった。そしてまた時に主張されるほどに主人は專制的ではなく、奴隷は墮落していなかったことを決定的に証明している。

奴隷に対する慈愛の義務は、いつの時代も哲学者が最も熱心に説いたものの一つだった。プラトンとアリストテレス、ゼノンとエピクロスはこの点に関して実質的に一致していた。ローマのストア派も同様にこの義務を強調していた。特にセネカは、地位の偶然は人間の真の尊厳に何ら影響を与えないこと、奴隷は徳によって自由になりうるが、主人は悪によって奴隷になりうることを、奴隷に対するあらゆる残酷さだけでなくあらゆる蔑視さえも避けることが善人の義務であることを忘れ

るな、という主人への勧告で紙面を埋めている。こうした勧告の中にキリスト教の影響を発見したと考える者もいる。しかしこれらは実際には古代ギリシャの教えの、そして特にストア派の創始者ゼノンがキリスト教の夜明けよりずっと前に打ち立てた「すべての人間は本来対等であり、彼らの間に差をつけるのは徳だけである。」という大原則の繰り返しに過ぎない。平和だったアントニヌス朝の緩和的な影響力はこの慈愛の働きを助けた。奴隷はカエサル専制政治の最悪の特徴の一つから、ある偶発的な利益を得ていた。自らの命や権力に対する陰謀を常に懸念していた皇帝たちは、重要な臣下に数多くのスパイを送り込んでいたのである。そして奴隷は主人の行動を容易に知ることができたため、政府は奴隷たちに好意を持つようになった。

このような影響の下で奴隷の法的立場を大きく変える多くの法律が公布され、ローマの奴隷制の第三期とでも言うべき時代が始まった。アウグストゥス、というよりむしろネロによって発布されたペトロニア法は、主人が裁判官の判決なしに奴隷を野獣と闘わせることを禁じたものである。クラウディオゥスの時代、一部の市民は病気の奴隷をテヴェレ川のエスクラピオス島（*ティベリーナ島）に捨て、世話をする手間を省こうとした。皇帝は、捨てられた奴隷が病気から回復すれば自由を得ること、また奴隷を捨てる代わりに殺した主人は殺人者として罰せられる、という布告を出した。エスクラピオス神殿に捨てられた奴隷には救いの手が差し伸べられた可能性もある。またこの法律から奴隷の理由のない殺害はすでに違法だったことがわかる。この頃、皇帝の像は奴隷の避難

所となっていた。ネロの時代には彼らの訴えを聞くために裁判官が任命され、奴隷を残酷に扱った
り、欲望の道具にしたり、十分な生活必需品を与えなかったりした主人を罰するよう命じられた。
その後、かなりの間が空いた。しかしドミティアヌスは官能的な目的のために奴隷の体を切断する
（*去勢して男娼にする）東洋の習慣を禁じる法律を制定し、それはその後何度も繰り返し制定さ
れた。そしてアントニヌス朝の時代にも改革の更新に大きなエネルギーが費やされた。ハドリアヌ
スとその二人の後継者は、主人から奴隷を殺す権利を正式に奪い、ラニスタすなわち剣闘士の元締
めに奴隷を売ることを禁じ、エルガストゥルムすなわち私的監獄をなくし、主人が殺されたときに
拷問するのは音の聞こえる範囲にいた奴隷だけ

に制限するよう命じ、州に奴隷の訴えを聞く役人を置き、主人が奴隷を苛酷に扱うことを禁じ、そ
れが明らかになった場合、主人に不当に扱った奴隷を売ることを命じた。これらの法律に法学者が
ストア派から借用した、裁判官の判断の指針となる原理を与える、人類の本質的な平等を主張する
広範な公平性の格言を加えるなら、帝国ローマの奴隷制度が一部のキリスト教諸国のそれと比較し
て決して非難されるべきものではないことを認めざるを得ない。

ストア派の原理や用語のかなりの部分が公法の体系に組み込まれた一方で、ローマの哲学者たち
は、より直接的に人々に働きかける手段を持っていた。家族の死は人の心が最も感じやすいときで
あり、哲学者は遺族を慰めるために呼ばれるのが常だった。死にかけて人々は人生の最後の時に彼

らの慰めと支えを求めた。彼らは実践的道德の込み入った事例の解決のために、あるいは落胆や自責の中にあつて彼らに頼ってくる大勢の人々の良心の指導者になった。彼らはあらゆる悪徳に対して特別な勧告を行った。そしてあらゆる人格に適応する救済策を持つていた。悪人や分別のない者が哲学者に見出され、魅了され、彼の指導の下、長い道德的訓練を経て、ついには高い徳に到達した転向の事例が数多く挙げられている。教育は大いに彼らの手に委ねられた。多くの名家が現代であれば家庭内牧師とでもいふべき哲学者を抱えていた。一方で大衆的な説教の体系が作られ、広く普及した。

これらの説教者の中には、その性格と手法において大きく異なる二つの集団があつた。一つは「ストア派の修道士」と呼ばれるキニコス派で、異教徒の帝国の後期モラリストの間ではカトリックにおける托鉢僧のような地位だつたようである。エピクテトスの並外れて興味深い論文にはキニコス派が目指すべき理想像が描かれているが、これを読むとキリスト教の修道士との類似に驚かすにはいられない。キニコス派は、全人生を人類の指導に捧げる人間でなければならぬ。彼は未婚でなければならぬ。彼のエネルギーを逸らせる、あるいは希薄にするような家庭の情を持つてはならないからである彼は。最もみすぼらしい服を着て、むぎだしの地面で眠り、最も簡素な食事をし、この世のあらゆる快楽を断ち、それでいて常に上機嫌で満足している实例を世に示さなければならぬ。彼自身がユピテルに召され、助けられているということを信じられないなら、神

を怒らせることを覚悟の上でそのような人生を選んではならない。神の使者として人々の間を行き来し、季節の変わり目には、人々の軽薄さ、臆病さ、悪徳を叱責することが彼の使命である。彼は市場で金持ちを呼び止めなければならぬ。街道で民衆に説教しなければならぬ。彼は敬意も恐れも持つてはならない。彼はすべての男性を自分の息子、すべての女性を自分の娘と見なさなければならぬ。嘲笑する群衆の中でも、人々に石かと思われるような穏やかな落ち着きを示さなければならぬ。虐待や追放や死も、彼にとって何ら恐怖すべきものではない。彼の人生の規律はこの世のあらゆる束縛から彼を解き放っているからである。そして彼が打たれた時「彼は打った者を愛する。なぜなら彼は全ての人間の父であり兄弟だからである。」

キニコス派と対照的だったのはローマやアテネの社交界の最も輝かしい人々をすべて自分の椅子の周りに集めていた哲学的な修辞家だった。ギリシャの自由な制度が生み出した演説への情熱は、それを生み出した原因が消失してからも命脈を保ち、非常に風変わりではあるが影響力のある職業を生み出した。この職業は共和制ローマの時代には排除されていたが、政治的自由特権が消失した後、に大きな発展を遂げた。修辞家は都市から都市へと動き回って熱弁を振るい、しばしば強い関心とともに迎えられる一種の巡回講演者だった。しかし多くの場合、彼らの人格や才能はあまり尊敬に値するものではなかったようである。彼らの虚栄心と強欲さについては数多くの逸話が残っている。そしてその成功は大衆の嗜好の退廃の顕著な証拠だった。彼らは演説の芝居がかった部分を最も注

意深く訓練していた。その髪型、衣装の襜、全ての態度とゼスチャーには美術的配慮が行き届いていた。彼らは講演のそれぞれの分野、雄弁のそれぞれの形式ごとに適切な所作の種類を決めていた。時にはホメロスの詩や古代ギリシャの歴史上の人物になりきって、その人物が人生のある局面で行った演説をすることもあった。時にはハエやゴキブリ、ほこり、煙、ネズミ、オウムを雄弁のテーマにして聴衆を感心させることもあった。また別の者たちは目に余る逆説や詭弁の弁護、法律や道徳の複雑な事例についての議論に巧妙さを發揮した。あるいは精密ではあるが、粗探しの小うるさい批判が目につく文学講義を行なった。修辞家たちの中には最も念入りに準備した長演説だけを暗唱する者もいれば、いつでも討論する準備ができている者もいた。彼らは都市から都市へと移動しては、微妙で大抵は軽薄な問題について反対者に議論を挑んだ。詩人のユウエナリスや風刺作家のルキアノス（*サモサタの、AD 125—180）は一時期この仕事をしていた。最も著名な人物の多くは莫大な富を得、立派な従者たちを従えて旅し、訪れる都市から都市へと熱狂を運んだ。彼らはしばしば都市から、税の免除や犯罪の処罰の赦免を嘆願するため、皇帝の前に出るよう求められた。彼らは大いに民衆の教育者になった。そして民衆の趣味嗜好の形成と方向づけに非常に大きく寄与した。

当初からこの職業を取り入れ、修辞学的な講義の形で自派の原理を説くことを習慣とする哲学者たちがいた。フラウウィウス朝時代とアントニヌス朝時代には哲学、特にストア派の哲学と修辞学の

提携がより顕著になった。そしてウエスパシアヌス、ハドリアヌス、マルクス・アウレリウスの以前の良い寄付によって創設された修辞学、哲学の講座が、これを維持することに貢献した。プラトン主義者であるティルスのマクシムスやストア派のディオーン・クリュストモスの論考が伝わっているが、いずれも本質的価値の高いものである。前者は主に、活動的な生活と観照的な生活の卓越性の比較、ホメロスの神話や寓喩の根底にある神性に関する純粹で高貴な概念、ソクラテスのダイモン、プラトンの神性に関する概念、祈りの義務、哲学の目的、愛の倫理といったテーマについて論じている。ディオーン・クリュストモスは、その演説の中で最も高貴で純粹な神学を説き、礼拝において像が占めるべき位置を検証し、奴隷に対する慈愛を唱え、おそらくローマ帝国で最も早く世襲奴隷制を間違ったものとして非難した論者だった。彼の生涯は波乱万丈で、非常に高貴なものだった。彼は詭弁家（*s o p h i s t）として、またその職業の手の込んだ軽薄さに長じた修辞家として有名になっていた。しかし、ある災難とプラトンの著作が彼にそれらを放棄させた。そして彼はもっぱら人類を向上させることに専念するようになった。彼は向う見ずにもドミティアヌスの暴政によって追放された人物を擁護し、そのため物乞いに身をやつしてローマを脱出することを余儀なくされたのである。そしてプラトンの著作とデモステネス（*B C 3 8 4 - 3 2 2）の演説だけを携えて、帝国の最も遠い辺境まで旅をした。彼は手仕事で生計を立てており、講演の代償としての金銭の受け取りを拒否した。しかし、彼は蛮族の間に散在していたギリシャ人入植者たち、さらには蛮族自身をも教え、魅了したのである。ドミティアヌスが暗殺され、軍団がネルウアに忠

誠を誓うのをためらったとき、デイオン・クリュストモスの雄弁は彼らの逡巡を打ち消した。また、アレクサンドリアや小アジアのギリシャの都市で起こった反乱を同じ雄弁で何度も鎮めた。彼はホメロスの一節をテキストとして、トラヤヌスの前で王の義務について説いた。彼はオリンピック大会のためにアテネに集まった膨大で洗練された聴衆に、以前スキタイの未開の野蛮人に与えたような衝撃を与えた。彼の嗜好は修辞家の軽薄さに決して染まっただけではなかったが、好奇心と注意を喚起するあらゆる術に長けていた。そして彼の雄弁は最も遠い国の最も多様な聴衆でさえも意のままにした。しかし彼の特別な天命は、その原理を人類の大衆に拡散することによってストイシズムを広めることだった。

ヘロデス・アッティコス（*AD101—177）、ファウオリヌス（*AD80—150、半陰陽で知られる）、フロント（*AD100—170）、タウルス（*ルキウス・カルヴェナス、AD2世紀）、ファビアヌス（*パピリウス、AD1世紀）、ユリアヌスといった修辞哲学者の書物の名前、あるいはいくつかの断片が伝わっている。そしてそれぞれが熱烈な崇拜者のグループの中心になって、帝国の大都市に文壇をつくるのに貢献した。アウルス・ゲッリウスの「アッティカの夜」にこの運動の活き活きとした姿を見ることができるとまた同書はラテン文学の中で最も興味深く、有益な作品の一つであり、そしてそれとアントニヌス朝の文壇の関係は、エルヴェシウスの著作と革命前夜のパリ社会の関係にとっても似たものだったと私は考えている。エルヴェシウスは「精神」

という偉大な著作の材料を、主としてその会話がフランス人が達したことになかったほどの完成度に達していた、パリの客間の会話から集めたと言われている。彼が著作活動をしていたのは「百科辞典」の時代、革命の社会的、政治的混乱はまだ感じられず、迷信と貴族の高慢に長く覆われていた社会に知的自由の最初のまばゆい輝きが放たれ、ヴォルテールの天才とデイドロ（*ドゥニ、1713—1784）の比類なき会話の力がベーコンやロックの大胆な哲学に光を当て、上流社会全体が知的熱狂に輝き、そして過去の知恵と秩序に対する軽蔑だけが未来に対する確信と肩を並べた時代である。華麗で、優雅で、多才で、浅薄な彼は、心地よい雄弁と緩んだモラル、徳に対する深い不信、知的な美しさへの強い欲求、あらゆる術学と迷信と神秘への軽蔑、分析の全能性へのほとんど狂信的な確信とともに、あらゆる徳とヒロイズムを自己利益の偽装にすぎないとする哲学によって同時代の人々の原理を体現していたのである。彼はすべての議論を諸学派の堅苦しい学問ではなく、客間のきらびやかな逸話や鋭い文学批評によって説明した。こうして彼はそれ自身が持つ価値とは別に、それが生まれた社会を最も完璧に映し出す作品を作り上げたのである。形式、テーマ、傾向においてまったく異なるが、それに劣らず真に代表的だったのはアウルス・ゲツリウスの作品である。それはアントニヌス朝後期のローマとアテネの文壇の中心で、その精神に深く浸りながら、余暇を利用してその主要人物を描き、彼らの教えの要旨を集めた日誌、あるいは備忘録、雑記帳である。子供じみた文学的、道徳的情熱と絶望的な知的墮落が結びついて、これほど奇妙な様相を示している書物は他に類がない。著名な哲学者はみな熱狂的な弟子たちに取り巻かれていた。

彼らは講義室で拍手喝采し、人生のあらゆる問題について師を自らの監視者としていた。彼は彼らの振る舞いに見られる悪徳や虚飾の例をすべて公に叱責し、彼らを自分の食卓に迎え、彼らの友人になり、悩みを聞き、時にはその助言によって彼らの職業上の義務を助けた。タウルス、ファウオリヌス、フロント、アッティカスは最も著名な人物だった。そしてそれぞれ腐敗した社会の中心で、最も単純かつ最も熱心な真剣さで知的、道徳的向上に専念する若者の小集団を形成していたようである。しかしこの集団は極めて幼稚なものだった。天才の時代は過ぎ去り、銜学の時代になっていた。過去の偉大な論者に対する、微小な、奇妙な、口やかましい文字通りの批判が学者の主な仕事だった。そしてその精神の全体的な風潮は回顧的で古風なものにまでなっていた。エンニウス（*BC239—169）はウエルギリウスよりも偉大な詩人、カトーはキケロよりも偉大な散文家とされていた。中には気取って古風で時代遅れの言葉で会話を彩る者もいた。語源の研究が盛んになり、文法や発音に関する珍しい問題が熱心に議論されるようになった。語源の研究が盛んになり、文法や発音に関する珍しい問題が熱心に議論されるようになった。知的貧困の時代にはたいていそうであるが、論理学は大いに研究され、重んじられた。大胆な思索や独創的な思考はほとんどなくなっていたが、哲学者たちは偉大な論者の議論を三段論法に置き換え、学派の規則に従って討論することを喜びとしていた。学者たちの楽しみは、まさに気まぐれで幼稚な銜学の形を取っていた。真面目な勉強が一段落すると、タウルスの弟子たちが師の食卓に集まって、人はいつ死んだと言えるのか、それは生の最後の瞬間か死の最初の瞬間か、あるいはいつ起きたと言えるのか、それはま

だベッドの上にいるときかベッドから出たときか、といった問題を議論しながら楽しい時を過ごした魅力的な午後を、ゲツリウスは感動とともに思い起こしている。時には、昔の論者が今では死語になってしまった言葉をどのような意味で使っていたのか、という文学的な質問を互いに投げかけることもあった。また「あなたは失くしていないものを持っている。あなたは角を失くしていない。だからあなたは角を持っている。」「あなたは私ではない。私は人間である。だからあなたは人間ではない。」というような三段論法で議論することもあった。モラリストとして彼らは非常に純粋な徳への愛を示していた。しかし銜学的で回顧的な性格は同じだった。彼らは監察官の取り締まりや共和国初期の慣習をしきりに詮索していた。彼らは最もシンプルな教訓ですら、古代の事例をふんだんに用いたり、哲学者の文章を切り取って説明したりすることなしには決して主張しない、という習慣を持つようになった。それはピューリタンの論者が聖書の文言をしきりに使うことと同じだった。彼らはとりわけ良心の問題を喜んで取り上げ、中世のスコラ学者のような巧みさで議論した。

ラクタンティウス（*AD240―320）は、ストア派はその教えの大衆的あるいは民主的な性格によって特に注目されていたと述べている。この点における彼らの成功には修辞学者たちとの同盟がおそらく大きく貢献したのである。しかし他の点においてそれはこの学派の没落を早めることになった。クリシッポス（*BC280―207）の緻密な才能がストア派の単純な道徳と結びつけた無益な思索、洗練、逆説は初期ローマのストア派においてほとんど背景に追いやられていた。

しかし修辭學者の教えにおいて、それらは至高のものであった。アントニヌス朝が哲學者に与えた寄付は、長い髭を生やし哲學者の服を着ていたが、悪名高く不道德な生活をしてきた多くの詐欺師を引きつけた。特にキニコス派は社会の通常の慣習を否定することを公言し、最悪の時代でも少なくとも托鉢僧の表面的な道德を確保していた規律や監視の下を去り、絶えず全ての徳や良識の名残を投げ捨てていた。ストア派は偉大な人格を作り上げ、英雄的な行動を鼓舞する代わりに、最も怠惰な詭弁の教習所、あるいは明白な詐欺の隠れ蓑と化したのである。マルクス・アウレリウスが玉座に就くのを見た、まさにその世代が彼の学派の影響力が消滅するのを見たのである。

ストア派の衰微の内的要因は非常に強力なものではあるが、その完全な消滅を説明するには不十分である。その最大の原因は人々の心が新たな転機を迎えたことであり、その熱意が東洋の宗教へ、そしてプロテイノス、ポルピュリオス、イアンブリコス（*AD245—325、シリア人）、プロクロス（*AD411—485、トルコ南西部生まれ）の指導のもと、一部はエジプトの、一部はプラトンの神話哲学の方向に急速に流れて行ったことに見出されるはずである。異教徒の帝国に関するこのレビューを終えるにあたって、私は異教徒の道德のこの最後の変容を指摘し、説明しなければならぬ。

それは第一に、ストア派の詭弁の極端な無味乾燥に対する、またセクストス・エンペイリコス

(AD2—3世紀)が復活させた懐疑論に対する、ごく自然な反応だった。そしてこの点において後世に何度も例証されてきた人間の心の法則を象徴している。例えばスコラ学者たちの小うるさい、満足を与えない、知的な細かい区別立ては聖ボナヴェントゥーラ(*1221—1274)の、そして後にはタウラー(*1300—1361、ドイツ)の純粹に感情的で神秘的な学派に直面した。また例えば前世紀の哲学において一般的だった人間の知性の崇拜はド・メイスター(*1753—1821、イギリス)とラメンネ(*1782—1854、フランス)によるその権能の完全否定への道を地ならししたのである。

次に、神秘主義は長い間進行していた靈化(*spiritualising)運動の正常な継続だった。カトールからマルクス・アウレリウスに至る倫理学の強い傾向は、徳のタイプにおける感情の優位性を拡大するものだったことは、すでに見たとおりである。穏やかな、靈的な、一言で言えば宗教的な人格の形成が道徳文化の重要な一部となり、それは単なる手段としてではなく、目的とみなされるようになったのである。しかし、マルクス・アウレリウスもカトールもストア派だった。マルクス・アウレリウスではそのタイプが大きく修正されていたが、二人とも同じ徳の一般的な特色や観念を代表していた。しかし、着実に変化してきた徳の実践的な部分と感情的な部分とのバランスが、後者に決定的に有利になる時が間もなく訪れることになる。そしてその時、ストア派のタイプは必然的に捨て去られることになったのである。

政治的、商業的な原因が重なって東洋の信仰を広めるのに非常に有利な状況が生まれた。商取引がエジプトとイタリアの間の絶え間ない交流を作り出した。ローマには自国の宗教に熱烈に傾倒している東洋人の奴隷が大勢いた。そしてアレクサンドリアは知的発達と地理的・商業的位置があいまって、多くの教義の融合に非常に有利であり、すぐに世界的影響力を持つ思想の一派を生み出した。折衷主義の四大体系が発生した。アリストブルス（*AD1世紀の聖人、バルナバの兄弟とも言われる、ブリタニアに宣教）とフィロ（*BC20—AD50）はユダヤ教にギリシャ哲学とエジプト哲学を取り入れた。グノーシス派とアレクサンドリアの教父たちは、非常に異なる割合ではあるが、同じ要素にキリスト教の教義を統合した。ただし少なくともその後の形においては、新プラトン主義はギリシャとエジプトの精神の融合を表していた。プラトンの理想哲学と東洋に固有の神秘哲学の間に大きな相似性が見出された。そしてこの二つの体系は容易に融合した。

しかし、この運動の最も強力な原因は長い間帝国内で高まっていた積極的な（*positiva、実地的な、確かな）宗教的信仰への強い願望だった。ローマ人の不信仰が極限に達した時期は、キリストの誕生前の一世紀と後の半世紀だった。政治的な原因による共和国の古い習慣の突然の消滅、帝国の多種多様な宗教の初めての比較、さらにエウヘメルスの著作によって、エピクロス主義が代表し奨励する絶対的な宗教不信が生まれたのである。しかし、この不信は、すでに述べた

ように、数多くの魔術的、占星術的迷信と共存しており、自然科学に対する無知は大きく、一般法則の觀念も微弱だったため、迷信を大きく復活させる材料はまだ残っていた。一世紀の中頃から、より信心深く、敬虔な精神が生まれ始めた。イシスとセラピスの崇拜は支配者たちの敵対にもかかわらず、ローマに押し寄せた。フラウイウス朝の終わりには、ティアナのアポロニウスが道徳的な教えを宗教的な実践を結びつけようと努め、長い間停止していた神託がアントニヌス朝の下で部分的に回復された。帝国の災難と目に見える衰退は、人々の心から長い間宗教的感覚の代わりになっていたローマの偉大さに対する誇り高い愛国的崇拜を奪い去っていた。そしてマルクス・アウレリウスとその後継者の治世に国中を襲った恐ろしい疫病の後には、盲目的、熱狂的、発作的な迷信が流行した。加えて人々は魂の起源、性質、運命という大問題の無視を長く黙認したことはなかったし、何らかの宗教的礼拝や願望を欠いたこともなかった。欲求や活力と同じく、宗教的な本能が人間の本性の一部であることは、すべての歴史が立証している事実であり、また人間の魂が絶えず向かっていく目に見えない世界の実在を示す最も強力な証拠の一つである。初期ローマのストア派はこの点において現代の実証哲学にいくらか似ているが、その信奉者の大部分は宗教の大問題から目を背けていた。そして外部の超自然的な是認に頼ることなく、既存の人間の本性から倫理体系のすべてを發展させようとした。しかしプラトン派と、自らをピタゴラスの名と結びつけたエジプト派は本質的には宗教的だった。前者は徳の源泉および模範として神を崇め、人間に作用するダイモン、すなわち下位の靈的存在を認め、民間宗教と敵対することなしにそれを弁明し、純粹化した。

後者は恍惚状態や静寂主義を理想とし、テウルギアという特別な宗教儀式によって心を清めようとした。両哲学は相助けて偉大な宗教改革を実現しようとした。その中で通常ギリシヤの精神は理性的な要素を、エジプトの精神は神秘的な要素を代表していた。

前者の中でプルタルコスはその筆頭だった。彼は理性の至高の権威を説いた。迷信は神の特性を誹謗するものであって無神論より悪いものであること、またその害悪は消極的なものではなく、積極的なものであることを彼は丹念に論じた。同時に彼は神話を作り事の織物とは見なさない。あるものは否定する。他のものは釈明する。また他のものは率直に受け入れる。ほとんどの場合、彼は純粋な一神教を説いている。別個の神々を単なる神の属性の通俗的擬人化と表現したり、ダイモーンの通常の説明を用いたりすることによって、彼はそれを一般的な信仰と調和させようとしている。恐れを知らない厳しさで人間的道德による試験を行うこと、神に属するものとされた残酷または不道德な行為を憤然と却下することによって、彼は詩人たちの作り事のほとんどを切り捨てた。彼はすべての宗教的恐怖政治を非難している。また神についての迷信的で偶像崇拜的な概念と哲学的な概念をはっきりと区別している。「迷信的な人物は神々を信じているが、その本質について間違った考えを持っている。この善き存在の意思は私たちを注意深く見守り、私たちの過ちを忘れようとするものである。しかし人はこの存在を、自分たちを苦しめて喜んで、凶暴で残酷な暴君として表現する。真鍮の鑄造者、石の彫刻家、蠟の成形家を信じる。神々に人間の形を与える。自分が作

った像を飾り、崇拜する。そして神の像を、形の美しさではなく、壮大さや威厳、寛大さ、善良さと関連づける哲学者や知識人に耳を貸さない。」またプルタルコスが異教徒の信仰には間違はなく超自然的な根拠があると考えていた。託宣を信じていた。非常に巧妙な論考で、先祖の罰の継承と特別な神意の教義を擁護した。肉体的苦痛の概念こそ否定したものの、来世の報いを認めていた。そして彼は詩人のいくつかの作り話が伝える道徳的な教えをはっきりと浮き彫りにしたのである。

プルタルコスがトラヤヌスの治世に占めた地位を、次の世代ではティルスのマクシムスが占めた。彼はプルタルコスと同じく、しかしより一貫して純粋な一神教の教義を支持して、「ゼウスは万物を生んだ最も古い指導的な精神であり―アテナは思慮であり―アポロは太陽である。」と宣言している。プルタルコスと同じく、彼は神話の多くを説明するためにプラトンのダイモーンの教義を展開した。そして異教徒の教科書あるいは聖書だったホメロスの作り事に自由自在に寓意的解釈を施した。これらの手段によって、彼は純粋な一神教と矛盾するあらゆる要素や道徳的に疑わしい伝説を取り除き、民衆の信仰を澄んだものにしようとした。また同時に民衆の礼拝を無害な象徴主義に昇華したのである。「神々自身は像を必要としない」しかし人間の弱さは「拠り所となる」目に見える印を必要とする、と彼は断言する。「ぐらつかない心で天と神の元に昇る力を持つ者は像を必要としない。しかし、そのような人物は非常に稀である。」そしてギリシャの彫像、エジプトの動物、ペルシヤの聖なる炎など、人が神の性質を表現したり象徴したりしようとしたさまざまな方法について話

を進める。「太陽よりも空よりも古く、すべての歲月、あらゆる時代、あらゆる自然の営みよりも偉大であり、いかなる言葉によっても表現できず、いかなる眼も見ることができない、存在するものすべての父にして創造者である神…その姿について、私たちが何を語ることができるだろうか。人々には、ただ神の性質は一つしかないと理解させるだけでよい。ギリシャ人が主にペイディアスの芸術によって神を記憶してしようと、エジプト人が動物や川を崇拜してしようと、他所で炎を崇めていようと、私は表現の多様性を責めるものではない―ただ人々には、一つしかないと理解させ、ただ一つだけを愛させ、一つを記憶にとどめさせよ。」

ティルスのマクシムスとほぼ同じ時期に、同じ方向でいくらかの努力をした第三の論者がアプレイウスである。しかし彼は道徳的指導者としても、迷信からの解放という点でも、前述の論者たちに遠く及ばなかった。彼が最も称賛したのはエジプトの宗教だった。しかし哲学においてはプラトン主義者であり、その立場からプラトンの道徳律を解説するとともに、ダイモーンの教義に関する非常に明確で印象的な論考を残している。彼は言っている。「ダイモーンは地上と天上の住人の間で祝福と祈りを運ぶ者であり、一方からは祈りを、他方からは援助を運ぶ…プラトンが『饗宴』の中で主張しているように、すべての啓示、魔術師のさまざまな奇跡、あらゆる種類の兆しは、彼らによって支配されているのである。彼らには遂行すべき任務があり、つかさどるべき部門がある。ある者は夢を、ある者は内臓の性質を、ある者は鳥の飛翔を指図する…最高神はこうしたことにまで

踏み込まない——中間神に任せるのである。」しかしこうした中間の靈は、単に超自然的な現象を引き起こすだけではない——私たちの徳の監視者であり、私たちの行動の記録者でもある。「人は皆、人生における自分の行いの目撃者と守護者を持っている。この靈は誰にも見えないが常に存在し、すべての行為だけでなく、すべての思考を目撃しているのである。人生が終わり、来た所へ戻らなければならぬとき、私たちが監督していた同じ靈が私たちを連れ去り、その保護下で私たちを裁きへと急がせ、そして私たちが動機を弁明するのを助けてくれるのである。もし何か偽りの主張があれば、彼はそれを訂正し——真実の主張であれば、それを立証してくれる。そして彼の証言に従って私たちの判決は決定されるのである。」

このような宗教改革の試みは多くの点で興味深く、また重要なものである。これらは非常に興味深い。なぜなら神々の起源に関するエウヘメルスの説と混じり合ったダイモーンの教義は教父たちによって異教徒の神学の真の説明として普遍的に受け入れられたため、また三世紀以降その概念、守護靈の美術的な（* * a r t i s t i c）タイプまでが守護天使の概念として再び登場したため、また多神教から従属的な靈たちの軍勢への委任やその奉仕によって働く一柱の神、という概念への移行は明らかにキリスト教の受容への道を用意するのに適していたからである。また、宗教的信条を自分たちが到達した道徳的、知的水準のレベルまで昇華すること、宗教的慣習をいくらかの道徳的改善の手段にすることを熱望する人間の心の動きを示している点でも興味深い。しかし何よりも

興味深いのは、ギリシャとエジプトの改革方法が、後のすべての時代における宗教思想の二つの大きな傾向を典型的な明瞭さで表現していることである。ギリシャの精神は本質的に合理主義的で折衷的であり、エジプトの精神は本質的に神秘主義的で献身的だった。ギリシャ人は自分の宗教を裁いた。彼は自分の宗教を修正し、縮小し、洗練し、寓喩化し、あるいは選択した。また、宗教の矛盾や不条理、不道徳を、日常生活で遭遇するものと全く同じように自由に批判して扱った。一方、エジプト人は神の臨在の前に深く頭を下げた。彼は目を覆い、その理性を卑しめた。彼はヨーロッパの道徳への新しい要素、宗教的な敬虔さと畏怖の導入の象徴だった。

アプレイウスは「エジプトの神々は主に悲嘆によって、ギリシャの神々は踊りによって敬われた。」と述べている。この非常に重要な発言の後半の真実は、ギリシャの歴史のあらゆるページに現れている。宗教制度から生まれた遊びや祭りのコレクションがこれほど豊富な国は他にない。軽快で、陽気で、しばしば放埒な空想が、民衆の信仰をめぐってこれほど大胆に展開された国は他になく、宗教的恐怖政治がこれほどまれだった国も他にないだろう。神々が人間より神聖視されることはほとんどなかった。そして特定の儀礼や儀式をきちんと守ることが、神への十分な貢ぎ物とされた。エジプトの宗教儀式は神秘と寓喩に包まれていた。貞節、動物食の禁忌、沐浴、準備あるいは伝授（*preparation or initiation）のための長く神秘的な儀式が礼拝の最も顕著な特徴だった。自然の偉大な力を象徴する、神秘的なシンボルに包まれた神々は、他の古

代宗教とは比べものにならないほどの畏敬の念を抱かせた。

東洋の宗教の侵入に伴って生まれた思索的哲学と道徳的概念は同じような性質のものだった。前者の最も顕著な特徴は、恍惚の直感が理性の推論に取って代わろうとする傾向だった。新プラトン主義やそれに連なる哲学は基本的に汎神論的だったが、ストア派の汎神論とは大きく異なっていた。ストア派が人間を神と同一視した目的は人間を賛美することだった―新プラトン主義者の目的は神の概念を押し広げることだった。前者の概念では人は独立し、自制する、宇宙の最高の本性の一部であって、被造物の中で最も優れた存在である。後者によれば人は神の推力に支配され、浸透されている、ほとんど受動的な存在に過ぎない。しかし人は完全に神性なわけではない。神性はその魂に潜在しているが、肉体の圧制によって鈍化し、曇らされ、押しつぶされているのである。人生の主目的は「私たちの中にある神を宇宙の中にある神と一致させること」、心に刻まれていながら肉の情念によって曖昧にされ隠されている観念を引き出すこと―とりわけ神性を完全に実現するための唯一の障害である肉体を制すること―だった。ポルピュリオスは、すべての哲学を死の先取りと見なした―自分の最期を穏やかに見つめることを教えるストア派的な意味ではなく、死は哲学の理想である魂と肉体の完全な分離を表現するからである。その結果、禁欲的な道徳と超感覚的な哲学が生まれた。「最大の悪は」と彼は説く「快樂である。快樂によって魂は肉体に釘付けにされている。そして肉体が説得することを真実と思うようになる。そして神的なものに対する感覚を失うのであ

る。」「正義、美、善、そしてそれらがつくり出すすべてのものは目で見ることはできず、肉体の感覚では捉えられない。哲学は純粹で混じりけのない理性によって、感覚を停止させた状態で追求されなければならぬ。なぜなら肉体にかき乱されるために心は知恵を追い求められなくなってしまうからである。知恵が失われ、泥に混じっている限り、私たちは望む真理を十分手に入れることはできないだろう。」

しかし、このように真理を明らかにするものとして称揚される理性（*新プラトン主義における理性）を推論の過程と混同してはならない。ここで言う理性は批判、分析、比較、推論とはまったく別のものである。この理性は本質的に直観的なものであるが、超越的な直観力は長い修養の過程を経て初めて獲得されるものである。昼の日差しの中から暗い部屋に入った時、最初は全くと言っていいほど周りが見えないだろう。しかし次第に目が微かな光に慣れ、部屋の輪郭がぼんやりと見えるようになり、次々と物が視界に飛び込んできて、ついには凝視することで自分の周囲をかなりはっきり見ることができるようになるのである。この事実が神の知識に関する新プラトン主義の教義の部分的なイメージを私たちに与えてくれる。私たちの魂は肉との接触によって暗くなった暗い部屋であるが、その中には神の観念が刻まれており、生きた神の要素が存在している。理性の目は長い間、着実に内観することによって、これらの文字を解読できるようになる。定められた訓練の課程に助けられて、意志はこの神の要素を呼び起こし、それを生み出した宇宙の精神と融

合させることができるのである。したがって精神集中と形而上学的抽象化の力は最高の知的才能である。そして静寂主義（*quietism）、すなわち私たちの性質の神への同化は徳の最終段階である。ピタゴラスは「人間の目標は神である。」と言った。アレクサンドリアの三位一体説の第一者である、属性も形もない形而上学的抽象である神秘的な「一」は、人間の思考の頂点であり、恍惚状態は道徳的完成の頂点である。プロティノスは何度もそれに到達したと言われている。ポルピュリオスは長年の修養の末に一度だけ、たった一度到達しただけだった。推論の過程はここでは役に立たないばかりか、有害である。「神々に関する生得的な知識はすべての推論に先立って私たちの心に植えつけられている。」神的なものにおいて、人間の仕事は創造することでも獲得することでもなく、演繹することである。その人間完成の手段は弁証や研究ではない。長く忍耐強い瞑想、沈黙、日常の気晴らしや娯楽の禁止、肉体の征服、継続的な修養の生活、彼を物質的なものから引き離し、その心を畏怖させ高揚させ、彼の神的な存在の実感を早める神秘的儀式への常の参加である。

新プラトン主義の体系は様々な形と名前でも多様な時代と信仰の中に見出せる思考様式を示している。神秘主義、超絶主義（*transcendentalism）、靈感、恩寵といった言葉はすべて、人間は感覚から得た物とは別に知識の泉を持っており、また通常の方法のいかなる働きや組み合わせによっても説明できない、ある種の心の状態、ある種の道徳的閃光、知的啓発が存在する、という根深い信念を表現している。論理的精神の真面目さ、小心さ、揺らぎを新プラトン主

義は想像上の恍惚に置き換えた。そして抽象化の力こそ養われたものの、他のあらゆる知的能力は禁欲主義の修養のために犠牲にされた。それは人々を信じ易くさせた。なぜならそれは絶えず侵入してくる想像力に対する唯一の障壁である批判精神を抑圧したからである。なぜならそれは迷信的儀式を啓示すなわち恍惚状態に特に資するものとしたからである。なぜならそれは神経質で、病的で、常に幻を見がちで、簡単に靈感のせいにされる曖昧で不確かな感覚に煽られる予見的気質を作り出したからである。道徳的な体系としては、それは確かに感覚と想像力の純化をそれまでのどの学派よりも高い完成度へと押し上げた。しかし感情と行動を切り離してしまうという致命的な欠点があった。この点において、それはローマ哲学の終焉、最後の自殺となるにふさわしいものだった。ストア派は行動に結びつかない徳はすべて空しいと説いていた。エピクテトスでさえ、禁欲的なキニコス派の描写において――マルクス・アウレリウスでさえ、その細心の自省の中で――決して外界を忘れてはいなかった。初期のプラトン主義者たちは精神的な修養を非常に重視していたが、それに劣らず実践的だった。プルタルコスが光と人間に対して同じ言葉が使われることを思い出させる。（*マタイによる福音書…5章14節、あなた方は世の光である。）その言によれば人間の義務は世の光になることだからである。また彼は抜かりなく、ヘシオドスが収穫のために祈ることを農民に勧めながら、鋤に手をかけたままそうするよう説いたことを述べている。アプレイウスはプラトンを解説して教えた「善を求めるよう自然によって感化された者は、自分を自分だけのために生まれたものと見なしではならず、全人類のために生まれたものと見なさなければならぬ。ただし彼は

様々な種類と程度の義務を有している。なぜなら、彼はまず自分の国によって、次に自分の親族によって、そして仕事や知識によって結ばれている人々によって作り上げられたものだからである。」

ティルスのマクシムスは二つの高貴な論考を供して、人類の間で行動を起こすことなく精神的な陶醉の中で自らを使い果たす全ての徳の虚しさを示した。「知識が有益であることを行わないのであれば、知識にどんな意味があるのか？ 医者や技術者、それによって病人を治さないなら意味がない。ペイディアスの技巧も象牙や金を彫らないなら意味がない：ヘラクレスは賢人だったが、自身が賢かったわけではなく、その知恵によってすべての陸と海に利益を拡散させたからである：もし彼が人から離れた生活を送り、怠惰な知恵に従うことを好んだなら、ヘラクレスは確かに詭弁家（* Sophist）になっただろうし、彼をゼウスの息子と呼ぶ者はいなかっただろう。神自身は決して怠惰ではない。もし神が休まれたなら、天は動きを、地は実りを与えることを、川は海に流れ込むことを、季節は定まった経路を進むことを止めるであろう。」新プラトン主義者たちは市民的な徳について語ることもあった。しかし彼らは恍惚の境地はすべてを超越しているだけでなく、すべてを含んでいると考えていた。そして受動的な生活によってのみ、その境地には到達することができる、としていた。アナクサゴラスの「自分の使命は太陽、星、自然の推移を観想することであり、この観想こそが知恵なのである。」という言葉は、彼らの哲学の縮図とされていた。プロティノスの教えを信奉していたロガンティアヌスという元老院議員は、生活上の事柄に強い嫌悪感を抱いて、すべての財産を捨て、法務官の義務を全うすることを拒み、元老院議員の職務を捨て、あらゆる

るビジネスや娯楽から身を引いてしまった。プロテイノスは彼を非難するどころか圧倒的な賛辞を与え、愛弟子として選び、絶えず哲学者の模範と呼んだ。

ここまで述べてきた二つの特徴―市民の義務の放棄と批判精神の抑制―は、ピタゴラス派では非常に早い時期から顕在化していた。三世紀から四世紀にかけての哲学の融合において、この二つの特徴はますます明白になっていった。プロテイノスはまだ独立の哲学者だった。彼はギリシャ思想の伝統を受け継ぎながら、ギリシャの生活の伝統は受け継がず、明らかに理性的な方法によって自らの体系を構築し、テウルギア（*ギリシャの神に祈る儀式、神働術）や宗教的魔術を完全に否定していた。彼の弟子ポルピュリオスはまず新プラトン主義を反キリスト教的なものにした。そして新しい信仰に激しい反感を抱き、それを宗教体系に転換し始めた。イアンブリコスもエジプトの司祭だったが、この変換を完成させ、すべての道徳的修養を神学に分解し、すべての理性を信仰の犠牲にした。ユリアヌスは復活した異教の概念を哲学と融合させ、哲学によって純粹化することで実現しようとした。奇跡と信仰への欲求はあらゆる形で示された。ダイモーンの理論は異教徒のさまざまな神々を神の属性の寓喩あるいは化身とみなす古いストア派の自然主義に完全に取って代わった。プラトン倫理学は大部分において再び優位に立ったが、異質な要素に深く染まっていた。例えば新プラトン主義者たちは自殺を非難したが、その根拠は自殺は神が私たちに与えた持ち場の放棄である、というプラトンの原理のみならず、動揺は必ず魂を汚染し、その行為には精神の動揺が伴

うため、自殺者の魂は汚染されて肉体から離れていく、という静寂主義でもあった。ピタゴラスとプラトンの学派で共に栄えた来世への信仰は、普遍的なものになっていた。長い間、人々が徳の報酬と見てきたローマの偉大さが急速に衰えるにつれて、「神の都」という概念が人々の心の中でより明確になり始めた。東洋の信仰の主要な伝播者の一人であり、ローマの生活にかつてないほどの影響力を行使し始めた無数の奴隷たちは、より幸福で自由な世界（*来世）へと、自然かつ涙ぐましい熱意とともに向きを変えた。ルクレティウス、カエサル、プリニウスが抱いた懐疑心は消えていった。とりわけ道徳的な修養と宗教との間に融合がもたらされ、モラリストは浄化のために主要な手段を神殿の儀式に求めるようになった。

私は今、本章で取り組んできた長く複雑な仕事を完了した。ローマ哲学の勃興からキリスト教の勝利までの長い間にローマを教えていた異教徒のモラリストたちの一連の精神を、全般的傾向の描写と引用の選択によってできる限り示すよう努めたのである。私の目的はこれらの論者をその思索の信条に従って精細に分類することではなかった。私が目指したのはむしろ、各モラリストが至高の善とみなした徳の全般的概念またはタイプの起源、性質、運命を示すことだった。歴史とは単に年表によって繋がれているだけの連続した出来事ではない。それは原因と結果の連鎖なのである。個人の道徳的、また知的能力の程度と方向性には当然大きな差異がある。しかし人間の大きな集団の自然な道徳の全般的な平均には大きな差異はないだろう。ある社会において非常に徳が高かった

り、非常に低かったりするとき―ある特定の徳や悪徳が特別に突出しているとき、あるいは人々の道徳的観念や基準に重要な変化が起こるとき―私たちが追跡しなければならないのは、ただそれらについて支配的だった環境がどのように働いたかということだけである。ローマの倫理の歴史は、社会の全般的な条件に導かれた間断のない一定の流れを示している。そしてその進歩の特徴はローマ、ギリシャ、エジプトの精神が次々と台頭してきたことだろう。

カトーとキケロの時代には、その哲学的表現こそギリシャのストア派に由来していたが、理想の性格は完全にローマ的なものだった。それはローマの環境が早くから生み出していた力強さ、壮大さ、硬さ、実践的な傾向のすべてと、ごく近年の政治的、知的な変化から生じた精神の普遍性が組み合わされたものだったのである。そのうちに古代の穏やかで慈愛豊かな精神を代表するギリシャの要素が台頭してきた。それは、アントニヌス朝の長い平和、増大する贅沢によって生み出された柔弱な習慣、多くのギリシャ人をローマに引き寄せた大都市の魅力、皇帝の庇護、またバナティウスやキケロが主張したがそのすべての帰結を知ることにはなかった、万人の兄弟愛の理論の現実化によって促進された、シンプルな宣伝の結果だった。折衷主義的な、そして大部分はプラトン主義的なモラリストの影響力の中に徳のタイプの変化を見ることができ、彼らの特別な攻撃はストア派による感情の排斥に向けられた。そしてストア派のタイプは徐々に軟化していった。セネカの現実的で広範な博愛の教えは、学派の非常に明らかな硬さを打ち破っている。しかしその博愛は感覚的

優しさからではなく、むしろ義務感から生じたものである。ディオーン・クリュソストモスにおいて実践的な博愛はそれほど顕著ではないが、高慢さと冷淡さはどちらも少ない。エピクテトスは手引書の中で最も厳格なストア派を体现している。しかし彼の論文には深い宗教的感覚と幅広い共感が表れている。マルクス・アウレリウスでは感情的な要素が大きくなり、英雄的な資質よりも愛情豊かな資質が優位に立つようになった。同時に純粹な思考と想像力の新たな重視、敬虔な感覚の高まり、民衆の宗教を改革しようとする切実な願いをも見て取ることができる。

この第二段階は、ローマとギリシャの精神の幸福な結合を示すものである。ストア派は冷淡で、断然実用的で、ギリシャの思索の細かな区別立てを嫌悪していた。しかし依然として世界の支配者で組織者であり、その熱意は本質的に愛国的であり、義務感のためにプライド以外のすべてを犠牲にできる人々の信条だった。しかしこの信条は愛情豊かで、穏やかで、靈的なものへと変化した。そして、その美しさにおいて多くを得たが、力において何かを失った。物理の世界と同じように、道德の世界で強さは硬さとほぼ一致する。感覚の鋭い者は簡単に動揺し、愛情豊かな性格の根底にある感じやすい同情心は結果として弱さの原理になる。ネロやドミティアヌスの圧制の間も絶えることなく続いた、ローマの偉大なストア派の系統は衰え始めた。この学派の理想が最高の完成に達したまさにその時、新しい運動が現れて哲学は評価を落とし、ドラマの最後の幕が開いたのである。

この時代もそれ以前の時代と同様、すべてが普通に規則正しく動いていた。専制政治が長く続いたためにストア派が表現していた活発な公共精神は次第に失われていった。ギリシャの繊細な知性の優位と修辞家の増加によって哲学は論争と詭弁の学校へと変質していった。感情の養成（* * * *cultivation of the emotion*）はますます進み、道徳の中心とでもいふべきものが変化した。そして行動の統制よりも感覚の発達（* * * *development of feeling*）が重要視されるようになった。この感情の養成が、人々を宗教に向かわせる要因になった。前の世代の懐疑論に対する反動が多く的小さな運動によって強化された。そしてアレクサンドリアは徐々に帝国の道徳の首都になった。ローマのタイプは速やかに消滅した。迷信的な儀式と哲学が融合した。そしてエジプトの神々への崇拜は、プラトンの思索の最も空想的な部分を東洋の古代哲学と結びつけた新プラトン主義者の教えへの道を開いた。プロテイノスには前者の大部分が、イアンブリコスには後者の大部分が見出される。彼らの影響を受けた人々の心は、内省的に、信心深く、迷信深くになった。そして忘我の幻覚と非実践的な神秘主義の静寂を理想的な状態とするようになった。

このような影響力が、専制政治、奴隷制度、残酷な娯楽によって本当の芯から墮落し腐敗していた社会に順々に作用していった。悪弊を改善するために相次いで興ったそれぞれの学派は何らかの貢献をした。ストア派は善と悪の大きな区別について粗探しをしなかった。それは普遍的な兄弟愛

の理論を説き、高貴な文学と高貴な法律を作り、その道德体系を当時のローマ人の生活の活力源だった愛国心と結びつけたのである。帝国の初期のプラトン派はストア派の誇張を修正し、愛情豊かな資質に自由の余地を与えた。そして英雄的な人物や極度の緊急事態だけではなく、一般的生活の人物や環境にも適用できる善悪の理論を提供したのである。ピタゴラス派や新プラトン派は宗教的な敬虔さの感覚を蘇らせ、謙虚さ、信心深さ、思考の純粹さを説き、道德的な理想を自分自身ではなく、神と関連づけることに慣れさせた。

社会の道德的な向上は、今や他者の手に委ねられることになった。長きに渡って不明瞭さを増していたある宗教が光の中に姿を現し始めたのである。その道德的教訓の美しさ、崇拜者の想像力と習慣を支配する体系的な技術、訴えるべき強い宗教的動機、見事な教会組織、そして付け加えなければならぬのだが、権力の手を容赦なく使うことによって、キリスト教はすぐに他のすべての党派を駆逐し、滅ぼし、何世紀ものあいだ道德世界の最高の支配者になった。ストア派の万人の兄弟愛という理論、ギリシャ人の愛情豊かな資質への嗜好、エジプト人の敬虔な精神と宗教的な畏怖の念を組み合わせて、それは当初から、それが取って代わったどの哲学も持っていなかった影響力の強さと普遍性を獲得していたのである。次の章ではローマにおけるこの宗教の台頭を支配した道德的原因、それが提示した徳の理想、それが国民の性格にそのイメージを刻みつけた程度と方法、そしてその悪用と歪曲について検討しなければならない。

第三章 ローマの改宗

コンスタンティヌスの即位以前の、異教徒の論者たちのキリスト教の重要性と運命に対する完全な無意識は人間の心の歴史の中で最も注目し得る事実である。キリスト教に関する彼らの十から十二の言及に多大な注意が払われてきたため、これらの言及がいかにかに少なく、貧弱なものであるか、またこれらの言及から初期教会の正確な歴史を構築するのがいかに不可能なことであるかを私たちは忘れてしまいがちである。おそらくその解説の幅において、プルタルコスや大プリニウスは当時の他のどの論者よりも優れており、セネカは間違いなくその時代の最も輝かしいモラリストだったが、それに触れることさえなかった。エピクテトスやマルクス・アウレリウスは、それぞれ通りすがりに軽蔑的に非難する程度だった。タキトゥスはネロによる迫害を詳細に記述しているが、苦しんでいる宗教を単に「忌まわしい迷信」として扱っている。スエトニウスは同じ表現を用いて、この迫害を暴君の称賛に値するか、どうでも良い行為に数えている。最も重要な文献は小プリニウスの有名な書簡である。ルキアノスはキリスト教徒の慈善心の程度と、彼らがその時代の宗教的ペテン師と見られていた側面について、いくらかの光を当てている。ハドリアヌスの即位から教会の勝利の前夜までの最も重要な時期の皇帝の生涯について書いた異教徒たちの長い続き物は、宮廷の服装、遊び、悪徳、愚行に関する山ほどの細目の中で、世界を変えつつあった宗教に関する六つか七つの短い観察を私たちに与えている。

この主題に関する異教徒の論者たちの全般的な沈黙は、権力が課した制約によるものではない。この分野には最も幅広い自由があったのである。また一部の歴史家の仕事を王、政治家、将軍の業績の一覧表にした、歴史の尊厳や個人の努力の重要性の観念から生じたものでもない。道徳的な革命の記録と説明という歴史の概念は、もちろん現代の論者ほど発展していなかったが、古代において決して知られていなかったわけではなく、ローマ帝国の社会の変化に関する私たちの知識は多くの部分において非常に豊富である。古い信仰の消滅、共和制のもとで起こった社会的、道徳的シテム全体の分解は文人たちの関心を非常に強く惹きつけた。そして彼らはその段階をたどる際に最も称賛に値する勤勉さを発揮した。ローマの贅沢の発展に関する彼らの有り余る情報と、キリスト教の発展に関する彼らのほとんど絶対的な沈黙との対比は、非常に興味深く、示唆に富むものである。前者の運動の道徳的重要性を彼らは明確に認識し、それに応じて、服装、宴会、建物、見世物のあらゆる変化を完全に記録した。それは監察官が庭の手入れを怠った人物の選挙権を取り上げた日から、ネロやヘリオガバルスの乱行騒ぎまで、ローマの贅沢の歴史を最も詳しく書けるほどだった。しかし、彼らはもう一つの運動の道徳的重要性を完全に見落としていた。そしてその手落ちは歴史に決して埋めることのできない亀裂を残している。

人類史上最大の宗教的変化は、周囲の腐敗を深く意識していた輝かしい哲学者や歴史家の目の前

で起こったはずであること、これらの論者が皆、観察していた運動の結果を全く予測できていなかったこと、また三世紀の間に善かれ悪しかれ人間の問題に作用した最も強力な道德的な梃子だったと今ではすべての人が認めざるを得ない力を、彼らが単に軽蔑すべきものとして扱ったことは、宗教的転換期の全期間を通して十分に思索に値する事実である。その説明は、前章で考察した道德の領域と完全な宗教の領域との間の広い分離に見出すことができる。近代において世界の道德的な未来を考察する人々は当然、第一にそれぞれの宗教団体の相対的な位置と予想される運命に注意を向けるだろう。ローマ帝国のストア派の時代には、完全な宗教は単に人生の問題において超自然的な援助を得るための術であり、人類の道德的向上はその領域の全く外側にあると見なされるようになっていた。教育を受けた人々にとっては、哲学が最も文字通りの宗教になった。哲学は生活の規則であり、神性の顕現であり、信仰の感覚の源だった。この都市に氾濫していた多くの東洋の迷信は、特に有害で軽蔑に値するものと見なされていたが、中でも最も哲学者たちに嫌われていたのはユダヤ人のものだった。ユダヤ人は東洋の移民の中で最も卑劣で、最も乱暴で、最も非社会的な存在として悪名高かったのである。最も著名なローマ人たちが示していた彼らの教義についての無知には、タキトウスが彼の歴史書に重々しく挿入した、おそらく風刺小冊子から採られた、彼らの信仰に関する一連の長いグロテスクな作り話に印象的な実例が見られる。哲学者の目にはキリスト教は単なるユダヤ教の一派としか映っていなかったたのである。

私はこの著作において純粹に神学的な問題をできる限り避け、キリスト教の単なる道德的主体としての側面について考察したいと考えている。しかしローマ帝国におけるその勝利がどの程度道德的な原因によるものだったのか、また支配的だった哲学との関係はどのようなものだったのかを確認するため、数ページの前置きが必要だろう。後期ストア派の教義とキリスト教の教義が一致することに衝撃を受け、キリスト教は早くから哲学に決定的な影響を与えていて、ローマの主要な指導者たちの何人かに信仰されていたのだろうと想像した論者たちがいる。ローマ帝国の改宗を、キリスト教の指導者たちが福音書の物語の真实性を証明した圧倒的な証拠という、単なる証拠の問題に矮小化してしまう人々もいる。また、キリスト教の勝利は奇跡だったとシンプルに考える人々もいる。彼らの言い分は全てその逆だった。教会の進路は風や潮の挑戦に負けることなく目標に向かって速く、着実に進む船の航路のようであり、帝国の改宗は死者の蘇生や突然鎮まる嵐のように、文字通り超自然的な現象だったというのは。

これらの説のうち、最初のものについては前章に書いたので長々と説明する必要はないだろう。ローマ帝国の偉大なモラリストたちは、キリスト教に全く言及しなかったか、軽蔑的にしか言及しなかったこと、無知な人々の間に生じた多くの宗教を常々無視していたこと、そして彼らがキリスト教に接近したり、好意的だったことを示すいかなる直接的証拠もないことには疑いがない。彼らがキリスト教の影響を受けたという仮説は、主にキリスト教の自省の義務の強調、人類の普遍的な

兄弟愛の強い主張、そして彼らが最後に示したデリケートで広々とした慈愛に基づいている。これらすべての点において後期ストア派はキリスト教に類似しているが、それぞれのケースにおいて、その傾向の原因を発見するのが容易なことはすでに見たとおりである。自省の義務はピタゴラスの戒律に過ぎず、キリスト教勃興のはるか以前に同派で施行されていた。そしてローマでピタゴラス派が流行したときにストア派に導入されたものであって、そこから借用されたことは明らかである。人類の普遍的な兄弟愛という理論は、文明化した地球全体を一つの大きな帝国にまとめ上げ、最も遠方の部族にさえもローマの市民権を開放し、その周辺で道徳的理論が形成されてきたあらゆる階級区分を破壊した政治的、社会的変化の明白な表われだった。キケロはセネカ同様にこのことを力説している。それは被造物全体を一なる神の魂が充滿している一つの大きな統一体と表現した汎神論と一致していた。セネカとキリスト教の関係を証明するものとして、現代の論者が最も自信満々で提唱する、万物は共に神の中に属している、という表現がラクタンティウスによってストア派の汎神論の最も明らかな例証に選ばれていたというのは不思議な事実である。後期ストア派の教えが慈愛深いのは、ローマ帝国建国以前から始まっていたギリシャ的要素のローマへの注入、ハドリアヌスの治世に新たに受けた（*東方からの）刺激、さらに贅沢な文明生活とアントニヌス朝の長い平和による軟化の影響であることは明らかである。ローマ人は慈愛の実践と実感においてギリシャ人にはるかに劣っていたため、理論的な慈愛においてある一点（*人類の普遍的な兄弟愛）以外でその師を超えることはなかった。ギリシャ人の慈愛は非常に熱心なものではあったが、狭い範囲に

とどまっていた。ローマ帝国の社会的、政治的環境はその障壁を破壊したのである。

ストア派の著作が新約聖書の影響を受けているという考え方について、まことしやかな論拠が主張されているのはセネカのケースだけである。聖リヌス（*AD10—AD76）が書いたとされる、聖ペテロと聖パウロの殉教の捏造記事の中のセネカと聖パウロの往復書簡を根拠として、中世のすべての論者はこの哲学者をキリスト教徒とみなしてきた。これらの手紙は最初の三世紀の間は全く知られておらず、聖ヒエロニムス（*エウセビウス・ソフロニウス、AD342—420）によって初めて言及されたが、現在では一般的に贋作とされている。またセネカの弟は聖パウロとユダヤ人の論争を聞くことを拒んだガツリオ（*ルキウス・ユニウス、アンナエウス、AD5—65、当時はペロポネソス半島北部のアカイア総督）であり、セネカの友人で同僚だったブツルス（*セクストゥス・アフラニウス、AD1—62）はローマで聖パウロの拘留を任された役人だったという事実がこの推測を強化した。この問題が引き起こした些細で冗長な批判に私が立ち入る必要はないだろう。キリスト教的表現と見なされているものの多くは、全ての存在を含む大きな一つの統一体と、全ての存在に命を吹き込み、導く一柱の神の御心という汎神論的概念から生まれたことが分かっている。またその他の多くの偶然の一致はわずかなものであって論拠とする価値がない。それでもこの問題について書かれたものを見直すなら、ほとんどの人が少なくともキリスト教徒の言葉の断片がセネカの耳に入った可能性があると結論するだろう。しかし彼の道德体系がキリスト

教を手本に、あるいはその影響を受けて形づくられたと考えるなら、キリスト教とストア派双方の最も明白な特徴に目をつぶることになる。なぜならその極端な違いを示すのに、これほど相応しいモラリストは他にいないからである。崇拜と謙讓、神の至高の威厳と人間の弱さと罪深さを常に意識し、常に来世に言及することは、キリスト教の本質的な特徴であり、そのすべての力の源泉であり、その特徴的なタイプの基礎となっている。これらすべてはセネカの教えと全く正反対である。来世に無関心で、人間の最高の威厳を深く確信していた彼は、弟子たちを「神と人に対するあらゆる恐れから」解放しようと努めた。そして賢者を神々と対等なものと主張する誇り高い言葉は、おそらく哲学者の傲慢さが到達した最高点だろう。当時一般的にキリスト教徒と同一視されていたユダヤ人は「呪われた民族」である、と彼は強調している。後期のストア派の中にキリスト教徒のタイプをほとんど実現し、その純粹で優しい性質の中にその学派の傲慢さがほとんど見られない人物がいた。内的証拠だけで論じるなら、マルクス・アウレリウスはすべての異教徒の中で最も容易にキリスト教に共感していただろう。しかし彼はこの信仰を迫害し、「自省録」の中にキリスト教の殉教者に対する軽蔑を記している。

異教徒の哲学者とキリスト教との関係は、初期の教会において多くの議論の対象であると同時に、根深い意見の相違の対象だった。ある学派の論者たちはソクラテスの殺害を弁解して、思想に殉じたギリシヤ人を「アテネの道化師」と呼び、彼のインスピレーションを悪魔の力によるものとした。

彼らはまた哲学者たちの著作を「異端者の学校」と呼び、悪意を持って彼らの記憶に重ねられたあらゆる中傷を収集した―一方、主に異教徒の哲学とキリスト教の啓示の大いなる親和性の立証を指摘した人々もいた。ほとんど子供の頃からプラトンの高貴な教えが体に染み込んでいて、その哲学と自分たちの新しい信仰の類似性に敏感に反応したこの論者たちは、この類似性の証拠は自分たちにとって深く感謝するべきものであると同時に、異教徒の隣人の偏見を払拭するのに最も効果的な方法であることを発見した。（*古代ギリシャの）巫女や神託によるものとされるキリストの予言の成就、アレクサンドリアの社会的、商業的地位が生み出した折衷主義への情熱、さらにギリシャ語に翻訳されたユダヤ人の著作が異教徒の知恵の多くの源になったことを少し前に主張したユダヤ人のアリストブルスの例が、彼らの歩みを後押しした。最も融和的であり、同時に最も哲学的な学派は教会の最も早い時期に存在した。殉教者ユステイノス（*AD100―165）―教父たちの中で、その著作に何らかの一般的な哲学的重要性がある最初の人物―は、異教徒の哲学の多くの部分の卓越性を認めていた。さらにその卓越性を神的インスピレーション、産出的な、すなわち「種子的ロゴス（*seminarial logos）」の作用によるものとさえしている。このロゴスは太古から世界に存在し、ダイモーンに悩まされてきたソクラテスやムソニウス（*ガイウス、ルーフアス、AD20―101）といった指導者たちにインスピレーションを与え、キリスト教において最終的かつ完全に明確に受け入れられたとされるものである。同じような寛大で包容力のある評論は、後世の教父たちの著作にも見出すことができる。しかしこの学派はいくつかのグロテスクな放

縦ゆえにすぐ姿を消した。殉教者ユステイノスのすぐ後に続いた―幅広い共感力、相当な独創性、非常に幅広い学識を持ちながら、弱々しく、空想的な判断力しか持たなかった―アレクサンドリアのクレメンス（*ティトウス・フラウウィウス、AD150―215）は古代の知恵をすべて二つの源から発するものとした。第一の源は伝承である。彼によれば、大洪水以前の女性たちに魅了された天使たちは、当時天国で行われていた形而上学やその他の学問の要約を伝えることで、その美しい相手に気に入られようと努めたのである。そしてその談話の要旨は伝統的に語り継がれ、異教徒の哲学者たちの主要な概念になったのである。天使たちはすべてを知っていたわけではないので、ギリシャ哲学は不完全なものだった。しかしこの出来事は文筆の歴史における最初の大きなエポックになった。異教徒の知恵の第二の、そして最も重要な源は旧約聖書だった。初期のキリスト教徒の多くは、その影響が古代の知恵のあらゆる部門に及んでいることを発見した。プラトンは哲学のすべてを、ホメロスは詩の最も高貴な概念を、デモステネスは雄弁術の最も繊細なタッチを、この書物から借用したのである。ミルティアデス（*BC550―489、アテネ）の軍事的技術もモーゼ五書から学んだものであって、マラトンの戦いで勝利した伏兵はモーゼの戦略の模倣だった。さらにピタゴラスは割礼されたユダヤ人だった。プラトンはエジプトで預言者エレミヤ（*BC7―6世紀、ユダヤの預言者）に教えを受けた。セラピス神（*ヘレニズム期エジプトの習合的な神）は父祖ヨセフ（*エジプトに移住したアブラハムの曾孫）に他ならず、彼のエジプト名は明らかに曾祖母サラに由来している。

私は極端な例を挙げたが、決してこれ限りではないこの種の馬鹿げた話は通常、キリスト教への反論を撃退することを主目的としていた。そしてこれらは批判能力のない時代に常に存在する、最も小さな反論に注意を払うより、何の根拠もない、最も手の込んだ説明理論を捏造する傾向を示している。例えば異教徒がキリスト教を人間の心が普通に生み出すものに還元しようとして、まさにユダヤ教の歴史そのものの非常に多くの異教徒の伝説を指摘したとき、彼らはダイモンは予言を注意深く研究し、神の征服者の到来を恐怖とともに予見した、そして人々が彼を信じるのを防ぐため、預言された出来事に似た一連の伝説を作り出したのである、と答えた。しかし初期のキリスト教徒たちはより頻繁に剽窃という批判に反論した。そして異教徒が書いたとする著作物を偽造したり、本物の異教徒の著作物の中のユダヤ人の影響とされる痕跡を指摘したりすることで、自分たちの信仰の足跡を過去に探そうとした。しかしグノーシス派、新プラトン主義者、特にオリゲネス（*アダマンティウス、AD 185―253）によって頂点に達したこの融合の手法は帝国の後期ストア派ではなく、キリスト教誕生前の偉大な哲学者たちに向けられたものだった。最初の三世紀の教父たちがユダヤ教の聖典の影響を見出したのは、エピクテトスやマルクス・アウレリウスではなく、プラトンの著作の中だった。そしてこれらのつながりを見出そうとする情熱が最も途方もないものだった頃、セネカとその弟子たちがキリスト教徒の影響を受けていたという意見はなかった。

そこでストア派優勢の時代にキリスト教が哲学的階級の信条に完全な、あるいは部分的な影響力を持っていたという考えをまったく根拠のないものとして退けることにしよう。そして私たちは、ローマ帝国は証拠のシステム―人々の裁定によるキリスト教の神性の奇跡による証明―によって改宗させられたのである、という意見に行き着く。この見解を正しく評価するためには当時の人々の奇跡を判断する能力と、また―別の問題ではあるが―そのような証拠が彼らの心にどの程度の重みを持っていたかということを考慮しなければならない。この問題を満足に扱うためには、奇跡の証拠という大きな問題に少し踏み込むことが望ましいだろう。

カトリック教会の少数派の司祭を除いて、奇跡というテーマについて現在ほとんどすべての教養ある人々の意見の根底には一般的な懐疑がある。ほとんど全員が、ある種の特定の奇跡を心から信じていたとしても、原則として同じ証拠によって証明されている自然現象を完全に信じるにも関わらず、すべての古い歴史家の記事に頻繁に見られるそのような出来事を虚偽で信じられないものと見なしているのである。このような不信の理由は奇跡の不可能性、あるいは自然界における極度のあり得なさではない。というのも、いくつかのケースはともかく、その少なくとも一つの種類や概念には、論理的な困難が全くないからである。力と知恵において私たちを計り知れないほどに超越した霊的存在が存在すると信じることに、そしてそれが存在するならば、その力を普通に使えば電信機や日食の予報が野蛮人の能力を超えるように、最も才能ある人々の理解をはるかに超えるような偉

業を成し遂げられると信じることには何の矛盾もない。また一般に言われているように、他の分野において十分とされるような量や種類の証拠が不足しているため、不信が起るわけではないと私は考える。歴史上のほとんどの小さな事実は、聖フランチェスコの聖痕（*12世紀、苦行中に聖痕が現れた）や聖なる棘（*16世紀に茨の冠の入った箱に触れた女性の涙道瘻孔が治った）の奇跡、あるいは助祭パリス（*ド・フランソワ、1690—1727、ジャンセニストの禁欲主義者）の墓で起こったとされる奇跡（*病気が治る）よりも少ない証拠によって証明されている。私たちは一人か二人のローマの歴史家の証言から、歴史的な出来事の数々をある程度確実に信じることができる。タキトゥスやスエトニウスはウェスパシアヌスが盲人の視力を回復させ、不具の者を強健にしたと記述している。しかし彼らの熟慮の上の主張でさえ、私たちにそれが真実かもしれないという疑念を抱かせることはない。古典時代や中世において奇跡が日常的に起こるものではなかったことは確かである。しかしこれらの時代についての知識を私たちに与えてくれるほぼすべての同時代の論者たちは、奇跡は日常的に起こるもの、と確信していたのである。

このテーマに関する普通の教養ある人々の意見を正しく解釈するなら、奇跡に対する一般的な態度は、疑いやためらい、既存の証拠への不満ではなく、むしろ絶対的、軽蔑的な、吟味の余地さえない不信ということのように思われる。かつては常に少なくともいくつかの奇跡の可能性が認められていたことを思うなら、また奇跡を支持するために挙げられる膨大な量の伝承に直面するなら、

この事実は一見驚くべき異変のように見える。そして奇跡の信仰はほとんどの場合、論破されたわけではなく、ただ風化していっただけであることを知るなら、それはなおさら驚くべきことである。

このような心境に至る過程を確認するために、幸いにも論争とは無縁の領域で例を挙げることができる。おとぎ話の虚構性を問題視する人はほとんどいない。またこの類の逸話を聞かされたなら、ほとんどの人はその証拠をほんの少しも吟味することもなく、信じないことを、あるいは嘲笑することさえもためらわないだろう。しかし、妖精の存在がどのような点で矛盾や不条理をはらんでいるかと問われれば、答えるのは難しいだろう。妖精とは単に人間の知能を適度に持ち、道徳的能力をほとんど、あるいは全く持たず、体は昆虫のように透明で翼があり、移り気で、踊りに熱中し、おそらく様々な植物の性質について並外れた知識を持つ存在である。このような存在が存在すること、あるいは存在するがゆえに彼らには人間の力を超えた多くのことができる、というのはさしたる困難も引き起こさない主張である。何世紀の間、彼らの存在はほとんど万人に信じられていた。彼らの出現に関する伝承が長く伝えられていない国、地方、教区はほとんどない。これだけの伝統の重み、また本質的不条理やありそうもないことを完全に除外した上での申し立てを裏付ける、独立した一連の数多い証拠は、説得力を持つとは言えないまでも、少なくとも非常に強い一応の証拠のある事件（* *prime facie case*）を提示するのに十分だろうし、またこのテーマを辛抱強い慎重な調査に値するものとするだろう。

それがそうならなかった理由は十分に明らかである。おとぎ話の信憑性の問題は、証拠の検証によつてではなく、歴史の発展の法則を観察することによつて解決されてきた。無知で素朴な民衆がいるところでは、どこでも妖精信仰があり、妖精の出現に関する状況証拠的な証言が流布している。しかし教育が進むと必ずこの信仰は消えていく。おとぎ話が反論されたり、誤魔化されたり、あるいは厳しく吟味されたりするからではない。妖精が現れなくなるのである。この衰退の一様性から、おとぎ話はある一定の状態にある想像力の正常な産物である、と私たちは推論する。そして、おとぎ話の衰微が同様の变化の長い系列の中の一つに過ぎないことに気づくなら、この立場は強い確信へと変わるのである。

未開人が世界を見渡し、存在に関する理論を形成し始めると、すぐに三つの大きな間違いに陥る。それは後に続く見解の第一原理となるものである。この世界は宇宙の中心である。そしてその周囲を取り囲むすべての天体は利用されようとしてゐる。それが示す混乱や齟齬、特に重要な死の呪いは、彼の生涯の何らかの出来事と関連している。また、彼の周囲に見られる数々の現象や自然の変動は、物質を司る精霊、あるいは物質に固有の知性の直接的かつ独立的な意志によるものである。このように彼は信じる。こうした主要概念の周りには、すぐに特定の伝説が群れるようになる。自分のそばに石が落ちてくれば当然、誰かが投げたのだらうと考える。それが隕石ならば、天人の仕

業と考える。彼は彗星や天変地異や疫病を、それぞれ直接的かつ独立的な行為から生じたものと考え、精霊である迫害者が自分を攻撃するようになった動機と、その怒りを鎮めるための方法についての理論をつくるようになる。そして数多くの異なる驚異の系統があることを発見し、それぞれに適当な主宰神を設定する。彼にとって奇跡とは奇妙な出来事でも、自然の法則に反するものでもない。ただ単に世界の通常の支配の覆いが取り除かれ、明らかにされたものなのである。

このような広範な知的概念には、いくつかの小さな影響が付随している。直接的な擬人化や、感覺ある生物に由来する形容詞を無生物に好んで使うことに表れ、またあらゆる詩や雄弁、特に社会的に早い時期のものの中に多く見られる潜在的なフェティシズム（*呪物崇拜）は、私たちの見解のかなりの部分の根底をなしているものである。とても身近な例を挙げるとすれば―最も文明的で理性的な人物が何かのはずみで戸柱に激しく頭をぶつけたときの感情を観察してみることである。おそらく最初の叫びは痛みだけでなく怒りによるものであり、その怒りは木に向けられたものであることに気づくだろう。一瞬にして理性は感情を抑制する。しかし自分の感情を注意深く観察するならば、その心の中に潜在し、子供や野蛮人の場合には遺憾なく発揮される無意識のフェティシズムについて納得することは容易だろう。人間は自分に強い影響を与えるものには本能的に意志を付与する。想像力の脆弱性が他の原因と結託して、未開の人間が擬人的な神という概念を超えることを不可能にする。そしてそうした存在の気まぐれな、あるいは独立した行為が、彼の確かな奇跡の概

念を形作るのである。同じ想像力の脆弱性のゆえに、彼はすべての知的傾向、対立する感情、すべての力、情熱、または空想に物質的な形を与える。彼の心は自然に対立する感情の衝突を、対立する精霊の戦いの歴史に置き換えるようになる。神話の膨大な蓄積が自然に形作られる―それぞれの伝説は単に心的事実を物質的に表現したものにすぎない。それを助けているのは、素晴らしいものへのシンプルな愛と、あらゆる批判的精神の完全な欠如である。

このように社会のある段階では、ここまで述べてきたような影響の下で著名な人物や組織の周りに奇跡的な伝説が自然に形作られていくことがわかる。私たちは四月の通り雨や秋の収穫を見るようにそれを見るのである。私たちはある伝説がどのように作られたのか、またその伝説に含まれている真実の核心は何なのかを確信を持って示すことはほとんどできない。しかし、人間を奇跡的なものへと駆り立てた一般的な原因を分析することはできない。私たちはそのような原因が常に効力を持っていたということを示すことができる。また信仰の衰退に伴って必ず起こる精神状態の漸進的変化を追跡することができるのである。人間に批判的精神が乏しいとき、不変の法則の概念がまだ生まれていないとき、そして想像力がまだ抽象的な考え方に至らないとき、奇跡の歴史は常に形作られ、常に信じられ、これらの条件が変化するまで栄え、増殖し続けるのである。奇跡は人々がそれを信じ、期待しなくなるときに消滅する。同じように軽信の時代には、奇跡は想像力が神学的话题に向けられる強さに比例して増減する。最も異なる国々の歴史を比較するなら、神話的な時代

がすべての国に共通のものであることを明らかにする。国民性や、ある種の地域的な型や色を帯びてはいても、多くの地域において私たちは実質的に同じ奇跡を発見するだろう。アルプス山脈において同じ通り雨が日当たりのよい谷間では雨として、高い山頂では雪として降るように、ある精神的領域ではニンフや妖精、あるいは陽気な伝説の形をとっている同じ知的概念が、別の領域ではダイモーンや恐ろしい幽霊として登場するのである。迷信が見誤っていた自然の事実を正確に見て、見せることもある。たとえば、てんかん、悪夢、何らかの動物に変身したように感じる精神病などは、悪魔憑き、夢魔、狼憑きの多くの物語を説明するものであることは疑いない。また空は地球に近いという考えや、太陽は地球の周りを回っているという考えなど、伝説の元になった個々の誤りを発見できる場合もある。しかしより多くの場合、私たちは全体的な説明によってこれらの伝説を、ある特定の段階の知識や知的能力の正常な表現として、それにふさわしい場所に置くことしかできない。そしてこの説明はこれらを論破するものである。私たちはこれらの伝説は有り得ないだとか、私たちが信じている多くの事実と同程度の証拠によって証明されていないとは言わない。ただ私たちは社会のある条件下では、この種の幻想は必然的に現れると言うだけである。幽霊など存在しない、ということとは誰も証明できない。しかし熱で頭がぐらぐらしている人が幽霊を見たと言言するならば、その主張について意見を述べるのはそう難しいことではないだろう。

文明の進展に伴って奇跡的な物語が徐々に衰退していくのには三つの主な原因があると考えられ

る。第一はあらゆる教育が多かれ少なかれ生み出す傾向のある、観察と表現の一般的な正確さである。これは想像力の規律のない拡大を抑制する。そして真実というテーマについて粗野な文明には存在しない、はるかに強い精神的感覚が速やかにそれに続くのである。第二は抽象化する力の増大である。これも一般教育の結果であり、あらゆる現象を擬人化する早期の習慣を正すことによって、伝説の最も多産な源の一つを消滅させ、歴史の神話時代の幕を閉じるものである。第三は自然科学の進歩である。自然科学はそうした伝説の大部分を生んだ、絶え間ない恣意的な干渉に支配される宇宙という観念を徐々に払拭していくのである。自然科学の全ての歴史は法則の支配の一つの継続的な啓示である。ホコリの粒子の運動やツチボタルの光を支配しているのと同じ法則が、最も壮大な惑星の運行や最も遠い太陽の炎を支配していることが示されている。何世紀にもわたって、精霊の働き、災いの前兆、あるいは神の復讐であると広く信じられてきた無数の不思議が一つ一つ説明され、物理的原因に対する盲目状態から引き上げられ、予測可能であるか、人間による対策の余地があることが示されたのである。現代の病院は昔から憑依によって起こるとされていた精神病の治療に成功している。彗星の出現は予言されている。懐疑論者のフランクリン（*ベンジャミン、1706—1790）が発明した避雷針が、天の雷撃から教会の十字架を守っている。惑星の運行や微生物の世界を調べようとも、物理的自然のどの分野を研究しようとも、科学的探求の一定で不変の結果は、最も不規則で驚くべき現象でさえ、自然の先行要因に支配されており、互いに結びついた一つの大きなシステムの一部分であることを示している。この膨大な証拠の一致と、非常に多く

の領域における経験の画一性から、科学者の心には、物理的性質の全過程は法則によって支配されており、その中の特定の種類の現象に神が絶え間なくに干渉しているという概念は誤りであり非科学的であること、自然の大災害を神の警告または罰、あるいは訓練と解釈する神学の習慣は根拠のない、悪質な迷信であるという、絶対的道德的確信にも相当する信念が生まれるのである。

このような発見が奇跡の伝説に及ぼす影響には様々なものがある。まず、何らかの現象を不規則的なものとする概念の周りに集まった膨大な数の伝説―例えば古代人が彗星は何かの前兆であるという見解を裏付けるために集めた無数の記録―は、それが規則的なものであることが証明されれば直ちに覆される。次に、現象の相互依存性が明らかになれば、いくつかの伝説には実際に反論が不可能なあり得なさが大幅に増加する。太陽を単に世界を照らすランプだと信じていた人々には、ある日敵を皆殺しにしつつある軍隊を照らすため、文字通り太陽が中天で停止した（*旧約聖書、ヨシュア記10章13節）と信じることに大きな困難はなかった。しかし太陽はこの世界の広大なシステムを中心であり、地球が運動を停止したなら、それを超える奇跡が起こらない限りカオスが必ず至であることが認識されるなら、このケースは違ってくる。例えばアダムの罪によって一部の動物が初めて肉食になったという古い考え方は、この革命が単なる習慣や嗜好の変化と考えられている限り、許容できる素朴なものだった。しかし歯の変遷が知られるようになると信仰の立場は困難なものになった。そして自らの食物に特化した消化器官を持つすべての動物において、その消化器官

もまた変化していることが分かったとき、この困難にさらなる追い打ちがかけられたのだろう。（＊
「種の起源」は1859年、本書は1865年の出版）

最後に、自然科学は私が中心概念と呼んでいるものを破壊することによってさらに幅広い影響力を行使している。無数の個々の理論はその中心概念から発展したのであり、それらの理論は中心概念の自然な表現であり、それらの理論は中心概念に依存しているのである。私たちの世界は宇宙の中心ではなく、他の多くの惑星と一緒に太陽の周りを回っていることを証明し、この世界の混乱や苦しみは、わずか6,000年前の出来事から生じたものではないこと、その時代よりはるか昔に地球に最も恐るべき大変動による大混乱があったこと、無数の世代の感覚ある生物と、最近の発見が確認したように、無数の世代の人々が生まれては死んできたことを証明し、莫大な証拠の蓄積によって宇宙は特別な干渉による個別の行為によって統治されているのではない、と証明することに よって―自然科学は想像力に新たな方向性を与え、判断に新しい蓋然性の尺度を提供した。そして私たちの信念全体に影響を与えたのである。

しかし、ほとんどの人はまだ不完全にしかこの移行を成し遂げていない。そして自然の性質における科学がこれまで説明できていない部分は、特別な介入の領域と見なされているのである。例えば天体の現象が曲げられない法則に従っているという事実を認識している多くの人々でも、ある意

味において雨の降り方は人間の行動によって決定される恣意的な介入の結果であると想像する。確かに赤道付近において雨量はかなり一定しており、予測することができる。しかし赤道から遠ざかるにつれて雨量はより変動しやすくなり、その結果一部の人の目には超自然的なものと映る。しかし科学者たちは皆、この雨が惑星の運動を決定する法則と同じくらい曲げられない法則に支配されていることを微塵も疑わない。しかし、決定的な原因が非常に複雑なので私たちはそれを完全に説明することができない。そこで私たちの罪ゆえに送られた「雨と洪水の災い」や「私たちの悪行の最も当然の報いとしての飢餓と死」について語る習慣がまだある。科学が不完全にしか説明していない病気や死についても同様の表現が用いられている。もし人が鉄粉や有害な蒸気を吸い込まなければならぬような職業に就いていたり、疫病の多い湿地に住んでいたりするのであれば、これらの条件から生じる病気は審判や懲罰とは見なされない。自然要因がはっきりして決定的だからである。しかし病気を発生させた条件が非常に微妙で非常に複雑な場合、医師がその性質や影響を確実に突き止めることができない場合、とりわけそれが伝染病の性質を帯びている場合、それは常に神の審判として取り扱われる。この見解に対抗する推定は、医学の進歩に正確に比例して、病気は身体的条件の必然的な結果であることが証明されているという事実のみならず、説明のつかない病気が持つ、それが自然発生のものであることをはっきりと立証する数多くの特徴からも導かれる。例えば神学的な方法に従って治療されることが多いコレラは気温の条件によって変化し、特定の食事によって生じ、川に沿い、医学的治療にある程度反応し、悪や徳とは関係のない振る舞いによっ

て増悪したり軽快したりし、あらゆる程度の道徳や意見を持つている人々から無差別に犠牲者を出す。通常、審判とされたものに明らかな原因が発見されたときには最もグロテスクな不条理がもたらされる。例えばイギリスの家畜に致命的で謎めいた病気が発生したとき、一部の神学者はこれを審判として扱うことに飽き足りなかった。そして五書や永罰について異端とされる意見を含む、ある大衆的な書物をその原因とした。この病気がそのような思索が知られていない国から入ってきたこと、異論を唱えられた著者たちは家畜を持っていなかったこと、この病気で主に被害を受けた農民はほとんどの場合、これらの本の存在をまったく知らず、もし知っていれば憤然とそれを否定したであろうこと、主にそれを読む町の人々は食糧価格の上昇という正統派と異端に完全に公平に波及する間接的な影響しか受けなかったこと、懐疑論者がまったく目立っていなかった特定の州が特に被害を受けたこと、前の時代にも同様の著作があったが家畜は病気にならなかったこと、そして疫病がまさに猛威を振るっていたその時、はるかに大胆な思索が流行していた外国が絶対的に感染を免れていたことは事実だろう。これらすべての因果関係をもともせず、この理論は自信を持って主張され、熱い拍手が送られたのである。

このような問題の中で、厳密に帰納的な方法で議論できるものがいかに多いかは、十分に注視されていらないように思う。もし悪疫や伝染病が誤りや悪徳に対する罰として送られるというなら、その主張は疫病の歴史と巨大な悪徳や異端の時代の包括的な検証によって証明されなければならない。

もし、どんな軍事機関よりも強力な力が戦いの行方を左右するというなら、電気やその他の力を実験によって検出するように、この力の作用を検出しなければならない。もし無謬という属性が特定の教会にあるとするなら、帰納的推論者は無謬の教会というのはどこまで望ましいものなのか、あるいは何らかの古の言葉の外見をどこまで予言と解釈してよいかを問うだけでは満足しないだろう。この教会が実際にその教えにおいて不変で一貫していたかどうか、時代の無知や情熱に影響されたことがなかったかどうか、その力が常に真実であると証明された側に行使されていたかどうか、後に誤りであると証明された科学的見解をその権威によって支持したり、大衆の誤りを黙認して強化したり、後に人類の啓発者とされた人々の道に障害を置いたことがなかったかどうか、広く注意深く、彼は教会史を調査するだろう。もし教会の審議が、啓発や超自然的な力によって特別に靈感を受けたり指導されたりするというのであれば、聖職者の評議会や教会会議が、神の助けを受けていない私たちの能力の働きでは合理的に説明できない知恵の度合いと調和を示しているかどうかを調べなければならぬ。もし制度が、通常の方法則のシステムとは別の、特別な超自然的な力によって成長してきたと言うなら、その経過が自然法則では説明できないほどに著しく特殊なものかどうかを検討しなければならない。戦いの場合のように非常に多くの影響が結果に結びつくときは常に、その結果がしばしば私たちの予測を裏切る。また運に左右されるゲームにおいて同じ数字が繰り返し何度も出るような、奇妙な偶然の一致も起こる。しかし、私たちが有りうると考えるものからの変動には限度がある。サイコロを投げて一律に同じ数字が出たなら、あるいは戦争で最も武力

に乏しい軍隊が一樣に勝利したなら、私たちは何か特別な原因が働いてその結果がもたらしたことを容易に推論できるはずである。またあらゆる巨大な歴史的危機において一方が優位に立つなら、それには長い余波が伴うこと、そして私たちは事態の一面しか見ていないことを忘れてはならない。もしハンニバルがカンヌで勝利した後、ローマを占領して焼き払っていたなら、ローマ帝国の台頭に続く膨大な一連の結果は起こらなかつただろう。しかし海洋、商業に優れた、比較的平和な勢力の支配は全く異なる一連の結果を生み出し、それはその後のすべての進歩の基礎を築き、その不可欠な条件になっていたはずである。そして現在ではその種類と性質を推測することが不可能な文明が生じ、その神学者たちはおそらくハンニバルの生涯を記録上最も明白な特別の（*神の）介入例とみなしていただろう。

このような事柄について健全な意見を述べようとするとするならば、歴史の現象を非常に幅広く、公平に調査しなければならない。ある事象が自然には説明できないような均一性や持続性をもって、ある方向に傾いているかどうかを調べなければならない。自分の仮説を裏づける事実だけでなく、それに反する事実も調べなければならない。

通常、このような方法が採られないことは誰の目にも明らかだろう。ベーコンが言ったように人は「命中を記録するが、ミスは記録しない、」彼らは多くの、時にはありえないような出来事が自分

たちが良いと考える結果に収束した事例を熱心に収集する。そして逆の結果になった出来事をシンプルに考慮から外す。彼らは人類の進歩における偉大な運動の無意識の先駆者や実行者になった皇帝の生涯を誇らしげに語る。しかし、絶望的な抵抗にその才能を使い果たした人々や、バヤズイト（*皇位継承に伴う兄弟殺しの先例となる）やティムール（*残虐で有名）のように、人類に計り知れない害悪を与え、永続的な果実を残さずに去っていった人々には思いが及ばないのである。成功することが極めて難しそうなある事業に百人の宣教師が着手する。九十九人は死に、忘れ去られる。一人の宣教師が成功し、その成功は超自然的干渉によるものとされる、なぜなら確率はあまりにも彼に不利だったからである。ある国や時代において長い一連の政治的、軍事的な出来事がプロテストアントの勝利を確実なものとしたことが観察される。しかし他の国で別の一連の出来事によって同じ信仰が消え去り、最も高貴な殉教者たちの努力が無駄になったことは忘れ去られている。私たちは公の祈りの後の降雨のことを知らされる。しかし雨乞いの祈りが叶えられないことがどれくらいしばしばあったのか、祈りが捧げられたときにすでに通常よりどれだけ長く日照りが続いているかは知らされていない。昔の哲学者が言ったように、助かった人の奉納額は神殿に吊るされているが、難破した人のそれは忘れ去られているのである。

残念ながら、このような無定見はシンプルに知的な原因から生じているのではない。良心的（*religious、敬虔、宗教的）であろうとしながらも、実際にはかつて全くその逆の感覚が、

人々により恐ろしい物質的現象の原因を調査することを躊躇させたのである。すなわち、それは神の干渉の特別な例である、したがって調査するには神聖すぎるものとされたのである。自然科学の世界では、このような考え方はほとんどなくなった。しかし、歴史の一般的な審判の中にはこれと同様の感情がしばしば見られる。非常に多くの――真実の神の名において真実の追求を非難している――善意の人々は、人生についての神学的理論を説明したり裏付けたりする事実を収集するのは称賛に値する良心的なことであると考えている。しかし、彼らはそれらの事実やその理論に通常の帰納的推論の厳しさを適用することは不遜で間違っていると考える。

私を書いたことは、神意の定めるところによって、道徳的な原因が幸福や成功に自然かつしばしば圧倒的な影響を与えるという信念とも、また私たちの道徳的性質が非常に現実的、恒常的、直接的により高い力とのつながりを持っているという信念とも、いささかも矛盾するものではない。また物理的性質の秩序にさえ、神が干渉する可能性を否定するものではない。ほとんどの公平な探究者は、これが私たちの住む惑星のシステムではないことを確信するだろうが、中世の神学者が想像したような特別な介入行為に支配された世界は完全に想像が可能なものである。そして、もしそうした干渉の何らかの実例が証言されたとしても、本質的にあり得ないものとして否定されてはならない。しかし、奇跡に関するほとんどの論者の基本的な誤りは、その注意を二つの点――それが事実である可能性と証拠の性質――に限定してしまうことである。この問題には極めて重要なもう一つの

要素がある。それは社会のある段階における人々の奇跡的なものに対する素質である。それは奇跡的な話が常に流布し、信じられていなければならないほど強くなる。そして自然の事実を立証するには十分な量の証拠を、超自然的事実を立証するには全く不向きなものにしてしまう。私が主張してきた立場は、自然の成り行きに神が永久に干渉するというのが、奇跡に関する最も古く最もシンプルな概念だということである。また多くの信仰体系に暗示されているこの概念は、半ば自然の法則に対する無知から生じ、また半ば人に自分の先入観と一致する事実だけを集めさせ、それと矛盾するものには目もくれさせない帰納的証明能力の不足から生じるのである。このような方法によって擁護できない迷信は存在しない。彗星が出現した後起こった戦争、飢饉、疫病について完全な正史を伝える本が書かれている。どんなに幼稚な予知も予言も、無限の多様な事件の中で時折立証されたことがないものはない。そして迷信的想像力の影響下にある心にとって、そうした時折の立証はすべての誤りの事例を凌駕して余りあるものである。病気を治すにはシンプルな知識では全く不十分である。大海原を観察することに人生を費やし、雲の兆候をほぼ正確に読み取れるようになった船乗りほど、幸運な日や不運な日、超自然的な前兆の實在を固く信じている者はいない。常習的なギャンブラーほど、運勢に関する迷信を信じ込んでいる者はいない。迷信家は自分の理論を放棄するやいなや、どのような途方もない仮説にも頼ろうとする。古代の人々は夢は大抵超自然的なものであると確信していた。夢が立証された場合、これは明らかに予言だった。出来事が夢の予兆の正反対であっても、それはまだ超自然的なものだった。なぜなら夢は時々逆に解釈しなければならぬと

というのが公知の原則だったからである。夢がその後の出来事と何の関係もなかった場合、それが幻想的な寓喩に変容しないなら、それは依然として超自然的なものだった。なぜなら寓喩は啓示の最も普通の形の一つだったからである。（* *夢がその後の出来事と何の関係もなかった場合、それは超自然的なものに留まるか、啓示すなわち神的知識の開示とされるかのどちらかである）もし解釈の工夫によって予言的な意味が見いだせなかったとしても、その夢の超自然的な性質は必ずしも消失しなかった。ホメロスは人を欺くような幻影が心に入り込む特別な入り口があると言い、また教父たちは意味のない夢で私たちを当惑させ困惑させるのはダイモーンの仕業であると宣言したからである。

奇跡の真实性を調査する者は、真つ先に（*人々の）奇跡的なものに対する素質の力を正しく評価しなければならぬ。このテーマを公平に検討しようとする人物は誰しも、この素質は歴史上の多くの時代において、ありえなさそうな自然の事実を十分に立証するものよりもはるかに大量の証拠を、純然たる妄想の周囲に蓄積するほどに強力なものだった、と結論せざるを得ないだろう。異教徒のローマの全期間を通じて、さまざまな種類の驚異があらゆる重大な出来事を予告したこと、生け贄には災いを軽くしたり阻止したりする力があることは、最も豊富な経験によって確かめられた疑いのない真実と見なされていた。共和制時代には元老院自身が公式に驚異を検証し、説明していた。帝国ではタキトゥスからアウグストゥス時代の最も卑しい論者に至るまで、数多くの驚異を

あらゆる君主の即位と死、そして民衆に降りかかるあらゆる大災害の予兆と固く信じていない歴史家は一人としていなかった。洗練されたギリシャ人から最も粗野な野蛮人に至るまで、古代において人が未来を予言することを可能にする本物の術の存在を認めていなかった民族は一つもなく、その信仰の強さは何世紀にもわたって人類の尊敬を集めてきた神託のための見事な神殿によって十分に証明されている、とキケロは真実を語っている。魔女の奇跡の実は、不完全なものとはいえず、少なくとも当時世界に存在した最も精緻な批判法廷、ヨーロッパ各国の法廷の判決、世論の一致した声に支えられ、数世紀にわたって最も有能な人々の研究によって裏付けられていたものである。王の手で瘰癧（*結核性頸部リンパ炎）が治るといふ信仰は、英国の歴史の最も輝かしい時代に広まった。最も多くの公式の実験にもそれは揺らぐことはなかった。それは枢密院によって、二つの宗教（*英国教会とカトリック）の司教によって、英国教会の最も穏やかな時代の聖職者の総意によって、オックスフォード大学によって、そして民衆の熱狂的な賛成によって主張された。それは宗教改革、ベーコン、ミルトン、ホップズの時代も生き続けた。ロックの時代にも決して消滅したわけではなく、革命による王朝の（*ハノーヴァー朝への）交代が遅すぎた懐疑論を助けなければ、おそらくさらに長く続いていたことだろう。しかし現在では、こうした奇跡を擁護する教養ある人物はほとんどいない。確かにぼんやり考えれば、神意が驚異によって来るべき出来事を告げたり、ある人物に奇跡的な力を与えたり、悪霊が人間の間に存在して彼らの企てを助けることを許したりした可能性は十分に想像できる。そうした奇跡を立証する証拠は積み重ねられ、アンティオキアの

地震のような、誰も夢にも疑おうとしない数多くの自然現象の証拠よりも、計り知れないほどに大きなものになっている。私たちが奇跡を信じないのは、ある種の知的条件下で、私たちが解明できるようになったある種の誤りの影響下で、この種の迷信が必ず現れては栄え、こうした知的条件が過ぎ去ると、奇蹟は必ず止まり、迷信の構造全体が静かに溶けてなくなることが圧倒的な経験によって証明されているからである。

過去の書物にほとんど通じておらず、無意識のうちに自分の時代の批判精神を他の時代に持ち込んでしまう通常の人物にとって、何世紀の間、最もグロテスクで途方もない性質の歴史がわずかな疑問も持たれず、わずかな真実もなしに、継続的に提唱され得た事実を理解するのは極めて難しいことである。しかし古代の精神が自然科学から思索的哲学へと転換したこと、印刷技術が多くの誤りを防止しなかったこと、ベーコンと同時代の人々が近代哲学に吹き込んだ注意深く実験的な研究の習慣が全くなかったこと、キリスト教時代の、信仰の精神は徳であり、懐疑の精神は罪であるという神学的概念に思いを馳せるなら、この軽信をいくらか理解できるのではないだろうか。また、人が天体の運動の鍵を見つける前―つまり渦動説（*ルネ・デカルト、1596―1650、天体は渦のようなエーテルに押されて動いている）の間違いと重力理論の正しさが判明する前―明らかに気まぐれな現象の数が非常に多かった頃、世界が個別の独立した力によって支配されているという考え方は、最も理性的な知性にとってさえ、最も有りうるべきものだったことを忘れてはならない。

い。このような知識の状態―つまりローマ帝国の最も啓発的な時代の知識の状態―において、普遍的な法則の仮説は無分別で早計な一般化とみなされるのは当然のことだった。すべての探究者は、無数の明らかに奇跡的と思われる現象に直面した。ルクレティウスが宇宙から超自然的なものを追放しようとしたとき、彼は多くの工夫によって、ユピテル・アモン神殿の近くにある奇跡の泉がなぜ夜は熱く、昼は冷たいのか、井戸の温度はなぜ夏よりも冬に高いのかを自然の法則によって説明する努力をしなければならなかった。民衆は月食を災いの予兆と考えていたが、ローマの兵士たちは太鼓やシンバルを叩くことで再び月が円い輝きを取り戻すと信じていた。偉大な皇帝アウグストゥスは夢に従ってローマの通りへ金銭を乞いに行った。そしてその行為を記録した歴史家は自身の裁判の延期を懇願する手紙をプリニウスに書いたのである。雷の一撃は予兆であり、それは特に雷雨のときに救い難い恐怖にすぐむ著名人への脅しだった。アウグストゥスはアザラシの皮を被って雷から身を守っていた。ティベリウスは完全な宗教的自由思想家であることを公言していたが、月桂樹の葉を強く信仰していた。カリグラは雷雨のときにベッドの下にもぐりこむのが常だった。ユリウス・カエサルを称える競技の際に空に七日間彗星が現れた。それを人々は死者の魂と信じた。そして敬意を示すために神殿が建てられた。この軽信性は時に信仰の奇妙な矛盾や半合理的な説明によって崩されることがある。リウイウスは無数の奇蹟を完全な信頼とともに語っているが、それでも奇蹟が信じられれば信じられるほど、より多くの奇蹟が報告されることを観察している。神託の实在を最も完全に認めていた人々は予言の能力はすべての人に備わっているが、ほとんどの人の

それは眠っていると主張した。そして睡眠、純粹で禁欲的な生活、死に先立つ衰弱、特定の蒸気によって生じる錯乱によってその能力が活性化され、最期の徐々の衰弱によって神託は停止するのである、とした。地震は超自然的な介入によって生じ、贖罪のための生け贄を求めると信じられていたが、同時にそれには直接的な自然の先行現象もあった。ギリシャ人はそれが地下水によって引き起こされると信じ、それゆえポセイドンに生贄を捧げた。ローマ人はその物質的先行現象について確信がなかったため、贖罪の祭壇に名前を刻まなかった。ピタゴラスはこの現象を死者の闘争によるものと考えたと言われる。長い議論の末、プリニウスはそれを大地の裂け目から空気が押し出されることによって発生するものとした。しかし彼はすぐに、この現象は必ず災いの前兆であると断言している。同じ論者は月食の予知と説明における天文学者の勝利を語り、それによって迷信の支配から人間を取り戻した偉人たちに対する雄弁へと議論を急転換し、無知の束縛を打ち破るためにさらに努力を重ねるよう、熱烈な言葉で高らかに呼びかけている。彼はその数章後に彗星の不吉な性質についての揺るぎない確信を公言している。魔術や占星術の概念もあらゆる神学的信仰とは切り離されていた。そして完全な無神論者の中にその多くを見出すことができるだろう。

こうした例はキケロやセネカの著作の後にも、アウグストゥスとアントニヌス朝の輝かしい時代にも、ローマの土壌は奇跡の歴史を受け入れる準備がいかに完全にできていたかを示すに十分であろう。物質的な観念から抜け出せない未開の心の弱さは確かに過ぎ去り、民衆の神学的伝説は教養

ある人々に対する力を全く失っていた。しかしその一方で、自然科学や帰納的推論に対する絶対的な無知は残っていた。超自然的とされる事柄以外についてさえ、最も著名な人物たちが示した信じ易さは、彼らの作品に親しんでいる者でなければ実感できないだろう。いくつかの例を挙げると、私がたびたび引用してきた偉大な博物学者（*ルクレティウス）は、最も犖猛なライオンが鶏の鳴き声に震えること、象が宗教儀式を行うこと、雄鹿がその息で蛇を穴から引き出して踏み殺すこと、茹でた食物や木の実にサンショウウオが触れると人間にとって致命的なものになること、船が凄まじい嵐に揉まれていて錨や鎖がそれを落ち着かせられないとき、コバンザメやウニをその竜骨に打ち付けるだけで難を逃れ、波の中で揺らぐことなく安定を保てることを最大限に重々しく語っている。最も簡単に検証できそうな事柄についても、彼は同様に確信している。例えば人間の唾液には多くの不思議な性質がある。特に絶食中の人間が蛇の喉元に唾を吐くと、その蛇はたちまち死ぬという。唾液を目に塗れば眼炎の特効薬になるのは確かなことである。拳闘家が敵を殴った後、自分の手に唾を吐きかけると、彼が与えた痛みは即座に止まる。もし殴る前に手に唾を吐けば、その一撃はより痛烈なものとなる。ギリシャの偉大な博物学者アリストテレスは、海辺では引き潮の間以外は、どんな動物も死なないという不思議な事実を観察していた。数世紀後、数多くの干満の激しい海に洗われる帝国の最大の博物学者プリニウスはこの記述に注目した。彼はアリストテレスがすべての動物について述べていることは実は人間についてだけ言えることであって、ガリアで行われた注意深い観察の結果、それは不正確なことが判明した、と宣言している。1727年とその翌年、

ロシュフォールとブレスト（*ともにフランスの地名）で行われた科学的観察によって、ついにこの妄想は払拭されたのである。

ローマ帝国の最も啓発的な時代に、偽りを見破るには最も有利に見える環境下においてさえも、奇妙な、特に奇跡的な物語がいかに容易に信じられていたかを示す実例は何巻もの本になるだろう。しかし超自然的現象の分野では、前章で描写したある運動がコンスタンティヌスの改宗に先立つ一世紀半の間に、極めて例外的な量の軽信を生み出していたことを忘れてはならない。キケロやセネカの著作も、プリニウスやプルタルコス著作でさえも、教養ある人々の信念の適正なサンプルと見なすことはできない。エピクロス哲学は否定され、アカデミズム哲学は疑われ、ストア派哲学は単純化して迷信に転化し、いずれも消滅してしまったのである。マルクス・アウレリウスの「自省録」はストア派の影響力の終止符であり、ルキアノスの「対話篇」は消えゆく懐疑論の最後の孤独な抗議だった。キケロの哲学の目的は自由な批判力を使って真理を確かめることだった。ピタゴラス派の哲学の目的は、恍惚の境地に達し、宗教的儀式によって心を浄化することだった。すべての哲学者はたちまち魔術的な儀式に没頭した。弟子たちの目に彼らは伝説の後光に包まれているように映った。異教徒がキリストの対抗馬にしたティアナのアポロニウスは、死者を蘇らせ、病人を癒し、悪魔を追い出し、ラミアすなわち吸血鬼に魅入られた若者を解放し、予言をし、ある国で起こっている出来事の中に別の国で起こっているそれを見て（*エフェソスにいなながらローマで皇帝が

暗殺されるのを見たとき、その奇跡とその聖性の名声で世界を満たしたという。同様の力は、彼自身が否定しているにもかかわらず、プラトン主義者のアプレイウスにもあると一般に言われていた。ルキアノスは哲学者アレクサンドロスが奇跡を起こす人物という名声を得ようとして働いた詐欺行為について詳しい記事を残している。魔術師がプロティノスに対抗しようと企んだとき、彼の魔法は不思議なことに彼自身に跳ね返ってきた。またエジプトの神官がこの哲学者の守護霊であるダイモーンを呼び出そうと呪文を唱え、ダイモーンではなくイシス神殿が神の存在で光り輝いた。ポルピュリオスは風呂から邪悪なダイモーンを追い出したと言われている。弟子たちの間では、イアンブリコスが祈ると（別の信仰の聖人のように）その身体は地面から10キュビト（*1キュビトは45―56cm）引き上げられ、その身体と衣服は黄金色に輝いたと伝えられている。彼がガダラ（*ガリラヤ湖の南東）で二つの泉の水からその守護霊を出現させ、その姿かたちを弟子達に見せたことは有名だった。ソスピトラという女性は、年老いたカルデア（*メソポタミア南部）人の姿をした二柱の霊の訪問を受け、超越的な美しさと超人的な知識を授けられた。愛と死以外の人間のあらゆる弱さを超越した彼女には、あらゆる土地で行われることを一目で見抜く力があつた。そして人々は彼女の美しさと知恵に目を奪われ、彼女を神と遍在を分かち合うものとした。

キリスト教は一連の東洋の迷信や伝説を持ち込んだ軽信の波に乗って、ローマ帝国に流入した。その道徳的側面には周囲のシステムと大きく異なる特徴があつたが、その奇跡は宗教的な教えの通

常の付属物として敵味方を問わず受け入れられていた。ユダヤ人は長い間、異教徒にその軽信で知られていたが、キリスト教徒はその評判を倍にして受け継いだ。また奇跡の問題に関してはその評判が当然だったことを否定することはできない。異教徒の間では神々を神格化された人間に過ぎないとするエウヘメルスの説が懐疑派の拠り所となっていたが、より信仰的な哲学者たちはプラトンのなダイモンという概念を採用していた。キリスト教の指導者たちは両方の説を組み合わせて、神々の名前はもともと亡くなった王たちのものだったが、悪意あるダイモンがそれと入れ替わったと主張した。そして神父たちは一人の例外もなく、異教徒の奇跡の真实性を彼らのものと同じく最大限に主張していた。ここまで見てきたように、神託は多くの哲学者たちによって嘲笑され否定されてきた。しかしキリスト教徒は一致してその実在を認めていた。彼らは一連の長い神託を自分たちの信仰の予言であると主張した。そしてフォントネル（*ベルナル、1657—1757）が要約して翻訳した驚くべき本の中で、1696年にヴァン・デールというオランダのアナバプテリスト派（*幼児洗礼否定派）の牧師が教会権力の一致した声に対抗して、神託は単なるまやかしであるという―今や普遍的に受け入れられている―理論を主張するまでその超自然的性質が否定されたことはなかったと私は信じている。このような意見を持つ人々が、二世紀や三世紀において、一世紀にユダヤで奇跡が起こったかどうかを、なんらかの信頼に足る適切な根拠によって確認することができたと考えるのは、非常に馬鹿馬鹿しいことである。また非常に多くの奇跡が行われていると考えられていた時代に、奇跡の真实性の確信が彼らの心に大きな印象を与えたとは思えない。

実際のところ、ユダヤの奇跡の真実性の問題はローマ帝国の改宗の問題とは注意深く区別しなればならない。私たちは現代の調査と思考習慣の光を当てることによってユダヤ人論者の証言を検討する。しかし現代のより賢明な護教論者の多くは、ユダヤ人の極めて高い軽信性を考慮して、この問題をシンプルに証拠の一つにすることを避けている。そして主に、奇跡は起こり得ること、聖書の物語において奇跡はそのように語られており、シンプルで素朴な物語の織物にその真実性を内的に証明するように織り込まれていること、それらはその後の奇跡とは違う種類のものであること、そして特に、キリスト教の性格と運命こそがその奇跡的な起源をあり得るべきものに行っていることを示そうと努力している。しかしローマ帝国の主な改宗の時代には初期の奇跡の証拠を適切に鑑別する歴史的調査は不可能であり、奇跡は宗教の証明として大きく利用されることもなかった。修辞学者アルノビウス（*シツカの、AD 252―330）は初期の護教論者の中で信仰の証拠としてキリストの奇跡を重要視している唯一の人物だろう。証拠による証明がなされる場合、それは通常、奇跡ではなく予言によるものだった。しかしここでもまた、教父時代の意見は全く無価値なものと断じなければならぬ。予言と正確に一致する出来事がユダヤで起こったこと、あるいは予言が本物であることの証明は、いずれもローマ時代の改宗者の批判力をはるかに超える仕事だった。一般にオリゲネスと関係があり、殉教者ユステイノスやエイレナイオス（*リヨンの、AD 130―202）の著作にもっと早くから見られる幻想的な寓喩の乱暴な放縦さは、予言の解釈を絶望的に混

乱させた。一方、キリスト教全体を、あるいはその枠内で生まれた特定の教義を広めることになった、意図的な、そして明らかに完全に無節操な文献全体の偽造のため、批判は特別に困難であると同時に、必要なものになった。キリストの苦難を詳細に予言する、長い一連の神託が引用された。キリスト教徒によって偽造され、異教徒の巫女によるものとされた予言は、教会全体で本物として受け入れられ、信仰の最も強力な証拠の一つとして絶えずアピールされた。殉教者ユステイノスはこれを読むことが死罪になったのはダイモーンの扇動のせいであると宣言している。アレクサンドリアのクレメンスは、聖パウロが信者仲間たちにこれらを研究するように促したという伝承を残している。ケルスス（*アウルス・コルネリウス、BC 25—AD 50、百科事典を書いた学者）はキリスト教徒をシビュリストと呼んだが、これは彼らがシビュラ（*巫女）に固執したからである。コンスタンティヌス大帝はニカイア公会議での厳粛な演説の中で、この言葉を引用している。聖アウグステイヌスはキリストの名前と称号（* I H C O Y X P I N T O Z E O Y I O Z E Q T H P、イエス、キリスト、神の、子、救世主）の頭文字を単語に含むギリシャ語の魚（* I X Θ Y M）が、初期教会によって神聖なシンボルとして採用されたが、それはエリトラ（*キオス島の対岸の小アジアの町）のシビュラによるものとされる予言の言葉の頭文字（* I H C O Y X P I N T O Z E O Y I O O Z E Q T H P E T A Y P O Z、イエス、キリスト、神の、子、救世主、十字）をも含んでいることを指摘している。異教徒たちがこれらの予言が偽造された、あるいは改竄されたものであると非難したことは事実である。しかし教父たちの時代にはこれらの予言の権威に

異議を唱えたキリスト教徒の論者は一人もいなかったし、最も著名な論者にもこれらの予言を支持しなかった者はほとんどいなかった。それらは教父たちの教会において満場一致で認められ、中世においても認められ、ミサ典書の最も美しい歌詞の中でも言及されている。偉大だが不幸なカステリオ（*セバスチャン、1515—1563）がそれらの中の本物であるはずがない多くの文章を指摘したのは、ようやく宗教改革の時代になってからのことだった。十七世紀初頭にポッセヴィーノ（*アントニオ、1533—1611）というイエズス会士が彼に続いた。シビュラはモーセより後の時代を生きていたことが知られているが、シビュラの書物の多くの箇所がモーセ以前に書かれたものとされていることに気づいたのである。そこで彼はこれらの文章は改竄されたものであると言った。さらに独特の賢明さによって、それは本に疑いを持たせるために、サタンが挿入したものに違いないと付け加えた。1649年、フランスのブロンデル（*デビッド、1591—1655）というプロテスタントの牧師が教会の中で初めて、これらの著作を意図的で下手な贋作であると非難した。そして多くの怒りに満ちた論争を経て、彼の批判的意見はほとんど議論の余地のない優位を獲得している。

ローマ人の改宗者の意見は、過去の歴史や文献批評を扱う場合には極めて無価値なものだった。しかし奇跡の一分野については、彼らの立場はやや異なっていた。現代の奇跡はしばしば最も驚異的な性質を持つが、当時のそれは通常は幻視、悪魔払い、あるいは病人の癒しといった性質のもの

であり、殉教者ユステイアヌスの時代から教父たちは一様に彼らの間に存在するものであると述べていた。そして、エウアグリウス（*ポンティコス、AD345—399）とテオドレト（*キユロスの、AD393—466）の書物、聖ヒエロニムスが書いたヒラリオン（*AD291—371、聖アントニヌスの弟子）とパウロ（*テーバイの、AD227—341）の生涯、聖アタナシウス（*AD295—373）が書いた聖アントニウス（*AD251—356）、ニュツサ（*カッパドキア）の同名の著者が書いたグレゴリウス・ソーマトゥルガス（*AD213—270）、そして聖グレゴリウス（*1世、教皇、AD540—604）の対話篇の中で中世の最も荒々しい伝説のようなグロテスクな放縦に達するまで、着実に歴史を重ねるのである。この件に関して、最も優れた教父たちが行った主張ほど印象的なものはない。例えば聖エイレナイオスは、すべてのキリスト教徒は奇跡を起こす力を持っており、予言し、悪魔を追い出し、病人を癒し、時には死者を蘇らせ、このようにして蘇生した者たちが彼らの中で何年も生きており、毎日行われた素晴らしい行いを数え上げることが不可能であると断言している。聖エピファニオス（*サラミスの、AD310—403）は、（*キリストが水をワインに変えた）カナの奇跡を証明するために、いくつかの川や泉は年に一度ワインになると語り、自分もその泉の一つを飲み、信者仲間たちも別の泉で飲んだと付け加えている。聖アウグスティヌスは奇跡は以前ほど頻繁には起こらず、広く知られていないが、依然として多くの奇跡が起こっており、そのうちのいくつかを自身が目撃したことを記している。彼は奇跡が報告されるたびに、その状況について特別な調査を行い、目撃者の宣誓証言を公に

民衆に読み聞かせるよう命じた。その他にも彼は多くの奇跡について語っている。ガマリエル（*BC?—AD52、パウロも尊敬していたユダヤ教パリサイ派の法学者）が夢の中でルキアノスという司祭に聖ステファノの骨が埋められている場所を明かした（*AD415）こと、その骨が発見され、聖アウグステイヌスが司教を務めているヒツポ（*現アルジェリア・アンナバ）に運ばれたこと、五人の死者を蘇らせたこと、その骨による奇跡的な癒しはその一部が記録されただけだったが、司教管区で聖人の命令によって作成された証明書は二年間で七十枚近くに上ったとのことである。隣接するカラマ司教管区では、その数は比較にならないほど多かった。聖アンブロジウス（*アウレリウス、AD339—397、ミラノ司教）とアリウス派の皇后ユステイナ（*AD?—388）との間の大きな争いの最中、この聖人は抗しがたい予感によって—あるいはその場にいる聖アウグステイヌスが言うように、夢の中で—自分が指し示す場所に聖遺物が埋められているという啓示があったと宣言した。土が取り除かれると、血に満たされた墓が見つかり、そこには頭が胴体から切り離された二体の巨大な骸骨があった。これは約300年前に受難したとされる驚くべき体格の殉教者、聖ゲルバシウスと聖プロテシウスのものであると公言された。その骨に触れると盲人は見えるようになり、ダイモン憑きは治ったので、それらは本物の聖遺物であることが証明された。そしてなにより大事なことにダイモンは聖遺物が本物であること、聖アンブロジウスは地獄の権力者の永遠の敵であること、三位一体の教義は真実であり、これを否定する者は間違いなく呪われることを認めたのである。翌日、聖アンブロジウスはこの奇跡を疑う者すべてに対して罵

りの言葉を浴びせた。聖アウグスティヌスはそれを著作に記録し、聖人崇拜をアフリカ中に広めた。ミラノでは奇跡が熱狂的に歓迎されたので、聖アンブロジウスはあらゆる障害を克服することができた。しかし、アリウス派は奇跡を信じがたいものとして嘲笑的に扱った。そしてダイモン憑きのふりをした者たちは聖人に買収されたのであると宣言した。

この種の、同じように正確ではないにしても、同じように固く信じられた非常に多くのものから選ばれた言説は、明らかに利益とその地位の重みを指向している。しかし私たちが今関心を持ってゐるのは、いま述べたような一つ二つの個別の奇跡と、これから説明する一群の奇跡を例外として、奇蹟は真偽にかかわらず、固く信じてゐる信徒の啓発だけを目的として作られたという事実だけである。その例外的な奇跡とは悪魔払いである。それは初期の教会では非常に特異な位置を占めていた。ある種の病気が神の働きによって引き起こされるといふ信仰は古代人にとってなじみ深いものだったが、初期のギリシャ人には悪魔の憑依という概念はなかつたようである。プラトンの哲学では、ダイモンは神には劣るが悪霊ではなく、キリスト降臨の頃までに悪のダイモンの存在がギリシャ人やローマ人に知られてゐたかどうかは極めて疑問である。この信仰は当時流入してゐた東洋の迷信とともにローマに伝えられた。そしてその中には憑依や悪魔祓いの概念があつた。ユダヤ人は自分の国では見るからに悪魔に取りつかれてゐる人物が歩き回つてゐるのはごく普通のことだと考えていたようであり、悪魔を追い出す方法をソロモンから学んだと公言してゐた。彼らはすぐ

に主要な悪魔払いになり、一部は厳しい命令によって、一部はバアラスという奇跡の植物の根によってその芸当を成し遂げるようになった。ウエスパシアヌスの治世にエレアザルという名のユダヤ人がこの方法でダイモーンを憑依されていた者の鼻孔から引き抜き、その奇跡が成し遂げられたとき、その者が地面に倒れるのを自分は見た、とヨセフス（*AD37—100）断言している。そのとき悪魔は魔術師の命令によって犠牲者から本当に離れたことを証明するため、離れた場所に置かれたカップの水をひっくり返した。新プラトン主義やそれに類する哲学の発展は、この信仰を大いに強め、後世の哲学者の中にも、多くの宗教的詐欺師と同様に、悪魔払いを實踐する者がいた。しかし、キリスト教徒はこの点においてすべての集団の中で最も有名になった。殉教者ユステイアヌスの時代から約二世紀の間、ラオデキア（*小アジア西部）教会会議（*363年）の後、その数は少なくなつたが、決して絶えることはなく、この力の実在と頻繁な使用を厳肅かつ明確に主張しなかつたキリスト教の論者は一人もいないと私は信じている。キリスト教徒はユダヤ人や異邦人の悪魔祓い師が持つ超自然的な力を十分に認識していたが、多くの点で自分たちは彼らより優れていると主張していた。単に十字を切ることによって、あるいは主の名を繰り返すことによって、彼らは異教徒の悪魔祓い師のあらゆる魔術に抵抗した悪魔を追い出し、神託を黙らせ、ダイモーンにキリスト教信仰の真実を告白させることができるかと公言していた。ときにその力はさらに拡大された。ダイモーンは動物の中に入ることがあったというが、これもキリスト教徒による厳命によって追い出された。聖ヒエロニムスは「聖ヒラリオンの生涯」の中で聖人が憑依されたラクダに対峙し、

それを救った勇気を生き活きと物語っている。ユリアヌスの治世に殉教者バビラス（*アンティオキアの、AD253殉教）の骨はダフネ（*アンティオキア近郊）の神託を黙らせるのに十分だった。ユリアヌスの命令で（*バビラスの）聖遺物が移されると、天から雷が降りてきてキリスト教徒の凱歌の中で神殿を焼き尽くした。聖グレゴリウス・ソーマトゥルガスは、偶像の神殿からダイモンを追放した。神官は生活の手段が失われたことを知り、聖人のもとにやってきて、再び神託を受けさせてくれるよう懇願した。聖グレゴリウスは旅の途中だったが「サタンよ、戻れ」という言葉を含む書き付けを与え、それは直ちにその通りになった。そして奇跡に畏怖した神官はキリスト教に改宗した。テルトゥリアヌス（*クイントゥス・セプティミウス・フロレンス、AD160—220）は迫害の時代に異教徒に向けて書いたものの中で、反対派にダイモンに憑かれた者、異教の神の靈感を受けたとされる巫女や予言者のいずれかを連れてくるよう、最も落ち着き払った真剣な言葉で要求している。どんなキリスト教徒の尋問に答えようとも、ダイモンはその悪魔的な性格を告白せざるを得ないと彼は主張し、そうでない場合は、そのキリスト教徒を直ちに死刑にするよう異教徒に求めた。そしてこれを最も単純かつ決定的な信仰の証明として提唱しているのである。殉教者ユステイノス、オリゲネス、ラクタンティウス、アタナシウス、ミヌキウス・フェリクス（*マルクス、AD250死去）は、いずれも同様に厳粛かつ明確な言葉で、異教徒に対して彼らの神々から搾り取られた告白から意見を作り上げるよう呼びかけている。彼らによれば、キリスト教徒が憑依された者や異教の神の靈感を受けた者の前で祈ったり、十字を切ったり、主の名を

唱えたりすると、その者は叫び声や恐ろしい身振りで、加えられた責め苦を示し、この責め苦によって悪霊はその性質を明かさざるを得なかったことである。キリスト教の論者の何人かは、このことが広く異教徒に知られていたと述べている。ある点において、悪魔払いの奇跡は特に証拠能力が高いとされていた。ダイモンはダイモンを追い出さなため、必然的にそれは間違いない神のものとされる唯一の奇跡だったのである。

この挑戦が異教徒の論者によってどのように受け取られたかを調べるのは興味深いことである。しかし残念なことに、キリスト教徒の皇帝によってこの信仰に敵対する書物が消し去られたため、この点に関して私たちが情報を得る手段は非常に乏しくなっている。しかしながら、いくらかの情報はある、少なくとも教養ある階級の間ではこうした驚異が大きな称賛を得ることはなかったことを示している。初期の哲学者たちが魂や精神世界の性質を論じる際に守っていた、悪魔憑きについての雄弁な沈黙は、彼らの時代には憑依が大きな注目を集めたり、一般的な信用を獲得したりしていなかったことを決定的に示している。プルタルコスには邪悪なダイモンの存在を認め、神託を最も熱心に擁護していたが、悪魔払いが属する迷信全体を非常に軽蔑的に扱っている。マルクス・アウレリウスは、自分が関わったさまざまな人物から受けた恩恵について語る中で、哲学者ディオグネトウス（*家庭教師、詳細不詳）が、魔術師やペテン師、ダイモンを追い出す者を信用しないよう教えてくれたことに感謝の念を述べている。ルキアノスは、狡猾なペテン師はキリスト教徒

をうんと叱りつけ、彼らの純真さを食い物することで財を成すことができると断言している。ケルススはキリスト教徒を若者や騙され易い人々にペてんを披露するぺてん師と表現している。しかし最も決定的な証拠はキリスト教徒に向けられたと考えられる「呪術、呪詛、あるいは（詐欺師の常套句である）悪魔祓い術を使う者」を有罪とするウルピアヌス（*グナエウス・ドミティウス、法学者、AD170—228）の法律である。現代の批判はこの不明瞭なテーマに光を当てる事実をいくつか指摘している。悪魔憑きの症状はほとんどの場合、精神異常やてんかんの症状と同じであること、立派な宗教的儀式の興奮によって異常が引き起こされたり、中断されたりするというのは十分にありうること、これらのケースで誘導尋問によって望ましい答えが得られた可能性があると、神父たちのいくつかの文章から悪魔払いに常に成功したり、その治癒は常に永続的なものだったりしたわけではないことが観察されている。また当初、悪魔払いの権限はすべてのキリスト教徒に制限なく与えられていたこと、宗教的なぺてん師が非常に一般的だった時代、とても信じ易い教会員たちのいる教会でこの許可は詐欺師たちに大きな便宜を与えたこと、四世紀のラオデキア教会会議が司教によって正式に認められた者以外の悪魔祓いを禁じると、これらの奇跡は急速に減少したこと、五世紀の最も初頭にポセイドニウス（*詳細不明）という名前の医師が悪魔憑きの存在を否定したことが観察されている。

この問題全体をまとめるなら、ローマ帝国の改宗を実現する上で、証拠のシステムと呼ばれるも

のは重要な位置を占めていなかったと結論づけることができるだろう。歴史批判はかつての奇跡の何らかの価値を主張するにはあまりにも不完全だった。また広く普及していた奇跡や魔法の力という概念とともに、教父時代の奇跡とされるものが一般的に（*公的ではなく）私的な性格のものであったことが、同時代の不思議を非常に印象の薄いものにしていった。しかしシビュラの子言や悪魔祓いには、それなりの重みがあった。というのも前者はローマで長く深く崇拜されてきた宗教的權威と結びついていたし、後者はいくつかの事情によって大きな注目を浴びるようになったからである。しかし、これらの効果はまったく副次的なものと考えてよい。そして改宗の主因は別の、より広い領域に求めなければならない。

その原因はこの時代の一般的な傾向だったのである。それらは前章で私が描こうとした、懐疑と軽信が入り混じった広大な運動、多くの信条の融合や解消、習慣や感覚、理想の重大な変容の中に見出すことができる。世界がかつて経験したことのないほど宗教の布教に有利な環境下で、長い破壊的な批評の過程によって道が整備され、すべてが十分に代表されていて唯一世界の運命を決定することができるこの大都会で、人類の宗教と哲学が支配権をめぐる闘争をしていたのである。教養ある人々の間では一時期、荘厳ではあるが到達できない崇高さを説き、愛情の支えや来世の希望、宗教の慰めを軽んじる冷淡なストア派が優勢だった。それはただ時代の宗教的欲求に対して明らかに不適切になったとき、その高貴で最も実り多い経歴を終えただけのことである。他の階級では宗

教に次ぐ宗教が征服の道を歩んでいた。ユダヤ人はさまざまな原因によってローマの臣民の中でも最も嫌われ、その宗教は強烈な民族的性格から布教には特に適さないものと思われていたが、一神教、慈善、悪魔払いの力がモーゼの信仰を遠く広く流布した。王妃ポツパエア（*サビナ、AD30—65）はユダヤ教改宗者だったと言われている。ユダヤ教の儀式に対するローマ女性の情熱は、ウエナリスが苦言を呈したものの一つだった。安息日とユダヤ教の断食はすべての大都市において見慣れた現実になり、ユダヤ教の律法の古さが熱心に議論されるようになった。他の東洋の宗教はさらに成功を収めた。ミスラ、そして何よりもエジプトの神々への崇拜は何千もの人々を魅了した。そして三世紀以上にわたって、ローマの文献にはその進展についての言及が溢れている。ボナ・デア（*ローマ神話の豊穰、治癒、処女性の女神）の秘儀、イシスへの厳粛な礼拝、罪を犯した魂を清める罪滅ぼしの儀式は大変な熱狂的興奮を巻き起こした。ローマの女性たちが冬の夜明けにテヴェレ川の氷を割ってその聖なる流れに三回飛び込み、罪の償いのためにタルキニウスの野原（*イシス神殿があった）を血だらけの膝を引きずって歩き、女神の声を聞いたとうっとり夢想し、イシス神殿の聖水を手に入れるためのエジプトへの巡礼を引き受けることを申し出た、とウエナリスは書いている。彼女の行列の重々しい威厳と、それが最も放縦な人々や最も懐疑的な人々をも魅了することをアプレイウスは生き生きと描写している。コンモドウス帝（*在位AD180—192）、カラカラ、ヘリオガバルスはそれを情熱的に崇拜していた。イシスとセラピスの神殿、そしてミスラの像はローマ芸術の最後の傑出した作品である。他にもあらゆる形で同様の軽信が表れてい

た。沈黙していた神託は再開し、占星術師はすべての都市に群をなし、哲学者は伝説的な雰囲気に包まれ、ピタゴラス派は軽信を体系にまで高めていた。四方八方で、歴史上類を見ないほどに、人々はもはや古い地域宗教に満足せず、信念を渴望して、情熱的に、せわしなく新しい信仰を探し求めていた。

このような動きの中でキリスト教が優位に立った。そして、その勝因を探すために迷うことはないだろう。このような環境下で、これほど多くの異なる力と吸引力を併せ持つ宗教は他になかった。ユダヤ教とは違ってこの宗教には地域的なしがらみがなく、あらゆる国民とあらゆる階級に等しく適応していた。ストア派とは違って、最も強い方法で愛情に訴え、共感的な礼拝の魅力をすべて提供していた。エジプトの宗教とは違って、純粹で高貴な倫理体系を独特の教えと一体化させ、それを行動で実現できることを証明した。また社会的、国家的な広大な融合の動きの中で、人類の普遍的な兄弟愛を宣言していた。哲学と文明の軟化の中で、愛の至高の神聖さを説いた。ローマの宗教生活にこれまで大きな影響を及ぼしたことがなかった奴隷にとつて、それは苦しみ、抑圧された人々の宗教だった。驚異を渴望する世界に、アポロニウスのそれよりも不思議に満ちた歴史を提供した。ユダヤ人やカルデア人がその悪魔祓い師に敵うことはほとんどなく、その信者の間では絶え間なく奇跡の伝説が流布していたのである。政治的な崩壊を深く意識し、未来を熱心に、不安の中以探し求めていた世界に対して、それは地球を即時に破壊するぞくぞくするような力―すべての味

方の栄光とすべての敵の天罰―を宣言した。カトーが描き、ルカヌスが歌った、冷たくて情熱のない壮大さにうんざりしていた世界に対して、それは哀れみと愛の理想を提示した―友人の墓のそばで泣くことができ、私たちの弱さに心を動かされる指導者像である。要するに敵対する信条や相反する哲学に気を取られていた世界に対して、それは自らの教義を理性よりも信仰によって証明された、人間的な思索ではない、神の啓示として教えたのである。「人は心で信じて義とされる（*ローマ人への手紙10・10）」、「神のみこころを行う者であれば、この教えが神からのものかどうか分かるであろう。（ヨハネの福音書7・17）」、「信じなければ理解できない」、「生まれながらのキリスト教徒」、「心は神学者を作る」、これらはキリスト教が世界に与えた最初の作用を最もよく表しているフレーズである。すべての偉大な宗教がそうであるように、この宗教もまた、思考よりも感覚の流儀を重んじるものだった。その成功の主な原因は、その教えが人間の精神的な性質に合致していたことだった。その時代の道徳的感情に忠実だったからこそ、人々がそのとき向かっていた最高の卓越の型を忠実に表現していたからこそ、彼らの宗教的欲求、目的、感情に一致していたからこそ、全ての霊的存在がその影響下で拡張し展開し得たからこそ、それは人々の心に深く根を下ろしたのである。

これらすべての魅力的な要素に、さらに別の種類の要素をつけ加えなければならぬ。キリスト教は単に道徳的な影響や見解の体系、歴史的な記録、あるいは不思議な働きをする人々の集まりで

はなかつた。それは明確で精巧かつ巧みに組織された制度であり、孤立した、統制のとれていない指導者たちが決して太刀打ちできないような重みと安定性を持っていた。そして世界でも例がないほどに、愛国者が自分の国にするのと同じような、その共同の利益に対する熱心な献身を呼び起こしたのである。異教徒の崇拜のさまざまな形態はその性質上、柔軟なものであった。それぞれが特定の利益や精神的な満足を提供していた。しかしすべてが一緒に存在してはならない理由はなく、あるものに参加することは決して他のものを軽んじることを意味しなかった。しかしキリスト教は明らかに排他的だった。その信者は周囲の信仰をダイモーンの所産として嫌悪し、忌避し、自らはそれらを消滅させるためにこの世に存在していると考えなければならぬのだった。それゆえ、この世で目撃されたどのようなものとも全く異なる、厳しく、攻撃的で、同時に規律のある熱意が生まれたのである。公的な礼拝の義務、キリストの戦士の誓いを意味する秘跡、教会員の感覚を強める断食や懺悔や記念日、人生の最も厳肅な重大事への宗教の介入などが、その支持に一役買った。とりわけ、そのとき初めて世界に閃いた信仰による救済の教義、すなわちキリスト教はその信者に永遠の幸福を開き、その困いの外の者は永遠の拷問の運命にあるという、非常に鮮やかで目新しい信仰はおそらく想像もつかないほどに強力な行動の動機になったのである。それは希望と恐怖の最も粗雑な和音と、慈悲と愛の最も精細な和音を同じように鳴らしたのである。キリスト教が真実である可能性を認めていた多神教徒は、単なる用心深さゆえの打算からそれを受け入れるようになった。熱心なキリスト教徒は自分の愛する人々をその困いの中に引き入れるために、どんな苦しみも

いとわなくなつた。また、他の誘因も必要だつた。証聖者（*信仰のために迫害された者）には教会において、司教ですら主張できないような偉大で由緒ある権威が与えられた。殉教者は天国の果実のほかに、地上において最高の栄光を得た。その血塗られた冠を勝ち取ることによって、最も卑しいキリスト教徒の奴隷はデキウスやレグルスのような輝かしい名声を得ることができたのである。彼の遺体は豪壮華麗に安置され、遺物は防腐処理され、あるいは祀られ、ほとんど偶像崇拜的ともいえる敬意をもって崇め奉られた。教会では彼の来世での誕生を記念する日が祝われ、聖人たちの大集会では彼の英雄的な苦難が語られた。実際、彼が羨まれないはずがなかった。彼は永遠の至福へと旅立つたのである。地上には永遠に名が残つた。生涯の罪は「血の洗礼」によって一瞬にして消し去られた。

英雄的な熱狂はある種の自然条件から生まれるものであると認識することに慣れている人なら、私が説明したような環境下で、超越的な勇気が呼び起こされたことを理解するのに何の困難もないだろう。人々は本当に死を愛しているようだった。聖イグナテリオス（*アンテリオキアの、AD 35—107）は、自分たちが「神の小麦」である信じ、「野獣の齒で挽かれてキリストの純粹なパンになる！」日を待ち望んでいたのである。この燃える熱狂の下ですべての地上の愛の絆はプツリと断ち切られた。少年時代のオリゲネスは迫害者に身体を差し出そうとして力づくで阻止された。そこで彼は投獄されていた父（*レオニデス、後に殉教）に手紙を書いた。家族に彼の決意に

介入してそれを押さえつけたり、彼が自分の血で信仰を証明することを邪魔させたりしないようにして欲しいと懇願したのである。聖ペルペトゥア（*AD180—203）は一人娘で二十二歳の若い母親だったが、キリスト教の信仰を受け入れ、裁判官の前でそれを告白し、そのためには殉教する用意があると宣言していた。父親は何度も何度も苦悩の激発の中で彼女のところに来て、自分の晩年の喜びと慰めを奪わないでくれ、と懇願した。彼は自分が彼女に注いだ優しさの思い出—幼い子供—間もなく悲しみのうちに墓場へ運ばれていく自分の白髪について訴えかけたのである。その時、彼は親としての威厳を忘れ、我が子の前に膝をつき、両手にキスをし、目から涙を流して、彼女に慈悲を懇願した。彼女は心を動かされなかつたわけではなかつたが揺るがなかつた。彼女は悲しみに狂乱した父親が法廷の前から引きずり出され、白い髭を引き裂き、心を打ち砕かれ、疲れきって牢獄の床に伏しているのを見た。彼女はより愛する信仰のために死へと赴いた—父親との永遠の別れを命じた信仰である。殉教への願望は時に絶対的な狂気、一種の自殺の流行となり、教会の指導者たちは信者が迫害者の手に身を委ねるのを防ぐためにあらゆる権威を行使する必要があることに気づいた。あるアジアの小さな町で、全住民が総督のもとに集まって自分たちはキリスト教徒であると宣言し、皇帝の布告を実行して殉教の特権を与えてくれるよう懇願したことをテルトゥリアヌスは記している。困惑した役人は、そんなに人生に疲れたのなら、絶壁やロープでそれを終わらせることはできないのかと尋ねた。そして少数の嘆願者を死刑にし、残りを解散させた。二人の著名な異教徒のモラリストと一人の冒瀆的な異教徒の風刺作家が、この情熱に最も不愉快な軽蔑

を込めて触れている。エピクテトスは言った「狂気によって、またガリラヤ人のように習慣によって死を軽視する者がいる。」「よく準備されている心とはどのようなものだろうか？消えるにしろ、散り散りになるにしろ、持続するにしろ、体から出て行く必要があるのなら。―キリスト教徒に見られるような純粋な頑固さではなく、深い思慮によって準備されたものであるべきである。」ルキアノスはキリスト教徒について言った「この哀れな者たちは自分は不死で永遠に生きられると信じ込んでいる。だから彼らは死を軽んじており、自ら進んで殺されに行くのである。」

「私はあなた方に対して、あなた方が快樂に貪欲であるのと同様に、死に貪欲な者たちを送り込む。」この言葉は後日、イスラムの首領がシリアの墮落したキリスト教徒に語りかけたもので、彼の勝利の予告であり説明だった。この言葉は初期のキリスト教指導者が異教徒の敵に対して使ったと同じように適切だったかもしれない。キリスト教徒と異教徒の熱意はその程度も種類も異なっていた。コンスタンティヌスがキリスト教を国教にしたとき、その信奉者はローマでは少数派に過ぎなかったと思われる。テオドシウス（*1世、在位AD379―395）の時代でさえ、元老院はまだ異教と結びついていた。それでもコンスタンティヌスの措置は当然かつ必要なものだった。多数派は確固たる信念もなく、道徳的熱意もなく、明確な組織もなく、抵抗や攻撃の英雄的行為を鼓舞するような原理も持ち合わせてはいなかった。少数派はその熱意を純化し、鍛え、維持できる、あらゆる動機によって活性化された密集方陣をつくっていた。一旦キリスト教徒が無視できない地位

を獲得すると、その運命はシンプルなものだった。押し潰されるか、君臨するか。デイオクレティアヌスの迫害の失敗は不可避的に彼らを王座に就かせた。

ローマ帝国の改宗は、奇跡や人間の本性の通常の原理の停止という性質からはほど遠く、記録されている大きな運動の中で、原因と結果がこれほど明らかに一致するものはほとんどない、と確信を持って断言できるだろう。歴史の明らかな例外は少なくないが、それは別の方面で見られることである。ギリシャの国々の狭い領域とわずかな人口の中で、哲学、叙事詩、劇詩、抒情詩、文章と口語の雄弁、政治手腕、彫刻、絵画、そしておそらく音楽の分野でほとんど、あるいは完全に人間の完成の領域に到達し、考えうるほぼすべての天才が生まれたこと―他のすべての信仰の下では粗野で物質的な崇拜が不可避なことが証明されている知的環境において、ムハンマドの信仰は広大な人口に採用されても、その純粹な一神教とあらゆる偶像崇拜の排除を守り続けたこと。これらの事実はいづれも非常に不完全にしか説明できない。氣候、さらに政治的、社会的、知的な習慣や制度を考慮すれば、前者の困難は緩和されるかもしれないし、ムハンマドが美術に対して取った態度は、後者の困難の部分的な説明になるかもしれない。しかしそれらすべてを語ったとしても、ほとんど人は非常に例外的で驚くべき現象に直面していると感ずるのではないだろうか？ユダヤにおけるキリスト教の最初の興隆は本書が扱うものとはまったく別の問題である。私たちが検証するのはローマ帝国におけるキリスト教のその後の動きだけである。この運動について道德的あるいは知的な

奇跡を想定することはまったく無益である、と大胆に言い切つて良いだろう。宗教的な転換がこれほどまで明らかに不可避だったことは、かつてなかった。その本質的な卓越性からも、時代の特別な要請に明らかに適合していたことから、キリスト教ほど多くの魅力を兼ね備えた宗教は他になかった。その成功の大きな原因の一つは他のどの信仰よりも英雄的行為を生み出し、より多くの高潔な人々を作り出したことである。しかし、それはまさに予想されていたことだった。

しかし、ローマにおけるキリスト教の勝利は当然説明のできない（*奇跡的な）ものであると主張する人々は、キリスト教が遭遇しなければならなかった迫害を指摘してこの推論に反駁する。この問題は数多くの誤解を受けている。また後の迫害（*キリスト教側が行つた迫害）との関連において極めて重要であるため、簡単に論じる必要があるだろう。

支配者がある宗教的崇拜や見解を力づくで抑圧する理由が非常に多様なことは明らかである。直接または間接的に不道徳を生み出すという道徳的な理由、それが神に対して侮辱的であるという宗教的な理由、あるいは国家や政府にとって有害であるという政治的な理由、怨嗟や欲望の満足という腐敗した理由などによって彼はそれを行うだろう。したがって宗教的迫害という単純な事実から、迫害者の主義主張をすぐに推測することはできない。しかし上記の動機のうちどのれが、あるいはそれらのどの組み合わせが迫害者を動かしたのかを詳細に調べる必要がある。

さて、キリスト教司祭の教唆による迫害は、他のすべての迫害とは大きく異なっていた。それははるかに持続的で、組織的で、断固たるものだった。それは単なる崇拜行為だけでなく、思索的な見解にも向けられていた。それは単なる権利ではなく、義務として支持されていた。それは神学の書物全体において、特に敬虔な階級にも、最も対立していた宗派にも主張された。そしてそれは神学の教義の大部分とともに、常に衰退してきたのである。

私は別の機会にキリスト教徒が行った迫害の歴史を詳細に調べた。そして例外的な原因が時折発生することは間違いないにしても、圧倒的多数の場合、それは単に受け入れられた神学のある部分の自然で、正当で、不可避の結果であることを示そうと努力した。その部分とは、正しい神学的見解が救済に不可欠である、そして神学上の誤りは必ず罪を意味する、という教義である。キリスト教徒の迫害者がもたらしたほとんどすべての苦しみ、彼らが人類の進歩の道筋に置いた障害のほとんどすべてがこの二つの意見に遡れることは明らかだろう。これらの苦しみは、迷信はしばしば悪徳よりも大きな呪いではないことが証明されなかっただろうか、またその障害は、神学の影響の縮小は知的進歩の最善の手段であると同時に不可欠の条件にならなかつただろうか、ということが合理的に問われるほどに痛烈なものだった。このような原理を完全に身につけた人間が迫害を躊躇する原因になるのは、自分の意見が間違っているかもしれないという考えだけである。しかしそれは信

仰の神学の力によって排除された。すなわち、他のいかなるものを含んでいようと、少なくともこの信仰には絶対的で完全な確実性があることを示唆し、そしてすべての疑いを、それゆえ疑いに起因するすべての行いを罪とみなすよう信者たちを導いた力である。

キリスト教側の迫害のこの一般的な動機には二つの補助的な力が加わっているだろうことを私は既に示した。神学的倫理観の大部分は、その中で概して記録上最も冷酷で悲惨なものだった宗教的虐殺を神の直接の命令とし、その中で偶像崇拜を力で抑圧する義務を道徳律のどの条項よりも強調し、その中で不寛容の精神を最も雄弁に情熱的に説いた書物（*旧約聖書）に由来するものだった。加えて、神学者たちが不信心者を待ち受けていると述べた運命はあまりに悲惨で、あまりに恐ろしいものだったため、誤りを撲滅するための地上の苦しみを強調するのは、ほとんど子供じみたことになってしまった。

これらがキリスト教による迫害の大部分を引き起こした真の原因であることは歴史上最も確かであると同時に、最も重要な事実の一つであると私は信じている。詳細な証拠については、私が別のところに書いたものを参照していただくしかない。しかし、この証明はこのような問題において要求されるあらゆる種類の証拠を組み合わせたものであることをここに記しておく。これらの原理が当然人を迫害へと導くことは明らかである。コンスタンティヌスの時代から、合理的精神が司祭

の手から血塗られた剣を奪い取るまで、迫害は一律に擁護されていた―教会が生み出した最も優秀で偉大な人々の、他のほとんどすべての点において異なっていた宗派の、考えうるあらゆる方法でその熱意の純粹さを証明した多くの人々の、長く、博識な、入念な論説によって擁護されていたのである。寛容は根本的教義と非根本的教義の区別から始まって、広教派（*教理、教会組織、典礼などをあまり重視しない教派、17世紀イギリス）の拡大に正確に比例して拡大し、立法者の間で教義への無関心が優勢な感情になって初めて勝利した、と言える。戦いに勝利したとき―つまり教会に対抗して行動する反教義派が迫害を不可能にしたとき―に初めて神学者の大勢はその主張を修正し、その見解ゆえに人を罰することは自分たちの信仰と完全に相容れないことを発見したのである。この喜ばしい、しかしいささか遅すぎた転向の価値について今は触れない。しかし現代の論者の中には、独占的救済の教義が迫害を引き起こすはずがないと主張することに飽き足らず、それが迫害を引き起こしたという明白な歴史的事実に、何世紀にもわたる神学者たちの一致した証言に対して、あえて異議を唱える者たちがいる。キリスト教による迫害の歴史を見てきた人々なら、このことに誰しも極度の驚きを感じざるを得ないだろう。排他的救済を信じていなかった異教徒たちも迫害を行った、したがってその教義が迫害の原因であるはずがない、と彼らは主張する。それに対する答えは、まともな人間なら記録されているすべての迫害を同じ原因から生じたものとは主張しない、ということである。私たちはキリスト教による迫害が、主に私が申し立てた原因から生じたことを、最も明確な証拠によって証明することができる。異教徒による迫害の原因も、異なるもの

ではあるが同様に明白である。私はそれを手短かに示すことにしよう。

それは部分的に政治的であり、部分的に宗教的なものだった。ほとんどの古代国家の政府は、その存在の初期段階において、人々の完全な教育を引き受けていた。着る服や食卓に出る料理までも、社会生活の細部にわたって管理し、統制し、一言で言えば人々の生活全体と性格を一律のタイプに成型すると公言していたのである。したがって国家と関係のない組織や集団、特に外国で始まったものはすべて不信感や反感を持たれていた。またこの反感は宗教的な動機によって大いに強められていた。古代の人々の心に最も深く根付いていたのは幸運や不運は霊的存在の介入によってもたらされ、神聖な儀式を怠れば都市に災いが起こるといふ信仰である。政府の機能が巨大なものになっていたギリシャの小国家には強い不寛容が存在し、しばらくの間それは慣習のみならず著作や言論にも及んでいた。アナクサゴラス、テオドロス（*BC340—250、キュレネ派）、ディアゴラス（*メロスの、BC5世紀）、ステイルポン、ソクラテスの有名な迫害、国内の自由と同様に宗教とも対立したプラトンの「法律（*著作）」、アテネにおける尋問法廷の存在はそれを十分に証明している。しかしギリシャが最終的に滅びるずっと前に、思索の自由特権は完全に達成されていた。エピクロス派と懐疑派の発展が妨げられることはなく、ソクラテスの時代にもアリストパネス（*BC466—385、喜劇詩人）は舞台上で神々を嘲笑することができた。

ローマの初期には宗教は国家の職分と捉えられていた。宗教の主な目的は神々を国政にとってめでたき存在にすることであり、その主要な儀式は元老院の直接の命令で行われた。宗教に関する国家的理論は、その人物にとって最良の宗教は常に自国の宗教である、というものだった。同時に征服された国々の宗教にも最も大きな寛容が示された。ローマ軍はあらゆる神々の神殿を尊重した。ローマ軍は都市を包围する前に、その都市で祀られている神々に祈願するのが慣わしだった。人身御供の抑制が慈悲の行為と考えられ、激しい反乱を鎮圧する必要があると考えられたドルイド教を唯一の例外として、すべての民族宗教の指導者は征服者の干渉を受けなかった。

しかしこの政策は、宗教儀礼がその土着の国で行われている場合にのみ適用されるものだった。帝政時代にイタリアに集まった膨大な数の見知らぬ人々に与えられる自由特権はまた別の問題だった。旧共和国時代には監察官が生活の最も細かい事柄を最も専制的な権限によって規制し、国教が政治や家庭内の処置のあらゆる細部にまで織り込まれていたため、自由特権はほとんど期待できなかった。カルネアデスが同じ命題について賛成と反対の主張を交互に繰り返してローマ人に彼の普遍的な懐疑論を教えようとしたとき、カトーは彼の教えによって人々が墮落しないよう、直ちに元老院に彼の都市からの追放を促した。同じような理由ですべての修辞家は共和国から追放された。私たちに伝えられた同時代のローマの不寛容の極致とも言えるのは、マエケナス（*ガイウス・キルニウス、BC70―8）がオクタウィウス・カエサル（*アウグストゥス帝）が即位する前に与

えたとされる忠告である。「常に、どこでも、自分の国の儀式に従って神々を崇拜し、他の人々にも同じ崇拜を強要しなさい。異国の宗教を持ち込む者を憎しみと罰をもって追及しなさい。それは神々のため―神々を軽んじる者は決して偉大なこととはできない―だけでなく、新しい神々を持ち込む者たちはその多くが外国の法律の使用を唆すからである。それゆえに陰謀、徒党、集会など、均質であるべき帝国には非常に不向きなものが発生するのである。神々を卑下する者も、宗教的なべてん師も容認してはならない。占いは必要である。したがって、腸卜師と鳥卜官はぜひとも続けさせ、望む者には彼らに相談させなさい。しかし魔術師は真実を語ることもあるとは言え、偽りの保証で人を陰謀に駆り立てることがより頻繁であるため、完全に禁止しなければならない。」

この印象的な一節は、古代において一部の人々の間で不寛容の精神がどの程度まで浸透していたということ、またそれを生み出した混合的動機を非常に明確に示している。しかし、これを帝国の実際の宗教政策の描写と見なすのは大きな間違いである。このことを理解するためには、思索の自由特権と崇拜の自由特権を分けて考える必要がある。

アシニウス・ポッリオ（*ガイウス、BC75―AD4）がローマで最初の公共の図書館を設立したとき、彼はそれを女神リベルタの神殿（*Atrium Libertatis）の中に設置した。文人階級にこのように与えられた教訓は決して忘れ去られることはなかった。世界の歴史の

中で、ローマ帝国ほど思索の自由が完璧だった時代はなかったと思われる。キケロ、セネカ、ルクレティウス、ルキアノスの著作に見られる、あらゆる民間信仰に対する大胆不敵な精査が弾圧を受けたことはなかった。確かに哲学者たちは皇帝の専制政治に熱心に反対してドミティアヌスやウェスパシアヌスに迫害されたが、自分たちのテーマに関しては全く制約を受けなかったのである。ギリシャの論者たちは自国の独立が消滅したとき、知の領域ではギリシャ国家の干渉的な政策に、絶対的な堂々たる自由が取って代わったことで自らを慰めた。その影響下で学派間の対立の激しさは薄れていった。古代のあらゆる思想的対立の中で、後の神学論争の激しさに最も近づいたのは、おそらくストア派とエピクロス派の対立だった。しかし、エピクロスの道徳的善良さを最も強調する証言はその反対派の著作の中にあることは注目に値するだろう。

しかし、宗教儀礼に対するローマの支配者の政策は、意見に対する政策とは非常に異なっており、一見すれば真つ向から対立しているように見えるだろう。キケロが言及した古い法律は新宗教の導入を明確に禁じており、共和制時代や帝政初期の時代には、この法律が施行された例が数多くある。例えばローマ建国紀元326年、深刻な干ばつによって人々は新しい神々に助けを求めるようになったが、元老院はローマの神々以外の崇拜を許さないよう造営官に命じた。ルタティウス（*ガイウス、カトゥルス、BC3世紀の軍人・政治家）は第一次ポエニ戦争の直後、元老院から外国の神々の託宣を求めることを禁じられた。「なぜなら共和国は他国のそれではなく、自国の鳥卜官に従

って運営されるのが正しいと考えられたからである。」と歴史家は述べている。第二次ポエニ戦争の間、近年のある種の革新が元老院の厳しい布告によって禁止された。ローマ建国紀元615年頃、法務官ヒスパルス（*グナエウス・コルネリウス・スキピオ、BC?—176）は、ザバジオスのユピテル（*フリギユアないストラキアの神、ギリシャではディオニュソスやゼウスと同一視される）崇拜を持ち込んだ人々を追放した。パッカスの儀式は下品でスキヤンダラスな猥褻行為を伴っていたため禁止され、執政官は注目すべき演説で、人々に祖先の宗教的方針を復活させるよう呼びかけた。イシスとセラピスの信仰がようやくその地位を確立するまでには、長い闘争と少なくともい迫害があった。この宗教が時に好んだ下劣な不道徳、ローマの生活や伝統の全体的な性格から完全なかけ離れた野蛮で忌まわしい迷信、さらに神職の組織が、それを政府にとって特別に不快な存在にしたのである。最初に弾圧の布告が出されたとき、民衆は自分たちの目に尊く見えた神殿を破壊することをためらった。そして執政官アメリウス・パウルス（*ルキウス、マケドニクス、BC 229—160）は自ら斧を手にして最初の一撃を加えることによってその恐怖を払拭したのである。共和国末期には、エジプト神殿の破壊を命じる布告が出されていた。オクタウィウス（*後のアウグストゥス帝）は若い頃この新しい宗教に好意的だったが、間もなくそれは再び弾圧された。ティベリウス帝の時代には再びこの崇拜が忍び込んできた。しかしイシス神官たちがムンドゥス（*デキウス）という貴族にアヌビス神を装わせて、意中の熱心な女性信者と一夜を共にさせたため、皇帝の命令で神殿は破壊され、像はテヴェレ川に投げ込まれ、神官たちは磔にされ、詐欺師は追放

された。同じ皇帝の下で、ユダヤとエジプトの迷信に侵されたとして四千人がサルデーニャに追放された。彼らは強盗の取り締まりを命じられていた。しかし、同時に独特の軽蔑を込めて、この地の風土が不健康なものであるがゆえに彼らがもし死んだとしても、それは「小さな損失」に過ぎない、と言い添えられた。

このようにかなりの量の宗教的抑圧の措置が見られるものの、これらはもっぱら政策や規律の觀念によって生み出されたものである。国家のために他のあらゆる利益を犠牲にし、世俗の面でも宗教の面でも、国民のタイプの同一性を損ない、軍事的精神の優位と共和国の厳格な統治が作り出した規律を崩壊させうるあらゆる形の革新に抵抗する、あの激しい民族精神がこれらの措置を生み出したのである。また道徳的スキヤンダルの結果のこともあった。しかし共和国の国内政策が帝国に適していないことが明らかになると、支配者たちは率直にその変化を受け入れた。テイベリウスの時代から、キリスト教徒を唯一の例外として、ローマではすべての宗教の信徒に完全な信仰の自由特権が認められていたようである。たった一つの例外を除いて、世界中のすべての宗教が「聖都」で堂々と頭をもたげていた。

しかし外国の宗教を信仰し、実践する自由特権は、ローマ人が自分の国の犠牲やその他の宗教的儀式を行う義務を免除するものではなかった。異教徒による迫害と入り混じった宗教的狂信がここ

で發揮されたのである。エウセビオス（*カエサレアの、AD263—339）によれば、ローマ人の宗教は三つに分かれていたとのである——神話や詩人から受け継いだ伝説、これらの伝説を哲学者が合理化し、濾過し、説明しようとした解釈や理論、そして儀式や公式の宗教行事である。最初の二つの領域では完全な自由特権が与えられたが、儀式は政府の管理下に置かれ、強制の対象とされた。これを支えた感覚の強さを理解するためには、帝国の興廃は主に国の神々の歓心を買う熱心さや冷淡さに左右されると多数の人々が固く信じていたこと、また前章で述べたように、哲学者たちはほとんどの場合、公式の儀式を実践するだけでなく熱く擁護していたということを思い起こさなければならぬ。異教徒の哲学者の間では、さまざまな形の真理への愛がそれまでになかったほど發揮されていた。しかしその中の一つの形はまったく知られていなかった。人が宗教的な問題において嘘をついたり、自分が根拠のない迷信とみなしているものを自らの存在と模範によって是認したりすることは間違っている、という信念は古代の倫理には存在しなかった。多神教がもともと持っていた宗教的柔軟性、すべての階級に浸透していた強い政治的感覚、さらに哲学を無知な者の信条とすることは明らかに不可能だったことから、哲学者たちの間ではしばしば表明されるものの、一般に向けて公言されることは稀な（*本音と建て前の）感覚がほぼ普遍的なものになってきた。人々の宗教的意見は彼らの宗教的実践にほとんど影響を与えず、懷疑論者は自国の行事に参加することを合法であるだけでなく、義務であると考えていた。キケロほど古代の迷信をばらまいた人物はいない。キケロ自身が卜占官であり、国の儀式を遵守する義務を強く主張していた。セネ

力は最も嘲笑的な言葉で民間信仰の不条理を語り、その列挙の最後に「賢者はこれらすべてを、神々に喜ばれるものとしてではなく、法によって命じられたものとして遵守する、」そして「その礼拝は信仰によるものではなく、習慣によるものであることを忘れてはならない。」と宣言している。その厳格な信条が最も純粹な一神教にまで達しているエピクテトスは基本的な宗教的行動原理として、すべての人はその信心を「自分の国の習慣に合わせる」べきであると教えている。それを拒んでいたユダヤ教徒とキリスト教徒だけが、異教徒の世界には知られていなかった道德的原理の代表者だった。

また皇帝を神格化する東洋の習慣がローマに伝わり、皇帝の像の前で香をたくことが一種の忠誠心の証となっていたことも忘れてはならない。実際この崇拜は特定の信念を意味していたようには見えない。そしてほとんどの人々は私たちが君主に使う「神聖な尊厳」という言葉や、その前で跪く習慣を妥当なものを見なすのと同様、それを妥当なものを見なしていたようである。しかし、これはキリスト教と相容れないものとみなされた。そしてキリスト教徒がこれに従うことを良心的に拒否したことがある感情を引き起こした。それは裁判所に従うことを拒否したクエーカー教徒（*17世紀）がキリスト教世界で長い間引き起こしてきたものに似ていた。

偶像崇拜の宗教的儀式を行う義務が厳格に執行されたなら、ユダヤ人とキリスト教徒は完全に排

斥されていたことだろう。しかし、この理由によってユダヤ人が迫害されたことはなかったようである。ユダヤ人はローマに大きく影響力のあるコロニーを形成していた。彼らは異教徒の中にあつて、その排他的な習慣を衰えさせることなく、偶像崇拜者との宗教的な交わりをすべて拒否するだけでなく、ほとんどの社交を拒否し、街に独自の区域を占め、彼らの独自の儀式を熱心実践していたのである。しかし彼らは普段はまったく野放しであつて、その暴動などの行為が支配者の注意を引いたときのみ取り締まられた。政府は彼らの宗教に反する行為の強制とは程遠かつた。アウグストゥスは彼らが分け前を失うか、安息日を破るかという選択を迫られないように、小麦の分配の日をわざわざ変更したのである。

このようにかつての共和国の不寛容は帝国ではほとんど消滅したと言つていいほどに修正されていた。思索や議論の自由特権は全く制限されなかつた。外国の宗教儀式を行う自由特権は表向き無認可の宗教に対する法律で制限されていたが、それでもティベリウス以降は安全だつた。公的な国の儀式を回避する自由特権はより不安定ではあつたが、偶像崇拜に対する警戒心がキリスト教徒のそれに劣らないユダヤ人には完全に認められていた。今や前者に向けられた並外れた熱狂と反感の原因は何だったのかを私たちは考察する必要がある。

キリスト教迫害の最初の原因は先に述べたような宗教的観念だつた。私たちの世界は神の介入の

個別の働きによって支配されている、その結果としての物理的、軍事的、政治的な全ての大災害は罰または警告とみなすことができる、という信念が古代の宗教制度全体の基礎になっていた。共和時代には飢饉、疫病、干ばつが起こるたびに、宗教的儀式が徹底的に調査され、どのような不規則性や怠慢が神の怒りを引き起こしたかが確認された。また、その不品行が国家の災いを引き起こしたと信じられたためにウエスタの処女が死刑に処せられた例が二件記録されている。一見すると、このような信仰が自然に生み出す狂信はキリスト教徒と同様にユダヤ教徒に対しても強く向けられそうに見える。しかし少し考えればその違いを説明することは十分に可能だろう。ユダヤ教は本質的に保守的であり、拡張的ではなかった。東洋の宗教に熱中するあまり、ローマ人の多くがその儀式を行うようになったが、この宗派には布教の精神はなかった。そして排他的なこの宗教に従った者はほとんどすべてがヘブライ民族だったと思われる。一方、キリスト教徒は熱心な宣教師だった。彼らの大部分は古い神々への忠誠を捨てたローマ人だった。その活動は非常に活発で、非常に早い時期から、いくつかの地方では神殿がほぼ廃墟と化していたほどだった。またユダヤ人は周囲の宗教を単に忌避し、軽蔑していただけだった。キリスト教徒はこれらをダイモーンの崇拜と糾弾し、侮辱する機会を決して逃さなかった。したがって大きな災害が起こるのはすべて神々の敵のせいである、と民衆が固く信じていたとしても驚くには当たらない。テルトゥリアヌスは言っている「テヴェレ川が城壁の手前で干上がってしまえば、あるいはナイル川が野に溢れなければ、天が雨を拒めば、大地が揺れれば、飢饉と疫病が国を荒らせば、直ちに『キリスト教徒を獅子に』との叫び声

が上がる。」ローマでは「雨が降らない―キリスト教徒が原因だ」という格言が流行っていた。地震はその独特の恐ろしさと、無知な人々にとっての神秘的な性質から、迷信の歴史の中で非常に大きな役割を果たしてきたが、アジア属州では頻繁に起こる恐ろしいものだった。そしてキリスト教徒迫害の三、四の例は明らかにそれが生み出した狂信によるものだったことが見て取れる。

様々な教会の発展を交互に助けたり、妨げたりしたこの信念の効果は教会史の中で最も興味深いものである。キリスト教の歴史の最初の三世紀において、それは信仰が経験した恐るべき苦しみの原因だった。しかし、その時でさえキリスト教徒はその適用に関しては違っていたものの、通常は敵対者の説を受け入れていた。テルトゥリアヌスやキプリアヌス（*カルヒノドス、AD200―258、カルタゴ司教）は、この災難は偶像崇拜に対する神の怒りによるものであり、真理の迫害に対する復讐のためであると強く主張した。キリスト教信仰に敵対して恐ろしい死を遂げた人物が早くから収集され、その死は神の罰であると宣告された。最初のキリスト教皇帝（*コンスタンティヌス1世）の権力を確立した勝利（*ニカイア公会議、AD325）とアリウス（*AD250―336）の突然の死は、その後キリスト教の真実とアリウス主義の偽りを証明する決定的なものと受け止められた。しかし、やがて帝国崩壊の明白な兆候が異教徒の熱意を蘇らせた。彼らは自分たちの古来の神々への忘恩を非難し始め、国の災難を侮辱された天による復讐と捉えたのである。勝利の祭壇が元老院から軽蔑的に撤去されたとき、ウェスタの処女の聖職者団が解散（*AD29

4) されたとき、とりわけアラリック (*AD 375-410) の軍隊が帝都を包囲 (*AD 408) したとき、怒りの眩きが沸き起こってキリスト教徒が勝利に酔うのを妨げた。神学者たちの立場は、その後いくらか変わった。聖アンブロジウスは国家の衰退はウエスタの処女の解散に起因するという説を最も容赦ない合理主義で批判し、その経緯をすべて辿り、その不条理をすべて暴露した。オロシウス (*パウルス、AD 375-420) は、改宗前の帝国にも大きな災難が降りかかっていたことを証明するために歴史書を書いた。サルウィアヌス (*AD 5世紀) は蛮族の侵入はキリスト教徒の不道徳に対する神の裁きであることを証明するために神意に関する論文を著した。聖アウグスティヌスはアラリックの侵略の影響の下で書かれた大作にその才能のすべてを集中させ、「神の都」は地上になく、それゆえキリスト教徒は帝国の没落に動揺する必要はないことを証明しようとした。大聖グレゴリウス (*AD 540-604) はイタリアの災難は世界の滅亡を予感させる警告である、と絶えず主張していた。ローマが蛮族の前について沈んだとき、現世の成功は神の恩恵の証であるという教義はついに捨て去られなければならないかのように思われた。しかしキリスト教の聖職者たちは彼らの大義を破滅した帝国のそれから解き放ち、その没落を予言の成就と神の裁きであると宣言し、聖職の威厳をもって蛮族の征服者に立ちはだかつて、まさにその勝利の瞬間に彼らを征服したのであった。未開の部族の改宗においては特別な介入という教義が重要な位置を占めていた。ブルグント族はフン族に敗れたとき、最後の手段として最も強力であると漠然と信じていたローマの神の保護下に入ることを決意し、その結果として全国民がキリスト教を信仰す

るようになった。クローヴィス（*1世、フランク王国初代国王、AD466―711）は大きな戦いの重要な瞬間に妻の神の助けを求めた。戦いに勝利して、彼は何千人ものフランク人と共にこの信仰へと改宗した。イングランドではノーサンブリア（*北東部）の改宗は部分的だった。またマーシャ（*中央部）の改宗は主に神の介在がキリスト教王の勝利を確保したと信じられたためだった。あるブルガリアの小君主は疫病の恐怖から信仰へと駆り立てられ、たちまち臣民の改宗を実現させた。ムハンマドの信奉者たちによる多くの聖堂の破壊やキリスト教の軍隊の敗北、教会のあらゆる祝福に守られて出征した十字軍の悲惨で不名誉な転覆も、この信仰を損なうことはできなかった。中世の間ずっと、そして中世が過ぎ去った後の何世紀の間、あらゆる驚くべき大災害は、罰、警告、または世界の終末が近づいていることとしるしと見なされた。教会や修道院が建てられた。宗教的共同体が設立された。懺悔が行われた。ユダヤ人は虐殺された。また人々が運命のあらゆる変遷や自然のあらゆる異変を神学者による論争と結びつけようとした理論の一覧表は長いものになるだろう。例えばこういった例である。聖アンブロジウスはマクシムス帝（*在位AD383―388・西ローマ皇帝）の死は、キリスト教徒が破壊したユダヤ教のシナゴグを彼らに強制的に建て直させた罪の結果である、と自信満々で断言した。ユステイニアヌス法典（*AD534）の中にはユダヤ人、サマリア人、異教徒に敵対的な法律があって、その昔、異教徒がしばしばキリスト教徒のせいにしていた農産物の不作をはっきりと彼らのせいになっている。聖像破壊運動による迫害の初期（*AD726、東ローマ皇帝レオン3世が聖像禁止令発布）に起こった火山の噴火

(*AD726、ギリシャのサントリーニ島が噴火)は、ある一派によれば皇帝の聖像に対する敵意が、他の一派によれば偶像崇拜の撲滅をためらう罪深い皇帝が、神を怒らせたことの明確な証拠として持ち出された。後年ボダン(*ジャン、1530—1596)はサン・バルテルミの虐殺(*1572)を命じた君主(*シャルル9世、1550—1574)が早く死んだのは、その治世に犯した最大の罪のせいであると考えた。彼はある有名な魔術師の命を助けたのである。(*ボダンは異端審問所の裁判官であり、*Dela demonomanie des sorciers* “魔術師の悪魔狂”という著作がある)宗教改革に続く闘争の中でも自然災害は異端や教皇の、ある時代には黙認、別の時代には寄付金に起因するものとされ続けた。しかしある時代には劇場が、またある時代には自由思想家の著作がその原因であるとされた。しかしこうした考え方は次第にそしてほとんど無意識のうちに消えていった。古い言い回しはよく聞かれるが、もはや実感されることも実施されることもなくなった。そして世界の歴史に大きな役割を果たした(*災害は神の怒りであるという)この教義は人類の行動に目に見えるような影響を与えることはなくなったのである。

この宗教的動機は主に下層の人々に作用したが、その上キリスト教を教養ある人々にとって不愉快なものにする政治的動機があった。教会は広大で高度に組織化されており、多くの点で秘密結社を構成しており、明らかに違法であるだけでなく、政府の不安を最高度に煽って然るべきものだった。反乱の核になる可能性があるすべての団体の弾圧は帝国の政策の中でも最も頑強に支持されて

いた。この政策がどこまで実行されていたかはトラヤヌスがプリニウスに宛てた書簡に驚くほど表れている。消防士たちは彼らが提携して会合を開くという理由で組合を作ることさえ禁じられたのである。こうした感覚の中で、無数の教団員に支配され、会合や教義のいくつかを薄暗がりで見え隠し、国家に対するものよりも大きな愛着と献身を喚起し、帝国の全域に浸透し、その影響を止めどなく拡大する巨大な団体が存在すれば強い不安を巻き起こすのが当り前である。キリスト教の弁証者たちはそのことを明確に認識していた。しかし彼らは、謀略が絶えない時代に迫害された多数のキリスト教徒が（*国家に対する）不誠実さを見せた例を反対派は一つとして示すことができない、と正しく反論した。受動的服従という彼らの教義をどう捉えようとも、私たちはすべての利益に背を向けてそれにしがみついた節操を称賛しないわけにはいかない。しかし、異教徒たちが新しい共同体を帝国の偉大さにとって致命的なものと思わなかったことはまったく間違っていない。それはローマ帝国を反キリストの現れとみなし、その破壊を熱烈に待ち望む人々たちからなるものだった。それは国家存立の生命線である愛国心に代わる新たな熱狂だった。多くのキリスト教徒は国のために戦うことは間違いであると考えた。彼らは皆、ローマの勝利を勝ち取った、そして差し迫ったローマの破滅を回避する唯一の手段だった誇り高き武勇の熱情と全く矛盾するような人格を指し、そのような希望と動機によって動いていた。

この団体の目的と原理は非常に不完全にしか理解されていなかった。異教徒の中でも最も偉大で

優れた人々はそれを憎むべき迷信と呼んだ。そのメンバーについて語るときに最も頻繁に繰り返された言葉は「人類の敵」または「人類の憎悪者」だった。このような非難が愛の至高性を大原則とし、疑いなくその慈愛において他のどの階級よりもはるかに優れていた人々に対して執拗に向けられたのは、おそらく第一に公共の娯楽をすべて控え、国の勝利を称えて家を灯火で飾ることも門口に花輪をかけることも拒否しなければならぬと考え、同胞とは別の異質の者であることをいくらか見せびらかすような、改宗者たちの非社会性のためだったのだろう。また、それは異教徒の来世の定めに関する一般的なキリスト教の教義に関する知識から生じたのかもしれない。ローマ人がキリスト教徒は自国の英雄や賢人、そして膨大な数の存命中の同胞にどのような定めを科しているかを知り、教会の最も切実な願望の一つは自分が属するかつての栄光の帝国の破壊であると聞かされたなら、その感情が私が引用したような言葉で表現されるのは至って有りうるべきことだった。

一般的な告発に加えてキリスト教徒の道徳に対する最もひどい部類の具体的な告発がなされた。道徳的水準が非常に低かった当時、最も腐敗した人々でさえも嫌悪感を抱くような極悪行為で彼らは告発されたのである。彼らは秘密の集会で常習的に最も放縱な祭りを祝い、人肉を食し、その後、明かりが消されると乱交、特に近親相姦にふけるようになった、とされた。このような告発が執拗に行われたことは、弁証者たちの著作や迫害に関する記述の中でこの告発が非常に重要な位置を占めていることから見ても取れる。今ではこうした告発が全くの虚偽だったことを誰も疑わないだろ

う。教父たちは長きにわたって敵に殉教者の信仰以外の罪が証明された例を一つでも挙げてみよ、と挑むことができた。そしてキリスト教の教義の真実やキリスト教の奇跡の神的起源に疑いがあったとしても、少なくともキリスト教が大勢の人々の人格を変え、新しい情熱によって冷めた心に生氣を与え、最も墮落した人間を救い、改心させ、解放したことに疑いがない、と正当かつ高潔な誇りを持って主張してきたのである。高貴な生、英雄的な死は初期の教会の最高の主張だった。敵もそれを認めることは少なくなかった。初期のキリスト教徒が苦しむ仲間に示した愛はルキアノスによって、彼らの礼拝の美しい簡素さはプリニウスによって、彼らの熱烈な慈愛はユリアヌスによってもっとも強調されて証言された。実際、この状況には別の側面がある。しかしキリスト教徒たちの道徳的水準が大きく低下したときでさえ、それは彼らの周りの社会の水準まで低下したに過ぎなかったのである。

このような中傷は教会の規則によって大いに助長された。教会は洗礼を受けていない者に対し、より神秘的な教義のいくつかを一切知らせず、少なくともその儀式の一つを非常に不明瞭に隠していたのである。洗礼を受けたキリスト者以外は立ち入ることができず、聖職者にも受洗者や世間への説明が許されていなかった聖餐式の性質に関する漠然とした噂が、おそらく人肉食の告発の起源となったのだろう。一方、アガペスなわち愛餐会、愛の接吻の儀式、そしてキリスト教徒がキリストにあって一体であり仲間であることを宣言する独特の、異教徒にとってはおそらく理解不能な言

葉は他の告発を喰したのであろう。ユダヤ人に対する同様に根拠のない非難を何世紀にもわたって信じてきた軽信によってその受け入れ易さを説明することができる。また秘密犯罪の立証を非常に困難なものにする極めて不完全な警察制度が中傷の範囲を大きく広げていたことは間違いない。しかし、こうしたことに加えて正統派はいくつかの点で非常に不運だった。異教徒たちの目には彼らはユダヤ人の一派と映った。ユダヤ人は、その絶え間ない暴動、異邦人世界に対する抑えられない憎悪、反乱にしばしば伴う残虐行為のために、早くから異教徒の怒りと軽蔑を買っていたのである。一方、ユダヤ人は律法の放棄を最も凶悪な犯罪とみなし、その愛国心は自国の災難の中でより激しい炎をあげて輝き、キリスト教徒に容赦ない敵意を抱いていた。周囲の人々から軽蔑され、嫌われ、神殿は塵となり、独立の最後の痕跡は破壊されたが、彼は古代の信仰の希望と特権に必死の執拗さでしがみついていた。その目にキリスト教徒は背教者であり裏切り者だった。異邦人の軍隊がエルサレムを包囲し、忠実な人々の軍勢がエルサレムを守るために集まったとき、キリスト教徒のユダヤ人は民族の運命を放棄し、終焉の場面の英雄的行動と苦しみに関与することを一切拒否したのである。イスラエルの色あせた栄光を回復する約束のメシアはすでに来た、長い間一民族が独占していた特権は異邦人世界に渡った、かつて最高に祝福されていた民族は将来にわたって人類の間で呪われることになる、と彼らは宣言した。したがってこの二つの信仰の間に異教徒顔負けの敵意が生まれたとしても驚くにはあたらない。キリスト教徒は打ちひしがれた民衆に降りかかった災難をあまりに歓喜して眺めることによってその苦い杯を何世紀にも渡って満たし、ユダヤ教徒は飽くなき

憎悪とともに中傷によって異教徒の民衆の感情を煽り立てることに勤しんだ。一方、カトリックのキリスト教徒は異端の宗派に迫害の剣を振るうことに極めて意欲的だった。異教徒がキリスト教信者は下劣で淫らな乱行をしていると非難したとき、最初の弁証者はその非難を否定しながらも異端者について「これらの人々が明かりを消し、乱交し、人肉を食べるなどという恥ずべき、途方もない振る舞いをするかどうか、私は知らない。」と注意深く付け加えた。疑いや当てこすりの言葉は、数年後には直接的な断定の言葉に変わった。聖エイレナイオスやアレクサンドリアの聖クレメンスを信じるならば、カルポクラテス（*2世紀頃、アレクサンドリアの学者）の信奉者、マルキオン（*シノベの、AD100—160）派、その他のグノーシス派は秘密の集会で、想像し得る限りの醜悪で奇怪な不浄で淫らな行為に常々興じており、その行為は正統派による迫害の原因の一つだった。教父たちはグノーシス派を非難する際に、異教徒の民衆の最も途方もない告発さえも繰り返した。四世紀の聖エピファニウス（*AD439—496、イタリア、パヴィーア司教）は、その宗派の中には乱交の末に生まれた子供を殺し、香辛料をかけて食べることを習慣とするものがあると断言している。逆に異端は喜んでカトリックを告発した。そしてローマの裁判官はユダヤ教、正統派キリスト教、異端を一つの卑劣な迷信のわずかな改変に過ぎないと考えており、この非難の応酬に自分の先入観の正しさを確信したことは間違いないだろう。

キリスト教徒に対する反感のもう一つの原因は、女性の改宗者が多かったために常に家庭生活に

支障をきたしていたことである。キリスト教の指導者は早くから女性の心の琴線に触れる比類なき技量で注目されていた。後世の魅力的な教皇につけられた「淑女の耳かき」という生々しい称号は、迫害の時代には多くの人々に使われたかもしれない。すべての宗教的な問題において、一家の長の最高権威を家庭内道徳の基礎と考えるローマ人にとって、これほど不名誉で反乱的な性質はないだろう。プルタルコスが異教徒世界の最も深い確信を表明している「妻は夫の友人以外の友人を持つべきではない。神々は友人の筆頭であるため、妻は夫が敬愛する神々以外の神を知るべきではない。彼女にドアを閉じさせ、くだらない宗教や外国の迷信を締め出させよ。夫の知らないところで妻が捧げる犠牲を神が喜ぶはずはない。」しかし異教徒の社会システム全体が拠り所としていたこうした原理は今や無視されるようになった。大勢の妻たちは家を出て、最も深い疑惑の目で見られ、法で禁止された宗派の夜間集会に通うようになった。妻の隣で枕に頭を載せるたび、夫は何度も何度も苦い思いをしたものである。妻の共感はずべて自分から遠ざかっている、妻の愛情は異国の聖職者と異国の信仰のものである、妻は優しく、従順な忠実さで彼女の義務を果たすかもしれないが、自分分は妻の心を動かす力を永遠に失ってしまった―妻にとって自分はこのけ者であり、地獄行きの烙印を押された存在なのだ―と。聖アウグスティヌスが描いた、失意の夫が神々に助けを求め、神託の苦い答えを受け取る姿にはキリスト教徒でさえ深く同情した。曰く「一度迷信に染まった女の心を浄化するよりは、波の上に消えない文字を書くか、空中を飛ばたいて飛ぶ方が容易である。」

私はずでに悪魔祓いの実践が初期の教会で顕著になったこと、より哲学的な異教徒によって軽蔑されたこと、その公言者を取り締まる法律に触れた。この実践はキリスト教徒を教養ある人々の目には低く見せ、民衆の目には高く見せたが、迫害の明らか原因になったとは考えられない。ローマ帝国に侵入してきた迷信の群れの中で、悪魔払いが目立った地位にあった。すべてのそうした実践は大衆に人気があった。帝国において真剣な迫害を受けた唯一の魔術は政治的な占星術、すなわち帝位継承者を探すための占いで、これについてキリスト教徒が非難されたことはなかった。しかし教会に関係する迷信とみなされるものも一つあり、異教徒の哲学者たちはこれにより深い嫌悪感を持っていた。宗教的な恐怖政治で人の心を煽り、未知の世界を恐ろしい苦痛のイメージで満たし、想像力を喚起して理性を支配することは、異教徒の世界では最も凶悪な犯罪の一つだった。古代人にとって、こうした恐怖はまさに迷信の定義であり、その撲滅はエピクロス派とストア派の両方の主な目的だった。このような感情を持つ人々にとって、自分たちの共同体の範囲を超えて、当時世界に存在した全人類に永遠の拷問が用意されると主張し、この教義の主張を主な成功の手段の一つにしていた宗教指導者がどれほど不愉快な存在だったかは容易に理解できるだろう。初期の神学者たちは、信念より探究心を重視することはなく、恐怖より理性に訴えかけることは少なかった。当然ながら、哲学においては最も物分かりが良い体系が、神学においては最も不寛容な体系が最も強いのである。弱い女性、若い人、無知な人、臆病な人、一言で言えば自分の判断力に疑問を持っていたすべての人々のもとに独占的救済の教義は恐るべき力とともに到来したはずである。

他のどの宗教もこのようなことを公言していなかったため、この教義は教会にかけがえのない強力な立場を提供した。そして間違いなく多くの人々を自らの囲いの中に追い込んだのである。この教義は背教者がしばしば見せた恐怖の苦悩にも大いに関係している。（*拷問に屈した）背教者の肉体は目下の拷問を逃れた、しかし克服できなかった弱さは永遠の苦痛によって罰される、と彼は確信していたのである。マルクス・アウレリウスが制定した「迷信的な恐怖によって弱った心を怯えさせるようなことをする者があれば、島流しにする。」という法律は、おそらくこのような教えに対する憤慨に由来するものだろう。

キリスト教会に対する敵意の主因は、当時の教会が見せた不寛容な態度にあったことは疑いようがない。ローマ人は他の宗教を容認したように、どのような形の宗教でも容認する用意があった。ユダヤ人は皇帝に捧げる生け贄を拒否するという点ではキリスト教徒同様に頑固だった。しかし反乱の直後を除いては、ユダヤ教がいかに排他的で非社会的だったとしても、依然として攻撃的ではない民族宗教だったため、ほとんど干渉されることはなかった。しかしキリスト教の指導者たちは自分たちの宗教とユダヤ人の宗教以外のすべての宗教は悪魔によって作られたものであり、自分たちの教会に異を唱える者はすべて滅びなければならぬと説いた。宗教的な興奮を最高潮に高め、あらゆる儀式や神託に際してそこにいるダイモーンの直接の働きを目にしていると思ひ込んだ人々がその熱意を抑え、他人の感情を少しでも尊重することは不可能だった。疲れを知らないエネルギー

―で改宗を進め、国の繁栄はすべてその庇護にかかっていると民衆が信じていた神々に激しい非難と嘲笑を浴びせ、崇拜者を侮辱し、偶像を汚すことが珍しくなかった彼らはたちまち異教の信者たちを激怒させ、帝国に降りかかるすべての災難は（*キリスト教徒の無礼に対する）神々の正当な復讐であると信じ込ませてしまった。また懐疑的な政治家は、帝国の宗教政策と明らかに相容れない宗教の発展になおさら好意を抱かなかつたようである。その目には当時組織されていた新しい教会が本質的に、根本的に、必然的に不寛容に映ったに違いない。それが勝利することを許すなら、世界のすべての主要な国々から成り、そのすべての信条を許容する帝国において、信教の自由特権の消滅を許すことになるのである。苦難の時代、弁証者たちが雄弁な言葉で高らかに迫害の不義と信教の自由の貴重な価値を訴えたことは事実である。しかし、教会が優位に立ったなら、その言葉が非常に違ったものになるのを見抜くのは容易なことだった。異教徒の哲学者は異端審問、アルビ（*カタリ派の虐殺）、またはサン・バルテルミの悲惨な歴史を予見することはできなかった。しかし、キリスト教徒が優勢になったなら悪魔に捧げられたと信じる儀式を決して許さず、彼らが弱かったときにほとんど抑えられなかった宗教的敵意を、権力を握ったときに決して抑えたりしないことに疑いを持たなかった。礼拝者の慟哭の中で偶像と神殿が叩き壊され、先祖の宗教儀式を行う者はすべて死刑になる時があつたという間にやってくることを予見するのに予言的靈感は必要なかった。

迫害の時代のキリスト教徒よりも深く純粋な愛情で互いに結ばれていた共同体は、おそらく地上

に存在したことがないだろう。罪に対処する際に、これほど優しく、これほど賢明な親切さを示し、罪に対する断固たる敵対と罪人に対する無限の慈愛をこれほど幸福に結びつけ、結果として最も悪質な人間を改心させ一変させることに、これほど成功した共同体は、おそらく存在しなかっただろう。しかし、その勝利の後に必然的に生じる不寛容をこれほどはっきりと示した共同体もまた存在しなかったのである。非常に初期の伝承では、使徒ヨハネの三つの逸話が教会のこの三つの側面を忠実に物語っている。それは、大勢のキリスト教徒たちが彼の周りに集まって、彼の口から何か教えを聞こうとしたとき、彼はただ「私の子供たちよ、互いに愛し合いなさい、」としか言わなかった。この中に律法のすべてが含まれている、と言ったのである。この使徒は、ある司教に預けた若者が悪に染まって強盗団の頭目になったと聞いて、指導者の怠慢を激しく責め、極度の老齢にもかかわらず、山に入ってわざと強盗団に捕まり、涙を流して頭目を抱きしめ、彼を徳の道に引き戻したと言われている。同じ使徒はあるとき自分が入った浴場で異端者ケリントウス（*AD 50—100、グノーシス主義者）を見て、異端者が自分と同じ屋根の下にいたため、屋根が落ちるのを恐れて直ちに駆け出したと言われている。アリュウス派とドナトゥス派（*一度棄教した者の秘跡を無効とする一派）の論争で帝国を動揺させ、後の時代に世界を血で染めたあの激しい憎悪はすべて、コンスタンティヌスの改宗のずっと以前の教会に見出すことができる。二世紀にはすでに、正統派キリスト教徒は破門された者や異端者と会話してはならず、生活の最も普通の礼儀さえ交わしてはならない、という規則があった。ともに（*迫害に）苦しみながらもお互いへの敵意が和らぐことはな

く、生活の最も純粹で好ましい関係は新しい不寛容に汚染された。デキウス帝（*在位249―251）の迫害がほとんど終わらないうちに、聖キプリアヌスは論文を書き、大洪水のときに箱舟の外が救われなかったように、教会の外で救われることはない、殉教にも分派の罪を消し去る力はない、主のために地上で拷問を受けて死んだ異端者は、主の命令により、直ちに地獄に落とされて永遠の苦しみを受ける！と主張した。闘技場においてさえ、カトリックの殉教者たちは死ぬときに異端者たちと一緒にならないように、モンタノス派（*初期教会に戻ろうとする厳格派）のそばを離れたのである。聖アウグステイヌスは後年、彼がマニ教信者だったとき、母親（*聖モニカ）はしばらく道を誤った我が子と同じ食卓を囲むことさえ拒んだと語っている。聖アンブロジウスはユダヤ人の会堂を焼き払ったキリスト教の司教の行為を擁護しただけでなく、政府がその会堂の再建を命じたことを地獄行きの罪として糾弾した。同じ聖人がウエスタの処女（*財産権や高い地位を持つていた）の略奪を主唱し、キリスト教国家が自分の宗教以外の聖職者に寄付を与えることは犯罪であるという、近代の自由主義がそれを拭い去るのに多大な努力を要した教義を主張したとき、彼は初期のキリスト教徒の足跡を辿っていたに過ぎなかったのである。彼らは間接的な形で異教徒の崇拜を黙認していると思われなければならないために月桂冠さえ被らず、最も罪のない市民の祭りにさえ参加しなかった。弁証者たちが異教徒の迫害者に寛容の義務を主張する一方、キリスト教徒に人気のシビュラの託宣（*古代の地中海世界の巫女の託宣をまとめたとされる「シビュラ書」の形式をユダヤ人やキリスト教徒が真似てつくって偽書）には異教徒の神殿の暴力的な破壊への熱い期待が満ちて

いたのである。そして、キリスト教が王座に就くやいなや、これらの予兆になる政策が台頭してきた。一部の支配者の無関心や世俗的な賢さ、そして異教徒の圧倒的な数が、最終的な完成を遅らせたことは間違いないだろう。しかし、コンスタンティヌスの時代から（*異教信仰に）制限的な法律が施行され、聖職者たちの影響力は絶え間なく彼らの利益のために行使され、賢者は異教の礼拝が速やかに絶対的に禁止されることを予期せずにはいられなかった。異教徒の預言者ソシパトラの息子、哲学者アントニヌス（*AD5世紀、エジプト）はある日、弟子たちとともに古代美術の驚異の一つであり、やがてキリスト教修道士の粗野な手によって消滅させられる運命にあったアレクサンドリアのセラピス神殿の前に立っていたと伝えられている。すると母の予言の霊が彼の上に着りてきた。彼は別の神殿（*エルサレム）を前にした別の預言者のように、迫り来る破滅を予言して聴衆を驚かせた。その時、目の前にある栄光の殿堂は倒され、彫られた像は壊され、神々の神殿は死者の墓となり、人類に大きな闇が訪れると彼は言ったのである！

そして信教の自由特権だけでなく、ローマ文明の最高の到達点だった思想と表現の自由特権も危機に瀕していた。新しい宗教は消えつつあった宗教とは違って人々の意見と行動を規定しようとし、その指導者たちは宗教的問題において自分たちの意見から逸脱するあらゆる意見の自由な表明を大それた犯罪と決めつけた。あらゆる自由特権の中で最も長く持続し、最も尊ばれていたのはこの自由だった。コンスタンティヌスの後でも、異教徒のリバニオス（*AD314―392）、テミステ

イウス（*AD317—390）、シンマコス、サルティウス（*サトウルニニウス・セクンダス、AD4世紀）は、彼らの宗教に課せられた制限とは著しく対照的な自由を行使して自分の見解を強く主張した。聖バシレイオス（*カエサリアの、AD330—379）とリバニオス、シュネシオス（*AD370—413、プトレマイス—現リビア北東部—司教）とヒパティア（*AD350—415、新プラトン主義の女性哲学者）との美しい友情は、当時の最も感動的なエピソードの一つである。異教徒の自由と殉教者ユステイノスやオリゲネスの真のカトリシズムの伝統は長く続いたが、誤りが犯罪とみなされ、罰されることは不可避だった。アタナシウスとアウグステイヌスの教条主義、聖職者の力の増大、修道士たちの狂信が、その結末を早めた。テオドシウス（*キリスト教アタナシウス派を国教とした）による一宗教を除くすべての宗教の弾圧、キュリロス（*AD376—444、アレクサンドリア総主教）の配下の修道士によるアレクサンドリアのヒパティアの殺害、ユステイニアヌスによるアテネの学校の閉鎖は、知的自由の決定的な転覆を示す三つの出来事である。この自由が部分的に回復されるまでに、千年の歳月が流れた。

私が簡潔に列挙した事柄はキリスト教の殉教者たちの卓越した勇氣、純粹で、感動的で、神聖な徳に対する称賛をいささかも損なうことはないだろう。しかしそれらは（*異教徒側の）迫害者たちの行為をいくらか酌量するだろう。その中にはかつて玉座にいた中で最も優れた、最も慈愛深い君主だった皇帝（*マルクス・アウレリウスのことと思われる）が一人、そして徳の平均をかな

り上回るはずの君主が少なくとも二人含まれていたのである。それらの事柄（*キリスト教側の不寛容）を円形闘技場の見世物が生んだ人間の苦しみに対する冷淡さや血への渴望と結びつけるなら、迫害を十分に説明できることは間違いない。キリスト教徒側の迫害が独占的救済の教義から生じたことが証明できるなら、その教義を持たなかったローマの異教徒側の迫害も全く当惑すべきものではないことをそれらは示している。ローマ皇帝によるキリスト教迫害は厳しいものだったことは間違いないが、その普及に好都合な広大な道徳的、社会的、知的な働きを完全に打ち消すほど継続的なものではなかったことは、いくつかの時代を見れば分かるだろう。

エジプトの儀式がローマに導入されたとき、迅速かつ精力的な弾圧措置がとられたこと、こうした措置が何度も繰り返されたが、ついには効果がなかったことが判明すると統治者たちは敵対をやめ、新しい宗教を認めたことを私たちは見てきた。政府との関係においてキリスト教の歴史はこれと逆だった。それが最初にローマに紹介されたとき、反対は全くなかったようである。ポンテオ・ピラトからの報告に基づいてティベリウスはキリストをローマの神々に加えることを希望したが元老院はその提案を拒否した、とテルトゥリアヌスは主張している。しかし、この主張は信頼できる証拠によって全く裏付けられておらず、本来極めてあり得ないことなので、今では一般的に間違いとされている。スエトニウスの一節によれば、クラウディウスの時代に「クレストゥス（*キリストを指すという説もある）という人物に扇動されて、絶えず暴動を起こしていたユダヤ人たち」が都市

から追放された。しかしキリスト教の論者は、この治世に彼と同じ宗教を信じる人々が妨害を受けたことを物語っていない。一方すべての論者は完全に一致して、大いに強調して、ネロを最初の迫害者としている。それはキリスト教徒に向けられたものだったが、表向きの理由は宗教ではなく、彼らがローマに火を放ったという濡れ衣だった。そして、それがこの街以外にも広がったかどうかは非常に疑わしい。また、この迫害はキリスト教徒としてではなく、放火犯としてキリスト教徒に向けられたため、背教によって逃れられないという特殊性も持っていた。ローマの城壁の中でそれは猛威を振るった。国家の大合流と古い信仰の崩壊の中で、長年にわたって制限されることなく布教を続けてきたキリスト教徒は恐るべき集団になっていた。タキトゥスによると彼らは非常に人気がなかった。しかしネロが彼らに加えた恐ろしい拷問と、彼らが他にどんな罪を犯していたとしても街に火を放ったりはしていない、という確信ゆえに広く同情された。ある者は野獣の皮を被せられて犬に食いちぎられた。またネロの庭では松脂のシャツを着せられて並べられた者たちが生きのまま焼かれた。十字架にかけられた者たちもいた。大勢の人々が死んだ。この迫害がキリスト教徒の心に与えた深い印象は、直後に生まれたネロを中心人物とするシビュラの文献全般や、この暴君はまだ生きていて反キリストの直接の前兆として再び舞い戻り、教会に最後の大迫害を加えるだろうという何世紀も続いた信仰に表れている。

西暦68年にネロは死んだ。その時から少なくとも二十七年間、教会は絶対的な安息を享受して

いた。ドミティアヌスの治世の最後の年まで、教会の自由が受けたどんなに小さな妨害にも信頼に足る証拠はない。そしてその大胆不敵さを世界に示す驚くべき実例が最近発見された。ネロとドミティアヌスの治世の間に、ローマ近郊で主要な幹線道路のすぐ近くの地上に、キリスト教徒のカタコンベに通じる大きく立派なポーチが建てられていたのである。ドミティアヌスの長い治世はローマ史の中で残忍さでは凌駕されたかもしれないが、専制政治の巧みさと持続性では決して凌駕されたことはなかった。政治的自由の伝統を守り、ウエスパシアヌスの手によってすでに多くの苦しみを味わっていたストア派と文人階級は容赦ない敵意とともに迫害された。メティウス・モデストゥス（*AD82に代理執政官 *consul* *suffectus* になった人物と思われる）、アルレヌス・ルスティクス（*AD35―93）、セネシオ（*ヘレニウス、AD?―93）、ヘルヴィディウス（*プリスカス、ファニアの夫、AD?―79）、ディオオン・クリュストモス、小プリスクス、ユニアス・マウリクス、アルテミドロス（*?）、ユーフラテス（*?）、エピクテトス、アリア（*ファニアの母）、ファニア（*AD?―100）、グラティラ（*?）が殺されるか追放された。しかしキリスト教徒に対しては西暦95年（*ドミティアヌスの治世はAD96年まで）に短期間の、しかも明らかにそれほど厳しくない迫害が行われるまで何の措置もとられなかったようである。しかしこれに関する私たちの情報は乏しく矛盾したものである。この迫害を引き起こした特別な原因については多くの疑問が残されている。エウセビオスがヘゲシッポス（*AD110―180）のあまり信頼できない証拠に基づいて書いたところによると、キリストの弟ユダの孫たちの

存在を聞いた皇帝が、彼らはダビデの家系であり、したがって王位を狙う可能性があるとして、自分の前に連れてくるよう命じた、しかし彼らが単なる田舎者であり、彼らが話していた約束の王国は靈的なものであると知ると平和裏に彼らを解放し、自ら始めた迫害を止めたとのことである。ある異教徒の歴史家は、公の競技への浪費によって帝国の財政が疲弊したため、ドミティアヌスは財政を補うためにユダヤ人に厳しい特別税を課したと述べている。ユダヤ人の中には税を逃れるため自分の信仰を隠した者がおり、またキリスト教徒と思われる者がユダヤ人であると明言されな
いままユダヤ教の儀式に参加していたこともあった。しかし、おそらく最も単純な説明が最も真実であり、迫害はストア派のように自分の政策に抵抗しないまでも、少なくとも自分の支配から完全に離れたところで大きな影響力を行使していた機関に対して、ドミティアヌスのような専制君主が必ず感じたはずの反感に起因するものだろう。このとき聖ヨハネは大変高齢だったがパトモス島に流されたと言われている。皇帝の親族だった執政官フラウィウス・クレメンヌス（*タイタス、AD?—95）は死刑に処された。彼の妻、あるいは別の説では姪のドミテイラは一説ではポンツア島に、別の説ではパンダテリア島に追放され、彼女の流罪に多くの者が同行させられた。また「（*国家公認の神々に対する）不敬虔またはユダヤ人の宗教（*ここではキリスト教のこと）に転向した罪で告発された」多数の人々が告発されたという。ある者は殺され、ある者は公職を追われた。迫害の中止については二つの異なる説がある。テルトゥリアヌスやエウセビオスは、暴君はすぐに勅令を撤回し、追放されていた人々を戻らせたと述べているが、ラクタンティウスによれば、ドミ

ティアヌスの死後までこれらの措置はとられなかった。後者の記述はネルウアが即位すると「不敬虔で訴えられた人々を許し、追放者たちを呼び戻した。」というディオ・カッシウス（*AD163—235）の主張によって裏づけられている。

この迫害が続いた期間が非常に短く、またそれに対する注目度が非常に低いことを考えるならば、それはキリスト教のような強力な宗教運動を目に見えて抑制するほどのものではなかったと結論するのが妥当だろう。ドミティアヌスが暗殺されるとローマ帝国は黄金時代に突入する。異教徒の歴史家の目に映った西暦96年のネルウアの即位から同180年のマルクス・アウレリウスの死までの期間は、一様な善政、急速に進歩する人類、偉大な立法改革、そして平和が深刻に壊れたことがほとんどなかった時代として記憶されている。キリスト教徒の歴史家にとっては、信仰の歴史の中で最も重要な時期の一つとして、さらに注目すべき時代とされている。この時代に入る頃、教会は一つの宗派として帝国の中で無視できない存在ではあったが、帝国の重要な勢力と見なすには十分な大きさではなかった。しかし、この時代から教会は人数を増し、その枝を伸ばして、最も手ごわい攻撃にもかなり対抗できる存在として浮上してきた。それゆえ、この八十四年間（*五賢帝時代）に彼らが闘って打ち破った反対勢力が、この勝利を奇跡的なものと見なさなければならぬような種類と強さのものだったかどうかは、まだ確認が必要である。

この時代のほぼ終わり頃、マルクス・アウレリウスによる迫害のとき、サルデイス（*小アジア西部）の主教聖メリト（*AD2世紀）は皇帝に諫言の手紙を書き、その中でアジアにおける敬虔な者の迫害は「かつて起こったことのない」出来事で「新しく、奇妙な命令」の結果であり、皇帝の前任者たちは「他の宗教と同じく」キリスト教信仰を尊重することを習慣としており「ただネロとドミティアヌスだけが」これに敵対したことをはつきりと主張している。それから二十年以上経った後、テルトゥリアヌスは同様にはつきりと強い言葉で、キリスト教徒を迫害したのはネロとドミティアヌスであり、彼らを苦しめた善良な君主の名は一つとして挙げることはできない、と断言している。テルトゥリアヌスはマルクス・アウレリウスを迫害者の一人に数えることを拒み、彼の手によるものとされる偽の手紙にさえ頼って彼を教会の保護者の名簿に加えている。約一世紀後半クタンティウスは迫害の歴史を振り返り、ドミティアヌスの後の善良な君主は迫害を差し控えたと言明し、ドミティアヌスの迫害からデキウスの迫害までを一挙に通り返る。前者の皇帝の政策を指摘した上で、彼はこう続ける「暴君の法令は取り消され、教会は元の状態に戻っただけでなく、より華麗に、より豊かに輝いた／多くの善良な君主が帝国の笏を振るった時代が続き、教会は敵からの攻撃を受けず、東と西にその手を広げた：／しかしついに長い平和は破られた。多くの年月の後、教会を苦しめたあの憎むべき怪物デキウスが現れたのである。」

この三つに分かれた文言からこの八十四年間、キリスト教徒の一般的な普通の状態は平和なもの

だったこと、そして後の二つの文言を受け入れるなら、さらに長い期間にわたって平和が続いたが、その平和は完全に途絶えなかったわけではないことが推断できる。最初は単にユダヤ教の一派と見なされていたキリスト教会は独立した組織として認められ始めた。そしてローマの法律は表面上、明白に認可された宗教だけを許容していた。確かに帝国、特に都市の拡大に伴い、宗教に関する立法の原理、あるいは少なくとも実践が大いに変化したことは事実である。まずユダヤ教を含む特定の宗教が公認され、次に他の多くの宗教が明白に認可されることなしに容認されたのである。こうして東洋の迷信の激流に対抗しようとするすべての試みは無駄に終わり、立法者はその努力を断念し、あらゆる形の放縦な迷信が公然と、そして罰されることなしに行われるようになった。迷信を禁止する法律はまだ無効になっていなかった。しかしほとんど廃れるか、少なくとも特別なスキヤンダルがあったとき、政治的な危険が実際に起こるか危惧されるときにだけ使われていた。しかし帝国の下で都市や属州の自主性は非常に大きく、多くのことはその地方の総督の性質に左右されていた。ある属州ではキリスト教徒が邪魔されず、好意を受ける一方で、隣接する属州では厳しく迫害されるということが絶えず起こっていたのである。

すでに見たように、キリスト教徒はさまざまな理由で民衆からひどく嫌われていた。彼らは不人気なユダヤ人と混同されていたこと、またキリスト教徒が秘密集会で行ったとされる犯罪に関する中傷が一般に信じられていたこと、公共の娯楽を断っていたこと、彼らの神々への敵意があらゆる

物理的災厄の原因であるという確信が反感の特別な原因だった。アントニヌス朝の歴史において、民衆の迫害願望が常に支配者の慈悲によって抑制されていたことは明らかである。ネルウアの短い治世には迫害はなかったようで、宗教に関する公的な措置についての私たちの知識は異教徒の歴史家が伝える、皇帝は「不敬虔で有罪判決を受けた者を赦し」、「不敬虔やユダヤ教の儀式ゆえに有罪を宣告することを許さなかった」という二文である。しかしトラヤヌス帝の下では純粹に局所的なものではあるが、いくつかの深刻な騒動が起こった。皇帝自身はローマの君主たちの中でも最も賢明で、ほとんどの点で慈愛深い人物であったが、臣下のいかなる団体や組織に対しても神経質に用心し、それらに対抗する特別な勅令を出した。しかしキリスト教徒に対する迫害は政府というよりも、民衆によるものだったようである。エウセビオスの言葉を信じるならば、明らかに暴動のような、しかし時には属州総督によって黙認されるような局所的な迫害が帝国のいくつかの地域で勃発したのである。ビテュニア（*トルコ西部）では総督を務めていた小プリニウスがトラヤヌスに宛てた有名な書簡を書いた。その中で彼は、すでに神殿が寂れるほどに増えており、膨大な数がある法廷に召喚されたキリスト教徒に対してどのような措置をとるべきか自分にはまったく分からないと公言している。彼は皇帝の像の前で焼香し、キリストを呪うことに同意した者は釈放したが、拒否を続ける者の中でローマ市民でない者は「頑固な強情さは懲罰に値すると信じて疑うことなく」処刑した。彼は囚人たちに信仰の内容を問いただし、啓示を知るために二人の女中を拷問することさえためらわなかったが「卑しく極端な迷信しか発見できなかった。」彼が秘密礼拝の内容を尋ねる

と、彼女らは決まった日の夜明け前に集まってキリストを神とする賛美歌を歌い、あらゆる罪を避けることを誓い、別れる前に無害な食事を共にするのである、しかし結社に敵対する勅令以来それをやめている、と言った。この手紙に対してトラヤヌスは、もしキリスト教徒が法廷に引き出されて有罪になれば処罰されるべきだが、彼らを探そうとするべきではない、もし彼らが犠牲の儀式に同意するならば、彼らの過去の生活について審問してはならないし、彼らに対する匿名の告発を受けてはならない、と答えた。彼の治世にはれっきとした殉教の事例が二つある。エルサレムの主教シメオン（*BC3—AD117）は120歳で、異端者たちに告発され、数日間拷問され、最後は十字架にかけられたという。アンティオキアの主教イグナティウス（*AD35—107）は逮捕されてローマに運ばれ、トラヤヌスの命令で野獣に投げ与えられた。この苛烈な行為の理由を私たちは知らない。しかしこの頃、アンティオキアでは宗教的な興奮を引き起こすような激しい地震が頻繁に起こっており、殉教を熱望するイグナティウスの性格が彼を例外的な熱意に満ちた行動に駆り立てたのだらう。殉教者の手紙はローマで信仰が公然と、かつ大胆に告白されたことを証明している。この十九年間の治世において、キリスト教徒への政府主導のいかなる反対もなかったようである。そして時折、地域的な騒動はあったものの、全体的な迫害と言えるようなものはなかった。

続く二つの治世の間、政府はキリスト教徒に対してより好意的だった。ハドリアヌスは公の競技で民衆が頻繁にキリスト教徒の処刑を要求していることを聞いた。そして何人もただ単に彼らへの

敵対的な叫び声に従い、正式な裁判、法に反する罪を犯したという判決なしに処罰してはならない、という勅令を出し、すべての虚偽の告発者を罰するよう命じた。キリスト教に対する彼の態度は、キリストを神々の中に入れるつもりだったという伝説を生むほどに平和的だった。彼は宗教的なことに興味はあったが、キリスト教についてはローマの自由思想家のように無関心だったと思われる。彼のものとされる書簡の中でそれはセラピス崇拜と混同されている。政府に関する限り、キリスト教徒は全く干渉を受けていなかったようである。しかし、この治世に多くのキリスト教徒は、必死の、しかし不運なヒロイズムによって自由を取り戻すための最後の努力（*バル・コクバの乱）を行ったユダヤ人反乱者の手によって恐ろしい責め苦を受けたのである。この時、ユダヤ教徒とキリスト教徒が見せたお互いに対する敵意によって異教徒は両者を別個の存在として見るようになった。ハドリアヌスはユダヤ教徒が再びエルサレムに入ることを禁じた時、彼はキリスト教徒には完全な許可を与えてその区別を承認したと言われている。

ハドリアヌスの次のアントニヌスは、キリスト教徒への民衆の反感を抑制するために新たな努力を行った。彼は彼らを苦しめてはならない、という勅令を出した。また小アジアで起きた地震のために民衆の怒りが激しくなったときには、彼らを告発した者を罰するよう命じた。これらの暴動を除けば、彼の治世の23年間は絶対的な平和の時代だったと思われる、それはマルクス・アウレリウスの治世の数年間も続いたようである。しかし正確なことは分からないが、ついに迫害の勅令が出

された。これまでの統治者の中で最も優れた人物の一人がキリスト教徒を迫害するようになった理由について、私たちはほとんど何も知らない。妻の死に際し、元老院に対するたった一つの願いとして、自分を慰めるために自分に反抗した者たちの命を救ってくれるよう頼んだという―いささか過剰な優しさだけが欠点だった人物の残忍な性質や、抵抗への苛立ちゆえでなかったことは、自信をもって断言できるだろう。それが聖ルイ（*1214―1270、フランス王）を奇妙なほどの迫害に駆り立てた宗教的狂信に似たものではなかったことは、同様に明白である。聖ルイが迫害（*カタリ派討伐）をしたのは、自分の宗教的な見解を否定することは凶悪な犯罪であり、異端は地獄への道であると信じていたからである。マルクス・アウレリウスにはそのような信念はなく、ストア哲学を自分の信条と慰めにした最初のローマ皇帝である彼は、自分の哲学に最も敵対する哲学の教授たちに寄付をした最初の皇帝でもある。国家の中の国家として存在し、国家のそれとは全く異なる体制、理想、熱意、希望を持つキリスト教会が帝国の既存の体制と相容れないことは、教会が増えるとともに明らかになっていた。人肉食や近親相姦といった不道德な行為に対する非難はより一貫したものとなった。そして後者は最近発生したカルボクラテス派（*財産や女性の共有を主張した）の異端者に正当に当てはまるものだったと言われている。マルクス・アウレリウスのストア派は悪魔祓いや来世の恐怖の訴えに反発していたと思われる。また周りの哲学者たちもおそらく彼の敵意を刺激しただろう。彼の師で友人だったフロントはキリスト教に敵対する本を書き、キニコス派のクレスケンスは策略によって殉教者ユステイノスを殺したと言われている。また皇帝

がキリスト教徒に対する厳しい勅令を出したことを否定することはできないが、彼の治世における迫害の残虐な内容は民衆の凶暴性と、遠く離れた属州の総督の弱さに起因するものだった。そして、もし彼がキリスト教信者にとって非常に厳しい敵だったとすれば、二十年余り後に著作を残したテルトゥリアヌスがその事実を知らずに、最も著名なキリスト教徒の擁護者の一人として彼を持ち出すとは考えにくい。

しかし、これらの点をどのように考えようとも、不幸なことに彼の治世にローマが最高の哲学者であり、教会で最も純粹で優しい性質の持ち主だった殉教者ユステイノスの血で染まり、迫害が広く行われたことに疑問の余地はない。遠く離れたスミルナとリヨンでは、ネロ以来キリスト教が耐えてきたものをはるかにしのぐ残虐行為があった。そして、いずれの場合も殉教者によって最も超越的なヒロイズムが示されたのである。聖ポリュカルポス（*AD 65—155、スミルナ主教）や他の多くの人々が最も尊い死を遂げたスミルナでの迫害は公的な競技の機会に行われ、それを刺激していたユダヤ人の影響力を私たちは辿ることができる。教会史の中で最も残虐なものの一つであり、殉教学の中で最も壮大で、最も悲壮な異彩を放っているリヨンの迫害は、民衆の怒りと総督の卑屈さの結合という最悪の特徴から発生したものだ。あるキリスト教徒家庭の使用人は拷問におびえながら、近親相姦、嬰兒殺、人肉食、醜悪な不道德行為など、世間でうわさされているあらゆる犯罪で主人を告発した。その結果、恐るべき残忍さが噴出した。老人や弱い女性の体に何時

間も、何日も、数え切れないほどの恐ろしい拷問が加えられた。彼らは苦しみの中で戦場でも見られたことがないほどの気高い勇気を示し、その記憶は人類の間で不滅のものになっている。ブランディナ（*闘技場で殉教した女奴隷）とポティヌス（*AD87―177、リヨン初代司教）はフランス教会の栄光の歴史の最初のページを血で書き記したのである。マルクス・アウレリウス帝の晩年、三つか四つの属州で厳しい迫害が行われたが、帝国全体でキリスト教を弾圧しようとする組織的な努力はなかった。

次に、西暦180年にマルクス・アウレリウスが死去してから、同249年にデキウスが即位するまでの期間を一つの期間として考えてみることにしよう。この間ずっと、キリスト教は重要な影響力を持つ強大な団体だった。そして、その期間の大部分において大勢のキリスト教徒たちが文武の高い地位に就いていた。キリスト教に示された敵意はおそらく（*政治的迫害だった）マルクス・アウレリウスの晩年を除いて、以前よりも政治的な様相を呈し始めた。帝国のシステムとは全く異なる、巨大で急速に成長する団体の存在は、すべての支配者の前に立ちはだかった。コンモドウス帝（*在位AD180―192）やヘリオガバルスのような皇帝は通常、利己的な快楽に没頭するあまり、明確な政策を持つことができなかった。しかし、賢明な君主たちは、帝国の幸福を心から願ひ、マルクス・アウレリウスやディオクレティアヌスのように、台頭する信仰を抑制しようと努め、あるいはアレクサンデル・セウエルスや、ついにはコンスタンティヌスのように、積極的

に奨励したのである。マルクス・アウレリウスが行ったキリスト教に対する措置はコンモドゥスの下で停止された。彼の愛妾マルシアは、多くの迫害の原因になってきた女性の影響力が寛容をもたらした数少ない記録上の実例である。しかし、彼の治世にキリスト教徒の哲学者アポロニウスと、奇妙な応報を受けたその告発者（*アポロニウスは奴隷に告発された。主人を告発した奴隷は処罰されるといふ法律があつた。彼が罰しようとした奴隷が彼を恨んで巻き添えにしたといふ説もある。）が同時にローマで処刑された。私たちが考えている六十九年の間に、教会の平和は二度だけ破られた。最初の機会はセプティミウス・セウエルス帝（*AD193―211）の治世で、彼はしばらくキリスト教徒に好意的だったが、202年から203年に異教徒がキリスト教やユダヤ教を信仰することを禁じる勅令を出した。この勅令に続いて、アフリカとシリアで激しい迫害が行われ、オリゲネスの父をはじめ、聖フェリシタス（*妊娠しているためにペルペトウアと一緒に殉教できないことを心配したが早産して同時に殉教した）や聖ペルペトウアも命を落とした。この迫害は西方には及ばなかったようである。迫害はどうやら勅令を皇帝の直接の法令というよりも、キリスト教徒への敵意の兆候と受け取った属州総督の仕業だったようで、勅令は異教徒を改宗させることに積極的なキリスト教徒にだけ適用された。このときまで、キリスト教の殉教者の数は非常に少なかったとオリゲネスが述べていることは注目に値する。第二の迫害はアレクサンデル・セウエルスがマクシミアス帝（*在位AD235―238）に殺害されたことに起因する。この篡奪者は、亡くなった皇帝の有力な廷臣を激しく追及したが、その中にはキリスト教の司教も含まれていた。同じ頃ポ

ントスとカツパドキアで激しい地震が起こり、恒例の民衆の沸騰が起こった。しかし、これらの例外を除いてキリスト教徒が悩まされることはなかった。カラカラ、マクリヌス帝（*在位AD217―218）、ヘリオガバルスは彼らに敵対する措置は何も講じず、十三年間君臨したアレクサンデル・セウエルスは彼らを熱心に着実に支援していた。ある異教徒の歴史家は、この皇帝はキリストを称える殿堂を建てつもりだったが、司祭たちが他の神殿をすべて放棄するよう主張したため思いどまったと証言している。彼は私的な禮拜堂でティアナのアポロニウス、アブラハム、オルフェウス、そしてキリストの像を崇拜していた。彼は属州総督たちを任命する前に、彼らが犯した罪を告発する機会を民衆に与えるように命じた。この規則は明らかにユダヤ教徒とキリスト教徒が聖職者を選出する際の手順から借用したものである。そして、「己の欲せざるところは人に施すなかれ」という教訓を、宮殿やその他の公共建築物に刻むよう命じた。またキリスト教徒が占有しており、ある飲食店のオーナーがその所有権を主張していた土地に関する争議を、神の禮拜が最も重んじられるべきであるという理由をつけて前者に有利に裁決した。私たちが考察中の時代の最後の五年間に君臨したピリップス・アラブス帝（*マルクス・ユリウス、在位AD244―249）はキリスト教徒に非常に好意的で、信頼に足る証拠はないものの、彼は洗礼を受けたと信じられている。

ここまで、ローマにキリスト教が布教されてから約二百年後の西暦249年までの迫害の歴史を振り返ってきた。この間、キリスト教徒は時には多くの苦しみに耐え、多くのヒロイズムを示した

が、ネロの迫害という非常に疑わしい例外を除いて、帝国全体でキリスト教を弾圧しようとする試みは一度もなかったことを私たちは見てきた。マルクス・アウレリウスの時代にスミルナやリヨンで、セウエルスの時代にアフリカやアジアのいくつかの属州で、厳しい迫害が行われた。公的競技の興奮や、地震や洪水、中傷的な告発による民衆の騒動はまれではなかった。しかし後世に教会裁判所が自分たちの見解に反するそれを何度も何度も弾圧したような、継続的、組織的、全体的な迫害はなかった。そして帝国のどの地域においても、いくつもの世代が完全な平穩のうちに過ぎ去った。ガリアや小アジアの大部分では、マルクス・アウレリウスの治世より前には殉教者は出ていない。イタリアではネロの死後、ドミティアヌスとマクシミアヌスの時代に宗教とは全く別の原因による少しばかりのトラブルがあったが、私たちが考察している期間中には殉教は孤発性のものがほんの数例あっただけである。教会の指導者である司教は特別に敵対視され、世界各地で数人が倒れた。しかし使徒時代以降、デキウスの治世にファビアヌス（*AD?—250、ローマ司教）が殉教するまで、ローマの司教が殺されたことがあったかどうかは極めて疑わしい。キリスト教は正式には認可されていなかったが、同じような立場にある他の多くの宗教と同様に、一般に黙認されており、ここまで見てきた期間の大部分において、その信仰告白者の宮廷や軍隊での昇進を妨げることはなかったようである。皇帝たちはほとんど彼らに無関心か好意的だった。異教徒社会において神官はほとんど影響力を持っておらず、ディオクレティアヌスの時代頃まで迫害に目立った役割を果たすことはなかったようである。ユダヤ人をたった一つの例外として、どの階級も近代の迫害のほとん

どを生んだ誤謬の犯罪性という教義を持っていなかった。また神々を無視したり侮辱したりすると大きな災難がもたらされるといふ信仰は異教徒による迫害の宗教的動機になったが、これが働いたのは稀で例外的な大災害のときだけだった。キリスト教の時代には迫害者の第一の目的は教育を統制し、異説の著作の出版を阻止し、自らが抑圧しようとする宗教の儀式を不可能にするような厳密な警察検査を実施することだった。この時代にはこのようなことは試みられなかったし、実際に可能でもなかった。皇帝の護衛を除いて、極めて穩健な規模の軍隊のほとんどは帝国の広大な辺境に集結していた。警察力は最も貧弱なもので、街路の一般的な秩序を守る程度のものであった。政府は教育を奨励することはあっても、統制することはまったくなく、親や社会は若者を好きなように教育する完全な自由特権を持っていた。書写が奴隸制度によって大変便利になったため、文芸は非常に大きく広がり、その大部分はまったく統制されていなかった。アウグストゥスは偽造された予言の書物を焼却させ、ティベリウスとドミティアヌスの暴政下では、暴君殺害を賛美したり、帝国に激しく敵対したりした政治論者や歴史家が迫害されたことは事実である。しかし、これらの行為が極めて強い怒りを引き起こしたことはその稀少さの証明になっている。そして政治と関係のない問題についての文筆の自由特権は絶対的なものだった。一言で言えば、教会は寛容が規則だった社会で都市、属州、個人の独立が最高点に達し、支配階級が宗教的見解にほとんど無関心だった時代、かつてないほどの影響力の合流がその発展を促した時代に布教活動を行ったのである。

三世紀半ばまでの教会の状況がこのようなものだったことを見れば、奇跡なくしてどのような見解も生き残ることができなかったような激しく持続的な迫害に直面しながらキリスト教が広まったと主張したり、初期の教会の歴史から迫害は真理の抑圧にいかなる現実的な効果も持たないと論じたりするのは不条理なことが容易に理解されるだろう。そうした環境に加えて、教会が持っていた比類のない魅力と脅迫の手段を考えるなら、教会はその後に耐えなければならなかったはるかに深刻な攻撃に対抗できるほどの巨大さを獲得していたことを理解するのに何の問題もないだろう。教会のこの伸長は豊富な証拠によって明らかにされている。私がラクタンティウスから引用した言葉（*ドミティアヌスとデキウスの間には迫害はなかった）は、デキウスの迫害以前の論者たちによって強調された声の微かな反響に過ぎない。殉教者ユステイノスは「ギリシヤ人であれ野蛮人であれ、十字架につけられた御方の名によって祈りと感謝を捧げない民族はいない。」と述べている。「私たちは昨日の私たちではない。」とテルトゥリアヌスは叫んだ「私たちはあなた方の都市、島、砦、地方議会、陣地そのもの、部族、分隊、宮殿、元老院、公会広場に満ち溢れている。」エウセビオスはローマ司教コルネリウスの手紙を保存しており、そこにデキウスの迫害時の教会職員の名簿がある。この教会は一人の司教、四十六人の長老、七人の助祭、七人の副助祭、四十二人の侍祭、五十二人の悪魔祓い師、朗読者、守衛で構成されていた。また教会は千五百人以上の未亡人や貧しい人、苦境にある人を支援していた。

西暦249年に勃発したデキウスの迫害は、おそらく帝国を古代の規律に戻し、外来の非愛国的な影響を排除することを目指して始まったものだった。また属州政府の全機構に支えられ、帝国全土に及んだ、世界からキリスト教を根絶することを意図した最初の試みだった。その恐怖を表すために、どんなに強い言葉を使っても強すぎることはなかっただろう。長い間抑圧されていた民衆の凶暴な本能が新たに爆発し、支配者たちはそれを許したのみならず、奨励したのである。偶像崇拜の生け贄を敬遠する人々を脅かす死よりもはるかに悪いのは、殉教者の節操を征服しようとする行政官がしばしば行った恐ろしい長時間の拷問であり、ときにキリスト教徒の処女に加えられた、言うに忍びない蹂躪（*売春宿で働かせる）だった。教会は長い平和のために無気力になって、時代の悪徳に深く感染しており、その打撃によるめいた。人々が信念によってではなく、家族関係によってキリスト教徒になり、より豊かなキリスト教徒が周りの異教徒と贅沢を競い、多くの場合、司教でさえ公職を目指す俗物だった時代に入ってから長い時間が過ぎていた。そのため棄教が非常に多かつたことは驚くに値しない。迫害が最初に始まったときに（*異教の犠牲の）祭壇に群がった何千人もの人々、最も輝かしい教会の突然の崩壊、それが証明する条件の遵守を要求することなく棄教の証明書を提供するという属州総督の申し出が多くの人々に受け入れられた熱心さを、異教徒は勝利の嘲りとともに、神父たちは燃えるような怒りとともに記録している。信仰を捨てた者にその後再び聖体拝領を受けさせるべきかどうかは、カトリックからノウァティアヌス派（*対立教皇）を分裂させる最大の原因となり、モンタノス派を分裂させる一因となった。一方、司教が課した懺悔

を免除して赦しを与える、という聴罪司祭たちの主張は争いを引き起こし、監督制度の優位の確立に非常に大きく貢献した。デキウスの迫害はその前後に起こった迫害に比べると教会の態度の高貴さにおいてやや劣るものの、肉体的に最も弱い人々が、少なからぬ例で示した極めて勇敢で献身的な多くの例で彩られている。この迫害は教会の破壊に極めて適したものだ。もしこの迫害がもっと早い時期に行われ、長い年月にわたって続けられていたならば、奇跡が起こらない限りキリスト教は滅んでいたに違いない。しかしデキウスの迫害は二世紀にわたって存在していた教会に降りかかって、二年足らずで終わったのである。その激しさは属州によって大きく違っていた。政府の脅迫を予期して民衆が騒いだアレクサンドリアとその近隣の町ではそれは極度に恐ろしいものになった。カルタゴでは当初、属州総督が不在だったため死刑判決は下されなかったが、属州総督が到着すると、流刑や投獄に代わって恐ろしい拷問と死刑が執行された。民衆の怒りは特に司教の聖キプリアヌスに向けられたが、彼は賢明にも嵐が去るまで隠れていた。一般に、支配者たちの目的はキリスト教徒を殺すことより打ち負かすことだったようである。棄教を強要するための恐ろしい拷問が絶えず行われた。そしてそれが無駄なことが分かると最終的に多くの者が解放された。

デキウスの迫害はキリスト教徒のカタコンベ（*地下墓地）が初めて侵害された出来事として、キリスト教考古学的に注目すべきものと考えられている。墓が並べられたこの地下の広大な回廊は、小さな礼拝堂へと拡張されることが非常に頻繁にあり、その礼拝堂はしばしばとても美しい絵画で

飾られていた。そして迫害の時代には長きにわたって侵されることのない避難場所だった。ローマ人が埋葬の場所に与えた極度の尊厳によって、冒瀆は撥ね返されていた。そして三世紀の初めにはカタコンベは教会の合法的な所有物と認められていた、とされている。ローマの立法者たちはギルドや組合の結成には否定的だったが、埋葬協会、すなわち各メンバーが一定の金額を支払ってその団体の土地にきちんと埋葬されることを確実にする団体は例外としていた。教会はこの特権を利用し、この資格によって法的な存在になったと信じられている。元来、別個の家族の資産だった墓はこうして教会の所有物となり、カタコンベはおそらく最初から埋葬場所以上のものだったのだろう。その中には数多くの礼拝堂があるが、その規模は小さく、一般的な礼拝には全く適していない。それらはおそらく葬儀のための礼拝堂であり、殉教者を記念する礼拝にも用いられていたのだろうが、初期の通常の礼拝はキリスト教徒の個人宅で行われていたのだろう。キリスト教の礼拝に捧げられた建物があったことを示す最も古い記録は、すでに述べた（*キリスト教の殿堂を建てようとした）アレクサンデル・セウエルススの決定である。しかしそのどれくらい前からそれがローマに存在していたのかは分からない。しかし、深刻な迫害が起こると彼らは間違いなくこれらの建物を放棄したのである。そして最後の頼みの綱として、カタコンベは迫害者からの避難所になった。

デキウスの治世は二年ほどしか続かず、その終わり頃には迫害はほとんどなくなっていた。西暦251年の最後の月に息子のガルス帝（*在位AD251―253）が即位すると、しばらくの

間は完全に平和だった。しかし、ガッルスは翌年の春に迫害を再開した。それほど激しくもなく、全体的でもなかったようだが、その一年後にガッルスが死ぬまで迫害は続いたようである。殉教したファビアヌスの後を継いだコルネリウスとその後継者ルキウスという二人のローマ司教がこのとき死刑になった。西暦254年に即位したウアレリアヌス帝（*在位AD253―260）は当初キリスト教徒を容認するだけでなく、熱く擁護し、同時代人の言葉を借りるなら、彼の家が「主の教会」のように見えるほどの大勢を宮廷に集めたのである。しかし、四年余り後に彼の態度は変わってしまった。エジプトの魔術師マクリアヌスの説得によって西暦258年に迫害勅令に署名し、キリスト教徒の聖職者や元老院議員を死刑に、その他のキリスト教徒を流刑または財産没収とし、カタコンベに入ることを禁じたと言われている。その後には血なまぐさい全体的な迫害が続いた。犠牲者の中には、カタコンベで死んだローマ司教シクストゥスや、追放後に斬首され、カルタゴ司教として最初に殉教したキプリアヌスがいた。ついにウアレリアヌスがペルシャ軍に捕らえられた。ガッリエヌス帝（*在位、共同皇帝AD253―260、単独皇帝AD260―268）は西暦260年に即位すると直ちにキリスト教徒の完全な容認を宣言した。

いま簡単に述べたように、西暦249年のデキウス即位から同260年のガッリエヌス即位までの間は、教会がこれまで耐えてきた中で最も惨憺たる期間だった。ガッルスとウアレリアヌスの治世の約五年間を除いて迫害は継続したが、その強度と範囲は大きく変化した。死者の数ではなく、

加えられた拷問の残虐さで測るなら、最初の頃の迫害はおそらく記録されている中で最も厳しいものだった。その後、それは主に指導的な聖職者に向けられ、既に見てきたように四人のローマ司教が命を落としていた。政治的な理由に加えて、崇拜を怠ったことに対する神々の怒りとされた大きな災害が引き起こした民衆の熱狂は、かつての時代と同様大きな影響力を持っていた。また政治的な災害は帝国の崩壊の接近をはっきりと予見させ、その後には恐るべき大飢饉と疫病が続いた。聖キプリアヌスは、これらのことをキリスト教徒の仕業と最も固く信じていた迫害者（*アフリカ総督デメトリアヌス）の一人に宛てた論説の中で、帝国の全体的な失意と、これらの災難をキリスト教徒がどのように受け取っていたかの両方について、非常に興味深い記述をしている。聖人は他の多くの信徒たちと同様、この世の終わりが近づいていることを確信していた。世界の衰微が到来し、自然の力はほとんど枯渇し、太陽はもはや昔の輝きを失い、土は昔の肥沃さを失い、春は美しくなくなり、秋は豊かでなくなり、人間のエネルギーは衰え、すべてのものは急速に終焉に向かって進んでいる、と彼は言った。飢饉や災いは、裁きの日の前兆である。偶像の前にひれ伏し、真理を信じる者を迫害する反抗的な世の中に警告を与え、罰するために送られたのである。「これが真実である。キリスト教徒が迫害されたなら、たちまち神の怒りが天に現れないことはない。」聖人の心には改宗した帝国という概念がちらりとも浮かんだことはなかったようである。彼が予言した教会の唯一の勝利は来世のものだった。迫害者の脅威に彼は再び恐ろしい脅迫で対抗した。「灼熱の炎が罪人を永遠に苦しめ、その苦しみには休息も終わりもない。ほんの一時、拷問を受けている私たちを熟

視していた人たちが、永遠の苦しみの中にいるのを私たちは熟視するだろう。迫害者たちの野蛮さが非人間的な光景で大いにその目を楽しませた短い快樂ゆえに、彼ら自身が永遠の苦しみの光景を晒すのである。」災難が次から次へと世界を襲っているのは最後の警告である。すでに死の影の中にある人物の厳かさによって、聖キプリアヌスは迫害者たちに悔い改めて救われるようにと訴えたのである。

ガツリエヌスの即位によって教会は新たに完全な平和の時代を迎え、それは一つの取るに足りない例外を除いて四十年以上続いた。その例外とはアウレリアヌスである。アウレリアヌスは治世のほぼ全期間にわたってキリスト教徒に非常に好意的で、正統派の主教たちから異端として破門した高位聖職者をアンテオキアから追放してほしいと嘆願されたこともあった。彼はその治世の終わりに彼らを迫害しようとした。しかし、一説には彼は勅令に署名しようとしたときに暗殺され、別の説によれば勅令が各属州に送られる前に暗殺された。そして実際に迫害が行われていたとしても、全く取るに足りないものだっただろう。この間、キリスト教は完全に自由であっただけでなく、大いに榮譽を受けていた。キリスト教信者たちは属州総督に任命され、生け贄の義務を明白に免除されていた。文官は深い尊敬の念を持って主教たちを扱った。皇帝の宮殿はキリスト教徒の召使いで埋め尽くされていた。彼らには自由に宗教を公言することが許され、その忠実さは非常に高く評価されていた。民衆の偏見も落ち着いたと見え、信仰の急速な発展にも騒動や敵対行為はなかった、

と言及されている。広々とした教会が各地に建てられたが、礼拝者が多くて入りきれなかった。デ
イオクレティアヌスの迫害が始まる前、ローマには四十を下らない数の教会があった。キリスト教
徒はまだ数で異教徒を上回っていなかったかもしれない。しかし彼らの組織、熱意、そして急速な
発展を考えるなら、迅速な勝利は必然だったように思われる。

しかし、その勝利が達成される前には最後の、そして恐ろしい試練をくぐらなければならなかつた。デイオクレティアヌスはいくらか不当にその名前を迫害と結びつけられてきたが、はるかに大きな責任は同僚のガレリウスの方にあつたのである。デイオクレティアヌスは十八年近くキリスト教徒を完全に平和な状態に置いていたが、外国の信仰を撲滅するためもう一度努力するように説得された。彼は最も卑しい身分（*解放奴隷の子と言われている）から実力で上り詰めたが、その治世の他のすべての行動において穩健で、寛容で、群を抜いた慈愛深さを示していた。彼は私生活の質素さ、自発的な退位によって皇帝の権威を大いに高めたが、何よりも引退後の長い年月における並外れた高潔な振る舞いによって稀に見る雅量を示したのである。彼は政治家として非常に高い評価に値すると私は思う。アントニヌスとマルクス・アウレリウスは、共和国の伝統とストア派の厳格な教えと回顧主義に魅了され過ぎて、制度を贅沢で高度に文明化した人々の欲求に合わせる必要性を理解できなかったため、帝国の運命にほとんど永続的な影響を及ぼさなかった。しかしデイオクレティアヌスはその立法において、常に先見力と大局観を示し、治める社会の状況をよく認識し、

遠い将来の出来事を予見していたのである。ローマの腐敗は不治の病であることを認識した彼は、大きくて比較的墮落していない属州の州都に新しい政治活動の中心を作り、帝国を再生しようとした。また彼が普段暮らしていたニコメデア（*小アジア北西部）、その他にカルタゴ、ミラノ、ラヴェンナはみな彼の好意の印をふんだんに受けていた。彼はまだ残っていた共和的な自由特権のための時代遅れの非効率的な制度を一掃し、あるいは無視して、実際のところ自分の政府にどこか東洋的な性格を持たせた。しかし同時に、帝国を四つに分割するという大胆かつ非常に危険と言わざるを得ない手段によって、各支配者たちの権力を縮小し、属州のより良い管理と権限の強化を保証し、時折帝国を無政府状態にする危険があつた軍の反乱の効果的な抑制策を初めて考え出した。（*四帝分治、決定権、採決権はディオクレティアヌスだけが持つ）同じように精力的な政治家として、彼は課税制度全体を再編成し、賢明ではなかったが、商取引を規制しようとした。このような皇帝にとつて、キリスト教の急速な進展と深い反国家的性格がもたらす問題は深刻な検討事項であつたに違ひなく、彼の性格の弱点は教会にとつて最も不都合なものだつた。ディオクレティアヌスは、心と頭に多くの高貴な資質を持っていたが、いまだ迷信深く、率直ではなく、神経質で、揺らぎがあつた。そして血気に逸つてキリスト教徒への敵対を扇動する粗野で残忍な軍人（*ガレリウスのこと）にあまりに容易に流されてしまったのである。

ガレリウスがこの問題に関して見せた極度の熱意は、第一に異教信仰に熱烈に傾倒していた母親

の影響によるものとされている。キリスト教の論者たちは彼を限りなく奔放な官能の人物、反対に遭うと激怒する高圧的な人物、その残虐さが冷酷さをはるかに通り越して、苦しみを与え、それを凝視することが悪魔的な喜びになった人物、という暗い色彩で描いている。異教への強い愛着ゆえに、彼はついにいくつかの原因によって強化された、彼の党派の公然たる代表になった。この頃、帝国の哲学は完全に新プラトン主義やピタゴラス主義の段階に移っていて、宗教的儀式と密接に結びついていて。その最も著名な代表者だったヒエロクレス（*AD?—222）やポルピュリオスはキリスト教に敵対する本を書いた。東洋の宗教は人々の間に大いなる狂信を引き起こしていた。今やキリスト教徒たちは国家の中で非常に強い存在となっていたため、政治的な利益は迷信と結びついた。彼らの利益は副帝コンスタンティウス・クロルス（*在位AD305—306…西方副帝、コンスタンティウス大帝の父）に代表されると考えられていた。この宗教はディオクレティアヌスの妻や娘（後者はガレリウスと結婚していた）によって受け入れられるか、少なくとも熱く支持されており、宮廷の主な役人の何人かは公然と信仰告白をしていたのである。ニコメディアの皇帝の宮殿に面する丘には、壮大な教会がそびえ立っていた。主教はほとんどの都市において最も活動的で影響力のある市民の一人だったが、その影響力は必ずしも良い方向に行使されたとは言えなかった。無分別な熱意が異教徒の宗教を侮辱することになったいくつかの事例、軍隊生活が侵攻に反するとして兵役を拒否した一、二の事例、長い平和の間に生じたスキャンダラスな道德の緩み、教会の指導者たちが示した悪名高い激しい不和などが、さまざまな形で迫害を加速させる要因

になった。

ディオクレティアヌスはかなり長い間、ガレリウスによるキリスト教徒への敵対の催促にことごとく抵抗していた。唯一取られた措置はガレリウスによる軍隊からの数人のキリスト教徒将校の罷免だった。しかし西暦303年、ディオクレティアヌスは同僚の懇願に屈し、多くの事情が相助けで引き起こした恐るべき迫害が始まった。神官たちはある公的な儀式の場で、キリスト教徒がいるせいで内臓（*犠牲として焼いた動物の内臓を見て占う）にいつものようなお告げが現れないと宣言した。ディオクレティアヌスが伺いを立てたミレトスのアポロンの神託は、彼にキリスト教徒を迫害するよう強く促した。ある狂信的なキリスト教徒が迫害の最初の勅令を破り捨て、皇帝を辛辣に嘲笑し、自分の行いを公言して、恐ろしい死によってそれを償った。迫害が始まった後、ディオクレティアヌスとガレリウスが住んでいたニコメディアの宮殿に二度火が放たれ、無理もないことだが、キリスト教徒のせいにされた。その後シリアで起きたいくつかの小さな騒動も同じだった。その後、次々と矢継ぎ早に勅令が出された。最初の勅令はすべてのキリスト教会の破壊とすべての聖書の廃棄を命じ、ひそかに礼拝に集まるキリスト教徒は死罪にすると脅し、彼らの市民社会における権利をすべて奪った。第二の勅令ですべてのキリスト教聖職者を投獄するよう命じた。そして第三の勅令でこれらの囚人に、そして第四の勅令ですべてのキリスト教徒に拷問を用いて犠牲の儀式を強いるよう命じた。当初ディオクレティアヌスは彼らの命を奪うことを許さなかったが、ニコ

メデアの火事の後、この制限は解除された。多くの者が生きたまま焼かれた。そして迫害者が彼らの決意を揺さぶろうとした拷問はあまりにも恐ろしいものだったので、そのような死でさえも慈悲の行為と思えるほどだった。マルクス・アウレリウス帝の時代に血の洗礼を受けたガリアは唯一の平和な属州だった。現在はコンスタンティウス・クロルスに統治されており、彼は皇帝の命令に従って教会を破壊せざるを得なかったものの、個人に対する迫害からはキリスト教徒を保護した。スペインもコンスタンティウスの統治下にあったが、直接の監視下になかったため、迫害は穏やかだった。しかし帝国の他のすべての地域では、西暦305年にディオクレティアヌスが退位するまで猛烈な迫害が吹き荒れた。その後、西方属州にはほとんど直ちに平和に戻ったが、ガレリウスの絶対的な支配下に置かれた東方キリスト教徒の不幸はさらに大きなものになった。彼らの不屈の精神を打ち倒すため、おぞましい、様々な、時間をかけた拷問が行われた。そして彼らの最後の抵抗は、ゆっくり火で炙られるという、最も恐ろしい死によって有終の美を飾った。全体的な迫害が始まってから八年後、キリスト教徒に敵対する最初の措置が取られてから十年後の西暦311年まで東方の迫害は終わらなかつた。キリスト教徒の大敵だったガレリウスは恐ろしい病気に襲われた。彼の体は胸の悪くなるような、悪臭を放つ糜爛の塊―無数の蛆虫に食い荒らされ、死体置き場の臭いを撒き散らす生ける屍になつたと言われている。多くの罪のなき血を流した彼はローマ的な死から尻込みした。彼は苦しみのあまり医者から医者へ、神殿から神殿へと助けを求めた。そして、ついにキリスト教徒に対して譲歩した。キリスト教徒の自由特権を回復し、教会の再建を許可し、自

分の回復のために祈るようにとの布告を発した。今や迫害の時代は終わりを告げた。長い間苦しめられていた小アジアの教会をマクシムス・ダイア帝（*在位AD305―307…東方副帝、AD308―313…東方正帝）による短い発作が襲ったが、短期間のうちに静まった。コンスタンティヌスの即位、西暦313年のミラノ宣言、リキニウス帝（*在位AD308―324…東方正帝、エウセビオスらによってキリスト教の敵対者とされている）の敗北、そして征服者の改宗がすぐに続き、キリスト教は帝国の宗教となった。

私たちが追跡できる限り、初期の教会に加えられた最後の、そして最も恐るべき迫害の輪郭はこのようなものである。残念ながら、その犠牲者の数、それを引き起こした原因、その著述者の目的について、私たちが持っているいかなる情報もほとんど信頼できるものではない。これらの事柄に関する教会側の説明は異教徒側の陳述とは全く照合されておらず、ほとんどエウセビオスの歴史書とラクタンティウスの著作とされる論文「迫害者たちの死について」のみに基づいている。エウセビオスは非常に学識があり、批評能力も当時の低いレベルより低くはなかった。そして彼が記録したパレスチナの出来事のいくつかについて個人的な知識を持っていた。しかし彼には公平性の自負は全くなかった。歴史を書くときの原則は教会の評判を傷つけるような事実を隠すことである、と彼は率直に語っている。そして彼の実践は時にその原則より優れたものだった。しかし、彼が描いた後援者コンスタンティヌスの聖なる徳の肖像は私たちが他の資料から訂正することができるも

のであって、この宮廷主教がいかに躊躇なくフィクションの道へ迷い込むことができたかを十分に証明している。「党のパンフレット」と呼ばれているラクタンティウスの論文はさらに信用できないものである。この論文は迫害者たち、特にガレリウスの悲惨な結末に対する歓喜の賛歌であり、最も凶暴で情熱的な罵詈雑言で書かれており、すべてのページに不正確さと誇張が明白に現れている。初期の迫害の歴史は丸ごと虚偽の厚い雲に包まれた。裁きの日の前に十回の大迫害が起こる、という予言から導き出された考え方は、早い時代には、その日が差し迫っていると信じるキリスト教徒の想像力を掻き立てていた。そして時が経つにつれて、人々は耐え忍んだ苦しみを誇張するようになった。そして信じやすく無批判な時代には一つの実際の出来事が、多くの別々の物語の中でしばしば増殖し、多様化し、誇張されるのは自然なことだった。トラヤヌス帝の時代にアララト山で一万人のキリスト教徒が磔にされたとか、ティベリアヌス（*パレスチナ総督、詳細不明）がトラヤヌス帝への手紙の中でパレスチナで絶え間なくキリスト教徒を殺すのにうんざりしていると不満を述べたとか、マクシミアヌス帝（*在位AD286―305、306―308、310…西方正帝）によって虐殺されたという六千人のテーベ軍団（*エジプトから動員され、ガリアで殉教した）などという、とんでもない虚構が大胆に広められ、簡単に信じられてしまったのである。殉教者の骨には徳があると考えられた。そして習慣と、八世紀の第二回ニカイア公会議の布告による、すべての祭壇の下に聖人の遺物を安置することの義務化によって偽物の聖遺物は膨大な数になり、それに伴って伝説に対する需要も高まった。たちまちほとんどすべての村落が守護殉教者と地元の伝説を

必要とし、最寄りの修道院は通常それをすぐに提供できた。修道士たちは厳密な歴史的事実と称して、教化的と思つてのことではあつたが、実は意図的な捏造である無数の殉教者の行為を作り出して広めることに時間を費やした。そして、素晴らしい奇跡によつて盛り上げられた恐るべき拷問の描写は、すぐに人気の大衆文学になつた。ルイナル（*テイエリー、1657—1709、ベネディクト会の修道士）は修道士によつて捏造された膨大な数の殉教者の行為の中から本物を正確に識別しようとした。しかし、それはおそらく不可能なことだろう。しかし、現代の評論は古代の迫害をその真の規模に縮小することに大いに貢献している。十七世紀末に発表されたドッドウエル（*ヘンリー、1641—1711）の有名な論文は、少々特別弁護人（*speciaal pleader）的精神で書かれており、独自の誇張がないわけではないと私は考えるが、教会史に大きな永続的な影響を与えた。そしてギボン（*エドワード、1737—1794）がこの問題に当たつたさらに有名な章（*ローマ帝国衰亡史16章）によつて、ドッドウエルの結論が世に知れ渡ることになつたのである。

ギボンがこの章で示した夥しい知識と批判的洞察力にも関わらず、ほとんどの人は一読して反発と不満を感じるのではないかと私は思う。殉教者たちが示した英雄的な勇氣への共感の完全な欠如と、死闘の苦しみに携わつた人々の言葉と行いを測る歴史家の冷やかかさ、実のところ最も非哲学的な過酷さに、あらゆる寛容な人物は反発せずにいられないだろう。一方、迫害を苦しみの量では

なく死者の数で評価することに固執するならば、異教徒の迫害の本当に際立った残虐さから心は逸れてしまう。ギボンには迫害者の怒りは常に特に司教に向けられていたこと、そしてエウセビオスによればディオクレティアヌスの迫害全体で死刑になった司教はたったの九人だったこと、この歴史家がそこで列挙した、ガレリウスの統治下で迫害の嵐の猛威にさらされたパレスチナにおける殉教者の全数は九十二人だったことを指摘している。ギボンはこの事実から出発して、有名な計算方法によってディオクレティアヌス帝の迫害の間の帝国全体の殉教者数を約二千人と推定した。これはスペインの異端審問所でトルケマダ（*トマス・デ、1420—1498、異端審問所長官）の任期中に火刑にされた人数と偶々一致し、カール5世の治世にオランダで信仰ゆえに罰を受けたとされる人数の約二十二分の一に過ぎない。殉教者の数で計るなら異教徒が行った迫害はキリスト教徒が行った迫害より恐ろしいものではない。しかし前者が圧倒的に残虐に見える一面がある。そして真実の歴史家であれば、間違った気遣いを排して、それを堂々と述べない訳にはいかないだろう。属州総督の行動は、勅令によって迫害を強いられたときでさえ、しばしば際立って慈悲深いものだった。キリスト教徒の記録には、キリスト教徒の搜索を拒否し、告発者を冷遇し、あるいは処罰し、巧妙な脱法行為を提案し、その目にはばかげた頑固さと映ったものに打ち勝とうと真剣かつ忍耐強い親切心を発揮し、その努力が無駄になると、宣告せざるを得ない判決を自らの権限で軽減した統治者の例がいくつもある。教会の著名な指導者や、時に盲従的な人々を除けば、誰かが危険にさらされることは非常に稀だった。裁判の前に与えられた時間は、彼らに逃げるための大きな便宜を与え、

死刑判決を受けたときでさえ、キリスト教徒の女性は通常牢獄に彼らを訪問し、キリスト教的愛によって彼らを慰めることを完全に許されていた。しかしその一方で、議論の余地のないキリスト教徒の著作には、異端審問の最悪の恐怖がcaすむほどの、恐ろしく、忌まわしい蛮行が絶えず改宗者に加えられたことが記録されている。異端者をゆっくりと火炙りにするのは異端審問官の得意とするところであり、彼らがその時代で最も有能な拷問の達人だったことは事実である。あるカトリックの国では、宗教的な意見ゆえに生きたまま焼かれる人間を見世物として公共の祭典に取り入れるという残酷な習慣があったのは事実である。殉教者の行為の大部分は嘘つき修道士による見え透いた偽造であることも事実である。しかし異教徒の迫害に関する真正正銘の記録の中に、人間の本性が沈み得る残酷性の深さと、達成し得る抵抗のヒロイズムの両方を、おそらく他の何よりも生き生きと示している歴史があることも事実である。かつてローマ人には、その厳しくもシンプルな刑法において、残酷な行為や長時間の拷問を一切認めていないことを正当に誇ってよい時代があった。しかし、すべては変わってしまった。人間の苦痛と死の光景をあらゆる階級の楽しみとしたあの憎むべき競技は、ローマの名が知られるあらゆる場所にその残忍な影響を広め、何百万もの人々を人間の苦悶の光景に完全に冷淡にさせ、先進文明の本当の中心で、多くの人々の心にアフリカやアメリカの野蛮人並みの拷問への興味と情熱、苦痛の極限の痙攣を見ることがの歓喜と興奮を生み出したのである。記録されている最も恐ろしい拷問は、たいてい闘技場で民衆によって、あるいは民衆の目の前で行われたものだった。キリスト教徒たちが赤熱した鉄の椅子に縛られ、半ば焼き尽くされ

た肉の臭いが息苦しい雲になって天に昇っていく様子、貝殻や鉄の鉤で骨が露出するまで引き裂かれた人々のこと、剣闘士の欲望や女衞に差し出された清い乙女たちのこと、あるとき二百二十七人の改宗者が鉾山に送られ、それぞれが赤熱した鉄で片足の腱を切断され、眼窩から目をえぐり出されたこと、火が非常にゆっくりとかけられ、犠牲者は何時間ものうち回っていたこと、体から次々と手足がもがれたり、溶けた鉛をかけられたりしたこと、塩と酢を混ぜたものが処刑台の上で流血している肉体に注がれたこと、拷問は朝から晩まで様々な方法で続けられたことを私たちは読む。ひとこと言いさえすれば解放されるのに、主なる神への愛と、真実と信じる大義のために人々は、そしてか弱い少女たちがさえ、怯むことなくこれらの苦しみに耐えたのである。後世の司祭たちの行いに対して私たちが抱くいかなる思いも、殉教者の墓の前に頭を垂れる敬虔な気持ちを損なうことはない。

第四章 コンスタンティヌスからシャルルマーニュまで

前章においてローマにおけるキリスト教の勝利を確実にした要因と、キリスト教が打ち負かした反対勢力の特徴について私が述べたことは簡潔ではあるが、全く不明瞭なものではないと信じている。次に新しい宗教が導入した道徳的理想の性質と、それを実現しようとした方法について検討を進めよう。そして、この調査の冒頭において重大な誤りから身を守らなければならない。多くの人々にとって、キリスト教の教えをマルクス・アウレリウスやセネカの著作の対応箇所と並べてキリスト教と異教を比較し、哲学的な教えに対するキリスト教の優越を全てキリスト教がもたらした道徳的進歩と考えるのは普通のことである。しかし、そのような結論が不当なことは少し考えただけで分かる。異教徒の倫理は哲学の一部だった。キリスト教の倫理は宗教の一部だった。前者は少数の高度な教養人の思索であり、人類の大衆に直接影響を与えることはなかったし、与えることもできなかった。後者は少なくとも最も無知な者にも最も教養ある者にも、同様に強力に働きかける広大な宗教システムの礼拝、希望、恐怖と不可分に結びついていた。異教徒の宗教の主目的は、未来を予言し、宇宙を説き明かし、災いを避け、神々の助けを得ることだった。異教徒の宗教には私たちの説教の制度、聖体拝領ための道徳的準備、告解、聖書の朗読、宗教教育、霊的恩寵のための合同の祈祷に相当する道徳教育の手段はなかった。人々の徳を高めることは医者役目ではないの

と同様に、神官の役目でもなかった。一方、哲学的な義務の解説は神殿の宗教的儀式とは全く無関係だった。この二つの領域を融合させること、宗教に徳育を組み入れること、そうして儀式の遵守によって、人類の最も普遍的で強力な情熱の一つであることが経験的に知られている、天と直接交わりたいたいという願望を味方にするのがキリスト教が挙げた最も重要な成果だった。この方面においてすでに何らかの試みがあったことには疑いがない。哲学は修辞学者たちの手によって、より一般的なものになっていった。ピタゴラスは心を清めるための宗教的な儀式を命じていた。そして特に東洋の宗教では贖罪の儀式が一般的だった。しかしキリスト教の特徴は、その道徳的な影響が間接的でも、気軽でも、よそよそしくも、散発的でもないことだった。すべての異教徒の宗教と違って、キリスト教は道徳教育を聖職者の主な役割とし、道徳的統制を礼拝の主目的とし、道徳的な性質を適切な儀式の挙行のための必要条件にしたのである。説教壇、儀式、そして持てる力のすべてを使って、それは人類の再生のために組織的かつ根気よく努力した。その影響によって、古代の最も高貴な知性だけがかりうじて把握することができた神の本質、魂の不滅、人間の義務に関する教義が、村の学校の公理になり、田舎家や路地の諺になったのである。

しかし、徳に対する新しい動機を導入することなしには、キリスト教の聖典の美しさも、宗教儀式の完璧さも、この偉大な成果を挙げることはできなかつただろう。この動機には私心のあるものもないものがあるが、キリスト教はそのどちらにも大きな影響を及ぼした。第一に、キリスト教は

来世と罪の性質に関する教えによって、完全な革命をもたらした。異教徒の間では来世の教義はあまりにも漠然としていたため、一般的に強い影響力を持つことはなかった。それに最も熱心に執着していた哲学者たちでさえ、それを単なる慰めの光としてしか見ていなかった。キリスト教はこれを最も強い抑止力にした。永遠の苦しみや人類の迷走という教義に加えて、厳密な個人の懲罰という考え方は、極めて独創的であると言わざるを得ない。大罪を犯したり、重大な義務を怠ったりすれば、来世で償わされるかもしれないという考えは、確かに異教徒にとっても身近なものだった。しかしそれは彼らの生活にほとんど影響を与えず、最悪の犯罪者にさえ、キリスト教徒の伝記に顕著な、死の床における悔恨の念を稀にしか、あるいはまったく示さなかった。しかし、キリスト教における小さな罪の重大さ、人生の細部はすべて来世で精査されるという信念、歴史家や伝記記者が留意しないような人格の弱さや義務の小さな違反、社会に何の影響も及ぼさないようなこと、人類の間でほとんど論評されないようなことが、墓の向こうで永遠の非難を受ける根拠になるという考え方は、古代人にはまったく知られていなかった。そしてそれが目新しくあらゆる点で新鮮だったときには、人格を変えるために打ってつけた。異教徒の哲学者の目は常に徳に向けられ、キリスト教徒の指導者の目は罪に向けられていた。前者は聖なるものの美しさを褒め称えることで、後者は悔悟の念を起こさせることで人の行いを改めさせようとした。それぞれの方法には長所もあれば短所もあった。哲学は人間に威厳を与え、高貴にすることには見事に適していたが、再生させることには全く無力だった。哲学は徳を奨励することには大いに貢献したが、悪徳を抑制すること

にはほとんど、あるいはまったく貢献しなかった。徳の趣味嗜好が形成され、培われ、その実践は多くの人々を引きつけた。しかし他のあらゆる高い嗜好と同じく、一度完全に損なわれてしまった性質はこの嗜好を全く受け入れることができなかつた。そして、キリスト教によって継続的にもたらされたこうした性質の変容は、それが自認するとおり哲学の力の及ばないものだった。徳の美と尊厳に全く無感覚な人間が、裁きの恐怖に打ちのめされ、罪に対する真の後悔に目覚めたならば、その氣質の傾向を逆転させ、最も根深い習慣から離れ、人生全体の方針を改めることさえあるというのは、経験によって十分に示されているところである。

しかし、人間の性質の暗い面を主に強調する習慣はキリスト教の教えの再生の効果に大いに貢献したとはいえ、欠点がなかつたわけではない。神学者は性質をその逸脱によって測定することを習慣とするため、偉大な徳と大きな欠点が釣り合っているような強く情熱的な性質を評価する際には通常、重大な不公平に陥ってきた。そしてこれは弁解できないことである。なぜなら彼ら自身の著作の中でダビデ（*BC1040—961）の詩篇が、姦通者や殺人者（*ダビデは人妻と姦通し、夫を激戦地に送って戦死させた）の中にも高貴で優しく情熱的な性質が生き残り得ることをはつきりと証明しているからである。またこの罪の意識を通じて働きかけることを習慣として、また人間を異常で道を外れた状態にあるように見せようとして、彼らは絶えず人間の性質を歪めて卑下する見解を提示し、人間を完全に悪に支配されているものと表現した。そして時には異教徒の徳そのもの

のを罪の本質と宣告するほどの放縱の高みにまで達したのである。しかし人間の性質の中で最も例外的で特徴的なものは、その悪ではなく、その卓越性であるというのは最も確かなことである。それは動物界のさまざまな領域で同じように、あるいはそれ以上の程度で見られる官能性、残酷さ、利己主義、情欲、妬みではない。それはすべての被造物の中でただ一種類、人間だけが持つ、自分の感情を分類し、欲望の奔流に抵抗し、道徳的完成を目指すことを可能にする、あの道徳的性質である。また文明化され、それゆえ啓発された人物において善が悪よりはるかに優勢であることも確かである。慈悲心は残酷さより一般的であり、苦しみを見れば喜びより憐れみが生じ、恩恵を受けたら感謝しないよりも感謝するのが普通である。人間の共感自然にヒロイズムや善に向かうものであり、悪そのものは通常、それ自体の性質としては完全に無害な性向の誇張や歪曲に過ぎないのである。

しかし一部のプロテスタントにおいて極限に達しているこのような人間の墮落の誇張は、最初の三世紀の教会には見られない。罪の意識はまだ人間の中に存在する善の否定を伴ってはいなかった。キリスト教は罪からというより、むしろ誤りからの救済と考えられていた。異教徒がよく墓に刻む「それに相応しい(*well deserving)」という形容詞がキリスト教徒のカタコンバにも好んで刻まれていたことは重要な事実である。ペラギウス(*AD354-440) 論争(*原罪の否定)、聖アウグスティヌスの教え、禁欲主義の進展によって人間の完全な墮落の教義が徐々

に導入され、後の時代に卑劣な迷信の豊かな源泉になった。

罪の概念を維持し、明確にするために初期の教会は念入りな制度を使用した。教会での定期的な聖体拝領は最も重要なものと考えられていた。秘跡への参加は永遠の生命に不可欠と信じられていた。非常に早い時期からそれは乳児に与えられており、このことは聖キプリアヌスの時代にはすでに教会の中で普遍的なものになっていた。そして少なくとも何人かの神父は乳児の救済のためには普通にそれが必要であると宣言していた。成人は毎日、教会によっては週に四回秘跡を受けるのが通例だった。迫害の時代にもキリスト教徒が省略することに同意したのは半ば現世的な愛餐だけだった。聖職者たちは儀式への参加の可否の決定権を持っていた。そして彼らは敬われていたため、聖体拝領の条件を独自に決定することができた。

このような環境から、ごく自然に、広大な道徳的規律の体系が生まれた。人がある種の道徳的な性質を持つていないなら聖なる食卓につくのは適切なことではない、と常に認識されていた。そして、懺悔の期間によって罪を償うことなしに聖体拝領は許されない、とすぐに付け加えられた。宗教的儀式の長期間の欠席、婚前交渉、売春、姦淫、剣闘士や役者の職業に就くこと、偶像崇拜、迫害者の味方をしてキリスト教徒を裏切ること、少年愛や不自然な愛など、非常に程度の異なる多数の犯罪が指定され、それぞれに明確な宗教的罰則が設けられた。最も軽い罰は数週間の聖体拝領の

剥奪だった。より重い罪を犯した者は一年、十年、あるいは死の直前までそれを剥奪され、場合によっては、より重い破門、すなわち永遠の聖体拝領剥奪を宣告された。懺悔の期間中、懺悔者は夫婦の寢床やその他のあらゆる快樂を断ち、主に宗教的な課題に時間を費やすことを強いられた。彼は聖体拝領を再開する前に、袋地の服を着て、頭から灰をかぶり、髪をそり落として、集まったキリスト教徒たちの前で聖職者の足元に身を投げ、大声で自分の罪を告白し、赦しを請うのが通例だった。破門された者はキリスト教の儀式から永遠に追放されるだけでなく、かつての友人たちとの交流も断ち切られた。キリスト教徒たちは自分が破門されることを恐れて、彼と一緒に食事したり、話そうとしたりしなかった。彼は現世で憎まれながら孤独に生きなければならず、来世は地獄行きと決まっているのである。

宗教的恐怖政治に基づくこの法体系は初期の教会史の最も重要な部分の一つであり、公会議の主目的はこれを発展させ、あるいは修正することだった。告解はまだ習慣的で普遍的に義務づけられた儀式ではなく、また悪評の高い罪の場合にのみ要求されたが、この制度の中に潜在的あるいは萌芽的なものではなく、完全に行動として現れた、最も圧倒的な教會的専制主義があることは明白である。確かに聖職者が人々の救済に不可欠とされるものを与えない権利を持ったことはローマの最悪の迷信の基礎を築いた。しかし他方で非常に価値ある道德的効果をもたらした。あらゆる法制度は教育制度であり、人の心に善悪やそれぞれの罪の重さに関する一定の概念を定着させるからであ

る。そして教会の懺悔の規律ほど最も厳肅に執行され、最も直接的に宗教的感覚に訴えかけた法律はなかった。教会はおそらく他のどのような機関よりも、罪の重大さとその報いを確信させた。またそれはキリスト教が人類に対して使った一つの大きな梃子のうちの一つだった。

しかし、もし人間の本性の利己的、私利的な面へのキリスト教の訴求力が驚くべきものだったとしても、その無私の熱意に対する絶対的な支配こそ、はるかに驚くべきものだった。プラトン主義者は神に倣うことを、ストア派は理性に従うことを、キリスト教徒はキリストを愛することを熱心に説いた。後代のストア派はしばしば理想的な賢者の中にその卓越性の概念を統合した。エピクテトスは弟子たちに誰か卓越した人物を設定し、彼が常に自分の近くにいるように想像することさえ促していた。しかしストア派の理想は真似るための手本になるのが関の山で、それへの称賛が愛情にまで深まることはなかった。キリスト教には、十八世紀の間あらゆる変化を通じて、人々の心に熱烈な愛を呼び起こし、あらゆる時代、民族、気質、境遇に働きかける力を示し、単に最も高い徳の原型だったのみならず実践の最も強い動機であり、三年間という短い活動のシンプルな記録が哲学者たちのあらゆる論考やモラリストのあらゆる説教よりも人類を再生し、和らげるのに役立つと言えほどの深い影響を及ぼしてきた、理想的な性格を世界に提示することが運命づけられていたのである。これがキリスト教徒の生活における最良のもの、最も純粋なもの、源泉だった。あらゆる罪と失敗の中で、また教会を汚したあらゆる偽善売教と迫害と狂信の中で、教会はその開

祖の人格と模範の中に、永続的な再生の原理を維持してきたのである。完全な愛は権利というものを知らない。それは限らない、打算のない自我の否定を生み出し、人格を変え、あらゆる徳の親になるものである。キリスト教には、恐怖政治や教条主義の迷信と隣り合わせに、天国も地獄も消し去って、神のみに仕えたいと願った聖テレジア（*アピラの、1515—1582、神秘家、修道院改革者）に共鳴する人々が常に存在してきたし、キリストの愛の力はキリスト教徒の殉教の最も雄々しいページ、キリスト教徒の忍従の最も悲壮なページ、キリスト教徒の博愛の最も優しいページに等しく示されてきたのである。殉教者たちは、獣の牙の下に身を投じ、最後の瞬間まで愛する十字架の形に腕を伸ばし、戦いの勳章として鎖を一緒に埋めるように頼み、その恐ろしい傷をキリストのために受けたのだからと喜んで見つめ、花婿が花嫁を歓迎するように、自分を神のもとに近づける死を歓迎したのである。聖フェリシタスは牢獄で殉教の時を待っているときに産みの苦しみに襲われた。苦しみのあまり彼女が叫び声を上げると、そばにいた者が言った。「今、こんなに苦しんでいるなら、野獣の前ではどうなってしまうのでしょうか？」彼女は答えた「今の苦しみは私だけのものです。でも、その時には私の方のために苦しむお方がともに苦しんで下さるでしょう。」聖メラニア（*AD384—438、ローマ生まれ、エルサレムに女子修道院を設立）は夫と二人の息子を失ったとき、愛する者たちの遺骸が横たわるベッドに跪いて、こう叫んだ。「主よ、あなたが私の重荷を軽くしてくださいとおかげで、私はより謙虚に、より容易くあなたに仕えることができらるでしょう」

キリスト教の徳を聖アウグスティヌスは「愛の命令（*order、秩序）」と表現した。ほとんどの人々においていかにシンプルな義務感が情熱のエネルギーに逆らえないかを知っている人物、高貴な道徳と純粋な神学が生きた模範と結びつかなかったため、いかにイスラム教徒がより高い、より優しいすべての徳を生み出さなかったかを観察した人物、とりわけキリスト教会の歴史を通してキリストの愛の力を追跡した人物は、迷うことなくキリスト教徒の熱意の最も純粋で最も特色ある源泉の価値を評価するだろう。ある点において、それが初期の教会に与えた影響を私たちはほとんど理解できない。現在では自然法則の不変性の感覚が人の心に深く刻み込まれていて、どのような宗教的見解を持っていようと、真に教育を受けた人物が自分の周りの周りの驚くべき現象―嵐、地震、侵略、飢饉―はすべて超自然的な力が個別に働いた結果であり、人間の何らかの利害に影響を与えようとしていると真剣に信じることはない。しかし初期のキリスト教徒はこれらのことをすべて、彼らが心から愛した主に直接帰することができた。この確信の結果、今ではほとんど理解できないような感覚が生まれた。ある偉大な詩人（*パーシー・ビッシュ・シェリー、1792―1822）は、英文学の中でも最も高貴な詩（*“Adonais”）の一節で、死に際してすべてに充滿する自然の魂と一体化した人物、宇宙の同種の要素に溶け込んでいる彼の存在の壮大さと優しさ、美しさと情熱、あらゆるメロデーの中に聞こえるその声、地球に浸透し生気を与える一つの可塑的エネルギーの一部として感じられ知られるべき存在である彼の魂について歌っている。こういう種

類の、しかしはるかに鮮明で現実的な性格のものが初期のキリスト教世界の信仰だった。彼らにとつては愛が万物の形を変えていた。そのすべての現象、すべての破局は新しい光の下で読まれ、新しい意義を授けられ、宗教的尊厳を身に着けた。キリスト教は永遠の生命や千年後の栄光の期待よりも深い慰めを与えた。疲れた人、悲しんでいる人、孤独な人に天を仰ぎ「神よ、我を顧み給え。」と言うよう教えたのである。

道徳的な卓越性を説き聞かせることを主目的とし、来世の報いの教義によって、その組織化によって、また無私の熱意を生み出す力によって、人間の心に対して比類なき支配力を獲得した宗教制度がその信者たちの尊厳を非常に高めたとしても驚くには当たらないだろう。それがヨーロッパに設立されてから二百年近く、キリスト教共同体が道徳的な純粹さを示し、それに匹敵するものがあったとしても、それを超えるものが長い間なかったことは確かにほとんど疑いの余地がない。周囲のローマ世界から完全に切り離され、政治的生活も、裁判に訴えることも、軍事的職業も禁じられ、主の即時の再臨と自分たちの住む帝国の滅亡を絶えず待ち望み、若い宗教のあらゆる熱情に励まされて、キリスト教徒は彼らの中に、時代の汚濁から身を守るのに十分強力な考え方と感覚の秩序を丸ごと見いだしたのである。社会に対する一般的な態度や、宗教的な戒律の性質や緻密さにおいて、彼らはおそらく既存のどの宗派よりもクエーカー教徒に似ていた。デキウスの迫害以前には実際に深刻な道徳的退廃の兆候が見られたようである。そして教会の勝利が大勢の名ばかりのキリスト教

徒をその中に引き込み、富と繁栄の誘惑に晒し、その世俗政治との結びつきを強いることによって、その熱意を冷まし、純粹さを損なつたことは明らかである。しかし、最初の三世紀にキリスト教について考えた人々の中に、キリスト教が周囲の異教信仰に完全に取って代わり、その指導者たちが最も強大な君主たちを意のままに従わせ、法律のあらゆるページにその影響を刻み、千年にわたつて文明の全ての方針を指図し、しかも彼らが最高の地位にあつた時代が歴史上最も卑劣な時代の一つになるなどと想像した人物は誰もいなかったらう。

この時代の主な特徴を簡単に説明しよう。マルクス・アウレリウスの死後、キリスト教がローマ世界に重要な影響を及ぼすようになった頃、帝国の退廃は急速に、ほとんど絶えることなく進行していた。初代キリスト教皇帝は異教の伝統と栄華に汚染されていない新しい都市に首都を移した。そして彼はそこにキリスト教をすべての倫理の源泉とする帝国を設立し、約千百年間存続させたのである。そのビザンツ帝国についての歴史の一般的な評決は、ほとんど例外なく、それは文明がこれまでに取りつた中で最も徹底的に卑しく、見下げ果てた形を取つていた、というものである。非常に残酷で官能的ではあつたが、残酷さがより無慈悲で、官能がより奔放だつた時代もあつた。しかし、偉大さの形や要素がこれほど完全に欠落した永続的な文明は他になく、卑劣という諷刺がこれほど強く当てはまる文明もなかったらう。ビザンツ帝国はとりわけ不実の時代だつた。その悪徳は徳を学ぶことなく勇敢さを失つた人間の悪徳だつた。愛国心もなく、自由特権の達成も欲求もな

く、宗教的興奮の最初の激発の後、非凡の才も知的活動もなかった。奴隸たちや自発的奴隸たちは行動と思考において官能と最も軽薄な快樂に浸り、無氣力から脱することができるのは神学上の細かな相違や戦車レースの競争の刺激によって狂乱の暴動を起こすときだけだった。彼らは先進的な文明の外観をすべて備えていた。彼らは知識を持ち、最も高尚なヒロイズムが漲る古代ギリシヤの高貴な文献を絶えず目の前にしていた。しかし、後にヨーロッパの復活に大いに貢献したその文献は、墮落したギリシヤ人たちに高貴さの火花や外観を与えることはできなかった。この帝国の歴史は司祭、宦官、女性たちの共謀、毒殺、陰謀、一様な忘恩、絶え間ない兄弟殺しの単調な物語である。コンスタンティヌスの改宗後、ローマ帝国のどの地域にもネロやヘリオガバルスほど墮落した、あるいは少なくとも恥知らずな君主はいなかった。しかし、ビザンツ帝国にはアントニヌス（*ピウス）やマルクス・アウレリウスに僅かでも似た人物はいなかった。東ローマ帝国でそれに最も近かったのは、キリスト教信仰を軽蔑して棄教した皇帝ユリアヌスだった。そしてついに、イスラム教徒の侵攻によって東ローマ帝国の長い衰退が終わった。コンスタンチノーブルは新月旗の下に沈んだ。その住民たちはまさにその崩壊の時まで神学上の相違点について口論していたのである。

アジアの諸教会はすでに滅んでいた。小アジアの放埒な都市に植え付けられたキリスト教信仰は、多くの狂信的な禁欲主義者と少数の著名な神学者を生み出した。しかし一般の人々には何の革新的効果ももたらさなかった。それは彼らの間に果てしなく続く執念深い不和の原理を導入したが、彼

らの贅沢や官能性を目に見えて和らげることはほとんどなかった。放縱の狂乱は止まることを知らなかった。そして実際のところ、帝国の大部分においてそれが絶頂に達したのはキリスト教が勝利した後のことだったようである。

西帝国の状況はいくらか違っていた。コンスタンティヌスの改宗から一世紀も経たないうちに帝都はアラリックに占領された。そして蛮族の侵略が長々と続いて、ついにローマ社会の枠組み全体が崩壊した。一方蛮族は自らキリスト教信仰を取り入れ、キリスト教の司祭に絶対的に服従した。古代のすべての宝の保護者として生き残った教会にはその人類の卓越性の理想を実現するための未開拓地が与えられたのである。教会もまた期待に応えることはできなかった。それは何世紀にもわたって人類の思想と行動をほとんど絶対的に支配し、あらゆる部分に教会の影響力が浸透している文明を作り上げた。そしてカトリックが支配した、暗黒時代と呼ばれるにふさわしい時代には間違いない、偉大で真に卓越した特徴が数多く見られる。積極的な慈善、敬虔な精神、忠誠心、協力的な習慣において、彼らは異教徒の最も高貴な時代をはるかに凌駕していた。そして苦しみを与えることを嫌う慈悲においてローマ文明より、貞操への敬意においてギリシャ文明より優れていた。一方、市民的、愛国的な徳、自由特権への愛、生み出した偉大な人物の数と輝かしさ、作り上げた氣質の威厳と美しさのタイプにおいて、彼らの地位は最良の異教徒文明より限りなく低いものだった。彼らは騒乱、無政府、不正義、戦争を十分に経験した。そしてすべての知的な徳において、彼らの

時代はおそらく人類の歴史の中で最も低いものだっただろう。あらゆる意見の相違に対する果てしない不寛容は、同様にあらゆる虚偽と、公認された見解に与する意図的な詐欺への果てしない寛容と結びついた。信じ易さは徳であると説かれ、すべての結論は権威によって規定され、何世紀にもわたってほとんど行動を停止していた人間の心には瀕死の麻痺状態が腰を下ろしていた。そして事実上それを打ち破ることができたのはイタリアにおける産業共和国の勃興に伴う、吟味し、革新し、自由に考える習慣だけだった。司祭や修道士を除いて、キリスト教の勝利から十四世紀までの間のどの時代よりも、アテネ共和国やローマ共和国の最盛期、アウグストゥスの時代やアントニヌス朝の時代に生きたかっと思わない人々はいないだろう。

古代にはほとんど知られていなかった何らかの善の要素や原理を神学が世界に導入したことに間違いがなかろうと、社会に与える感化あるいは緩和の力の価値が計り知れないものであろうと、ギリシャ正教やカトリック教会のような形でそれが文明を監督する裁定者になることは決して人類のためにならないということの証拠として、コンスタンティヌスの改宗から千二百年の歴史ほど明確なものも考えられない。コンスタンティヌス以前のローマ世界は急速な衰退期にあった、後の時代の多くの逸脱は半ば抑圧されていた異教の伝統と活力によって説明できる、教会の力はしばしば至高というよりは名目上の表面的なものだった、暗黒時代の無知を批判するには野蛮人による社会の混乱を大きく割り引かなければならない、とよく言われる。この中には多くの真実が含まれている。

しかし、ビザンツ帝国では異教徒の伝統から解放され、千年以上にわたって野蛮人に支配されなかった新しい首都で神学の刷新の力が試されたこと、西方では侵略の衝撃が収まった後の少なくとも七百年間、教会が他のどんな道徳的、知的機関よりも絶対的な支配力を行使したことを思うなら、私が思うに、この実験は既に十二分に行われたと言っているまいだろう。古代の甚だしい悪徳の一覽表を作り、キリスト教の著作の純粹な道徳と対比させるのは簡単である。しかし、実現された改良を正しく評価しようとするなら、古典文明と教会文明の全体を比較し、それぞれの場合において抑制した悪徳だけでなく、到達した確かな卓越性の程度と種類についても観察しなければならぬ。キリスト教会の最初の二世紀には道徳的な気高さは極めて著しいものであり、それは信仰の神性の証として絶えず訴え続けられた。しかし、コンスタンティヌスの改宗の前世紀には既に著しい落ち込みが見られていた。コンスタンティヌス以降の二世紀を教父たちは一様に、全般的でスキャンダラスな悪徳の時代と表現している。その後が続いた教會的な文明は、その独特の長所がないわけではないが、教会による社会の再生、というよくある自画自賛を正当化するものではないことは確かである。今から過去三世紀の間に文明は、ほとんどの点において、それ以前のどの文明よりも高い水準に達した、と少なくとも私は固く信じている。しかし神学的倫理は非常に重要ではあっても、その卓越性の多くの複雑な要素の一つに過ぎない。機械の発明、産業生活の習慣、自然科学的発見、政府の改善、文学の発展、異教徒の古代の伝統など、すべては際立った位置を占めている。その一方で、その歴史を十分に調査すればするほど、二つの重要な真実がより明白に暴露される。第一は、

神学の影響が何世紀にもわたってキリスト教ヨーロッパの全知性を無感覚に麻痺させてきたこと、私たちの近代文明の出発点となった復興は、主に知性の二つの領域が依然としてカトリックの笏に支配されていなかったという事実に関るといふことである。古代の異教徒の文献と、イスラム教徒の科学の学派はキリスト教国の眠っていたエネルギーを蘇らせる主要な力だった。第二の事実は、別のところでも詳しく説明したが、三世紀以上の間、神学の影響の後退が私たちの進歩の最も不変の兆候と物差しの一つだったということである。医学、物理学、商業利益、政治、そして倫理においてさえ、改革者はその道を阻む神学の断定的主張に直面した。それらは極めて重要なものとして全面的に擁護されたが、やがて文明の世俗化の力の前に全面的な屈服を余儀なくされたのである。

ここに非常に興味深く重要な問題がある。私は本章でそれについて調査しようと思う。道徳的な教えの美しさよりも、人類に働きかける力において際立っており、ここ数世紀は世界に無数の恵みをもたらしてきた宗教が、なぜこれほど長い期間に渡って、しかもさまざま条件でヨーロッパを再生することがまったくできなかつたのか、その理由を私たちは明らかにしなければならない。これは気の緩みや不完全な行動の問題ではなく、相反する作用の問題である。カトリックという広大で複雑な組織には、人類を改善し、向上させるために見事な力を発揮する部分があった。また、正反対の効果をもたらす部分もあった。

キリスト教が最初に世界に示した一面は、キリストにある人間の友愛を宣言するものだった。幸と不幸（*天国と地獄）の両極端を運命づけられ、救済の特別な共同体によって互いに結ばれている不滅の存在と考えられたために、キリスト教徒の人間の最初の、そして最も明白な義務は、その仲間を神聖な存在として見ることであった。そしてこの観念から、すべての人間の生命の神聖さについての極めてキリスト教的な考え方が育まれたのである。私はすでに自然は人間に、故なく同じ人間を殺すのは間違いであるとは言っていないことを示そうとした―そしてこの事実は生得の道德的認識の实在性に対する一般的な反論に応える上で、非常に重要なので退屈を承知であえて繰り返すことにする。人間的な高次の能力が未発達で、ほとんど萌芽の状態にある野蛮な初期段階について言及するまでもなく、特定の階級や民族の人間を虐殺することに、狩りで動物を虐殺することと同様に、何の後ろめたさも持たなかった、洗練された、さらには道德的ですらあった社会が存在した、というのは議論の余地がない歴史的事実である。初期のギリシャ人は野蛮人に対して、ローマ人は剣闘士に対して、歴史のある時期には奴隷に対して、スペイン人はインディアンに対して、ヨーロッパの監督から離れたほとんどすべての植民者は下位の人種に対して、古代の膨大な数の国々は生まれただけの嬰兒に対して、この完全で絶対的な非情さを示しており、私たちの島でも過去三百年以内のその痕跡を見つけられるだろう。（*原注…対アイルランド、スコットランド）そして、あらゆる理不尽な殺戮を残酷と見なすことが私たちの道德感覚の本質的な部分になった現代においてそれを実感するのは難しいかもしれない。しかし、善良な人々や、他のあらゆる点でどの時代にお

いても際立った慈愛の持ち主とされただろう人々がこの冷酷さを絶えず示してきたことは疑いようのない事実である。チューダー朝の時代には、最良のイギリス人が今では最も野蛮なスポーツとみなされるものを楽しんでいた。古代には真の慈愛を持った人々―優しい親戚、愛情のある友人、情け深い隣人でもあった人々―そして私たちと同様に同胞を殺すことを残虐と見ていた人々が、剣闘士競技を観覧し、開催し、拍手を送り、また幼児の遺棄を躊躇なく勧めていたというのは絶対的に確実なことである。しかし、このような事実の積み重ねが生得的な道徳的知覚の實在にごくわずかな疑いを投げかける、という非常に一般的な想像は完全に混乱した考え方であると私は思っている。直観的モラリストが主張するのは、慈愛深さと残酷さの間に区別があることを私たちは生まれながらにして知っているということ、前者は私たちの本性のより高い部分、より優れた部分に属し、それを培うことが私たちの義務であるということだけである。その時代の基準はそれ自体、社会の一般的な状態によって決定されるものであって、義務の自然な線を引いているものである。その下に落ちる人物はそれを押し下げているのである。さて基準について最も大きく異なっていた国や時代が、完全に一致して慈愛の卓越性を認めていたということは最も絶対的に確かな事実だろう。嬰兒殺しを推奨したプラトン、老いた奴隷を売ったカトー、闘技場の試合を称賛したプリニウス、捕虜を奴隷や剣闘士にした昔の將軍と、捕虜に何ら不面目な労働を課さない現代の將軍は同じく、法典を拷問や切断刑や恐ろしい形の死刑で埋め尽くした昔の立法者も、最も罪深い者の処罰を軽減しようとは絶えず努力している現代の立法者と同じく、力で支配した昔の規律励行者も、共感で支配する

現代の指導者と同じく、その首に揺れる投げ矢の爆竹が火を噴き、狂乱する雄牛を眺めて黒い瞳を歓喜に輝かせるスペイン娘も、その感じやすい慈愛ゆえ狩猟に身震いするイギリス婦人も、時々出会ふ、あらゆる野外スポーツや食用の動物の屠殺を嫌悪し、あるいは命の犠牲を最小限にするために大きな動物だけを食べようとする改革者も、あるいは動物を楽に死なせる新しい方法を常に発明している人々も―これらの人々はすべて、その行動や、どのようなものを「残忍」と呼ぶべきか、またどのようなものを「素晴らしい」と呼ぶべきかの判断において大きく異なるが、慈愛は残酷さに勝ると信じていること、その国や時代の基準を下回る行為をはっきりと非難することでは一致しているのである。さて、キリスト教がもたらした最も重要な功績の一つは、私たちの博愛の情を大いに高めたことに加え、娯楽や単なる便宜のために人命を奪うことの罪深さを明確に、そして教義によって主張し、それによって当時世界に存在した中で最も高い、新しい基準を作ったことである。

この点におけるキリスト教の影響は人生の最も初期の段階から始まっていた。古代において中絶という行為に深い非難の感覚を持つ人物はほとんどいなかった。胎児は出生の時まで生物ではないとする生理学的理論が、この行為への判断に何らかの影響を与えていたことを前の章で指摘した。そしてこの理論が一般的ではなかった地域でも、この行為が普及していたことは簡単に分かる。胎児の死は同情心に強く訴えるものではない。そして人間の生命の神聖さについてまだ強い感覚を持っていない人々は、これらの問題について共同体の一般的利益に従って、功利主義的見解によって

行動を調整して良いと信じていた。そこで多くの場合、産児制限は慈悲の行為である、と非常に容易に結論したのである。ギリシャではアリストテレスがこの習慣を容認しただけでなく、人口が指定された一定の限度を超えた場合には法律で強制することを望んだほどである。ギリシャにも、ローマ共和国にも、帝国の大部分にも、これを咎める法律はなかった。そして、もし考えられているように、異教徒の帝国が終わる前にこれを咎める何らかの措置がとられていたとしても、それは全く効力がなかった。異教徒、キリスト教徒を問わず、多くの論者がこれの習慣を公然のもの、またほとんど一般的なものと表現している。彼らはこの習慣を、単に不身持ちや貧困からではなく、母親たちが出産による容貌の劣化を恐れる虚栄心というとても軽い動機から生じたものとしている。彼らは墮胎したことの無い母親は称賛に値すると語り、その罪の頻度はそれが正式の職業になるほどのものだったと断言している。同時にオウイデイウス、セネカ、アルルのストア派ファウオリス、プルタルコス、ユウエナリスは、いずれも中絶を一般的かつ悪名高いものと語っており、それを疑いようのない犯罪としている。後期の異教時代の平均的なローマ人はそれを、前世紀のイギリス人のお祭り騒ぎの不行跡のように、確かに間違っただけで、非難するほどのこともない些細な事と考えていたようである。

キリスト教徒たちの言い分は最初から大きく違っていた。揺るぎない一貫性と最大の強調によって、彼らはこの行為を単に残酷なものとしてではなく、はっきりと殺人として糾弾したのである。

教会の懺悔の規律では中絶は嬰兒殺しと同じカテゴリーに分類された。そして、罪を犯した者が受ける厳しい宣告は単なる戒告よりも深く、その罪の重大さをキリスト教徒の心に刻み込んだのである。アンカラ教会会議で、罪を犯した母親は死の直前まで秘跡から除外されることになった。まもなくこの罰はまず十年、後に七年の懺悔に軽減されたが、依然としてこの罪は教会法において最も重いものの一つに数えられていた。この領域におけるキリスト教の改革は、神父たちの神学全体の中でおそらく最も忌まわしい教義によって強力に支えられていたのである。異教徒にとっては、中絶や嬰兒殺しを非難するときでさえ、これらの犯罪は比較的些細なものと思われていた。なぜなら犠牲者は非常に取りに足りない存在で、その苦しみも非常に軽いものと思われたからである。事業と希望の真っ只中で倒れ、周囲の多くの人々と愛と友情の絆で結ばれ、その旅立ちが彼が活動してきた社会に動揺と傷心をもたらす成人男性の死と、地上とほとんど接触がなく、責任も愛もほとんど知らない生まれたばかりの幼児の痛みを伴わない死が引き起こす感情はまったく違ったものである。しかし神学者にとって、この幼子の命は恐るべき重要性をもっていた。子宮の中の胎児が生を得た瞬間、それは不滅の存在となり、たとえ生まれずに死んだとしても、終わりの日に再びよみがえる運命にあり、アダムの罪に責任があり、洗礼を受けずに死んだ場合には、天国から永久に排除されて、ギリシヤ人神父は痛みも喜びもない地獄の辺土に、ラテン人神父は地獄の深淵に、投げ込まれてしまう運命にあると説いた。キリスト教と異教の社会を大きく区別し、現在ではあらゆる教義の変更と無関係に私たちの道徳的感情に完全に組み込まれている、幼児の生命の価値と神聖さに対す

る健全な感覚は、おそろくかなりの程度、この教義に起因するものだろう。殺された幼児の運命について初期および中世のキリスト教徒の同情心に非常に強く訴えたのは、彼らが死んだことではなく、彼らが通常、洗礼を受けずに死んだことだった。そしてそれが儂い生命の消滅だけでなく、不滅の魂の呪いに関わると信じられるようになる、墮胎の犯罪性は計り知れないほど深刻なものになったのである。「聖人たちの人生（*アルバン・バトラー著、1756—1759にロンドンで出版された）」には不思議な伝説がある。ある男が出産前の子供の状態を確かめようと、妊婦を殺害し、母親と胎内の子供の二重の殺人を犯してしまった。殺人者は自責の念に駆られ、砂漠に逃れ、懺悔と祈りの余生を送った。そして長い年月の後、女を殺したことを赦す、という神の声が聞こえた。しかし死の床で彼の心は曇っていた。子供の死について赦されたという確信がなかったのである。

人間の生命の次の段階である新生児に目を向けるなら、古代文明の最も色濃い汚点の一つだった嬰兒殺しの習慣に出会うことになる。この犯罪の自然史は、いささか特殊である。慈悲の感覚が非常に希薄で、その戦争や遊牧の習慣が幼児の生命に極めて不利な未開人の間では、予想される通り、親は自分が生んだ子を生かしたいかどうかを決定し、生かさない場合には遺棄するか殺すのが通常の習慣である。野蛮な段階を脱したもの、まだ無骨で単純な習慣を持っている国々では通常、嬰兒殺しの習慣はまれである。しかし、他の暴力犯罪と違って嬰兒殺しは文明の進歩によって自然に減少することはなく、未開の生活の時期が過ぎると、その蔓延は人々の野蛮さよりも官能性に大き

く影響される。また多くの国や時代において、子供は両親の果実、代理、そして最も大切な財産として、神々に喜ばれる生け贄である、という考え方が見られる。周知のように、ギリシャ人の間ではほとんど例外なく嬰兒殺しが認められていた。それはプラトンやアリストテレスの理想の中の法律や、リュクルゴス（*スパルタの、BC820—730）やソロン（*BC639—559、アテネ）の実際の立法によって、現在私たちが「最大幸福原則」と呼ぶべきものに基づいて承認され、場合によっては強制された。共同体全体を考えたとき、非常に厳しい人口の増加制限と、無力で非生産的な構成員のできる限りの排除が社会にとって最も利益になることを彼らは明確に理解していた。したがって幼児の生命、特に生き長らえさせてもおそらく彼ら自身の負担になるだろう奇形児や病児を苦しませずに死なせることは、全体として利益であると結論したのである。ギリシャ人の生活は非常に官能的なもので、彼らの考えは長期間の禁欲という近代的な発想とはまったくかけ離れていた。またギリシャでは母親たちの社会的、知的地位が極めて低く、国民の思想習慣に大きな影響を与えなかったことも考慮されるべきである。物心のつかない幼児に対する愛情においてはるかに優れているのは父親ではなく母親であることは昔からよく知られている。ただしギリシャ全土で嬰兒殺しと遺棄が許されていたわけではない。テーバイでは、これらの罪は死によって罰せられたと言われている。

ローマではもともと父親が子供に対して生殺与奪の権を握っていたため、嬰兒殺しは無制限に許

されていたと思われるかもしれない。しかしロムルスのものとされる非常に古い法律では、この点において親の権利は制限されていた。そして父親はすべての男児と少なくとも一番上の女兒を育てることを義務づけられ、親の愛情が育つと考えられる三年目を終えるまでは、問題のない子供を殺すことを禁じられた。しかし奇形や障害を持つ子供については、その近親者の五人の同意を得て遺棄することが許されていた。ギリシャの政策がむしろ人口の増加を抑制するものだったのに対し、ローマの政策は常に奨励するものだった。そしてローマでは帝国の墮落と官能の時代まで嬰兒殺しが一般的だったとは思えない。当時の立法者たちは嬰兒殺しをはっきりと非難していた。そして多くの子供を持つ父親に特別な権利を与え、貧しい親には税金の負担をほとんど免除し、遺棄された幼児の安全をある程度保証する法律によって間接的に嬰兒殺しを抑制していたのである。世論はおそらく、その犯罪性の度合いについては大きく異なっていようとも、事実上現代の世論とほとんど変わらなかつた。読者が記憶されている通り、この行為はキリスト教徒に対して最も頻繁に行われた告発の一つであつて、間違いなく民衆の怒りを買うものだった。異教徒とキリスト教徒の当局は、嬰兒殺しは帝国の捨て置けない悪徳であると口をそろえたが、テルトゥリアヌスはこれを禁止する法律ほど簡単に、また絶えず回避されるものはないと述べている。一般に嬰兒殺しと遺棄は大きく区別されていた。後者はおそらく非難されてはいたが、法律で罰されなかつたことは確かである。それは巨大な規模で、まったく処罰されることなく行われ、論者たちは最も冷やかな無関心を示しただけだった。そして少なくとも貧乏な親たちは非常に軽微な犯罪と見なしていたのである。疑

いなく、遺棄された子供が死亡することはよくあった。しかし、この習慣そのものは犠牲者の命を奪うよりも救うことの方が多かった。彼らは整然とウエラブラム（*フォロ・ロマーノの西側の谷）近くの円柱へと運ばれ、そこから投資家たちに連れ去られ、奴隷としての、あるいは非常に多くは売春婦としての教育を受けたのである。

全体としてこの問題で求められていたのは、より明確な道德的な教えではなく、むしろ長い間行ってきた嬰兒殺しの処罰をより強力に実行すること、そして遺棄された幼児の保護の強化だった。教会は悔悟の文言、ここまで述べてきた教義的理由、説教者や著述者による切実な勧告によって、この行為が大罪であることを深く認識させ、中でも自分の子供を不確かで疑わしい他人の慈悲にゆだねる罪は、シンプルな嬰兒殺しの罪とほとんど違いがないことを人々に確信させようと努めたのである。ローマ法にもその影響力は発揮されたが、あまり有効ではなかったと私は思っている。コンスタンティヌスは改宗した年にラクタンティウスの助言によって、貧困にあえぐ親による嬰兒殺しを減少させるため、親が養えない子供たちに国の費用で衣服と食事を支給するよう命じたと言われている。この法令は最初イタリアに適用され、西暦322年にはアフリカにも拡大された。しかし、この政策はすでにアントニヌス朝において大規模に行われていたものだった。西暦331年、遺棄された子供が慈善家または興味を持った人物に引き取られる機会を増やすことを目的とした法律が出された。その中で拾われた子供は息子として養子になるか奴隷として雇われるかかわらず、

その救済者の絶対的所有物となり、親は将来いかなるときにも子供を取り戻す力を持たないことが規定された。西暦329年に出された別の法律では遺棄されたのではなく、売られた子どもは、父親が代金を支払えば取り戻すことができる規定されていた。（*遺棄した子供は買い戻せない）

この二つの法律は曇りなき満足を与えるものとは言えない。遺棄された子供の身分を規定する法律は、間違いなく最も慈悲深い意図で制定されたものではあるが、いくぶん逆行的なものだった。異教時代の法律は父親は養育にかかった費用を支払うことで、いつでも遺棄した子供を奴隷の身分から取り戻すことができる規定していたし、トラヤヌスは遺棄された子供をいかなる場合にも奴隷にすることはできないとさえ決めていた。一方、コンスタンティヌスの法律は子供を取り返しのつかない奴隷状態に陥れるものだった。この法律は西暦529年にユスティニアヌスがトラヤヌスの原則に立ち返り、父親は子供を遺棄することによってその子供に対するすべての正当な権限を失うのみならず、子供を助けた者はその行為によって子供の生得の自由特権を奪うことができないことを決定するまで有効だった。しかしこの法律が施行されたのは東帝国だけであり、少なくとも西の一部では遺棄された幼児の奴隷化は何世紀も続き、ヨーロッパにおける奴隷制の一般的な消滅とともにようやく終了したようである。子供の売買に関するコンスタンティヌスの法律はおそらく必要な一歩だったのだろうが逆行的な一歩だった。カラカラを筆頭とする歴代の皇帝は、自由人の子供の売買を「恥ずべきもの」として糾弾し、廃止しようと努め、ディオクレティアヌスもこれを明

白かつ絶対的に非難していた。しかし、コンスタンティヌスの治世には内乱による極度の窮乏から、絶対的な貧困の場合には子供を売るという古い慣習を認める必要が生じた。それは非難されてはいたが、おそらく完全に中止されたことはなかった。テオドシウス大帝はこのように売られた子供たちは購入代金を返済することなく自由を取り戻すことができる、一時的な奉仕は購入に対する十分な補償である、という布告を出して一歩先に進もうとした。しかしこの措置はウァレンティニアヌス3世（*在位AD 425—455…西方正帝）によって廃止された。教父たちによって糾弾されたものの、大変な窮乏のときに子供を売ることは、テオドシウスの時代以降も長く続き、ディオクレティアヌスの人道的な法令を執行したキリスト教皇帝もいなかったようである。

このような遺棄された子供を保護するための措置とともに、嬰兒殺しに直接有罪を宣告する法律もあった。この主題のこの分野は、多くの曖昧さと論争によって不明瞭になっている。しかし異教徒の法律では嬰兒殺しを殺人の一つの形と見なしていたとするのが最も妥当だろう。ただし他の形の殺人よりも大それたものではないと考えられていたため、罰は死ではなく、追放だった。コンスタンティヌスの、父親による子供の殺害を親殺しと同罪とする法律はサトゥルヌスへの子供の生け贄が非常に一般的だったアフリカを主要な、そしておそらく限定的な対象とするものだった。そして最後にウァレンティニアヌスは西暦374年にすべての嬰兒殺しを死刑とした。そして特別に遺棄を禁止した。7世紀のスペイン西ゴート族の法律では、嬰兒殺しと墮胎を死刑または目つぶしで

罰している。シャルルマーニュの法令では嬰兒殺しは殺人として処罰された。

これらの措置によって、嬰兒殺しがどの程度減少したかを正確に把握することは不可能である。しかし、キリスト教の影響ゆえに遺棄された子供を公に売買することはできなくなり、この犯罪の重大性に対する感覚が大いに高まったことは間違いないだろう。この犯罪の最も大きな原因の一つだった極度の貧困は、キリスト教徒の施しによって手当された。多くの遺棄児が個人のキリスト教徒によって教育されたようである。ブレフォトロピア（*捨て子保護施設）とオルファノトロピア（*孤児保護施設）は教会の最も古い慈善施設の一つとして記録されているが、遺棄された子供がそこに受け入れられたかどうかは定かではなく、その後数世紀の間、キリスト教の捨て子養育院の痕跡を見つけることはできない。このような慈善事業は、中世の初期に徐々に発展していった。六世紀にはトリリア（*ドイツ最西部、ドイツ最古の都市）に、七世紀にはアンジェ（*フランス西部）に存在したとされ、八世紀にミラノに存在したことは確かである。九世紀にルーアン（*フランス北部）教会会議が、密かに子供を産んだ女性たちに教会の門前に子供を置くよう呼びかけ、引き取りに來ない限り養育することを約束した。彼らは教会の土地付きの多くの奴隷や農奴の中で育てられたのだろう。五世紀のアルル教会会議の布告とその後シャルルマーニュの法律はコンスタンティヌスの法令に倣い、遺棄された子供は保護者の奴隷になるべきである、と宣言していた。奴隷制が衰退するにつれ、多くの罪の記念物たちは、中世社会の他の多くの不調和な要素と同様に、

間違ひなく修道院の組織に吸収され、聖別されたのである。教会が常に示してきた不品行は重罪であるという強い感覚が聖職者たちを、他の慈善活動よりも、この活動に慎重にさせたものと思われる。捨てられた子供たちの施設がゆつくりとしか前進しなかったのはそのためだろう。多くの慈善事業の源であるローマでさえ、十三世紀初めまでは何も行っていなかった。十二世紀半ばには、他の役割とともに遺棄児の搜索を引き受ける団体がミラノに見られる。同じ世紀の終わり頃、名前は定かではないが、一般にブラザー・ガイと呼ばれているモンペリエの修道士が、聖霊と呼ばれる団体を設立して子供の保護と教育に献身した。この団体はその後二世紀にわたって、ヨーロッパの広い範囲に枝分かれした。パリの聖霊養育院はおそらく当初は主に正式な結婚の遺児の世話をするためのものであって、それに限定されたものであり、十五世紀にはそれが捨てて子の入院を拒否したこともあったが、やがてその手に大量の拾い子の世話が委ねられるようになった。嬰兒殺しの頻発に対する数多くの苦情の果てに、ついに聖ヴァンサン・ド・ポール（*1581—1660）が現れた。そしてこの分野の慈善事業に大きな推進力を与え、その第二の創始者と見なされるようになった。そして彼の影響は民間の慈善事業だけでなく、法律制定にも及んだのである。これらの措置の影響―すなわち嬰兒殺しの罪を抑制するために設けられた制度が淫乱という悪徳を助長したこと、また慈愛の利益と貞操のそのの明らかな対立を示す深刻な道德論争―については、私が立ち入る必要はないだろう。私たちは今、キリスト教の慈愛を動かしてきた原理について考えているのであって、その組織の知恵について考えているのではない。どのような間違ひがあったにせよ、私がたど

った運動全体には、社会から見捨てられた人々の生命だけでなく、道徳的な幸福に対する、古代の最も慈愛深い国々ですら抱いたことのなかった憂いが表れている。奴隸、剣闘士、野蛮人、幼児など最もみずばらしい形の人間の生命と人間の徳に対することのような細心で綿密な配慮は、実際のところ異教徒の精神とは全くかけ離れたものだった。それは不滅の魂の計り知れない価値というキリスト教の教義が生み出したものだった。これはキリスト教精神が浸透したすべての社会の際立った、超絶的な特徴である。

キリスト教が幼児の生命保護に及ぼした力は大いに現実的なものではあったが、誇張も多々あったと思われる。しかし私たちが次に検討する分野でその力を過大評価することは困難である。人類の道徳史において剣闘士ショーの禁止ほど重要な改革は他になく、この功績はほとんどキリスト教会だけに帰せられるべきものである。ローマ世界の最高の最も偉大な人々の中で円形闘技場の競技を絶対的に非難した人々がいかに極端に少なかつたかを思うなら、教父たちの弾劾の揺るぎない、妥協なき一貫性には最も深く感服せざるを得ない。また、教父たちをこの問題の扱いについて最も見識ある異教徒のモラリストたちと比較するなら、常に一つの最も重要な相違点を見出すことができるだろう。異教徒は哲学の精神に基づいてこの競技を非人間的なもの、風紀を乱すもの、品位を落とすもの、残忍なものと非難した。キリスト教徒は教会の精神に基づいて、この教義を殺人という明確な罪とし、観客と演者は神の前に等しくその直接の責任を負うとした。異教徒の帝国の最終

末期には、壮大な円形闘技場がまだ存在し、コンスタンティヌス自身、多くの野蛮人の捕虜に野獣と戦う刑罰を与えた。初代キリスト教皇帝がローマ帝国で初めて剣闘士競技を断罪する勅令を出したのは、ニカイア公会議の直後の西暦325年のことだった。この勅令はシリアのペリトユスで発布され、フェニキア属州にのみ適用されたとする説もある。しかしそれはこの地方でさえも効力を失い、わずか四年後、リバニオスはアンティオキアでいつも行われている競技のことを述べている。西帝国ではいくつかの小さな制限が課されていたものの、その継続は完全に認められていた。コンスタンティヌスは西暦357年、剣闘士の供給者であるラニスタが宮殿の召使いを買収して戦闘員にすることを禁止した。ウアレンティニアヌスは西暦365年にはキリスト教徒の犯罪者を、西暦367年には高官の縁者を罰として戦わせることを禁じた。ホノリウス（*在位AD393―423・西方正帝）は剣闘士だった奴隷が元老院議員に仕えることを禁じた。しかしこの最後の措置の真の目的は剣闘士の名誉を傷つけることではなく、武装した貴族の危険から身を守ることだったのだろうと私は想像している。さらに重要な事実、コンスタンティヌスの新首都に見世物が導入されなかったことである。ローマでは見世物の数は減ったものの、最終的に禁止されるまで中断されたようには見えない。古い異教徒社会において、剣闘士への情熱は最悪の特徴であり、宗教的自由特権はおそらく最高の特徴だった。そしてこの二つのうち、キリスト教帝国で先に消滅したのが、より高貴な部分だったというのは憂鬱な事実である。テオドシウス大帝は帝国全土であらゆる礼拝の多様性を抑圧し、多くの場面で聖職者の従順な奴隷であることを示していたが、野蛮人の捕虜に

剣闘士として戦うことを強制して異教徒のシンマコス（シムコス）の喝采を浴びたのだった。この他にも、西暦385年、391年、そしてホノリウスの時代にも剣闘士の試合が行われ、犯罪者を闘技場に送るという習慣がまだ続いていたことが分かっている。

キリスト教が国教となつてから九十年近く、帝国の大都市における剣闘士ショーの禁止は効果がなかったが、この件に関するキリスト教徒と異教徒の教えは違ったままだった。最も尊敬すべき異教徒たちは、最後までキリスト教徒を好意的に、あるいは無関心に見ていたようである。ユリアヌスが稀に見る雅量によって、キリスト教との対立の中で最も容易なことだった、教会に非難されている民衆の競技への情熱を利用することを飽くまで拒んだのは事実である。しかしリバニオスは競技を称賛していたし、シンマコスはすでに見たようにそれを実施し、称賛していた。しかしキリスト教徒はプロの剣闘士がその職業を放棄することを誓うまでは洗礼を受けることを認めず、競技に参加するすべてのキリスト教徒は仲間から排除された。教会の説教者や著述家は剣闘士を限りなく猛烈さで非難した。そして詩人ブルデンティウス（*AD415世紀）は皇帝に直接、剣闘士を禁止するよう訴えている。東帝国では剣闘士競技はあまり定着せず、テオドシウスの時代には消滅した。代わりにコンスタンチノープルや他の多くの都市で最も豪華の極みに達した戦車レースへの情熱が起こつたようである。西暦404年、ホノリウスの治世のローマでステイリコ（*AD365-408）の勝利を祝して最後の剣闘士ショーが行われた。このとき、（*聖）テレマコスという名

のアジア人修道士が、最も高潔な博愛のヒロイズムに駆られて円形闘技場に入し、戦闘員たちを引き離そうとした。怒った見物客たちの投石の雨を浴びて彼は死んだ。しかし、彼の死は競技の最終的な廃止につながった。しかし野獣と人間の闘いはその後も続き、特に東洋で人気があった。全体的な貧困化によって野獣の調達が困難になったことと、その他の原因が競技の衰退につながった。それは最終的には動物には残酷だが人間にはほとんど危険のない競技になり、7世紀末のトゥルツロ教会会議でついに非難されることになった。イタリアでは中世を通じて模擬戦闘の習慣があった。そしてペトラルカ（*フランチェスコ、1304—1374、人文学者）はその時代にはかなりの流血を伴うこともあったと述べている。おそらくそれはある程度まで円形闘技場の伝統に遡ることが出来るものだろう。

剣闘士の見世物の消滅は初期キリスト教の影響のすべての結果の中で、歴史家が最も深く、最も純粋な満足感とともに眺めることができるものである。剣闘士が直接引き起こした流血は恐ろしいものだったが、この競技はあらゆる階級に無慈悲な感覚を拡散したという点でおそらくさらに悪質であり、慈愛の水準を全体的に向上させる上で致命的な障害になっていた。しかし異教徒たちの態度は、哲学や社会文明のいかなる進歩も、長い間それらを根絶できなかっただろうことを決定的に証明している。もし北の無骨な戦士たちが、トラヤヌスの治世のようにこの競技が何の抵抗も受けずに繁栄していた時代にイタリアの帝国を手に入れていたならば、それは征服者たちによって熱心

に取り入れられ、中世の生活に深く根付き、人類の進歩を無限に遅らせていたであろうことはほとんど疑いようがない。キリスト教だけが、この邪悪な植物をローマの土壌から引き抜くのに十分な力を持っていたのである。死者を讃える競技のために大金を遺贈するという異教徒の習慣に代わって、キリスト教では困窮者や苦難者の救済のために遺産を与えるという習慣が生まれた。そして、剣闘士の見世物の特別な季節としてローマ世界全体で待ち望まれていた十二月は、教会ではキリストの降臨を記念する別の祭りで聖別されたのである。

初期のキリスト教徒を剣闘士競技と敵対させ、ついにはこれを打倒させるに至った人命の神聖性の観念は、彼らの一部によって国家の独立や現行の刑罰制度とは全く相容れない範囲にまで拡げられてしまった。彼らの多くは、キリスト教徒は兵士として、あるいは死刑を宣告することによって、あるいは死刑執行人として、命を奪うことを正当化できないと説いたのである。これらの問題のうち最初のものは、この章の後の方で、キリスト教と軍事精神との関係を検討するまで保留するのが好都合だろう。そしてそれ以外については、ほんのわずかな言葉で片づけることができる。正義の処刑にも何か不純で不潔なものがあるという考え方は、多くの時代を通じて見られるものであつて、法に仕える身である死刑執行人は非常に古い時代から罪深いものと見なされてきたのである。ギリシャでもローマでも、法律は彼らに城壁の外での生活を強い、ロードス島では街に入ることさえ許されなかった。この種の考え方は初期の教会で非常に強く維持された。そして皇帝や将軍に対して

さえ強要された懺悔の規律は、手を血に染めた者は、たとえその血が正義とされる戦争で流されたものだったとしても、懺悔による準備期間なしに祭壇に近づくことを禁じていた。最初の三世紀のキリスト教徒たちの意見は通常、市民生活や政治生活における必要性を考えることなく形成されたものだった。しかし教会が優位に立つと、それを速やかに修正する必要があることがわかった。四世紀のラクタンティウスは三世紀のオリゲネスや二世紀のテルトゥリアヌスと同様に、すべての流血は不義であることを主張したが、一般的な教義は司祭や司教は死刑に関与してはならない、というシンブルなものであった。この聖職者の例外的な立場から、彼らは何らかの反乱行為やその他の原因によって都市や近郊が血腥い侵攻に脅かされたとき、犯罪者のための公式の執り成し人、慈悲の使者という立場を速やかに獲得した。それまで帝国の彫像や異教徒の神殿が持っていた聖域（*避難所）の権利は教会に与えられた。四旬節と復活祭の聖なる季節には刑事裁判は開かれず、犯罪者を拷問したり処刑したりすることはできなかった。奇跡は告発された者や有罪とされた者の無実を証明するために行われることはあっても、犯罪者を社会的権力に処刑させるために行われたことはなかったと言われている。

これらのすべては、法の執行を和らげるといふ直接的な効果をはるかに超えた重要性を持っていた。それは民衆の想像力に尊厳と慈悲の観念を結びつけ、人命に対する畏敬の念を強めることに大きく貢献したのである。また別の著作で言及したように、もう一つの目覚ましい効果もあった。司

祭が死刑判決につながるような告発をすることは間違っているという信念は、他のあらゆる点において迫害理論が十分に成熟していた時代に、主だった聖職者が異端を迫害して死刑にすることを躊躇する理由になったのである。異端は最上級の犯罪であつて、刑罰を科すべきであることが容易に認められたとき、異端者を追放、罰金、投獄する法律が法令集に満ち、聖職者の教唆によつて宗教的自由特権のあらゆる痕跡が隠蔽されたとき、彼らは最後の必然的な一步を踏み出すことを躊躇した。それは良心の呵責からではなく、いかなる状況であれ司教が流血を容認することは教会の規律に反するからだつた。聖アウグスティヌスはドナトゥス派の迫害を熱心に主張しながらも、彼らが死刑に処されないことを何度も願ひ、また聖アンブロジウスやトゥール（*フランス北西部）の聖マルティヌス（*AD316-400）は精力的な迫害者であつたにもかかわらず、プリスキリアヌス（*AD340-385、初めて異端として処刑された司教）派（*グノーシス主義に由来する）の人々を死刑にしたスペインの司教への嫌悪を表明したのはこのためである。私は他のところで後世の宗教裁判官たちの忌まわしい偽善について述べた。彼らは異端者の「できるだけ穏やかに、血を流さずに」処罰されることを祈りつつ判決の執行を社会的権力に委ねたのであるが、それは最終的に火刑と解釈されたのである。しかし、この恐ろしい茶番は宗教の歴史において特別なものではないことをここに付け加えておきたい。プルタルコスによれば、貞節を守らなかつたウエスタの巫女を生き埋めにする理由の一つは、彼らが非常に神聖であり、暴力的な手を加えることは違法だつたからである。また、ドナトゥス派の中でキルクムケリオース（*ドナトゥス派に合流した反

ローマの下層民集団）は一時期、福音書の命ずるところに従って剣の使用を控える習慣があった。彼らは神学的意見の異なる者を巨大な棍棒で殴り殺し、その棍棒にイスラエル人という非常に意味深長な名前を与えた。

キリスト教司祭たちが十分に血を流す時代が来た。しかし、彼らが最初に示した極端な慎重さはその後の歴史と対比すると非常に興味深いだけでなく、それが促進した観念の連合は慈悲に非常に好都合だった。しかし、初期の教父の中の数人はベツカリヤ（*チェザーレ・ボネザーナ・マルチエーゼ・デイ、1738—1794、刑罰は最大多数の最大幸福原理に基づくべきと主張）の先駆者であることは間違いないが、彼らの教えは十八世紀の哲学者のそれとは違って、刑法の厳しさを緩和する上で重要な影響をほとんど、あるいは全く与えなかったことは注目に値する。実際、帝国のキリスト教法制を注意深く検討し、ストア派の影響下にあった異教徒の立法者が作ったものと比較すればするほど、ローマ法の黄金時代はキリスト教時代ではなく、異教徒時代だったことが明らかにになると私は思っている。偉大な法典化の仕事はテオドシウスとユステイニアヌスの治世に成し遂げられた。しかし不正を正し、抑圧された階級を引き上げ、人間の生来の平等と友愛の理論を法制の基礎とするほとんどすべての重要な措置がとられたのは異教徒皇帝、特にハドリアヌスとアレクサンデル・セウエルの治世だった。これらの法律の遺産を受け取ってキリスト教徒が何かを追加したことは間違いないが、注意深く調べてみれば、それは驚くほど少なかったことがわかるだろ

う。その後の長い老衰の時期は別として、ストア派哲学者たちの偉大さは、彼らの影響下で数年のうちに行われた法制改革の巨大な歩みと、キリスト教が帝国内で優位に立ったときのほとんど取るに足らない歩みとの対比によって最も際立っている。刑罰の厳しさを緩和する方法として、コンスタンティヌスが犯罪者の顔に焼印を押す習慣、犯罪者を罰として剣闘士にすること、かつては屈辱だったが今では神聖なものになり、非常によく行われていた十字架刑を禁止する三つの重要な法律を作ったことは事実である。しかし、これらの措置はキリスト教皇帝が嬰兒殺し、姦通、誘拐、強姦、その他いくつかの犯罪を極端に厳しく罰したことによって相殺され、死刑の数は以前よりかなり多くなった。テオドシウス法典（*AD438）における教会の影響の最も顕著な証拠の数々は実際、最も嘆かわしいものである。それは一方では聖職者を別個の神聖なカーストへと引き上げ、他方ではカトリックの正統性という細い道筋から逸れた者をあらゆる形で、あらゆる程度の暴力によって迫害することを目的とした膨大な量の法律である。

キリスト教が人間の生命を価値判断した最後の帰結は、自殺を非常に強調的に非難することだった。この行為に反対した異教徒の道德主義者の主張が四種類に分かれていたことはすでに見たとおりである。ピタゴラスとプラトン、私たちはみな神の兵士であり、定められた職務に就いているのであって、それを放棄することは造物主に対する反逆である、という宗教的主張をした。アリストテレスやギリシャの立法者たちは、私たちは国家に奉仕する義務があり、したがって自ら命を捨

てるといふのは国に対する義務を捨てることである、という市民的な主張をした。プルタルコスや他の論者たちは、真の勇氣は苦しみを男らしく耐えることによつて示されるのであつて、自殺は逃避の行為であり、それゆゑ人間にふさわしくないという主張を人間の尊嚴から導き出した。新プラトン主義者は、すべての動搖は魂の汚染であり、自殺という行為は動搖を伴ひ、動搖から生じるものであり、それゆゑ犯人は罪によつてその生涯を終えるのである、という神秘主義的あるいは静寂主義的な主張をした。この四つの主張のうち、最後の主張はキリスト教的な自殺の抑制策の中に位置づけられるものではなかつたと私は思う。また第二の主張の影響はほとんど感じられない。愛國心は道徳的義務である、という考え方は初期の教会では常に否定されていた。また三世紀の教会の理想だつた隱者生活を同時に非難することなしに、自殺に対する市民的反対意見を主張することはできなかつた。現代のモラリストたちが自殺の一般的な犯罪性の最も明白な、そしておそらく最も決定的な証拠とみなす、また市民的主張の代替物とも言える、人が家族に負つてゐる義務には異教徒も初期キリスト教徒もほとんど注目してゐなかつた。前者は父親の權威を重視するあまり義務をほとんど認識せず、後者は倫理をすべて來世の利益に結びつけようとするあまり、この欠落を補ふことにあまり力を入れなかつたのである。キリスト教における謙遜の義務や人間の墮落の見解は、教父の論者たちによつて人間の尊嚴の主張をいくらか好ましくないものにしてゐた。しかし、この論者たちは迫害の下で示した自らのヒロイズムによつて高貴な力を与えられた言葉を使つて、真の忍耐の勇氣についてたびたび説いてゐる。カトーの例に対抗してレグルスやヨブを挙げ、死に立ち

向かう勇氣に対抗して苦しみに耐える勇氣を挙げたのである。プラトンの教え、すなわち私たちは神のしもべであり、神の目の前で、神の援助を受けて、神の意志により、割り当てられた任務を遂行するために地上に置かれているという教えを、彼らは絶えず強調し、最も深く実感していた。そしてこの教えはほとんどの場合、それ自体が十分な予防策になった。なぜなら、ある偉大な論者（*アンヌ・ルイーズ・ジェルメーン・ド・スタール、1766—1817…原注より）が言ったように「自殺よりも色濃い罪は多いが、人がこれほど正式に神の保護を放棄したように見える罪は他にない」からである。

しかしこの一般的な教えに加えて、キリスト教の神学者たちは私たちがいま考察中の領域に恐怖政治と信仰という二つの新しい要素を導入した。それらは人類の判断に決定的な影響を及ぼした。彼らは人命の尊厳に関する理論を発展させて、自ら生命を絶つ者は通常の殺人者と同種同大の罪を犯したのである、と教義上で主張するまでになった。そして同時にその刑罰の性質と、魂の来世の運命に関する理論によって死に新たな性格を与えた。一方、道徳的尺度において忍従に与えられた高い地位、人生の最も暗い不幸せに一条の光を投げかける来世の幸福の希望、信頼の感情や逆る祈りから生じる深く不思議な慰め、そして何よりも苦しみの救済的、神意的性格に関するキリスト教の教義は、絶望に対する十分な防御能力を発揮した。痛みを善きものとするキリスト教の理論は、この点において痛みを悪しきものではない、とする異教徒の理論が決して持ち得なかった力を持つ

ていたのである。

しかし初期の教会では、ある種の寛容やためらいとともに尊ばれていた二つの自殺の形があった。迫害によって乱心して、また殉教が生前の罪を一瞬にして消し去り、苦しむ者を直ちに天上の喜びに導くという信仰の影響によって、熱狂に我を忘れて異教徒の裁判官の前に殺到し、殉教を懇願したり誘発したりする人々は珍しくはなかった。そして教会の数人の論者たちは彼らを大いに称賛していたが、神父たちの書物や教会会議の一般的な論調は彼ら批判的だった。さらに深刻だったのは迫害者による不名誉な刑罰によって、あるいはより頻繁に皇帝や野蛮人の侵略者の欲望によって純潔が脅かされたとき、それを守るために自殺したキリスト教徒女性の問題である。わずか十五歳の少女だった聖ペラギア（*アンテリオキアの、AD311没）は教会によって列聖され、聖アンブロジウスや聖クリュストモス（*AD347—407、金口イオアン）によって熱く称賛されている。彼女は兵士に捕まったとき、服を着るために自分の部屋に戻る許しを得て家の屋根に登り、身を投げて死んだのである。アンテリオキアのドムニナというキリスト教徒女性には母譲りの美しさと言心で評判の二人の娘がいた。ディオクレティアヌスの迫害で捕らえられ、純潔の喪失を恐れた彼女らは、ある大胆な行動で危険を脱することに合意した。そして母娘は道端の川に身を投じ、貞潔なまま波に沈んだとのことである。暴君マクセンティウスはローマ長官の妻であるキリスト教徒女性の美しさに魅了されていた。彼の求愛を逃れることが叶わず、暴君の手下によって家から引

きずり出された忠実な妻は、支配者の抱擁に身を委ねる前にほんの少しだけ自分の部屋に戻る許しを得た。そしてそこでローマの真の勇氣をもって自分の心臓を刺し貫いたのである。こうした歴史を語る際の、初期教会の論者たちのあからさまな称賛に嫌悪感を示してきたプロテスタントの論客たちがいるし、当惑してきたカトリックの論客たちもいる。しかし神学的な見解によって自然な高貴さの感覚をすべて破壊されていない人々には、それを弁護する必要はないだろう。

これが初期の教会で唯一許されていた自殺の形だった。聖アンブロジウスはやや恐々、聖ヒエロニムスはより強くこれを称賛したが、アラリックの兵士によるローマの占領によってこの問題が差し迫った関心の的になったとき、聖アウグスティヌスはこの問題に念入りな検討を加え、処女自殺者たちに対する同情的感嘆を表明しながらも、その行為を断固として非難した。その後カトリックの神学者たちは自殺を絶対的な罪とする彼の見解を広く採用するようになり、ペラギアとドムニナの行動は特別な啓示によるものだったことにした。同時に、健康のために絶対的に必要な栄養を身体に与えない習慣を持ち、それによって明らかに命を縮めた隠者たちが最も熱狂的な称賛を浴びていたことは、甚だしくも非常に自然なものとも言える矛盾だった。聖ヒエロニムスはブレシラ（*AD364-384）という若い修道女の生と死についての記事に、こうしたゆっくりとした自殺者が外界からどのように見られていたかという興味深い一例を書き残している。この女性は四世紀の宗教的観念からすると、結婚という少なくとも軽はずみな行為に及んだが七ヵ月後に未亡人とな

り、「処女という冠と結婚という快樂を一度に失った」のだった。熱病が彼女に強い宗教的な感覚を引き起こした。二十歳のとき彼女は修道院に引きこもってしまった。彼女はその伝記作者の非常に特徴的な贅辞によれば、「夫の死よりも処女喪失の方を惜しむ」ほどの帰依の高みに達していた。そして、もしそれが彼女の死を招いたとは言えなかったとしても、その死の前には長く残酷な苦行が続けられていたのだった。彼女が断食によって殺されたという確信と、母の抑えきれない悲しみの光景が民衆を憤慨させた。そして葬儀は「修道士という呪われた人種を町から追放するか、石で打つか、水に沈めるべきだ。」という激高の叫びで荒れた。しかし教会には禁欲行為によって体を弱める習慣を非難した痕跡はほとんど見当たらない。また初期や中世の修道士の習慣に関する伝承をほんの一部しか信じなかったとしても、多くの修道士たちはそれによって命を縮めていたはずである。このような禁欲主義の犠牲者の一人だったアツシジの聖フランチェスコ（*1182—1226）について、聖ボナヴェントゥーラ（*1221—1274）が語った悲壮なエピソードがある。瀕死の聖人は血を吐きながら疲れ果てて横になると、やせ細った自分の体を見ながら「私は自分の兄弟に罪を犯した、バカ者だ」と率直に認めた。そしていつものように彼のその心の感覚は幻覚を生み出した。夜中に祈っているとき、彼は声を聞いたように思った。「フランチェスコ、もし改心したなら神が赦さない罪人はこの世にいない。しかし厳しい苦行によって自分を殺した者は来世で慈悲を受けられないだろう。」彼はそれを悪魔の声と考えた。

古代の道德史において非常に重要な位置を占めていた直接的かつ意図的な自殺は、教会内ではほとんど完全に姿を消した。しかし四世紀に、その埒外にいたキルクムケリオースは死の使徒となつた。そして異教徒の集會に挑み、侮辱することによって殉教を誘発する習慣を絶頂にまで高めただけではなかつた。それが殉教の一形態であり、永遠の救済を自分たちに保証すると考えて、大量の自殺さえしたのである。数百人もの人々が、聖アウグスティヌスは数千人とさえ言っているが、集まつて半狂乱の喜びの激発とともに、張り出した崖の上からその下の岩が血で赤く染まるまで跳び下りたのである。もつと後の時代にはカタリ派（*10—14世紀、フランス）の人々の間に、危険な病氣の場合に断食や時には出血によって死を早めるという、エンデュラという名で知られる習慣が見られる。中世における自殺の最も数多い例はカトリックの迫害によって狂気に陥つた哀れなユダヤ人である。1095年、フランスでは拷問を避けるために多くのユダヤ人が自らの手で死んだ。1320年のヨークでは主の羊飼いに包囲されて一度に五百人が死んだと言われている。この件に関する古い異教徒の法律は変更されることなくテオドシウス法典とユスティニアヌス法典にそのまま残っていた。しかし五世紀のアルル教会會議は自殺を悪魔の唆しによるものと宣告し、次の世紀のブラガ（*ポルトガル）教会會議は自殺者の墓で宗教儀式を行つてはならず、その魂のためにミサを行つてはならないと定めた。この規定はその後の教会會議で繰り返され、次第に蛮族やシャルルマーニュの法律に導入された。聖ルイは死者の財産を没収する習慣を開始した。そして遺体はすぐに重大で様々な蹂躪にさらされるようになった。ある国では遺体を家から運び出すために

壁に特別に開けた穴を通さなければならなかった。それは編み垣に乗せられて街中を引きずり回され、頭を下にして吊るされ、最後は公共下水溝に投げ入れられるか、燃やされるか、満潮時に沈む砂浜に埋められるか、杭で突き刺して公共の幹線道路に晒されたのである。

これらの非常に恐ろしく、同時にグロテスクな習慣や、死者の不幸な親族の身上を物乞いに落とすという極端に不当な仕打ちが十八世紀に強い反動を引き起こしたのはごく自然なことだった。自殺は確かにモラリストが罪として非難する行為の一つである。しかし少なくとも現代においては、正当な法の領域にあるとは見なされない。なぜなら、そのメンバーに完全な移住の自由特権を認めている社会が、単なる生命の放棄を社会そのものに対する犯罪と宣言するのは合理的ではないからである。しかし、ベツカリアとその信奉者がさらに踏み込んで、この問題に関する中世の法律は不快であると同時に無益であると主張したことは深刻な誤りだろうと私は思う。自殺者の遺体に加えられた蹂躪は、まずは彼の行為に対する民衆の嫌悪の表現だったが、それがもたらした連想は、その蹂躪を生み出したもの（*自殺）への嫌悪感を強化することに貢献していた。また最も自殺しやすい、病んだ、興奮した、過敏な想像力を脅かすことに特別に適していた。稀なことではあるが、（*自殺志願者が）その行いについて熟考した場合、宗教的、立法的、社会的な影響が遺族の苦悩を極限まで増大させるという認識は大きな重みを持ったに違いない。立法側（*政府）の動きはこの法律が継続されたことを示している。しかしカトリックの領域では、こういう法律は何世紀にも

わたって極めて稀だったと信じるに足りる根拠がある。自殺はスペインでゴート王国の最後の最も墮落した時代にくらか流行したと言われている。また七世紀にイギリスで猛威を振るった大疫病や、十四世紀の黒死病のときにも多くの事例がある。イルデブラント（*教皇グレゴリウス7世、在位1073-1085）によって司祭の妻たちが大量に夫から引き離され、打ちのめされて世間に放り出され、傷心し、絶望したとき、自殺によってその苦しみを短くした者が少なからずいた。全体として女性の自殺者は特に稀だった。ある優れた自殺の歴史家は、スペインのある女性が夫と遠く離れ、情欲のエネルギーに抗うことができずに誘惑に屈するよりは、と自殺したのが数世紀にわたって女性が自殺した唯一の例である、とさえ断言している。しかし騎士道物語ではこのような死に方はしばしば恐怖を除外して描かれている。またその犯罪性についてアベラール（*ピエール、1079-1142）や聖トマス・アクィナス（*1225-1274）はかなり長く論じている。一方ダンテは自殺者の地獄での境遇の描写に素晴らしい数行を当てており、彼らは大聖堂のレリーフにも頻繁に描かれている。自棄に至る憂鬱は神学者に「アセディア」という名で知られているが、修道院では珍しいものではなかった。そしてカトリックにおける中世の自殺の記録のほとんどは修道士によるものだった。修道士がしばしば自殺するのは、あるときは世界から逃れるためであり、あるときは肉体の性質を鎮められないことへの絶望からであり、あるときはその生活様式、周囲の悪魔への恐怖から生じる狂気からであることは、初期の教会で知られていた。また中世の年代記には絶望的な愛の苦さや極度の禁欲から生じた狂気による自殺の例が少しばかり見られる。しかし、

それは僅かなものである。そして修道院は失意や傷心の人々に避難所を提供することによって、引き起こした数より多くの自殺を防いだと思われる。またカトリックの支配が続いている間、自殺はそれ以前よりも以後よりも稀なものだった。カトリシズムの影響は他の多くの点と同様、この点でもキリスト教会から教えを借り、さらにそれを強化したイスラム教に引き継がれた。すなわち聖書では明確に非難されていない自殺がコーランでは何度も禁止されており、キリスト教の忍従の義務はムスリムによって完全な運命論へと誇張されたのである。カトリックとイスラム教の帝国の下で、何世紀もの間、人類のすべての文明的で活動的で進歩的な部分において、自殺はほとんど完全に消滅した。ギリシャやローマの文明において、自殺がいかに熱く称賛され、あるいはいかに力なく非難されたかを思い出すなら、またデンマークからスペインに至るまで自殺を習慣的に行わない蛮族がほとんどいなかったことを思い起こすなら、この領域でキリスト教の力がもたらした完全な革命を理解することができるだろう。

この悲痛な歴史のその後について少し付け加えておこう。宗教改革には自殺を増加させる直接的な効果はなかったようである。プロテスタントとカトリックは自殺を防ぐのに最も適した宗教的感情を同じ強さで持っていたし、迫害ゆえに生きることが耐え難くなった事例は多くはなかったようである。この時代の歴史は主に新世界で奴隷にされ、征服者によって残酷な扱いを受けた不幸なインディアンの大量自殺だった。スペイン人はそれを防止する巧妙な方法を発見したと言われている。

すなわち主人も自殺して靈界までも彼らを追いかけると宣言したのである。ヨーロッパではこの行為は魔女の間で非常に一般的だった。彼女らは殉教の慰めさえなく、すべての苦しみを味わったのである。熱意も希望もなく、無実の自覚さえもなく、身体は衰え、心は乱れ、現世では最も熱狂的なヒロイズムさえも怯むような拷問に耐えなければならず、来世では永遠に呪われる運命であるとしばしば信じていたため、彼女らが絶望の苦しみの中で自殺することは稀ではなかった。フランスのレミー（*ニコラス、1530—1616）という裁判官は一年間に十五人以上の魔女が自殺したことを知ったと語っている。このような場合、恐怖と狂気が一体となって犠牲者その行為に駆り立てたのである。純粹な狂気による自殺の流行もまた稀なことではなかった。マルセイユでもリヨンでも女性たちは古代にミレトスの少女たちの間で見られたのと同じような疫病（*大気の汚染によると思われる神経障害から少女たちの自殺願望が高まり、首吊りが激増した。自殺者の遺体は裸で市場を通らなければならぬという法律ができると完全に終息した。）に悩まされていたのである。十五世紀末から十七世紀末にかけてナポリ地方で猛威を振るった、タランチュラの嘯傷が原因とされる奇病では患者が大勢で海に殺到し、青い海が目に入ると、しばしば荒々しい喜びの賛歌を歌って情熱的に波の中に突進していったと言われている。これらの事例は道德の歴史というよりはむしろ医学の歴史に属するものであるが、同時に意図的な自殺が驚くほど増加し、また自殺に対する感情も同様に驚くほど変化したことを示す多くの事実がある。古典的学問の復興とギリシャ・ローマの英雄を理想とする風潮の高まりによってこのテーマは必然的に注目されることになった。カ

トリックの決疑論者たち、そして後の時代にはグローティウス（*フーゴー、1583—1645）やプフェンドルフ（*サミュエル・フォン、1632—1694）の学派の哲学者たちは、ある種の自殺を正当なものとして区別するようになった。例えば不名誉や罪を犯すことを回避するためのもの、必ず死ぬと知りながら敵陣の下まで掘った坑道を爆破する兵士のもの、避けられない運命を見越して拷問から身を守る死刑囚のもの、友人のために自分が死ぬことを申し出る人物のものなどである。異教徒の事例の影響は、自殺者の最後の言葉や書き物にしばしば見出すことができる。フィリップ・ストロツツイ（*1541—1582）は、トスカーナのアレッサンドロ1世（*デ・メディチ、1510—1537）の暗殺の罪に問われた際、拷問によって友人に不利な暴露を強要されることを恐れて自殺したが、その際とりわけ自分の魂を神に委ね、もしそれ以上の恩恵が与えられないとしても、少なくともウティカのカトーや古代の他の偉大な自殺者たちに並ぶことを許されるよう祈った文書を残している。イングランドでは十七世紀から十八世紀前半にかけて、この行為は大陸よりも一般的だったようである。そしてこの行為に対する部分的な、あるいは完全な弁護がいくつか書かれている。トマス・モア卿（*1478—1535）は「ユートピア」の中で、不治の病にかかった者が自殺することは許し、それを強いることさえあるが、許可なく自殺した者は埋葬することさえ許さない、理想の共和国の司祭や行政官たちを描いている。セントポール大聖堂の学識豊かで敬虔な首席司祭だったドン博士（*ジョン、1572—1631）は若いころ自殺を擁護する非常に興味深く、精緻で、学問的な、しかし同時に弱々しく、難解な著作を書き、死の床

で息子に出版も破棄もしないよう命じたが、息子は1644年にそれ（*ビアタナトス）を出版した。イギリスの自殺者のうち二、三人は入念な弁明を残しており、スウェーデン人のロベック（*ヨハン、1672—1739）も1735年に入水自殺したが、翌年に出版されたその論文はかなりの名声を博した。しかし、自殺についてもっとも影響力があった著作はフランスの哲学者と革命家のものであった。モンテーニュは、その抽象的な正当性を論じることなく、古代における多くの事例を感嘆とともに語っている。モンテスキュー（*シャルル・ド、1689—1755）は若い頃の著作で、燃えるような熱意とともにこれを擁護した。ルソー（*ジャン・ジャック、1712—1778）はこのテーマについて二通の手紙で燃えるような情熱的な雄弁を揮った。最初の手紙では自殺を支持する論拠を無類の力で提示した。一方、二通目の手紙ではそれらの論拠を牽強付会と非難し、義務の遂行を放棄することの不遜さと絶望の臆病さについて詳説した。そして人間の心に関する深い知識によって、自殺の根源にある利己心を明らかにし、そして自殺に駆り立てられたすべての人々を、何か他人のためになる仕事を始めれば必ず救われると励ましたのである。ヴォルテールは彼の書いた最も有名な二行連句の中で、極度の必要に迫られた場合の自殺を擁護している。無神論者の間ではこの行為は熱狂的に賛美され、ホルバツハ（*ポール・アンリ、1732—1789）やデスランド（*アンドレ・フランソワ、1669—1757）はその擁護者として著名だった。宗教的見解の急速な崩壊は、その罪の重さに対する民衆の感覚を弱めた。そして同時に時代の慈愛と立法の真の限界に対するより明瞭な感覚が、この問題に関する恐ろしい法律（*遺体の蹂

躡と財産没収)への反発を生んだ。グローテイウスはそれらを擁護していた。モンテスキューは当初、全力でこれらを非難していたが、晩年にはその意見がある程度修正した。ベツカリアはこの問題に対するフランス学派の意見を誰よりも代表していたが、罪のない生存者にとって不当であると同時に、その行為を決意した人間を抑止することはできないと非難した。1749年という哲学的な運動が盛んだったときでさえ、ポルティエという名の自殺者が顔を地面に向けたままバリの街を引きずり回され、絞首台に足で吊るされ、下水溝に投げ込まれた記録がある。この法律は革命まで撤廃されず、革命は他の多くの自由を創設した後、ようやく死の自由特権を認めたのである。劇的な栄枯盛衰と、その動乱の時代の凄まじい熱狂の中で、自殺者はたちまち増加した。「現世にこれほど人がいなくなったのはローマ時代以来である。」と言われた。短い期間、この一つの国ではキリスト教の活動が停止したように見えたのである。人々は再び異教徒の時代に戻ったかのように見え、より演劇的ではあったが、自殺がこれほど軽はずみに実行され、ストア派に劣らず熱狂的に称賛されたことはなかった。しかし革命の潮流は去った。そしていくつかの制限とともに古い見解がその権威を取り戻した。自殺を禁止する法律は実際、ほとんどの地域で廃止された。フランスや他のいくつかの国には、このテーマに関する法律は存在しない。他の国々では、法律は単に宗教的儀式を伴わない埋葬を義務づけているだけである。イギリスではジョージ4世の時代に幹線道路への埋葬と杭による損壊が廃止された。しかし故意の自殺者の全財産を王室に没収するという恐るべき不正義は、世論の力と陪審員の情け深い偽証によって実施されてはいないものの、いまだに法令全書を

辱めているものである。しかし、キリスト教国の一般的な感情は、キリスト教の指導者たちがこの行為に下した判断を、昔ながらの非難の厳しさをいくらか修正し、昔ながらの議論のいくつかを放棄したものの、承認してしまった。革命によっていくぶん掻き乱された倫理学のこの分野を再構築したのは、若き日にキリスト受難に関する著作で自殺を推奨したス털夫人（*アンヌ・ルイズ・ジェルメヌ・ド、1766—1817）だった。彼女は穏やかで率直、かつ哲学的敬虔さの模範となる短い論文でそれを実現したのである。この行為は殺人の性質を持つ最悪の犯罪であり、常に、あるいは概して臆病の所産であるという古い神学的観念を率直に放棄し、宗教的恐怖政治によって人を脅かそうとするあらゆる試みをも彼女は放棄した。そして自殺を擁護する人々の個別の議論にいちいち反論するのではなく、真に徳のある人間の理想を描き、そうした人格がいかに自殺へのあらゆる誘惑から人を守るかという方向に議論を進めたのである。最も優しく美しい書物の中で、彼女は苦難を持つ、人格を柔和にし、純化し、深める力について述べた。そして習慣的で従順な忍従の気持ちは最高の義務であるだけでなく、最も純粋な慰めの源であり、同時に道徳的向上が約束された状態であることを示した。この問題の聖書の側面を細部まで考察した後、彼女は無私がいかに人間の尊厳の真の物差しであるかということを示した。殉教と自殺—義務への献身による死と、環境への造反による死とを対比した。愚かにも大勢の聖職者たちに臆病な行為として非難され、愚かにも多くの自殺者たちに苦痛や貧困から逃れるための死を正当化するために持ち出されていたカトーの自殺を、彼女はローマの利益のための気高いものと受け止められたクルティウスの死の

ような一殉教の行為と述べたのである。善良な人物の目は常に他人の利益に向けられていなければならない。そのためには、その生命とすべての幸運を放棄する用意がなければならない。彼らのためなら、たとえそれが呪いのように思えるときでも、生きることには耐える用意がなければならない。

キリスト教の影響によってこの種の感情はヨーロッパ社会に徹底的に浸透している。そして近代では自殺はほとんどの場合、絶対的な精神異常や、精神異常とまではいかないまでも私たちの判断を鈍らせるに足る病氣、あるいは諦めと希望がともに消え失せた後に残った悲しみの過剰から生じるとされている。しかし統計上の自殺の急速な増加、そしてそれは知的発展と一般的な文明において最も高いランクにある国々に特徴的である、というよく知られた事実からすると、こういう見方は樂觀論と呼ぶべきではないだろうか。一、二の国では強い宗教的感覚がこの風潮を打ち消した。しかし町と国、異なる国、同じ国の異なる地方、歴史の中の異なる時代を比較すれば、その事實は決定的に証明される。この現象にはたくさんの言い訳があるだろう。知的な職業は狂気を生むことに、近代における自殺の華々しい報道は弱い心にその模倣をさせることに、特別に適しているとも言える。完全な未開の状態を除外するならば、高度に発達した文明は福祉の平均値を引き上げる一方で、それ以前の単純な段階に比べて極端な悲惨さと深刻な苦痛を伴う可能性がある。移住の習慣、都市における人間の巨大な凝集、激しい競争の圧力、製造業が特に陥りやすい急激な変動は、偉大

な繁栄の条件であると同時に、最も深刻な不幸の原因にもなる。文明はかつて余剰品であったものの多くを生活必需品にするため、その所有が喜びではなくなつてからも長い間、その喪失は苦痛になる。また文明は性格を軟化させることによつて人を痛みに特に敏感にさせる。そしてその後には、単純な農民の脳裏を横切つたり神経を苦しめたりすることがほとんど、あるいは全くない、反感、情熱、病的想像が延々と続くのである。宗教的懷疑論の進展と宗教的規律の弛緩は自殺の恐怖を弱め、時に消滅させてきた。政治的自由特権、知的活動、製造業がそれぞれ異なる方法で相助けて育もうとする自己主張の習慣、熱心で休むことのない野心は、現代の進歩のまさに原理と必要条件になつて一方で、あらゆる形の満足という徳を極めて稀なものとし、絶望の苦しみを和らげる唯一の力である、謙虚で従順な忍従の精神の形成には特別に不利なものである。

キリスト教が人間の生命の神聖さの感覚を促進した効果について検証した。次にその隣分野に移つて、キリスト教が人間の友愛と博愛の感情を促進した効果について検証してみよう。まずは奴隸制度に及ぼした影響に注目しても良いだろう。

読者はストア派のモラリストの視野において、また彼らが大いにインスピレーションを与えた法

律の中で、この制度が一般的にどのような位置を占めていたかを覚えておられるだろう。奴隷制度の正当性は完全に認められていた。しかしセネカをはじめとするモラリストたちは人間の生得の平等性、奴隷と主人の性質の違いは表面的なものであること、前者への最も良心的な慈愛の義務を非常に強く主張していたのである。主人と奴隷の間には頻繁に非常に温かい思いやりが生まれていた。しかし不幸なことに、それと並行して最も甚だしい虐待も少なくなかった。こうした虐待からの保護のために、明らかに人間の本質的な平等というストア派の原則に基づいた一連の長い法律がハドリアヌス、アントニヌス朝、アレクサンデル・セウエルスの下で制定されたのである。前章で述べたことを長々と繰り返すつもりはない。生殺与奪の権利が主人から明確に剥奪されたこと、奴隷の殺害が法の下で起訴され処罰されたことを読者に思い出していただけば十分だろう。しかし偉大な法律家パウルス（*ジュリアス、プルデンティシムス、AD3世紀）は殺人は殺意を伴うものである、したがって奴隷が殺意のない懲罰によって死んでも主人は殺人罪を犯したことになる、と規定した。この決定は主人による気ままな奴隷の処罰を容認しかねないものである。しかしそれは、奴隷に対する過度の残虐行為を禁じ、それが証明された場合には他の主人に売却しなければならぬという法律、奴隷を閉じ込める私設監獄の禁止、奴隷たちの苦情を聞く特別な役職を設けることによって阻止された。

立法の分野ではコンスタンティヌスの改宗後の約二百年間の進歩はごくわずかなものでしかなか

った。キリスト教皇帝たちは西暦319年と326年の、二つのよく練られた法律の中で奴隷の殺害という問題に言及した。しかしそれは以前の制定法を非常に強調した言葉で繰り返しただけだったので、この階級の境遇がどのように改善されたかを知ることが容易ではない。この法律では、列挙された特定の残虐な拷問を奴隷を殺害する目的で行った主人は殺人罪とされる。しかし適度な処罰や、殺害することを目的としない処罰で奴隷が死んだ場合には主人は無罪であり、強調されたのは、いかなる罪にも問われてはならないということである。証拠はないが、この法律は奴隷が「適切な」あるいは奴隷的な罰、つまり鞭打ち、拘束、投獄の適用下で死んだ場合にのみ主人に免責を与える、と解釈されて来たのだろうと思われる。しかし、殺すことを目的としない拷問の使用は全く制限されていなかった。また自分の意図に反して奴隷が拷問で死んでしまった場合に主人が罰されるべきことや、死には至らない過度の残酷さに対してコンスタンティヌスが何らかの刑罰を提唱したことを明示するものはこの法律にはない。この法律はユダヤ教の法典の有名な条文と驚くほど一致していると言って間違いないだろう。主人によって死ぬほど傷つけられた奴隷が一日か二日生き延びたなら主人は罰せられない、なぜなら奴隷は彼の財産だからである（*出エジプト記21章21節）、という条文である。

奴隷制度が異教徒の時代からキリスト教皇帝の時代へと移行する中で最もざっとさせられるのは、奴隷の結婚が法的に認められていなかったことと、拷問が依然として主人に認められていたことの

二つである。ユステイニアヌスより前のキリスト教皇帝たちは、これらの悪のいずれをも改善するための真剣な措置を取らなかつた。そして姦通に対する法律も「その身分の下劣さは法の監視に値しない。」という理由で奴隷間の結婚には依然として適用されないままだつた。しかし十字架刑の廃止は奴隷階級にとって特別な価値を持つていた。そしてコンスタンティヌスの非常に慈悲深い法律によつて奴隷の家族を引き離すことが禁止された。もう一つの法律はおそらくその効果においてさらに重要なものであつて、奴隷解放に神聖な性格を与えた。その儀式を教会で行うことを定め、日曜日に行くことを許したのである。またユダヤ人の主人のもとにいるキリスト教徒奴隷に自由を与える法律も制定された。そして二、三のケースでは、犯罪者を告発させるための賄賂として奴隷に自由が提供された。自由階級と奴隷階級の間婚姻は依然として厳しく禁じられていた。そして自由な女性が奴隷と不適切な関係を持った場合、コンスタンティヌスはその女性を処刑し、奴隷を火あぶりにするよう命じた。異教時代の法律では女性はシンプルに奴隷身分に落とされた。逃亡奴隷に対する法律もより厳しいものだつた。

この立法は全体として見れば進歩であるが、教会側の論者が時として贈る熱狂的賛辞に値しないことは確かである。およそ二百年の間、このテーマに関する立法はほぼ完全に停止していた。しかし、裁判における拷問の使用にはわずかな制限が課され、奴隷解放にはわずかに追加的な便宜が図られ、奴隷が主人を告発するのを防ぐために非常に残虐な法律が定められた。グラティアヌス帝

(*在位AD367—383)の法律では反逆罪以外の罪で主人を訴えた奴隷は、その告発の正当性を調査されることなく、直ちに火あぶりにされなければならなくなった。

しかし、ユスティニアヌスの時代には新たに非常に重要な立法がなされた。この皇帝の法律は他のどの分野においても、紛れもなく前任者のものより進歩していた。ユスティニアヌスの法律は三つの項目に分類される。第一に、異教時代の法律に蓄積されてきた奴隷解放に関する制限を廃止した。この立法者は強い言葉で、また多くの法律の規定によって、奴隷解放を促進する意向を表明した。このことは教会の活動に自由な機会を与えた。第二に、奴隷と市民の中間の階級と考えられていた解放奴隷は事実上廃止され、市民に与えられていた特権のすべて、あるいはほとんどすべてが彼らに与えられることになった。これは、アウグストゥスの時代から進んでいた諸国民と諸階級の大合併に関するキリスト教皇帝の最も重要な貢献だった。その効果の一つは誰でも、元老院議員でさえも、女奴隷を解放すれば彼女と結婚できるようになったことである。第三に、奴隷は主人の許可を得て自由身分の女性と結婚することが許された。そして生まれたときに奴隷だった子供は父親が解放奴隷になると法定相続人になった。この時代には奴隷女性の強姦も自由身分の女性の強姦と同様に死刑になった。

しかし、これらの法律も重要ではあるが、キリスト教が奴隷制に及ぼした影響を主に探し求めな

ければならないのは立法の分野ではない。実際その影響は非常に大きなものだったが、その性質を注意深く定義しなければならない。ユダヤ教エッセネ派の特徴の一つだったすべての奴隷制の禁止や、ストア派ディオーン・クリュソストモスの思想の一つだった世襲奴隷制の違法性を教会の教えは全く含んでいなかったのである。キリスト教は奴隷制を明確かつ公式に認めていた。また従順と受動的服従の習慣を奨励することにこれほど力を注いだ宗教はない。確かに神父たちは人間の生得の平等性、奴隷を兄弟または仲間と見なす義務、そして奴隷に対する残虐行為の非人道性について多くを語った。しかしこれらのことは同じように大きな広がりを見せなかったものの、少なくとも同じ力を持ってセネカとエピクテトスによって語られていた。そしてすべての人間の本来的な自由の原理は異教徒の法律家たちによって繰り返し主張されていた。この領域におけるキリスト教の貢献は三つの種類に分けられる。それは階級差別のない新しい関係性の秩序を提供した。奴隷階級に道徳的な尊厳を与えた。そして奴隷解放の運動に比類ない推進力を与えたのである。

これらの貢献のうち最初のもの、教会の儀式と懺悔の規律によって実現された。キリスト教精神に最も早く、最も深く、最も永続的な影響を与えたこの領域では、主人と奴隷の間に差がなかった。彼らは共に聖餐を受け、共に愛餐の席に座り、人前で共に祈りを捧げた。教会の刑罰制度ではローマ法全体の根底にある、自由人に対する過ちと奴隷に対する過ちとの区別が否定された。ローマ法では過剰な鞭打ちの結果奴隷を死亡させた主人は全く罰せられなかったが、エルピラ（*スペ

イン南部）教会会議（*AD306年頃）はその主人を永遠に聖体拝領から排除した。ローマ法にほとんど規定がなかった女奴隷の貞操は教会法によって周到に守られた。また奴隷の身分は聖職者になるための欠格事項ではなかったばかりではなく、靈的な生と死の分配者とみなされた解放奴隷の足元に最も偉大で裕福な人々が謙虚にひざまずき、罪の赦しと祝祷を乞うことがしばしばあった。

次に、キリスト教は奴隷階級に道德的な尊厳を与えた。それは貧困と労働を、大変深く敬われていた修道生活と結びつけることのみならず、道德の理想のタイプに新たな修正を加えることによっても行われたのである。ローマの論者たちが奴隷を深く軽蔑していたというのは最も顕著な事実である。それは彼らの地位のためというよりも、その地位が作り出した性格のためである。隷属的な性格は悪質な性格と同義だった。キケロは奴隷には偉大なものも高貴なものも存在し得ないと宣言したし、プラウトウスの劇はあらゆる場面において同じ価値観を示している。しかし例外もあった。エピクテトス（*解放奴隷）はローマで最も高貴な人物の一人であっただけでなく、そう認められていた。奴隷の主人に対する忠誠心はしばしば称賛され、セネカはこの点でも、他の点と同様に、虐げられた者の擁護者だった。しかし、この蔑視が一般的なものだったこと、そして異教徒の世界ではそれがかなり正当なものだったことに疑いの余地はないだろう。どの時代にも、すべての徳の高い人々が目指す道德的理想がある。また生活のあらゆる領域にもまた、ある種類の徳に特に好都合で、他の種類には特に不都合な、特有のタイプを生み出す傾向がある。各階級の世間からの

評価、さらには実際の道徳的状態でさえも、主としてその地位が自然に培う性格のタイプがその時代の理想のタイプとどの程度一致しているかに左右される。さて、雅量、自助、威厳、独立、一言で言えば気高い人格がローマ的完成の理想であったことを思い起こすなら、これは優れて自由人のタイプである。そして奴隷の境遇がその生育にとって極めて不都合だったことは明らかである。キリスト教は初めて、隷属的な徳を道徳のタイプの中の最も重要な位置に置いたのである。謙虚さ、従順さ、優しさ、忍耐、諦め、これらはすべてキリスト教徒の人格における基本的すなわち初歩的な徳である。異教徒はそれらを皆、軽視し、過小評価していた。それらは皆、隷属的立場において拡大し、繁栄できるものである。

道徳的なタイプを隷属的階級の方角に傾けることによってキリスト教が奴隷制度に及ぼした影響は、他のいくつものほど明白ではなく、議論もされていないが、非常に重要なものであると私は信じている。おそらくその宗教が最も容易に吸収することができる階級のタイプ、言い換えればその宗教が最も重要視する徳のグループまたは種類こそが、その宗教の社会的、政治的關係に非常に深い影響を与えるただ一つの条件だろう。奴隷の地位に最も相応しい徳は一般に古代ではほとんど尊重されておらず、奴隷たちの間でさえ培われることはなかった。善良な人々の願望は別の方向を向いていた。逆境の下では昂然として高まったストア派の徳は、墮落の下ではほとんど常に枯れていた。キリスト教の影響下で、奴隷階級は初めて大きな道徳的運動を経験した。新しい信仰を受

け入れた多くの奴隷は異教徒の非難的になった。またブランデイナ、ポタミアナ（*AD205 殉教）、エウティケス（*AD1—2世紀）、ウイクトリヌス（*ペタウの、AD304殉教）、ネレウス（*AD1世紀末—2世紀初めに殉教）の名は、彼らが殉教の苦しみと栄光をいかに完全に分かち合っていたかを示している。イタリアで最初の、そして最も壮大なビザンチン様式の建築物—ラヴェンナのサン・ヴィターレ教会—は、ユステイニアヌスが殉教した奴隷を記念して捧げたものだった。

このようにキリスト教は主人の奴隷に対する軽蔑を打ち破り、他どの領域よりも奴隷の間に道徳的再生の原理を植え付けて完璧に広めた。一方、奴隷の自由を獲得するためのその活動は絶え間ないものだった。この儀式を聖職者の管理下に置いたコンスタンティヌスの法律や、修道院や聖職に入ることを希望する者に解放のための特別な便宜を与える多くの法律は、奴隷解放が持つ宗教的性格を象徴するものだった。儀式は教会の祭事、特に復活祭の時に挙行され、義務、あるいは不可欠なものとは宣言されてはいなかったが、常に過去の罪を償うための最も受け入れやすい方法の一つと考えられていた。聖メラニアは8,000人、ガリアの裕福な殉教者聖オウイデイウス（*AD?—135、三代目ブラガ司教?）は5,000人、ディオクレティアヌスの治世のローマ長官クロマティウスは1,400人、トラヤヌスの治世の長官ヘルメスは1,250人の奴隷を解放したと言われている。教皇聖グレゴリウス、聖アウグスティヌスの指導下にあったヒッポの聖職者の

多く、また多くの個人が敬虔な行為として自分の奴隷を解放した。国家や個人の神への感謝、病気からの回復、子供の誕生、死ぬ間際、そして何よりも遺言の際に、それを行うことが習慣となった。中世には、寄贈者や遺贈者が自由特権を「魂の利益のために」奴隷に与えたという記録が多くの宣言書や墓碑銘に残っている。十三世紀、フランスに解放するべき奴隷がいなかった頃、多くの教会では古代の慈善を記念して、そしてさらに多くの囚われ人がキリストの名において解放されることを祈って、教会の祝祭日に籠に入れた鳩を放すことが通例だった。

しかし奴隷制度はコンスタンティヌス以降もヨーロッパで約800年間存続した。そしてこの巻（*原書の第二巻、第四章と第五章）に関係している期間について言えば、その性格は変化し和らげられたものの、奴隷になった人々の数は異教徒の帝国より多かったと思われる。西方では蛮族による征服が労働の様相を二つの方向に変化させた。蛮族の捕虜の流入が止まり、膨大な奴隷の従者に囲まれていた名家が困窮し、都市生活が全体的に衰退した。蛮族の独立の習慣は奴隷制度の古い形を食い止めた。一方、自由農民の境遇は悲惨で不安定ものだったため、その大勢が自由特権を近隣の領主の保護と交換した。東方では過剰な課税による巨額の財産の消滅が、余分な奴隷の数を減少させた。ビザンツ帝国の財政制度では農業奴隷はその雇用に応じて課税されることになっており、また皇帝たちは農業を奨励することを望んでいたため、立法者は奴隷を農地に永久に固定するようになった。やがて自由農民の大部分と旧来の奴隷の大部分は、農奴制と呼ばれる制限付きの奴隷へ

と格下げ、あるいは格上げされ、封建制の大きな土台を形成するようになった。八世紀末になると、ほとんどの国で奴隷をその出身属州以外に売ることは禁止された。イタリアの自由都市の創設、軍隊に入った奴隷を解放する習慣、自由労働が奴隷労働よりも有益なものにする経済的变化などが相働き、宗教的動機と結びついて、最終的に労働者に自由をもたらした。信心の行いとしての奴隷解放の習慣は最後まで続いた。しかし、自分たちが終身の権利しか持っていない共同の財産を譲渡する権利を自分たちは持つていないという感覚ゆえと思われるが、聖職者たちが信徒に惜しみなく与えたこの勧告に自ら従ったのは最後のことだった。しかし十二世紀のヨーロッパでは奴隷は非常に稀だった。十四世紀には奴隷制度はほとんど消滅していた。

世襲制の奴隷を消滅させた教会の影響力と密接に関係していたのは、捕虜を隷属状態から救出する教会の影響力だった。これほどまでに継続的かつ見事にその博愛が発揮された慈善事業は他にないだろう。蛮族の侵略の長く荒涼とした試練の間、社会の構造全体が破壊され、広大な地域や強大な都市が数ヶ月でほとんど人口を失い、イタリアの花の盛りの若者が剣で刈り取られ、あるいは捕虜として連れ去られたとき、司教たちは捕虜の苦しみを和らげる努力を怠らなかった。聖アンブロジウスは自分の行為を大それた冒瀆と非難するアリウス派の反発を無視して、ゴート族の手に落ちた捕虜を救うためにミラノの教会の豪華な装飾品を売り、この行為は—その後、大聖グレゴリウスによって正式に承認されたが—すぐに一般的なものになった。ローマ軍が七千人のペルシャ人捕虜

を捕えたが、養うことを拒否したとき、アミダ（*トルコ東部）の主教アカシウスはペルシャ人のキリスト教に対する激しい敵意にもめげず、「神は皿や食器を必要としない」と宣言し、教区の教会の豪華な装飾品をすべて売り払い、信者でもない捕虜を救い出して無傷で彼らの王のもとに送り届けたのだった。ヴァンダル人の侵略の恐怖の中で、カルタゴの主教デオグラティアス（*AD?—457）はローマ人捕虜の身代金を払うために同じような手段を取った。聖アウグステイヌス、大聖グレゴリウス、アルルの聖カエサリウス（*AD468—542）、トゥールーズの聖エクペリウス（*AD?—410）、聖ヒラリー（ポワティエの、AD310—367）、聖レミギウス（*AD437—533）はいずれも教会の飾り盃を溶かして、あるいは売って捕虜を解放している。聖キプリアヌスは同じ目的のためにニコメディアの主教に大金を送った。聖エピファニオスと聖アウイトウス（*ヴィエンヌの、AD450—519）は、ガリア人の裕福な女性シャグリアと協力して、数千人を救出したと言われている。聖エリギウス（*AD588—660）は全財産をこの目的のために捧げた。ノーラ（*イタリア南部）の聖パウリヌス（*AD354—431）も同様の雅量を示した。真偽は定かではないが、伝説では聖ペテロ・テレオナリウス（**?*）や聖セラピオン（*1179—1240、アイルランド生まれ）のように他のあらゆる施し物を施し尽くし、最後の贈り物として自分自身を売って奴隷になったとまで言われている。その後、長きに渡ってイスラム教徒の征服が蛮族の侵略の災いをいくぶん再現していた時代にも、同様の飽くなき慈愛が示されたのである。十二世紀にマサのヨハネ（*1160—1213、フランス）が設立した三位一

体修道会は、キリスト教徒の捕虜を解放するために尽力した。そして次の世紀にはペドロ・ノラスコ（*1189—1256、カタロニア）が同じ目的のために別の団体を設立した。

私が考察しているこのテーマのさまざまな部門は非常に密接に絡み合っているため、ある部門を調査する際に、どうしても他の部門をいくらか先取りしてしまうことになる。幼児の保護、人命の価値判断の向上、奴隷制の緩和における教会の影響について論じる一方で、私はキリスト教的友愛の教義の最後の応用—慈善団体の設立—についての調査に大きく踏み込んでしまったのである。この問題において異教社会とキリスト教社会には深遠な違いがある。しかしその違いの原因の大部分は宗教的見解とは別のものである。慈善は自立した貧しい人々が多数存在する場合にのみ、活動の幅を拡げることができる。古代社会で貧困の代理を大いに務めていたのは奴隷制度だった。そして貧しい人々の大多数の生活を保障することによって、慈善の領域を縮小していた。また、ローマで奴隷制度が非常に貧しい人々に対して行っていたことを、クライアント制度がいくらか身分の高い人々に対して行っていた。シンブルな慈善制度の比較によって二つの社会を判断するのが不当なことを示すには、この二つの制度の存在で十分である。また古代人の間では困窮者の救済が国家の最も重要な仕事の一つだったことも忘れてはならない。古代ギリシャでこの目的のためにとられた多くの措置については触れないが、ローマについては何世紀の間、常時貧困層の大部分が小麦の無償配給を受けていたというシンブルな事実にすぐさま行き当たる。ローマ史のごく初期にも時折、

分配の事例が見られる。しかし、ガイウス・グラックス（*BC154―121）が申し訳程度の価格で貧しい階級に小麦を供給する法律を作らせたのはローマ建国紀元630年になってからだ。二年後、貴族たちはこの法律の撤回に成功したが、いくつかの変動を経てローマ建国紀元679年によく再び制定されることになった。その法律をついに確立した執政官たちの名で呼ばれるカッシウス・テレンティウス法はその運用を大幅に拡大した。またウティカのカトーがローマ建国紀元691年に、多くの貧困層が加わっていたカエサル運動の人気を削ぐため、忘れられているものを復活させたという説もある。四年後、クロディウス・プルケル（*プブリウス、BC93―52）は、それまで求められていた小額の支払いを廃止し、配給を完全に無償にした。配給は月に一度行われ、一人当たり五モディ（*1モディウスは9リットル）だった。ユリウス・カエサルの時代には、320,000人以上の人々が受給者として登録されていたが、カエサルはその数を半分に減らした。アウグストゥスは200,000人にまで増やした。この皇帝は小麦の分配を年に三、四回に制限することを望んだが、民衆の希望に屈して、最終的には毎月続けることに同意した。小麦はすぐにローマの生活の主要因子になった。小麦の供給のために数多くの役人が任命された。厳しい法律が彼らの行動を管理した。そして首都に定期的かつ豊富な小麦の供給を確保することが属州総督の主目的になった。アントニヌス朝では受給者の数はかなり増加え、500,000人を超えることもあったという。セプティミウス・セウェルス帝（*在位AD193―211）は、小麦に油の配給を追加した。アウレリアヌスは毎月の挽いていない小麦の配給に代わって、毎日パン

を配給し、さらに豚肉を一人前追加した。その後、無料配布はコンスタンチノープル、アレクサンドリア、アンティオキアにも広がった。また、もっと小さな町でも全くなかったわけではないだろう。

既に見たとおり、この小麦の無償配布は奴隷制度や剣闘士ショーと並んで帝国を墮落させた主力の一つである。最も不適切な慈善活動でさえ、それが救おうとする階層にとっていかに有害であろうとも、一般的には施主、そして彼を通じて社会全体に有益で緩和的な効果を与えるものである。しかしローマの小麦の配給は単なる政策であって、人々を人間的に向上させることはなかった。一方、それは受給者の病弱さや特徴にまったく関係なく、貧困でありさえすれば支給されたため、怠惰を直接的かつ圧倒的に助長することになった。生活必需品と豊富な娯楽が提供されていたため、貧しいローマ人は名誉ある仕事を簡単に放棄し、都市のすべての商業は低迷し、小麦の配給が中断するたびに恐るべき苦痛が生じ、土地の無償提供はしばしば市民を実直な労働に引きつけるには不十分なものになり、公的救済を不十分なものにする子供の増加は中絶、遺棄、嬰兒殺しで阻止された。

ローマの人口はおそらく百五十万人を超えることはなく、貧民の大部分は奴隷として主人に養われており、200,000人以上の自由民が生活に最も必要なものを常時供給されていたことを考

えるなら、少なくとも大都市の異教徒社会が貧困の救済について過度に吝嗇であったとは言えないと私は思う。また小麦の配給の他にもいくつかの対策が取られていた。ローマの貧困層が非常に多く使用していた塩は、共和国時代には国家の専売品とされ、名ばかりの価格で売られていた。農地法の主題だった土地の分配はユリウス・カエサル、ネルウア、セプティミウス・セウエルスによって新しい形で行われた。彼らは土地を購入して貧しい市民に分配したのである。ユリウス・カエサル、アウグストゥス、その他の名士たちが多額の遺産を人々に贈った。そして不定期ではあったが、大きな祝い事の際にはかなりの寄付が行われた。数多くの公共浴場が設立され、完全な無料浴場ではない場合でも最小の硬貨で入場できた。その結果、貧しい人々が常時利用するようになった。ウエスパシアヌスは民衆教育制度を作り、アントニヌス朝はこれを拡大した。そしてすでに述べたような、貧しい親の子供を支援する運動が非常に大きな割合を占めるようになった。ローマで最初にその痕跡が見られるのは、アウグストゥスの時代である。アウグストゥスはそれまで公的な配給の対象になっていなかった幼い子供たちを支援するために、金銭や小麦を与えたのである。しかし、これは孤発的な博愛の行為にすぎなかったようである。この方向で最初に組織的な取り組みを行ったのはネルウアだった。彼はローマだけでなくイタリアのすべての都市で貧しい子供たちを支援するよう命じたのである。トラヤヌスはこの制度を大幅に拡大した。彼の治世にはローマだけで5、000人の貧しい子供たちが政府の支援を受け、他のイタリアやアフリカの都市でも、規模は不明だが同様の措置がとられていた。ヴェレイア（*北西イタリア）の小さな町には270人の子供た

ちを部分的に支援するためにトラヤヌスが設立した慈善団体があつた。民間の篤志も同じ方向へと進み、現在も残っているいくつかの碑文はその歴史を語りこそしないが、その活動を証明するに十分なものである。小プリニウスは学校を熱心に奨励する一方で、故郷コモの貧しい子どもたちを支援するために僅かな財産を捧げている。テツラチーナ（*イタリア中部西海岸）にある1000人の子供たちのための慈善事業の創設者として、カエリア・マクリーナという名前が残っている。ハドリヤヌスはこうした慈善事業に割り当てる小麦の供給を増やした。また貧しい女性への温情でも有名だつた。アントニヌスは通常よりはるかに低い四パーセントの利率で貧しい人々にお金を貸すのが常だつた。彼とマルクス・アウレリウスは妻を記念して女子を養うための施設を設立した。アレクサンドル・セウエルスも同様に、母を記念して子供の支援施設を開いた。キリスト教以前のヨーロッパにはおそらく公的な病院はなかつた。しかし病気の貧しい人々に薬を配布した痕跡があり、奴隷のための私設診療所や、軍の病院もあつたと考えられている。属州の町は大きな困窮の時期に政府から援助されることがあつた。そのために私的な遺産が贈られた事例も記録されている。

このような様々な措置は決して少なくなかつた。また全ての記録が失われてしまった同様の措置も数多く取られていたと考えるのも理由がないことではない。慈善事業の歴史には際立った特徴がほとんどなく、想像力をかき立てたり、注意を引いたりするものがほとんどないため、歴史家たちにはほとんど無視されるのが常である。また戯曲や詩、政治史や宮廷の回顧録の中の何気ない言及

から、現代の慈善の觀念がいかに不十分にしか拾い集められないかを思い描くのは容易なことだろう。しかし古代において慈善事業は、実践においても理論においても、設立された制度においても、義務の尺度においてそれが割り当てられた地位においても、キリスト教によつて獲得されたものは全く比べ物にならない位置しか占めていなかったことに疑問の余地はないだろう。ほとんどすべての救済は国の措置であつて、博愛というより政策として決定されたものだった。そして、幼い子供を売る習慣、無数の遺棄、剣闘士になろうとする貧しい人々、頻繁に起こる飢饉などは救済されなかつた貧困がいかに大きなものだったかを示している。私たちに伝わっている異教徒の慈善の例は実に僅かなものである。ギリシャではエパミノンドス（*BC 420—362）が捕虜の身代金を払い、貧しい少女たちのために持参金を集め、シモン（*BC 510—450）が飢えた人々に食物を与え、裸の人々に衣服を与え、ビアス（*BC 6世紀）がメツシーナの捕虜の少女たちを買つて解放し、持参金を与えたという記録がある。タキトウスはローマ近郊で大災害が発生した後、金持ちが家を開放し、すべての財産を投じて被災者を救済したことを感激しながら書いている。またギリシャやローマの貧しい人々の間には、病人や虚弱なメンバーの扶養を請け負う相互保険組合が存在した。ラテンの文筆家の頻繁な物乞いへの言及は、物乞いとそれを救済する人々が多数存在したことを示している。また、もてなしの義務も強く命じられていて、最高神の特別な保護の下に置かれていた。しかし、すべてのキリスト教社会の顕著な特徴になつている私人の積極的、習慣的、細やかな慈善活動は古代にはほとんど知られておらず、これに注目したモラリストも二、三人に過

ぎない。その筆頭はキケロであって、非常に賢明ではあるが、やや冷めた二つの章をこのテーマに費やしている。キケロは人間の本性にとって善行や気前の良い施しほどふさわしいものはない、しかしそれを実践するには多くの注意点がある、と述べている。私たちの贈り物が救済される人物にとって真の祝福であるかどうか、スツラ（*ルキウス・コリネリウス、BC 138—78、原文 Syllia は Sulla の間違いか？）やカエサルのように他人からの略奪に由来するものではないかどうか、虚飾ではなく心からのものであるかどうか、単なる哀れみの衝動によるものではなく感謝されるに値するものかどうか、受け取る人物の性格と要望の両方に適切な配慮しているかどうかに私たちは注意しなければならない。

初めて慈善（*charity、施し）を基本的な徳とし、道徳のタイプや指導者の訓戒の中に主要な地位を与えたのはキリスト教である。キリスト教は愛情を刺激する全体的な力に加えて、この分野に完全な革命を起こした。貧しい人々をキリスト教の教祖の特別な身代わりと見なし、これによって人間への愛ではなく、キリストへの愛を慈善の原理にしたのである。迫害の時代にも、貧しい人々の救済のための募金は日曜集会で行われた。アガペスなわち愛餐は主に貧しい人々のために行われ、断食によって節約された食料は彼らに捧げられた。司教が主宰し、助祭が積極的に指導する広大な慈善組織はやがてキリスト教世界全域に広がり、慈善の絆は団結の絆となり、キリスト教会の最も離れた地域同士が慈悲の交流によって連絡し合うようになった。コンスタンティヌスの

時代よりずっと前からキリスト教徒の慈善活動は非常に広範であって―おそらく過剰と言ってもよいほどであって―数多くの詐欺師を教会に引き寄せていた。キリスト教の勝利が達成されると、慈善への熱意は異教徒世界にはまったく知られていなかった数々の施設の建設によって示された。四世紀には、ファビオラというローマの女性が懺悔のためにローマに最初の公立病院を設立し、この女性の手が種を撒いた慈善事業が世界中に広がり、永遠に人類の最も陰鬱な苦悩を和らげることになった。その後、聖バンマキウス（*AD?―410）が別の病院を設立し、聖バシレイオスがカエサリアに有名な病院を設立した。聖バシレイオスはまた、おそらく最初のハンセン病患者の保護施設をカエサリアに建てた。聖バンマキウスはオステイア（*ローマ近郊の海岸の街）に、パウラ（*ローマの、寡婦、AD347―404）とメラニアはエルサレムに、それぞれ別の施設を設立した。ニカイア公会議では全ての都市に一つずつ建てるのが指示された。聖クリュストモスの時代にはアンテイオキア教会が3,000人の寡婦と処女、それに外国人や病人を支援していた。貧しい人々への財産の遺贈は一般的になった。また異様なまでに敬虔な人生を望む男女や、特に監督的立場になった聖職者が全財産を慈善事業に寄付することが稀ではなくなった。その大部分が意欲的で社会的な徳から極度に遠ざかっていた初期の東洋の修道士たちですら、慈善の多くの高貴な模範を示している。聖エフレム（*シリアの、AD306―373）は疫病が流行したとき、隠棲から抜け出してエデッサに病院を設立し、管理した。タラシウス（*AD5世紀）という修道士はユーフラテス河畔に盲目の物乞いを集めて保護施設を作った。アポロニウスという商人はニトリア

山（*ナイルデルタ西部、実際には山ではない）に修道士たちのために無償の施薬所を設立した。修道士たちはしばしば、疫病や飢饉に苦しむ属州を労働で助けた。ある神父が強い言葉で、すべての財産は寡奪に基づいているのであって、地上の権利はすべての人々のものである、他人のために管理しているもの以外に過剰な財産を持つてはならないと主張し、慈善は慈悲ではなく正義の問題であると宣言していることに最も初期のキリスト教共同体の特徴だった純粋な社会主義の名残を見出すことができるだろう。キリスト教徒は自分の利益の少なくとも十分の一を貧しい人々のために捧げなければならない、という主張がなされた。

このように教会に現れた慈善の熱意は、たちまち異教徒の関心を引いた。ルキアノスの嘲笑と、比肩する慈善システムを異教の範囲内で生み出そうとしたユリアヌスの空しい努力は、その卓越性と普遍性（*カトリック性）を強く立証した。西暦326年にカルタゴ、ガリエヌスとマクシミアヌスの治世にアレクサンドリアが疫病で荒廃したとき、異教徒がパニックになって伝染病から逃げまどう中、キリスト教徒は主教の周りに集まり、苦しむ人々の最期の時間を慰め、放置された死者を埋葬する勇氣によって同胞の称賛を浴びた。多くの奴隷が解放され、貧困層が急増する中で、彼らの慈善は存分に活動の場を得た。そしてやがて蛮族の侵略の恐怖によってその資源には極度の負担がかかった。ガイセリック（*AD389―477、ヴァンダル族の王）によるアフリカ征服はイタリアがほぼ完全に依存していた小麦の供給を奪い、ローマの貧困層を主に支えていた無償の配

給を止め、国中に最も恐るべき惨禍をもたらした。イタリアの歴史は飢饉と疫病、飢えた人々と廃墟になった都市の単調な物語になった。しかし、このような解体の混沌の中にあっても、敵対勢力の間を取り持ち、周囲の惨禍を軽減するために全力を尽くす、キリスト教聖職者の威厳ある姿はいたるところに見られる。帝都がアラリックの軍勢に占領され略奪されたとき、キリスト教会はゴート人の情熱にも貪欲にも侵されることのない安全な聖域であり続けた。アラリックより獐猛な男がローマに狙いを定めたとき、教皇聖レオ（*1世、在位AD440―461）は聖職者のローブをまとい、同胞の大使として勝ち誇るフン族と会見した。そしてアッティラ（*AD406―453）は宗教的畏怖の念に圧倒され、その進路を変えたのである。二年後、ローマがゲンセリックのなすがままになったとき、同じ教皇がヴァンダル征服者と交渉して虐殺を部分的に停止させた。ペラギウス大助祭（*詳細不明）は、ローマがトーティラ（*AD516―552、東ゴート族の王）に占領されたとき、同様の人道的な仲介を行い、同様の成功を収めた。ガリアでは、トロワ（*フランス中部）が聖ループス（*AD383―478）の、オルレアン（*フランス中部）も聖アイニャン（*AD358―453）の尽力で破壊を免れたと言われている。（*対アッティラ）イギリスではピクト人の侵入をオセール（*フランス中部）の聖ゲルマヌス（*AD378―448）が回避した。（*大声で脅かして撤退させた）支配者と臣民の関係や、裁判所と貧民の関係も同様の介入によって緩和された。アンテオキアがテオドシウスに反抗して滅亡の危機にさらされたとき、隠者たちが近隣の砂漠から押し寄せて皇帝の大臣にとりなし、大主教フラウミアヌス（*アンティ

オキアの、1世、AD320—404）は自らコンスタンチノーブルに嘆願に出向いた。聖アンブロジウスはテサロニケ（*ギリシャ北部）の虐殺を理由にテオドシウスに公開懺悔を命じた。（*初めて世俗権力が教会権力に屈した）シユネシオスはアンドロニカスという総督をその压制ゆえに破門した。また六世紀には、フランスの二つの教会会議が貧者を恣意的に追い出したすべての大物に同じ罰を課している。一部の司祭や修道士の乱暴な慈善活動を抑制するために特別な法律が必要になった。彼らは司法の過程を妨げ、犯罪者を法の手から引ったくるとさえあった。聖アブラハム（*キドゥナイアの、AD290—366）、聖エピファニオス、聖バシレイオスは皆、過酷な重税を免除または減額させたとされている。寡婦や孤児の利益を図ることは教会の公的な義務の一部だった。そしてマコン（*フランス中部）の教会会議では、最初に教区の司教に知らせずに彼らを裁判にかける支配者には天罰が下るとされた。五世紀のトレド（*スペイン中部）教会会議は司祭、修道士、貧しい人々から金を盗んだり、彼らの訴えに耳を貸さなかったりする者はすべて破門すると脅した。聖職者が過大な権力を得た主な原因の一つは彼らが仲介者の役目を果たしていたことだった。そして彼らの巨大な富は彼らを貧しい人々の管財人と見なす人々の遺産によるところが大きかった。時代が進むにつれて慈善事業はさまざまな形をとるようになり、すべての修道院はそれを放射状に広げる中心地になった。修道士たちによって、貴族たちは威圧され、貧しい人々は保護され、病人は治療され、旅人は保護され、捕虜の身代金が支払われ、苦しみの最も遠い領域までが調査された。中世の暗黒時代には、修道士たちがアルプスの恐しい雪山の中に巡礼者の避難所を作っ

た。人里を離れて住む隠者はしばしば橋のない川の岸に小舟とともに座り、旅人を渡らせることをその生涯の施しとした。ハンセン病という恐ろしい病気がヨーロッパ中に蔓延し、その忌まわしさや伝染性だけでなく、ある意味で超自然的なものであるという考えが人々の心を恐怖で満たしていた頃、新しい病院や避難所がヨーロッパ中に広がった。そして大勢の修道士たちが奉仕するためにそこに集まった。伝説によれば、癩病患者の姿が瞬間的にキリストの姿に変容したとのことである。人類の中で最も忌まわしい存在を看病しに來た修道士たちは報われた。主の御前にいると感じたのである。

扱う対象の重要性と劇的な面白さの大きな乖離は、歴史家が最も早く、最も痛切に意識するようになる事実である。戦争や虐殺、殉教の恐怖や個人の豪勇の壮観は、鮮やかな色を塗られやすく、わずかな筆力でその重要性が十分に理解され、読者の感情に力強く訴えかけるように描写することが可能である。しかし、村や集落や人里離れた病院で活動し、未亡人の涙を止め、貧しい人の全ての悲しみに寄り添う、この広大で仰々しくない慈善運動には想像力を刺激する呼び物はほとんどなく、心に深い印象を残すことはない。最も偉大なものは、しばしば最も不完全にしか理解されないものである。そしてキリスト教会が慈善の領域で達成したもののほど真に偉大なものが他にないことは間違いない。キリスト教会は人類の歴史の中で初めて、何千人もの男女に、あらゆる世俗的な利益を犠牲にし、しばしば極度の不快さや危険の中で、人類の苦しみを和らげるといふただ一つの目

的のために全生涯を捧げるよう促したのである。異教世界には絶対的に存在しなかった無数の慈悲の制度で地球を覆ったのである。それは人々の心の中で、至高の善という観念と、活動的で絶え間ない博愛という観念とを、不十分に結びつけた。すべての教区には宗教指導者が配置された。この聖職者は他の職務が何であれ、少なくとも公式に慈善組織の監督を任されていた。そしてこの職務には最も重要なものの一つであると同時に、最も正当なものの一つである、権力の源泉があったのである。

しかし、私たちがキリスト教の慈善活動の歴史を称賛するためには、二つの重要な留保事項がある――一つはある特定の形の苦痛に関するものであり、もう一つはより一般的な種類のものである。精神異常は超自然的なものであるという、はつきりしないながらも強い観念が古くから存在していた。しかし、この不幸に陥りやすかったり、これに苦しんだりしている人たちに対する教会の行動を特別に不都合なものにする特別な背景があった。ユダヤ教の書物には魔術と悪魔の憑依が事実であることがはつきりと書かれていた。永遠の拷問や遍在するダイモンについて一般的に信じられている事柄、目に見えない世界に思いを馳せて想像力を働かせ続けることは、狂気の素因を持つ者に狂気をもたらしたり、実際に狂気が現れた場合には狂人の幻覚の形や外観を決定したりするのに非常に適していた。神学は想像力に最も強力に作用するすべてのイメージを提供していたし、ほんどの狂気は何世紀にもわたって神学的な色彩を帯びていた。その重要な一つの分野は主に聖人の

生涯に見られる。ぞっとするような未開の荒野の中で人々と離れて生活し、肉体を徹底的に狂わせるような耐乏生活を行い、無数の悪魔が絶えず庵の周りをうろついて彼らの祈祷を邪魔していると固く信じ込む、想像力が豊かで絶対的に無知な人々はすぐに、そしてごく自然におそらく彼らの人生の伝説の本当の核である幻覚に支配されるようになる。しかし、狂気が天国の幻影や悪魔の出現や退治といった正統派の形にとどまることはありえない。狂気はしばしば、不幸な狂人を何らかの妄想に導き、教会はそれを迅速に裁いた。例えば1300年には自らを女性の救済のために聖霊が具現化したものであると想像したボヘミア人、一説にはイングランド人少女の遺体が掘り起こされて焼かれ、彼女を信じた二人の女性が火あぶりの刑に処せられている。1359年、あるスペイン人が自分は大天使ミカエルの兄弟であり、サタンが失った天国の場所を手に入れる運命にあると宣言した。そして自分は毎日天国に昇り、地獄に下ることに慣れている、世界の終わりが近づいており、自分は反キリストと一戦を交える運命にあると言い放った。この哀れな精神異常者はトレドの大司教に捕らえられ、生きたまま焼かれた。幻覚が不規則な靈感の形をとることもあった。この罪でジャンヌ・ダルクと彼女の先例に憧れ、明らかに本物の幻覚の下で彼女のキャリアに倣おうとした別の少女が生きたまま焼かれた。十六世紀のスペインの有名な医師で学者のトラルバは自分に常に天使が付き添っていると思ひ込んでいたが、公開の懺悔と告解で罪を免れた。しかし、同じ妄想に苦しみ、それに自分の霊的な威厳に関する乱暴な観念をいくつかつけ加えた、リマの神学教授はより不運だった。彼はペルーの異端審問で火刑になった、その年齢、孤独、弱さゆえに最も同情に

値する何千人もの不幸な女性たちが、キリスト教会のさまざまな部門の聖職者の力によって人類の憎悪に晒され、恐ろしく巧妙な残酷さで拷問され、ついには生きてままたま焼かれたのである。

ある種の生来の狂気の内容は一般に認められていた。しかし不幸な犠牲者の救済手段は非常に少なく、また非常に間違った判断を下されていた。古代人は彼らを神殿に運んで儀式を受けることを強いた。それは超自然的に彼らを癒すと信じられており、おそらく想像力に働きかけて好ましい影響を及ぼした。ギリシャの偉大な医師たちはこの病気に多大な注意を払っており、その教えのいくつかは現代の発見を先取りしたものだ。しかし古代には精神病院は存在しなかったようである。隠者生活が始まった頃、多くの隠者が苦行によって精神異常をきたしたため、彼らのための保護施設がエルサレムにつくられたと言われている。しかし、これは一つの集団の危急から生じた孤発的な例であって、十五世紀までキリスト教のヨーロッパには精神病院は存在しなかった。この慈善事業の形についてはキリスト教徒よりもイスラム教徒が先行していたようである。十二世紀にバグダッドを訪れたトゥデラのベンジャミン（*スペイン出身のユダヤ人旅行家）は、そこにある「慈悲の家」と呼ばれる宮殿について述べている。ここには国内で発見された狂人がすべて鉄の鎖で縛られ、監禁されていた。彼らは毎月注意深い検査を受け、回復するとすぐに解放された。カイロの精神病院は西暦1304年に設立されたと言われている。レオ・アフリカヌス（*1485-1555、ムーア人の旅行家）は十六世紀初頭にフェズ（*モロッコ）に同様の施設があったことを指

摘し、患者が鎖でつながれていたことに触れている。従って精神障害者の世話はイスラム教諸国における一般的な慈善活動だったと考えていいだろう。それはキリスト教徒の間ではイスラム教徒と隣接する地域に最初に現れた。しかしイスラム教徒に由来するという証拠はないようである。マルタ騎士団は精神異常者を入院させる騎士団として有名だった。しかし西暦1409年まで精神異常者のためのキリスト教徒の保護施設は存在しなかった。キリスト教圏にこの慈善事業を導入した栄誉はスペインのものである。ファン・ジルベルト・ジョフレ（*1350—1417）という修道士が、バレンシアの街角で群衆に嘲られる狂人たちを見て哀れみ、同市に精神病院を設立したのである。そしてたちまち他の地方も彼の例に倣った。西暦1425年にはサラゴサに、西暦1436年にはセビリアとバリャドリッドに、西暦1483年にはトレドに、新しい慈善事業が広まった。これらの施設はすべて、キリスト教圏の他の地域に精神病院がまだ一つも設立されていない時期に存在していたのである。この分野におけるスペインの慈善活動の傑出を証明するために、他に二つの非常に名譽ある事実を挙げるができる。一つ目は、カトリックの首都にある最も古い精神病院は、西暦1548年にスペイン人によって建てられたものであるということである。もう一つは、前世紀末にピネル（*フィリップ、1745—1826、フランスの精神科医）がこの分野における偉大な仕事を始めたとき、精神異常者が最も賢明かつ人道的に扱われている国はスペインであると彼が宣言したことである。

多くの国では精神異常者の境遇は実に嘆かわしいものだった。何千もの女性たちが魔女として焼かれる一方で、精神異常者とされた人々は最も過酷な投獄のあらゆる恐怖に耐えることを強いられた。彼らの通常の扱いは殴打、流血、拘禁だった。暗い独房に縛られて何十年も過ごした狂人たちは恐ろしい証言を残している。当然このような扱いは彼らの病気を悪化させた。そしてその病気は多くの場合、普通の囚われ人の苦しみを緩和する、諦めと究極の無気力を不可能にしてしまった。十八世紀になるまで、この不幸な人々の境遇が真剣に改善されることはなかった。神学的懷疑論と科学的知識の結合による進歩によって、魔法は幻想の世界へと追放され、イタリヤのモルガニー（*ジョヴァンニ・バッティスタ、1682—1771、解剖学者）スコットランドのカレン（*ウィリアム、1710—1790、多くの指導的医学者を育てた）、フランスのピネル（*フィリップ、1745—1826）の努力によって、認定された精神異常者の治療の全体が一新されたのである。

キリスト教の慈善活動の歴史の称賛に対する第二の留保事項は、慈善活動の大部分はその救済を意図した貧困を直接的に悪化させたという疑いのようなない事実である。慈善活動の有用性と性質に関する問題は近代的な政治経済学の発見以来、多くの議論を呼んできたが、多くの場合かなり誇張されているように思われる。政治経済学がこの問題に及ぼした効果は次の二点に集約されるだろう。それは社会の幸福の決定における、先を見越した儉約による自己利益の効果を以前より明確に、よ

り詳細に解明したこと、そして生産的支出と非生産的支出との間に広範な区別を確立したことである。怠惰を支援する地域では怠惰が一般化する。老齢のために計画的な公的給付が行われる地域では、先を見越した儉約が軽視される。したがって、こうした形の慈善活動は怠惰や浪費の習慣を助長することによって、それが緩和しようとした惨めな状態を結局のところ増悪させることが明らかになったのである。（*自由党時代のチャーチルは選挙演説で、貧しい人たちは先を見越した儉約などしないので老齢年金は必要、と言っている）また非生産的な支出、例えば娯楽や贅沢などは、それを提供する人々にとっては間違いなく有益なものだが、その果実はその場で消えてしまうものであること、一方、機械による製造、土壌の改良、営利事業の拡張などの生産的支出は、富の創造に新たな推進力を与えること、資本の急速な蓄積の第一の条件は、富を非生産的分野から生産的分野に回すことであって、蓄積された資本の量は労働者の賃金を調節する二つの力のうちの一つであることが明らかになった。こうした立場から、慈善事業は非生産的な支出として非難されるべきであると論じる人々もいる。しかし第一に、民衆教育、貯蓄銀行や保険会社の設立、あるいは多くの場合、少額の特別融資、浪費の抑制に向けた措置など、貧しい階級の先を見越す習慣を養い、新しい能力を開発するすべての慈善事業は厳密な意味で生産的なものと言える。同じことは慈善的動機によって、危機に際して例外的に与えられる数多くの雇用についても言える。そして第二に、富の蓄積がそのための唯一の手段とされている、人類の幸福こそが慈善活動の真の目的であることを思い出すだけでよい。そして商業的な意味において厳密には生産的とは言えない多くの形が、この

目的に最も適したものであって、それを相殺する深刻な害はないことが分かるだろう。不摂生や悪徳に起因しない苦しみの軽減には、最も温かく、最も賢明な慈善事業が力を発揮する余地が十分にあり。すなわち盲目やその他の例外的な不幸、疫病、戦争、飢饉、新しい発明や商取引のルートの変化によって生じる産業の最初の突然の崩壊によって生じる災難であって、思慮分別がその影響に備えておらず、また備えることができない災難である。病院は他の利点に加えて、医学の最大の学校である。そしてそうしなければ流行り病の中心になるであろう大勢の人々を混み合った路地から引き離す—これらのこと、そしてこれらのようなことのため、長きにわたって富裕層の雅量には最大限の課税がなされるだろう。一方、政治経済学者が最も苦々しい目で見ている領域においてさえ、例外的な場合には、例外的な援助が正当化されるだろう。有害な慈善事業は一般的に最高ではなく最低のものである。金持ちは自分にとってはほとんど価値のない金を惜しみなく与えている。しかし施しの対象に個人的な注意を払うことは全くできず、その寄付によってしばしば社会を傷つけているのである。しかし、世話する側の人々が不幸の巢に精通しており、その世話の対象者を人生のあらゆる局面でフォローしている、はるかに高貴な慈善の場合にはそうしたケースはほとんどない。慈善活動の有用性は、シンプルな最終結果の問題である。政治経済学は間違いなく、この問題に関して非常に価値あるいくつかの一般的な規則を定めている。しかし、現代の経済学者がそれについて書いていることは、キケロが約二千年前に既に書いていたのではないだろうか。そして、自分の小教区で働くプロテスタント女性はシンプルな常識の力と、自分が救済する人々の状態や性格に対

する細心の注意によって、マルサス（*1766—1834、人口論で知られる）の賢明な慈善（*救貧法は貧者の人口増加の誘因となる）を無意識のうちに完璧な精度で例証していることが、絶えず発見されるだろう。

しかし、その慈善が有益であるためには、寄付者にとつての真の目的が苦しんでいる人の利益でなければならぬ。そしてカトリックの慈善活動から発生した悪の大部分は、この条件の欠如に起因すると考えられる。博愛を目的として、初めて信心を慈善活動に置き換えたことは、情愛をとて強く刺激したため、全体として有益だったのかも知れない。しかし、もっぱら神学を經由して慈悲をかけることは、しばしば神学者の間に自分たちの宗教共同体に属さないすべての人々の苦しみに対する、普通以上の無関心を生み出すことになった。また、この新しい原理はすぐに贈与の贖罪的性格に対する信仰へと墮落してしまった。利己的な慈善事業とでも呼ぶべきものが生まれ、それはついに巨大な規模になり、キリスト教圏に最も悪質な影響を及ぼすようになった。人々は、シンブルにもっぱら自分の霊的な利益のためだけに貧しい人々に金銭を与え、苦しんでいる人々の幸福は彼らの考えとは全く無縁のものだった。

カトリックの慈善活動のいくつかの形からこうして生じた害悪は非常に早い時期から追跡することができぬ。しかしそれが最大最悪のものになったのは数世紀後のことだった。ローマ帝国の無償

の配給制度は政治経済学者の目から見れば、考え得る限り最悪のものであった。また教会の慈善事業は少なくとも一応の見識があるものであり、当時も純粹な善だったわけではなかったが、当初は非常に偉大なものだった。また、神父たちが労働を義務として課すことも少なくなかった。後年、ベネディクト会の修道士たちが奴隷制度につきまとう汚名をその模範によって払拭したことは非常に大きな功績だった。しかし、教会の豊かな慈善の最初の結果の一つは、詐欺師や托鉢修道士を増やすことであり、修道士の怠惰は初期の苦情の一つだった。ウァレンティニアヌスは屈強な物乞いを永久に奴隷にする厳しい法律を作った。修道院制度が拡大し、特に托鉢修道会が托鉢を聖別した後、害悪は巨大な規模へと拡大した。私的財産を全く持たない何千人もの丈夫な男たちが、あらゆる国で生産的な労働から離れ、慈善事業によって支えられていたのである。単なる施しに功德があるという考え方が物乞いの数を果てしなく増加させた。托鉢に着せられる汚名は社会の最大の利益であるが、それを取り除くことが神学者の主目的になった。聖人たちは物乞いに与えるために金銭を乞い、裸の人々に与えるために自分の衣服を脱いで世界中を放浪したが、彼らの教えの結果はすぐに明らかにになった。教会の影響が野放しにされてきたカトリックの国々では、修道院組織は致命的な害毒になり、国家の繁栄を腐敗させることが証明されたのである。多くの人々をあらゆる生産活動から引き離し、盲目的で有害な施しを奨励し、貧しい階級に浪費の習慣を広め、聖人のごとき貧困に対する無知な称賛と、産業文明の習慣や目的に対する同じく無知な反感を育むことによって彼らはあらゆるエネルギーを麻痺させ、物質的進歩に対する越えがたい障害となってきたのである。

この制度によって救済された貧困は、それが引き起こした貧困に比べれば取るに足りないものだった。イングランドほど修道院の廃止が防衛不能の形で行われた例は他にない。しかし、かつて慈善事業に大いに利用されていた財産がヘンリー王（*8世、カトリック修道院を潰して国教会設立）の廷臣たちに譲渡されたことは、最終的にイギリスの貧困層の利益になった。この財産を私人が誤って使用したとしても、抑えるもののない修道院制度ほど多くの害悪を生み出すことはないからである。痛みや病氣、そしてより破格の苦しみを和らげるためのカトリックの奉仕の価値をどれほど評価しても決して過大評価にはならないだろう。慈善事業に身を捧げたその奉仕者たちの崇高なヒロイズムに勝るものはなく、その組織の完璧さは比類ないものだと思う。しかしシンプルな貧困の領域では、カトリック教会は取り除いたよりも多くの不幸を作り出してきたことは疑いようがない。

しかし、この分野でも苦しむ人物にはなくとも、少なくとも寄付をした人物に利益があったことを忘れてはならない。慈善的な習慣は、たとえ最初は利己的な動機からだったとしても、たとえ受け取る側にとって明らかに有害なほどに誤った方向を向いていたとしても、ほとんどの場合に人格を和らげ、清らかにする力がある。中世の最も暗い時代を通じて、凶暴性と狂信性と残虐性の中で、あらゆる過剰な暴力とあらゆる迫害の噴出と奇妙に混ざり合った、カトリックの慈善活動の抑制的な力を見て取ることができる。トゥールのグレゴリウス（*538―594、ローマ世界と初期中世ヨーロッパの境界地域に生きた）が書いた歴史書ほど恐ろしい社会を想像することは難しい

だろう。しかし、ほとんどぞっとするような平静さで語られたその残虐な罪悪の長い物語には、無秩序な社会の中で貧しい人々の救済を人生の主目的とした王、女王、あるいは高位聖職者の記録が常に散りばめられている。最も大量の残虐と放縦と狂信が見られたのは十字軍の時代である。しかし軍事的な熱狂と、ほとんど例外がない腐敗と並行して、広大な慈善運動が展開され、ハンセン病救済のための病院がキリスト教圏に広がり、発生した多くの苦しみに対して効果的ではなかったとしても、気高い闘いが繰り広げられたのである。すでに述べたとおり聖ペドロ・ノラスコは捕虜になつたキリスト教徒の身代金調達に多大な貢献をしたが、カタリ派の残酷な虐殺にも積極的に参加したのである。アイルランドで最も有能でありながら、最も凶暴な族長の一人であり、イングリンドの権力に反抗し続けたシェーン・オニールは、数多くの罪にまみれていながらも「食事の席で一口目を食べる前に、その一部を切り分けて毎日の施し物の上に載せ、まずキリストに差し上げなければならぬ、と言って門前の物乞いに与えた。」と伝えられている。

カトリックの野放図な発展に常に伴つた托鉢の症例の大きな害悪は、当然ながら多くの議論と法律制定の原因になつた。十三世紀にサンタムール（*ブルゴーニュの町）のウイリアム（*1200—1272、パリ大学の学者）が托鉢修道会を激しく非難したのは、彼らが有害な慈善活動を促進したからではない。（*托鉢修道会の大学での侵入に反発）しかし、ウイクリフ（*ジョン、1324—1384、イングリッド宗教改革の先駆者）の弟子のヘレフォードのニコラス（*?—14

20、神学者、カトリックを批判して破門され、転向）は物乞いへの見境のない施しに反対したことで知られている。宗教改革以前にもいくつかの大規模な措置がとられていたようである。イングランドでは托鉢を根絶することを目的として、最も野蛮で残酷な法律が制定された。ヘンリー8世の議會は修道院を禁止する前に、組織的な慈善活動の制度を規定し、物乞いに何かを与える者にはその施しの価値の十倍の罰金を課すという法律を發布した。身体が丈夫なのに物乞いをする者は、最初の違反で鞭打ちの刑、二回目には鞭打ちと耳の先端の切除、三回目には死刑に処されることになっていった。エドワード6世の時代、その治世の間に廃止されたが、残酷な法律が制定された。すべての働くことを拒んだ頑丈な物乞いに焼印を押し、二年間、彼を密告した者の奴隷とする、と宣言されたのである。そしてその期間中に逃亡した場合、最初は永遠の奴隷に、二度目は死刑になった。主人は奴隷の首に鉄の輪をはめ、鎖でつなぎ、鞭打つことが許されていた。誰でも男子二十四歳、女子二十歳未満の丈夫な物乞いの子供を奉公人として連れて行くことができた。エリザベス女王の時代に制定された別の法律では、十八歳未満の屈強な男で、物乞いで三度有罪になった者は死刑とされた。しかしこの治世における刑罰はその後、ガレー船での終身刑か流刑になり、戻ってきた囚人は死刑にされた。同じ女王の下で救貧法制度が整備された。そしてずっと後にマルサスは、その制度の儉約する気をなくす効果が、以前の修道院制度とほとんど変わらざる有害なものであることを明らかにしたのである。多くのカトリック諸国では托鉢の害悪に対処するため、そこまで残忍ではなかったとはいえ、厳しい措置がとられた。聡明で賢明な教皇シクストゥス5世（*在位15

85—1590)は偉大な人物ではなかったが、教皇の中では最も優れた政治家であり、教会の影響のせいで托鉢が特に盛んだったローマでこれを阻止するための称賛に値する努力をした。1531年、カール5世(*1500—1558)はオランダで物乞いに対する厳しい法律を発布したが、托鉢修道士と巡礼者はその対象から除外された。ルイ14世(*1638—1715)の時代にはフランスで同様の厳しい措置がとられた。しかし、現実的な害悪は十分に感じられていたものの、その原因に関する哲学的な検討は18世紀以前にはほとんど行われていない。イギリスのロックやアイルランドのバークリーはこの問題を軽く一瞥している。また1704年、デフォー(*ダニエル、1660—1731、ロビンソン・クルーソーで知られる)は「与えれば慈善なのではない(*Giving Alms no Charity)」という非常に注目すべき小冊子を出版し、その中でどの大陸国家よりも賃金が高いにもかかわらず、イギリスに広く物乞いが存在していることに触れている。さらに注目すべきなのはリッチ(*ロドヴィコ、1742—1799)という人物が書いた本で、1787年にモデナで出版されて大きな反響を呼んだ。著者はイタリアにおける物乞いの巨大な展開を力説し、その原因を人々の過剰な慈善に求めた。そして宗教的動機から生まれた、人間の生来の本能から生まれた以上の慈善を害悪と捉えていたようである。自由思想家のマンデヴィルは以前から慈善学校を批判し、貧しい人々を向上させようとする制度全体を非難していた。またマグダラの避難所(*娼婦の更生施設)や孤児院には大きな誤解があったとは思われるが、獐猛な敵がいた。救貧法の改革とマルサスの著作は、この問題についての議論に新たな刺激を与えた。

しかし、いま述べたような留保事項も、いかなる新しい発見もキリスト教の慈善活動に暗い影を落とすものではないと私は考えている。その運営はしばしば極めて無思慮なものであるが、少なくともプロテスタント諸国では、それを統制する原理はほんのわずかな改良しか必要としない。

キリスト教が人間の性格を和らげるために用いた最後の方法は、優しさと悲哀のイメージを絶えず詳しく述べ、想像力をそれに慣れさせることだった。私たちの想像力は職業ほどではないにしても、おそらく私たちの批判力よりも深く私たちの道徳的性格に影響を与える。特に貧しい階級の人々のケースでは人間の本性のこの部分を育てることは計り知れないほど重要である。ほとんどの場合、一生涯一つの場所に根を下ろし、無知と環境ゆえに他の人々の心を動かすさまざまな興味から排除され、絶え間ない地道な労働を強いられ、目の前の不安で直接的な細かな心配事に永遠に没頭していているため、彼らの全ての性質は望みなく萎縮しており、彼らの想像力には羽を伸ばす場所がない。宗教は貧しい人々の唯一のロマンである。宗教だけが彼らの思考の狭い地平を広げ、夢のイメージを提供し、彼らを観念的で理想的なものへと誘うのである。異教の創造的な空想が万物に住まわせた優美な存在たちは、農民の労苦を詩的に輝かせた。農業のあらゆる段階は神々に支配されており、世界は神々との交わりによって輝きを増していった。しかし、キリスト教的なタイプの特徴は、想像力をかきたてると同時に心を清らかにすることである。優しく、人を惹きつける、ほとんど女性的とも言えるキリスト教の教祖、聖母、ゲッセマネやカルバリの苦悩、聖書に満載さ

れている数多くの慈悲と苦しみの光景は千八百年の間、人類の最も粗野で無知な人々の想像力を支配してきたイメージなのである。農民にとってはまさに荘厳さの理想である、幼年期の最も懐かしい思い出、教会の鐘の音、群れなす光ときらびやかな装飾と結びつき、彼が人生の伴侶を迎えた祭壇、周りを囲む彼が愛した多くの人々の墓地、山の見張小屋、ブドウ園の門、チャペルに飾られた嵐に遭った航海士の感謝の印に描かれて、彼の小屋のドアを見張り、彼の質素なベッドを見下ろす、優しい美しさと穏やかな悲しみの形は、いつまでも貧しい男の空想を捉え、その存在の奥底に静かに入り込んでいくのである。どんな雄弁な言葉よりも、教義上のどんな教えよりも、それらは彼の性格を変え、従わせて、弱さと苦しみの神聖さ、慈悲と優しさの最高の尊厳を悟らせるのである。

私が描いたスケッチは不完全で不十分なものだが、キリスト教の博愛主義がいかに偉大で多くの影の影響力を持っていたかを示すには十分だろう。その影の部分を私は隠さなかった。しかし、それらすべてを考慮しても、私たちが最も深く称賛するに足るものは十分に残されているだろう。人命の尊厳に対する高い観念、幼児の保護、奴隷階級の地位向上と最終的な解放、野蛮な競技の禁止、広大で多様な慈善組織の創設、キリスト教徒のタイプによる想像力の教育が一体となって、異教徒世界が並ぶことも近づくこともできなかった博愛の運動を構成しているのである。この運動は幸福を促進する上で大変大きな効果があった。人格を決定する上で、その効果はおそらくさらに大きかった。理想的な人格を構成する資質の割合や傾向において、より優しく、より博愛的な徳がキリス

ト教を通じて最も重要な地位を獲得したのである。それは最初の純粹な時代には特に最上のものだった。しかし、三世紀には大きな禁欲運動が起こって次第に新しいタイプの人格が台頭し、教会の熱意は新たな方向に逸れていった。

二世紀の論者テルトゥリアヌスはよく引用される一節で、当時のキリスト教徒をインドの裸行者すなわち隠者と対比させ、これらの人々と違って、キリスト教徒は世間から逃れず、公会広場、市場、公衆浴場、日常の生活の中で異教徒と混ざり合っていたと書いている。教会設立後二百年以上、隠者や修道士の生活は知られていなかったが、それを生み出す風潮はほぼ初期の段階から見つけることができる。禁欲主義の中心概念は、あらゆる性交渉を完全に断つことと、この世を完全に捨て去ることの功德である。前者は最も早くから、そして長い間、義務ではなかったものの常に神聖視され、特に聖職者において重視されていた童貞の尊重に見られる。後者はキリスト教の共同体をその周りの社会からできる限り切り離そうとした数多くの努力に表れている。教会の増殖と勝利がキリスト教徒の大部分を活動的な政治や軍事の職務に送り込んだ時、信心の実践として、かつてすべてのキリスト教徒の一般的な状態だった世俗からの分離を模倣しようとする人々が現れたのはごく自然なことだった。これに加えて長い間、精神的な伝染病のように禁欲主義運動が世界中で猛威

を振るっていたのである。結婚に置かれた大きな重み、人口急増の礼賛、メシアの祖先になる希望ゆえに、禁欲的概念と特に対立する律法を持っていたユダヤ人の中であって、エッセネ派は結婚を避け、世間から全く離れた完全な禁欲的共同体を作っていた。ローマではその実践的な特質が、可能であれば不活発な禁欲生活に、ユダヤ人以上に反発していただろうが、その活発で実践的な精神を最もよく表していた哲学者たちでさえ、同じ傾向を示していたのだった。後期帝国のキニユコス派は市民的、家庭的な絆の完全な放棄と、専ら知恵の瞑想に費やす生活を推奨した。まもなくヨイロッパで台頭したエジプト哲学は禁欲的理想のさらなる接近を予感させるものだった。教会の周辺ではグノーシス派やマニ教徒の多くの宗派が、さまざまな形で物質の本質的な邪悪さを訴えていた。仮現説派は同じ考えに従ってキリストの体の実在を否定した。モンタノス派とノウアティアヌス派は正統派の私的な苦行を凌駕し、刺激した。このように最初の種が蒔かれたときには常に、禁欲主義の噴出のための土壌が完全に準備されていたのである。それはデキウスの迫害のときのことだった。この迫害で砂漠に逃れた隠者パウロはこうした手合いの最初の一人だったと言われている。アントニウスがすぐ後に続いて、この運動を大きく広げた。そして数年のうちに隠者たちは強大な集団になった。迫害は最初、多くの人々を逃亡者として砂漠に追いやったが、やがて宗教的な熱狂を呼び起こし、天国への直接の道と信じられた苦難への熱烈な願望を引き起こした。この熱狂はコンスタンティヌスの平和の後には、砂漠の生活で痩せ衰えることにその自然なけ口と領域を見出した。聖ヒエロニムスが最も雄弁に物語ったその生活の詩的な環境に、男たちの想像力は魅了された。

私たちはそのための勧誘に秀でていた。かつて異教徒の役人の妻にキリスト教聖職者との秘密の關係性を持たせたのと同じ精神が、今度はキリスト教徒の妻を修道士たちの有力な手先にした。父親が息子を軍務や公職につかせようとする一方で、母親は息子を隠者にするためにあらゆる神経を使った。修道士たちは密かに母親と連絡を取り合い、若者たちを感化するべく巧みな教育を行った。そして時には父の警戒、心や怒りをかわすために職業を隠し、一般の教育者の服を着た。修辞学者の座にほとんど取って代わり、影響力において計り知れないほど超越していた、アンブロジウス、アウグスティヌス、クリュソストモス、バシレイオス、グレゴリウスなどの人物を満載した説教壇は同じ目的のために絶えず力を發揮した。そして大都市の極度の贅沢は激しい、しかし不自然ともいえない禁欲主義という反動を生んでいた。時にはただの農民だった人々を皇帝と結びつけた隠者の地位の尊厳、安全を求める逃亡中の奴隷や犯罪者、帝国の腐敗した圧政の中で耐え難い重さになった税負担からの逃亡、そして特に様々なパニックと不幸を生み出した蛮族の侵略が宗教の新しい教えと助け合って砂漠の人口を増やしたのである。禁欲主義の神学がたちまち形成された。後代のカルメル会（*12世紀―）は大胆な想像力を働かせてエリヤとエリシャ（*BC9世紀頃、荒野に住んだユダヤの預言者の師弟）の事例を自分たちの修道会の起源とした。またより新しい事例として洗礼者（*ヨハネ）の例が直ちに引き合いに出された。隠者の人生は普通の一般人にとって、結婚の祝宴で宣教を開始し、進んで俗世間と交わることで敵から絶えず非難され、その最も純粹で最も熱心な信奉者の中から数人の女性を選んだ指導者（*キリスト）の人生とは、最高度に対立する

ものに見えたかもしれない。しかし禁欲的神学者は大抵こうした話題を避け、主にキリストの無原罪の誕生、その処女母、その独身生活、その金持ちの青年への勧告について多くを語った。既に一般的に最重要人物とされていた聖ペテロは明らかに既婚者だったが、この難問はペテロと他の既婚の使徒たちは改宗後、妻との交わりを絶ったという伝承によってある程度解決された。しかし聖パウロはおそらく未婚だっただろう。そしてその著作からは未婚の状態を好んでいたことがはっきり見て取れる。また未婚の状態は神学者たちの工夫によって予想もしなかったところで発見された。例えば聖ヒエロニムスは、箱舟に清い動物は七匹、汚れた動物は二匹ずつ入ったが、奇数は独身の、偶数は既婚の象徴である、と断言した。汚れた動物でさえも再婚という大罪を犯さないよう、種ごとに一組ずつしか入れなかったのである。教会の伝統はこの傾向を維持した。そしてヘゲシッポス（*AD 110—180）が描写した聖ヤコブ（*主の兄弟、AD?—62）は一種の理想的な聖人、神学者たちの考えによれば、人間の高貴さの真のタイプそのものになった。彼は「母の胎内にいるときから聖別されていた。ワインも醸造酒も飲まず、動物食も絶っていた。カミソリを頭に当てたこともない。油を塗ったり、風呂に入ったりしたこともなかった。聖所に入ることが許されたのは彼だけだった。彼は決して毛織物を着ず、亜麻布の衣を着ていた。彼は一人で神殿に入ることや習慣としていた。そしてしばしば人々の赦しのためにひざまずいて執り成したので彼の膝はラクダのように硬くなっていた。」とのことである。

禁欲運動の発展は「キリスト教そのものの発展に劣らず、急速かつ普遍的なものだった」と言われていることは正しい。隠者の実際の数について、この運動の最初の歴史家たちが極めて不誠実であることを知る人は、自信を持って話すことをためらうだろう。四世紀初頭に共住修道制の生活様式を確立した聖パコミオス（*大、AD292―348、エジプト）は7,000人の修道士を自らの管轄下に置いた、聖ヒエロニムスの時代には復活祭に50,000人近い修道士が集まったことがあった、四世紀にニトリアの砂漠では一人の修道院長の下に5,000人の修道士がいた、オクシリニコス（*カイロから16km南のナイル支流の河畔）というエジプトの都市は禁欲生活だけに専念していて20,000人の修道女と10,000人の修道士がいた、聖セラピオンは10,000人の修道士を束ねていた、そして四世紀の終わりにはエジプトの大部分において修道士の人口は都市人口とほぼ同じになった、と言われている。エジプトは禁欲主義の親であり、その極度の発展と最も厳しい苦行の両方がこの地で達成されたのである。しかし、たちまち似たような運動が熱心に宣伝されないキリスト教国はほとんどなくなった。聖アタナシウスと聖ゼノ（*ヴェローナの、AD300―380）がそれをイタリヤに導入したと言われ、その後すぐに聖ヒエロニムスに大きな刺激を受けた。聖ヒラリオンはパレスチナで最初の修道士を育てた。やがて彼は何千人もの修道士を支配下に置くようになり、生涯の終わりにはキプロスに修道院を建てた。セバステイア（*現中部トルコ、シバス）の司教エウスタティウス（*4世紀）はアルメニア、パフラゴニア（*北トルコ）、ポントス（*同）に修道会を広めた。聖バシレイウスは黒海の荒涼とした海岸で働

いた。トゥールの聖マルティヌスはガリアに最初の修道院を設立し、彼の葬儀には2,000人の修道士が参列した。記録にない宣教師たちが、エチオピアの中心部、地中海に浮かぶ小さな島々、ウエールズやアイルランドの人里離れた溪谷に新しい施設を建てた。しかし、何千もの人々が世を捨てたことより素晴らしかったのは、その資質や性格が禁欲的理想に最も反すると思われる人々が彼らに抱いた尊敬の念だった。アウグスティヌスほど強いられた独身生活の危険性を知っていた者はいなかった。しかし聖アウグスティヌスは自分の教区に修道院制度を広めるために全精力を注いだ。生来鋭い政治家だった聖アンブロジウス、野心的な学者だった聖ヒエロニムスと聖バシレイオス、大都市の洗練された群衆を動かすことに卓越した才能を持っていた聖クリュストモスは、いずれもその力で独居生活を擁護し、後の三者は自ら実践したのである。聖アルセニウス（大、AD 350―445）はアルカディウス帝（*在位383―408）の宮廷で高い地位に就いていたが、途方もない苦行において誰にも凌駕されることがなかった。巡礼者たちは砂漠を歩き回り、聖人たちの奇跡と禁欲に関する記録を集め、それはキリスト教圏を感嘆の念で満たした。そして、このようにして作られた奇妙な伝記は荒々しくグロテスクなものであるが、これによって私たちはキリスト教世界の新しい理想になった隠者生活の一般的な特徴を非常に鮮明に理解することができるのである。

おそらく人類の道德の歴史の中で、この禁欲の流行よりも深く、より痛々しい関心を引く期間は

ないだろう。知識もなく、愛国心もなく、自然な愛情もなく、無益で残酷な自己拷問の長い日課に人生を費やし、錯乱した脳のおぞましい幻影に怯える、醜悪で下劣で痩せこけた狂人が、プラトンやキケロの著作、ソクラテスやカトーの生涯が知られている国々の理想になっていたのである。約二世紀にわたって、体がひどく痩せこけることは卓越性の最高の証明とみなされていた。三十年間わずかな大麦パンと泥水だけで生活している修道士、あるいは穴蔵に住み、毎日イチジク五個以上の食事を摂ったことがない修道士、またあるいは復活祭の日にだけ髪を切り、衣服は洗わず、チュニックはポロポロになるまで着替えず、目がかすみ、肌が「軽石のように」なるまで飢え、これらの禁欲が示していた彼の功德はホメロスも語り尽くせないほどだった修道士のことを、聖ヒエロニムスは感激に震えながら述べている。アレクサンドリアの聖マカリウス（*AD300—391）は六ヶ月間も沼地で眠って、毒バエに裸の体を晒したとのことである。また彼はいつも八十ポンドの鉄を持ち歩いてきた。弟子の聖エウセビウス（*ヴェルチェリー「北西イタリア」の、AD283—371、イタリアに修道会を設立）は百五十ポンドの鉄を持ち歩き、枯れた井戸の中で三年間暮らしていた。聖サビヌス（*ヘルモポリスの？、AD?—284）は、一ヶ月間水に浸けて腐らせた小麦しか食べなかった。聖ベサリオン（*エジプトの、AD4—5世紀）は、四十日間茨の藪の中で夜を過ごし、四十年間横になって眠らなかつた。この苦行は聖パコミオスも十五年間行っている。聖マルキアヌス（*キュロス—現シリアの、AD4世紀）のように、常に飢えに苦しむために一日一食に制限した聖人たちもいる。そのうちの一人について、彼の毎日の食事は六オンス（*

170g)のパンと数種類の香草であり、マットやベッドに横たわる姿を見せたことがなく、眠るために手足を楽にすることさえなかったが、時には疲労困憊のために食事の時に眠ってしまい、食べ物からこぼれることがあったと言われている。しかし一日おきにしか食事をしなかった聖人たちもいた。そして修道院の歴史家を信じるならば、大勢が一週間も一切の栄養を断っていたのである。アレクサンドリアの聖マカリウスは丸一週間横にならず、日曜日には数種類の生の香草以外、何も食べなかったと言われている。ヨハネ(*梯子の? AD 579-649)という名の別の有名な聖人については、丸三年間岩に寄りかかって祈り続け、その間座ったり横になったりしたことはなく、唯一の栄養は日曜日に運ばれる聖餐だったと主張されている。ある隠者は荒れ果てた野獣の巣に、他の者は枯れた井戸に、またある者は墓の中に安住の地を見出した。またある者たちはもじやもじやの体毛以外の何もものも一切身につけず、野獣のようにあちこちを這いずり回った。メソポタミアとシリアの一部には「草食者」と呼ばれる一派が存在した。彼らは屋根の下で暮らすことはなく、肉もパンも食わず、ずっと山腹で過ごし、牛のように草を食べていた。体の清潔は魂の不潔とみなされ、最も称賛された聖人たちは忌まわしい汚物の塊と化していた。聖アタナシウスは修道院の始祖である聖アントニウスは、極度に老いてからも自分の足を洗うことに罪悪感を抱かないことはなかったと熱っぽく語っている。そこまで頑固ではなかった聖ポエメン(*AD 340-450)は非常に高齢になって初めてこの習慣を始めた。そして常識の兆しとともに、驚く修道士たちに「体ではなく、情欲を殺せるようになった。」と抗弁した。しかし、隠者聖アブラハムは改宗後五

十年間生き、その日以来、顔も足も洗うことを固く拒んだ。彼は稀に見る美しい人だったと言われているが、伝記記者は「彼の顔は、彼の魂の純粹さを映し出していた」と、いささか奇妙なことを書いている。聖アモン（*AD4世紀、エジプトのデルタ西部のケリアに修道院を創設）は自分の裸を見たことがなかった。シルヴィアという有名な修道女は60歳だったが、体の病気はその習慣の結果だったにもかかわらず、宗教学上の原理のために、指以外の体のいかなる部分も洗うことを断固として拒んだ。聖エウフラシア（*AD380―410）は百三十人の修道女がいる女子修道院に入ったが、彼女らは足を洗ったことがなく、風呂のことを聞くと身震いするほどだった。ある隠者（*パレスチナの聖ゾシマス、AD460―560）は、汚れと長年の日焼けで黒くなり、白い髪を風になびかせて砂漠を滑るように進む裸の生き物を見たとき、悪魔の幻影に嘲笑されたと思っただ。それはかつての美女、エジプトの聖マリア（*AD344―421、淫蕩な過去を償うために隠者になった）だった。彼女はこうして四十七年間、罪を償ってきたのだった。修道士たちが時折見苦しくない服を着ていると、墮落として非難の的となった。修道院長のアレクサンドル（*?*）は過去を振り返って「私たちの父祖は顔を洗わなかったが、私たちは公衆浴場を頻繁に利用している」と嘆いた。砂漠の中のある修道院では、修道士たちが飲み水不足に大変苦しんでいたが、修道院長テオドシウス（*AD423―528）が祈ると水が渾濁と湧き出してきたという。しかし、やがてその豊富な水量に誘惑された一部の修道士はそれまでの禁欲から離れ、その水を使って浴場を建てるよう修道院長を説得した。浴場は完成した。一度、そしてたった一度だけ修道士たちが体

を洗うと、水流は止まってしまった。祈りも涙も断食も空しかった。丸一年が過ぎた。ついに修道院長は、神の立腹の原因になった浴場を破壊した。すると水は再び流れ出した。しかし、こうした胸が悪くなるような信念の行き過ぎの証拠の中でも、登塔者聖シメオン（*AD390—459）の生涯は最も注目に値するものだろう。この聖人が禁欲生活を始めたときの苦行について、これ以上恐ろしい、あるいはおぞましい光景を思い浮かべることが困難だろう。この聖人は縄が肉に食い込むように自分の体を縛り、その周囲は腐敗した。「彼の体からは傍らの人々にとって耐え難いほどのひどい悪臭が漂った。そして彼が動くたびに蛆虫が落ちてきて、ベッドを埋め尽くした。」時には修道院を出て、ダイモンが住んでいると言われていた涸れ井戸で眠った。彼は次々と三本の柱を立てた。最後の柱は高さ六十フィート（*約18m）だったが、外周は二キュビット（*古代ローマでは約88cm）にも満たなかった。この柱の上で彼は三十年間、あらゆる気候の変化に晒されながら、絶え間なく、しかも素早く足の高さまで体を折り曲げて、祈り続けたのである。この素早い動作の数を数えようとした人物がいたが、1, 244回を数えたところで疲れてやめてしまった。聖シメオンは丸一年間、片足で立っていた。もう片足はひどい潰瘍に覆われていたのである。そのとき伝記記者は彼のそばに留まって体から落ちた蛆虫を拾い、爛れに戻すように頼まれた。聖人は蛆虫に「神が与えられたものを食べよ。」と言ったとのことである。至る所からあらゆる階級の巡礼者たちが彼に詣るために押し寄せた。大勢の高位聖職者たちが彼の後を追って墓に向かった。不思議なことに、彼の柱の上で星が一つ、燦然と輝いたと言われている。人類の全体的な声は彼はキ

リスト教の聖人の最高の模範である、と宣言した。そして数人の隠者たちが彼の苦行を真似たり、それと張り合ったりした。

私が誤解していないとすれば、文献の中で、聖人の生涯ほどその重要性が十分に認識されていない部門はないだろう。それらは直接の歴史的価値を持っていなかったとしても、極めて高い種類の道徳的価値を持っているのである。それらはある時代にどの人物が何をしたのかを正確に伝えていないかもしれない。しかしそれらは、彼らが考えていたこと、感じていたこと、彼らの蓋然性の尺度、彼らの卓越性の理想をきわめて鮮明に示しているのである。公会議の布告、神学者の精緻な論説、信条、祈禱式文、教会法は、すべて宗教史の外皮に過ぎない。これらは世の中で公言され、議論されたことを明らかにするが、想像の中で実感され、心の中に秘められたことは明らかにしない。（*神々や自然の）擬人化の時代の束の間のイメージをデリケートな忠実さで反映していた、粗野な時代の美術の歴史は、この点において非常に貴重な存在である。しかし、当時の知的環境から自然発生的に生まれ、その中に当時の人々の最も大切な希望、願い、理想、想像がすべて含まれており、何世紀にもわたってキリスト教国で人気の文学になっていた、膨大なキリスト教神話はそれ以上に重要である。砂漠の聖人たちの場合―主に目撃者によって描かれた―絵は、その細部においていかにグロテスクであっても、その主な特徴において歴史的眞実であることに疑いの余地はないだろう。何世紀もの間、自己拷問が人間の卓越性を測る主な尺度と見なされていたこと、何万もの最

も熱心な人々が砂漠に逃げ込み、瘦せ衰えてほとんど獣のような状態にまで身を落としたこと、この忌まわしい迷信が時代の道徳律においてほぼ絶対的な優位性を獲得していたことは事実である。私が引用した禁欲主義の例は、何百ものうちのほんの一部に過ぎず、その詳細については本が何冊でも書けるだろうし、これまでも書かれてきた。聖ベネディクトゥス（*ヌルシア―出身地中部イタリアの町―の、AD480―548）の改革が行われるまで、この理想は全体として変わることはなかった。西洋の修道士たちは気候条件の違いのため、エジプトの隠者たちの禁欲に対抗することはできなかった。しかし、彼らの至高の卓越性の概念はほとんど同じであり、彼らは奇跡で何らかの優性を主張することによって、苦行における劣勢を補おうとしたのである。聖パコミオスの時代から、ほとんどの修道士たちは集団的修道生活を始めた。しかし、東方の修道院は従順の誓いという重要な例外を別にすれば、隠者の住処の集合体とほとんど変わらなかった。彼等は砂漠にいて、修道士たちは通常別々の庵室に住み、食事の時には沈黙を守り、互いに途方もない苦行で張り合っていた。確かに聖ヒエロニムスらは、狂気や自殺につながる禁欲を和らげ、教会権威に逆らうことを常とする放浪修道士の乱暴を抑制し、特に異端の宗派に顕著だった修道士の托鉢を抑制するために、わずかな努力を払っている。正統派の修道士は通常、ヤシの葉のマットを編むことに専念していた。しかし砂漠に住み、何の不自由もないために、すぐに無気力に陥った。そして最も称賛されたのは彼らの迷信だけに最も献身した先述の登塔者聖シメオンや隠者ヨハネだった。しかし、個々の性格の多様性は鮮明に表れていた。知識も情熱も想像力もない多くの隠者たちは労苦から逃れて

荒野の静寂の中で、長い時間を睡眠か機械的な祈りの日課で過ごした。そしてその不活発で物憂い生活は老齢の極みまで続き、最後は穏やかでほとんど動物のような死で幕を下ろした。また、砂漠のオアシスの澄んだ泉と群生する椰子の木のそばに庵を作った者たちもいた。彼らの労苦は花咲く庭を育てた。聖セラピオン（*トゥムイスの、AD?—358）に従った多くの修道士たちは農業に大きく貢献し、貧しい人々に船一隻分の小麦を送った。ある老隠者については、その心の明るさゆえに、彼の存在はあらゆる悲しみを払拭し、疲れた者や傷ついた者は彼の口から発せられるいくつかの言葉によって慰められたと伝えられている。しかし、より一般的には隠者の庵は永遠に続く嘆きの場だった。涙と嗚咽、架空のダイモーンとの必死の闘い、宗教的絶望の激発が彼の生活の基調だった。霊的な敵の恐怖や、迷信によって非常に恐ろしいものになっていた死の恐怖が、彼の存在のすべての時間を苦いものにしていった。知的な仕事による慰めが得られることは稀だった。聖ヒエロニムスは言った「修道士の務めは教えることではなく、泣くことである。」教養と自制心のある人々は神の恩恵の最高の証拠とされた幻覚の影響を最も受けにくかった。苦行への情熱が全体的なものになっていった時代には多くの学者たちが苦行者になった。しかし初期の修道士たちの大多数は自分自身がまったく無知であっただけではなく、学ぶことを積極的に嫌う人々だったようである。禁欲主義のの真的創始者である聖アントニウスは少年時代、他の少年たちとあまりに交流が多くなることを避けるため、文字を学ぶことを拒んだ。聖ヒエロニムスはキケロの天才に深い敬愛の念を感じていた頃、彼自身が語るところによると、夜中にキリストの法廷に連行され、キリスト教徒と

いうよりもキケロ教徒であることを非難され、天使たちに厳しく鞭打たれたとのことである。しかし、この聖人はその後、異教徒の著作に関する自分の意見を修正した。そして異教徒の論者を引用して彼の著作を汚したことを、キケロの書写に数人の修道士を使ったこと、ベツレヘムで子供たちにウエルギリウスを解説したことを嫉妬深い仲間たちに非難されて、ついには弁明しなければならなくなつた。ある修道士は語学に通じていることで特に有名だったが、三十年間の完全な沈黙を苦行とした、別の修道士は同僚の庵で数冊の本を発見して、未亡人や孤児の財産を奪つたと非難した、また別の修道士たちが持っていた本は新約聖書の写しだけだったが、彼らはそれを売って貧しい人々を救つたと伝えられている。

このように暮らしている、このような人々にとって、幻や奇跡は必然的にありふれたものになつた。幻覚のすべての要素がそこにあつた。無知で迷信深く、宗教的な事柄として無数のダイモーンが空中に満ちていることを固く信じ、自分の気質のあらゆる変動や周囲の自然のあらゆる異変を靈的作用によるものとし、孤独と長い禁欲で意識が混濁している隠者は、彼の脳内の幻影をたちまち明白な現実と取り違える。彼が住処とした、腐りかけた死体に囲まれたぞつとするような墓地の暗がりの中で、その孤独な庵の周りでむせび泣く砂漠の風、野獣の遠吠えが聞こえてくる苦行の長い夜の時間に、欲望や恐怖が目に見える姿で現れて彼につきまとい、そして彼の魂を巡って争う奇妙なドラマを演じるのである。極限まで拡張された想像力が断食でやせ細つた病的な身体に働きかけて生

み出した、目が回るような心理現象、相反する情熱の激発、喜びと苦悩の突然の交替を彼は明らかに超自然的なものと解釈したのである。時折、没頭の恍惚のまただ中で、彼の脳裏には昔の景色が浮かび上がったことだろう。生まれ故郷の陰の多い木立や、柔らかなで官能的な庭園である。そして燃える砂の上に一人跪いた時、彼の周りに踊る少女たちの美しい集団が見えたような気がするだろう。彼女たちの火照った、ゆるやかに起伏する肢体と多情な微笑みに彼の眼は釘付けになる。彼の誘惑は時々、音の記憶から湧き出してくる。過ぎし日の甘く淫らな歌が彼の耳に流れ込んで、彼の心は過去の情熱にときめく。そして場面は変わる。詩篇を口ずさんでいると、おそらくは詩篇の戦いの歌に刺激された彼の想像力が、満員の円形闘技場の様子を描き出す。何千人もの熱狂的な群衆と情熱、飛び交う叫びが彼の脳裏に浮かぶ。剣闘士たちの激しい歓喜が、彼の夢の中の喧騒を駆け抜ける。ついには最もシンプルな出来事さえ、悪魔の力を示唆することになる。旅に疲れて気絶したある老隠者が、砂漠の野生の蜂の蜜を飲めばどんなに元気になるだろうと思った。その時、岩の上に蜜蜂の巣が見えた。彼はこれを悪魔の誘惑と信じ、身震いして悪魔払いをしながら通り過ぎた。しかし最も恐ろしかったのは、情熱の熱い血が絶えず血管を流れ、肉体的には禁欲生活を送ることができない、南の太陽が生み出す幻覚を見やすい、若く激しい男たちが、熱意の波に流されて砂漠での生活を始めたことだった。彼らはその柔らかな瞳が愛に愛で応えてくれる、シリアやアフリカの花嫁の腕の中で眠りにつけていたのかもしれない。しかし、孤独な荒野では彼らの魂に安らぎが訪れることはない。「聖人たちの人生」は彼らの苦悩を驚くほど鮮明に描いている。断食でやせ

細ることに必死の力を揮い、苦しみのあまり胸を叩き、目から常に涙を流し、それに抵抗しようとする情熱そのものによってさらに鮮明になる、常に姿を変える地獄の美女につきまとわれていると想像する、彼らの闘いは発狂と自殺に終わることが少なくともなかった。聖・パコミウスと聖・パレモン（*パコミウスの師）が砂漠で一緒に話していたとき、若い修道士が狂気に取り乱した顔で彼らの前に駆け寄って、嗚咽に痙攣しながら自分の悲嘆の物語を吐露したと伝えられている。彼が言うには、ある女が自分の庵に入り、彼女の術で彼を誘惑し、そして半死半生で倒れている彼を残して、不思議なことに空中に消え去ったのである。そして修道士は荒々しい悲鳴を上げながら、聞いていた聖人たちの元を走り去った。彼らが想像するところの悪霊に突き動かされて、彼は砂漠を駆け抜け、次の村に到着すると、そこで公衆浴場の窯に飛び込み、炎の中で息絶えたとのことである。修道士たちの間には、最高齢になってからの情欲の発作の奇妙な話が伝えられていた。ある修道士は長い間、禁欲主義の模範とされてきたが、隠者によく見られる独りよがり陥っていた。ある晩、息も絶え絶えな女性が彼の庵の戸口に現れ、自分を匿ってほしい、野獣に貪り食われないよう助けて欲しいと懇願したという。不幸にも彼は彼女の願いに応えてしまった。深い敬意を示しながら、彼女は彼の関心を引いた。そしてついに彼女は彼に手を触れた。しかし、その接触は彼の全身を痙攣させた。長い間眠っていて忘れられていた情欲が、彼の血管の中を猛烈な勢いで駆けめぐった。激しい愛の発作の中で、彼は女性を胸に抱こうとしたが、彼女は彼の視界から消えた。そしてダイモーンの大合唱が哄笑の轟きとともに彼の転落を喜んだ。修道士の論者によって語られるこの物語

の続きには常に高い芸術的価値があると私は考えている。墮落した隠者は予想に反して、苦行と祈りで自分の純潔を取り戻そうとはしなかった。情欲と恥辱の瞬間に彼の中の新たな性質が明らかになり、彼を禁欲生活の希望と感覚から不可逆的に切り離したのである。夢に現れた美しい姿は、それが自分を破滅に誘うべきだったことを知ってからも、依然として彼の心を支配していた。彼は砂漠から逃げ出して再び世間に飛び込み、修道士との関わりを避け、その理想の美女の輝きを追いかけるためなら地獄の門にさえ入っていった。

修道士たちの間に流布されていたこのような話は異性との交渉に対する恐怖感を高めることに役立つ。しかし、そのような交渉を避けることは時として非常に困難だった。私たちが考察している運動の初期の歴史家の著作において、最も深い悲劇的な関心と呼ぶ物語と、女性の信奉者たちが最も厳格な隠者を深く尊敬し、その目に留まろうとする不断の粘り強さに関する極めて滑稽な記事が交互に現れるのは大変印象深いことである。この点において特別に幸運だった女性もいたようである。聖メラニアは財産の多くを修道士たちに捧げ、歴史家ルフィヌス（*AD344-411）を伴って、四世紀の終わり頃、シリアとエジプトの隠者たちの住処を長い間巡礼した。しかし、多くの隠者たちは女性の顔を決して見ないことをルールにしていた。そして、一般的に彼らがこの汚濁を免れた年数が彼らの卓越性の明らかでない証拠であるとされていた。聖バシレイオスが女性と話をしたのは極端な必要に迫られたときだけだった。リコポリス（*エジプト、カイロ近郊）の聖ヨ

ハネ（*AD305—394）は四十八年間、女性を見たことがなかった。ある護民官が妻に頼まれて隠者聖ヨハネの元へと巡礼し、彼女と面会してくれるよう懇願した。彼女の望みはそれが叶わなければ多分死んでしまうほど非常に強いのだと夫は言った。ついに隠者は哀願者に、その夜、妻が家で寝ているところに訪ねると告げた。護民官がこの奇妙なメッセージを妻に伝えると、その夜、彼女は夢の中で隠者に会ったとのことである。ローマの若い女が聖アルセニウスの顔を見て、祈ってもらうために、イタリアからアレクサンドリアまで巡礼し、無理やり彼の前に立ちはだかった。彼のすげない拒絶に気落ちして、彼女はその足元に跪き、泣きながらたまった一つの願いを聞いてくれるよう嘆願した―自分を覚えていて、祈って欲しい。「覚えておけだって？」腹を立てた聖人は叫んだ。「あなたを忘れられるよう私は生涯祈ることになるだろう。」哀れな少女はアレクサンドリアの大司教に慰めを求めた。大司教は、彼女は常に聖人を誘惑するダイモーンの性別に属しているが、隠者が彼女の顔を忘れようとはしても、彼女の魂のために祈ってくれることを自分は信じて疑わない、と保証して彼女を慰めた。こうした女性の熱意は時にはさらに微妙な形をとることもあり、女性が男性の格好をして、隠者として静かな生活を送ったケースがいくつか知られている。中でもアントイオキアで最も美しく、最も危険で魅惑的な女優だった聖ペラギア（*贖罪者、エルサレムのAD457没）は、いくぶん奇妙なことに改宗し、申し分のない信仰心を持つ年配の修道女と苦行生活を送ることを司教たちに定められた。しかし、もっと厳格な生活をしたという願望に駆られた彼女は同僚の元を逃げ出し、男装してオリーブ山の修道士たちの間に紛れ込んだと言われている。

以前の職業の手際の良さで一貫して偽の人格を演じ続けたので、彼女は大きな名声を得た。そして周りの聖人たちが彼女は何者だったかを知ったのはその死後だった（と言われている）。

以上のエピソードと観察によって、初期段階における修道生活の一般的な性質と、それが生み出した著作について十分明確な概念を提示できたのではないかと思う。次に、この生活様式がキリスト教道德の理想のタイプと現実の状態の両方にどのような影響を与えたかについて考察を進めよう。まずは、徳全体のバランスが変化したことは明らかである。もし公平な立場の人物が新約聖書の倫理に目を通し、聖なる記者たちが最も頻繁に言及している中心的で特徴的な徳は何かと問われたら、間違いなく、それは愛、慈愛、すなわち博愛だと答えるだろう。もし彼が四世紀と五世紀の著作を同様に調査するならば、宗教的タイプの中心的な徳は愛ではなく、貞節であると答えるだろう。そして理想的な状態と見なされたこの貞節は、汚れない結婚の純粹さではない。それは人間の本性のすべての官能的な面を完全に抑制することだった。徳の主要な形、聖人の生活の中心的概念は、結婚という妥協を完全に拒否した人々による、あらゆる情欲の衝動との絶え間ない闘いだった。もし私が間違っていないければ、この事実からいくつかの興味深く、重要な帰結が導き出されるだろう。

第一に、宗教は次第に非常に陰鬱な色を帯びてきた。聖人の仕事は自然な欲求を絶ち、まったく異常な状態に到達することだった。主に妬み、怒り、残酷さといった一時の例外的な悪徳に心を奪

われていたモラリストたちには到底たどり着けなかったほどの強烈さで、人間の本性の墮落、特に肉体の本質的な邪悪さが感じられるようになったのである。また、それが根絶を望んでいる欲求への極端な執着に加えて、いくらか贅沢で放縦な生活は、たとえその放縦自体がはつきりとした悪ではない場合でも、たとえ性格を和らげる傾向がある場合でも、自然に動物的情欲を強める効果があるため、禁欲的理想と真っ向から対立することを忘れてはならない。その結果、まず人間の本性の常習的で生来の墮落が非常に深く認識されるようになり、次に快樂と悪徳の觀念が非常に強く結びつけられるようになった。これらはすべて、純潔に最高の価値を置くことから必然的に生じたものである。ギリシャ哲学の特徴である穏やかで陽気な論調、それにおける葛藤や先天的な罪の感覺のほとんど完全な欠如は、おそらく私たちが考察している道德の部門において、ギリシャのモラリストたちが人間の性質を改善しようと真剣に努力しなかったこと、そしてギリシャ世論が不正な快樂へのほとんど無制限な耽溺に反発を示さず、容認したことに大きく起因しているのだろう。

しかし、この時期に禁欲生活の葛藤が名声を得たことは、人間の本性に対する人々の見解に暗い影を落とした一方で、カトリック教会が常に熱心に支持してきた人間の意志の自由に対する強い確信を培い、深めることに非常に大きく貢献したと私は考えている。なぜなら人間のすべての道德的自由が究極的にその事実に依存する、意志と欲望の区別をこれほど習慣的に、これほど鋭敏に意識した道德的葛藤の形はおそらく他にないからである。また同じように正確に説明することは難しい

が、それは別の結果をもたらしたと私は想像する。強い動物的性質と呼ばれるもの——つまり情熱が活発に、同時に健全に作用する性質——は、私たちがその中にいくつかの道德的資質を見出すことを最も自然に期待しているものである。ユーモア、率直さ、寛容さ、積極的な勇氣、陽気なエネルギー、立ち直りの早い気性などは通常、活発な動物的気質に付随するもので、本質的に弱く女々しく、苦行によって不自然に去勢され、本来の傾向から歪められ、常に厳しい管理下に置かれている性質には、ほとんど見られないものである。カトリックでは純潔に最高の価値が置かれたため、後者のタイプが理想型だった。前者の資質はカトリックの卓越性の概念において常に非常に低い地位にあり、プロテスタントと産業文明はそれらを向上させる不変の傾向を持っていた。

読者が——私がいささか自信を持って進めている——これらの推測をこじついで空想的なものと思われるかどうか、私には分からない。さまざまな道德的資質に先行する肉体的要因に関する私たちの知識は非常に乏しいので、これらの問題について自信を持って話すことは困難である。しかし私が説明した身体的気質は、単に動物的情熱の強さという一つの大きな事実において異なるだけでなく、善しにつけ悪しきにつけ、別個の道德的タイプを生み出すそれぞれの素質において、言い換えれば、いくつかの資質の調和において違いがあることに気づかない人はほとんどいないだろう。したがって、これら二つの気質（*動物的性質と禁欲主義）のいずれかを道德的理想と不可分に結びつける教義は、数多くの道德的資質の評価に影響を与える。しかし、禁欲主義が作り出した肉体的気質か

ら生じた道徳的な帰結をどう考えようとも、禁欲主義が命じた生活条件から生じた結果については、ほとんど議論の余地がないだろう。隠者の最大の目的は周囲の利害関係や愛情からの断絶であって、禁欲主義の隆盛の最初の結末は、家庭の徳に投げられた深い不信の眼差しだった。

この不信の高まり具合、聖人たちがこの世で最も緊密な絆で結ばれていた人々に対して示した極度の冷淡さと忘恩は、このテーマに関するオリジナルの文献を研究していない人たちにはほとんど知られていない。このことは過去の熱狂的帰依者を理想化することを喜ぶ現代の感傷的な人々によって、一般的に日陰に追いやられている。自分を産んでくれた母親の心を忘恩で打ち砕くこと、自分を慕ってくれた妻に永遠の別離が彼女の義務であると説得すること、自分の子供たちを自ら世話せず、物乞いをさせて世間の慈悲に委ねることが、自分に可能な、神を最も喜ばせる捧げ物である、と真の隠者は考えていたのである。彼の仕事は自分自身の魂を救うことだった。家族に対する最もシンプルな義務さえも彼の帰依の平穩を損なってしまうのである。エウアグリオス（*ポントス—小アジアの黒海岸—の、AD345—399）は砂漠で隠者をしていたとき、久しぶりに父と母から手紙を受け取った。彼は自分を愛してくれた人々の思い出によって平静な思考の流れが乱されることに耐えられず、手紙を読まずに火の中に投げ入れてしまった。ムティウス（**Abbot Paternicus、詳細不明）という男が八歳の一人息子を伴って、財産を捨て、修道院に入ることを希望した。修道士たちは彼を受け入れたが、次に彼の心の鍛錬へと進んだ。「彼はすでに

金持ちだったことを忘れた。次は父親であることを忘れなければならぬ。」彼の小さな子供は親と引き離され、汚れたぼろ服を着せられ、ありとあらゆる過酷で理不尽な目に遭わされ、殴られ、蹴られ、虐待された。父親は、かつて幸せだった彼の息子の顔つきが常に涙で汚れ、苦悩の嗚咽で歪み、痩せ衰えていくのを、来る日も来る日も見続けることを強いられた。しかし称賛する伝記記者は言う「日々このような光景を目にしても、キリストと従順の徳に対する愛が強かったため、父親の心は堅固であって動じることがなかった。」「彼は我が子の涙を気に留めなかった。彼はただ自分のへりくだりと徳の完成だけを切望していた。」ついに修道院長は彼に、子供を連れて行って川に投げ込むよう命じた。彼は呟いたり傷心を見せたりすることなく、それに従おうとした。そして修道士たちが介入して、川の崖っぷちで子供を助けたのは最後の瞬間のことだった。その後ムティウスは苦行者の中で高い地位に上り詰め、聖人の気質を偉大な完璧さで発揮したと正しく評価されている。テーベのある住民がシソエス修道院長（*AD?—429）のもとにやってきて、修道士になりたいと申し出た。修道院長は彼に身寄りはあるかと尋ねた。「息子が一人おります。」と彼は答えた。老人は答えた「息子を連れて行って川に投げ込みなさい。そうすれば修道士にしてあげよう。」父親は急いでその命令を実行に移そうとした。そしてその行為をほぼやり遂げようとしたところで、シソエスの送った使者が命令を取り消した。

時に同じ教訓が奇跡の形で与えられることもあった。ある男が三人の子供を捨てて修道士になっ

たことがあった。三年後、彼は彼らを修道院に連れてくることを決意したが、家に戻ってみると、彼の留守中に年長の二人が死んでしまっていた。彼はまだ幼い末子を腕に抱いて修道院長のもとにやってきた。修道院長は彼に言った「この子を愛しているか？」父親は「はい」と答え、修道院長は再び言った「あなたはこの子を心から愛しているか？」父親は再び同じ返答をした。「では、その子を取り上げ、向こうの炉の火に投げ入れよ。」と修道院長は言った。父親は命じられた通りにした。炎の中で子供は無傷だった。しかし、この方面で修道士としての性格が特に鮮明に表れたのは、女性親族の扱いだった。この場合、動機は単に家族の愛情を抑制するというだけでなかった―女性性の存在によって起こりうる危険からの防御でもあったのである。聖人の純潔の美しい花は、母親や姉妹の顔を見るとかき乱されてしまうかもしれない。ある時代の理想は、別の時代の戯画にするにはグロテスク過ぎることがある。モリエールが描いたタルチュフ（*1644年発表の戯曲の同名の主人公で悪漢）の気取った潔癖ぶった態度など、「聖人たちの人生」の中で重々しく語られている物語に比べれば、いかに見劣りのする弱々しいものであるかを見るのは興味深いことである。修道院長シソエスが非常に年老いて弱々しくヨボヨボになったとき、弟子たちは砂漠を出て人の住む土地に行くよう勧めた。シソエスは勧告に従おうとしたかに見えた。しかし彼は必要な条件として、新しい住まいでは決して女性の顔を見ろという危険と動揺に遭遇しないことを要求した。このような性質に適しているのは、もちろん砂漠だけだった。老人は安らかに死ぬことができた。ある修道士が母親を連れて旅をしており―それ自体とても珍しいことだが―橋のない小川にさしかかったと

き、彼は母親を背負って渡らなければならなくなった。母親が驚いたのは、彼は自分の手に丁寧な布を巻き始めたことだった。理由を尋ねると、不運にも彼女に触れてしまい、その結果自分の精神の平静が崩れてしまうことを心配しているのだと彼は説明した。カラマ（*アルジェリア北東部）の聖ヨハネ（**?）の妹は彼を心から愛しており、死ぬ前にもう一度顔を見たいと彼に懇願した。しかし彼が頑なにそれを拒んだので、彼女は砂漠を巡礼して彼の元に行くと言い出した。心配し、当惑した聖人は、ついに彼女に手紙を書き、もし彼女がその計画をあきらめると約束するならば、彼女の元を訪ねると約束した。聖人は変装して彼女のもとを訪れ、彼女の手から一杯の水を受け取ると、気づかれることなく、そのまま帰ってしまった。彼女は手紙を書いて約束を守らなかったことを責めた。自分は確かに彼女を訪ねたが「イエス・キリストの慈悲によって、気づかれなかった」そして彼女は二度と自分に会ってはならない、と彼は返事した。聖テオドロス（*タベンネセーパ コミウスの修道院があったナイル中流の町―の、AD314―358）の母は、司教たちからの手紙を持って息子に会いに来たが、彼は修道院長の聖パコミウスに面会を拒むよう懇願した。すべての努力が無駄になったことを知って、哀れな女性と一緒に旅をして同じ結果だった自分の娘とともに女子修道院に入った。聖マルクス（*エレミタ?、5世紀）の母は修道院長を説得し、出向いて彼女に会うよう聖人に命じさせた。聖マルクスは不従順の罪と母に会うことの危険の間でジレンマに陥り、巧妙な工夫でその場をしのいだ。彼は顔を隠し、目を閉じたまま母親のもとへ行った。母親はそれが息子と分からなかった。息子は母親を見なかった。聖ピオル（*3―4世紀）の姉妹も

同様に、修道院長に聖人に彼女との面会を命じさせた。聖ピオルは命令に従ったが、面談の間、断固として目を閉じていた。聖ポエメンと六人の兄弟たちは禁欲的な生活を送るため、母を捨てていた。しかし、母の愛が忘恩ゆえに冷めることは稀である。いまや衰えて腰の曲がった老女は自分が心から愛した子供たちにもう一度会うため、一人でエジプトの砂漠に出かけた。彼女は庵から教会に向かおうとする彼らを見かけた。しかし彼らはすぐに庵に逃げ込み、彼女がよろめく足取りで追いつく前に、息子の一人が慌てて彼女の目前で扉を閉めた。外に残された彼女は激しく泣いた。聖ポエメンは扉の前まで来て、しかし扉を開けずに言った「すでに老いさらばえているあなたが、なぜこのように叫び、嘆くのですか？」息子の声を聞き分けて彼女は言った「息子たちよ、あなたたちに会いたいからです。私があなたたちに会うことが、どんな害になるといえるのですか。私はあなたたちの母ではありませんか、あなたたちに乳を飲ませたものではありませんか。私は今、しわくちゃの老婆です。そして、あなたたちの声を聞くことが私を苦しめています。」しかし、聖人兄弟はドアを開けることを拒んだ。彼らは母に、死後にまた会えると言い、そのことを期待して母はようやく立ち去った、と伝記記者は書いている。登塔者聖シメオンはこの方面でも、第一級の人物である。彼は両親に熱烈に愛されていた。彼の讚美者と伝記記者を信じるならば、彼は父親の心を打ち砕くことから聖人としてのキャリアをスタートさせ、父親は彼の出奔を悲しんで死んでしまった。しかし母親はまだ生きていた。彼が居なくなつて二十七年後、彼が禁欲生活で有名になった頃、彼女は初めてその居場所を聞いて、急いで訪ねて行った。しかし、彼女の努力はすべて無駄だった。彼が

住む境域に女性が入ることは許されなかった。彼は顔を見せることさえ拒んだ。彼女の懇願と涙には辛辣で雄弁な非難が混じっていた。彼女はこう言ったと伝えられている「息子よ、なぜこんなことをしたのですか？ 私はあなたを胎内から産んだのに、あなたは私の魂を悲しみて締めつけたのです。乳房から乳を与えたのに、あなたは私の目を涙でいっぱいにしたのです。あなたに口づけをしたのに、あなたは私の心を失意で苦しめたのです。私があなたのためにしたこと、耐えたこと、すべてに、あなたは最も残酷な仕打ちで応えたのです。」ついに聖人は彼女に、もうすぐ会える、というメッセージを送った。三日三晩、彼女は泣きながら空しく懇願した。そして今や悲しみと老いと喪失感に疲れ切って、彼女は弱々しく地面に身を横たえ、あの無情の扉の前で息を引き取った。その時初めて、聖人は追隨者と一緒に出てきた。彼は自分が殺したも同然の母の亡骸に敬虔な涙を流し、その魂を天に委ねる祈りを捧げた。おそらく、それは想像に過ぎない、命が完全に消えていなかった、物語は伝記記者の創作に過ぎない。しかし力を失った彼女に―奇跡的なものに見えた―かすかな動きがあったと言われている。シメオンはもう一度彼女の魂を天に委ねた。そして弟子たちの称賛のざわめきの中で、母殺しの聖人は苦行に戻った。

おそらく現存するあらゆる文献の中で最も甚だしいものであろう、カトリック聖人伝の特徴であるどぎつい嘘ゆえに、前述の逸話の多くは実際に起こった出来事ではなく記録者の熱意が生み出した理想像に過ぎない、と思うのはもっともなことである。しかし、そのために禁欲的な時代が生み

出した道徳的観念の重要性が低くなるわけではない。キリスト教共同体の最も有能な人々は社会的な絆を捨て、家庭の愛情を断ち切ることを最高の義務とする教育を互いに競い合ったのである。確かに時折、かすかな制限が加えられることもあった。以降で触れるが―夫と妻が互いを捨てる自由特権について多くのことが書かれ、子供が親を見放したり、捨てたりする場合についても書かれている。当初は子供の頃、本人の同意がないまま両親に修道院に入れられた者は、成人になると世間に戻ることに許されていた。しかし西暦633年の第四回トレド教会会議によって、初めてこの自由特権が奪われた。ガングラ（*トルコ北部）教会会議（*AD340）では、異端のエウスタテイウス（*アンティオキアの？AD?―360）が、子供は宗教的な動機で親を見捨てることができると教えたとして非難された。聖バシレイオスは同じ趣旨の文章を書いた。しかし、この種の親の権威に対する反抗の事例は「聖人たちの人生」の中で絶えず称賛とともに語られ、一部の有力な教父によって称賛され、ユステイニアヌス法典によって事実上公認された。すなわち親は自分の子供が修道院に入ることを止める権利も、親の同意なしに修道院に入った場合に相続を拒否する権利も奪われたのである。聖クリュソストモスは、父親が軍隊に入らせようとしていた青年が、修道院に引き抜かれた事例を熱く語っている。聖アンブロジウスの雄弁はあまりに蠱惑的だったため、母親たちは娘をその魅力から守るために家に閉じ込めるのが常だったと言われている。愛情豊かな両親の立場は、この時代には極度に辛いものだった。―息子の改心に大きな役割を果たした―クリュソストモスの母親が、もし彼が砂漠の生活に飛び込むことを自分の義務だと思ふのなら、せめて自

分が死ぬまでそれを延期してほしいと懇願した哀れな言葉が今も残っている。聖アンブロジウスは一章を割いて、修道院に入る者は祝福に値するが、親の意に反してそうする者はさらなる称賛に値することを論証した。そして禁欲主義が与える祝福に比べれば、親の与えうる罰がいかに小さいかということにまで議論を進めた。ユステイニアヌス法典以前にも、聖職者たちは自分の子供が砂漠に逃げ込むのを防ごうとする人々に毒舌を吐いていた。聖クリュストモスは、彼らは間違いなく呪われる、と説いた。聖アンブロジウスは現世でも彼らが罰を受けないとは限らないことを示した。彼は語っている。ある少女が修道院に入ることを決意し、親族がそのことで彼女を諫めていたとき、その場にいた者の一人が、死んだ父親の思い出で彼女を動かそうとして、もし父親が生きていたら、彼女が未婚のままであることを許しただろうかと尋ねた。「たぶん」彼女は冷静に答えた「父はこのために死んだのです。私の邪魔をしないために。」彼女の言葉は答え以上のものだった。神の言葉だった。無思慮な質問者はほとんど即座に死んでしまった。そしてその明らかな神意に驚いた親族は反対を止めた。そして若き聖女にその計画を成し遂げるよう懇願するほどだった。聖ヒエロニムスは、ほんの十二歳のときに自らこの宗教的生活に入り、いかなる男性の顔も見ず、常に祈っているため膝がラクダの膝のようになっていて、アセラという少女について気も狂わんばかりに熱く語っている。パウラという有名な未亡人は夫が死ぬと、留まることを懇願する子供たちの言葉を「乾いた目」で聞き流し、エルサレムの修道士の共同体へと逃げ去って「物乞いとして死に、息子にはピタ一文残さない」ことを望み、全財産を慈善に散逸させ、子供たちには彼女の借金による窮迫だけ

を遺した。貧乏人や修道士に贈られたり遺贈されたりした金銭は、すべて寄付者や遺言者に靈的利益をもたらずが、親族に贈られた金銭からは靈的利益が生じないことが念入りに説かれ、敬虔な人物は自分の魂の利益にならない方法で財産を処分することを避けるようになった。時には親が子供たちに何も財産を残さず、すべてを貧しい人々に寄付するよう遺言することもあった。聖アウグスティヌスの生涯で最も名譽な出来事の一つは、カルタゴの司教アウレリウス（*AD?—429）と同様に、寄進者の親族を不当に苦しめる遺産や寄進の受け取りを拒んだことである。しかし通常、最も近く、最も愛している親族の愛情を踏みにじることは無罪とされたばかりではなく、最高の徳とされた。「母親の悲しみを軽蔑できるようになった若者は、自分に課されたどんな労苦にも容易に耐えるだろう。」という痛烈な言葉があった。聖ヒエロニムスは、ヘリオドルス（*アルティヌム—ベネチア近郊—の、AD?—410）に家族を捨てて隠者になるよう勧めたとき、彼を背かせようとした、あらゆる自然な愛情の形について優しく丁寧に説明した。「あなたの小さな甥があなたの首に腕を絡めても、あなたの母が髪を乱して衣を引き裂いても、あなたに乳を飲ませた乳房を指さしても、あなたの父が目の前で敷居の上に倒れ伏しても、あなたの父の体の上を通りなさい。涙を流すことなく十字架の旗の下に馳せ参じなさい。この問題においては、残酷さが唯一の敬虔さなのである……未亡人の妹が優しい腕をあなたに回すかもしれない……あなたの父親は、もう長くない身内を埋葬するまで、ほんの少しだけ待ってくれと懇願するかもしれない。泣いている母親は、あなたの幼い頃を思い出させ、萎んだ胸や皺が寄った顔を指差すかもしれない。周りの人々は一家があな

たの双肩にかかっていると言うかもしれない。このような鎖を、神の愛と地獄の恐怖は簡単に断ち切ることができるのである。聖書には親に従えと書いてあるが、キリストよりも親を愛する者は魂を失うのである。敵が私を殺そうと剣を振りかざしているのである。母の涙を思い浮かべるべきだろうか？」

このようなケースに現れた感情は、後世にも現れ続けている。例えば聖グレゴリウスは、ある少年が修道士になったものの両親への愛情を抑えることができず、ある夜こっそり彼らを訪ねに出かけたと述べている。しかし神は直ちにこの罪を途方もないものと審判した。修道院に戻った彼はその日のうちに死んだ。そして埋葬されたとき、大地はこの憎むべき犯罪者を受け入れることを拒んだ。彼の遺体は何度も墓から投げ出され、聖ベネディクトゥスがその胸に聖餐を捧げたときに初めて安らかに眠りにつくことができたのである。ある修道女は母親を愛しすぎたため、死後三日間煉獄の火に焼かれたことが明らかにになったのである。またある聖人はその情け深さゆえ、自分の親族以外には厳しくしたり冷たい態度を取ったりしたことがなかった、と記録されている。カマルドリーリ（*フィレンツェ近郊）派の創始者である聖ロムアルド（*AD950—1025）は、自分の父親を霊的な子供の中に数え、あるときは鞭打って罰を与えたという。アッシジの聖フランチェスコが最初に入会させた修道女はクララ・スキフィという美しいアッシジの娘だった。彼はしばらく前から密かに文通を続け、彼女の父親の家からの出奔を助言し計画したのである。禁欲主義

の最初の熱狂が去ると、父親が失った影響力を司祭が獲得した。懺悔室は彼らを家庭生活の最もデリケートな秘密の聞き役にした。権威の、共感の、時には愛情の優位性さえも、家庭の輪の外へと去ってしまった。そして、神経質で信心深い女性たちの最も秘められた思いと感情に対する絶対的な権威を確立することによって、司祭たちは世界帝国の基礎を築いたのである。

禁欲主義の最初の時期の、その家庭の愛情への侵入についての私の描写は、それ自体で物語になっていると思われるので、ごく少数のコメントをつけ加えるだけにしたい。真に英雄的な道を歩もうとする多くの人々にとって、彼らの行動や意見に対する周囲の人々の束縛から抜け出すことが必要であり、この断絶がしばしば彼らのキャリアにおいて最も高貴であると同時に最も苦しい出来事の一つであるということは、疑う余地のない真実である。しかし、このような偶発的で例外的な犠牲は利己的なものではない大きな目的のために耐えたものであり、家庭内の愛情を禁じること自体を一つの徳と見なし、その目的が主に、あるいは専ら利己的なものだった人々の行動と比較することはできない。親族から逃れた禁欲主義者が耐えた苦しみは、しばしば非常に大きなものだったことは間違いない。修道士の冷たい外見の下で、暖かく愛情豊かな心がときどき鼓動していたことを示す逸話は数多く残っている。また聖ヒエロニムスは書簡の中で、監禁生活の最も苦しい激痛は、彼が説いた迷信が多くの人々に自ら課させた、この取り返しのつかない別離に他ならない、と大いなる自己満足と祝福とともに述べている。しかし、ある行為の本質的な素晴らしさはさておき、その

行為者の高貴さを推し量ろうとするなら、私たちは彼が支払った代償のみならず、彼をその行為に駆り立てた動機についても検討しなければならない。この最後の検討事項ゆえに、私たちは苦行者のヒロイズムをギリシヤやローマの偉大な愛国者のヒロイズムと同じレベルに置くことはできないのである。人間は来世についても、現世と同様、真に利己的である可能性がある。来世の苦痛に対する圧倒的な恐怖や来世の幸福に対する強烈な確信が行動の主な動機である場合、信仰上の神学的な徳は存在しても、無私という高貴な性質は確実に欠如しているのである。死後の賞罰の光景が想像力をかきたてない現代では、宗教的動機は一般に無私の動機である。しかし常にそうだったわけではなく、禁欲主義の最初の時代には間違いなくそうではなかっただろう。来世の裁きの恐怖が修道士を砂漠に追いやり、禁欲生活の全体の道筋は、彼を人間の共感から隔離しながら、宗教的と言えたとしても、激しい利己主義を育んだのである。

家庭的な愛情の消滅が性格全般に及ぼした影響は、おそらく非常に悪質なものだっただろう。家族の輪は、明白な義務の遂行だけでなく、愛情の育成のために約束された領域である。そしてしばしば禁欲主義者の特徴になっていた極度の矜猛さは、彼が自分に課した規律の当然の帰結だった。他のあらゆる絆から切り離された修道士たちは自分の意見と教会に死に物狂いの執着心を持ち、自分の人生のすべてを一つのテーマに集中させ、その無知と偏見によって自分と対立するいかなる善の可能性をも考えず、自然な共感と愛情をすべて根絶することを修行の主目的とした人間の全ての

激しきで、それに異を唱える者を憎悪したのである。聖アタナシウスが瀕死の修道院長（*聖アントニウス）の口から出たものとした、すべての異端者に対する激しい憎悪の言葉は、この獐猛な伝記記者によるものと考えるのが妥当だろう。しかし教会の歴史、特に後代の異教徒の文献は、この感情が一般的なものだったことを十分に証明している。ローマの法律は完全ではないにせよ、宗教の自由特権を広く一般的に認めていたが、それが最も細かく嚴重な不寛容の法律に取って代わられたのは、主にキリスト教の司教たちのせいである。おそらく先に起こった立法上の変化よりもさらに重要な行政上の変化は、遍在し、不寛容で、攻撃的な聖職者の手先として働いた修道士たちのせいである。正式に禁止されている信仰を黙認し、無視し、軽蔑するというのは、懐疑的な異教徒によって、また帝国の緩い警察制度の下で非常に広く行われていたことであり、キリスト教勃興の歴史において非常に重要な事実であるが、それは完全に消滅した。修道士たちは徒党を組んで国中を放浪し、神殿を焼き、偶像を壊し、祭壇を倒し、しばしば必死の勇気を奮って彼らの神の社を守ろうとした農民と激しく争うのが常だった。この仕事にこれほど適した人々はいなかっただろう。彼らの激しい狂信、すべての偶像には文字どおりダイモーンが宿っているという確信、そしてこの偶像破壊の十字軍における死は殉教の一形態であるという信念は、彼ら自身に起こるすべての結果を無視させた。そして、その職業に払われている敬意のため、社会権力が彼らを逮捕することはほとんど不可能だった。傷心の母の涙に動じなくなり、肉体の劣化と不可分に結びついた理想を抱いていた人々は、古い交際や、間違っただけとしても敬虔な信仰のペーソス、セラピス神殿の壮大さ、

ペイディアスやプラクシテレス（*BC4世紀の彫刻家）の気高い彫像にもほとんど動じることはなかっただろう。不法に破壊されたユダヤ教のシナゴグや異端の教会の再建を社会的権力が命ずることもあったが、このような再建は大罪であるという教義は早くから主張されていた。ユリアヌスの時代にはそれに関わることを拒んだ一部のキリスト教徒が殉教した。そして聖アンブロジウスはミラノの説教壇から、登塔者シメオンは砂漠の柱から、この命令を出したテオドシウスは罪を犯したのである、として一丸になって糾弾した。

禁欲主義が大きく関わったもう一つの非常に重要な道德的な結果は、市民的な徳が没落し、時にはほとんど消滅してしまったことである。虚心坦懐に検証するなら、キリスト教文明は慈愛と貞潔の徳において異教徒の文明より優れていたのと同様に、市民的、そして知的な徳において異教徒の文明より劣っていたことがわかるだろう。キリスト教に先駆けて起こった知的変化の顕著な特徴の一つは、愛国心の緩やかな後退だったことはすでに見た。ギリシャやローマの初期には、第一の義務は人が国に対して負うものだった。これは道德のタイプの初歩的な、すなわち基本的な徳だった。これが倫理体系全体の気風になった。そしてさまざまな道德的資質は、主に輝かしい市民をつくる傾向を持つものほど評価された。ローマ帝国でこの精神が消滅したのは、これまで見てきたように、二つの原因―すなわち政治的なものと知的なもの―のせいである。政治的な原因は、様々な国が合併して一つの大きな専制君主国家になったことによって、確かに個人的、知的な自由には十分な領

域が与えられていたとは言え、民族的感情が消滅し、政治活動のほとんどすべての領域が閉ざされたことだった。知的な原因は、決して政治的原因と無関係ではないが、帝国初期の活発なストア派が退けられ、東洋哲学が台頭したこと、そしてそれが観想的な徳と手の込んだ浄化を卓越性の理想としていたことである。この愛国心の衰退は、新しい信仰の発展を大いに助けた。宗教に関するあらゆる事柄について、人の意見は判断力よりも共感に支配されるものである。そしてユダヤではキリスト教がそうであり、スコットランドではカトリックと英国国教会がそうであり、アイルランドでは現在も英国国教会がそうであるように、強い国民感情と対立する宗教が国民が受け入れられるのは稀な、あるいは決してないことである。

キリスト教と愛国心との関係は、最初から非常に不幸なものだった。キリスト教徒は明白な理由によってユダヤの国民精神から完全に切り離された一方、ローマの愛国主義の名残とも対立することになったのである。彼らにとってローマは反キリストの権力であって、その打倒は千年王国への必要な序曲だった。彼らは非合法的な組織を作り、帝国の精神に真っ向から対立し、その速やかな消滅を期待し、その過去を飾った英雄たちの運命を失望以下の態度で振り返り、愛国心の象徴であり表現でもあった国家的シヨールに参加することを断固として拒否していた。彼らは用心深くすべての反乱に反対していたが、自らの感情を隠すことはほとんどなく、彼らの教えの全体的な傾向は、人々を公的生活の職務と熱意の両方からできる限り引き離すことだった。自分たちにとって最も関

心のないものは自国の利益である、というのが彼らの告白であり自慢でもあった。彼らは武器を取ることの合法性を非常に疑わしいものとみなしていた。そして兵士の人格の独特の美しさを作り上げていた誇り高く野心的な性質はすべて、キリスト教的なものではない、と強調していた。彼らの故郷と利益は来世にあった。そして帝国がキリスト教化されたと後にも、信仰さえ妨げられないなら、どのような支配の下で生きるかは彼らにとって関心のない問題であることを率直に告白している。禁欲主義はキリスト教圏の情熱をすべて砂漠の生活に引きずり込み、あらゆる愛国心の極端で絶対的な放棄を理想に掲げ、この運動を最高潮に押し上げることでローマ帝国滅亡の一因となったことは間違いないだろう。

現実的な(*positive、疑いのない、積極的な)宗教と道徳的熱意との関係は、一般的な見方が最も間違っている主題だろう。宗教にはそれなしに決して活動することのなかった潜在的なエネルギーを喚起する、最も現実的な力があることは間違いない。しかしその力は全体として、創造的なものというよりも人を引きつけるものであろう。それらは道徳的な熱意が流れる水路、熱意が参加する旗印、熱意を鑄造する型、熱意が向かう理想を与えるものである。初期のローマ人が「大変良い人物」という言葉で最初に思い浮かべたのは、おそらく偉大で卓越した愛国心を持つ人物だっただろう。そして、そうした人物の祖国の大義に対する情熱と関心は彼の道徳的な評価と正比例していた。禁欲的なキリスト教は道徳的熱意を決定的に別の方向に向けさせ、結果として市民

的な徳は必然的に衰退していった。あらゆる公共心の消滅、政府のあらゆる部門に蔓延する卑劣な裏切りや腐敗、軍隊の臆病さ、燃え盛る街から脱出したばかりのトリーアの人々に劇場やサーカスを要求させ、まさに街がヴァンダル族に屈服したその日にローマ領カルタゴの人々を戦車レースの興奮に没頭させた卑しい軽薄さ、これらすべてが禁欲と布教への並外れた献身の発揮と同居したのである。帝国を守るべき才能と徳はアラリック（*AD370—410）の軍隊がローマを包囲しているまさにその時に、ペラギウス主義について激しい論争を繰り広げていたのである。またキリスト教の指導者たちにとっては、神学的形而上学のいかなる微細な点も、滅びゆく国の断末魔より深い関心を呼ぶものだった。他の時代ならローマ軍を無敵の勇気で鼓舞したであろう道徳的熱意が、何千人もの人々に国と家を捨てさせ、無駄で恐ろしい瘦身化の長い日課に物憂い時間を浪費させたのである。ゴート族がローマを占領したとき、先に見たように聖アウグスティヌスは神聖と敬虔の新しい精神が世界に下った証拠として、略奪の恐怖の間、侵されない聖域であり続けたキリスト教会を正当な誇りをもって指差したのである。異教徒側は—征服者への身代金を支払うために「勇猛」と「幸運」の女神の黄金像が溶かされたという—由々しき事実を指摘した。多くのキリスト教徒たちは、墮落した神々の都市の予言された破滅と見なしたものを、ほとんど満足感とも言える無関心とともに眺めていた。ヴァンダル族がアフリカに押し寄せたとき、正統派の迫害に激怒していたドナトゥス派は両手を広げて彼らを受け入れ、ともに致命的な一撃を加えることに貢献した。テルモピュレの不滅の峠（*アテネの北西100Kmの要衝）はゴート族に無抵抗で明け渡された。

ある異教徒の論者は修道士が裏切ったせいであると非難した。しかし、他の時代にはそれを防衛していたはずのヒロイズムを彼らが吸収し、あるいは方向転換してしまったと言った方がより適切だろう。後日、イスラム教徒たちがエジプトを征服したのは、迫害されていた単性論者（*キリストは人性を持たず、神性のみを持つという説）からの誘いによるところが大きかった。その後の宗教戦争でも何度も同じような現象が起こっている。宗教者の自国に対する裏切りは、もはやいかなる道徳的感覚の欠如をも意味しなくなった。それは最も深い宗教的な熱意と、殉教者の勇氣に合致するものになったのである。

教会が蛮族の侵略者に対して取った態度が、全体としてどの程度人類に有益だったかを正しく評価するのはいくらか難しい事である。ここまで見てきたように、帝国は長い間、道徳的にも政治的にも明らかに衰退していた。その衰退を遅らせることはできても、回避することなど到底できなかつた。そして新しい宗教は最も迷信的な形ではあつたが、帝国に取って代わるために多くのことを行つたが、道徳的な熱意を喚起するためにも多くのことを行つた。キリスト教聖職者が、その慈善と仲裁によつて、帝国の崩壊に伴う不幸を和らげるために非常に重要な貢献をしたことは否定できない。また同様に、彼らの政治的態度が彼らの善をなす力を大いに高めたことにも疑いの余地がない。対立する勢力の間に立ち、争点にはほとんど無関心で、戦闘の情熱を免れていたことで悪名高い彼らは、もしローマの愛国者と見なされていたならば、決して持つことはなかつたほどの力を征

服者と共に獲得し、被征服者の利益のために利用したのである。しかし彼らの態度は道德的尺度における愛国心の位置づけを完全に、そしてすでに証明されたように、永久に変えてしまった。後世になって、教会が対立する信条と戦う際に、この感情に訴えることが自分たちの利益になると考えたり、愛国者が教会人の目的が自分たちのそれと一致することに気づいたりすることが時々あった。このような場合、神学的感覚と愛国的感覚は融合して、お互いに強化し合った。スペイン人とムーア人、ポーランド人とロシア人、スコットランド清教徒とイギリス国教会、アイルランドカトリックとイギリスプロテスタントの戦いが、その結果である。しかし、愛国心そのものがキリスト教倫理の中に義務として位置づけられることはなく、強い神学的感覚は通常、その成長に真っ向から敵対するものだった。聖職者たちが政治問題に大きく関与してきたことは疑いないが、ほとんどの場合は、教会の計画に沿うようにそれを捻じ曲げることだけを目的にしていた。そしてこれほど一律に自分たちの階級の利益のために自国の利益を犠牲にした人々は他にいない。神学的な精神と愛国的な精神が相容れない理由は三つあると私は考える。第一は、強い宗教的感覚は地上のあらゆる心配事や情熱から心を逸らせてしまう傾向があることである。禁欲生活はその極端な現れだったが、それは常に様々な形で教会に現れていたものである。第二は、それぞれの神学的見解はそれ自体が政府、利益、政策を持ち、その境界は国境に沿うよりはそれを横断することが多い、目に見える、組織された教会によって体现される、という事実によるものである。こうした教会は、国やその支配者に当然与えられるはずの愛着と献身を自らに引き寄せてしまう。第三の理由は、宗教と愛国心

の理想を表す聖人と英雄の人格は異なる属性を持つていうことである。両者は間違ひなく共通の徳の要素を沢山持っているが、それぞれの際立った卓越性は、他方とは全く違った資質の割合や性質に由来するからである。

道徳史におけるこの非常に重要な革命を終える前に、私は二つのことを付け加えたいと思う。第一は、道徳の二大学派と活動的で政治的な生活の關係が完全に變化してしまつたという指摘である。古代のストア派は、徳と悪徳を他のすべてのものとは異なる属性を持つものと考え、公的生活に積極的に参加し、この参加を主要な義務の一つとした。一方、エピクロス派は徳を有用性に分解し、幸福を最高の動機とみなして、公的生活を避け、弟子たちにそれを無視するよう教えた。禁欲主義はストア派にならつて、徳と幸福は全体的に異なるものであると教えたが、同時に市民的な徳には極めて不都合なものだつた。一方、奴隸制の廃止以降（*近世）に起こつた大規模な産業活動は、その精神において常に本質的に功利主義的なものであり、政治的進歩の最も活発で影響力のある要素の一つだつた。この変化は、私の知る限り歴史家たちにはまったく気づかれていないが、道徳史の偉大なランドマークの一つになつていると私は信じている。

第二の觀察は、愛国的行動の価値についての私たちの評価に関するものである。歴史家がいかに民衆の私的、家庭的な徳にまで研究を広げることが望んでも、市民的（*公的）な徳は常に彼らの

著作において最も目立たざるを得ないものである。歴史は人間の大集団にのみ関わるものである。公的生活の大舞台で素晴らしい成果を上げる哲学や宗教の体系は十分、かつ容易に評価される。市民的な徳を愛さず、個人の自己啓発、家庭の道徳、あるいは私的な慈善といった、より曖昧な分野に有益な影響を与える体系に対して、読者や論者は非常に不当な評価を与えてしまいがちである。その自己犠牲、あるいは人間の幸福に及ぼす影響で評価されるなら、後者は非常に高い地位を与えられるはずである。しかしそれらは歴史にほとんど登場せず、したがって歴史の中での比較において正当な重みを持つことは稀である。キリスト教はこのことに特に苦しめられてきたと私は考えている。その道徳的作用は、常に社会よりも個人に対してはるかに強力だった。そしてその他の宗教に対する優位性が最も明白な領域は、まさに歴史が最も気づきにくい領域なのである。

キリスト教時代のローマ帝国とビザンツ帝国、また古い文明が野蛮人やイスラム教徒の侵略によって崩壊する前の道徳的状況を評価するためには、この後者の考察を常に心に留めておかなければならない。またキリスト教は腐敗し、衰退した文明の根深い悪徳にすでに深く汚染されていた国々で台頭したこと、また私たちがその著作からこの時代に評価を下すことを余儀なくされている批評者の多くは、まったくの禁欲主義者の潔癖さで人間の弱さを裁き、説教師のように大げさに強調してその裁定を表現した人々だったことを忘れてはならない。キリスト教徒が周囲の贅沢な社会の通常服装や習慣へと逆戻りしたこと、依然として信仰の原始的な厳格さを堅持していた人々をキリ

スト教徒が嘲笑したこと、あるいはかつて名ばかりの異教徒だった多くの人々が名ばかりのキリスト教徒になったという事実を、現代の批評家はおそらくあまり重視しないだろう。またモラリストの側にも新しい贅沢の形や、下品とみなされる些細な習慣を選んで、最も途方もない非難をし、その重要性を後の時代には理解することさえ困難なほどに誇張する傾向がしばしば見受けられる。この種の事例は異教徒とキリスト教徒の著作の両方に見られ、道徳の歴史の極めて興味深いページになっている。ユウエナリスは、まさに執政官就任中の年に一日中はともかく、少なくとも月と星明かりの下で―自ら二輪戦車を操って公道を走ることをためらわなかったある貴族の極悪な犯罪性を非難するため、罵詈雑言の語彙を使い果たした。セネカは様々な飲み物を雪と混ぜて冷やすという習慣を取り入れた人々の大それた、彼には不自然と思われた贅沢にほとんど呆れ返っていた。プリニウスは犯罪者の中で最も極悪非道なのは、金の指輪をはめるという贅沢な習慣を最初に考えた人物であると断言している。アプレイウスは歯磨き粉を称賛したことについて弁明することを余儀なくされたが、その際、自然はこの適切な形を正当化している、と論じた。ワニは定期的にナイル川を離れ、顎を開いて川岸に横たわり、特定の鳥がくちばしでその歯を掃除することが知られている、と言ったのである。もし、さまざまな習慣の犯罪性を教父の非難の激しさで測るなら、当時の最も極悪非道な犯罪はカツラをつけたり、髪を染めたりする習慣だったと結論して良いだろう。アレクサンドリアのクレメンスは、ある種の教会儀式の効力がカツラによって影響されないだろうかという疑問を呈した。司祭がひざまずいた人物の頭に手を置いたとき、その手が偽りの髪の上に置かれ

ているとしたら、本当に祝福されているのは誰なのか、と。テルトゥリアヌスは、キリスト教徒が地獄に落ちた人々の髪を頭に載せているかもしれないという考えに戦慄した。また彼は何人も自分の背丈を伸ばすことができない（*マタイによる福音書6・27）というと言葉に対する明らかな反抗を、カツラの装着に見出したのである。また髪を染める習慣には、人は髪を白くすることも黒くすることもできない（*同5・36）という言葉への反駁を見出した。数世紀が過ぎ去った。ローマ帝国は崩壊に向かい、悪徳と悲しみの洪水が世界を覆ったが、それでも教父たちの糾弾は止むことがなかった。聖アンブロジウス、聖ヒエロニムス、ナジアンゾス（*カツパドキアの町）の聖グレゴリオス（*AD325―389）は、テルトゥリアヌスとアレクサンドリアのクレメンスが始めたカツラに対する戦いを妥協のない激しさで継続した。

このような些細な問題に対する教父たちの熱情は、一見、重大な腐敗が稀な社会の存在を示唆しているように見えるかもしれないが、それは全く真実ではない。アンミアヌス・マルセリヌス（*AD330―391）によるローマ社会、サルウィアヌスによるマルセイユ社会、クリュストモスによる小アジアとコンスタンチノール社会の描写、歴史全体の流れ、当時の論者たちの無数の付帯的な観察はあらゆる適切な斟酌をしたとしても腐敗の、とりわけ滅多に凌駕されたことのないほどの墮落の状態を示している。腐敗は最も神聖に見えた階級や制度にまで及んでいた。キリスト教徒の結束の最も感動的な象徴の一つだったアガペスなわち愛餐は、酩酊と騒動の場と化していた。

教父たちによって非難され、四世紀のラオデキア公会議、そしてカルタゴ教会会議で咎められ、七世紀末のトゥルッロ（*コンスタンチノープル宮廷のドーム）教会会議でついに禁止されるまで、それはスキヤンダルと犯罪として生き残っていたのである。殉教者の記念式は、やがてスキヤンダラスな放蕩へと墮していった。縁日が開かれ、著しい貞節違反が頻発したのである。そして毎年行われる祭りは不道徳を生んだために禁止された。結婚に関する聖職者たちのあいまいな立場は、すでに重大な混乱を引き起こしていた。聖キプリアヌスの時代、デキウスの迫害が始まる前、聖職者たちは独身を公言しながら、さまざまな口実で愛人を家に置いておくことがよくあった。そしてコンスタンティヌスの治世の後、この件に関する苦情は声高で全体的なものになった。修道女と修道士はしばしば同居していた。そして非常に良く知られたずうずうしい偽善によって、自分たちは貞節を守ったまま同じベッドで眠るほどに、生来の情欲を克服したのであると公言した。裕福な未亡人たちは聖職者のおべっか使いの群れに取り囲まれていた。彼らは優しい愛称で彼女らに話しかけ、彼女らのあらゆるささいな欠点を研究し、助言し、敬虔さを装って、彼女らの贈り物や遺贈を待ち伏せしていたのである。こうした悪事が横行したため、ウァレンティニアヌスの時代にはキリスト教の司祭や修道士が社会の他のすべての階級から遺産を受け取ることを禁じる法律が作られた。そして聖ヒエロニムスはこの禁止令が必要なものだったことを悲しげに認めている。非常に大勢の人々が街の公職を避けて教会に入り、砂漠は実直な労働から逃れることだけを目的とした男たちで混雑し、兵士たちでさえも軍旗を捨てて修道院に向かった。貴族の女性たちは節制の生活を望むふ

りをして夫を捨て、身分の低い恋人たちと暮らした。やがて巡礼者で賑わうようになったパレスチナはニュッサの聖グレゴリウスの時代には放蕩の温床と化していた。巡礼の悪評は長く続いた。八世紀には聖ボンファティウス（*AD645—754、現在のイングランド生まれ、ドイツ、オランダに宣教）がカンタベリー大司教に宛てた、同胞女性の巡礼を制限するか規制するよう司教たちに懇願する手紙が残されている。ローマに向かう途中の中央ヨーロッパには、巡礼者として来たイギリス人女性が公然と売春で生計を立てていない町はほとんどなかったからである。高位聖職者の贅沢と野心、下級聖職者の遊興への情熱は、苦々しく認知されていた。聖ヒエロニムスは、多くの司教たちの宴会は属州長官の宴会に勝るとも劣らない豪華さだったと述べている。そして彼らが役職を得るための陰謀や、彼らの支持者の激しい党派性は教会史のあらゆるページに見ることができ

る。平信徒の領域では、おそらく最大の特徴は極度の幼稚さだった。道徳的な熱意は異教のほとんどの時代よりも大きかったが、砂漠に吸収されてしまったため、社会にはほとんど影響を与えなかった。長きに渡って戦車競技の派閥間の争いが、すべての政治的、知的、さらには宗教的な違いさえも凌駕し、街を幾度となく流血で満たし、国家における大きな変革を一度ならず決定づけたという単純な事実は、この退廃の程度を示すに十分だろう。愛国心と勇氣はほとんど消滅し、ベリサリウス（*AD505—565、東ローマ帝国の将軍）やナルセス（*AD478—573、同、宦官）

の台頭にもかかわらず、公人のレベルは極度に低下していた。宮廷の贅沢さ、廷臣の卑屈さ、服装や装飾の華麗さは途方もないものだった。世間は極端な禁欲主義と甚だしい悪徳が交互に入れ替わる危険な状態に慣れてしまった。そして、ときにアンテイオキアのような最も悪徳で贅沢な都市が最も多くの隠者を生み出すこともあった。人間の幸福を同様には損なわなかったにしても、高貴さを著しく害するような悪徳と迷信の組み合わせが存在したのである。世論が非常に低調だったため、多くの悪徳はほとんど非難や処罰を受けなかった。それと同時に迷信的な儀式の免罪効果が疑いなく信じられていたため、想像力は鎮められ、良心の畏れは和らげられていた。偽りや裏切りはカエサルの時代より多かったが、残酷さや暴力、無恥はずっと少なくなっていた。また公共心、自立心、知的自由も少なくなっていた。

しかし、いくつかの点においてキリスト教はすでに大きな改善をもたらしていた。剣闘士競技は西方から消え去り、コンスタンチノープルには導入されなかった。ヴィーナス神殿の名で発展してきた数知れない売春学校は廃止された。宗教はどんなに変形し劣化していても、少なくとももはや墮落の種にはならず、キリスト教の影響の下で悪徳の傲岸不遜は大いに減退していた。ポンペイの壁の絵や、多くの門の看板にその例が残っているような、表現の粗野で奔放な猥雑さ、裸の少女たちに給仕をさせる金持ちの貴族たちの宴会、よく知られている異教徒皇帝たちが耽っていた不自然な欲望のぞつとするような行き過ぎは、もはや許容されなくなった。官能にふけるのはごく一般的

なことだったが、目に余るほどのものではなく、不自然で奇抜な形は珍しくなっていた。数ある迷信や狂信の中で依然として純粋な道德を教え、最も強い動機とともにそれを施行する偉大な教会の存在は、至る所で―支配的で、強大で、圧倒的なものと―感じられていた。聖職者たちは国家の中の一大組織だった。徳の主張は強力に体系化された。それは最良の人々を引き寄せ、揺らぎはあるが愛すべき人々の進路を決め、悪人にいくらかの制限を加えた。悪人は宗教の道德的な美しさには無頓着だったかもしれない。それでも宗教による脅迫の記憶に憑りつかれていた。もし彼が健康で豊かなときに宗教の影響から自分を解放できたとしても、病氣や危険のとき、あるいは大きな罪を犯す前夜になると、その力が戻ってくるのである。もし彼がその恐怖から身を守ったとしても、少なくとも彼はそれが作り出した世論にあらゆる局面で妨害され、支配されることになるのである。異教の衰退を最も顕著に証明していた、異教徒の王座を占めた犯罪の怪物たちの、あらゆる自制、あらゆる良識、あらゆる恐怖と後悔の完全な欠如は、もはや許されなかった。最良の異教徒の徳は、やや異なるタイプではあったが最良のキリスト教徒のものと同程度に高いものだった。しかし最悪の異教徒の悪徳は、最悪のキリスト教徒のそれよりもはるかに悪いものだったことは確かである。説教壇は強力な魅力の中心になった。そして様々な慈善事業が活発に展開された。

禁欲主義の最初の噴出がもたらした道德的影響は、ここまで追跡した限りでは、ほとんど純粋な悪のように見える。それが生み出した完璧さの理想が本質的に歪んでいたことに加えて、社会のバ

ン種である道徳的な熱意を活動的な生活からシンプルに離脱させたのは極めて有害なことだった。そして何世紀の間、教会がヨーロッパの道徳的状况をこれ以上ほとんど改善できなかった理由の大部分がここにあることに疑いの余地はない。禁欲主義の最初の時期には、彼ら自身が気づいていなかったと思われる、いくつかの顕著に優れた点があった。しかしそれはこれらの害を相殺するには不十分なものであり、私たちの非難は正当化されると言っていいたいだろう。

真に偉大な道徳の卓越性の第一条件は、真の自己犠牲と自己放棄の精神である。贅沢な、あるいは功利的な文明にふさわしい妥協、節度、相互的な自制、優しさ、礼儀、洗練の習慣は、多くの二次的な徳の発達に非常に有利である。しかし、人間の本性には、より高く、より英雄的な卓越性に到達する力があり、それはその發揮のために非常に異なる領域を要求し、人間をはるかに高貴な目標に親しませ、人類をはるかに強く引きつけるものである。隠者の理想が不完全で歪んでいようとも、また精神的な利己主義の混在ゆえに深く変質していようとも、それでも正しいと信じるものに従って、人が大切にするすべてのものを自ら放棄し、あらゆる享樂との妥協をあつさり捨ててしまひ、極度の自己否定を人生の原理とした何千もの人々の模範は世界から完全に失われることはなかった。聖職の位階を求める情熱が帝国のスキヤンダルになった時代に、彼らは一貫して位階を避け、古風でありながらエネルギーな言葉で「修道士が特に避けるべき二種類の人々がいる―司教と女性である。」と説いたのである。彼らの生活の奇抜さ、異様な姿、恐ろしい苦行は教養のない人々

の称賛を集めた。こうして沸き起こった迷信的な敬愛は、次第に修道士の性格のより高い要素をなす慈善と自己否定へと移っていったのである。大勢の蛮族が登塔者聖シメオンの姿を見てキリスト教に改宗した。この隠者もまた、すぐに民衆の想像力によって理想化された。彼の人生と見た目のぞっとするような特徴は忘れ去られた。彼は長い白髭をたくわえ、椰子の木の下で筵を織っている老人で、ダイモーンはむなししい策略で彼の気を引こうとし、野獣は彼になつき、その一言であらゆる病気や悲しみは消え去ったと考えられていた。この理想に魅了されたキリスト教圏の想像力はそれを、大抵は非常に幼稚なものであり、中にはここまで見てきたように幼稚以下のひどいものもあったが、人間の本質の美しい手触りに満ち、しばしば見事な道徳的教訓を伝えている無数の伝説の中心に置いた。幼児の想像力の行方を最初に決定する童話が人類の歴史の中で担っている役割は小さなものではない。異教徒の古代は、プシユケの神話―ギリシヤの母親がわが子を寝つかせるために語った情熱的な愛の物語―の中に、超越的な美の一つの標本を私たちに遺したのである。砂漠の聖人の生涯には種類は違っても、その輝きに勝るとも劣らない想像力がよく表れている。聖アントニウスは自分が砂漠で第一の人物と思っていたが、ある晩、自分よりはるかに神聖な隠者がいるという啓示を受けたと言われている。朝になって、彼はその知られざる聖人を訪ねて砂漠を横断し始めた。彼はまずケンタウロスに会い、次いで自分はファウヌス（*ギリシヤ神話のサテュロス）であるという角と山羊の足を持った小男に会って道を教えてもらい、ついに目的地に着いた。彼が足を止めたその庵の隠者聖パウロは百十三歳で、非常に長い間絶対的な孤独の中で生きてきたため、

最初は訪問者を受け入れることを拒否した。しかし、ついにそれを承諾して彼を抱擁し、非常に無理もない好奇心で、彼が立ち去った世界について詳しく質問し始めた。「町には新しい建物がたくさんあったか、どんな帝国が世界を支配していたか、偶像崇拜者は残っていないか?」その時、一羽のカラスがパンを一斤持ってやってきて、話を中断させた。すると聖パウロは、この六十年間一日半斤だったことに気づき、これはアントニウスを受け入れたことが正しかった証拠だと言った。隠者たちは感謝して、小川のほとりに腰を下ろした。しかし、ここで新たな困難が生じた。どちらもパンに先に手をつけようとはしなかった。聖パウロは、客である聖アントニウスがこのパンの優先権をもっていることを主張した。しかし聖アントニウスはまだ九十歳で、聖パウロの年齢がもっと高いことにこだわった。この老人たちはとても生真面目に礼儀を守ったので、午後の間ずっとこの重大な問題について議論していた。しかし夕方が近づいたとき、ついに良い考えが浮かんだ。それぞれがパンの片方を持ち一緒に引き裂いたのである。その後の話を要約すると、聖パウロは間もなく亡くなり、もう一人も老人で体力がなかったため彼を埋葬できなかった。そのとき二頭のライオンが砂漠からやってきて、前足で墓を掘り、死体をそこに納め、大きな嘆きの声を上げ、聖アントニウスの前に従順にひざまずいて祝福を乞うた。この歴史の典故は聖ヒエロニムスにほかならないが、彼はこれを文字通りの真実として伝えており、その正確さを疑う者すべてに対する厳しい非難を物語のあちこちに散りばめている。

歴史家バラデイウス（*ガラテイアの、AD363—425）は、アレクサンドリアの聖マカリウスの口から、聖人が好奇心の衝動に駆られてダイモーンが所有するヤンネとヤンブレ（*エジプトでモーゼと対決した魔術師）の魔法の庭を訪れた巡礼の話聞いた、と断言している。マカリウスは九日間砂漠を横断した。その際、星を頼りに進路を決め、時折、葦を地面に刺して帰る目印にしていた。しかし、この予防措置は無駄だった。悪魔たちは夜のうちに葦を引き抜いて眠っている聖人の枕元に置いた。彼が庭に近づくと様々な姿をした七十匹のダイモーンが出てきて、彼らの住処を騒がせたことを非難した。聖マカリウスは、ただ庭を一周してそのすばらしさを確かめたら、庭を壊したりしないで立ち去る、と約束した。彼はその約束を守り、二十日間旅して再び自分の庵に戻ってきた。しかし他の伝説はこれほど幻想的なものではない。また、その多くは時に非常に気まぐれな形ではあるが、後の騎士道を予見させるような礼儀正しさを示しているし、中には最も流布していた迷信に対する印象的な抗議を含んでいるものもある。聖マカリウスは病気のと看、一房のブドウを貰ったことがあった。しかし彼の慈愛はそれを別の隠者に与えるよう促した。その隠者はそれを貰うことを断った。そしてついに砂漠全体を一周してブドウは聖人のもとに戻ってきたのである。この聖人は普段は腐った水を飲んでた。別の隠者を訪れたときにワインを出されると、礼儀上の必要から必ず飲んだが、ワインを飲んだ日数分だけ水を断ってその緩和分を個人的に償った。あるとき、弟子の一人が偶像崇拜の司祭が大きな棒を持って砂漠を大急ぎで走って行くのに出会って、大声で「どこへ行くのだ、ダイモーンよ？」と叫んだ。司祭は当然ながら憤慨し、キリス

ト教徒を激しく打ちのめして先へ進んだが、聖マカリウスに出会って、とても丁寧に、とても優しく声をかけられた。そこで感動した異教徒は改宗した。彼の最初の慈善行為は自分が叩きのめしたキリスト教徒の治療だった。聖アウイトウス（*ヴィエンヌーリヨン近郊の、AD450―519）が聖マルシアヌス（*オーセール―フランス中央部の、AD?―470）を訪問したとき、聖マルシアヌスは彼の前にパンを置いたが、アウイトウスは日没後まで食べ物に手を出さないのが習慣だから、と食べようとしなかった。聖マルシアヌスは、自分は食事を延ばすことができないと公言して、一度だけこの習慣を破るよう客人に懇願した。そして断られたので「ああ、私は大変辛いです。あなたは賢者や聖人に会いに来られたのに、ただの大食漢にしか会えなかったとは。」と嘆いた。聖アウイトウスは嘆き悲しみ「そのような言葉を聞くくらいなら、むしろ肉を食べたほうが良いです。」と言って、望まれた通り食卓に座った。聖マルシアヌスは自分の習慣がその兄弟聖人と同じであったことを告白した。そして付け加えた「しかし、慈愛は断食より優れていることを私たちは知っています。慈愛は神の法によって命じられています。断食は自分の力と意志に委ねられているからです。」聖エピファニオスは聖ヒラリオン（*原文はヒラリウスと書いていますが、引用元はヒラリオンになっている）を庵に招き、彼の前に家禽の料理を置いた。ヒラリオンは言った「父よ、申し訳ありません。私は修道士になってから肉食を絶っているのです。」聖エピファニオスは言った「では、私は修道士になって以来、太陽が沈むまで怒っていたことがあります。」相手は答えた「あなたのルールは私のものより優れています。」ある金持ちの婦人が修道士へのもてなしの義務

を丁重に果たしていた時、そのせいで目を離していた子供が井戸に落ちてしまった。しかし、その子供は何事もなく水面に浮いていた。そして聖人様の腕が下から支えて下さっているのが見えた、と子供は母親に言った。結婚生活を深く軽蔑する習慣があった時代、エジプトの聖マカリウスは、近隣の都市に住む二人の既婚女性が自分よりも神聖であるという啓示を受けた。聖人はすぐに彼女たちを訪ね、その生活ぶりを尋ねたが、彼女たちは自分たちが神聖な存在であるという考えを全く否定した。「聖なる父よ、真実を率直にお話ししましょう。昨夜も夫と寝ることをためらわなかった私たちにどんな善行が期待できるのでしょうか。」しかし聖人がしつこく尋ねると、二人は自分たちの話をした。「私たちは血のつながりはありませんが、二人の兄弟と結婚しました。私たちは十五年間一緒に暮らしていますが、一度も淫らな言葉や怒りの言葉を発したことはありません。私たちは夫たちに、自分たちを去らせて聖なる女子修道女に入らせてくれるよう懇願したのですが、拒まれました。そこで私たちは世俗的な言葉で自分たちの唇を汚さないことを神様に誓ったのです。」聖マカリウスは叫んだ「神は、処女か既婚か、修道院にいるか世間にいるかなど問題にされたいというのを真に知りました。神はただ心根だけを見られ、その環境がどうであれ、神に仕えようとする者には聖霊を降されるのです。」

私が挙げた数多くの実例が、すでに読者の忍耐力にとっていくらかの負担になったのではないかと懸念している。しかし、歴史上の長い期間において、これらの聖人伝説がキリスト教世界の想像

力を導き、道徳的感情の反映である理想を作り出したという事実は、それらの本質的価値をはるかに超える重みをそれらに与えているのである。砂漠の聖人たちの話を終える前に、もう一つ触れておきたい種類の伝説がある。それは聖人と動物界との関わりを描いたものである。これらの伝説は動物に対するいたわりと哀れみの感覚を説くキリスト教圏において初めてのもので、そして最も印象的な努力の一つであるため、道徳史の中で特別に注目する価値があると私は思う。異教徒の古代でも、このような慈愛を倫理の一分野と認識させるために、かなりの努力が払われていた。その道筋は、すべて動物は非常に高度な道徳的、理性的資質を備えているとして、人間と動物の間の隔たりを縮小する傾向がある、自然史に対するシンブルな無知から生まれた、数多くの逸話によって準備されたのである。象は理性と慈悲心のみならず、敬虔な感覚も持っている信じられていた。彼らは太陽と月を崇拜し、モーリタニアの森では、新月ごとに特定の川に集まって宗教的な儀式を行う習慣があった。カバは多血症にかかると棘によって自ら血を流し、その後粘液で傷口をふさぐ習性によって瀉血の治療効果を人に教えた。ペリカンは子供を養うために自ら死に（*胸に穴をあけて血を与える）、ハチは君主の掟を破ったときに自殺した。セストス（*ダータネルス海峡のヨーロッパ側の町）には若い娘を愛した鷲がいて、娘の死後に絶望のあまり彼女を焼く炎に身を投げたため、この鷲の愛情を記念する神殿が建てられている。また忠実な犬が主人が死んだときに殉死したという逸話は数多く、天狼星はそのうちの一端であると言われていた。イルカは特に、多くの美しい伝説の題材となり、その若者への愛情、音楽への愛情、とりわけ小さな子供たちへの愛情は一般市民だ

けでなく、最も優れた博物学者たちの称賛を浴びていた。多くの哲学者たちは、動物にも人間のよ
うな理性的な魂があると考えていた。ピタゴラス派は人間の魂は死後、動物に転生すると考えてい
た。ストア派などによれば人間と動物の魂は相等しく、全宇宙に広がって世界に命を吹き込んでい
る神霊の一部だった。

また動物に対するある種の法的保護の痕跡は、早い時代にも見出すことができる。ごく自然に農
業の主役として、また文明の象徴として、牡牛はさまざまな国で特別な敬意を払われていた。エジ
プトで牛が神聖視されたことはよく知られている。旧約聖書の最も美しい特徴の一つである動物に
対する思いやりは、小麦を踏んで脱穀している牛に口輪をつけてはならない（*牛の盗み食いを容
認せよ）、牛とロバを一緒にくびきにつないではならない、という命令に表れている。初期のローマ
人の間にも同じような感覚が行き渡っていた。長い間、牡牛を殺したら実際に死刑になった。この
動物は特別な意味で人間の仕事仲間であると宣言されていたのである。同様の法律は初期のギリシ
ヤにも存在したと言われている。スズメが神殿の祭壇に避難所と家を見つけたことを描いた詩編の
美しい一節は、エルサレムと同様にギリシヤにも当てはまった。クセノクラテス（*BC396—
314）が、鷹に追われた鳥が自分の胸に逃げて来た時、優しく抱擁してから解放し、弟子たちに
「善き人は決して頼ってくる人を見捨ててはならない」と言った感情は、神々も持っているもので
あると信じられていた。そして神殿の庇の下に鳥が巣を作るのを邪魔することは不敬虔である、と

考えられるようになった。また鳥を残酷に虐待したために子供が死刑になった例も伝えられている。

国々が粗野で好戦的な状態から洗練された平和な状態へと進むにつれて、また認識力が弱く鈍い段階から敏感で鮮やかな段階へと進むにつれて、その行動がより穏やかで慈愛深いものになることは間違いない。しかし、これは歴史における他のすべての一般的傾向と同様に、多くの特殊な環境によって打ち消されたり、修正されたりすることがある。先ほど述べた牡牛に関する法律は明らかに進歩の非常に早い段階においてのもので、戦争好きな放浪の民の間に農業的習慣を根付かせようと立法者が努力していたときのものである。動物殺しが大きな役割を果たした競技は、共和制が消滅する少し前に導入されたに過ぎないが、慈悲深い感情の自然な発展を妨げたり、遅らせたりするのに非常に大きな役割を果たした。古代ギリシャではテッサリア（*北部）の闘牛のほかに、ウズラや雄鶏の闘いが好んで行われ、兵士に勇気の模範を示すものとして立法者たちに大いに奨励された。ローマ時代の競技の巨大さ、それを支えた環境、そしてすぐに沸き起こった圧倒的な関心については、前章で述べたとおりである。しかし剣闘士のショーがあつたにもかかわらず、帝政期には人間に対する慈愛の水準はかなり向上していたことを私たちは見てきた。また野獣の闘いへの熱狂にもかかわらず、ローマ文学やその後のローマに従属した国々の文学には、動物界の感覚に対する非常に高い感受性を示すデリケートなタッチがふんだんに盛り込まれていることは注目に値する。動物の生態に対するこのような優しい関心は、ウェルギリウスの詩の最も顕著な特徴の一つである。

ルクレティウスは滅多に悲哀の琴線に触れることはないが、早い時期には子牛を祭壇に捧げられた親牛の悲しみを非常に美しく描いている。ちなみにプルタルコスは、力のあるときに忠実に働いてくれた牡牛を、年老いてから売る気にはなれなかつたと述べている。オウイデイウスも同じような感情を、ほぼ同じように強調して述べている。ユウエナリスは、一羽のスズメの死のために目を涙でいっぱいにしたローマ女性のことを語っている。ティアナのアポロニウスは慈悲ゆえに、たとえ王に招かれても、狩りに参加することを拒んだ。エピクテトスの友人だったアリアノス（*AD86-160）は犬を使った狩猟に関する本の中で、アデイソン（*ジヨセフ、1672-1719、作家、政治家）の、その狩りをとでも楽しませてくれた捕らわれの野兎の命を奪うことを拒否する。狩師の美しい描写を先取りしている。

このような感覚は、わずかしは見られないとはいえ、円形劇場の巨大な殺戮と共存するとは考えづらい感情の傾向を示している、と私は思う。しかし、その進展は単なる情緒的なものに留まらなかつた―教えにも明確に、鮮明に表れていたのである。ピタゴラスとエンペドクレス（*BC494-434）は、倫理学のこの分野の創始者として引用されている。第一に、動物をいたわる道徳的な義務は魂の転生という教理的な主張に基づいていた。そして動物は人間の義務の範囲内にあるという教義が打ち立てられると、付随的な慈愛に関する動機が主張されるようになった。帝政末期のピタゴラス派の急速な発展は、こうした動機を人々に身近なものにした。肉食を絶つことをポル

ピュリオスは念入りに提唱し、セネカでさえ一時期実践していた。しかし、この運動で最も注目すべき人物は紛れもなくプルタルコスである。転生の教義を捨て、あるいは少なくとも疑わしい憶測として語るだけにして、彼は動物に対するいたわりの義務を、愛情という広々とした土台の上に置いた。そして少なくとも千七百年間のキリスト教の著作には、これに匹敵するものはないと私には思えるほど、彼はその義務を強調し、詳細に説いている。彼はそのような見世物が性格を硬化させる効果を力説して円形闘技場の競技を絶対的に非難し、食通の空想が生んだ凝った残酷さを詳細に列挙して限らないエネルギーで非難し、すべての人間は動物界に対して人間に対するものと同様の義務を負っている、と最も強い言葉で断言している。

さて、キリスト教会に目を移すなら、この分野では当初ほとんど進展がなかったことがわかる。確かにマニ教徒の動物食の絶対的な禁止の中には東洋的観念の混合が見て取れる。正統派でも全く別の根拠によって肉食を断つことがしばしば行われた。また一、二人の神父はピタゴラス派の慈愛豊かな勧告に賛辞を送っている。しかし一方で、カトリックでは転生の教義は強く否定されていた。人類は救済の計画によって他のすべての種からこれまで以上に隔離された。そして初期の神父によって教えられた義務の範囲と輪の中に動物に関するものは含まれていなかった。これは実際のところ新約聖書より旧約聖書に顕著に表れている一つの慈愛の形である。旧約聖書の、義務を厳しく定めていない部分にさえ表れている数多くの美しい感情の痕跡は、人間の利益を唯一の目的とし、創

造主と人間の関係を唯一の問題とする熱心な人間愛に道を譲った。そして動物に対する義務という観念は根柢のない感傷主義として、いくぶん軽蔑的に退けられてしまった。動物の感情に対する細やかで微妙な共感、実のところ、非常に活発に日常を生きている人々の間にはほとんど見られない。シェイクスピアがおそらく最も完璧な詩的表現として、病んだ憂鬱なジャック（*「お気に召すまま」の登場人物）の陰気な夢の中に、傷ついた雄鹿の苦しみの精巧で哀れな分析を置いたことには、意味や理由がなかったわけではない。

ただし、教会の倫理に動物の権利と呼ばれるものもなくとも、理性のない被造物に対する同情心は聖人伝の中の出来事によって、ある程度間接的に説かれていた。東洋の砂漠やヨーロッパの広大な森に住む隠者が動物界と密接な関係を持つようになったのはごく自然なことだった。そして隠者の生活を描くときに民衆の想像力が、この関係を多くの絵のような、時に感動的な伝説の中心に据えたのは、それ以上に自然なことだった。空を飛ぶ鳥は老人が呼びかけると降りてきて、ライオンやハイエナは彼の足元に従順にしゃがみ込んだと言われている。すべての人間的利益に閉ざされていた彼の心は、苦しむ動物を見ると自由に広げられた。そして彼自身の尊厳は孤独な生活の仲間や彼の奇跡の対象にも及んだ。聖テオン（*アフリカの？、AD3—4世紀）が外を歩くと野獣が付き従った。聖人は彼らに自分の井戸の水を与えて報いた。エジプトの隠者は砂漠に美しい庭を作り、いつも椰子の木の下に座ってその手からライオンに果物を食べさせていた。聖ポエメンが冬の夜に

震えていると、ライオンがそばにかがんで毛布代わりになった。ライオンたちは隠者の聖パウロとエジプトの聖マリアを埋葬した。聖ヒエロニムス、聖ゲラシムス（*ヨルダンの、AD5世紀）、沈黙の聖ヨハネ（*AD454―558）、聖シメオン、その他多くの伝説にライオンが登場する。ゾシマスという老弱な修道士が、自分の持ち物を積んだロバを連れてカエサレアに向かう途中、ライオンがロバを捕まえて貪り食ってしまった。しかし、聖人が命令するとライオンは自分で城門まで荷物を運んだ。聖ヘレヌス（*詳細不明）は、群れから野生のロバを呼び寄せ、荒野で自分の荷物を運ばせた。この聖人は聖パコミウスと同じく、聖スクティヌス（*AD6世紀）がアイルランド海峡を海の怪物に乗って渡ったように、ナイル川をワニの背中に乗って渡った。牡鹿たちは聖人たちの旅に同行し、荷物を背負い、畑を耕し、聖遺物を明らかにした。狩りに遭った牡鹿は、特に絵になる伝説のテーマになった。ブランチオンという名前の異教徒があるとき疲れ果てた牡鹿を追いかけていた。それが洞窟に逃げ込むと、猟犬たちはどんなに促されてもその中に入ろうとはしなかった。驚いた狩人が中に入ると、そこには年老いた隠者がいて、たちまち逃げてきた牡鹿を保護し、追っ手を改心させた。聖エウスタキウス（*AD1―2世紀、イタリア）と聖フーベルトウス（*AD656―727、北フランス）の伝説では、キリストは狩られた雄鹿の姿をしており、角の間に十字架を光り輝かせながら追っ手に人間の声で呼びかけ、キリスト教に改宗させたとされている。追跡の狂乱の中で、猟犬と牡鹿は立ち止まり、共に跪いて聖フィンガー（*AD5―6世紀、アイルランド生まれ、コーンウォールで殉教）の聖遺物を崇めたという。聖レグルス（*AD4世紀、

聖アンデレの遺物をスコットランドに移した)の祭りには、ラヴェンナの聖アポリナリオス(*AD1世紀)の墓にカラスが集まっていたように、聖人の墓に野生の牡鹿が集まっていた。聖エラスムス(*フォルミアローマとナポリの間の海岸都市)の、AD3世紀)は牛の特別な保護者であり、牛は彼の廟の前で自らひざまずいた。聖アントニウスは豚の保護者であり、通常彼の絵の中には豚が描かれた。聖ブリジット(*AD450?)、北アイルランド)は豚を飼っており、(*獣師に追われた)イノシシが森からやってきて彼女の保護下に入った。聖コルンバ(*AD521-597、アイルランド)の死を予見して嘆いた馬がいた。聖コルマン(*AD560-632、アイルランド)の三種の仲間は、雄鶏、ネズミ、ハエだった。雄鶏は祈祷の時間を告げ、ネズミはうとうとした聖人が目覚めるまで耳を噛み、そして研究の途中で彼が考えをまとめることができなかつたり、他の用事で呼び出されたりすると、ハエはたちまち彼が立ち去った場所に降り立ち、そこを守り続けたという。伝説には動物に備わった、どこか滑稽と言えなくもない道徳的な性質が語られている。ある隠者は狼と夕食を共にする習慣があった。ある晩、狼は主人が返ってくる前に庵に入り、パンを一斤盗んでいった。狼は自責の念に駆られて一週間後に再び庵を訪れ、頭を垂れ、その態度全体で深い悔恨の念を表した。隠者は「優しい手で下げた頭を撫で」、赦しの印として二倍の量を与えた。別の聖人の前に雌ライオンが嘆きながらひざまずき、聖人を盲目の子ライオンの元に連れて行った。聖人が祈ると子ライオンは目が見えるようになった。翌日、雌ライオンは感謝の印として野獣の皮を持って戻ってきた。アレクサンドリアの聖マカリウスにも似たような話があった。

ハイエナが盲目の子を連れてきてドアをノックした。聖人はその子の視力を回復させた。ハイエナはその後すぐに羊毛を持って来て恩返しをした。「ハイエナよ！」と聖人は言った。「この羊毛をどうやって手に入れたのだ？羊を盗んで食べたに違いない。」ハイエナは大変恥じて頭を下げたが、それでも贈り物をしようとした。しかし聖人はハイエナが今後一切盗みをしないと「誓う」まで受け取りを拒否した。ハイエナは誓いを受け入れるしに頭を下げた。そして聖マカリウスは後に聖メラニアに羊毛を渡した。他の伝説は聖人たちと非理性的な世界との間の共感についてシンプルに述べている。聖カトベール（*AD 634―687、スコットランド）が呼ぶと鳥が来た。そして彼が祈ると死んだ鳥が生き返った。聖エンガシウス（*AD 8―9世紀、アイルランド）が薪を割って手を切ったとき、鳥たちが集まってきて大きな鳴き声をあげて彼の不幸を嘆いた。聖キエラヌ（*AD 516―546、アイルランド）の足元に鷹に襲われて瀕死の重傷を負った小鳥が落ちてきた。彼はその引き裂かれた胸を見て涙を流した。そして祈りを捧げると、その鳥はたちまち治ってしまった。

この種の伝説は「聖人たちの人生」の中に何百も、何千も存在すると言っても過言ではない。まず、禁欲主義の初期段階であり、キリスト教神話の初期の源の一つでもあった砂漠の生活によって最初の例が示され、さまざまな徳と悪徳を動物の形で表現する象徴主義によって強化され、異教徒の儀式と迷信が回想されることによって、人間と動物のつながりは無限に広がる空想的な物語の基

調になったのである。私たちの目に、それらは途方もなく幼稚に映るかもしれない。しかし、それらが何世紀にもわたって人類に普遍的に受け入れられ、たちまち心の奥底の感情を決定づけ、映し出すほどに、あらゆる地域の伝統や教育に織り込まれていたことを思うならば、真面目であることを旨としているこの著作の中でこうした物語を紹介したことを謝罪する必要はないだろう。彼らに動物に対するある種の同情心を作り出そうとする傾向があったことは明らかだろう。そして、おそらくこれがこの方面でカトリック教会が行った最大限のことだった。聖人の生来の優しさが動物界への親切となって表れた典拠のある例は、実に数少ない。十三世紀の世に知られていない聖人―ベニスの聖ヤコブはイタリアの少年たちが糸につないで遊んでいた鳥をよく買って放した。「彼は主の小鳥を哀れんだ」そして「その優しい慈愛は、最もちっぽけな動物さえも、あらゆる残酷さから守った」とのことである。アツシジの聖フランチェスコは同じ精神のより顕著な実例である。「もし皇帝にお会いできるなら、神と私の愛ゆえに、私の姉妹であるヒバリを捕えたり籠に入れたりすることを禁じ、牛やロバを飼う者にクリスマスに特によく餌をやることを命じる勅令を出すよう直訴したい」と彼はよく言っていた。このテーマに関する伝説は彼の元に群れ集まって来た。グツピオ（*アツシジ近郊）の近くに住んでいた狼は、聖人に諭されて羊を食べないことを約束し、聖人の手に前足を置いてそれを確認し、その後、家々を回って街の住民たちから餌をもらうようになった。またある時は、魚がバドヴァ（*ベネチア近郊）の聖アントニオ（*AD 1195―1231）の説教を聞きに来たように、鳥の群れが彼の説教を聞きに来たこともあった。ハヤブサは祈りの時間

に彼を起こした。キリギリスはそのメロデーで彼に神を賛美する歌を歌うよう促した。騒がしいツバメたちは、彼の説教が始まると静かになった。

しかし全体として、カトリックは動物への慈愛をほとんど説いてこなかった。神学者たちの、常に自分たちの特別な教義を介してのみ他者を見るという宿命的な悪癖が、この方向におけるすべての前進を阻んできた。動物界は完全に救済計画の外側にあつて、義務の範囲外であると考えられていた。そして、私たちがその一員に対して何らかの義務を負っているという信念は、カトリックの神学者たちによって決して教えられたことはない―決してなく、また承認されたことさえないと私は思っている。動物へのいたわりを教えようとした人々が、常に動物をキリスト教に特有の何かと結びつけようとしてきたことは、民間伝承や、記録された個人の慈愛豊かな特性の中に興味深く観察される。伝説の中で牡鹿が聖人の仲間として称えられていることは目を引く。牡鹿は聖人の遺物を明らかにする特別な任務を持つものとして、また蛇の不倶戴天の敵として尊ばれていた。ロバの祝祭では、キリストがその背中に乗つてのエジプトへ逃げ（*ヘロデの幼児虐殺）、エルサレムに入城したという理由で、ロバが崇敬の念とともに教会に導かれ、粗末な賛美歌がその尊厳を謳いあげた。聖フランチェスコは子羊を主の象徴として、いつも特別にいたわっていた。ルターはウサギ狩りを見て悲しくなり、考え込んだ。彼にはそれが悪魔が魂を狩っているように見えたのである。あゝる鳥や動物を福音書の物語のある出来事と関連づける数多くの民間伝承が存在する。そしてその結

果それらの鳥や動物の生活は干渉を受けなくなつた。しかし、その影響力はそれ以上には広がらなかつた。この領域でモリストは二つの異なるテーマについて考えるだろう。一つは人間の性格、もう一つは動物の苦しみである。動物に苦痛を与える娯楽や習慣が示す、あるいは誘発する冷酷さや意識的な残酷さの量は、その苦痛の強さと全く比例しない。私たちのスポーツで撃ち落とされる傷ついた鳥や、臆病なウサギが長い逃避行の間の苦痛を私たちが正しく実感できるものであれば、おそらくスペインの闘牛や前世紀のイギリスの娯楽（*例えば鎖でつないだ牡牛に犬をけしかける見世物）がもたらした苦痛に劣らない、という結論に達するはずである。しかし、狩りの興奮は想像力を屈折させ、犠牲者は小柄で、その苦痛の感情は表に出にくい。従つてこれらのスポーツは、動物の苦痛が生き生きと実感され、またそれが楽しみの要素と受け止められている場合とは違つて、人格を害するような影響を及ぼさないのである。古代の野獣の戦いがその典型だったこの種の娯楽は、間違いなくキリスト教圏からほとんど姿を消した。キリスト教の教えの軟化作用がこうした娯楽の廃止に間接的に影響を与えた可能性はある。しかし率直に判断するなら、それは非常に小さいものだつたと言わざるを得ないだろう。神学的な影響が絶大だった時代や国々において、こういう娯楽についての議論はなかつた。贅沢で産業的な文明が風俗を洗練し、潔癖な趣味が未開な嗜好が熱中する快楽を嫌悪して尻込みするようになる、ようやくそれは消滅した。なぜなら変化を反映すると同時に加速させる演劇が、民衆の娯楽に新しい形を与えたからである。そしてこの革命の結果、古い習慣は社会の最下層に委ねられたからである。そしてそれはスキャンダラスな騒動の誘因

になった。プロテスタントの国々では、聖職者は全体としてこの運動を支持してきた。カトリックの国々では、それはヴォルテールやベッカリアの学派によって、よりはっきりと説かれてきた。しかし思慮深いモラリストは、動物が本来持っている獰猛な本能の発露から興奮を得る娯楽や、人目につかない屠殺場での死を闘いの熱狂の中での死に置き換える娯楽が、動物の悲惨さの総量を目に見えて増加させるかどうかを当然疑うだろう。そして与えられる苦痛より、見世物が観客の性格に与える悪影響の方に注意を払うだろう。しかし、残酷さの形式には別の見地から評価されるべきものもある。恐ろしい生体解剖は、しばしばあまりにみだりに、あまりに不必要に行われる。また時に美食のために行われる長時間の残酷な拷問（*フォアグラの強制給餌？）は人々の視線から遠く離れており、人々の性格にほとんど影響を与えない。しかし、慈愛深い人間は震えることなしにそれらを省みることができない。こうしたことを倫理の範囲に入れ、動物界に対する義務という概念を作り上げたのは、キリスト教国に関する限り、前世紀の、それも大部分はプロテスタント諸国の特別な功績だった。砂漠の聖者から伝説として世界に伝えられた慈愛深い精神を私たちがいくらか認めていようと、動物に対する慈愛深い精神の大規模な教育は、主として近年の世俗的な時代のものであったこと、この分野ではイスラム教徒とバラモン教徒がキリスト教徒をかなり凌駕していること、そしてカトリックが最も深く根を下ろしているスペインと南イタリアは現在でも、おそらくヨーロッパの他のどの国よりも、動物への残酷行為について最も奔放で無反省な国であることを忘れてはならない。

修道院の最初の形が世界に及ぼした影響は、それが有益だった限りにおいて、主にその伝説に魅了された想像力によるものだった。神学論争が盛んだった時代には、東洋の修道士は数人の有力な神学者を輩出した。しかし東の国では一般的に隠者生活が優位だった。そして極度に痩せ細ることが聖人の最大の功德だった。しかし西では修道院は全く別の形をとり、はるかに高い役目を果たした。当初、東洋の聖人たちは西洋の修道士たちの理想とされた。東洋の聖アタナシウスはイタリアの修道院の創設者だった。トゥールの聖マルティヌスは修道士たちの規律から労働を排除した。そして彼と彼らは東洋の聖人たちのように、神殿の偶像を破壊しながら諸国を渡り歩くことを習慣としていた。しかし、三つの大きな原因が西洋の修道士の精神を現実的な道へと導いた。第一に、民族性と気候条件はこれらの土地の住民に常に活動的な生活を強いた。それと同時に、いつも座っている東洋人たちのように禁欲生活に耐え、幻覚を見ることをできなくしたのである。第二に、六世紀にはその姿が幻想的な伝説の雲の向こうにおぼろげにしか見えない、偉大な制度の創設者が出た。聖ベネディクトゥスの修道会は、聖コロンバの修道会や他のいくつかの修道院と実質的に同じ原理に基づいていて、たちまちヨーロッパの大部分に枝を伸ばし、無益な苦行の野放図な行き過ぎを和らげ、労働を修道院制度の主要な部分として、この運動を普遍的な文明の目的に向かわせたのである。第三に、蛮族の侵入と西方帝国の崩壊は政府の全システムを崩壊させ、社会をほとんどその原始的構成成分にまで分解してしまっただが、当然のことながら、最も重要な社会的、政治的、知的機

能を修道院に与えたのである。

アラリックによるローマの占領は、異教徒の最も偉大な宗教的記念碑の破壊を伴ったが、実際の都市にキリスト教の最高権威を確立したことが観察されている。同じようなことが西方文明の没落にも言える。この文明においてキリスト教は真に合法的に王座に就いた。しかし異教の哲学と伝統、そして染みついた古来の習慣、それと同時に衰退した社会は、絶えず文明のエネルギーを麻痺させていたのである。もし蛮族の侵入がなかったならヨーロッパがどうなっていたかは、古来のローマ文明が生き残ってキリスト教化された下帝国（*ビザンチン帝国）の歴史からある程度推測することができるだろう。蛮族の征服は古い組織を破壊し、教会に未開拓の土地を提供し、長きに渡って教会を至高の存在とし、文明の唯一の中心としたのである。

この最も困難な時期に聖職者たちが發揮した技量と勇氣については、どんなに強調しても強調し過ぎではないだろう。私たちはすでに、征服者と被征服者の間を取り持った気高い勇氣と、植民地からの小麦の供給が絶たれ、最も美しい平原が蛮族に荒らされたとき、イタリアの比類なき苦しみを緩和しようとした不断の慈善活動を見てきた。さらに素晴らしかったのは、蛮族の急速な改宗である。これは最も重要な出来事の一つだが、残念ながら教会史の中で最も不明瞭なページの一枚でもある。部族や国民全体の変化の原因について、私たちは絶対的に何も知らないと言うのが真実だろう。ゴート族は帝国の滅亡前にウルフイラ（*AD311-383）によってすでに改宗してお

り、ドイツ人や北方諸民族の改宗はそのずっと後だった。しかし、蛮族の世界をキリスト教化するという偉大な仕事は、その世界が最高の地位に就いたのとほぼ同時に成し遂げられたのである。自国で自分たちの神職に絶対服従することに慣れていた粗野な部族民たちは異国で、母国のものよりはるかに文明的で堂々とした聖職者団、誘惑に適したゴージャスな儀式、想像力の喚起に適した審判の脅しに直面することになった。古い交際から切り離された彼らは文明の威厳に屈服し、ラテンの宗教が、ラテン語のように多くの不純物を含みながらも、新しい社会の上に君臨した。排他的救済の教義とダイモーンの教義は、見事な布教の力を有していた。前者が生み出した改宗への熱意は多神教徒が決して敵わないものだった。キリスト教の神を認めるところまで簡単に導かれた異教徒は、古い神々と決別する一步を踏み出さなければ、永遠の火に焼かれると脅かされたのである。後者は改宗者が以前の宗教を信じることを止めさせるという、大変困難な仕事を不要なものにした。改宗者はただその驚異を悪魔の仕業とすることによってその宗教を貶めるだけでよかったのである。司祭たちはその高貴な献身に加えて、最も優れた判断力を布教活動に持ち込んでいた。蛮族は通常、自らの君主の宗教に問答無用で従っていた。そしてキリスト教徒たちが全精力を傾けたのは王、それ以上に王妃の改宗だった。クロウヴィス（*AD 466-511、フランク王国初代国王）の妻クロチルダ、エセルバート（*AD 550-616、イギリス、ケント地方の王）の妻ベルタ、ロタール（*AD 795-855、シャルルマーニュの孫、フランク王国を分裂させた）の妻テオドリンダは夫とその国民を改宗させるための最高の手先だった。想像力をかきたてるための何事もお

ろそかにされなかった。クロチルダは、教会の帳に豪華な装飾を施すことで夫を魅了しようとしたと伝えられている。また別のケースでは、布教の最初の仕事は画家に託された。画家は恐怖に怯える異教徒を前に最後の審判と地獄の責め苦を描いたという。しかし特に、キリスト教には現世の成功が伴い、あらゆる疫病、飢饉、軍事的失敗は偶像崇拜、異端、冒瀆、悪徳の罰である、という信仰が心から支持され、熱心に説教されてこの運動を支援した。その理論は非常に幅が広く、あらゆる多彩な運命に対応しており、あらゆる批判力を全く持たず、それを受け入れる強い傾向を持つ野蛮人に完璧な技術で教えられて、非常に効果的であることが証明された。そして希望、恐怖、感謝、悔恨が多くの人々を教会に引き入れた。異教徒の祭りや神々をキリスト教の儀式や聖人に置き換えることによって移行は穏やかなものになった。公然たる宣教師の他に、捕虜（*奴隸）になったキリスト教徒たちが異教徒の主人の間に熱心に信仰を広めた。指導者が改宗し、軍隊が彼の宣言に従うと、征服を強固にするために木目細やかな修道院と教会の組織が生まれ、信仰のすべての敵を抑圧的な法律がたちまち押しつぶしたのである。

こうしてキリスト教の蛮族の世界での勝利が成し遂げられた。この勝利は非常に偉大なものではあったが、見かけほど決定的なものではなかった。キリスト教であることを公言し、純粹なキリスト教の多くの要素を含んでいる宗教が台頭したとはいえ、それは闘争を通じて深い変化を遂げていた。宗教はその崇拜者と同様に洗礼を受けたのである。祭礼、像、聖人の名前が偶像のそれに取っ

て替わった。そして古代の信仰の思考と感覚の習慣が新しい形と新しい言葉によって再び出現したのである。長い間修道士たちによって奨励され、異端者イヨウイニアヌス（*AD4世紀―405、トルコ）、ウイジランティウス（*AD370―?、フランス）、アリウスが空しく抵抗してきた物質的、偶像的、多神教的信仰の傾向は、教会への野蛮な要素の注入、ヨーロッパにおける知性の全般的沈下、そして改宗を促すために図られた多くの便宜によって致命的に強化されたのである。古い神々は一見敗北し粉碎されたように見えたが、新しい信仰の下でも世界に対する影響力を少なからず保持していた。

このような傾向に対して、教会の指導者たちは一般に何の抵抗もしなかったが、別の形で古い神々の生命力を深く確信していた。数多くの奇妙で絵のような伝説は、勝利した信仰に対して古いローマと古い蛮族の神々がそのダイモーンの力で不屈の闘争を繰り広げている、という民間信仰を証明している。六世紀のある偉大な教皇は、あるユダヤ人が旅の途中で一夜を過ごし、他に避難所を見つけられず、廃墟になったアポロ神殿で横になって休んだことを語っている。彼はその建物の寂しさに震え、そこに出没すると言われている悪霊を恐れ、キリスト教徒ではなかったが、霊に対して強力な力を持つと聞く十字を切ることで身を守ろうと決心した。彼が無事だったのはそのおかげだった。真夜中、神殿は黒ずんだ、恐ろしい姿でいっぱいになった。アポロン神が荒れ果てた神殿で宮廷を開いており、その従者であるダイモンたちがキリスト教徒を誘惑する方策について

語っていたのである。新婚のローマ人がある日、球技をしているとき、邪魔だった結婚指輪を外し、軽い気持ちで近くに立っていたヴィーナス像の指にはめた。彼が戻ってきたとき、大理石の指は曲がっていて指輪を外すことはできなかった。その夜、夢の中に女神が現れ、今や彼女は彼と結婚した妻なので永遠にそばにいる、と告げた。アイルランド人宣教師、聖ガル（*AD550—645）がある夜、彼がスイスに建てた修道院の近くの湖で釣りをしていると、寂しい深淵の上を渡って行く不思議な声が聞こえた。水の精と山の精が、昔ながらの自分たちの支配を妨げる侵入者の追い出し方を相談し合っていたのである。

西方の禁欲主義の急速な伝播の詳細は、多くの歴史家によって十分に扱われており、その成功の原因も十分に明らかにされている。私が苦行生活が最初に広まった理由（*罪は超越的に恐ろしいものなのでそれを犯さないことを生涯の目標にする）としたもののいくつかは引き続き作用していたが、さらに強力な種類の理由も生じていた。ローマ帝国全体が絶え間ない蛮族の侵略によって急速に崩壊していったため、侵されることのない保護施設と平和的労働の中心地の存在は超絶的に重要なものになった。そして聖ベネディクトゥスが組織した修道院は、すぐに最も異質の魅力を併せ持つ存在になった。修道院は優れて貴族的であると同時に、民主的であることに熱心だった。最も家柄の良いメンバーは修道院長の権力と地位を切望し、大抵は手に入れることができた。一方、解放された農奴、侵略ですべてを失い、残忍な貴族に苦しめられ、兵役から逃れ、より安全で安楽な

生活を求めた農民は修道院に確実な避難所を見出した。修道院は大きな財力を行使し、そのほとんどを大いなる慈愛によって使い果たした。一方修道士自身は神聖な貧しさの光輪に包まれていた。熱烈で博愛的な性格の人々にとって、この職業は布教、慈善、文明化のための無限の展望を開くものだった。迷信深い人々にとっては天国への平易な道だった。野心家にとっては司教職への門戸であり、聖グレゴリウス（*1世）修道士の後は教皇職への門戸になることも少なくなかった。学問好きな人々には、多くの書物に触れ、研究生活を送ることができ、当時この世に存在した唯一の機会を与えた。気弱で内気な人々には最も安全で、貧しい農民が望みうる最も労力の少ない生活を提供した。膨大な人々が修道院に押し寄せたが、彼らを養う資力が不足することは決してなかった。迷信的な時代において、修道院への贈り物や遺贈が天国の扉を開くという信仰は、この共同体にほとんど無限の富を確保するのに十分だった。この富は修道士たちが荒地を開拓した技術と忍耐によって、その領地の一切の免税によって、そして最も乱れた時代に彼らが通常享受していた静穏によってさらに増大した。フランス、低地地方、ドイツにおいて彼らは極めて優れた農耕者だった。巨大な森林が伐採され、荒れ果てた湿地が干拓され、不毛の平原が彼らの手で耕作された。修道院はしばしば都市の核となった。修道院は文明と産業の中心地であり、動乱と戦争の時代における道徳的権力の象徴だった。

しかし、修道院制度の有益な影響は必然的に過渡的なものであり、その後の腐敗はその構造の正

常かつ必然的な結果であったと言わなければならない。強いられた禁欲に生き、無限の影響力を行使し、莫大な富を持つ広大な社会は、それを生み出した熱意が失われると、必然的に腐敗の温床にならざるを得なかった。農業の中心、旅人の避難所、戦乱の時の聖域、貴族の城の対抗勢力というその役割は、侵略の混乱が収束し、市民社会が明確に組織されたとき、もはや必要とされなくなつてしまつた。また同様の所見はその道德的タイプにさえ及ぶことがある。例えばベネディクト派の修道士たちが労働を修行の不可欠な要素とすることで、苦役に伴う不名誉を払拭したことは間違いない。しかし産業がその初期段階を脱したとき、清貧の神聖と富の害悪を説く修道院の理論がその最も致命的な敵になつたこともまた事実だったのである。産業活動の基礎である利息付き融資に対する神学者たちの教義上の非難は、はるかに深い時勢と理想の対立の表れだつた。

ある重要な点において隠者から修道生活への移行は環境の変化のみならず、性格の変化でもあつた。従順の習慣と謙遜の徳が、それまで全く占めたことのなかつた地位を占めるようになったのである。隠者生活は自立心と靈的プライドを大いに高めるものだつた。これらをさらに高めたのは、それぞれの著名な隠者を特定の徳の特別なモデルまたは教授者と見なし、彼の人格のこの側面を学ぶために彼のもとに巡礼するという、教会の奇妙な習慣だつた。こうした巡礼は、通常は孤独で自己満足の隠者の生活と、完全に滅ぼすことも十分に可能な肉体的欲求の抑制だけをほとんど全ての進歩の物差しにする習慣と相まって、ごく自然に極度の傲慢さを生み出したのである。しかし西洋

の高度に組織化され、統制された修道院では受動的な従順さと謙遜こそ、まさに最初に教え込まれたものだった。修道院は他のどの施設よりも、それらを実践するための学校だった。そして修道士はその時代の最高の道徳的理想を代表していたため、従順と謙遜は人々の心の中で新しい価値を獲得した。ローマ帝国滅亡後の混沌の中から生まれた封建的、非封建的な組織のほとんどすべては教会と密接な関係を持っていた。それは単に教会自身が称賛に値する組織の模範だったからではなく、人々に従順の習慣を身につけさせるために多くのことを行ったからである。この教育の特別な価値は、その時代の特異な環境に依存するものだった。古代文明、特にローマの文明がそのような習慣に全く欠けていたわけではない。しかし、古い社会が解体され、個人の自立を最高度に誇張する野蛮人たちが台頭する中で、教会は人類に受動的な服従の生活を徳の最高の理想として尊ばせようとしたのである。

従順の習慣は世界において新しいものではなかった。しかし謙遜は際立って、またほとんど独占的なキリスト教徒の徳だった。そして修道院ほど、この性質が大規模に、首尾よく教え込まれた場所はなかったと思われる。懺悔の規律、修道生活のすべての流儀や方針は、あらゆるプライドの感情を飼いならし、謙遜を徳の階層の中の最も重要な場所に置くよう設計されている。ここにカトリシズムが持つ緩和の力の大きな源泉がある。より優しい徳―慈悲心や愛情豊かさ―は、本物の謙虚さに完全に欠ける性格の中にも存在しうるし、先進文明においてはしばしば存在する。しかし一方、

性質が深い謙虚な感情に満たされたなら、それが性格全体を柔和にしないことはほとんどあり得ない。犷猛な好戦的性格をより穏やかな性格に変えるには、まずこの感情を呼び起こすことが不可欠である。修道院では、社会的、家庭的感覚の消滅、狭量な団体精神、さらに異端の罪に関する大それた見解が蔓延して、多くの心に極度の最も活動的な残忍さを生み出した。しかし、慈愛の実践と謙遜の理想がキリスト教圏に柔和化の作用を及ぼさないわけはなかった。

しかし、この道徳的タイプの一時的な優位がいかに好都合なものだったとしても、それは文明のその後の段階には明らかに不向きなものだった。修道院制度が最高権威の場合には政治的な自由特権はほとんど不可能なものになる。ただ単に修道院が国民のエネルギーを市民的なものから教會的なものに転換させるからだけではなく、修道院の理想はまさに隷属の極致だからである。カトリックは専制政治を和らげると同時に、永続させるのに見事に適したものだ。人々が受動的で理性に基づかない服従の人生を最も高い完成型として尊ぶようになれば、自由への熱意と情熱は必然的に衰える。この点において修道院と軍隊の精神は似ている。両者とも受動的従順を促進、美化することによって人の心を専制支配しやすくするのである。しかし、全体として修道院の精神はおそらく軍隊の精神よりも自由に対して敵対的だろう。なぜなら修道士の服従は謙遜に基づくものであって、兵士の服従はプライドと共存するものだからである。そう、自由な共同体の不変の特徴は、相当量のプライド、すなわち自己主張なのである。

修道院制度が謙遜の徳に与えた優位は続かなかつた。この徳は確かに最も完璧な聖人タイプの人々の無上の魅力であつて、美しさである。しかし一般人の間ではプライドが高慢に陥るよりも、謙遜が卑屈へと陥りやすい傾向があることが経験的に知られている。そして近代的モラリストたちは尊厳（*dignity）の感覚に、その逆の感覚よりも上手く訴えかけてきた。後の道徳史の最も重要な二つの歩みは、多くの徳の親であり後見人であるプライドの感情を生み出すことだった。修道院の精神を侵害した第一のものは騎士道だった。誇り高く油断のない軍事的名誉がここから生まれ、それ以来途絶えたことはない。第二のものは、プロテスタントとカトリックの人々を区別する最も顕著な特徴の一つである自己尊重（*self-respect）の感覚の創造である。そして前者の間でこれは、率直で自立した性質を形づくり、あらゆる盲従的な習慣と卑しく下劣な悪徳を防止する、貴重な道徳的な力であることが明らかにになった。プロテスタントの国々で生まれたこのような独特の活力は、修道院の制度や習慣の抑制、カトリックが通常美化し奨励してきた托鉢にプロテスタントが着せた汚名、プロテスタントが個人の判断力と自己責任を高く評価したこと、そして最後に、宗教改革の原理が受け入れられた地に最も深く根付いていた自由な政治制度の働きによるものだろう。

次に検討する修道院と知的な徳との関係は、広大な議論の地平を開くものである。そして、このことを理解するためには教会史のやや前の段階に簡単に立ち返る必要がある。また、第一に知的な徳という言葉はしばしば比喩的な意味で使われるが、厳密に文字通りに解釈することも可能であると言つていいだろう。真理に対する誠実で積極的な欲求が道徳的な義務であるとすれば、あらゆる誠実な調査に明らかに含まれている規律と性質は厳密に倫理学の範疇の中にある。真理を心から愛するということは、真摯で良心的な、たゆまぬ熱意をもってそれを追求することである。それは最も好ましくない結論に至ろうとも証拠が示すところに従う覚悟をすること、心を先入観から解放するために真剣に努力すること、欲望の奔流や情熱による歪曲の力に抵抗すること、あらゆる場面で確信と証拠を天秤にかけ、必要であれば確信の平静さを、混乱し動揺した心のあらゆる苦しみと交換する用意があることなどを意味する。これを実行することは非常に困難であり、非常に苦痛を伴う。しかし、真理を真剣に愛するという概念には明らかにそのことが含まれている。もし、ある体制が容疑の段階で犯罪の汚名を着せ、ある種の議論や事実の調査を非難し、理性による調査に情緒の偏りを持ち込もうとし、あるいは真つすぐな調査者の正直な結論を道徳的な罪と見なすなら、その体制は知的誠実さを破壊しているのである。

古代人の間では調査の方法はしばしば非常に杜撰であり、一般化も非常に性急だったが、真実を

誠実に探求することへの敬意は広く行き渡っていた。すでに見たように、忠誠心の証しとして、あるいは国家のために神々を鎮めるのに必要とされた何らかの宗教的習慣が法律で強制された例もあったし、直接的に不道徳な結果や社会の混乱につながると考えられた哲学が弾圧された例も二、三あった。しかし一般的なルールとして、思索が妨げられたことはなく、間違った意見を罪とする概念はなく、大胆な探求者には名譽と稱賛が与えられた。このことには異教徒の宗教理論がいくらか影響していた。多神教には多くの欠点があったが、三つの大きな長所があった。優れて詩的であり、優れて愛国的であり、優れて寛容だったことである。人間より栄光があり、人間に全く似ていない訳ではないが、自然のすべての現象を司り、宇宙を彼らの所業で満たしている存在の広大な階層という概念は、ギリシヤ人の想像力に最高の養分を与えた。宗教的な儀式や交際をあらゆる市民生活に織り込んだ民族宗教は、愛国心を集中させ、強めた。そして数多くの神々の個別のグループという概念は、人々に多くの礼拝の形式や多種多様な信仰を許容させた。ローマを首都とする巨大な諸国民の混合体では知的自由特権がさらに前進し、膨大な種類の哲学や信仰を説くことは妨げられず、真理の探求は徳の重要な要素とみなされていた。そしてソクラテスが民間信仰のあらゆる根本的な主張に次々と向けた、容赦ない、最も懐疑的な批判はその後継者たちの手本として残っていたのである。

教会の急速な発展の主因の一つは、教会の指導者たちが自分たちの独特の教義を救済に絶対に不

可欠なものと強調したことであり、それがこうした独占的権威を主張しなかった他のすべての信仰の支持者を攻撃するのに大変有利だったことは既に見てきた。また甚だしい軽信がさらに悪化していた時代に、絶対的な、無条件の、疑いのない信仰の義務を主張することで彼らが際立っていたことも見てきた。誤りと疑いはいずれも罪であるという概念は急速に広まった。そして、すぐに基本的な教義とみなされるようになって、教会の全ての進路と政策を決定することになった。

ここで少し立ち止まって、この致命的な教義の根底にある誤解された真実を確かめようとするのは悪いことではないと私は思う。理論的に、そして自然に考えるなら知的な間違いの不道德性を語るのは、音の色彩について語るのと同様、無意味なことである。ある人物が平行な線同士が交わること、あるいは二本の直線によって空間を囲むことが可能であると確信しているなら、彼の考えは不合理と言える。しかしそこには何の不道德もない。また彼の間違いが実証可能な真理を理解できなかったのではなく、歴史的な問題について対立する議論を誤って評価したことだったとしても、この間違い―その探究が常に真つすぐなものであったと仮定して―は、やはり単に道徳の領域の外にあるものでしかない。彼の結論が悪に対する何らかの障壁を弱めることによって、警察組織の無思慮な変更から生じるような悪しき結果をもたらす可能性があったとしても、このことからその考え自体が犯罪であるということには全くならない。ある学生がローマ史とユダヤ史に同じ心構えで取り組むなら、後者で犯す誤りは前者で犯す誤りと同様に、不道德なものではない。

しかし、知的な誤りに罪が含まれている、あるいは少なくともそれが罪の表出であると言えるケースが二つある。第一に、誤りは本当に真理を愛するという心構えの部分的な、または完全な欠如から非常に頻繁に生じるものである。偽善者や、利害の動機ゆえに実際には信じていない意見を公言する人々は、おそらく通常考えられているよりも少ないだろう。しかし、本物の確信に自身の抵抗できない利益のバイアスがかかっている人の数はいくら多く見積もっても多すぎることはないだろう。ここで私がいう利益とは物質的な満足のみならず、従うのは簡単で喜ばしいが、放棄するのは苦痛で困難な、精神的な快楽、思考のための決まりきった型や道筋のすべてを含むものとする。それは社会的地位、家庭の幸福、職業上の利益、党派心、野心と同様に卑俗な力を持っている、安楽を愛すること、確実さを愛すること、体系を愛すること、情熱によるバイアス、想像力の連合といったものである。ほとんどの人々は真理を愛する気持ちがあまりに弱く、精神的苦痛との遭遇をあまりにも嫌うため、努力することもなく自分の判断を時流に委ね、自分の見解や主張と対立するすべてのものを心から追い払い、そうして自分が信じた真理を速やかに確信するのである。真理を本当に愛する者なら、少なくともこのような歪曲的な力に抵抗しようと努力するはずである。そして彼の意見がそのようにしなかつた結果である限り、それは道徳的な失敗を意味する。

第二に、あらゆる道徳的な性質には知的なバイアスがかかっており、それは最も真面目な探究者

にさえも大きな、そしてしばしば支配的で決定的な影響力を持っていると言わざるをない。ある人物の性格や気質を知っていれば、その意見の多くをかなりの精度で予測することができるのが普通である。政治的にどちらの側にいて、どのような嗜好の規準に基づいて、どのような道徳的理論に自然に傾くかを知ることができるのである。厳格で、英雄的で、傲慢な性格の持ち主は、道徳的タイプの中でこれらに主要な地位を与えている体系へと傾く。一方、優しい性格の持ち主は愛情豊かな徳を至高のものとする体系に自然に傾斜していくだろう。一種の道徳的な引力によって、探究者は自分の性質に合致する体系に向かって無意識に滑って行くのである。そして知的な困難に捉えられることは滅多にないだろう。この関係がいかにも不変のものか、そして、宗教的、道徳的、あるいは政治的な問題に関して、それに先立ち、伴い、あるいは速やかにその後に関わり性格の重大な変化がない限り、人々が好んで取り入れるようになった原理が根本的に変更されることがいかに少ないかに気づいていない人物は、人間の本性についてごく僅かな観察しかできていないのである。また邪悪で墮落した性質や、固く狭量で非情な性質は、人間の性質について低く卑下した見方をする傾向があることについてもそうである。より高い感情を感じたことのない人物には、それをほとんど理解できないであろう。知性を構築する材料は、しばしば心に由来するものである。それゆえ誤った判断の根底には道徳的な病弊があることが少なくないのである。

この二つの真実のうち、第一のもの（*真理を愛する心構えの欠如）は誤りの犯罪性という神学

的概念の形成にかなる影響も及ぼさなかったと私は考える。批判能力を強化するための丹念な知力の訓練は、神学の精神とは全くかけ離れたものである。そして帰納的、科学的精神の高まりが神学的利益と常に敵対する大きな理由の一つがこれである。必要な証拠の水準を高めること、信仰の固さと遅さを説き聞かせることが帰納的推論者の最初の仕事である。彼は、判断を保留している状態を非常に好ましいと考える。それを短縮するよりは、むしろ延長することを奨励する。彼は人間の心の急速かつ早急に一般化する傾向を、その最も致命的な悪の一つと見なす。彼はとりわけ、心が信じるものを大事にしすぎるあまり、疑いを持ったり、新しい議論が現れたときにその結論を公平に見直したりする気をなくさないことを望んでいる。過去三世紀におけるほとんどすべての偉大な知的業績は、懐疑論の発展によって先導され、準備されてきたのである。前世紀のヴィーコ（*ジャンバッティスタ、1668—1744）、ボーフォール（*ルイ・ド、1703—1795）、プイリイ（*ルイ||ジャン・レベスク・ド、1691—1750）、ヴォルテール、そして今世紀のニーブール（*バルトホルト・ゲオルク、1776—1831）ヤルイス（*ロバート・ベンジャミン、1802—1858）が古代史に適用した歴史的懐疑論は、人類の歴史を再構築しようとする現代のすべての偉大な試みの根底にあるものである。自然科学の素晴らしい発見は、ペーコン派の科学的懐疑論がなければ不可能だった。この懐疑論が古い万物の理論を霧散させ、人々に古代人が全く知らなかった証拠の厳格さを要求させたのである。ヒュームとカントの哲学的懐疑論は、形而上学と倫理学に近代の最大の推進力を与えた。従って人々は帰納的な学派に受けた教育に正確に

比例して、疑うことを罪深いものとし、利害と情緒によって理性を支配しようとし、判断の公平性を破壊することを主目的とする神学的体系から遠ざかるのである。

カトリシズムを科学的精神の最も致命的な敵とする以外の見方は困難である。しかし性格が意見の大半を決定する、という最も重要な（*第二の）真実をカトリシズムは常に心の底から認めてきた。それが推奨したい意見に最も適した道徳的なタイプを育成することが、常にその努力の目標だった。そしてこのタイプからの逸脱はしばしば知的異端の素因になる、という確信は間違いなく誤りの罪の最初の見解の中で大きな役割を果たしていたのである。そして聖職者とその他の力が助け合ってこの教義をたちまち拡大した。救済には多くの思索的、歴史的、管理的な事柄が不可欠であるという主張がなされ、それらを拒否する者はすべて、完全にキリスト教徒の共感の絆の外に置かれたのである。

実際、キリスト教の創始者の純粋な教えを脇に置いて、コンスタンティヌス帝以降の教会の実際の歴史を考えるなら、その影響下で狭い愛国主義の精神は広く全世界的な博愛主義の中に消えていった、という通説を正当化することはできないだろう。ローマ帝国の普遍性によって、世界にはいくらか不活発ながらも真実の、普遍的な兄弟愛という感覚がすでに芽生えていた。新しい信仰では、真の共感の範囲は信条によって厳しく制限されていた。俗信によると、正統派と教えを異にする者

はすべて、生きている間は全能の神に憎まれ、死後は永遠の苦悶を運命づけられていた。したがって、ごく自然に彼らは真の信者から完全に疎外され、いかなる道徳的、知的な卓越性も、誤りを広めたという彼らの罪を償うことはできなかつたのである。キリスト教はすぐに八十または九十の宗派に分裂し、お互いにユリアヌスを驚嘆させ、アレクサンドリアの異教徒の嘲笑を浴びるほど激しく互いに憎み合った。そして、その憎悪が生み出した激しい暴動と迫害は教会史のあらゆるページに登場する。その光景は実にグロテスクで凄惨なものだった。ドナトゥス派はある司教の叙品の有効性だけを問題として正統派から離れた。そして正統派の見解に従う者はすべて呪われると宣言し、正統派の教会を押収して、祭壇を燃やし木材の表面をこすり落とすまで儀式を行うことを拒み、多数の者をこん棒で撲殺し、石灰を目に塗って盲人にし、ほぼ二世紀にわたってアフリカを戦争と荒廃で満たし、その最終的な破滅に大きく貢献したのである。類似本質派（*ホモイオス派）と同質派（*ホモウシオス派）の間の幼稚でほとんど理解不能な争い、キリストの性質は父と似ていると主張する人々と、父と同じであると主張する人々の間の争いが世界を暴動と憎悪で満たした。カトリックはあるアリウス派の皇帝が正統派の司祭八十人を一度に溺死させたこと、アリウス派のマセドニウス主教がアタナシウス派のパウロに替わったときコンスタンチノーブルに起こった暴動で三千人が死亡したこと、アレクサンドリアのアリウス派主教、カッパドキアのゲオルグがアタナシウス派の未亡人を足の裏で踏みつけ、修道女を裸にしてヤシの木のトゲだらけの枝で鞭打ち、信条を棄てるまでゆっくり火炙りにしたことを語る。エジプトにおけるカトリックの勝利は（もし八十人

のアリウス派主教の厳肅な主張を信じてよいものならば）あらゆる種類の略奪、殺人、冒瀆、暴拳を伴っていた。そしてアリウス自身はおそらくカトリックの手によって毒殺されたと思われる。アレクサンドリアの聖キュリオスの信奉者たちは、主に修道士だったが、街を暴動と流血で満たし、長官オレステスを負傷させ、純粹で才能あるヒパティアを彼らの教会の一つに引きずり込み、殺害し、鋭い貝殻で骨から肉をこそげ取り、裸にし、ずたずたになった遺体を炎に投げ入れた。エフェソスでは、聖キュロスとネストリウス（*AD381—451、母マリアは聖母ではないと説いた）派の争いの際には、大聖堂そのものが凄まじい流血の争いの場と化した。コンスタンチノープルは聖クリュソストモスの退位（*主教職にあったが讒言で流罪になった）に際して数日間、絶対的な無政府状態に陥った。カルケドン公会議（*AD451、両性説の公認）の後、エルサレムとアレクサンドリアは再び激しい騒動を起こし、後者の都市の主教（*ディオスコロス1世は正しくは流罪？）は自らの洗礼堂で殺害された。その約五十年後、単性論論争が最高潮に達したとき、コンスタンチノープルの皇帝の宮殿は封鎖され、教会は包囲され、街は相争う修道士たちの怒り狂った集団に支配された。暴動は一時鎮圧されたが、二年後にさらに激しさを増して再発した。そして東洋のほとんどすべての主要都市は修道士たちの流血と暴動に満たされた。聖アウグスティヌス自身、半ペラギウス主義に対するあらゆる民衆の迫害を扇動したと非難されている。公会議は狂おしいまでの憎悪に活気づき、破門によって宗派間の対立を焚き付けた。エフェソスの「強盗会議（*AD449、単性論を支持）」ではコンスタンチノープルの主教フラウイアヌスが、アレクサンドリ

アの主教、あるいは少なくとも彼の従者に殴られ、蹴られて数日後に死亡した。また、聖ダマス（*AD305—384）がローマの教皇に選出された選挙では神学的な問題は持ち上がらなかったようだが、暴動が激しく、ある教会では百三十七の死体が発見されたほどだった。三世紀に聖キリアヌスが破門を支持するために持ち出したユダヤ人の偶像崇拜に対する迫害の先例を持ち出して、オプタトゥス（*現アルジェリア北東部、ヌミディアのミレヴィス司教）はコンスタンティヌスの治世にドナトゥス派の迫害を主張した。次の治世にはこの前例に基づいて、キリスト教徒の大集団が異教の崇拜を力で撲滅するよう皇帝に嘆願書を出した。その約十五年後、同じ根拠で全キリスト教会は聖アンブロジウスの（*異教）迫害方針を支持しようとしていた。相争う宗派は、宗教的自由特権を打ち砕く義務を、全員が同意する唯一の信条であることに気づいたのである。最も非攻撃的で控えめな異教でさえ、同じように激しく迫害された。生け贄を捧げるとは死刑に相当した。簡素な花飾りを吊るしただけで地所が没収された。アジアの建築やギリシャ彫刻の最も高貴な作品が、農民が好んで祈る粗末な寺院や、家庭の守り神を粉碎した、同じ聖像破壊運動によって破壊されたのである。この新しい不寛容は信仰上のいかなる細かな違いにも憤慨しないことはなかった。復活祭を祝う適切な時期は、天国行きか地獄行きかに関わる問題と信じられていた。その後、十四世紀にコンスタンチノープルで変容（*弟子たちが山中で見た、光り輝きながら旧約の預言者たちと語り合っているキリストの姿）の光の性質の問題が議論されたとき、その光が創造されたものではないということを認めなかった（*すなわち神とは別の永遠の存在とした）人々は（*多神

教の信奉者として）キリスト教徒として埋葬される栄誉を奪われたのである。

このような立法的、教會的措置とともに、嘘の猛々しさにおいて世界中の何物にも凌駕されることのない書物が生まれた。議論好きな書き手たちは、正統派の信仰から逸脱した者をダイモンとして描き、異端者の地上での苦しみを神の罰として、報復的に敬虔に惚れ惚れと眺めた。そして時にはほとんど超人的な悪意とともに墓場の向こうまで想像力を巡らせ、その者のために永遠に用意されていると信じる拷問について曖昧さのない言葉で勝ち誇った。シュネシオス、バシレイオス、あるいはサルウィアヌスのような少数の人々は、異教徒や異端者にいくらかの卓越性を見出したかもしれない。しかし彼らの率直さはまったく例外的なものだった。ギリシャの詩人たちが仇敵トロイについて、あるいはローマの歴史家たちが敵国について残した美しい描写と、何世紀にもわたって教会に敵対するすべての人々について教会史家がほぼ一定不変に残してきた描写を比べてみれば、国際的な共感がどの程度後退していたかを評価することは簡単だろう。

しかし、西洋の修道院が知的機能を發揮し始めた時期には、カトリシズムの優位はほぼ確立しており、論争的な熱意は衰え始めていた。教会の文学的熱意は別の形で現れたが、いずれも修道院の精神が色濃く反映されたものだった。もしカトリシズムが起こらなかつたら、世界の知的未来はどうなっていたか―人の心の行方をどんな原理や推進力が導いていたか、それを培うためにどのような

な新しい制度が作られていたか―を想像するのは難しいか、不可能なことである。カトリシズムの影響下で修道院は知的生産活動の一つの領域となった。そして何世紀にもわたってその地位にあり続けた。私は本書の目的から外れた文学史のようなものには立ち入らず、修道院がその機能をどのように發揮したかについて簡単に評価することに努めたいと思う。

修道院の知的功績について言及するとき、異教徒の著作物の保存が真つ先に思い浮かぶのは自然なことだろう。彼らの著作のテーマに関して、初期のキリスト教徒たちの間に著しい相違があったことはすでに述べたとおりである。テルトゥリアヌスに代表される一派は彼らを忌み嫌っていた。一方、殉教者ユステイノス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネスに代表されるプラトン主義者たちは、その美しさを心から認めていただけでなく、そこに神の靈感の原型の痕跡とユダヤの書物からの盗用が見られるとさえ考えていたのである。西洋キリスト教の偉大な組織者である聖アウグスティヌスは、こうした両極端を避けながら、異教徒の著作を高く評価し、敬意をもって扱っている。彼自身、悪の道からの最初の転向をキケロの「ホルテンシウス」のおかげとしている。そして彼の著作は古いローマ文学の見事な、そしてしばしば非常に美しい応用に満ちている。ユリアヌスがキリスト教徒に古典を教えさせまいとした試み（*文化、文明を受け継ぐ知識人を異教徒に限定してキリスト教の力を削ぐとした）と、その試みが引き起こした激しい憤りは、当時のキリスト教指導者がこの教育の形をいかに高く評価していたかを示している。そしてこの争いゆえに、

それがさらに大切にされるようになったのは自然なことだった。新プラトン主義の影響、コンスタンティヌス以降の多くの名ばかりのキリスト教徒による洗礼、繁栄に必然的に伴う熱意の衰退は、すべて違った道筋で同じ傾向を示していた。シュネシオスが司教でありながら、異教徒ヒュパテアを称賛する友人であると宣言するばかりか、肉体の復活の完全否定と、魂の先在に関するプラトン主義の教義の堅持を公言したというのは不思議な現象である。もし教会の指導者にさえそのような自由を与える教会理論が優勢だったなら、キリスト教の歩みは大きく異なっていただろう。しかし、ローマでは反動的な精神が生まれた。排他的救済の教義がその知的基盤を提供した。ローマ教会の政治的、組織的な特徴は、信仰を窮屈な形に押し込めることを強いた。聖グレゴリウスの才能がこの運動を導いた。そして西方帝国の思索的なギリシヤからの教會的、政治的分離、蛮族の侵入と改宗を最大の重要事とする一連の歴史的経緯が、カトリックのタイプの優位を絶対的に確実なものにしたのである。蛮族の侵略に続く混乱の中で、俗世間の知的エネルギーはほとんど完全に終息した。確かに六世紀にはラヴェンナのテオドリック（*AD 454—526、東ゴート王、イタリア王）の宮廷でボステイウス（*AD 480—525）の天才と、カッシオドルス（*AD 485—585）、シンマコス（*クイントゥス・アウレリウス・メモゥス、AD?—526）の才能が残留を放っていた。しかしこの後長きにわたって、文学といえればほとんど修道院が手掛けた説教と聖人の生涯しかなかった。年代記の編纂はトゥールのグレゴリウスから、さらに頼りないフレデガリウス（*偽フレデガリウス年代記の編纂者とされる）に引き継がれた。そしてその後、長い絶対的

な空白があった。いくつかの辺境の国には、かすかな活気が見られた。聖レアンドロス（*AD534—601）と聖イジドール（*AD560—636）がセビアで開いた学校は七世紀に繁栄した。そして遠く離れたアイルランドの修道院はいましばらく学問の保管庫であり続けた。しかしヨーロッパの他の地域はアベラール（*ピエール、1079—1142、唯名論）の合理主義や十字軍に続く出来事が学問の復活を始めるまで、ほとんど絶対的な麻痺状態にあった。この時期を通してカトリシズムが異教徒の文学に与えた主な功績は、おそらくラテン語を聖なる言語として不朽のものにしたことだろう。西洋諸国がギリシャ（*ビザンチン）帝国と何らかの関係を持たず、聖地への巡礼が完全に途絶えた時期はなかったにもかかわらず、ギリシャ語がほぼ完全に消滅してしまったという事実が、この文学に対する興味の完全な欠如を物語っている。ラテン語の古典の学習は大抵、積極的に妨げられた。その著者たちは地獄で焼かれていると信じられていた。想像上の知識で膨れ上がっていた修道士たちに異教徒の著作者を尊重することはできなかった。また世界の終末が近づいているという断続的なパニックによって世俗の学問への欲求は常に抑えられていた。一部の修道士には沈黙の修養中にウエルギリウス、ホラティウス、その他の異邦人の著作を所望するとき、犬のように耳を搔いて意思表示する習慣があった。異教徒を犬になぞらえることが適切とされていたのである。修道院には一時期、ヨーロッパで唯一の図書館があり、それゆえ異教徒の写本の唯一の保管庫だったと言われている。しかしだからといって、もし修道院が存在しなければ、代わりに同じような図書館が設立されなかったとは推測できない。修道士たちが時折行っていた古

代の作品の書写作业は、主にもう少し後の時代のことではあったが、彼らが異教徒の著作を消し去って自分たちの伝説で覆いつくすために、古代の羊皮紙を削り取った組織的労働と対比しなければならぬ。

しかし修道院時代の文学には、抜きんでて美しい側面もある。現代の文人の生活の苛立ち、焦燥、極度の緊張、多くの高貴な知性を麻痺させる多くの不安、誤らせる喝采への熱望は、当時存在しなかった。外界の騒動が決して侵入することのない修道院の深い静寂の中で、世の中のあらゆる心配事から切り離された学僧は、今ではほとんど世界から消え去ってしまった精神によって学問を追求していた。彼が疑念にかき乱されることはなかった。彼にとつて森羅万象の問題は解決済みだった。彼は目に見えない世界について絶えず揺るぎない信念で語り続け、そのためだけに生きるようになったのである。彼の望みは人間としての偉大さや名声ではなく、自分の罪の赦しと、より幸福な世界における報酬に向けられていた。数多くの古風でしばしば美しい伝説が、文学と宗教の間に存在した深い結びつきを物語っている。アングロサクソンの最初の偉大な詩人であるカドモンは世俗的な生活の中で、その隠れた才能のはけ口を見出せなかったとされている。宴会に集まった戦士たちが順番に戦争や美人の賛歌を歌い、楽器が彼に渡されると、彼は悲しくなつて立ち上がり、その場を去ってしまった。彼だけが自分の思いを詩に紡ぐことができなかつたのである。疲れて、気落ちして彼は横になつて眠つた。その時、夢の中に人影が現れ、天地創造を歌えと命じた。宗教的な熱

情が彼の脳を揺さぶり、閉じ込められていた知性が解放されて、彼はたちまちその国一番の詩人になった。あるスペインの少年は、長きにわたって自分の課題を克服しようと努力したが叶わず、教師の厳しさに絶望して、父親の家から逃げ出した。放浪の旅に疲れ、不安な思いでいっぱいになって井戸端に腰を下ろして休んでいると、石に刻まれた深く長い溝が目に入った。水汲みの少女に理由を尋ねると、いつも縄に擦れているので石がすり減ったのだ、と教えてくれた。少年は既に自分のしたことを後悔していたが、その答えの中に神の黙示を見出した。「もし、毎日使うことで、柔らかいロープが硬い石を貫くことができるのなら、きつと長い忍耐も私の脳の愚鈍さに打ち勝つことができるだろう。」彼は父の家に戻って倍旧の努力を重ね、スペインの偉大な聖イジドルスになったのである。ある悪徳修道士が地獄行きを免れた（*生き返って改心するチャンスを与えられた）のは、彼が犯した罪の数は非常に多かつたにもかかわらず、彼が書いた重々しく敬虔な書物の文字の数がほんの少し多かつたからである、とされた。鳩の形をした聖霊が聖グレゴリウスに靈感を与えるのが目撃されていた。そして聖トマス・アクィナス（*AD 1225—1274）や他の数人の神学者の著作は、キリストや聖人たちによってはつきりと称賛されていた。ある修道士著述家の墓が死後二十年経ってから開けられたとき、体の残りは崩れて塵になっていたが、ペンを持つていた手はしなやかで腐っていないかった。ボンの修道院の近くに、名もない若い学僧が葬られたことがあった。彼の葬儀の翌日の夜、墓地を見下ろす庵室にいた修道女は、部屋いっぱい広がる明るい光で目が醒めた。彼女は夜が明けたのかと思って起き出した。しかし周囲がまばゆいばかりに輝い

ているにもかかわらず、外を見るとまだ夜だった。比類なく魅力的な一人の女性の姿が学僧の墓の上に屈んでいた。その美貌から放たれる光が空中に満ちていた。そして墓から舞い上がった、雪のように白い鳩を彼女は胸に抱いた。それは殉教した学僧の魂を迎えに来た神の母だった。「学僧もまた、清く生き、勇気をもって働くなら殉教者なのである。」と昔の年代記編纂者はつけ加えている。

この種の伝説に非常に真実の美しさがないわけではないが、カトリックの支配が始まった時期は、全体として人間の心の歴史の中で最も嘆かわしい時期の一つであったという事実から目を背けてはならない。キリスト教国のエネルギーはあらゆる有用かつ進歩的な学問から逸れて、専ら神学的な論考に費やされた。無謬の知恵に帰着する迷信の群れが知識の道を塞ぎ、魔術の告発、あるいは異端の告発が、物理的本質や意見の領域における大胆な探究をすべて押し潰したのである。何よりも真の探求の条件が、教会によって呪われていた。盲目的で疑うことを知らない軽信が第一の義務である、と説き聞かされた。そしてその結果、疑う習慣、（*道德的、倫理的）判断の保留の公平さ、議論がある問題において両側の意見を聞き、判断を不合理な偏見から解放したいという欲求はすべて非難されることになった。過誤と疑念の罪に対する信念は普遍的なものになった。そしてこの信念は、かつて人類によって容認されたものの中で最も有害な迷信である、と自信を持って断言して良いだろう。事実の間違ひは研究によって正される。研究方法の間違ひは、ずっと根深いものであるが徐々に変わっていく。しかし、研究を罪深いものと見なし、疑うことを罪とする精神は、人間

の心を苦しめる最も永続的な病弊である。ヨーロッパの教育が修道院から大学に移るまで、イスラム教徒の科学、古典時代の自由思想、産業の独立が教会の主権を打ち破るまで、ヨーロッパの知的復興は始まらなかった。

中世の知的な闇についてこれほど強く主張すれば、多方面から反論があることは承知している。十八世紀の哲学者たちが教会の良い面を見抜けなかったことが反動を生み出し、多くの人々を正反對の、しかもはるかに間違った極みへと導いてしまったと私は考えている。ある人々はこの時代の独特の神学的教義を愛するがゆえに、またある人々は考古学的熱意ゆえに、この時代の贅美者となる。一方、自らを歴史の再生者と豪語し、あらゆる神学的見解を最高に軽蔑的に扱う、時に軽薄な論者たちの一派は、後退の可能性をほとんど認めない非常に浅い歴史樂觀主義と、カトリックの專制的性格への共感から、最も途方もない言葉で中世社会を称賛することを習慣としている。この問題については長大な検討に入ることを避け、彼らの評論に絶えず見られる二、三の誤りの簡単な指摘に留めることをご容赦いただきたい。

相当な期間、ヨーロッパのほとんどすべての知識が修道院に内包されていたことは疑いようのない事実である。それゆえ、これらの施設が存在しなかったら知識は絶対に消滅していただろう、と絶えず推論されている。しかし、これはまったく正しい結論ではないと私は考えている。異教徒の

帝国の時代には、知的生活は地球の広大な範囲に広がっていた。エジプトと小アジアは文明の一大中心地となっていた。ギリシヤは依然として学問の国だった。スペイン、ガリア、ブリテンでさえも、図書館や教師で溢れていた。ナルボンヌ、アルル、ボルドー、トゥールーズ、リヨン、マルセイユ、ポワティエ、トリーアの学校はすでに有名だった。西暦376年、キリスト教皇帝グラティアヌスは両アントニヌスの時代にイタリヤで行われていたのと同様の制度をガリアでも実施し、すべての主要都市で国家が教師を支援しよう命じた。ローマ帝国の滅亡とイスラム教徒の侵略の後という極めて不利な状況であったとはいえ、これほど広く普及したラテン文学が完全に消滅し、それに対するすべての関心が永久に失われていたと考えるのは不合理だろう。もしカトリシズムが存在しなかったとしたら、人間の心は他の領域で発展を遂げていたことだろう。そして少なくとも古代の宝の一部は他の方法で保存されていたはずである。修道院は蛮族の侵入から守られた平和な人々の自治体として、ごく自然に文学の川が流れ込む貯水池になった。しかし彼らが創り出したとされるものの多くは、実際には引き寄せられていただけだった。無政府状態と絶え間ない戦乱の時代にあつて、修道院が獲得した不可侵の神聖さは古代の学問の貴重な容器となった。また修道士たちの書写の努力は、おそらく古典文学を削り取ったその努力と釣り合う以上のものだっただろう。またキリスト教圏の宗教的統一は、全体的な意見の交換を可能にする上で極めて重要だった。これらの功績が、人間の心を世俗の学問から完全に遠ざけ、知的改革者が最初に根絶しなければならぬ卑しむべき軽信の習慣を第一の義務として執拗に説き聞かせることによって生じた、知的害悪を

上回っていたかどうかが疑われるべきなのは当然のことだろう。

また、先の誤謬がやや異なる形で述べられるのを耳にすることも少なくない。数世紀にわたって非凡な才能を持った人物のほとんどが偉大な神学者だったことを、私たちは思い起こさせられる。そして彼らを生み出したカトリック神学が存在しなければ、エジプト以上の闇が広がっていただろうと想像するよう求められるのである。この意見はキケロの有名な一節に出てくる囚人のそれに似ている。彼は暗い地下牢で一生を過ごし、壁の亀裂から入ってくる一条の日光しか見たことがなかった。そこで彼は壁を取り除けば亀裂はもはや存在しなくなるので、すべての光が入って来なくなると考えたのである。中世のカトリシズムは、あらゆる方法で世俗的な学問を妨げ弾圧する一方で、優れた神学者に富と名誉、権力を独占させるものだった。したがってカトリシズムがなければ存在しなかったであろう、しかし他の状況下では他の形で発揮されたであろう才能を、ごく自然に神学の道に引き込んだのである。

しかし、このことから中世のカトリシズムが知性の領域において真の創造力を持たなかったと推論することはできない。大きな道徳的、宗教的熱意は常に他の地域では存在しない、あるいは少なくとも発揮されないであろう、ある種の才能を呼び起こす。そして他の領域ではこれほどまで完璧には展開させられない、ある種の心の型を発展させるために修道院は特別に適していたのである。

聖トマス・アクイナスとその信奉者たちの偉大な著作、そして近代においてはベネディクト派の重厚で良心的な学識によって、修道院の歴史のある時期は常に学僧にとつて尊敬に足るものになっている。しかし何世紀の間、文学的な嗜好や才能を持つ者がほとんど皆、修道士になっていたことを思い起こすなら、これらの修道士が古代ローマの言語に親しみ、高貴な文学にも容易に親しむことができたことを思うなら、また彼らを研究に駆り立てることを意図した生活様式、心配事からの解放、日課の単調さを考えるなら、これほどまでに長い間、彼らが人類の知識に眞の価値を追加することがいかに少なかったかを驚かない訳にはいかない。カトリックの支配が最も完璧であった時代においてさえ、いくつかの偉大な業績は教会の影響力に対抗するか、シンブルにその外側のものだったというのは実に驚くべき事実である。ロジャー・ベーコン（*1214—1294）は修道士だったため、しばしばカトリックの教えの産物として語られる。しかし、偉大な天才が時代の流れに抵抗する力をこれほどまで顕著に示した例はない。物理学が軽視され、水を差され、非難され続けていた時代、世界のあらゆる偉大な報奨が全く別の道を歩む人々に開かれていた時代、ベーコンは超越的な才能で自然の研究に打ち込んでいた。その生涯の十四年間は獄中にあつた。そして死後は魔術師としてその名を轟かせた。中世の研究所は主に錬金術の研究を目的としたもの、イスラム教徒の刺激によるものだった。航海用コンパス、火薬、綿花紙の発明は、確かに極めて重要だった。しかしこれらの功績は修道士に属するものではない。その起源は不明な点が多いが、少なくとも後の二つをヨーロッパで最初に使用したのがスペインのイスラム教徒だったことは、ほぼ確実に

ある。1009年にはそこですでに綿の紙が使われていた。それはキリスト教諸国では十三世紀末まで知られていなかったようである。キリスト教国で大砲が使われたのはクレシーの戦い（*北フランス、1346年）が最初だが、火薬の知識は1338年にまでさかのぼることができる。しかしスペインでは13世紀のいくつかの包囲戦でイスラム教徒たちによって、そして11世紀末でさえセビリアのムーア人とチュニスのムーア人の戦いで火薬が使用された証拠が豊富にある。発明においても、独自の研究においても、中世の修道院は非常に不毛だった。修道院は公式の論理を完璧に育て上げた。彼らは多くの忍耐強く勤勉な、しかし大部分はまったく無批判な学僧と、揺るぎない信念によってその前提を仮定し、そこから見事な巧妙さで推論する数多くの哲学者を生んだ。そして彼らは世俗の学問を犠牲にするのを高貴なことと見なすよう説き、絶対的な虚偽である宇宙の支配の性質の理論を人々に焼き付け、その影響力の及ぶ至るところに人間の心にとって最も致命的な毒である軽信と不寛容の習慣を広めたのである。

また、より哲学的な中世の賛美者たちからは、カトリック教会は文明国の進歩の障害物になったし、人の心がその教えを追い越したときにその迫害精神が引き起こした不幸はどれだけ強調しても強調しすぎることはないが、それでも教会が時代に大きく先行していた時期があり、それが当時行っていた完全かつ絶対的な支配権は知的に非常に有益なものだった、というのも非常によく指摘されていることである。この見解に多くの真実があることは、私自身繰り返し主張してきたことで

ある。しかし、それを前の時代と切り離して、無条件の賛辞のテーマにしようとするなら、人は重大な誤りに陥ることになるだろう。その後のカトリックによる支配の時代に生じた害悪は、事故でも墮落でもなく、それ以前の専制君主制の正常かつ必然の結果だった。中世の世界に押しつけられ、教会特有の卓越性の条件とされた原理は、決定的と主張される性質のものであって、闘争と動乱なしに破棄されることはあり得なかった。このような原理は、その全体としての、またそれが作用した全期間における影響力によって評価しなければならない。人を殺す前に苦痛を和らげ、体中に心地よい感覚を広げる毒薬がある。私たちは、それが楽しみの時間をもたらすことを知っている。しかしそのために支払う代償を忘れてはならない。

カトリック教会が長きにわたって知的発展に及ぼした極めて不利な影響は、重大な道徳的結果をもたらした。道徳的な進歩は必ずしも知的な進歩に依存するものではないが、その影響を大いに受ける。私たちが文明と呼ぶ、巨大で複雑な有機体の成長において知的活動は最も重要な要素だからである。中世の軽信には真理に対する無関心を生むという、より直接的な道徳的影響力があつた。この無関心こそが多くのカトリックの著作の最も忌まわしい特徴である。初期の教会の弁証文学の大半を意図的な偽造と見なさなければならぬことは既に見てきた。そして公平な読者は、中世の全過程において無数のグロテスクで嘘の伝説が間違いない事実として意図的に人類に押し付けられた形跡を見つけることができず、不正な教皇令集の歴史や、それらに関連した議論を辿ることがで

きず、あるいは、ほとんどのカトリックの論争的歴史家が反対陣営のどんな良い点にも気づかないことよって頻繁に示した完全で絶対的な無能力と、その害悪がいかに深刻でいかに根強いものかを主張することなく、彼らの大義に反対する物はなんでも抑圧したことに気づくことはできないだろう。（*皮肉）もちろん、数多くの高貴な個人的例外があったことは間違いない。しかし、古代の大部分と現代の非常に多くのカトリックの文献にこの道徳的欠陥がどれほど存在するかということ、どれだけ強調しても強調し過ぎることはないとは私は信じている。このことが全ての自由で公平な思想家に言いようなない嫌悪感を抱かせ、ドイツの偉大な歴史家（*ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー、1744—1803）にキリスト教徒の真実はフェニキア人の信用と並び称されるべきである、と苦々しく言わしめたのである。しかしこの常の虚偽が教会の利益に資するときの真実への絶対的な無関心は完全に説明可能なものである。そして他の点では最も高貴な徳を示した多くの人々にも見られたことだった。判断の公平さが重視されなくなったなら、言葉の正確さはまもなく重視されなくなるだろう。そして軽信を徳と説き聞かされるなら、もはや虚偽が悪徳でなくなるのも遠いことではないだろう。また、救済は自分たちの教会にしかない、自分たちの教会はすべての罪を許すことができる、と固く信じるなら、人々は教会に有益なことは何も間違っているはずがない、と速やかに結論するようになる。彼らは真理を愛することを、彼らがそう呼ぶところの真理を愛することに置き換える。彼らは道徳を神学から派生し、神学に従属するものと考え。そして全ての発言を真実性の基準ではなく、自分たちの信仰の利益によって統制するのである。

修道院制度のもう一つの重要な道德的帰結は、罪に対する金銭的補償が大きくクローズアップされたことである。当初、異教とキリスト教との大きな違いの一つは、前者の儀式がほとんど道德的な性質と無関係であったのに対して、キリスト教はそのすべての礼拝に心の清らかさを不可欠な要素としていたことだった。異教徒もこの方面において微かな努力をしていたことは事実である。キケロが言及した、ティアナのアポロニウスやピタゴラス派が繰り返し唱えた古い教訓や戒律は「不敬虔な者は贈り物によって神々の怒りを鎮めようとしてはならない」と宣言している。また富裕層がこれ見よがしに捧げる金色の角の高貴な牛の多数の犠牲は、貧しい人々の花輪や慎み深く敬虔な礼拝よりも神々を喜ばせない、という神託が何度も下ったと言われている。しかし一般に異教徒の世界では神殿での礼拝は道德とはほとんど、あるいは全く関係なかった。この点に関してキリスト教がもたらした変化は人類にとって最も重要な恩恵の一つだった。しかし時間の経過とともに、様々な原因が作用することによって古い異教徒の感情が復活し、さらにそれが強まるのは当然であって、おそらく必然的なことだった。キリスト教においてその慈愛ほど気高い特徴はなかった。教父たちがこの徳を刺激するためにあらゆる雄弁を尽くし―特に帝国の崩壊に伴う災難の中で―寄附者とその贈り物に対して受け取るであろう靈的利益について極めて強い言葉で詳細に説いたことは驚くには当たらない。またこの利己的な計算が次第に、そして熱心で無知な人々の間で他のすべての動機を吸収するようになったとしても驚くにはあたらない。七世紀の論者が語る不思議な伝説は、

このような感覚の発生を物語っている。キリスト教の司教シュネシオスはエバグリウスという異教徒の改宗に成功したが、彼は長い間「貧しい者に与える者は主に貸すのである。」という一節に疑念を抱いていた。改宗に際して、彼はこの一節に従って貧民に施すための金三百粒をシュネシオスに託した。しかし彼はキリストの代理人として司教から約束手形を取り、来世での返済を約束させた。月日は流れ、エバグリウスは死の床にあった。彼は息子たちに埋葬のときシュネシオスには知らせずに、例の手形を自分の手に持たせるように命じた。その命令は守られた。そして三日後に彼はシュネシオスの夢に現れ、借金が支払われたことを告げた。そして墓へ行つて受け取り書きを見るよう命じた。シュネシオスはその通りにした。墓が開けられ、死者の手には約束手形があつて、キリストが借金を払ったことが裏書きされていた。この手形はその後長きにわたつてキュレネの教会に聖遺物として保存されていたという。

この伝説が示すような感覚は、すぐに十倍の力で修道生活の分野に向けられた。コンスタンティヌスの法律によつて教会への遺贈権が認められ、さらにその後のいくつかの法律で拡大された。同時に教会財産は公的な負担を免除された。この措置はその増加を直接的に助けただけでなく、間接的にも重大な影響を与えた。税が重くなると多くの（*裕福な土地持ちの）平信徒は自分の地所の所有権を修道院に譲り渡した。使用人として税の負担なしに収益を手にし、修道士には封建領主にするような（*帝国の税に比べて）わずかな支払いをするだけでよい、という秘密の条件がついて

いたのである。修道士は貧者の管財人であると同時に、自らも典型的な貧者と見なされた。そして貧者に施す者への約束はすべて修道院の後援者にも適用される、と言われた。修道院の礼拝堂には聖人たちの遺物や奇跡的な力を持つ聖像があった。そして大勢の参拝者が奇跡に魅了され、聖人の保護の下に身を置くことを望んだ。数世紀の間、聖職者たちに金銭を捧げることは道徳律の第一条であったと言っても過言ではない。政治家たちは無秩序な社会の中心で、平和的で勤勉な人々を増やすことの重要性を感じていたかもしれない。そして大勢の人々は家族の愛情ゆえに、ほとんどの家族の少なくとも一人のメンバーが入っていたその施設を支持したのかもしれない。しかし圧倒的多数のケースにおいて、その動機は単なる迷信だったのである。病氣や危険、悲しみや良心の呵責の時、恐怖や良心が目覚めたとき、崇拜者は常に急いで聖人の恩恵を金で買おうとした。とりわけ彼は死の間際、来世の恐怖が心に暗くのしかかってくるとき、最も恐るべき犯罪を消し去り、最高の幸福を確保する確実な手段を、修道士への贈り物や遺産に見出したのである。すぐに自分の財産の一部を教会に遺贈しない金持ちはキリスト教徒とは見なされなくなった。またヨーロッパ各地の無数の修道院の宣言書は、遺言者の「魂の利益のために」遺言によって広大な土地が修道士に譲られたことを証明している。

ある偉大な歴史家（*ジャン・シャルル・レオナル・シモンド・ド・シスモンディ、1773—1842）は教会の初期の歴史は明確に三つの時期に分けられると述べている。第一期において

宗教は道徳の問題であったが、五世紀に頂点に達した第二期では正統性の問題となり、七世紀から始まる第三期では修道院への寄付の問題になった。カトリックの専制政治と蛮族の侵略の後の無知が異端の闘いを鎮圧した。そして六世紀から十二世紀まで続いたほとんど絶対的な暗黒時代に西洋で実現したのは、絶対の信仰と完全な全会一致という神学の理想だけだった。それまでの時代に異端との戦いに費やされていたエネルギーは、今や富の獲得に費やされるようになった。その執り成しが確実なものとなされる聖人の聖堂に贈り物をする事で、人々は最も酷い犯罪に折り合いをつけた。修道士たちははかつての熱意が自然に冷めてしまったため、彼らの行いに対する敵対的な批判がなくなつたため、また彼らが手に入れた富そのものために、甚だしい全般的な不道徳に陥ってしまった。彼らの大部分は決して強い宗教的動機に駆られた聖人たちでもなければ、世俗からの逃避を求める病んだ失意の人々でもなかっただろう。彼らは結婚という特権はあるものの、兵役や極度の苦役、絶え間ない抑圧にさらされる農奴の困難で不安定な生活よりも、心配事もなく、労働も少なく、他の方法では得られない高い社会的地位と、彼らが信じるところによれば天国行き、安全な暮らしを好む、並外れた信心も感受性もない、シンプルな農民だったのである。それが罰されずにできるようになると、彼らはごく自然に貞節の誓いを破った。また、ごく自然に彼らはこの状況を最大限に利用し、できるだけ多くの富を自分たちの共同体に引き込もうとした。特に十世紀末には、この世の終わりが近づいているという信仰、十字軍が（*聖墳墓参詣の）誓願の金銭による免除という有利な取引をもたらしたと、黒死病が宗教的狂信の発作を引き起こしたことが、この動

きを刺激した。修道院の年代記では君主の功績はほとんど教会への贈り物によってのみ判断されている。場合によっては、それが伝えられている君主の唯一の政策のこともある。

この暗黒の時代にも、いくつかの救いがあったことは間違いない。アイルランドの修道士たちは信者たちからの過分な寄付を辞退することで名誉ある地位を確立したと言われている。またヨーロッパ中にいくつかの高水準な宣教的修道院が点在していた。また犯罪によって得た金銭を贖罪のために容易に受け入れたことを非難する伝説もいくつか挙げられる。しかし、このようなケースは非常にまれであり、数世紀の宗教史は司祭の強欲と平民の軽信の歴史に過ぎないのである。イングランドではローマ教皇の恒常的な要求に激しい憤慨が起こっていた。マシュー・パリス（*1200—1259、ベネディクト会修道士）の全てのページには、ここから生じた共感の離反が驚くほど明瞭に記録されている。それはイングランドと教会の最終的な決裂を準備し、予感させるものだった。一方アイルランドはピーターズ・ペンス（*教皇への支払い）を支払うという条件で、二人の教皇によってイングランドの侵略者に譲渡された。宗教改革前の一世紀、修道院の非道で悪名高い不道徳は、主にその大きな富に起因していた。エラスムス（*デジリウス、1466—1536）やウルリヒ・フォン・フッテン（*1488—1523）の著作が示すように、この不道徳は新しい運動に強い刺激を与え、免罪符の乱用はルターの反乱の直接的な原因となった。しかし、これらのことは、何世紀にもわたって詐欺が成功を収めた後によく到来したのである。無節操に行わ

れた宗教的テロリズムはその仕事を終え、キリスト教圏の主要な富は教会の金庫に入っていた。

実際、宗教的テロリズムは異教徒の改宗という偉大な仕事において果たした以上に、キリスト教の修道院的段階において重要な役割を果たしたのではないかと思われる。二、三人の慈愛豊かな神学者たちが地獄の刑罰の永遠性にかすかな疑問を呈したが、完全な失敗に終わった。キリスト教が導入される前に生きた異教徒の哲学者の来世について、また洗礼を受けずに死んだ幼児はすべての喜びを奪われただけなのか、それとも実際に終わりのない苦しみを受けるのかという問題については、若干の意見の相違があった。しかしカトリックの教義の主要な点について疑問の余地はなかった。教父の神学者たちによれば、人類が地上で耐えている不幸と苦しみは、来世で待ち受けているものの弱々しいイメージに過ぎず、また教会の力の及ばない全ての人々と、教会の囲いの中にいる人々の大部分は文字通りの不滅の炎の中で永遠の苦しみに陥ることを運命づけられている、というのが福音の啓示の一部だった。このような、それ自体で十分に忌まわしい教義を修道院の伝説は取り上げ、ぞっとするほど鮮明かつ細やかに展開した。ある日、聖マカリウスが砂漠を歩いていると、地面にドクロが落ちていたという。彼が杖で叩くと、それは話し始めた。それはキリスト教が世界に導入される前に生きていた異教の司祭の頭蓋骨であって、それゆえ地獄に落ちたのだ、と言った。天が地の上にあるように、地獄の炎もそこに落ちた魂の上に波のように高くそびえ立っている。呪われた魂たちは背中合わせに押しつけられていた。失われた司祭は聖人に、自分たちが顔を見合わ

せられるように祈ってくれと、たった一つの懇願をした。なぜなら目の前で永遠に苦しんでいる兄弟の顔を見られればかすかな慰めが得られかも知れないからである。聖グレゴリウスは、あるレリーフに描かれた貧しい未亡人に対するトラヤヌスの善行を見て、地獄にいる異教徒の皇帝を哀れみ、彼が解放されるよう祈ったという話によく知られている。彼はそういう祈りには全く前例がないことを告げられた。しかし、二度とこのような祈りを捧げないと約束すると、ついにその祈りは一部叶えられた。トラヤヌスは地獄から出ることはできなかったが、他の異教徒たちが耐えていた苦しみから解放されたのである。

修道士たちの努力が、たちまち地獄の苦しみを描いた完全な幻視の文学を生み出した。キリストの地獄への降臨を描いているとされる、聖書外典ニコデモによる福音書がこれを育てることに貢献した。また大聖グレゴリウスは最も信頼できる出処から細心の注意を払って編集したと公言する、より有名な著作で多くの幻視を語っているが、この著作にはグロテスクかつ故意の虚偽で汚されていないページはほとんどない、と自信を持って断言できる。人々は恍惚状態や仮死状態に陥って一時的に地獄に行くと言われていた。中でも聖人がこの話を聞いたとするステファンなる男は、間違っただけで死んだのだ。彼の魂が地獄の門に運ばれたとき、裁判官は用があるのは別のステファンであると宣言した。実体のない魂は地獄を詳しく調べた後、元の体に戻った。そして翌日、別のステファンが死んだことが分かった。火山は地獄の入り口だった。後に聖エウケリウス（*オルレアン

の、AD 687―743）が地獄に落ちたシャルル・マルテル（*AD 688―741、フランク王国宮宰、シャルルマーニュの祖父、教会の所有物を略奪した）の魂を幻視したように、ある隠者はアリアス派の皇帝テオドリックの魂がリパリ島（*シチリアの北の火山島）の下に運ばれるのを見た。シチリア島の火口は絶えず攪拌され、絶えず拡大していた。そして聖グレゴリウスの観察によれば、これはおそらく世界の破壊が差し迫っているせいであって、失われた魂の巨大な圧力によって、牢獄の入り口が不可避的に拡大しているからだった。

しかし聖グレゴリウスの「対話編」における地獄の一瞥は、後の修道士たちのそれに比べて貧弱で想像力に欠けているように思われる。七世紀の聖ファージ（*AD 597―650）を皮切りに、十二世紀のタンデール（*アイルランドの騎士）の幻視に至るまでの、修道士の長い一連の幻視は、失われた人々の状態を最も詳細に正確に描写していると公言されている。彼らが示したものほど恐ろしく、グロテスクで、具体的な来世の概念は想像できない。あるいは神の創造物に言語に絶する苦しみを与えるとされる存在に対して、これほど忌まわしい中傷がなされたことはない。悪魔は地獄の中央の燃える焼き網の上で赤熱の鎖で縛られていた。しかしその手は自由であり、その手で失われた魂を掴み、ブドウのように歯で押し潰し、そして呼吸とともにそれらを喉の奥の燃える洞窟に引きずり込んだ。赤熱の鉄の鉤を持つダイモーンは、魂を火と氷に交互に突っ込んだ。ある者たちは舌で吊るされ、ある者たちはバラバラに切り裂かれ、ある者たちは蛇に齧られ、ある者

たちは金床で叩き合わされて一つの塊になり、ある者たちは煮込まれて布で漉され、ある者たちは炎の手足を持つダイモンたちの抱擁に絡みつかれた。地上の火は地獄の火の似姿に過ぎないと言われた。後者はそれだけが本物といえるほど、計り知れないほどに強烈なものだった。熱を増すため、そして失われた者の悲惨さに耐え難い悪臭を加えるために火には硫黄が加えられた。一方、あの幻視によると、地獄の炎は他と違って光を発しないため暗闇の恐怖が苦痛の恐怖に加わったとのことである。深淵の上には細い橋がかかっていた。そしてそこから罪人の魂が下の暗闇に投げ込まれるのである。

このような恐怖のカタログは、今では教養ある人物に嫌悪、倦怠、軽蔑の感情しか引き起こさないが、何世紀の間、私たちにはほとんど想像もつかないほどのパニックと苦悩を作り出すことができたのである。近代科学の発見を先取りし、その高貴な才能によって、アダムの行いによって死がこの世にもたらされたという神学的概念を否定した異端者ペラギウスを例外として、キリスト教徒の間では、この世のすべての苦痛と死滅は罪に対する罰であると普遍的に信じられていた。世界の滅亡は間近に迫っていることが広く信じられていた。人々の心は近づいてくる破滅のイメージで満たされていた。そして目に見えるダイモンの無数の伝説が盛んに流布された。今もそうだが、当時もカトリックの司祭は来世の悲惨な絵で幼い子供たちの想像力を汚し、若い心に残酷なイメージを刷り込んで、当然ではあるが、それが消えないことを望んでいた。弱り切っている時や病気の

時、彼らの空想は興奮しすぎるあまり、恐ろしい存在が周囲を漂い、地獄そのものが犠牲者を迎え入れようと大きく口を開けているのを見たようである。聖グレゴリウスは、一見模範的で聖人のような敬虔さを持ちながら、秘かに肉食を習慣としていたある修道士が、死の床で恐ろしい竜が尾を体に巻き付け、開いたあごで彼の息を吸い取っているのを見た様子、父親の真似をして冒瀆的な言葉を繰り返すようになっていた五歳の少年が死の床で、彼を地獄に運ぼうと歓喜しながら待っているダイモンを見た様子について語っている。神学者のひねくれた目には、すべての自然は打ちひしがれた、寂しいものに見え、その輝きと美しさはまやかしと罪の観念以外を示唆しない。ある有名な伝説によれば、コマドリ（*胸の赤い鳥）は地獄にいた未受洗の幼児の魂に一滴の水を運ぶよう神に命じられ、その胸は炎を通り抜けたときに焼けたとのことである。夕方の静かで穏やかな時間に、農家の少年が沈みゆく太陽は地平線の下に沈むとき、なぜあんなに赤く輝くのかと尋ねた。答えは古いサクソンの教理問答の言葉だった。そのとき、太陽は地獄をのぞき込んでいるからである。

タンデールの幻視にこういう話がある。地獄の焼け野原を見つめ、苦しむ者たちが絶え間なく上げる絶望的な苦悩の叫びを聞いて彼の唇から泣き声が洩れた。「ああ、主よ！私がかれまでしばしば聞いてきた―地は神の慈悲に満ちているという―真実がどこにあるのでしょうか？」異教徒の論者たちが神々に時折嫉妬したり、官能的になったりするという弱点を与えたこと―一言で言えば神々を

様々な性格や情欲を持つ人間のよう表現したこと―に心から憤慨していた人々が、人間の本性が持ちうる最大限の野蛮さを確実に凌駕する残虐性を自らの神に平気で与えているという観察は、実際のところ道徳史上において最も興味深いことの一つである。ネロやファラリス（*BC7世紀―554、シチリア南部アクラガスの僭主、真鍮でつくった牡牛像の中に人を閉じ込めて焼き殺す拷問、ファラリスの雄牛で知られる）でさえも、火の拷問に耐える何百万人もの人々を満足していつまでも見ていられなかっただろう―その拷問のほとんどは、自分ではなく先祖が犯した罪のため、あるいは歴史や形而上学の複雑な問題で間違った結論を支持したためのものであったのである。この教えを真実と思わない人々にとって、それは例外なく、道徳の根底を覆し、それをすぐに理解して喜んで受け入れる人間を野蛮な怪物に変えてしまう、世界の宗教史の中で最も忌まわしいものに見えるはずである。中世の論者のうち、最も著名な二、三人を挙げるならそのうちの一人は間違いないペトルス・ロンバルドウス（*1100―1160）で、その「命題集」は今ではほとんど読まれていないと思うが、長い間ヨーロッパのすべての神学文献の基礎になっていた。大アルベルトゥス（*1200―1280）、聖ボナヴェントゥーラ、聖トマス・アキナスなど、四千人以上の神学者がこの著作の注釈書を書いたと言われている。また、この作品はかつての評判にふさわしくないものではない。穏やかに、鮮明に、論理的に、精緻に、そして簡潔に、カトリックの神学と倫理の全系統を解説し、そのさまざまな部分の依存関係を明らかにすると著者は宣言している。その立場と義務を説明した上で、彼は人間の来世について考察する。彼は天国と地獄の住人は、審判の日

まで絶えず互いに顔を合わせると主張する。しかし、その後は天国の住民だけが反対側の世界の人々を見ることができるのである。そして彼はこの偉大な著作を次のような印象的な一節で締めくくっている。「最後に、罪人の刑罰を見ることが祝福された者の栄光が損なわれるのか、それとも至福が増すのかを検討しなければならぬ。これに関してグレゴリウスは、失われた者の罰を見ることは公正な者の至福を曇らせることはないと言っている。なぜなら、それがいかなる同情も伴わないとき、幸福を減じることがありえないからである。そして正しい人には自分の喜びで十分かもしれないが、彼らが恵みによって免れた悪人の苦しみを見ることはより大きな栄光になるだろう……。選ばれた人々は実際にその場に行くのではなく、知性と鮮明な幻視によって不信心者たちの拷問を見る。しかしそれによって悲嘆することはなく、彼らの心は不信心者たちの言葉にもできない苦悶を見つめながら喜びで満たされ、自らの自由を感謝するようになる。例えばイザヤは不信心者の苦しみと、それを見る正しい者の喜びを次のように描写している『真の選民は出て行って、主に背いた者たちの死骸を見る。それを食べるうじ虫は死なない。(*以上がイザヤ書66章24節、以下はイザヤ書には書かれていない)』そしてその光景はすべての生きとし生けるものを、そして選民を満足させるだろう。正しい人はこの復讐を喜ぶだろう。』

天国と地獄の幻視へのこの情熱は、実は五世紀に猛威を振るった教義の定義への情熱の自然な延長線上にあったのである。神学に関して考えうるいかなる問題も未解決のままにできない好奇心を

持った人々が、死者の境遇をそれに見合った正確さで表現しようと努めたのは自然なことだった。しかしその多くは孤独で禁欲的な生活による幻覚であり、さらに多かったのは意図的な虚偽だった。人々が極度のパニック状態を長く続けることは不可能である。そして迷信はすぐにその恐怖を和らげる方法を発見した。もし悪意あるダイモンが信者の周りを漂い、地獄の顎が彼を飲み込むために開いていたとしても、一方で彼は無数の天使によって守られていたのである。教会や修道院への惜しみない寄付は常に彼に聖人の助力を与え、司祭の力はその賢明さが明らかにした危険から彼を保護することができた。天使たちがある死者の善行と悪行を量ったところ、圧倒的に悪行の方が多かった。しかし聖ラウレンティウス教会（*AD25—258、殉教者、ローマには彼を記念する教会が6つある）の司祭がやってきて、死者が祭壇に捧げた重い金の聖杯を前者の中に投げ入れ、天秤をひっくり返した。ダゴベルト（*1世、フランク王、AD603—639、サンノドニ修道院を創立）は、聖ディオニュシウス（*パリの、AD?—250、殉教者、サンノドニ）、聖マウリティウス（*AD?—287、エジプトの軍人、ガリアで殉教）、聖マルティヌスによって、まさにダイモーンの腕の中から救い出されたのである。シャルルマーニュは、彼が建てた修道院が彼の悪行を上回ったため救済された。また大罪を犯して死んだ者は守護聖人の願いによってその罪を償うために生き返った。聖遺物を集め、聖人の庇護を受け、修道院に寄付し、教会を建てるのが宗教の主要な部分になった。見えない世界の恐怖が展開されればされるほど、人々は迷信の慰めに安らぎを求めようになった。

宗教を具現化する習慣がどの程度まで行われていたかは、中世の文献そのものを調べた者でなければ十分に理解することはできない。こうした文献を精読する研究者は迷信の存在よりも、その異常なまでの増殖、つまり聖人、修道院、聖遺物によってもたらされた何千ものグロテスクな奇跡が徹底的に力説され、広く信じられていたことに驚く。キリスト教は古代の異教とまったく同様の、多神教的で偶像崇拜的なものになっていた。知性の未発達、半分改宗した野蛮人の宗教的感覚、聖職者の利益、修道院の社会的重要性、そしておそらく野蛮な部族の刑罰制度で一般的だったほとんどすべての罪を金銭で償う習慣がそれぞれ地獄への恐怖が生み出すパニックと個別に結びついて、人々を同じ方向に駆り立てた。そして聖職者の富と力は他のすべての階級の影が薄くなるまでに増大した。よく言われているように、彼らは世界を動かすことができるアルキメデスの支点を来世に見つけたのである。永遠に存続するためにこれほど見事に適したシステムはいまだかつてなかった。教会はキリスト教圏のあらゆる反対勢力を押しつぶし、あるいは沈黙させた。教会は教育のすべての部門とすべての場所を絶対的に支配していた。教会はヨーロッパのあらゆる思索的な知識と芸術を吸収していた。富と地位と軍事力を所有し、あるいは支配していた。その教えは恐怖に陥り、苦悩する人類をすべて速やかにその手に落ちるよう仕向けるものだった。それは自らの権力を拡大し永続させるのに見事に相応しい制度の広大なネットワークでヨーロッパを覆っていた。これに加えて、その砦へのすべての接近を完璧な技術で守っていた。あらゆる疑念は罪の烙印を押された。ま

たその信条の否定に至るまでには、必ずや長い疑いの道のりがあったに違いない。すべての探求の道は、恐ろしい苦しみと意地の悪いダイモンのイメージで塗りつぶされた。信仰者が信仰の何らかの項目に疑いを持ち始めるやいなや、あるいは教会の儀式の効力に対する確信を失うやいなや、彼は人間のヒロイズムでは対抗できない、どんな想像力も狼狽せずはられないような運命に脅かされるのである。

無知と迷信の時代に、あえて教会の束縛から逃れ、現在私たちが享受している自由特権の基礎を築いた勇者たちが受けたあらゆる苦しみの中で、おそらく最も痛烈でありながら最も実感されていないのはこの苦しみである。私たちの想像力はカタリ派やサン・バルテルミのような巨大な虐殺を生き生きと再現することができる。拷問台や拷問ブーツ、地下牢、絞首台、時間をかけた火炙りの拷問も想像できる。この大胆な探求者が、最も愛していた人たちに捨てられ、人々に憎まれ、自分の名前に悪意のある中傷を山のように積み上げられた苦悩を、私たちは完璧ではないにしても推し量ることができる。しかし自分の魂の小部屋の中の孤独な思索のときに、彼はさらに深刻な苦しみの要素を見出したに違いない。先祖代々続いて来た見解を放棄することを最も致命的な犯罪とみなし、それをダイモンの偽りの扇動によるものと考えるように幼いころから教えられ、疑念を持つたまま死ねば永遠の拷問を受けると言い聞かされてきた、彼の想像力は最も恐ろしい苦悩のイメージに飽和され、彼は自分が世の中でたった一人、困難と疑念と闘っていることに気づいたのである。

彼が逃げ込み、そこで多くの人々が心の一致を公言している中で、教会の破門を忘れることができる對抗的宗派は存在しなかった。死を人間の罪、苦しみを神の復讐、すべての自然現象を神の介入の個別的作用とする神学的理論を否定した自然科学と―多くの手の込んだ迷信が規律のない想像力の正常な作用であることを突き止め、宗教的進歩の連続する段階を説明し定義して、多くの堂々たる信仰の構造体を払いのけた歴史批判は、両方ともまだ存在しなかった。空に輝く彗星も、地を覆う疫病も、すべて神学者の暗い脅しを裏付けるもののように見えていた。盲目的で忌まわしい軽信は第一の義務と説き聞かされ、あらゆるテーマ、あらゆる形において示され、彼が呼吸する大気に充満していた。このような時代に真摯な探求者が悪戦苦闘しただろう障害を、誰が正しく推し量ることができようか？あらゆる疑念が地獄行きとされる中で、敵対する議論が代わる代わる彼の判断力に影響を与える長い年月、彼が耐え忍ばなければならなかった秘かな苦悩を誰が想像できるだろうか？そして彼の心が確信を持ったときでさえ、彼の想像力はしばしば以前の信念に立ち戻る。私たちの思考は若い頃に形成された経路を、後にも自然かつ無意識に流れるものである。支配的な判断力はその支配を緩めた瞬間、古い知的習慣は再びその支配権を取り戻す。そして想像力の上に描かれたイメージは、その根拠になった知的命題が完全に放棄された後でも生き続けるのである。誰にでも覚えがあるだろうが、衰弱した時、病気の時、眠たい時、熱っぽい時、不安な時、心が流れの上に受け身で浮かんでいる時には、理性が追い払った幻影がしばしば現れ、彼の魂は古代の専制政治の苦さを味わったに違いない。

トルバドゥール（*中世の南フランス語抒情詩の詩人、作曲家、歌手）が人類に与えた多くの利益の中でも最大のものの一つは、修道士たちがそれによって常に人類を恐怖に陥れてきた地獄の幻影に嘲笑の洪水を浴びせ、それを完全に信じられないものとし、ほとんど押さえ込んでしまったことだった。しかし、いずれにしてもカトリックの精神が異教の文献や、イスラム教の庇護の下で成長した独立的思想家たちの助けなしに、それを縛っていた鎖を解くことができたかどうかは十分に疑問だろう。世俗的な利益や感覚を増大させた町々の発展、学問の復興、十字軍の遠征の後の聖職者階級の没落、そしてついに宗教改革によるキリスト教圏の崩壊によって、教会の教義は次第に損なわれた。それは信じられなくなる前に実行されなくなったのである。しかし聖職者の富を増大させ、教会への寄付を宗教の主要な部分とする上でさらに大きな力を揮った別の教義が存在する。それはもちろん、煉獄の教義である。

現代のある著名な中世の弁証者は、この教義に特別かつ非常に特徴的な賛辞を贈っている。彼が言うところによると、あらゆる様々な罪に依じて段階的に限定的な罰を用意し、すぐに天国に行けるほどの徳がなく、地獄に行くほど悪いと思えない人々に適応することによって、それは永罰の教義が持つ極端なテロリズムに対する不可欠な矯正手段になるからである。この理論は現代の影響力がなくもない一群の論者たちに極めて人気が高い。しかし中世におけるこの教義の実際の運用を調

べた人々の目には、ほとんどグロテスクなものとしか映らないと私は思う。教会の実際の教えによれば、教会の聖職者が自由に行使できる罪滅ぼしの力は非常に大きく、そのため教会の教義を信じ、最期のときにその儀式によって強化されて死んだ者は、地獄の恐怖におびえる理由は何もなかった。一方、教会の外側で死んだ者は煉獄に入ることを期待できなかった。この煉獄は完全に真の信者のために作られたものだった。それはどんなに悪質な犯罪をも赦し、最悪の人間をも地獄から解放する教会の権力が全く疑われなかった時代に主に説かれたのである。またそれが慰めという観点で見られたことは決してなかった。実際、一般に知られている煉獄の描写は非常に恐ろしいもので、理性が容易に認識できたとしても、想像力がこれと地獄に堕ちた状態との違いを完全に理解できたかどうかは疑問だろう。最も著名な神学者によると煉獄の火は―文字どおりの火であり、ときに永遠に燃え続けるともいわれる―地獄の火に似ている。説教壇の長口舌では、煉獄で救われた魂の苦しみは、地上で最も惨めな人間が耐えたどんな苦しみよりも計り知れないほど大きい、と説かれた。中世の粗野な芸術家たちは全精力を傾けて、炎に包まれてのたうち回る死者を描き出した。無数の幻視は死者が受けるさまざまな拷問をぞっとするほど細かく描写していた。そして通常、修道士は自分が見たとするものについての説明を特徴的な教訓で締めくくった。曰く、人はその苦しみを理解しさえすれば、友をそのような境遇から救うためのいかなる犠牲をも辞さない。煉獄には十分の一献金を納めるのが遅い者のために特別な場所が用意されていると言われていた。聖グレゴリウスは他の点では立派な徳があった人物の不思議な話を語っている。彼は教皇の選挙の際に間違った候

補者を支持し、当選した候補者に従うことを全く拒みはしなかったが、その選択は賢明ではなかったという意見を密かに持ち続けていた。そのため彼は死後しばらくの間、煮え湯の中に入れられた。その他の側面がどうであれ、この教えには手段を目的に適うものにする見事な技量が認められ、それはほとんど芸術的な美しさにまで達していることを認めないわけにはいかない。不幸な未亡人の苦悩と孤独の始まりの沈鬱の時に聖職者を送り込み、彼女にとって世界の他のすべてのものより大切な人が今、地獄の火の中で燃えていて、救われるには司祭にお金を贈るしかないと伝えさせるシステムは、その類のものとして確かに並外れた価値がなかったわけではない。

ここまで述べてきたような宗教的変容が主に生じた、ローマ帝国の滅亡からシャルルマーニュの時代までの西ヨーロッパ社会の道徳的状況を説明しようとすれば、いくつかの手ごわい困難に直面することになる。第一に資料が非常に乏しい。フレデガリウスの不十分な年代記が完結した西暦642年から、その一世紀後のアインハルト（*AD775—840）によるシャルルマーニュの伝記までの間に、信頼できる歴史はほとんど存在しない。そして私たちが得られるのは修道院の年代記、聖人の生涯、公会議の布告などのわずかな、しかも非常に疑わしい知識だけである。世俗的な文学はほとんど消滅していた。そして（*歴史を書き残すという）後世への思いもこの世から消えてしまったようだった。しかし、七世紀前半とその前の二世紀については、トゥールのグレゴリウスとフレデガリウスから多くの情報を得ることができる。その退屈で胸が悪くなるようなページは、

数世紀にわたって存在した民族の対立と政治の分裂をかなり明確に説明している。イタリアでは、旧帝国の伝統と習慣がある程度その支配力を取り戻していた。しかしガリアでは、その土着の活力を文明によって骨抜きにされ、知識によって洗練されることがなかった野蛮人の中に教会が存続した。トゥールのグレゴリウスが描き出すのは、ほとんど絶対的な無政府状態だった社会の姿である。何の決まった方針もない、際限のない、世界に何の印象も残さない暴力と詐欺行為の単調な記事にその心は疲れている。フレデグンド（*540—597）とブルンヒルド（*AD543—613）という二人の王妃は、その激しい野心と不屈の精神、大勢の人々の心を魅了したこと、そしてその犯罪の数と残虐さにおいて、他の人々より際立っていた。すべての階級がほぼ等しく悪に染まっていたようである。カウティヌスという司教が酔っぱらうと、テールから引き離すために四人の男たちが必要だったと言われている。また彼は私有財産の引き渡しを拒んだある司祭を故意に生き埋めにするよう命じた。そして犠牲者が幸運にも埋葬場所から逃げ出し、その罪を暴露しても譴責以上の罰を受けなかった。最悪の君主は聖職者の中に媚びへつらう者や手先になる者を見出した。フレデグンドは二人の教会書記をキルデベルト暗殺のために送り出し、もう一人の教会書記をブルンヒルド暗殺のために送り出した。彼女はルーアンの司教を祭壇で暗殺させた―共犯者は別の司教と大助祭だった。またエギディウスという別の司教は彼女の最も熱心な手先であり味方だった。教皇大聖グレゴリウスはブルンヒルドに熱心に媚びへつらった。グンドバト（*AD473—516、ブルゴニーユ王）は三人の兄弟を殺したが、ヴィエンヌ司教聖アウイトウス（*AD450—51

9)はその行いを少しも非難せず、ライバルの排除は民の幸福を守るといふ神の御心に適うことだったと断言して慰めた。司教座は悪名高い放蕩者、あるいは貪欲な守銭奴に占められていた。司祭たちは時折「腹一杯で、ワインに酔って」聖なる秘跡を行った。彼らはすでに武器を持ち始めており、六世紀には二人の司教が自らの手で多くの敵を殺したとグレゴリウスは語っている。国内に残虐な悲劇のない治世はほとんどなかった。一件の殺人も犯していない君主はほとんどいなかった。おそらく身体切断の刑罰や長時間の苦痛を伴う死刑がこれほど一般的だったことは他にないだろう。その他に、司教が茅のベッドに乗せられて遠くの流刑地に追放されたり、王が反抗的な息子とその妻子と一緒に焼いたり、その美しさが夫の情欲を刺激しないように王妃が連れ子の娘を溺死させたり、別の王妃が自分自身の手で娘を絞め殺そうとしたり、ある修道院長が人妻と姦通するために貧しい男を家から追い出し、行為中に二人とも殺害されたり、またある王子は自分の奴隷を火で拷問することを常としていたが、そのうちの二人が自分の許可なく結婚したので生き埋めにしたり、ある司教の妻はその他の罪に加えて、体の最も敏感な部分に赤熱した鉄を当てて男性器を切断し、女性を拷問することを常としたり、大変な数の人々が耳や鼻をもがれ、何日も拷問されたあげく、生きざまま焼かれたり、車輪に括りつけられてゆっくりと斃り殺されたりした残虐な話が残っている。ブルンヒルドはその長く、ある面では偉大な、しかし罪深い生涯の終わりに、クロタール（*1世、AD500―561）の手に落ちた。そして老王妃は三日間様々な拷問を受けた後、軍勢に嘲笑させるためにラクダに乗せて連れ出され、最後は奔馬の後ろに括りつけられ、その疾走によってバラ

バラにされたのである。

しかし、これはある意味で極めて宗教的な時代だった。すべての文学は聖なるものとされた。あらゆる種類の異端は急速に消滅した。司祭と修道士は巨大な権力を獲得し、その富は異常に増大していた。何人かの君主は修道生活をするために自らその王位を捨てた。七世紀は八世紀とともに暗黒時代の最も暗い時期であるが、殉教者を別にすれば、聖人伝研究において他のどの世紀よりも多くの聖人を輩出したことで有名である。

歴史家による出来事の捉え方も極めて特徴的だった。私たちの主な出典であるトゥールのグレゴリウスは大変高名な司教であり、最も純粋な敬虔さと非常に強い愛情を持った人物だった。彼は自分の著作を「聖人の徳と国家の災難の記録」と呼んでいる。研究者が異教徒の歴史家の著作から彼のそれに目を移すなら、彼が教会の出来事を極度に重視していることよりも、その宗教的な見地から、すべての世俗的な出来事は特別な神意によって決定され指図されている、とする彼の一貫した態度に驚くだろう。さらに正統派と異端の違いに関する問題では、時に彼の倫理に最も特異な歪曲が見られることがある。その中で最も印象的な例は正統派の偉大な代表者であるクロウヴィス（*1世、AD 466―511）の生涯を描いたものだろう。クロウヴィスの改宗の経緯を述べた後、グレゴリウスはこの首領が、その教義の最初の成果としてガリアの一部がアリウス派の君主に支配

されているのを見て嘆いたこと、そこでその領土を侵略し占有しようと決意したこと、称賛すべき敬虔さによって兵士に聖マルティヌスの土地（*トゥール郊外の聖マルティヌス教会）を横断する際にはあらゆる荒廃を避けるよう命じたこと、またいくつかの奇跡によってこの遠征に対する神の承認が証明されていることについて、あからさまに称賛しつつ語っている。このキリスト教徒によって行われた最初の宗教的な戦争は完全に成功した。そしてクロウヴェイスはその野心を新しい分野に向けるようになる。クロウヴェイスはアリウス派に対する遠征において、親戚のリプリア（*ライン河畔）のフランク人の老弱な王シギベルト（*同名のクロウヴェイスの子孫たちとは別人）は忠実な同盟者だった。クロウヴェイスはシギベルトの息子に、父親の死による利益を巧みに仄めかした。息子は悟った。シギベルトは殺された。クロウヴェイスはこの親殺しのもとに使者を送って温かい友情を誓ったが、機会があり次第彼を殺すよう密命した。この命令は実行され、王国は頭を失ったまま放置された。クロウヴェイスはシギベルトの首都ケルンへと進軍した。彼は民衆を集め、この地で起こった悲劇に戦慄していること、自分はそれについて完全に潔白であることを厳粛に表明した。そして目下支配者を持たない彼らに、自分の保護下に入るよう提案した。この提案は喝采とともに受け入れられた。戦士たちは彼を王に選んだ。そして司教歴史家はこう述べている「クロウヴェイスはシギベルトの財宝と領地を受け取り、自分のものにした。神はいつの日も彼の敵をその手に渡され、彼の王国を拡大された。彼が主の前に正しい心で歩み、主の目に適うことを行ったからである。」しかし彼の野望はまだ終わっていないかった。彼は次々と遠征し、ほとんどが自分の親戚だ

った正当な君主たちを襲い、倒し、捕らえ、殺害してガリア全土を自分の笏の下に収めようとした。外からの危険から身を守るために妻と子を除くすべての親族を殺した後、彼はこの逆境を助けてくれる親族はこの世に一人も残っていない、と廷臣たちの前で孤独を嘆いたとのことである。しかし、これは自分の知らない王位継承権保有者がまだいるかどうかを知るための王の策略だった、とグレゴリウスは断言している。まもなく彼は天寿を全うして荣誉に満ちた生涯を終え、自ら建てた大聖堂（*サン・ドニ大聖堂）に葬られた。

これらのことをすべて一貫して淡々と語った後、トゥールのグレゴリウスはこの歴史から教訓を得るため、読者に一旦立ち止まる許可を求める。それは三位一体に関して厳密な正統派の意見を持つ人々の利益のために、神の御心が万物を導いた素晴らしい御業である。アブラハム、ヤコブ、モーゼ、アロン、ダビデ、この問題について正しい教義を持っていたことを窺わせる、非常に成功したすべての人々について簡単に言及した後、彼はより近い時代に話を移す。「不信心な宗派の創始者アリウスは内臓が抜け落ちて、地獄の炎に包まれた。しかし完全な三位一体の祝福された擁護者ヒラリー（*ポワティエの、AD 310-367）はそのために追放されたこともあったが、天国に入った。クローヴィス王は三位一体の信仰を告白し、その助けによって異端者を打ち砕き、ガリア全土に支配権を拡大した。三位一体を否定したアラリックは王国と臣下を失い、さらに悪いことに、来世で罰せられた。」

この不幸な時代の道徳的判断が迷信によって歪められていた度合いについて、これほど驚くべきものではなかったとしても、他の例を挙げることは容易だろう。民衆にとって教義の正統性や断食の問題は、現在私たちが根本的な善悪の原理と呼ぶものよりも計り知れないほどに重要なものだった。シャルルマーニュの法律とサクソン人の法律では四旬節（*復活祭前40日の食事の節制と祝宴の自粛期間）に肉を食べた者は、絶対的にその必要があったことを司祭が認めない限り、死刑に処されることになっていた。この時代の道徳的な熱狂は、主に市民や家庭の義務を放棄し、自ら修道院に閉じこもり、長期にわたる過度の断食で痩せ細って体力を消耗させることに人々を駆り立てた。しかしこのような迷信の真っ只中にあっても、ある点で宗教的な力が良い働きをしていたことに疑いの余地はない。いたるところ創設された修道会は、敵に迫害された大勢の人々の安全な避難所になり、当時の粗野な軍事力への貴重な均衡勢力になり、人格を多少なりとも和らげずには置かない宗教的なタイプに人々の想像力を親しませ、ほとんどすべての平和的な労働の先頭に立ったのである。ある有名な聖人の聖性と奇跡の報告に感激した人々が、聖人に会うための巡礼をした。そのとき聖人が厚い靴を履いて、肩に大鎌を担いだ農民の粗末な装いで農民の労働を監督したり、小さな屋根裏部屋に座ってランプを修理したりしているのを見て、その会見に他のどんな利益があったにせよ、巡礼者たちは労働の尊さをますます感じて帰らないわけにはいかなかった。教会の聖域や地所の不可侵と、それを破った者に下った数々の神罰の伝説によって証明される、その確立を目

指した聖職者の熱意は、この時代には教会の利益だったと同時に世界の利益でもあったと思われる。祝祭日に与えられた大いなる尊厳は奴隷階級にとっても大事な恩恵だった。復活を記念して、また宗教的行事の周期として、週の最初の日を祝日にすることは教会の最も古い時代から始まっている。キリスト教の祝日とユダヤ教の安息日は注意深く区別され、十六世紀の終わりまで混同されることはなかったようである。ユダヤ教の律法がまだ有効と思っていた一部のユダヤ人改宗者は両方の日を守っていた。しかし全体的にはキリスト教の祝日だけが守られていた。そして聖パウロが最もはっきりと断言しているように、ユダヤ教の安息日の義務はもはやキリスト教徒に課せられてはいなかった。日曜日を遵守する根拠は、時間の一部を敬虔な行いに捧げることの明らかな妥当さと便宜、使徒時代にまで遡ることができる日曜日の聖別の伝統、そして信徒が神聖とする特定の時期を教会が指定する権利だった。キリスト教が帝国で優位を獲得したときの、この問題に関する政策をコンスタンティヌスの一本の法律が明らかにしている。それはいかなる宗教的な動機にも直接言及することなく、「太陽の日」には、天候に左右されるため合理的に延期することができないと考えられていた農業以外の、いかなる奴隷労働も行ってはならない、とするものだった。テオドシウスはさらに一歩進んで、その日の公共の見世物を禁止した。ローマ帝国の崩壊直後の数世紀、聖職者たちは称賛に値する熱意とともに、日曜日と教会の他の主な祝日の労働の禁止に取り組んだ。すべての日曜日の労働を禁止する法律がいくつも制定された。そしてシャルルマーニュの法令はこれを繰り返して禁止した。いくつかの公会議がこのテーマについて布告を出し、この罪を犯したために病気になる

ったり死んだりした人々の奇跡的な伝説がいくつも流布された。宗教の道徳的側面は大きく劣化し、忘れ去られていったが、すでに述べたように一つの重要な例外があった。慈善は教会の教えの迷信的な部分と非常によく織り交ぜられていたため、最も暗い時代にも成長し、繁栄し続けていた。王妃バルチルド（*AD 626—680、クローヴィス2世の妃）の行いについては、修道院への寄付と、奴隷や捕虜を買い取って、解放したり、改宗させて修道士にしたりしたという慈善以外は何も知られていない。司教たちの多くは胸の悪くなるような恥ずべき悪漢だったが、虐げられた人々を保護し、捕虜のために執り成し、逃亡者に聖域を開放するという、昔ながらの司教の使命に熱心に取り組んだ人々も常にいた。六世紀末のパリの司教、聖ゲルマヌス（*AD 496—576）は身代金の支払いによる捕虜の解放に熱心だったことで特に有名である。聖人の死から埋葬までの間、虜囚たちは聖人に助けを求めたと言われている。聖人の体は奇跡によって重くなり、彼らが解放されるまでは墓場まで運ぶことができなかった。すべての世俗的な学問が完全に消滅し、歴史上に並びない無知、偽り、軽信が支配する中で、禁欲主義者の周りには膨大な伝説文学が群れをなして育った。そして聖人の生涯には、非常に多くのグロテスクで、幼稚で、不道徳でさえある伝説の中に、いくつかの最も純粹で最も感動的な宗教詩の断片が存在する。

しかし、いま考察中の時代を後世に対して免罪するものは主にその宣教的な働きである。当初パレスチナとイタリアから始まった宣教師の流れが、西方からも始まった。アイルランドの修道院は

この分野で最も早く、そしておそらく最も多くの働き手を輩出した。イングランド北部の大部分は、リンデイスファーン（*イングランド北部東岸の島）のアイerland人修道士によって改宗させられた。ガリア、ドイツ、イタリアにおける聖コロンバヌス（*AD543―615）の名声は、一時は聖ベネディクトゥスのそれに匹敵するほどだった。彼がリユクスイユ（*フランス東部）に設立した学校は中世の宣教師のための偉大な神学校となり、ボツピオ（*北イタリア）に設立した修道院は今世紀まで続いている。アイerlandの宣教師聖ガルが改宗させたスイスの一地方にはその名前（*北東部ザンクト・ガレン）が残っている。他にもアイerland人宣教師たちは群れをなしてドイツの最果ての森にまで入って行った。六世紀半ばに聖コロンバによって始められたこの運動は、約一世紀後にイングランドとガリアに伝わった。八世紀の初めにはアングロサクソンの聖ボニファティウス（*AD675―754）が偉大な指導者になってドイツにキリスト教を広く普及させ、教会の中の道徳的に最良のものを全て引き寄せたような激しい熱意を呼び起こし、同時に統制した。ヨーロッパが道徳的、知的、政治的に極度に落ち込んでいた約三世紀の間、修道院から絶え間なく輩出された宣教師たちがロンバルディアからスウェーデンまで、あらゆる土地に十字架の知識と将来の文明の種を広めたのである。

しかし全体として見るなら、帝国の解体からシャルルマーニュの治世までの間の迷信と悪徳は、いくらか誇張してもしすぎることはないだろう。しかし、その混沌の中には新しい社会的要素を見出

すことができる。そして最終的に十字軍、封建制度、騎士道に結実した動きの萌芽をすでに観察することができよう。本書が対象とするのは専らこの動きの道徳的側面である。この章の残りの部分では、その始まりの段階を描写し、説明することに努めようと思う。この動きは―キリスト教と軍事精神の融合、および世俗的な階級に対する畏敬の増大という―一つの部分から成っていた。

ギリシャには古くから、神殿において神々に最も喜ばれる捧げものは戦いで敵から奪った戦利品である、という格言があった。当初、キリスト教はこうした軍事的宗教に極度に否定的だった。教会内にどんな武器も持ち込んでほならないこと、また最も正しい戦争から帰還した兵士であっても、懺悔と清めの期間を経なければ聖体拝領を認めないことが初期の規則だったことは既に述べた。アレクサンドリアのクレメンズ、テルトゥリアヌス、オリゲネス、ラクタンティウス、バシレイオスを指導者とする有力な党派は、改宗した者にとって、全ての戦争は不義であると主張した。この見解は有名なマクシミアヌス（*AD274―295）という殉教者を生んだ。彼は兵士として登録されたときに、自分はキリスト教徒なので戦うことはできない、と宣言したことを理由としてディオクレティアヌスの下で死刑になったのである。この教義が大きく広がったことがディオクレティアヌスの迫害の一因になった、というのはいかに妥当な見方だろう。ケルススはこの教義を非難した。オリゲネスはこれに答えて、キリスト教は軍務と相容れないという非難を率直に受け入れた。しかし彼はキリスト教徒の祈りはローマ軍団の剣よりも有効だったと主張している。同時に、

非常に早い時期から多くのキリスト教徒が軍隊に入っていたこと、そして彼らが教会から絶縁されなかったことに疑いの余地はない。マルクス・アウレリウスの治世の雷鳴軍団の伝説（*キリスト教徒の軍団が窮地に陥ったとき、神に祈ると雷雨が起こって助かった）はそれが奇跡と言えるかどうかは別として、事実を立証している。そしてテルトゥリアヌもこの事件をはっきりと明言している。ディオクレティアヌス帝の迫害の最初の猛威はキリスト教徒の兵士を襲った。そしてコンスタンティヌスの時代には軍隊のかなりの部分がキリスト教徒だったようである。コンスタンティヌスのアルル教会会議は宗教的な動機で軍旗を捨てた兵士を非難した。そして聖アウグスティヌスも、自らの大きな影響力を天秤の同じ側に置いた。しかしその職業は罪と見なされない場合にも、強い反対を受けた。異教世界の想像力が作り出し、彼らの最も純粋な道徳的情熱が自然に志した最高の卓越性の理想やタイプは愛国者と軍人だった。カトリックの伝説における理想は禁欲主義者であり、その第一の義務はすべての世俗的感覚や絆を捨てることだった。ほとんどの家庭内で二つの原理の対立が見られた。そして四世紀から五世紀にかけての道徳的な空気の中で、純粋な熱意を持った若者は皆、ほぼ確実に兵士から修道士へと転向した。聖マルティヌス、聖フェレオルス（*AD?—305、南仏ロルグの守護聖人）、聖タラカス（*詳細不明）、聖ヴィクトリシウス（*ルーアンのAD330—407）は宗教的動機のために軍隊を捨てた人々だった。ウルフィラは聖書をゴート語に翻訳した際、蛮族の好戦的性格を煽る恐れがあるとして、列王記の中の四巻を除いたと言われている。

軍事的職業と宗教の友好関係に貢献した第一の力は、一般に信じられていた、物事を支配する神意の教義だった。国の大惨事はすべて神罰であって、ほとんどが指導者たちの悪徳か宗教上の誤りから生じるものである、そして現世の繁栄は正統性と徳の報酬である、と広く説かれていた。そのため民衆や君主の運命を左右する大きな戦いは神意が介入する特別な機会と考えられていた。そして軍事的成功の期待は改宗の最も頻繁な動機の一つになった。コンスタンティヌスの改宗は公言された。そしてクローヴィスの改宗はおそらく、実際に決定的な瞬間に神の介入によって勝利を得た、という確信によるものだったのだろう。蛮族にキリスト教を普及させる上で、この類の考え方がいかに大きな役割を果たしたかについては既に言及した。コンスタンティヌスの前にミルウィウス橋の勝利を告げる銘文の入った不思議な十字架が現れたと言われたとき、同じ聖なるシンボルが神聖なモノグラム（*XとPを重ね合わせたもの）で飾られてローマ軍に先立てて運ばれたとき、ヘレナ（*AD246―330、コンスタンティヌスの母）がエルサレムから持ち帰った十字架の釘を皇帝が兜や軍馬の轡に打ち直したとき、かつての教会の平和な精神に重大な変化が起こっていたことは明らかである。

多くの状況がそれを加速させた。ワルハラ門は打ち負かした敵の血に染まって現れた戦士には常に開かれている、と教えられてきた北方民族はキリスト教に改宗した。しかし彼らは古い感覚を

新しい信仰に持ち込んだ。帝国が崩壊した後、多くの民族は対立し、全ての政府は麻痺したため、至る所で暴力が支配するようになった。そして小さな戦いが絶え間なく続いた。君主が有力な族長に与える「恩賞」に付随する軍事的義務は、軍務と階級の観念をそれ以前よりもさらに密接に結びつけた。そしてそれは人々の目に二倍尊いものと映ったのである。多くの司教や修道院長は、その時代や人格の乱れゆえに、また後には大封建領主としての立場ゆえに、その追隨者たちを率いて戦うことに慣れていた。この習慣はシャルルマーニュによって禁止されたものの、アジャンクールの戦い（*1415年、大司教たちも参戦していた）のように、後の時代にも見ることができ。

こうしてキリスト教が戦争に着せていた汚名は、徐々に拭い去られていった。同時に教会は全体としては平和的な影響力を持ち続けた。戦争は聖別されるというよりもむしろ容認される存在だった。数人の個別の聖職者を例外として、教会は戦争を拡大したり助長したりしたことはなかった。初期教会のほとんどクエーカー教徒同様の教義が十字軍の本質的な軍事キリスト教へと移行したのは、主に別の原因―イスラム教の恐怖と前例―のせいだった。

長きにわたってその影響力でキリスト教に肩を並べてきたこの偉大な宗教は、実際キリスト教界に最も深く、最も正当なパニックを巻き起こした。それは、絵や彫像で想像力を手助けすることもなく、精巧な聖職者組織もなく、無知で野蛮な人々に最も純粹な一神教を説き、全体として極めて

高く尊い道德体系を教えて、急速に広まり、他の宗教が全く匹敵し得ないほどまでに信者の心を支配するようになったのである。それは大多数の人間の性格にとっておそらく最も強い推進力となり得る、信仰による救済の教義をキリスト教から借用した。またその官能的な天国の魅力と具体的な地獄の恐怖を非常に細やかに描写し、その二者択一が人々の粗野な想像力に比類なき力を發揮するように仕向けた。それが持つ書物は対立する宗教のものよりも劣つてはいたが、それでも多くの時代に何百万もの人々の慰めと支えになってきた。それが説いた運命論は、その最初の時代には信奉者たちを無双の軍事的な勇氣に奮い立たせ、後世にはしばしば彼らの活動的なエネルギーを麻痺させたが、避け難い災いが押し寄せたときに彼らの支えにならなかつたことはほとんどない。しかし何よりも、それは兵士の情熱と信奉者の情熱を不可分に結びつけるという、偉大で運命的な秘密を發見したのである。第一の義務である異教徒の征服と、勇敢な兵士の確実な報酬とされた天国がない交ぜになって熱狂を生み出し、それはすぐに東洋の分裂した宗教會議と官能的な政府を圧倒した。ムハンマドの死後一世紀以内にその信奉者たちはキリスト教をその故郷でほぼ根絶やしにし、アジアとアフリカに巨大な君主制国家を築き、一時的でエキゾチックなものだったとはいえず、スペインに高貴な文明を植えつけ、東帝国の首都を脅かした。そしてもし、ある一つの戦いがなかったなら、おそらく中央ヨーロッパのエネルギッシュで進歩的な民族の上にその笏を伸ばしていたことだろう。この波はポワティエの戦いでカール・マルテルによって打ち破られた。そして信条をたびたび変え、文明の行方を大きく左右してきたチュートン族の上にイスラム教が勝利の旗を翻していたらどんな

結果になったかという推測は今では無用だろう。しかし、実際には一つの大きな変化がもたらされていた。キリスト教の中にゆっくりと入り込んだイスラム教の精神が、キリスト教をそれと似たものに変化させたのである。宗教の本質的に軍事的な様相は好戦的で迷信深い人々を魅了した。ヨーロッパを麻痺させたバニツクは長い幕間を経て、激しい憤りの反動につながった。プライドと宗教が手を取り合つて、あまりにもしばしばキリスト教圏の軍隊を打ち破つて領土を荒廃させた者たち、十字架の帝国からその最も美しい土地の多くを奪い、過去の由縁だけでなく、今も巡礼者たちを与える靈的祝福ゆえに崇められている聖都を冒瀆した者たちとの戦いへと、キリスト教徒戦士たちを駆り立てたのである。教皇の免罪はムハンマドの約束に劣らず軍人の魂を刺激する効果があることが証明された。そして約二世紀にわたつてキリスト教圏のすべての説教壇で不信心者との戦争の義務が宣言され、戦場は天国への確かな道とされたのである。立ち上げられた騎士団は司祭の性格と戦士の性格を兼ね備えていた。そして日暮れに兵士が自分の十字架にひざまずいて祈るとき、その十字架は彼の劍の柄だった。

キリスト教が経験したこのような変質よりも完全な変質を想像することは不可能だろう。そして、暴力と戦争の精神に立ち向かう優しさと平和の精神として、世界に最も正当な印象を与えていたその姿を十字軍時代のそれと対比するのは憂鬱なことである。異教徒のアイランド人の多くの奇妙な習慣の中で、最も重要なものの一つは垂直埋葬だった。ウエス・パシアヌスがローマ皇帝は立った

まま死ぬべきであると宣言したのとどこか似た感覚のために、異教徒の戦士たちは死んでも横になりたがらなかった。そして、この勇ましい埋葬を異教の特別なシンボルと見なしていたようである。アイルランドの古い写本には、アイルランドにキリスト教が導入されたとき、アルスターの王は死の床で息子に決してキリスト教徒にならないように、そして自分を戦場の兵士のように直立させ、レンスターの男たちに立ち向かうため、顔を永遠に南に向けて埋葬するよう命じた、と書かれている。十六世紀の時点で、アイルランドの一部の地域では子供は水に浸かって洗礼を受けていたとされている。しかし男児の右腕は水に浸からないよう注意された。聖なる流れに浸かっていない方が、より致命的な打撃を加えることができるだろうからである。

初期のキリスト教徒は世界が改宗すれば永続的な平和が確立される、という大胆な予言をしたことがあった。しかし現在の私たちの経験を振り返ってみるなら、教会の影響力は戦争の数を減らすどころか、それを実際に、大変深刻に増加させてきたという憂鬱な結論が導かれる。コンスタンティヌス以降、聖職者たちが軍事精神を抑制し、特定の戦争を阻止または早期終結させるために一体になって尽力して、十字軍の狂信を刺激し、カタリ派の残酷な殺戮を引き起こし、宗教改革の後の宗教戦争を悪化させたのに匹敵する程のエネルギーを発揮し、成功を収めた時代を探しても無駄だろう。私的な争いが聖職者の力によってある程度抑制されたことは間違いない。「神の休戦」の制度は一時期非常に価値があったし、中世の終わり頃に決闘の習慣が生まれたときには、聖職者によっ

て激しく非難されたのである。しかし決闘は異教徒の世界にはほとんど、あるいは全くなかったこと、大変な迷信の時代だったため教会の破門にはそれを止める力がほとんどなかったこと、そして今世紀、産業社会のシンプルな非難の前にそれが急速に消えつつあることを思うなら、この分野における彼らの努力に大きな価値を認めることはできないだろう。司教がしばしば果たした調停役が時に戦争を防いだ可能性は――私が思うに証明するのは難しいが――ある。また宗教戦争の期間中、ヨーロッパに非常に多くの軍事的精神が存在したことは確かであって、それは必然的にはけ口を求めたはずであり、いかなる事情があつたとしてもその期間が完全に平和だったはずはない。しかし、こうしたすべての条件を完全に認めた上で、イスラム教を除いて他のどの宗教も、数世紀の間にキリスト教の宗教指導者ほどに戦争を引き起こしたことはなかった、という明らか事実が残る。教皇の免罪、説教壇の訓戒、エルサレムの聖遺物の宗教的重要性、不信心者に対する憎悪の風潮によって引き起こされた軍事的狂信はその強さにおいて比類がなく、大洋ほどの血を流させ、計り知れないほどの不幸を世界にもたらした。宗教的狂信は初期の戦争の主な原因であり、後の戦争でも重要な要素だった。コンスタンティヌス以前には一般的だった平和主義にはエラスムス、アナバプテイスト（*16世紀―）、クエーカー教徒以外の共鳴者はほとんどいない。また近代の産業的發展によって非常に重要な平和機関がいくつか生まれたが、そのほとんどは神学的関心とは全く無縁であり、場合によっては直接的に対立していた。

神学の力が戦争を減らしたと言えないのは当然だが、戦争の残虐性を弱める点では非常に現実的で有益な効果を発揮した。征服した敵にどのような罰を与えるのが正しいか、という判断は異なる時代の道徳的意見が最も顕著に異なるテーマであり、こうした相違はしばしば生得の道徳的認識の存在を信じる人々に対する反論として取り上げられてきた。しかし、この理論を第一章で述べたような制限付きで受け入れている人々は何ら当惑することはないだろう。人間の知性の最初の黎明期には（既に述べたように）利害とは別の義務の観念が現れる。そして心は自らに影響を与える様々な感情を再検討する際に、利己的で残酷な動機よりも無欲で博愛的な動機の方が本質的かつ属性的に優れていると認識するのである。しかし博愛の基準―すべての善良な人々が博愛を実践する度合い―は社会の一般的な状況のみによって決定されるものである。最初、義務の範囲は家族、部族、国家、国家連合である。この範囲内で全ての人間は自分の周囲の人々への道徳的な義務を感じている。しかし外の世界については、私たちが野生動物を見るように自分が正當に略奪して良い存在と見ているのである。社会の初期段階において山賊や海賊という言葉に道徳的な罪の観念がなかったという不思議な事実はこのように説明をつけることができるだろう。そのような人々はシンプルに、私たちが獵師を見るように見られていた。そして仕事の際に勇氣と技量を見せた場合には称賛に値すると考えられていたのである。ギリシヤの最も見識ある哲学者の著作でさえ、蛮族との戦争を狩りの一つの形と表現している。そして蛮族を奴隷にしたいという単純な欲求は彼らを襲うに十分な理由とされたのである。征服者の捕虜を殺す権利は広く認められており、当初は年齢や性別による

制限はなかった。ギリシヤ人やローマ人がギリシヤや他の都市を意図的に破壊し、全住民を無慈悲に虐殺した例がいくつか記録されている。初期のローマ共和国の来歴は後の歴史家たちによって大いに理想化され美化されてきたが、おそらくこの原理に支配されていたのだろう。捕虜の通常の運命は野蛮人の間では死だったが、古代の文明圏では奴隷だった。しかし何千人もの人々は剣闘士のシヨールに出された。そして征服者がカピトリノー（*ユピテル神殿）に凱旋している間に、敗れた將軍はマメルティヌスの牢獄で殺されるのが通例になっていた。

より人道的な精神の痕跡もわずかながら見出すことができることは事実である。プラトンは一定の身代金によるすべてのギリシヤ人捕虜の解放を提唱し、スパルタの將軍カリクラティダス（*ペロポネソス戦争）はこの原理に従って高貴な行動をとった。しかし彼の模範が一般に踏襲されることはなかったようである。ローマでは国際的な義務という概念が非常に強く意識されていた。公式に宣言されていない戦争は、正当とは見なされなかった。蛮族との戦争の場合でも、ローマの歴史家はしばしば現代の歴史家が到底及ばないような良心的な厳しさで動機の十分さ、または不十分さを論じている。後のギリシヤ語やラテン語の著作にはこの分野でのかんりの進歩を示す格言が時折含まれている。キケロとサツルスティウスは戦争の唯一の正当な目的は確実な平和であると宣言している。タキトゥスによると、戦争は恩赦で終わるのがよいのである。プリニウスは彼が流した大量の血を理由にカエサルを偉大と形容することを拒んでいる。ローマの二人の征服者（*スキピオ

とトラヤヌス)は千人の敵を滅ぼすより一人の市民の命を救う方がよい、という言葉を残している。マルクス・アウレリウスは征服者の生涯は単なる強盗のそれと同じであると嘆息している。ローマに自ら服従した国や軍隊は非常に寛大に扱われるのが常であり、個人の寛大な行いも数多く記録されている。包囲側の兵士が被征服側の女性の貞操を侵害することは稀で、残虐な犯罪として告発された。古代の戦争における極端な残虐行為は法的にはともかく、実質的に二つの種類に制限されていたようである。ローマの大使を侮辱した都市、あるいは何らかの特別不誠実な、あるいは残酷な行いをした都市は完全に破壊され、その住民は虐殺されるか奴隷にされた。野蛮人の捕虜はほとんど野獣同様に扱われ、何千人もが奴隷市場へ、あるいは闘技場での戦闘へと送られた。

戦争に関する権利にキリスト教が及ぼした変化は非常に重要なものだった。そして、それは三つの項目に分けられるだろう。第一に、キリスト教は剣闘士シヨを禁止することで何千人もの捕虜を血なまぐさい死から救った。第二に、捕虜の奴隷化を着実に抑制し、慈善の寄付によって莫大な数の捕虜の身代金を支払った。そしてゆっくりと、気づかれることもないほど漸進的に慈悲の道を歩み続け、キリスト教徒の捕虜は奴隷にはならない、ということが国際的な法の原則と認識されるに至った。第三に、より間接的なものではあるが、新しい勇武の理想の誕生に非常に強い影響を与えた。十字軍と騎士道が理想とするところの、古代の戦士のすべての力と熱情、そしてキリスト教の聖人の優しさと謙虚さを一体化させた騎士は、宗教的感覚と軍事的感覚の二つの潮流から生

まれたのである。この理想は他のすべての理想と同様に想像の産物であつて、現実には完全に実現されないことが多かった。それでも多くの世代が憧れる勇武の卓越性のタイプと模範であり続けた。その軟化作用は今も現代の紳士の性格の中に大いに見出すことができるだろう。

シャルルマーニュ以前の時代には、軍事精神とキリスト教精神の緩やかな融合とともに、後に騎士道、王の神聖な権利、貴族制度への敬意といった形で道徳と政治の歴史に大きな役割を果たした、世俗階級の神聖化の最初の段階をおぼろげに見ることができよう。

ローマ帝国では皇帝の権力は絶えず増大する傾向にあつたことは既に見たとおりである。アウグストゥスに代表される専制政治は、ついにディオクレティアヌスの東洋的な専制政治に引き継がれた。元老院は皇帝に指名された人々の無力な議会になった。そしてローマの自由の精神はストア派の消滅とともに完全に死んでしまった。

この変化について、人間の性質の通常的原理に見出される以上の深い原因を求めることは、おそらく不要だろう。専制君主制は知識がまだ人々の能力を發展させていない初期の社会においては、

正常かつ正当な政治体制である。しかし、それが文明社会に持ち込まれた場合には病的な、それも阻止しない限り絶えず広がる傾向がある病的な性質を持つ。自由な国民がその政治的な機能を放棄したなら、彼らは次第に自由特権に対する知的能力と欲求の両方を失っていく。政治的手腕と野心は行動の場がなければ着実に衰退する。そしてそれに比例して卑屈で、無気力で、邪悪な習慣が拡大する。各国民は絶えず発展あるいは衰退の過程にある有機的存在である。そして自由特権の前進が見られない場所では、一般に隷属の前進が見られる。

キリスト教がこの変化に大きな影響を及ぼした断言することは決してできない。キリスト教は長い間進行中だった人々の高潔なエネルギーの政治の領域からの撤退をいくらか加速させることによつて、間違いなく自身が効果を上げたはずの道徳の偉大な改善が表に出ることを妨げてしまった。キリスト教は忍従の教義を説き、信者たちは最悪の迫害の時期にも気高くそれを守っていた。一方、キリスト教徒は君主を神とすることを断固拒否した。そして法に逆らつて、英雄的な一貫性によつて、自分たちの礼拝の自由を主張した。しかしコンスタンティヌスの時代以降、彼らの熱意は純粹さを甚だしく失つた。そして宗派の利害が彼らの原理を完全に支配するようになった。臣民と君主の關係に関する一貫した教義を教父たちから手に入れようとして、数多くの間違つた研究がなされてきた。しかし公平に觀察するなら誰しも、彼らの行動原理が極めて単純なものだったことに気づくだろう。ある君主の見解が正統派とするに足るものであり、教会の後援と異端者の迫害に十分に

熱心だったとき、彼は天使のように称賛された。その政策が教会と対立すると彼はダイモンと呼ばれた。トゥールのグレゴリウスがクローヴィスの性格に与えた評価はとてつもなく露骨なものではあるが、エウセビオスのコンスタンティヌスに対する過度の、まさに冒瀆的ともいえる追従ほどには驚くべき道徳的墮落ではない―改宗の少し後に自分の息子と甥と妻を残酷な死に追いやった、この君主には常に最も毀誉褒貶が多い。エウセビオスの言葉によって聖職者たちの君主たちに対する態度を推し量るならば、彼らは神からの直接の靈感が君主たちに与えられているとし、帝国の尊厳をかつてなかった程に称賛していた、ということになるだろう。しかしユリアヌスが玉座についたとき、教会の様相は一変した。この偉大で有徳の君主は、心得違いではあったにせよ、私生活において清廉の模範であり、玉座に哲学的な生活態度、嗜好、友情をもたらし、ごくわずかな例外を除いて最大かつ最も寛容な信教の自由を宣言し行動した、教会の敵だった。結果として彼にはあらゆる罵倒の言葉が常に惜しみなく浴びせられた。聖職者も平信徒も一体になって彼を侮辱した。そして二年足らずの短かくも輝かしい治世の後、彼が戦場で荣誉ある死を遂げたとき、ローマ軍に降りかかった災難も、軍の目下の危険も、倒れた皇帝が示した英雄的な勇氣も、最期の堂々たる落ち着きも、忠実な友人たちの涙も、キリスト教社会に品位ある沈黙を守らせることはできなかった。残忍な歓喜の声が国中に響き渡った。アンテイオキアではキリスト教徒が劇場や教会に集まって、皇帝が自国の敵と戦って死んだことを喜び祝った。悪意に満ちた伝説の群れが教会の歓喜を表していた。そしてナジアンゾスの聖グレゴリウス（*AD329―390）の雄弁はそれを不滅のものに

することに貢献した。彼の兄弟はかつて帝国の高官であり、ユリアヌスの下で大胆不敵にもキリスト教を信仰していたが、皇帝は彼の職を解かなかつたばかりか、温かい友情という榮譽さえも与えていた。ユリアヌスの遺体が墓に安置されて間もなく、聖グレゴリウスは二度にわたつて彼の記憶に対する激しい非難を行った。彼の人格に対するグロテスクな中傷を山盛りに集め、彼の遺体が死後に公共の下水道に流されなかつたことを残念がり、地獄で彼を待ち受けている拷問を力説して聴衆を喜ばせたのである。異教徒たちはキリスト教徒たちに対抗して最も重大な告発を行った。すなわちユリアヌスは敵の槍ではなく、自国のキリスト教徒兵士の槍で殺されたというのである。彼は皇帝であると同時に將軍であり、勇敢に自信に満ちて軍を率いて戦場に行ったのである。そして帝国の運命を大きく左右する戦いの決定的瞬間に倒れたことを思うならば、このリバニオスの告発は考え得る限り最も大きな卑しい裏切り行為に当たるだろう。それはおそらく全く根拠のない中傷だつたと思われるが、キリスト教徒たちの受け止め方は非常に独特なものだつた。教会史家の一人は書いている。「リバニオスは皇帝がキリスト教徒の手によつて倒されたとはつきり述べている。これはおそらく真実だろう。そのときローマ軍の兵士の中に、自由特権のために死の危険を顧みず、故郷や家族、友人たちを守るために戦い、暴君を倒してその名を万人に讃えられた古代の刺客たちのように振舞おうと考へた者がいた可能性がないとはいえない。神と宗教のためにこのような大胆な行いをした者は非難されるべきではない。」

ユリアヌスの治世における聖職者たちの特徴は、他のすべての原理を彼らの神学的利益に完全に従属させることであり、それは何世紀にもわたって続いた、という主張は誇張ではないだろう。彼らの利益に反する君主にはいかなる罵詈雑言も激し過ぎることはなかった。彼らを支える君主にはいかなる追従も行き過ぎではなかった。コンスタンチノープルの玉座を汚したすべての皇帝の中で、最も醜悪で残忍だったのはおそらくフォカス帝（*在位AD602—610）だろう。無名の百人隊長だった彼は、軍の反乱によって最高権力者に上り詰め、マウリキウス帝（*在位AD582—602）とその家族は彼の手に落ちた。フォカスは捕虜になった皇帝を死刑にすることを決意した。しかし、その前に彼は皇帝の五人の子供を連れて来て、父親の目の前で次々と殺害しよう命じた。皇帝は古代のヒロイズムとキリスト教的敬虔さを見事に融合させてこの恐ろしい光景に耐え、子供が殺人者のナイフに倒れるたびに「主よ、あなたは正しく、あなたの裁きは正しい」とつぶやき、最後には自分の子供を身代わりにして末の子供を救おうとした乳母の英雄的欺瞞さえも曝露した。しかし—悪徳な君主というより、むしろ弱く欲深な君主だった—マウリキウスは、ローマ教皇の影響力に警戒心を見せ、国が極めて危険な状態にあるときに兵士が軍旗を捨てて修道士になることを禁じ、さらにはコンスタンチノープル大司教が全世界司教の称号を得ようとするこゝさえ奨励したのであって、これらの罪の記憶はローマの司祭たちが最も残忍な殺人を許すには十分だった。教皇大聖グレゴリウスは聖書の言葉と胸が悪くなるような冒瀆的な追従でいっぱい二通の手紙を送ってフォカスとその妻の勝利を祝福した。彼は天と地に彼らを祝うよう呼びかけ、彼らの像をラテラ

ノ宮殿（*当時の教皇の住居）に置いて尊んだ。そして彼らの良く知られた敬虔さをもってすれば、ペテロの聖座（*ローマ教皇）が彼らに大きな好意を抱かないはずはないと巧みに仄めかした。

君主の権力との関係は、しばらくの間、東方と西方で異なる経過を辿った。コンスタンティヌス自身はそれまでのどの皇帝よりも東洋的な華麗さと習慣を身に着けていた。そしてたちまち、おそらく空前絶後の、途方もない君主の莊嚴さと臣下の追従がコンスタンチノープルの宮廷の特徴になった。東方における皇帝の権力は教会に影を落とすとした。そして司祭たちは聖像破壊論争の際に激しく反発したり、何度か小さな発作的反抗をしたりしながらも、次第に東方教会の通常の特徴である、満ち足りた従属に陥っていった。しかし西方ではローマの司教たちは君主たちから大きく独立しており、その利益においてある程度対立していた。長い歴史と実際の力において世界の筆頭の座にあった都市に、主要人物としてローマ司教たちを残し、皇帝権力がコンスタンチノープルに移ったことは教皇権力の拡大の大きな原因の一つになった。また多くの君主たちのアリウス主義、他の君主たちが見せた教会による浸食への警戒心、および数人の君主たちの異端の迫害の手ぬるさが全て衝突の原因になった。帝国が断絶すると西方教会は別のタイプの支配者と接触するようになった。蛮族の王たちは軍の頭目に過ぎず、大部分は民衆から選ばれ、特別な尊嚴はほとんどなく、勇氣と技量によって心許なく非常に制限された権力を維持していたに過ぎなかった。ローマ皇帝の華麗さを力なく模倣した者たちもいたが、彼らの主張は世界に対して大した重みを持たなかった。テオドリ

ツクの天才がその玉座に放った後光は、彼の死とともに消え去った。この偉大な君主のアリウス主義は教会の反感を買うに十分だった。ガリアでは数多くの小国王たちの中の大胆で悪辣な数人がメロヴィング朝を立ち上げ、国全体を一つの王国に統合した。しかしそれは短期間のうちに墮落し、王は単なる宮宰の操り人形になった。宮宰はその職を世襲し、大地主たちの長になり、その地位によって君主に対して直接の優位に立ち、事実上国家の支配者になったのである。

こうしたやや不利な条件から、騎士道の本質をなす王の神聖な権利という中世の理論と、階級に対する一般的な敬意がゆっくりと進展していった。政治的、道徳的な原因もそれを生み出す手助けをした。政治的な原因については―よく知られた―数語で十分だろう。（*封建制度）

八世紀にイサウリア朝のレオン帝（*3世、在位AD717―741）が聖像の崇拜を禁止しようとしたとき、コンスタンチノープルで激しい抵抗に遭ったが、すぐに鎮まった。しかしビザンチンのいかなる聖職者よりもはるかに高い地位を自認していたローマ教皇は大胆にも皇帝を破門してその権力に反抗し、事実上イタリアの独立を宣言した。この時、彼の立場は極めて堂々たるものだった。彼はキリスト教世界の大半が熱狂的に支持していた宗教的大義の代表者だった。彼はイタリアの解放者と崇められた。勝利の瞬間に彼が見せた節度は、多くの敵を宥め、当然予想された無政府状態を防止した。同時に彼は巨大な修道院組織を主宰した。それはキリスト教圏全体に広がっ

て、多くの野蛮な国々にその權威を宣伝した。そしてその司教団とは別の、教皇との特別な關係はキリスト教を精神的専制主義に変えることに大きく貢献した。しかし彼の權力を脅かす大きな危険がまだ一つあった。野蛮なランゴバルド人（*ゲルマン系）が絶えず彼の領土に侵入し、ローマの獨立を脅かしていたのである。ランゴバルドの君主ルイトブランド（*AD 680—744）は、勝利の瞬間に永遠の拷問の脅しに怯んだ。しかし彼の後継者アストルフラス（*AD?—756）はあらゆる恐怖に打ち勝ち、教皇の都市が彼の武力に屈することは不可避と思われた。

軍事的に完全に無力だった教皇たちは外国に救助を求め、当然ながらその武勇と勝利が広く知られているフランク族に目をつけた。カール・マルテルは単なる宮宰だったがヨーロッパをイスラム教徒から救っていた。教皇は彼がバチカンを守るために剣を振るうことを期待した。しかしカールはあらゆる懇願に耳を貸さなかった。彼が行ったのはコンスタンティヌス以後のいかなる支配者よりも教会にとって有益なことだったが、彼の関心は自国の利益に集中していた。そして聖職者の共感とは疎遠だった。彼が教会の財産を奪ったため、ダイモーンがその魂を地獄に運ぶのを聖人が見たという古い伝説が残っている。より近代の歴史家（*カエサル・バロニウス、AD 1538—1607、枢機卿）は彼の死を、彼が教皇を守ることをためらったせいにしてゐる。しかし、おそらく個人的な野心、軍事的冒険への欲求、宗教的熱意によって動く度合いがより大きかった息子のピピンは教皇の願いを容易に聞き入れた。両者の間に契約が結ばれることになり、それは歴史上の最

も重要な出来事の一つになった。ピピンは教皇を危険から守ることに同意した。教皇はメロヴィング朝を倒し、名実ともにガリアの君主となろうとするピピンの野心に宗教的な承認を与えることに同意した。

この交渉の詳細については多くの歴史家が語っているのですが、ここで長々と説明する必要はないだろう。この契約は忠実に守られた、というだけで十分である。ピピンは二度にわたってイタリアに遠征し、ランゴバルド人の力を完全に打ち砕き、豊かなラヴェンナの司教管区を奪って教皇に譲り渡した。教皇はいまだビザンチン皇帝に名ばかりの忠誠を守っていたが、この寄進によって初めて公然たる独立した現世の君主となった。一方、キルデリク（*3世、AD714―754）の退位は平和的に行われた。メロヴィング朝の最後の君主は修道院に幽閉された。カロリング朝は教皇の特別な祝福を受けて玉座に上った。この時、教皇はそれまで一般的ではなかった聖別式を行った。そして自らの手で王冠をピピンの頭に載せ、新しい王やその後継者に反逆するすべての者を破門することを厳粛に宣言したのである。

おそらく関係者の誰一人として、この出来事の極度の重大さについて十分に認識してはいなかったことだろう。確かに、教皇が差し迫った危険から解放されて大きな現世的権力を手に入れたこと、そして並外れて好都合で印象的な仰々しさとともにガリアに新しい王朝が誕生したことは明らかだ

った。しかし、これらの事実よりはるかに重要だったのは、その結果として王権が永久に聖別されたことである。教皇は王たちを退位させ、即位させる力を主張することに成功し、これによってその後のヨーロッパ史の全過程に影響を与える地位を獲得したのである。君主は司祭にいくらかへつらったとしても、臣民からは大いに独立していた。彼の権力の神的起源は、宗教的教義と彼を包む神聖さであるときかれて、彼の権力を計り知れないほどに粉飾した。異教徒たちによる王の神格化は王の権威を高めたり、批判や反乱を抑える上で、何らかの目に見えるほどの効果を上げたりしたことはなかった。人々の意思と無関係に王に神聖な権利を与えることは、最も永続的で強力な迷信の一つだった。そしてそれは現在でも世界から完全に消えてはいない。

しかし、それに先立ち、それを準備する別の作用がなかったなら、単なる孤発性の政治的事件がこれほどまでに深い影響を及ぼすことはなかったはずである。権力の神聖性という教義を受け入れ易くした第一の素因は、おそらく修道院制度の隆盛の中に見出せるだろう。私は既にこの制度が異教徒の卓越性のタイプとは大きく異なる、キリスト教徒の謙虚と従順の徳を最も極端な形で称揚していることを指摘した。また数多くの原因が同時に作用して、この制度がキリスト教世界を導く理想を与えるほどの広がりや影響力を獲得したことにも言及した。あらゆる教育や文学を支配、独占し、当時の立法者や政治家のほとんどを輩出し、あらゆる道徳的熱意と知的能力を自らに引き寄せることによって、修道士たちはたちまち諸国民の性格にその刻印を残したのである。従順の習慣と

謙虚の心性が広まり、敬われ、理想化された。そして主に伝統の上に基礎を置く教会は、遺物の神聖さに対する深い感覚と、伝統的な習慣を守る自然な性格を育んだ。このようにして封建的な君主制や貴族制を受け入れる感覚が徐々に形成された。それは主に当時の道徳感覚に一致していたがゆえに栄えたのである。

第二は、一連の社会的、政治的原因が、蛮族の特筆すべき個人の独立性を縮小したことである。王は最初、一国の君主ではなく一族の長だった。しかし次第に習慣が固定してくると、統治権は領土的な性格を帯びてくる。そして間もなく初期の領土貴族が見られるようになった。王は征服した土地や王領の一部を封土として有力な首長に与えたのである。そしてゆっくりとした、おそらく無自覚の、それぞれが激しい論争の的になってきた段階を経て、この封土に軍事的義務が付属するようになった。それは取り消し不能になり、最終的には世襲になったのである。社会の組織がまだ混乱していた頃、小地主は教会や有力な首長の保護を受けるために自分の土地を差し出し、地代の支払いや兵役を条件とする借地人としてそれを取り返した。また、そのような土地の引き渡しをせずに近隣の領主の保護下に入り、その見返りとして臣従の礼をとったり、軍事的に支援したりする者もいた。同時に既に述べたような理由によって自由農民の大部分は農奴になり、地主に服従し保護されるようになった。このように君主を頂点とし、農奴を底辺とする階級組織が徐々に形成されていった。この階級制度の完全な法的構造については封建時代のことなので、本書では取り扱わな

い。しかし封建制の主要素はシャルルマーニュ以前から存在していた。そしてその道徳的な結果はすでに分かりきったものだろう。最高位以外の各階級は常に上位の階級との接触しており、それを通じて絶えず依存と従属の感情が育まれた。あらゆることを近在の貴族に依存している農奴や、君主の下で頻繁に兵役に就くことを条件にあらゆる位階を保持している貴族にとつて、世俗的な地位の観念は最高の偉大さの観念と不可分に結びついたのである。

ここまでの観察によつて、シャルルマーニュ以前の時代から後に騎士制度という―世俗の階級と軍事的武勇を組み合わせて美化した―制度を生み出した道徳的、政治的な原因が既に作用していたことは明らかだろう。しかし、私が述べたような傾向が完全に力を持つためには、それらを代表し、例示する、その生涯の壮大さと美しさによつて人々の想像力をかき立てる偉大な人物が必要だった。大勢の人々を支配するには理性より想像力に訴える方がはるかに容易である。道徳的原理が、模範や理想なしに世の中に強力に作用することは稀である。社会の風潮が禁欲的なもの、君主的なもの、あるいは軍人的なものを賛美するようになったときには、偉大な聖人、君主、あるいは軍人が現れて、その時代の盲目的な風潮の一つのまばゆい焦点に集め、人々の熱意をかき立て、想像力をかき立てるだろう。しかし、そのような風潮がなければ偉大な人物は出てこなかっただろうし、大きな影響力を持つこともなかっただろう。しかし、その生涯によつて想像力に鮮やかに訴えかける偉大な人物がいなかったなら、一般的な風潮が完全にその強さを獲得することはなかっただろう。

この典型的な人物がシャルルマーニュである。その巨大な姿は歴史にもロマンス（*中世騎士物語）にも荘大な威厳とともにそびえ立っている。人間の偉大な支配者の中で、これほどまでに多くの側面を持ち、同時代に存在するすべての宗教的、知的、政治的な思考様式に自分の影響力を完全に浸透させた人物はおそらく他にいないだろう。この偉大な皇帝はヨーロッパの歴史の最も暗い時代の一つに登場し、周囲の野蛮な国々に対する数々の遠征をほとんど自分で行い、広大な法体系を発布し、教会のあらゆる聖職の規律を改革し、すべての階級の聖職者を自分の意志に従わせる一方で、十分の一税を法制化して彼らを物質的に大いに繁栄させ、同時に学校や図書館を設立し、ヨーロッパに散在するあらゆる学問を自分の周りに引き寄せることで知的退廃の抑制にいくらか貢献し、貨幣を改革し、商業を拡大し、宗教論争に影響を与え、最終的に封建制度の組織化に大きく貢献した偉大な代表者会議を招集して、西帝国の色あせた栄光を短期間ながらもまばゆいばかりの輝きで蘇らせたのである。これらのすべての領域に彼の広大で、組織的で先見的な才能の痕跡を見出すことができる。そして彼が人々の想像力に与えた影響は、彼を英雄とする数々の伝説に見ることができ、その前の時代の最高の理想は禁欲主義者だった。最も高貴で最も魅力的な人間像を伝説に取り入れるとき、民衆の想像力は直観的に多くの苦行と多くの奇跡を行う隠者、聖人を描いたのである。シャルルマーニュやアーサー王のロマンスには新しいタイプの偉大さの夜明けを見ることができ、ヨーロッパの想像上の英雄はもはや隠者ではなく王であり、戦士であり、騎士だった。シャ

ルルマーニュを頂点とする、ここまで述べてきたような長い影響力の連鎖が実を結んだのである。禁欲主義者の時代が色褪せ始めた。十字軍の時代、騎士道の時代が始まった。

このような風潮に影響された民衆の想像力によって、シャルルマーニュの生涯がどのように美化されたかを観察するのは興味深いことである。彼の軍事行動は主にサクソン人に向けられたものであり、サクソン人に対しては三十二回以上の遠征を行っている。イスラム教徒たちとの接触はほとんどなかった。ポワティエの戦いではカール・マルテルが彼らの勢いを止めたのであって、その孫ではない。シャルルマーニュ本人は彼らに対するスペイン遠征を一度だけ行ったが、小規模でその結果は悲惨なものだった。しかし十字軍の熱狂がキリスト教界に充満していた時期に書かれたカロリング朝のロマンスでは、このことは全く別の観点から書かれている。カール・マルテルは教会の理想的な戦士とされていない。彼は生まれるのが早過ぎたのであって、彼の姿には人々の想像力を魅了する偉大さが足りなかった。また教会の資産を没収し、教皇を助けてランゴバルド人と戦うことを拒んだため、破門されていたのである。一方、シャルルマーニュは最初の最も偉大な十字軍戦士とされた。サクソン人との戦争はほとんど注目されなかった。彼の生涯はムハンマドの信奉者との英雄的で勝利に満ちた戦いに費やされたと言われている。彼の功績の中にはニームとカルカッソンを彼らの支配から救うための遠征が含まれているが、これは実際にはカール・マルテルの勝利のおぼろげな言い伝えだった。彼は勝利の軍勢をパレスチナの中心部にまで送ったと言われている。

そして現存するおそらく最も古い三つの十字軍に関するロマンスの主人公である。歴史と同様、フィクションにおいても彼の治世は中世の初期と軍事的キリスト教の時代を分ける大きなランドマークになっている。

この大きな変化の直前で私はこの歴史書の幕を閉じる。アウグストゥスからシャルルマーニュに至る、長く変化に富んだ道筋の中で、私たちはさまざまタイプの性格や、さまざまな形の熱意の盛衰を見てきた。ヨーロッパの共感を世界帝国の影響力が広め、ギリシャ文明の影響力が強めるのを目の当たりにした。ストア派、プラトン主義、エジプト哲学が次々と発展し、社会の道徳的傾向を反映すると同時に、それを導いてきたことを見てきた。社会的、政治的、立法的生活の多くの分野の前進や後退の過程をたどり、ヨーロッパのキリスト教の揺籃時代を見つめ、その勝利の原因、遭遇した困難、その博愛精神が人類に与えたかけがえのない祝福を考察してきた。またその墮落、禁欲主義、不寛容、蛮族の侵略の濁流がヨーロッパ文明を水浸しにしたときに生じた、あるいは経験した様々な変容の悲しむべき歴史を一步一步追いかけてきたのである。この著作を終える前に、まだ簡単にしか触れていない、あるテーマについての調査が私には残されている―ここまで述べてきた変化が、女性の性格と地位、そして男女関係についての重大な道徳的問題に与えた影響の調査である。

第五章 女性の立場

ここまで述べてきた一連の長い道徳的革命の中で、私が共同体の中で女性に割り当てられた地位や、男女の関係から直接生じる徳と悪徳について言及する機会は何度もあった。しかし私はまだこの問題を、その歴史的的重要性に十分見合うだけ論じてこなかった。従ってこの巻を終える前にその検証に数ページを割きたいと思う。この著作で扱う多くの問題の中で、これは私が最も近づくことをためらうものである。なぜなら明確かつ公平に扱うこと、同時に反感や不快感を少しも抱かれないことがこれほど困難なものはないだろうからである。そしてこの倫理学の一分野が関係している問題が極めてデリケートなものであることは誰にとっても明らかだろう。しかし、歴史家の第一の義務は、真実を明らかにすることである。そして最も大きな変化を見せ、おそらく最も大きな影響力を持つていたであろう道徳のこの部門に言及せずに、異なる時代の道徳的状況の真の姿を描き、異なる宗教の道徳的影響を正しく評価することは絶対に不可能である。

人間がまだ完全な野蛮人で、まだ放浪生活が習慣的で、戦争と狩りが彼らの唯一の仕事で、これらに要求される資質がその卓越性の主な尺度だった時代には、女性の男性に対する劣位は疑いないものとされ、女性の地位は極端に低いものだった。そのときに最も重視されるすべての資質において、女性が劣っていることは疑いようがない。彼女らが特に得意とする社交的資質の発揮の場はな

い。美の優位性は非常に弱く、たとえそうでなかったとしても、野蛮な生活の苦難を生き延びた女性美の痕跡はほとんどない。女は単なる男の奴隷、そして男の情欲の奉仕者としか見られていない。前者の立場において彼女の人生は絶え間なく続く、屈辱的で、報われない労苦である。後者の立場において、彼女は粗野な男たちの獣欲の満足に伴うあらゆる感覚の激変にさらされている。

しかしこの初期の段階にも、後に拡大することを運命づけられた、道徳的感情の始まりを見ることができるといえる。結婚という制度である。一般に貞節にはある程度の価値があるとされており、それは姦通者に対して示される憤りにも表れている。男性には姦通の禁止という制限しかなかったのに対して、女性には情欲を抑える義務があったことが広く知られている。

女性の地位向上に向けた最初の二つのステップは、おそらく妻を購入する習慣の放棄と、一夫一婦制に基づいた家族の構築である。文明の初期、花婿と花嫁の父親の間の婚約の条件は、前者から後者への金銭の支払いだった。この金額は（*ゲルマンの）蛮族の法では「ムンデイウム」として知られているが、実際には娘の譲渡に対する父親への支払いだった。娘は買われて夫の奴隷になったのである。インドの古代の法律の最も注目すべき特徴の一つは、親が子を売ってはならない、という理由でこの贈与を禁じたことである。しかし、かつてこの売買が結婚の通常形だったことはほとんど疑う余地がない。ユダヤ教の書物には、ヤコブが彼女らの父親に一定の奉仕をすること

でレアとラケルを購入したことが書かれている。昔ユダヤで一般的だったこの習慣はホメロスの時代のギリシャでも一般的だったようである。しかしギリシャ史の早い時期に購入代金は持参金、つまり花嫁の父親が娘に使わせるために持たせる金銭に取って代わられた。これは夫の手に渡るが、まずそれが彼女に与えた尊厳によって、そして次にギリシャでもローマでも、ほとんどの別離の場合にそれが妻に譲渡されることを保証した特別法によって妻の地位の向上に貢献したのである。こうして妻は夫による虐待から身を守る保証を得た。彼女は彼の奴隷ではなくなり、契約の相手になった。初期のドイツ人たちには別の非常に注目すべき習慣があった。花嫁は夫に持参金を持って来ず、花婿も花嫁の父に何も渡さなかった。しかし新婚初夜の翌朝、花婿は花嫁に贈り物をした。「モルゲンガブ」すなわち朝の贈り物と呼ばれたこの贈り物が寡婦給与の起源になった。

さらに重要なことは一夫一婦制であり、この制度によってギリシャ文明はその初期から、それ以前のアジア文明に対する優位を示したのである。一夫一婦制は純潔に関する直感的道徳感情にも、社会の利益にも適うものである。東洋的な、すなわち一夫多妻の段階では、結婚はその最も低い側面において、ほとんど専ら情欲の充足と捉えられる。一方ヨーロッパの結婚では、契約者同士の愛着と尊敬、家庭の形成、それに伴う長期の家庭的感覚や義務が契約の動機の中において際立った位置を占めている。そしてより低い要素は比較的重視されていない。このように功利主義的な考察を抜きにしても、一夫一婦制は一夫多妻制よりも高い状態である、と明瞭に言うことができるだろう。

一夫一婦制を擁護する功利主義的な議論も極めて強力である。そしてそれを要約するなら次の三つになるだろう。生まれてくる男女の数がほぼ同じであることは、それが自然なものであることを示している。他の結婚の形でその主な目的の一つである家庭の運営がこれほど幸福に続けられることはない。そして他の形で女性が男性と対等の地位を占めることはない。

大きな惨事（*ペロポネソス戦争）の後に人口の増加が切実に望まれたとき、一時的にわずかに以前の制度に戻ったとも言われているが、ギリシャでは一夫一婦制が普通だった。しかしホメロスによってもたらされ、悲劇作家に受け継がれた伝説的あるいは詩的な時代と、その後の歴史的な時代との間には明瞭な境界線を引かなければならない。ギリシャの道徳史において最も注目すべき、そしてある論者たちにとって最も不可解な事実の一つは、前者のより粗野な時代において、女性は間違いなく最高の地位を占め、そのタイプは最も高度な完成を示していたということである。道徳観念は文明の前進によって、さまざまな形で昇華され、拡大され、変化してきた。しかしギリシャの詩に登場する女性の卓越のタイプは、最も初期のものでありながら、人類の文学の中で最も完璧なものの一つでもある、と大胆に断言しても良いだろう。ヘクトル（*トロイの王子）とアンドロマケ（*同妃）の夫婦の情愛、嵐に翻弄され、彼女に再会するためにあらゆる辛酸を舐める夫の帰りを長い年月待ち続けたペネロペーの不屈の貞節、夫を生きさせるために自ら死を選んだアルケステイスの英雄的な愛、アンティゴネの孝心、ポリュクセネーの死の堂々たる気高さ、自分の運命を

決めた父親を死の間際に許すイビゲネシアの抑制的で聖人のような忍従、その姿をオデュッセイアの悲劇の中で完璧な牧歌として輝かせる、喜びと慎みと愛に満ちたノウシカ―これらはすべて、ローマとキリスト教、騎士道と近代文明が覆い隠すことも凌駕することもなかった、永遠の美の姿である。乙女の慎み深さと夫婦の貞節、最も完璧な女性の魅力と徳が同等にこれほどまでに美しく描かれたことはない。女性像は男性像と同じように画布の中で際立っており、ほぼ対等な畏敬の念に包まれている。トロイ包囲戦の歴史はすべて、婚姻の絆の冒涇に起因する破局の歴史である。しかし同時に女性の立場はある面において劣悪だった。花嫁の父にその代金を支払う習慣が一般的だった。夫たちはほとんど非難されることもなく、大勢の側室を置いたようである。最も地位の高い女性捕虜は非常に苛酷に扱われた。女性の男性に対する劣等性は強く主張された。そしてそれは生殖力もつばら男性に属し、女性は子作りに極めて従属的な役割を果たすだけであるという、非常に奇妙な生理学的観念によって説明され、擁護された。パンドラという女性は人間のあらゆる害悪の元凶とされた。（*以上が詩的な時代）

ギリシャの歴史的な時代には女性の法的地位がわずかに改善された面もあった。しかし道徳的な状態は著しく悪化していた。徳の高い女性は完全な隠遁生活を送っていた。イオニアの女性の中で最もまばゆいタイプは遊女（*クルティザン、高級娼婦）だった。一方、世論は男性にはほとんど無制限の自由を与えていた。

道徳の歴史において最も重要であると同時に最も認識することが難しい事実は、感覚の事実、とでも呼ぶべきものである。人が何を行い、何を説いたかを示すのは、そうした行為や教えを可能にした心の状態を理解するよりもはるかに容易なことである。しかし、いま私たちが扱うのは、現代のものとはあまりにもかけ離れた感覚であるため、その困難さは並外れたものである。非常に官能的で同時に非常に輝かしい社会は実際に何度も存在してきた。またフランスとイタリアの歴史には悪の誘惑に最も弱い人々を包んだ芸術的、知的熱狂の例が数多くある。しかし、最も輝かしいモラリストたちの目前で、ほとんどの場合無批判に、いやむしろ奨励されて成長してきたというのがギリシャの官能の特徴である。もしパリの社交界の貴顕がニノン・ド・ランクロ（*AD 1620—1705、高級娼婦、作家）の居間に押し寄せ、ボシユエ（*ジャックIIベニーニユ、1627—1704、司教）やフェネロンが彼女の信奉者の中に数えられることを想像できるなら—そしてこの高位聖職者たちが彼女の職業の本分と、彼女が恋人たちの愛情を引きつける方法について公に助言する様子を想像することができるなら—ソクラテスと遊女テオドタとの間に存在した関係を想像することができるだろう。

ギリシャのモラリストたちの感覚の型を可能な限り再構築するためには、まず立法者とモラリストが扱わなければならぬ。最もデリケートで、同時に最も重要な問題の一つについて少し

言及しておく必要があるだろう。

キリスト教の教父たちが好んで説いたのは情欲、すなわち官能的な情熱は人間の「原罪」であるということだった。そして通常、禁欲的な人生論には極度に反発する知識の進歩は、神学的見解と一致して、この欲望の自然の力は人間の幸福が必要とするよりもはるかに大きいものであることを示している、と言わざるを得ない。マルサスの著作はギリシャのモラリストたちが相当程度見抜いていたと思われることを立証した。すなわち純粹で自然な欲望の、結婚という形における、通常のを越さない行使が普遍的なものになったなら世界に最大の惨事をもたらすだろうこと、そして自然は最も明白な方法で人類に早婚を促しているように見えるが、人口の多い国における文明の進歩の第一の条件は早婚の抑制か、減少だということである。高度に文明化された社会では、情欲が最初に芽生える時期の結婚は一般的ではない。そして継続的な知識の増加傾向はそのような結婚をより稀なものにする。またモラリストたちがいくら婚姻外の純潔の義務を強調しても、この義務がおよそでさえ守られたことがないのは疑いようのない事実である。そしてすべての国、時代、宗教において、膨大な量の不身持ちな放縦が出現し、おそらく他のいかなる単一の原因よりも人間の不幸と墮落に寄与してきたのである。

この問題を扱うすべてのモラリストが特別視する二つの目的がある——自分が生んだ子供の養育と

いう全ての人物の生得の義務、そして攻撃と汚染からの家庭の保護である。家庭は国家の中心であり原型である。そして社会の幸福と善良さは、常に家庭生活の清らかさに大きく依存している。夫婦の愛情は本質的に独占的なものである。すべての男性には自分が養っているのが自分の子供であることを確信したいという自然な欲求があるため、家庭の中に不道德な情欲が入り込むと極度の苦痛を受ける。しかし、この情欲の力は強すぎるために、そうした侵入は常習的で避けがたいものになっているようである。

このような環境の下でモラリストに注目される、確かに最も悲しむべき、ある点において最も恐ろしい存在が社会に現れたのである。その名前さえ口にするにはばかられるような不幸な存在、冷めた心で愛の恍惚を演じ、受動的な欲望の道具として身を委ね、同性の中で最も汚らわしい存在として軽蔑され侮辱され、ほとんどの場合、病氣と絶望的な悲惨と、早死にを運命づけられているこの女性には、いつの時代にも男性の墮落と罪深さの永遠のシンボルである。彼女自身はこの上ない悪徳の典型であるが、究極的には彼女は徳の最も効果的な守護者である。彼女がいなければ、無数の幸せな家庭の揺るぎない清らかさは汚されていたことだろう。また貞節の固さを誇り、彼女を思うとき怒りに震えた人々（*主婦たち）の中の多くが自責と絶望の苦しみを味わっていたことだろう。その墮落した、不名誉な一つの型に、世界を恥で満たしていたであろう情欲が集中したのである。信仰や文明の盛衰に関わらず、人類の永遠の巫女として、彼女は人々の罪ゆえに呪われ続けて

いるのである。

この不幸な存在、および貞節の掟を破った全ての女性に対して、ほとんどのキリスト教国の世論は極めて厳しいものである。特にアングロサクソン系の国々では少なくとも上流階級と中流階級では、この種の過ちはたった一度でも十分に、いかなる時間も、徳も、悔い改めも完全には拭い去れない。消えない烙印を押すことになる。この審判はおそらく第一に、この問題に対する宗教的感情のシンプルな表現である。しかし社会の利益に由来する強力な議論によって擁護されることもある。想像力によって容易に美化され、法律が決して効果的に統制できない、最も激しい情欲が駆り立てる行為に対して最も厳しい罰を加えることが正当化されるほどに、家庭内の清らかさを保つことは超越的に重要な問題であると言われている。また官能的な情熱の形跡をすべて曖昧にしてしまう破門は、その働きを束縛するのに特に適しているとも言われる。なぜなら、それは他のどの情熱よりも、その害悪の光景（*地獄の苦しみ）によって容易にお払い箱になる、想像力に依存しているからである。さらに悪徳の汚名が強調されると、それに呼応して正反対の徳への称賛が生まれる。こうして女性の間にもデリケートで厳正な名譽の感覚が形成される。それは悪しき罪を犯させないようにするばかりではなく、人格全体を威厳と気品に満ちたものにするのである。

こうした見方に対抗する、いくつかの重要な見解が主張されている。つまり、社会がこのような

悪徳をいかに根気よく無視しようとも、それはやはり存在しており、しかも最も巨大な規模で存在している、そして悪徳が曖昧さに包まれて無意識に偽善的な外観を呈しているときに、最も慢性の墮落した形をとるのである、と論じられている。イングラントに確実に五万人は存在する、悪徳と悲惨のどん底に沈む不幸な女性たちは、品位ある社会の汚れなき表面の下で、どれほど甚だしい量の悪徳が制御されず、議論されず、緩和されないうままに膿んでいるかを十分に示している。すべての医師の目に、そしてこのテーマを扱うほとんどの大陸の論者の目に映る、イギリス人の生活の最も不名誉な特色は、現代の人類にとって最も恐ろしい伝染病の一つが、罪を犯した夫から罪のない妻に感染し、その子孫さえも汚染している、そして他の国々の経験が決定的に証明しているように大幅に減少させられる可能性がある伝染病が、立法府がその存在を公式に認めることを拒み、その抑制のための適切な衛生措置を取らないため、抑制されないうままに猛威を振るっている、という事実である。イギリスの世論が女性の（*性的）過ちのあらゆる事例に下す恐るべき非難は、その数がある程度減少させたとしても、そうした事例が極めて多くなることを防ぐことはできず、それが生み出す苦しみを計り知れないほどに悪化させている。他のヨーロッパ諸国ではわずかな一時的な感情しか呼び起こさない行為が、イギリスではすべての和らげられない苦悩を大きく広めるのである。他のヨーロッパ諸国では道徳的感覚の完全な破壊を意味したり作り出したりはせず、その後もしばしば幸福で徳が高く愛情に満ちた生活が続くような行為も、イギリスではほぼ必然的に絶対的な破滅を招く。嬰兒殺しの数は非常に多い、そして一時の罪によって評判と人生を台なしにした

人々の大部分が、常習的な売春という奈落の底に突き落とされている——ヨーロッパの他のどの国でもそれは世論の審判と立法者の怠慢ゆえに、そこまで絶望的に悪質で取り返しのつかないものとはされていない。

さらに、こうして一生涯不幸の極みを運命づけられた膨大な数の人々は必ずしも、おそらく一般的に、生まれつき徳のない性質ではなかっただろう。誘惑の犠牲者は悪徳の性癖と同様、自らの愛情の熱さと知性の活発さゆえにしばしば道を踏み外すのである。最も冷静な観察者は最も低い階級の人々にさえ、異なる道徳的雰囲気や道徳的教育の下では間違いなく発展したであろう、より高い感覚の残骸を発見している。売春の統計によると、そこに転落した者の大部分は極度の貧困によってそれを強いられたのであり、多くの場合、飢餓に瀕していたのである。

これらの対立的な考察はごく簡単に示したものであって、私はそれについて議論したり評価したりするつもりはないが、問題の大きさを示すには十分だろう。ギリシャ文明では、立法者やモラリストたちは女性の二つの身分を好意的に認めることでこの問題に対処しようとした——夫への貞節を第一の義務とする妻、その場限りの愛情で生計を立てるヘタイラすなわち愛人である。ギリシャ人の妻たちはほとんど絶対的な隠遁生活を送っていた。彼女らは通常、非常に早く結婚した。仕事は機織り、糸紡ぎ、刺繍、家事の監督、病気になった奴隷の世話などだった。家の中では特別な奥ま

った場所に住んでいた。裕福であるほど屋外に出ることは稀で、また女奴隷と一緒になければ決して出ず、公共の見世物には決して行かず、夫の立会いなしに男性訪問者を迎え入れず、男性客がいるときはテーブルの自分の席に座ることさえなかった。その最も重要な徳は貞節だった。そしてこれは非常に厳格、かつ一般的に守られていたのだろう。誘惑からの著しい自由、彼女らを誘惑しようとする試みを強く阻止する世論、男性に与えられていた不正な快楽の十分な機会、これらすべてがそれを守ることに貢献した。一方、ほとんど女奴隷たちとだけ生活し、男性社会の教育的影響を全く受けず、アテネの文化の主な手段だった公共の見世物にも参加できなかった彼女たちの心は、必然的に極めて偏狭なものだったに違いない。トゥキユディデス（*BC460—395）が最も価値があるのは良い評判も悪い評判も立たない女性である、と述べたのは間違いなく同胞の一般的な感覚だった。ペイディアスは天のアフロディテを龜の上に立たせ、それによって貞淑な女性の隠遁生活を象徴したとき、この感覚を例証していたのである。

彼女たちの制限された範囲内の生活は、おそらく不幸なものではなかっただろう。教育や習慣によって与えられた純粹に家庭的な生活は第二の天性になり、ほとんどの場合、夫たちがあまりにも頻繁に耽溺していた婚外交渉を受け入れていたに違いない。一般的な習慣は非常に穏やかだった。家庭内の圧制が語られることは稀だった。夫は主に公の場で生活していた。嫉妬や不和の原因はほとんどなく、ほとんどの場合、対等の感覚ではなくとも、温かい愛情が自然に生まれていたに違い

ない。クセノポン（*BC427—355、ソクラテスの弟子）の著作には、世界も世間も全く知らない十五歳の若い妻を腕に抱いた、夫の魅力的な姿が描かれている。彼は彼女に非常に優しく、しかし幼い子供に使うような言葉で話しかける。彼は言う、彼女の仕事は女王蜂のように家に居続け奴隷たちの仕事を監督することである。彼女は自分の仕事を分担し、家計を節約し、そして靴ポット、衣服がいつも決まった場所に置いて一家の中をきちんと片付けておくよう、特に気をつけなければならぬ。また病気の奴隷を看病するのも妻の役目であると言う。しかしここで妻が口を挟んで「いえ、それどころか私が親切にした者が感謝し、以前より私を愛するようになるなら、それは私の一番楽しい仕事になります！」と叫ぶ。夫はあらゆる不面目なことを避けるため、非常に優しく細やかに気を配りながら、背を高く見せるためにかかとの高いブーツを履いたり、朱や白粉を顔に塗ったりする習慣をやめるよう妻を説得する。彼はもし妻が忠実にその務めを果たすなら、自分は妻の第一の、そして最も献身的な奴隷になることを約束するのである。ソクラテスでさえ家庭内に争いが起きたとき、自分が正しいければ見事に切り抜けられたが、自分が間違っていたらいつでも、妻を説得することはできなかつたのである、と彼は断言した。

プルタルコス著作にもギリシャの結婚生活の描写があるが、それはクセノポンよりも後の時代のギリシャ人の心的状態を表している。プルタルコスは妻を単なる家政婦でもなく、夫の奴隷の筆頭でもなく、夫と対等な友として描いている。彼は義務の相互性と、女性の心が最高度に洗練され

るよう願っていることを最も強い言葉で主張している。彼の結婚に関する教訓は、実際に現代のいかなる教訓にも劣ってはいない。また子供の死に際して妻に宛てた慰めの手紙には優しい愛情に満ちた精神が息づいている。彼の記録によると、妻の親戚との間に争いがあったため、妻はそれが家庭の幸福を損なうのではないかと心配した。それゆえ彼女は夫を説いてヘリコン山への巡礼に同行させ、そこで一緒に愛の神に犠牲を捧げ、互いの愛情が決して薄れないように祈ったとのことである。

しかし一般的に貞淑なギリシャ女性の地位は非常に低いものだった。最初は身の振り方を決める両親の、次に夫の、そして未亡人になった後は息子たちの絶え間ない監督下にあった。相続の際には彼女よりも男性親族が優先された。少なくともアテネでは、夫と同様に妻も持っていた離婚の特権は、法廷での公開陳述が教育や世論によって作られた習慣に与えるショックゆえに、実際にはほとんど無意味だった。しかし彼女は持参金を持っていた。そして（*嫁入りする）娘たちは必然的にそれを持っているという認識が、そのようなほとんど非難を受けない暴露が頻繁に起こる原因の一つになっていた。（*夫は離婚して持参金を返したくないだろうから、法廷は妻の不平を聞くだけ聞いてガス抜きをしたということか？）アテネの法律は女の孤児の利益についても特別な注意深さと優しさで扱っていた。プラトンは、女性は男性と平等であると主張した。しかし人々の習慣はこの理論と全く反対だった。主として市民的な観点から、結婚は市民を生み出す手段と考えられてい

た。スパルタでは国家のために、老齡あるいは病弱な夫は若い妻を、強健な兵士を生み出せる、より強い男性に譲渡することが命じられた。古代スパルタにおける女性の扱いは他のギリシャ諸国で一般的だったものとは多くの点で違っていて、感覚や行動のデリカシーを完全に破壊するものだったが、犖猛な男性的愛国心を生み出す効果があったことは間違いない。また、自分の息子を国の祭壇に捧げ、立派に勝利したならばその死をも喜び、自らの英雄的精神を国民の軍隊に吹き込んだスパルタの母親たちの見事な事例が数多く記録されている。しかし、ギリシャの歴史に貞淑な女性の名が登場することはほとんどない。夫がアテネで最高の地位を占めていた時代にフォーキオン（*BC402―318）の妻が見せた質素さや、夫婦間、子から親への愛情の例がいくつか記録されている。しかし、概して人々に注目されていたのはヘタイラや遊女たちだけだった。

ギリシャ人の生活の中における彼女らのこうした立場を理解するためには、現代のそれとはまったく異なる彼らの道徳的自由に思いを馳せなければならない。ギリシャの卓越性の概念は、すべての器官と機能における人間性の完全で完璧な発展であって、禁欲的な色合いはまったくなかった。人間の性質のある部分はこの部分より高いと認識されていた。そして低次の欲求に心を曇らされ、意志を抑制され、人生のエネルギーを奪われるのは恥ずべきこととされていた。ギリシャの考え方は自然な欲求の体系的な抑圧とはまったくかけ離れたものだった。立法者、モラリスト、そして世論の一般的な声は、この原則を男女間の交際にはほとんど無制限に適用していたようである。そし

て最も徳の高い男たちも今ではほとんど例外なしに非難されるような関係を習慣的に、そして公然と結んでいたのである。

しかし多くの社会を見るなら、この点において一方の性にほとんど無制限の自由を与えた世論は、他方の性にはそれに見合うだけの寛大さを持たなかったことで一致している。しかしギリシャではいくつかの原因が重なって、ある種の遊女に他の社会では到達できなかった地位を与えた。アフロデイトの官能的な信仰が彼女らの職業に一種の宗教的承認を与えたのである。遊女らはアフロデイトの神殿の巫女であり、コリントの遊女が祈れば街を災難から守ることができると信じられていた。バビロン、ビブロス（*フェニキア、原文ではBiblisだがByblosのことと思われる）、キプロス、コリントの宗教儀式には売春が入り込んでいたと言われる。またこれらの都市やミレトス、テネドス島（ダータネルス海峡の南方）、レスボス島、アビドス（*ダータネルス海峡内）は神殿の陰に育った悪徳の学校によって有名になった。（*神殿の遊女は教養を求められ値段も高かった）

次に、当時の激しい審美的な熱狂の流行は、最も美しいものに栄誉を与えることに極めて適していた。自然の美が最高度に花開いた土地と空の下で、絵画と彫刻の両方で比類なき芸術の一派が生きた。そして公共の競技やコンテストが行われ、そこで会衆は最高の肉体的完成に栄冠を与えた。世界史の中で、美のすべての形に対する称賛がこれほど情熱的で、これほど普遍的だった時代は他

にない。それは当時の道徳教育全体を彩った。そして主なモラリストたちにサンプルに、徳を最高の観念的な美と見なさせた。それは形式と文体の美が第一の研究対象だった全ての文学に現れた。それはギリシヤのすべての芸術のインスピレーションになり、ルールになった。それはギリシヤの妻に他の何よりも自分の子供の美のために祈らせた。また、それは最も美しいとされる人物を称賛的畏敬の後光で包んだ。遊女はしばしば美の女王だった。彼女はギリシヤの称賛を集めるアフロデイト像のモデルだった。プラクシテレス（*BC4世紀の彫刻家）はフリユネ（*BC4世紀のヘタイラ）の像を何度も作った。そして金に彫られた彼女の像はデルフィのアポロ神殿に置かれていた。彼女はアテネの若者を墮落させたとして訴えられたが、彼女の弁護士ヒュペレイデス（*BC390—322）は突然、彼女の裸体を披露して審判者たちの目を奪い、無罪を勝ち取った。アレレス（*4世紀）は画家だったと同時にライス（*コリントスの、ヘタイラ）の恋人だった。アレクサンドロスは画家への最高の贈り物として、彼が描いているうちに夢中になった自分の側室（*カンパスペ）を贈った。古代最高の花の画家（*パウシアス、BC4世紀）は花売り娘グリセラを愛し、常に花輪の中に彼女を描くことによってその技術を身につけたのである。ピンダロス（*BC522—438）やシモニデス（*BC556—468）は遊女を賛美した。威厳ある哲学者たちが彼女たちの元へと巡礼した。そしてその名はあらゆる都市で知られていた。

このような思想と感覚の中で、より野心的で教養ある女性たちの多くが自らこの職業に就いたこ

とも、またギリシャ人妻の隠遁生活と強いられた無知によって空席になっていた社会的地位についてたことも驚くべきことではない。遊女はアテネの一人の自由身分の女性であって、しばしばその自由を利用して知識を身につけ、他の魅力に強力な知的魅力を追加することができた。彼女は最も優れた芸術家、詩人、歴史家、哲学者を周りに集め、当時の知的、美的熱狂に惜しみなく身を投じ、やがて比類なき華麗な文壇の中心になったのである。アスパシア（*BC470—400）はその美貌と同時に非凡の才で知られており、ペリクレスの熱烈な愛を勝ち取った。彼女は彼に雄弁術を教え、彼の最も有名な演説のいくつかを手掛けたと言われている。彼女は常に国事についての相談を受けていた。他の哲学者同様、ソクラテスも彼女の集まりに出席していた。ソクラテス自身、ディオティマという遊女の教えに深い恩義があることを認めている。遊女レオンティオンはエピクトスの最も熱心な弟子の一人だった。

この階級の地位向上のもう一つの間接的な原因は、英語の本で言及するのは非常に難しいが、ギリシャの道徳について最も大まかな調査をする際にさえ完全に省略することは不可能である。女性関係の不品行は善良な男性の人生において普通の出来事であって、不名誉なこととは考えられていなかった。ギリシャ文明の最も深く最も奇妙な汚点である不自然な愛と比較されたからである。この悪習はホメロスやヘシオドスの著作には決して登場しないが、間違いなく公共の競技会の影響で生じたものだった。競技会は全裸の人物を観賞することに慣れさせ、現代の感情とは全くかけ離れ

た不自然な情欲を呼び起こした。そしてギリシャではそれに抵抗することが英雄的と見なされていたのである。この場合にも他の場合と同様、民衆の宗教は新たな悪徳に屈服した。神々の酌をするヘーベ（*青春の女神）はガニユメデス（*美少年）に取って代わられ、地上の最悪の悪徳がオリンポスに入り込んだ。モラリストたちがこれを友情の絆として称賛したことが知られている。またエパミノンダス（*BC419—362）の英雄的なテーベ軍団の熱意を触発したものとされていた。それは一般的には間違いなく悪徳として汚名を着せられていたが、今では想像もつかないほど軽く扱われていた。道徳観念や感覚がどの程度変化したかを示す最も良い実例は、同胞から彫像になる価値があるとされた最初の二人のギリシャ人は、不純な愛によって結ばれ、政治的暗殺ゆえに賛美されたハルモデイウスとアリストゲイトンだったという事実だろう。

このことや他のことが原因になって、彼女たちを遊女に通常結びついている極度の墮落という観念から切り離すことになったのだろう。ただし（*売春婦の）大多数は他のすべての時代と同様に、この時代にも救いたい墮落に沈んでいた。ヘタイラの地位に達した者は比較的少数だったが、そのうちの大多数でさえ、いつの時代にもこの階級に付随する特徴を示していたと思われる。不誠実、極度の強欲、贅沢は彼女たちに共通していた。しかし数多くの例外があったことは疑う余地がない。社会からの追放が彼女たちを圧迫したり、その地位を下げたりすることはなかった。彼女たちは決して既婚女性と同じ名誉を与えられてはいなかったが、妻や遊女には世界の中でのそれぞれの場所

と役割、そしてそれぞれに固有のタイプの卓越性があると一般的には信じられていたようである。ハルモディウスの友人だった遊女レアーナは友人の陰謀を暴露することなく拷問で死亡した。そこでアテネ人は彼女になぞらえた舌のない雌ライオンの像を建てて彼女の節操を記念するようになったのである。バックスという名の遊女の優しい振る舞いと無私の愛情は特別に記録されている。非常に感動的な書簡が彼女の性格を描き出し、その死に際しては哀悼している。クセノポンによるギリシャ人の生活の描写において最も注目すべきものの一つは、ソクラテスが遊女テオドタの美しさを聞き、弟子たちとともにその噂が本当どうかを自ら確かめに行った様子である。彼は穏やかに彼女の住まいの贅沢さの源泉について質問した。そして話を進めて彼女が恋人たちを惹きつけるために育てるべき資質の概略を述べたのである。彼は彼女に言った、横柄な者には扉を閉め、恋人が病気のときには気を配り、恋人が名誉なことを成し遂げたら大いに喜び、自分を愛してくれる人を優しく愛するべきである、と。全く恥じることもなく会話を楽しみ、明示的にも暗示的にも何も非難することなく、彼女に小心な、あるいは厚顔な罪悪感を抱くこともなく、ギリシャの最高の賢人は彼女の美しさに対する率直な賛辞を贈って立ち去った。

ギリシャの生活のこの側面を描く仕事は私にとって非常に不愉快なものだった。これほど困難で、苦痛を伴う、デリケートなテーマについて、この領域に起こった進歩の少なくとも概要を示すことが道徳の歴史にとって絶対的に不可欠でなかったなら、私は単調で最も用心深い論評さえも決して

しなかつただろう。私が書いたことは他のどの国よりも数多くの偉大な男性を生んだギリシャが、なぜ驚くほど偉大な女性を生まなかつたかを十分に説明するものである。またそれは、ギリシャのモリストたちが私たちと同様に人間の性質の高い面と低い面の区別を認識していたが、彼らが強調した道徳の水準は現代のものとは非常に大きく異なっていたことをも示しているだろう。強力で一時的な肉体的欲求を満足させることは、生涯の契約という条件下でなければ罪であるというキリスト教の教義はまったく知られていなかった。ギリシャ人の妻には厳格な義務が課せられていた。後年、そこまで厳格なものではなかつたが夫に対しても義務が課せられるようになった。不自然な恋愛は非難された。しかし、それは現代の感覚からすると非常に不快なほどに軽いものだった。ヘタイラ階級全体には多少の法的欠格事項があつた。そして彼女らは家庭に入った婦人より称賛されていたとはいへ、尊敬されてはいなかつた。しかし様々な状況が重なって、彼女らの実際の価値と民衆の評価を比類のないほどに高めた。そして結婚に対する嫌悪感が非常に広範なものになり、婚外交渉は最も完全に隠し立てのない、大っぴらなものになった。

次にローマ文明に目を向けるなら、女性の境遇にいくつかの重要な進歩があつたことがわかるだろう。ここまで述べてきたように、貞節の徳には二つの異なる捉え方があつた。功利主義の見解は、宗教的精神より政治的精神が強い国で一般的であつて、結婚を理想的な状態と見なし、この状態の幸福、神聖さ、安全を促進することをすべての教訓の主目的とする。神秘主義の見解は、羞恥心と

いう自然な感情に基づいて、歴史が証明しているように、政治的感情が非常に低く宗教的感情が非常に強い国で特に優勢だった。そして処女をその最高のタイプとみなし、結婚をシンブルに純潔の理想からの最も止むを得ない墮落とする。ローマの宗教システムの最高位に、これらの観念をそれぞれ典型化したような二つの聖職者団体があったことは、非常に注目すべき事実だろう。ユピテルの司祭（*フラメン）とウエスタの処女はローマで最も神聖な二つの階級だった。どちらの務めも国家にとって致命的に重要なものであると信じられていた。どちらもローマの城壁の中でのみ職務を果たすことができた。どちらも最も厳粛な儀式によって任命された。どちらも最も深く敬愛された。しかし、一つの重要な点において彼らは違っていた。ウエスタの処女は純潔の象徴であり、その清らかさは最も恐ろしい罰則で守られていた。一方、フラメンは最も厳格で神聖な形のローマの結婚の代表者だった。彼は必ず結婚していた。彼の結婚は最も厳かな儀式で祝われた。結婚を解消できるのは死だけだった。もし妻が死ねば彼は職を解かれた。

この二つの身分のうち、フラメンが最も忠実にローマの感情を表現していたことに疑いの余地はないだろう。ローマの宗教は本質的に家庭的なものであり、結婚をあらゆる面から品位と厳かさで包むことが立法者の主な目的だった。一夫一婦制は最も古い時代から厳しく命じられており、ローマの勢力が拡大した結果、このタイプがヨーロッパで支配的になったことは偉大な利益の一つだった。初期ローマの伝説には女性の高い道徳的位置づけと、ローマの生活における彼女らの名声を示

す十分な証拠が残されている。ルクレティア（*夫の従弟に強姦され復讐を訴えて自害）とビルジニア（*横暴な権力者の意に従うのを拒んで父に殺害を依頼）の悲劇はキリスト教国も比肩し得ない、名誉に対するデリカシー、穢れのない純潔の至高性の感覚を表現している。サビニの（*略奪された）女性たちが両親と夫の間を取り持って共和国の初期を救ったという伝説や、コリオラヌス（*グナエウス・マルキウス、BC519―?、追放されて敵軍に加わりローマを攻めた）の母親が彼に嘆願することによって国に迫る破滅を回避したという伝説は、女性にもローマの愛国的栄光を主張する権利を与えた。あるヴィーナスの大神殿は危機に際して兵士の弓の弦を作るために長い髪を切ったローマの貴婦人たちの伝説と結びつけられた。他の神殿は親孝行なローマ女性の記憶を後世に伝えている。彼女は自分の母親が餓死刑を受けたとき、許しを得てその牢獄を訪ね、自分の乳を与えているところを発見されたのである。

しかし、長い間ローマ人の妻の法的地位はきわめて低かった。ローマの家族は妻や子に対する当主の無制限の権限の上に成り立っていた。そして当主は意のままに彼らを絶縁することができた。花嫁の父親に贈り物をする習慣も、持参金の習慣もローマ史の初期にはなかったようである。しかし父親は絶対的に意のままに娘を処分し、時には実際に結ばれた婚約を破棄する権限さえ持っていた。またローマの初期に一般的だった結婚の形態では夫は絶対的な権力を持っており、夫は場合によっては妻を殺す権利を持っていたのである。法律と世論が一体となって夫婦の純潔を最も厳格な

ものにした。五百二十年もの間、ローマには離婚というものが存在しなかったと言われている。生活習慣は非常に厳しく、ある元老院議員は娘の目の前で妻にキスをしたため、みだらであると非難された。ローマの母親が子供に授乳する義務を乳母に任せるのは、非常に不名誉なこととされた。贅沢禁止令が家計を細部に至るまで最も厳しく統制していた。遊女はおそらく数多く存在し、確かに野放しだったと思われるが、非常に軽蔑的に見られていた。自分がその一員であることを公言するという不名誉は、十分な罰であると信じられていた。そうした者はユーノー（*結婚、出産の女神）の祭壇に触れてはならない、という古い法律はおそらく結婚生活の義務を象徴的に教えることを意図したものでろう。ある造宮官は暴行を受けたとき、それがローマの行政長官にとって恥ずべき悪名高い屋敷で起きた事件だったため、賠償金を得られなかったと伝えられている。自然界のすべてが女性の純潔の神聖さを証明していると信じられていた。最も野蛮な動物も処女の前ではおとなしくなった。（*月経中の）女性が裸で野原を歩くと、毛虫やあらゆる不快な虫はその前で死んでしまった。溺れた男は仰向けに、溺れた女はうつ伏せに浮くとされた。そしてローマの博物学者（*大プリニウス）の意見によると、これは後者がより純潔なためだった。

アリストテレスの言うところによると、ギリシャ人が蛮族より優れている点は、何よりも他国民のように妻を奴隷と見なさず、協力者、仲間として扱っていることだった。あるローマの論者（*コルネリウス・ネポス、BC100-25）がローマ文明のギリシャ文明に対する優位性を証明し

ているとした、同胞の妻の扱いについての訴えは、全体として、より公正なものだった。ギリシヤ人が妻を家の中の特別な一角に留め置き、親族と一緒にでなければ宴席に座ることを許さず、親族の前でなければ男性と会うことを許さなかったのに対し、ローマ人は妻を宴席に連れ出すことや、一家の母親を食卓の上席に座らせることをためらわなかった、と彼は述べている。妻が夫の支配に完全に服していた時代、家庭内に多くの抑圧があったのかどうかは今となってはわからない。パラテイーノにある、夫を鎮めることを使命とするヴィリプラカという女神の神殿はローマ女性の信仰を集めていた。また、リウィウスは共和制時代にローマの妻たちが夫たちを毒殺する大規模な陰謀が露見したという、信じ難いとは言わないまでも、奇妙なありそうにない話を書いている。しかし全体としては、古代ローマにおいて最も早い時期から既婚婦人の世評は高かったこと、結婚をすべての神権と人権の生涯にわたる結合、と定義した帝国の法律家の美しい文章が人々の感覚を最も忠実に表現していたこと、そして女性の徳がいつの時代にもローマの伝記文学に重要な位置を占めていたことは確かだろう。

私は既にポエニ戦争直後に始まり、共和国の滅亡に非常に大きく寄与し、カエサルの下でその頂点に達したローマのモラルの完全な崩壊の主な原因を列挙した。宗教、家庭、社会、政治のあらゆる生活の領域にこれほど完全に浸透した革命は歴史上に例がない。哲学的な懐疑論が古代の宗教を腐食した。東洋の奢侈と東洋のモラルが氾濫し、古来の質素で飾り気のない習慣をすべて水没させ

た。内戦と帝政は国民の人格を墮落させた。そして共和政時代あまりに強調されすぎた潔癖な習慣は単に悪徳による反動を抵抗不能なものにただけだった。この悪の時代の特徴である制御不能な、ほとんど狂気ともいえる墮落の大爆発において女性の徳の侵害は悪名高く顕著なものだった。奴隷の莫大な増加はいつの時代にも道德の純粹さに致命的な影響を与える。その奴隷の多くが帝国で最も官能的な地方から選ばれたという事実、裸の遊女が競演したフローラの祭り、役者の大胆な猥褻さが主な魅力だったパントマイム、帝国の中心都市の富に吸い寄せられたギリシャやアジアのヘタイラの流入、すべての家を飾り始めた放縦な絵画、アジアの悪徳の中心地の贅沢さに匹敵し、美しさで凌駕したバイアの台頭、突然手に入れた巨万の富の陶酔と多くの原因による古来のあらゆる習慣や信仰の崩壊、そして帝国の専制政治が高潔な政治的野心の道を閉ざしたために自然に生まれた快樂指向などがすべて、帝国時代の論者たちが明らかにしている悪徳の宴の準備にその役割を果たしていたのである。ほとんどの学徒はスエトニウスやランプリディウス（*アエリウス、AD 3—4世紀、「ローマ皇帝群像」の著者の一人とされる）のページを初めて開いたときに得た、人間の罪の程度と荒々しさについての新たな洞察を鮮明に覚えているだろう。またユウエナリスの風刺詩集の第六篇はおそらく風刺作家の当然の誇張もあろうが、女性の間にかくに腐敗が広がっていたかを凄まじいエネルギーで描いている。ティベリウスの時代には、名家のメンバーが売春婦になることを禁止する特別な法律が必要だった。ローマ人の気質は極めて粗雑だったため、官能性はギリシャで芸術の親になった審美的性格を持つことができず、その影響力は全く異なる形をとった。そ

これは剣闘士ショーへの情熱によって、しばしばいくらか不自然に残酷さと結びつけられたのである。確かに歴史上カエサルの時代よりも徳が希薄だった時代は沢山あったが、悪徳がこれほどまで途方もなく、抑制されない時代はなかっただろう。特に追従者と迎合者の大群に取り囲まれ、しばしば暗殺の恐怖におびえながら生活していた若い皇帝たちは、最も無謀で熱狂的な興奮とともに、あらゆる種類の異常な欲望に突入していったのである。近代社会と近代の論者たちが常に多少なりとも備えている慎みはまだ知られていなかった。そしてマルシャリスのエピグラム、アプレイウスやペトロニウスのロマンズ、ルキアノスの対話篇のいくつかに見られる恥も外聞もない猥褻さは、その時代の精神のあまりにも忠実な反映に過ぎなかった。

また部分的に悪質な原因のため、また思うに、部分的に公的制度の魅力の家庭生活への好ましくない影響のために、結婚に消極的な風潮が大規模かつ一般的に高まった。アウグストゥスは独身を禁じる法律や三人の子供を持つ父親に多くの特権を与えることによって、これを阻止しようと試みたが無駄だった。共和国崩壊の少し前にメテッロス・ヌミディクス（*クイントゥス・カエキリウス、BC160―BC91）が何とかこの風潮を克服しようとして行ったとされる非常に奇妙な演説が残っている。「ローマ人よ、もし我々が妻なしで生きられるなら、我々は皆その悩みの種から解放されるだろう。しかし、人は妻を持つても十分快適に暮らせないし、持たなければ全く快適に暮らせないというのは自然が定めたことなのである。我々は自分たちの短い楽しみよりも、我々の種

の永続的な生存を考えようではないか。」

このような腐敗の流れの中で、ローマ女性の法的地位にも大きな変化が起きていた。当初、女性はその親族の絶対的な従属または隷属状態にあった。そして帝国時代に自由と尊厳を獲得し、後にそれを失い、そして今なお全く取り戻せていない。ローマ人は二種類の結婚を認めていた。より厳格で法的に名誉ある形式は女性を夫の「手中に」置いて、夫に彼女とその財産に対するほとんど絶対的な権限を与えるものだった。そしてより厳格ではない形式は女性の法的地位を変更しないものだった。前者は共和国時代には一般的で―最も厳粛な宗教儀式によって祝福され、そのみによって解消され、貴族だけに厳しく限定されていた「コンファレーティオ」、純粹に市民的で、その名は象徴的売買に由来する「コエンティオ」、ただ女性が男性と途切れることなく同棲するだけの「ウサス」という―三つの種類があった。しかし帝政期にはこの種の結婚はほとんど廃れて、宗教的、市民的儀式を伴わない単なる相互の合意に基づく、より緩やかな形式が一般的になった。このことは結婚した女性は法的に父親の家族であり続け、夫ではなく父親に後見される、という非常に重要な結果を招いた。しかし旧来のパトリア・ポテスタス（*家父長の権利）は完全に時代遅れとなっていた。この結婚の形が一般的になったことは、実質的に妻を法的に絶対的に独立させるという結果になった。夫の手に渡った持参金を除いて、妻には自分の財産を持つ権利があった。彼女は父の遺産の分け前を受け取り、夫とは全く無関係にそれを所有した。こうしてローマの富のかなりの部分

が、女性の自由な所有物になった。妻はコメディアンを引き連れたお気に入り的人物に個人的な仕事をさせた。そして豊かな妻の夫への――高利貸しなどの――暴虐は風刺作家たちのテーマであり続けた。

家族の構造にはこのような完全な革命が起こった。家庭は独裁ではなく、対等なパートナーシップの原理によって築かれるようになった。妻の法的地位は完全に独立したものになり、その社会的地位が大きな尊厳を持つようになった。保守的な人々は当然この変化を憂慮し、これを阻止するために二つの措置がとられた。オツピア法（*BC215）は女性の贅沢を抑制するためのものだったが、カトーの懸命な努力にもかかわらず、この法律はすぐに廃止された。より重要な措置はヴォニア法（*BC169）で、これは女性が相続できる財産に非常に大きな制限をかけるものだった。しかし世論がこれを完全に受け入れることはなかった。そしていくつかの法的言い抜けによってその効力は部分的に回避された。

結婚の形態の変化は、もう一つのさらに重要な結果をもたらした。結婚は単なる市民的な契約とみなされ、契約当事者の幸福のために締結されたため、その継続はお互いの同意に依存することになった。当事者のどちらもこれを任意に解消することができ、解消された場合には双方に再婚の権利が与えられる。この制度の下では結婚に伴う義務が極めて軽んじられていたことに疑問の余地は

ない。キケロは新しい持参金を求めて妻テレンティアと離婚した。アウグストゥスはすでに妊娠していたリヴィア（*BC59—AD14）と結婚するため夫に彼女との離婚を強いた。（*小）カトーは妻の父親の同意を得て彼女を友人のホルテンシウス（*クインタス、BC114—50）に譲り、彼の死後再び復縁した。マエケナスは絶えず妻を変えた。センプロニウス・ソプス（*プブリウス、BC4—3世紀）は自分に無断で公共の競技を見に行った妻を離縁した。パウルス・エミリウスも理由を説明することなく同じ行動をとって「私の靴は新しく良くてできているが、どこがきついかは誰にも分からない。」と弁明している。また夫と離婚する気軽さでは女性たちも後れをとらなかつた。セネカはこの悪徳を特に激しく非難して、ローマでは離婚はもはや恥ずべきことではなく、その年を執政官（*任期は一年）よりもむしろ夫で覚えている女性がいると宣言した。キリスト教徒も異教徒も同じ苦情を繰り返した。テルトゥリアヌスによると「離婚は結婚の報い」である。マルティアリスは十回も結婚した女性のこと、ユウエナリスは五年間に八回結婚した女性のことを書いている。しかしこの類の記録の中で最も驚くべきものを残したのは聖ヒエロニムスである。それによるとローマには二十三回結婚した妻がいて、その夫も二十一回目だった。

これらは間違いなく極端な例であるが、結婚生活の安定性が非常に大きく損なわれたことは疑う余地がない。しかし、それに関係する法改正の影響を強調するのは安易だろう。より純粹な世論においては、深刻な結果を招くことなく、両者に非常に広い離婚の自由が許されていたのかもしれない。

い。夫が常に持っていた離縁の権利はここまで見てきたように、共和国時代には行使されないか、行使されることが非常に稀だった。結婚を素早く繰り返すことで善良な人々に嫌悪感を与えた人々のほとんどはおそらく、結婚が永続的なものだったなら、結婚はせずに多くの私的な関係で満足しただろう。あるいは結婚したとしても、変化を求める気持ちを単なる不倫で満足させただろう。腐敗の大波がローマに押し寄せた。そしてそれはいかなる法体系があったとしても家庭生活を水浸しにしていただろう。離婚を禁止する法律が腐敗の激しい時代の夫婦生活の清潔さを保証したことはなかった。また非常に多くの女性の徳の存在を帝政ローマで認められていた自由が妨げたこともなかった。

前章で古代の生活に見られる道徳的なコントラストは現代社会のそれを凌駕していると述べた。全体的に非常に無知であるか、非常に墮落している国々から英雄的な、あるいは輝かしい人々の集団が出てくることはほとんどない。私はこの事実を説明するため、一般的に古代の道徳の作用は悪を抑制するより徳を伸ばすのにはるかに適していたこと、それは高貴な性質を考えうるのには卓越のほぼ最高の水準にまで引き上げた一方で、墮落した人々の腐敗を正したり減じたりするには完全に失敗したことを示そうと努めてきた。帝政ローマの女性の生活には、このようなコントラストが鮮明に表れている。女性たちのモラルが極めて低かったこと―おそらく摂政時代のフランスや王政復古時代のイギリスよりも低かったこと―は疑いようがない。また現代の最も墮落した宮廷も比較にな

らないほどの、恐るべき不自然な情欲の不行跡がパラティーノ宮殿で隠し立てもせずに行われていたことも確かである。しかし結婚が最も自由であり、腐敗が一般的だったこの時代ほど、夫婦間のヒロイズムと忠誠の事例が頻繁に登場する時代もないだろう。この時代にはほとんど抑制のない贅沢と、とても質素な流儀が共存していた。アウグストゥスは娘や孫娘に機織りや糸紡ぎをさせており、彼が身につける衣服のほとんどは妻や妹が作ったと言われている。妻たちの家庭経済における技術、特に糸紡ぎはしばしば墓碑銘において言及されている。知的な文化は彼女らの間に広く浸透していた。そして大きく嗜みのある心と情熱的な女性らしい優美さ、そして最も真実な愛の忠実さが融け合った、いくつかの高貴な見本をその中に見ることができるといえる。北イタリアの都市は時代の汚染をかなり免れており、パドヴァとブレシアは特に女性の貞節で知られていた。マロニアという名の高貴な女性は、途方もない官能の時代にティベリウスの抱擁を拒んで自らの胸に短剣を突き刺した。人類に何世代にもわたって語り継がれてきた家庭の物語の、ローマの妻の貞節を示す高貴な例のほとんどは、結婚の法的拘束が最も緩やかだったこの時代のものである。夫の眉を曇らせた悩みを共有する権利を主張したポルキアの優しさとはヒロイズムを読んで感動しない人物がいたのだろうか？彼女は自分の勇気を疑い、ブルトゥスに敢えて彼の計画を明かすよう求める前に自分の太ももにナイフを刺してその忍耐力を秘かに試した。そして最後に彼と別れようとしたとき、偶然ヘクトルとアンドロマケの別れの会見の絵に目を留めて一度、しかも彼の前ではたった一度だけ取り乱したのである。（*ネロに自殺を命じられた）セネカの妻パウリナは夫と一緒に死ぬために自ら手首を

切った。すでに多くの血が流れていたとき、彼女の奴隷と解放奴隷は傷を縛って彼女に生きること
を強いたのだった。ローマ人はそれ以来―彼女の行いを記念する―その顔色の神聖な青白さに敬虔
な感情を持つようになった。パエトウス（*アウラス・カエキナ、?―AD 42、クラウディウス
に反逆）が自殺の刑を宣告されたとき、妻アツリアの彼への愛と彼女の英雄的な熱意を知る人々は、
彼女が彼の死後に長くは生きないだろう思った。彼女の娘と結婚していたトラセアは、彼女に自殺
を思いとどまらせようと「もし私が死ぬことになったら、あなたの娘も一緒に死んでほしいですか」
と聞いた。彼女は答えた「はい。私がパエトウスと暮らしたのと同じくらい長く、幸せにあなたと
暮らせたのなら。」友人たちは彼女を注意深く監視して死なせないようにしようとした。しかし彼女
は地面に倒れるほど激しく壁に頭をぶつけた。そして、立ち上がって言った。「あなたの方が簡単な方
法を邪魔するなら、私は難しい方法で死にます。」そして彼女を止めようとするすべての試みは放棄
された。彼女の死はおそらく古代において最も荘厳なものだった。パエトウスはしばらく、致命的
な一突きをためらっていた。しかし妻は短剣を手にとって自分の胸に深く刺した。そしてそれを引
き抜いて、血まみれのまま夫に渡し、死に際に「私のパエトウス、痛くないわよ。」と叫んだのであ
る。

大アツリアの姿はその仲間たちの上に堂々とそびえ立っている。しかし初期のカエサルやドミテ
イアヌスの時代には、他の多くのローマ人の妻たちも非常によく似た貞節を示していた。黒海の暗

い海を越えて、ローマ人の想像力が異常な恐怖に慄いて尻込みするような、未知の、人を寄せ付けない地方に多くの貴婦人が自ら夫について行ったのである。そして中には夫の死後に生き残ることを拒んだ妻もいた。小アツリア（*大アツリアの娘）はトラセア（*讒言によって自殺を命じられた）の英雄的生涯の忠実な伴侶だったが、彼が死んだとき彼女に死を思い止まらせたのは娘たちを育てることだけだった。彼女はドミティアヌスに追放されて生涯を終えた。一方、彼女の娘（*ファニア）はその人格の品位と同様に優しさで際立っていたが、夫ヘルヴィディウスとともに二度追放され、彼の死後に記憶を残そう（*伝記を残そう）として一度追放された。歴史家の偶然的記述や、たまたま残っていたいくつかの碑文からこうした例が珍しくなかつたことがわかる。ローマ時代の墓碑銘の最も注目すべき特徴は、常に夫婦間に存在した愛が深く、情熱的に表現されていることである。ローマの石棺にとってもよく見られる円形レリーフには、夫と妻と一緒に描かれている。その中ではお互いが愛を込めて相手の肩に片腕を回している。生前と同じように死後も結ばれているのである。墓の中にも連れ合いがいるため、完全に穏やかに死を迎えられる。これより感動的な愛のイメージを見つけることは難しいだろう。

異教徒帝国の末期には蔓延していた不品行を抑制するための措置がとられた。ドミティアヌスは不自然な恋愛を禁じる古いスカンジナビアの法律を施行した。ウェスパシアヌスは宮廷の贅沢を控えめにし、マクリヌスは姦通した者たちと一緒に縛りつけて生きたまま焼き殺させた。男女が一緒

に入浴する習慣はハドリアヌスによって、またその後アレクサンドル・セウエルスによって非難された。しかし最終的に禁止したのはコンスタンティヌスだった。アレクサンドル・セウエルスとピリップス・アラブス帝（*在位AD244―249）は売春業者に対して精力的な戦いを展開した。両アントニヌス帝の即位後は、ほとんどの悪徳と同様、それが極度に行き過ぎることはかなり減少したと思われる。しかしキリスト教の影響、宮廷のコンスタンチノープルへの移転、蛮族の征服に伴う貧困化によって、その悪弊が多少なりとも正されるまでローマは非常に大きな腐敗の中心地だった。

しかし、モラリストたちはいくつかの重要な段階に進んでいた。最も重要なものの一つは、社会の初期段階でほとんど妻だけに課せられていた、結婚における貞節の義務の相互性を非常に明確に主張したことである。クリュタイムネストラ（*アガメムノンの妃）とメデア（*イアソンの妃）の伝説は、夫に許されていたほとんど無制限の放縦に、ギリシャの妻たちが時に激しい憤りを感じていたことを明らかにしている。またアンドロマケはヘクトルへの愛の最高の証として、ヘクトルの非嫡出子らを自分の子供と同じように大切にすると伝えられている。初期ローマにおいて夫の義務の感覚が全く存在しなかったとは思わない。しかしほとんど、あるいはまったく強いられたことはなく、妻に課される義務と同等とみなされることもなかった。姦通という言葉やそれにまつわるすべての法的処罰は、妻による婚姻関係の侵害に限定されていた。ローマの妻たちの雅量の例は数

多くあるが、最も感動的なのはスキピオの忠実な妻テルティア・エミリアのものだろう。彼女は夫が自分の女奴隷の一人に夢中になっていることに気づいた。しかし黙って痛みをこらえ、夫が死ぬとその女奴隷に自由特権を与えた。自分の夫が愛した女性が奴隷のままにいることに耐えられなかったのである。

アリストテレスは、結婚生活において夫が妻に期待するのと同じ貞潔の義務が夫にもあることをはっきりと主張した。また後年、プルタルコスとセネカはこの義務を最も明確に強調している。少なくとも理論的に、それがローマの生活にどの程度浸透していたかは、ウルピアヌスが法律上の根本原理として認め、アントニヌス・ピウスが夫の求めに応じて妻に公式に姦通罪の判決を下す際に付けた、このような驚くべき条件からうかがい知ることができる。「ただし、あなたが常に自分の生活によって彼女に貞節の模範を示していたことが立証された場合に限る。自分が守っていない貞節を妻に要求するのは不当なことである。」

後期の異教徒社会におぼろげに見られるもう一つの変化は、純潔を功利的な視点より、むしろ神秘的な視点から本質的な善と見なす傾向だった。この変化は主に新プラトン主義やピタゴラス主義の台頭によってもたらされたものである。この二つは肉体をその情欲とともに本質的に悪とみなし、すべての徳を肉体の汚れからの浄化と説明することで一致していた。その最も重要な結果は、婚前

の不品行に対するやや厳しい見方だった。それはそれ以前には男性の場合、度が過ぎず、姦通でなかったなら、非難されないか、非難というにはあまりに軽い不承認の目で見られていただけだった。大カトーはそれをはつきりと正当化していた。またキケロはこの件に関して、人々の感覚や、キリスト教の影響下で少なくとも人類が公言することに起こった大きな革命が一目で分かる、非常に興味深い意見を残している。「若者が遊女を愛することを完全に禁じるべきであると考える人物がいるとすれば、彼は実に厳しい人物である。私は彼の立場を否定する用意はない。しかし彼は我々の時代の自由のみならず、我々の祖先の習慣や許容範囲とも異なる考えを持っている。このようなことが行われなかった時代があっただろうか？非難された時代があっただろうか？許されなかった時代があったのだろうか？いま正当であることが正当でなかった時代があっただろうか？」エピクテトスはストア派の中でも最も厳格な人物のうちの一人だったが、弟子たちに婚前交渉、少なくとも姦通や不当な交渉は「できる限り」控えるよう勧め、それを守れなかった人物を咎めたりしないよう勧めている。ローマ人の感覚をアレクサンドル・セウエルスの人生が興味深く例証している。すべての皇帝たちの中で、彼はおそらく最も精力的に悪徳を防止する立法を行った人物だった。彼は属州総督を任命する際、馬と召使いを与え、未婚の場合は側女をつけることを常とした。「なぜなら」と歴史家（*ランプリディウス）は非常に重々しく述べている「それなしに彼は存在し得ないからである。」

異教徒がこうした見解に反対して書いたものは、多くはない。しかしそれは、そうした意見の例として注目に値する。ムソニウス・ルフス（*AD30—101、ストア派哲学者）は結婚以外の男女の結合は許されないと明確かつ強い言葉で主張した。ディオーン・クリュストモスは売春を法律で規制することを望んだ。結婚でさえも不純であるという禁欲的な考え方が微かに存在したのかもしれない。ティアナのアポロニウスはこの考えに基づいて独身生活を送っていた。ゼノビア（*AD240—274、パルミラの女王）は後継ぎを生むために必要な場合を除いて夫との同居を拒否した。ヒパティアは多くのキリスト教の聖人と同様、処女妻の地位を守ったと言われている。すべての肉体的なものの不浄さと、それらを超越する義務の信念は三世紀に熱心に強調された。マルクス・アウレリウスとユリアヌスは、いずれも当時の最良の異教徒の精神の見事な代表者だった。彼らはいずれも早くに妻を亡くした後、その徳を伝記記者に称賛された。しかし、その徳の様相には興味深く特徴的な違いがあった。マルクス・アウレリウスは継母を家に入れて子供たちを支配させることを望まなかったため、側室を持ったとされている。ユリアヌスはその後、完全な節制生活を送った。

私が最も凝縮し、ほとんど批判も論評もせずに挙げた上記の事実は、この問題に対するローマ人の感覚と、それが修正されつつある方向を示すのに十分だろうと思う。このような学問についてよくご存知の方は、道徳的な感情の年代を正確に記録するのは不可能であることを容易に理解される

だろう。しかし、ローマ帝国の後期にこの問題に対する人々の認識が、それまでよりもさらに敏感で洗練されたものになったことには疑いがない。そしてストア派に取って代わった東洋の哲学がこの変化に大きな影響を与えたことも同様である。キリスト教はすぐにこの新しい風潮の代表になった。キリスト教は純潔をあらゆる徳の中で最も重要なものとみなし、それを強いるために持てるすべての巨大な力を最大限に活用した。初代キリスト教皇帝の法律には燃えるような熱意の痕跡が数多く見られる。売春業者は溶けた鉛を喉に流し込む刑を宣告された。（*女性をさらった上で）強姦の場合は強姦した者だけでなく、被害者でさえもその行為に同意していれば死刑にされた。女優が洗礼を受けたならば、奴隷扱いの、実際に悪徳の奴隷であるその職業を捨てることを許す法律が施行され、純潔と博愛の両方の大義に大きく貢献した。金持ちの宴会で歌ったり演奏したりすることを常として教父たちに恐ろしいほど嫌われていた、少女芸人たちはその仕事を禁止され、この職業の復活は非常に厳しい法律によって禁じられた。

世俗の法と並んで、教会の懺悔の法も同じ方向の力を発揮していた。その法の中で不品行の罪はおそらく他のどの罪よりも大きな位置を占めていた。不自然な恋愛をした者や、娘を遊女にした母親は永久に聖体拝領から排除された。そして夥しい微罪が厳しく罰された。禁欲的な情熱はこの倫理の一分野をより傑出させ、人々の想像力は教会の処女殉教者たちの純粹で気高い姿にたちまち魅了された。彼女らは一度ならず勇氣において完全に男性に比肩しながら、時にはそのヒロイズムに

最も美しい女性的な優しさを混在させていたのである。耐え難い肉体的苦痛に耐えるために、キリスト教が生み出した最も気高い人物はリヨンで殉教した貧しい召使の少女ブランディナだった。また聖ペルペトゥアの殉教の、あるシンプルな挿話の自然な純粹さほどに感動的な光景は、歴史を全て探し回っても見つけることが難しいだろう。この聖女は野牛に殺されるといふ罰を受け、その角によって闘技場の砂の上に半死半生で倒された。しかしその恐るべき瞬間にも彼女の処女の慎み深さは至上のものだった。そして最初の本能的な行動は襲撃で破れたドレスの裾を引き寄せることだった、と伝えられている。

他にも非常に興味深い数多くの民間の伝説が生まれた。これらの伝説の大部分は本質的に優れているわけではないが、人々の想像力がこの方向に向けられ、キリスト教がいかに肉欲を大敵とみなしていたかを示すものとして、歴史上重要な意味を持っている。例えば聖ヒエロニムスは、ディオクレティアヌスの迫害の際、若いキリスト教徒が美しい庭の真ん中に絹のリボンで縛られて、耳と目を魅了するあらゆるものに囲まれながら、美しい遊女に誘惑されたが、それに対して彼は自分の舌を噛み切って彼女の顔に吐きかけることで身を守った、という信じ難い話を伝えている。またキリスト教徒の若者たちが悪徳を強いられた乙女たちに近づくために道楽者の服装や態度を身につけ、衣服を交換することによって彼女らを逃がしたという伝説も伝えられている。聖アグネス（*ローマの、AD291—304）は人々の前で裸にされて、一人の若者を除いて全員が目を見送らせた。

その若者は即座に盲目となったと言われている。ニュツサの聖グレゴリウスの妹は乳癌を患っていたが、外科医にそれを見せることに耐えられなかった。その慎み深さは奇跡的な治癒によって報われた。キリスト教の聖人たちは名高い美の帯（*花嫁が締め、新婚の床で花婿が解く）に対抗して、身につける者の情欲を消し止める、あるいは純潔な者しか締められない貞操の帯を設けた。墮落した者にはダイモーンが憑りつくことが少なくない、とされていた。憑依された少女の衣服が聖パコミウスのもとに持ち込まれ、彼はそれによって彼女に恋人がいることを見抜いた。ある遊女が聖グレゴリウス・ソーマトウルガスは彼女の恋人であり、約束の金を払うのを拒否したと訴えた。彼は要求された金を支払ったが、彼女はたちまちダイモーンに取り憑かれた。聖人たちが遊女を悪の道から救い出そうとしたことは多くの伝説を生み出した。初期教会のマグダラの聖マリヤ、エジプトの聖マリヤ、聖アフラ（*AD304没）、聖ペラギア、聖タイス（*AD4世紀）、聖テオドタ（*フィリピー東マケドニアの都市ーの、AD318没）、中世のクルトーナの聖マルグリット（*AD1247-1297）、リミニのクレア（*1260-1326）は遊女だった。聖ウイタリウスは毎晩、近所の悪徳の巢窟を訪れ、その夜は罪を犯さずに済むよう商売女に金を与え、彼女らの改心のために祈りを捧げるのが常だったと言われている。聖セラピオンはエジプトのある村を通りかかったとき、一人の遊女に手招きされたそうである。彼はいつか彼女を訪ねることを約束した。彼はその約束を守ったが、自分の身分には課されている義務がある、と宣言した。彼は跪いて詩篇を繰り返し始め、一章の終わりごとに彼女のための祈りを捧げた。その光景の異様さと、彼の調子

と態度の厳かさに彼女は圧倒され魅了された。次第に涙があふれてきた。彼女は彼の隣に跪き、共に祈り始めた。彼は彼女を気に留めることもなく、何時間も何時間も同じように厳かな声で、休むことなく、祈りと詩篇を交互に繰り返して、彼女の悔恨は恐怖の発作にまで高まった。朝の薄い光が地平線を照らし始めると、彼女は彼の足元に半死半生で倒れて泣きじゃくりながら、どこか過去の罪を償える場所に連れて行ってくれるよう懇願した。

禁欲主義者が貞節の重要さを人々の心に深く永続的に刻み込んだ功績は極めて大きかった。しかし、結婚に及ぼした有害な影響によって、それは深刻に相殺されてしまった。教父たちの膨大な著作の中から、この制度についての二、三の美しい記述が選り抜かれている。しかしこれに関する彼らの一般的な捉え方については、それ以上に粗雑で嫌悪感を催させるものを想像することが難しい。自然が死による損失を修復するという高貴な目的のために設計し、リンネ（*カール・フォン、1707—1778、スウェーデンの学者、分類学の父）が示したように花の世界にも広がっているこの関係は、常にアダムの墮落の結果とされた。そして結婚はほとんどその最も低い側面しか注目されなかった。結婚がもたらす優しい情愛や、それに続く神聖で美しい家庭的な資質はほとんど完全に考慮の外にあった。禁欲主義者の目的は男性を純潔な生活に引き寄せることだった。そして必然的に結婚は劣ったものとされた。それは種の繁栄のため、また男性をより大きな悪から守るために必要であって、それゆえ正当化できるものである。しかし、すべての真の神聖さを志向する者が

回避すべき、墮落の状態とされていた。聖ヒエロニムスがエネルギーに語ったところによれば「純潔という斧で結婚という木を切り倒す」ことが聖人の目的である。そして彼が結婚を称賛するとすれば、それがただ純潔な者たちを生み出すからに他ならない。この絆が結ばれても禁欲的な情熱はその棘を残していた。すでに私たちはこの情熱が家庭内の他の関係をいかに害したかを見つけた。それはこの最も神聖な関係に十倍もの苦味を吹き込んだ。夫や妻に強い宗教的情熱が宿った場合、その最初の結果は幸せな結婚生活を不可能にすることだった。より宗教的なパートナーは直ちに独居の上での禁欲生活を、また少なくとも表向きに別居しない場合は、結婚しながらの不自然な別居生活を望んだ。教父の勧告的著作や聖人たちの伝説の中で非常に大きな位置を占めているこのような考え方には、この分野の文献に詳しい人物なら誰でも親しんでいるはずである。例えばごく少数の例を挙げるなら―聖ニルス（*シナイの、AD 4世紀―451）は流行していた禁欲主義に憧れたとき、すでに二人の子供がいた。そして妻は別居に同意するよう説得されて、散々泣いた揚げ句同意した。聖アムン（*AD 4世紀、エジプト）は結婚式の夜、花嫁に結婚生活の害悪を説き、その結果二人はすぐに別れることに同意した。（*18年間偽装結婚していた）聖アブラハムは結婚式の夜、妻から逃げ出した。いくらか後世の伝説によれば聖アレクシウス（*ローマの、4世紀）は同じ行動をとったが、何年か後にエルサレムから父の家に戻った。そこで妻がまだ捨てられたことを嘆いていたので、施しとして食事と宿を恵んでもらい、気づかれることなく死ぬまでそこで暮らしたということである。ニュッサの聖グレゴリウスは―不幸にも結婚してしまっただが―純

潔について熱い賛辞を書き、その中で自分がこの特権的地位にないことを嘆いている。彼は自分を、決してその収穫物を食べられない畑を耕す牡牛、喉が乾いているのに決して飲めない小川を見つめる男、隣人の富を思えばその貧しさをより一層苦しく感じる貧しい男のようであると言い放った。そして結婚生活の不幸について感情を込めて長々と説いたのである。結婚の床を避けることに合意した名目上の結婚は珍しいことではなくなった。（*神性ローマ）皇帝ハインリッヒ2世（*AD973—1024）、イングランドのエドワード懺悔王（*1003—1066）、スペインのアルフォンソ2世（*AD760—842）がその例である。この種の非常に有名で絵画的な歴史をトゥールのグレゴリウスが伝えている。インジュリオスという名の裕福な若いガリア人が熱烈に愛する若い花嫁を家に迎えた。その夜、彼女は涙ながらに純潔の誓いを立てたこと、そして彼への愛ゆえにそれを裏切った結婚を痛烈に悔やんでいることを告白した。彼は彼女に結婚生活を送ってもいいが、誓いは守るようにといい、その約束を果たした。数年後に彼女が死ぬと、墓に彼女を横たえるとき、夫は自分が彼女を受け取った時と同じく純潔なまま神に返したことを厳かに宣言した。すると死んだ女性の顔に微笑みが浮かんで「なぜ、誰にも聞かれなかったことを話すのですか？」と言った。その後まもなく夫は死んだ。その遺体は墓の中で妻と別の区画に安置されていたが、天使たちは二人を隣合わせに並べた。

このような教えが家庭にもたらした極度の混乱と、一部の異端者の間に生じた行き過ぎは当然な

から教会の賢明な指導者たちを憂慮させ、既婚者は互いの同意がない限り禁欲生活に入ってはならないことが定められた。しかし禁欲の理想が変わることはなかった。結婚を控えること、あるいは結婚において完全な結合を控えることは神性さの証明とみなされた。結婚は最も下等で最も墮落したものと見られていた。それが不純であるという考え方はさまざまな形で何世紀にもわたって教会にきわめて大きな影響を及ぼした。例えば中世には秘跡を祝して、儀式の後の夜は夫婦の床を控えるという習慣があった。前夜に共寝した既婚者が教会の大きな祭礼に参加することははつきりと禁じられていた。大聖グレゴリウスは聖セバステイアヌス（*AD 255—288、ディオクレティアヌスの迫害で殉教）の行列に参加した若い妻が、この条件を満たさなかったためにダイモンに憑依されたと語っている。十二世紀のアルベリック（*モンテ・カッシーノの修道士）の有名な幻視において、地獄には教会の祭礼や断食日に共寝した既婚者を罰するために鉛、ピッチ（*原油を蒸留した後の滓）、樹脂が混ざった湖の特別な拷問場が存在するとされていることに、この問題に対する感覚がどれほどのものだったかが見て取れる。

結婚に関するこうした考え方のあと二つの帰結は再婚に対する強い不賛成、そして聖職者が独身を守ることへの非常に強い願望だった。前者は初期のローマ人の間に非常に異なる形で、非常に異なる動機と結びついて存在していた。彼らは一度の結婚で満足する者の慎み深さを称え、何度も結婚することを間違った放縦と見なしていたと言われている。この見解は主に、妻の夫への愛情は夫

の死によって消えず、妻のその後の人生すべてを導き、高め、決して他の対象に移すことはできない、非常に深く純粹なものである、というローマ人の心に深く根を下ろした非常にデリケートで感動的な感覚から生まれたものだろう。ウエルギリウスはこれをデイドー（*カルタゴの女王）に非常に美しい台詞で語らせている。またローマの妻たちが夫の死後、時に若さと美しさの盛りに隠居して余生を死者の思い出に捧げた記録がいくつもある。タキトウスはこの点においてゲルマン人を同胞の模範としている。また、多くのローマの墓に刻まれた「ユニウイレ（*一度しか結婚しなかつた女性）」という形容詞はこの献身がいかに実践され、価値あるものだったかを示している。カミッルス（*マルクス・フリウス、BC446―365）の一族は再婚がないことで特に尊敬されていた。ローマ時代の詩人の一人は「生きているときに妻を愛することは喜びであり、死んでから妻を愛することは宗教的行為である」と述べた。男性の場合、二度目の結婚を控えることにおそらく女性の場合ほどの妥当性は認められておらず、この問題についての感覚は主に別の動機―継母によって利益が損なわれないようにという子供への愛情―によるものだった。

こうした再婚への嫌悪感は禁欲的なキリスト教の中にも強さを増して拡がっていったが、その根柢は全く異なるものだった。まず、夫との愛情豊かな思い出は禁欲的な動機によって完全に消し去られていたことに私たちは気づく。次に、教会側の論者たちは男女の問題に関する極めて粗雑な彼らの見方に完全に従って、ほとんど必ずと言っていいほど、二度目あるいは三度目の結婚の動機は

単なる動物的な情欲であると決めつけていたことに注目したい。モンタニノス派とノウアティクス派は再婚を絶対的に否定した。正統派は人間の弱さを理由に再婚を認めはしたが、最も強い難色を示していた。その理由の一つは、それを淫乱の明らかな兆候とみなしたことであり、そしてもう一つは、再婚は結婚をキリストと教会の結合の象徴とする教義に矛盾するとみなしたことだった。この件に関する教父たちの言葉は現代人の感覚からすると極めて異常であり、彼らがこの結婚を許可すると明確に繰り返し断言していなかったなら、断固非難されるべきものだろう。例えば、デイガミーすなわち二度目の結婚をアテナゴラス（*アテネの、AD2世紀）は「きちんとした姦淫」と呼んだ。アレクサンドリアのクレメンスによると「姦淫とは一つの結婚から多くの結婚への転落である。」聖ヒエロニムスは言った「最初のアダムには妻が一人いた。二番目のアダム（*キリスト）には妻がいなかった。再婚を認める者は二度結婚した第三のアダム（*初めて二人の妻を娶ったカインの子孫のレメクのこと。その子孫は洪水で絶えた）とされる。ただし、洪水を生き延びたノアの先祖アブラハム、ヤコブも妻を二人娶っているのでこの発言は矛盾している。」に従うのである。「考えても見よ。」と彼は再び言う「二度結婚した女はたとえ老いて、衰えて、貧しくとも教会の施しを受ける資格がない。もし施しのパンが与えられないなら、天からの恵みのパンはなおさらである！」オリゲネスによれば「デイガミストはキリストの名によって救われるが、キリストに栄誉を与えられることはない。」ナジアンゾスの聖グレゴリウスは聖パウロが結婚をキリストと教会の結合に譬えたことについて述べている「この聖句は再婚を非難しているように思われる。もしキリスト

がお二人おられるなら、夫や妻が二人いても良いだろう。もしキリストがお一人だけで、教会の長（*キリストの別称）がお一人だけなら、相手は一人であって―二人目は退けられる。もし主が二度目を禁じられるなら、三度目の結婚はどうだろう？一度目は正しく、二度目は恩赦、三度目は不義である。この数を超える者は明らかに獣である。」デイガミストは聖職からも、教会の施しからも締め出された。彼らに聖体拝領が許されるのは懺悔の期間を経た後のことだった。また中世のイギリスの二つの法令は「二人の妻、あるいは一人の未亡人と結婚した」囚人が聖職者の利益（*世俗法より寛大な教会法による裁判、実際にはラテン語の読み書きができればこれを主張することができた）を受けることを禁じていた。四世紀初頭のエルピラ教会会議は一般的に平信徒が洗礼を授けることを禁じたが、極度の必要がある場合には許可した。しかしその場合でも二回結婚した者の司式は許されなかった。ギリシャでは一時期、四度目の結婚は絶対的な不義とされていた。そして賢帝レオン（*6世、在位AD870―912）が多くの論争が巻き起こした。彼は三人の妻を持ち（*跡継ぎを生まないまま死別）、愛人を作ったが、その後国民の宗教的感覚に逆らって、彼女を妻の地位に引き上げることが決意した。（*跡継ぎが生まれた）

聖職者の独身主義は、結婚についての教会の感覚をも示している非常に大きなテーマなので、ここではごく大雑把に扱うだけにしたい。これには率直な研究者なら誰でも認めざるを得ない二つの事実がある。一つは、教会の初期には聖職者も結婚する権利を持っていたということである。もう

一つは、結婚の不純さという観念が存在しており、聖職者は極めて神聖な階級であるがゆえに、平信徒ほどの自由を与えるべきではないと考えられたということである。司祭の再婚や、司祭と未亡人の結婚は違法であり罪である、という強い確信の中にこの感覚は最初に現れた。この信念は教会の最初期から存在したと見えて、何世紀にもわたって非常に頑強に、全会一致で維持されていた。次に司祭が聖職に就いた後、妻との同居を避けることは徳であるという見解が極めて早い時期から存在し、それは後の時代には義務になった。ニカイア公会議は厳格な独身主義者だったパフヌティウス（*テールバイの、AD314世紀）の助言によって、このルールを必須なものとして強いることを差し控えた。しかし四世紀の間に聖職者の結婚は罪である、というのが一般的な原則と認識されるようになった。しかしそれ（*聖職者の結婚）は習慣的に、そして通常最も寛大な態度で祝われていた。教会の権威がこの問題に対して取った様々な態度は、道徳史の極めて興味深いページであり、また独身制度が生み出した害悪の最も決定的な証拠である。しかし今私がいまできるのは、何世紀にもわたるカトリックの神学者の著作や公会議の布告の中から、この問題に関して収集された膨大な証拠について言及することだけである。宗教改革の前の世紀の修道院の甚だしい不道徳は近年のことであって、人々の信仰が乱れていなかった時代は道徳的に非常に純粋な時代だった、というのは中世を直接にはほとんど知らない論者に特によくある幻想である。実際、教会の論者たちは揃って八世紀とその後の三世紀における教会の不道徳さは他のどの時代にも少しも劣っておらず、十世紀のほぼ全期間において、教皇庁は恥ずべき暮らしをしていた人々に支配されていたことを証

言している。聖職売買はほとんど普遍的なものだった。幼い頃に結婚し、自制というものが全く効かない蛮族の首領が教会の主要な地位を占めていた。そして重大な不正がたちまち全体的なものになった。十世紀のイタリアの司教は当時の風紀を警句的に表現した。曰く、もし自分が教会の儀式を執り行う者に不貞を禁じる教会法を施行したなら、少年たち以外は誰も残らないだろう。もし私生児に関する教会法を守るなら、彼らもまた排除されなければならない。この弊害は大きくなり、父から子へ聖職禄を遺す封建的大聖職者が一度ならず出現するようになった。カラギウムと呼ばれる税金は実際には聖職者が内妻を持つことを許可するものであって、数世紀の間、君主たちによって整然と徴収されていた。時にその害悪の拡大自体がそれを是正することもあった。司祭の結婚は何の罪もない普通の出来事と見なされた。そして十一世紀には奇跡を起こす力の妨げにならないとされた例がいくつか記録されている。しかし、これは稀な例外だった。最も古い時代から、聖ボニファティウス、大聖グレゴリウス、聖ペトルス・ダミアニ（*1007-1072、ベネディクト会修道士）、聖ダンスタン（*AD909-988、イングランド）、聖アンセルム（*カンタベリー、1033-1109）、ヒルデブランド（*教皇グレゴリウス7世、1015-1085）とその後継者のような人々と同様、一連の公会議は司祭の結婚や内縁関係を邪悪な罪と非難し、少なくとも理論上は、そうした司祭たちの生活習慣は一般に罪深いものとされていた。

一旦誓いを破って常習的な罪の生活を始めた聖職者が、すぐに俗人よりはるかに低いレベルに墮

ちたことは驚くにあたらない。近親相姦と姦通の罪で断罪された教皇ヨハネ二十三世（*ピサの対立教皇、1370—1419）や、1171年の調査で一つの村に十七人の隠し子がいることが判明したカンタベリーの聖オーガスティン修道院の次期院長、1130年に七十人もの内妻がいることが判明したスペインの聖ペライヨの修道院長、あるいは1274年に六十五人の私生児がいたとして退位させられたリエージュ司教アンリ三世といった個々の墮落の事例をあまり強調しなかったとしても、公会議や教会の論者たちが提出した、ともにシンプルな内縁関係よりもはるかに大きな悪を描き出している、長い一連の証拠に抗うことは不可能である。司祭たちが実際に妻を娶ったとき、その関係は違法なものであるという認識が彼らの貞節にとってとりわけ致命的だったこと、そして重婚と極度の移り気が特に一般的だったことが観察されている。中世の論者たちは売春宿のような女子修道院や、その壁の中で起こった膨大な嬰兒殺し、そして、それゆえに司祭が母親や姉妹と同居することは許されない、という最も厳しい法令を何度も発布する必要があった聖職者たちの間の広く根深い近親相姦について数多くの証言をしている。キリスト教がこの世から根絶やしにしたはずの不自然な愛が、修道院に生き残っていることが何度も語られ、宗教改革の直前には懺悔室が放蕩に利用されているという訴えが声高に、頻繁に聞かれるようになった。この問題に対して取られた措置は非常に数多く、厳しいものだった。当初、司祭の密かな結婚、特に司祭と叙階前に結婚していた妻との関係が最も問題視された。いくつかの教会会議は「妻と不適切な関係を持った」司祭を破門すると発表した。そして、司祭は常に部下の教会書記の前で寝ること、妻とは屋外で少

なくとも二人の立会人の前でしか会わないこと、などの規則を作った。しかし、この問題に関して人々の意見は全く一致していなかった。シュネシオスは司教に選ばれたとき最初は辞退し、その理由の一つとして、自分には心から愛する、多くの息子を産んでもらいたい妻がおり、彼女と別れたり姦通者として秘かに訪ねたりしたくない、と果敢に主張した。聖レミギウス（*AD 437—533）の姪と結婚していた後のラン（*北フランス）司教は息子と娘を授かるまで妻と暮らしていたが、それぞれをラトロ（*山賊）とブルペキュラ（*小ギツネ）と名づけるという趣向で自分の懺悔を表した。大聖グレゴリウスは、敬虔な動機から妻を捨てたある司祭の徳を書き残している。夫が死にかかっているとき、彼女は四十年間共寝することを許されなかった彼のベッドへと急いで行き、既に死んでいるように見えた夫の上に身をかがめて、まだ息をしているかどうかを確かめようとした。そのとき瀕死の聖人が最後の力を振り絞って声を上げた「女よ、去れ、藁を運び去れ、まだ火がある。」司祭の結婚の撲滅に最も大きな功績があったのは、最もたゆまぬ決意をもってこの目標を追求したヒルデブランドだった。教会権力や世俗の支配者への自分の訴えが不十分であることを知った彼は、大胆にも民衆に目を向けた。そして教会のあらゆる伝統をもとめせず、結婚した司祭への従順を撤回するよう熱心に説き、彼らに禁欲主義の激しい狂信を起こさせた。そしてそれはたちまち違反した牧者たちに対する激しい迫害を生んだ。憎悪と軽蔑によって膨大な数の妻たちが追い出された。そしてこの混乱は多くの罪と多くの耐えがたい苦しみを生み出した。司祭たちは時に激しく抵抗した。カンブレ（*北フランス）では1077年にヒルデブランドの教義の熱

心家を異端者として生きてまま焼いた。半世紀後のイギリスでは、聖職者の不品行を激しく非難した数時間後に遊女の腕の中にいた教皇庁の特使を驚かせることに成功した。しかし、民衆の狂信に支えられた教皇庁の決意が勝利を収めた。教皇ウルバヌス2世は司祭たちが頑なに捨てることを拒んでいた妻たちを奴隷にする許可を貴族たちに与えた。さらに数回の厳罰化の後、司祭の結婚は廃れた。しかし、依然として存在した混乱の大きさは、教会の論者の悲痛な告白、宗教改革に先駆けた詩人や散文風刺家の一様に立腹した証言、修道院が弾圧されたときに明らかになった甚だしい不道徳、そして教区民の家族を守るため、司祭には内妻が必要である、と主張するのが常だった多くのカトリック信者の意義深い思慮分別に現れている。

このような生活を送る聖職者ほど風紀を乱すものはないだろう。聖職者の結婚が完全に認められているプロテスタントの国々では、それは実際に最大かつ最も明らかかな利益を生んでいる。キリスト教が最も有益かつ魅力的な形をとるのは、わが国に点在する穏やかな聖職者の家庭の中である、と自信を持って断言することができる。それはコールリツジ（*サミュエル・テイラー、1772—1834）が言ったように「現代の一つの牧歌」であって、家庭の平和の最も完璧なタイプ、最も辺鄙な村の文明の中心を成しているのである。いくらかの狭量さや職業的な頑固さにかかわらず、そしてしばしば不当に偽善の汚名を着せられる、いくらか恥ずべき、しかし半ば無意識のマンネリズムにもかかわらず、これほど多くの幸福が拡散するとともに享受され、これほど少ない緊張や争

いによってこれほど多くの徳が実現されている場所は他にはないだろう。尊い職業をその時代の知的、社会的、政治的運動への暖かい共感と結び付け、一家の父親として広い実用的知識を持ち、教区民の気晴らしや娯楽に熱心に加わる、良き聖職者は自分の宗教的信念を俗世間に押しつけることはほとんどなく、それでもすべてにおいてそれを明らかにするだろう。その信念は言葉と行動における、より実直な清廉さ、すべてに行き渡っている優しさによってより高く、より深い道徳的なトーンで明らかにされるだろう。その優しさは、それを発揮する人格の卓越性を洗練し、柔らかくし、まろやかにすることによって、その人格にそれ自体と同じだけの魅力をつけ加えているのである。彼の妻は病人を見舞い、貧しい人々を助け、若い人々を教え、女性の機転が特に必要とされる無数のデリケートな仕事をこなす中で、非常に活動的であると同時に非常に女性らしい仕事の間を見出す。そして彼女の模範は彼女の奉仕に劣らず有益なのである。

一方、独身の誓いが忠実に守られているカトリックの聖職者の間には、非常に重大で致命的な欠点と、人間が到達しうる最も高貴な徳を兼ね備えた、異なるタイプの人格が形成されている。地上の絆や愛情から切り離され、主に決疑論者や懺悔室という歪んだ媒体を通して人生を眺め、他の何よりも人格を和らげ広げる親族関係を奪われていたカトリックの司祭たちは、あまりにもしばしばその悍猛で血生臭い狂信と、教会の利益以外のあらゆる利益への無関心において際立ってきた。また彼らの共感の範囲が狭いことと、知的隷属を受け入れてきたことは、彼らが執拗に主張する世界

の大きな不幸ゆえに長い間独占することが許されてきた、若者の教育という職務には特に不向きだった。しかしその一方で、これほどまでに一途で俗気のない熱意を示し、個人的な利害によって曲げられることなく、義務のためにこの世で最も大切なものを犠牲にし、あらゆる苦難、苦痛、死に不屈のヒロイズムで立ち向かってきた人々も他にいないだろう。

中世が、その最も暗い時期でさえ、後者のタイプの多くの善良で偉大な人物を生み出したことを否定するのは不当で不条理なことである。しかし聖職者の間で大変頻繁だった禁じられた関係が、何世紀にもわたって信徒の道徳心を最も低下させたこと、キリスト教の純潔の理念への非常に大きな貢献を打ち消す傾向があったことに、ほとんど疑いの余地はないだろう。現在の聖職者の妻が占めるような地位を内妻が担えるほどに、その司祭との関係が完全に認識されていたことは稀である。また道徳の主な指導者であり模範でもある人々が、不明瞭あるいは間違っているとされる交際を習慣的に行っていることは共同体のあらゆる階層に最も有害な影響を及ぼしたに違いない。人間の本性に戦いを挑む禁欲主義は、その反対の極みへと向かう反発を生み、それが守られたとしても心の清らかさに害を及ぼすことが多かった。結婚に常に最も粗雑な光を当て、種の繁殖を唯一の正当な目的とする習慣は、想像力に独特の倒錯的な影響を与えた。夫と離れて暮らしたいという妻の溢れんばかりの敬虔さは、しばしば夫を深刻な不品行に追いやった。最も親密な関係に罪の概念が持ち込まれ、このテーマ全体が歪められ、品位を下げられたのである。このような考え方や感覚を世界

から追放し、結婚の本来の単純さと尊厳を回復したのはプロテスタンティズムの大きな功績の一つである。ゴールドスミス（*オリバー、1730—1774）は、その偉大なロマンス（*ウエイクフィールドの牧師）の中で、単純で俗気のない牧師の無害な風変わりさを描こうとしたとき、教会で何世紀にもわたって普遍的だった聖職者の再婚の罪に関する見解を支持している、と書いた。古い迷信がどれほど衰退したかを示す喜ばしい例証がここにある。

禁欲主義がもたらしたもう一つの大きな弊害は、女性の人格と地位を極度に卑下する傾向だった。この傾向には、公平に見るなら東洋の一般的な女性軽視の痕跡が明らかで、初期のユダヤ教文献の影響が一部見られる。花嫁の父に購入代金を支払うという習慣が認められていた。一夫多妻が認められ、最も賢い男に膨大な規模で実践されていた。女性は人間の悪の根源とされていた。すべての子供の誕生後に清めの期間が設けられていたが、非常に重要な規定として、女兒には男児の二倍の期間が必要だった。ユダヤ人の論者は「男の悪は女の善に勝る。」と力強く宣言している。初期のユダヤ史に示される女性の卓越性のタイプは全体にレベルが低く、ローマ史やギリシャの詩のそれにはるかに劣っていることは確かである。旧約聖書の中で最も熱い女性への賛辞はおそらく、最も酷い裏切りによって、彼女の屋根の下に避難してきた逃亡者を眠っている隙に殺害した、あの女性に贈られたものだろう。（*ヤエル、士師記4章21節）

ユダヤ人の著作と、女性を男性の誘惑の主因とする禁欲的感覚の複合的な影響は、神父たちの著作の中の非常に目につく非常にグロテスクな部分であり、特定の女性への追従と非常に奇妙な対照を成している、凄まじい毒舌の中に見ることが出来る。女性は地獄の扉であり、すべての人間の悪の源とされた。彼女は自分が女性であるということ自体を恥じるべきである。彼女は自分がこの世にもたらした呪いのために、絶え間ない懺悔の日々を送らなければならない。彼女は自分の衣服を恥じなければならない。それは彼女の墮落の記念物だからである。彼女は特に自分の美しさを恥じなければならぬ。それはダイヤモンドの最も強力な道具だからである。確かに肉体的な美は教会の糾弾の永遠のテーマだった。ただし、一つの奇妙な例外があったようである。中世の司教の墓は常にその容貌の美しさに言及していた。六世紀のある地方教会会議では、女性は不浄であるという理由から素手で聖体を受けることさえ禁じられた。彼女らの本質的に従属的な立場は維持され続けた。

この教えは女性に関する立法の原理の一端を担った可能性が高い。異教時代の帝国の法律は女性の古来の不利な条件を絶えず撤廃しており、女性の利益になる立法的な動きはコンスタンティヌスからユスティニアヌスまで衰えることなく続き、蛮族の初期の法律のいくつかにも現れている。しかし封建法の全体において女性の法的地位は異教徒の帝国でのそれよりもはるかに低かった。カトリックの離婚や弱い性の従属に関する教義から必然的に生まれた個人的な制限に加え、女性が多額

の財産を継承することを不可能にし、ほとんど結婚か女子修道院かという選択を迫るような数多くの厳しい法律を私たちは見ることができている。女性の完全な劣位は法律によって維持され続けた。ローマで娘たちから父親の遺産の大部分を取り上げる不正義にしばしば反発していた寛大な世論は完全に消滅した。教会法が立法の基礎になったすべての場所で、娘や妻の利益を犠牲にする継承法、およびこれらの法によって形成され、統制されてきた世論を見ることができている。そして前世紀末まで、これを廃止しようとする真剣な試みはなかった。フランスの革命家たちは、シエイエス（*エマニュエル・ジョゼフ、1748—1836）とコンドルセ（*ニコラ・ド、1743—1794）の提案した女性の政治的解放は拒否したものの、少なくとも息子と娘の平等な継承を確立した。そして遅かれ早かれ世界を横断しなければならぬ法律と見解の大改革を開始したのである。

純潔の水準を高める努力において、蛮族による侵入と征服はキリスト教の指導者を大いに助けた。莫大な数の奴隷従者の消滅、ほとんどの公的競技の停止、侵略に伴う全般的な貧困は、すべて女性の徳に有利だった。そして蛮族の諸部族がいかに暴力的で無法ではあっても、この点では文明的な社会よりはるかに優れていた。はるか昔タキトゥスは非常に有名な著作の中でゲルマン人の純潔を最も好ましいものと褒めそやしている。彼が言うところによれば、彼らの間で不倫は非常に稀だった。姦婦は髪を剃られて家から追い出され、村中で不名誉な扱いを受けた。罪を犯したことを知られた女性は若くても、美しくても、財産があっても、夫を得ることはできなかった。一夫多妻は王

侯に限られ、王侯は多数の妻を持つことを、情欲の満足より、むしろ威厳の印と想っていた。母親は必ず自分の子供に乳を飲ませた。嬰兒殺しは禁じられていた。未亡人の再婚は許されなかった。男たちは自分たちより妻が捕虜になることを恐れた。彼らは女性には神聖な予言の能力があると信じていた。彼らは神託を受ける存在として女性に相談し、その助言に従った。

一般にタキトウスはこの著作で同胞の怠惰な習慣を非難し、蛮族の徳をかなり誇張したと信じられており、それはありえないことではない。しかし彼の描写の実質的な正しさには多くの証拠がある。約三世紀後、帝国に勝利した蛮族の風俗を目撃し、記録したサルウィアヌスは彼らの貞節が征服した人々の悪徳と対照的であることを最も強い言葉で証言している。スカンジナビアの神話には純潔というテーマに関する異教徒の明確な感情や、誘惑者を来世で脅かす恐ろしい刑罰を示す伝説が数多くある。蛮族の女性は医療や夢占いをする習慣があり、とても頻繁に夫の戦いに同行し、ばらばらになった軍隊を結集させ、自らも戦いに参加することさえあった。アウグストウスは蛮族の長を人質にすることは無意味であり、裏切り者たちの忠誠を確保する唯一の方法は彼らの妻を人質にすることである、という発見をした。少なくとも彼らは妻を裏切ることにはなかつたからである。征服された民族の間には、ローマ史の最も素晴らしいものにも匹敵する女性の英雄的行為があったと言われている。マリウスがチュートン人の軍勢を打ち負かしたとき、その妻たちは征服者に、自分たちをウエスタの処女の召使になることを許してほしいと懇願した。奴隷ではあっても少なくとも

も自分たちの名誉が守られることを望んだのである。しかしその願いは叶えられなかった。そしてその夜、彼女らは皆自害してしまった。ある有力貴族がカンマーというガラティア（*トルコ中央部）の女性を口説いたが、夫に忠実な彼女はその懇願をすべて拒んだ。彼はいかなる危険を冒しても成功を収めようと決意し、彼女の夫を暗殺させた。そして彼女がディアナ神殿に逃げ込んで巫女になると、彼女を丸め込むために次から次へと貴族を送り込んだ。しばらくしてから、彼は思い切った彼女に会いに行った。彼女はその意に従うふりをした。しかし、まず女神に献酒しなければならぬと言った。彼女は毒入りの葡萄酒の杯を持って、巫女として祭壇の前に現れた。彼女はその半分を自分で飲み、残りを罪深い恋人に手渡した。そして彼が杯を澀まで飲み干すと突然、殺された夫の復讐を許され、もうすぐ夫に再会できることを感謝して激しく祈り始めた。（*プルタルコスの記事）また、エポニーナというガリア女性は夫婦の貞節についてさらに顕著な事例になった。彼女の夫ユリウス・サピヌスはウエスパシアヌスに反逆した。彼は敗れた。そしてゲルマニアに逃れることは容易だったが、若い妻を捨てて行くことはできなかった。彼は自分の別荘に引きこもってその隠された地下室に潜み、解放奴隷に自分が自殺したという噂を流させ、自分の死体が消えたことと理由をつくるために別荘に火を放った。自殺の知らせを聞いたエポニーナは三日間食事もせず、に突っ伏していた。やがて解放奴隷がやってきて、自殺は偽りであることを告げた。彼女は昼は嘆き続け、夜は夫のもとを訪れた。彼女は子供を産んだが、友人たちにお腹を隠し通すことができたのは軟膏のおかげだったと言われている。出産のときが近づくと、彼女は一人で地下室に入り、誰

も立ち会わず、誰の助けも借りずに双子を産み、地下で育てた。サビヌスが発見されたときには、彼女がその務めを果すようになって九年が過ぎていた。そして、彼と一緒に死ぬことを最後の願いとしたその妻の懇願にもかかわらず、彼を処刑したことはウエスパシアヌスの永遠の不名誉になった。

蛮族の道徳的純潔は禁欲運動によって植え付けられたものとは全く違っていた。それは結婚だけに集中していた。それは高貴な夫婦の貞節に現れていた。それは独身主義には適しておらず、ここまで見てきたように司祭たちの過度の無秩序を防ぐことはできなかった。蛮族の王たちの一夫多妻も何世紀の間、キリスト教によって抑制されることなく、あるいは少なくとも禁じられることなく行われていた。カリベルト王（*1世、AD 517―568、パリの王）とキルペリク王（*1世、AD 539―584、ソワソンの王）は同時に多くの妻を持った。クロタール（*1世、AD 497―561）は最初の妻の生前にその妹と結婚したが、王の意志が伝えられると彼女は「我が主君の目に適うようなさいますように。しもべはただ、み恵みによって生き永らえさせていただけますように。」と言ったと伝えられている。テオデベルト（*1世、AD 500―547）は、司教史家によってその人格の全体的な善良さを熱く称賛されているが、最初の妻が残酷な罪を犯したために彼女を捨て、その妻の生存中に以前から婚約していた別の妻を娶った。そしてこの二番目の妻の死後、最初の妻が生きている間に三番目の妻を迎え、後に彼女を殺害している。聖コロンバヌス

がガリアから追放された主な原因は、テウデリック王（*2世、AD?—613）の一夫多妻を糾弾したことである。ダゴベルト（*1世、AD603—639）には三人の妻がおり、また多くの側室がいた。シャルルマーニュは同時に二人の妻を持ち、意のままに多くの側室を持った。この時期より後には、こうした例は珍しくなった。ローマ教皇と司教は家庭内の風紀を厳しく監視して王や貴族が妻を離縁しようとする試みに激しく反対し、ほとんどの場合成功を収めた。

しかし、こうした驚くべき事実があるにせよ、蛮族の全体的な純潔さは当初から後期のローマ人のそれよりも優れていたことは疑いようがない。そしてそのことは彼らの法律の多くに現れている。この徳に高い価値が置かれていたことを示す非常に喜ばしい事実がある。サリカ法典（*フランク王国の法律）では男に臆病の濡れ衣を着せても三ソリデイ（*ローマ帝国のソリドウス金貨の複数形）の罰金で済むのに対し、女に不貞の濡れ衣を着せると四十五を科せられたのである。チュートン人の感情は、姦通と強姦に対する非常に厳しい法律にも表れている。そしてそれらを防ぐための奇妙な細心の予防措置が取られたことがある。スペインの西ゴート族の法律では夫や近親者、あるいは少なくとも適切に任命された証人の立ち会いなしに外科医が自由人女性を手術することが禁じられていた。またサリカ法典は女性の手を不適切に押しつけた者に罰として金貨十五枚を課していた。

蛮族に支えられたキリスト教の影響下で、世界は徐々に大きな変化を遂げた。ここで考察中の悪

徳はより少なくなった。確かにそれはあまり途方もないものではなくなった。そして新たな慎み深さによって監視の目を逃れた。道徳の理論はより明確になり、実践もいくらか改善された。文筆の極端な粗暴さは消え去り、目に余る結婚の冒瀆は常に咎められ、しばしば禁じられた。懺悔の規律と説教壇の訓戒は、異教徒の古代に知られていたものより計り知れないほどに高い、純潔の重要性の感覚を広めた。大聖グレゴリウスは異教徒の哲学者に倣って、母親たちに子供に自分の乳を与えることを強く説いた。そして贅沢な服装や習慣を禁じる沢山の細かく厳しい指針が作られた。売春をほとんど神聖視していたギリシャと小アジアの宗教施設は永遠に廃止された。そして遊女は下層に沈んだ。

こうした変化とは別に、新たな熱意によって結婚における互いの貞節の義務が強いられた。ほとんどの時代における、男性の過ちの軽視と、同じ罪を犯した女性の一般的に極度に厳しい扱いのコントラストは、道徳史の中の最も特異な例外の一つである。また、通常誘惑するのは容易に赦される側の性であること、そうした破滅的な罰を受けるのが世に言う最も弱い性であること、そして男性とは違って、女性の場合この悪徳は最も酷い惨めさと貧困の結果であることが非常に多いことを思うならば、このコントラストはなおさら際立つだろう。このような非難の差異については、いくつかの理由が挙げられている。この罪は男性よりも女性の側で確実、かつ容易に発見することができる。従ってより確かに罰することができる。また子供を養う義務は父親にあるので、他人の子供

を家族に迎えることは彼にとって特別な損害である。一方、姦通から生まれたのではない非嫡出児は、父親が彼らを養う約束をしていないため、最終的には犯罪者や貧困者になって社会の負担になるだろう。また、（*情欲の強さなどの）いくつかの理由が一方の性（*男性）にとってこの徳を守ることを他方の性よりも困難にしていること、現状の世論に起因する道徳的墮落をすべて差引いた場合、その違反は当然男性よりも女性の品性を深く傷つけること、またこの問題に対する私たちの感覚の多くは、男性によって作られ、彼ら自身の保護を第一の目的とした法律や道徳体系に起因していることも付け加えていいだろう。

両性に課された義務の平等を主張する、神父たちの文言は極めて明白なものである。またこの教義自体はセネカやプルタルコスによって先取りされていたが、それが初期教会でされていたほど完全に実現されたことは、それ以前にもそれ以後にもなかっただろう。しかしこの勝利が維持されたとは言いがたい。現在、道徳の水準は異教徒のローマよりもはるかに高いが、両性に対する非難の平等は異教徒の時代と同じように大きいのではないかという疑問がある。そしてその不平等は絶えず最も恥ずべき、最も卑しむべき不正義の原因になっている。ある点において騎士道精神は実に大きな、それが衰退してからも長く残存する退歩をもたらした。誘惑者、特に虚栄心や冒険心以上の強い動機を持たずに、一種のスポーツとして自分の道を行く、情欲なき誘惑者のキャラクターはキリスト教圏の大衆文学において、古代とは比べ物にならないほど美化され、理想化されたのである。

(*主君の妻と騎士の宮廷恋愛) このような人物の目的が、最も冷たい最も意図的な裏切りによって罪のない女性の人生を破壊することであることを思うなら、彼の動機の軽薄さとそれが与える取り返しのつかない損害を比べるなら、彼は自分を愛するよう口説くことで犠牲者を欺くだけであり、自分を信じるよう説得することで犠牲者を破滅させるだけであることを思うなら、これほどまでに多情で心ない残酷さ、あるいはこれほどまでに多くの汚名と不名誉の要素を兼ね備えた人物を想像するのは難しいと言わざるを得ない。このようなキャラクターが何世紀にもわたって文芸のかなり部分において人々の理想とされ、名誉を最も重んじる人々の誇りだったことは、間違いなく歴史上最も嘆かわしい事実の一つである。そしてそれが道徳の歪みを示していることは古代ギリシャが遊女に与えた地位に勝るとも劣らない。

同じ一つの行為を男が求めるのは些細なことであり、女が許すのは悪であるということなどあり得ないという根本的な真理は初期のキリスト教徒によって堂々と主張されたものの、キリスト教圏の一般的な感情にはならなかった。しかし、教会が結婚に付与した神秘的な性質には非常に大きな影響力があった。部分的に結婚を秘跡に引き上げることによって、部分的にそれをいくらか神秘的で、はつきりとは定義しにくいキリストと教会の結合のイメージで表現することによって、一人の男と一人の女の生涯の結合はあらゆる状況下において不正ではない唯一の両性の関係である、という感情が育まれた。そしてこの確信は根本的な道徳的直観の力を獲得した。

しかし、あるがままの本性は人間をその方向に導くのに十分であるにもかかわらず、通常、それは自然法よりも実定法において厳しく規定されていることは間違いないだろう。この問題をありのままの理性に照らしてシンプルに考えるなら、人間の義務の全ては二つの規則から成っている。まず、何であれ幸福を傷つけることを避けなければならない。そして、何であれ品位を下げることが避けなければならない。前項において、彼は自分の行いの直接的な結果だけでなく、より遠隔的な結果も考えなければならない。このような場合、彼はバートナーがこの結びつきによってどのような影響を受けるか、社会がこの関係をどう見るか、生まれて来る子供の地位、この誕生の影響、そして自分の事例が社会全体の幸福に与える影響についても考慮しなければならない。この計算の要素のいくつかは、社会のさまざまな段階において変化する。例えばある時代の世論は別の時代には完全に容認される関係を非難し、それゆえ罰する。そして子供の地位はその誕生が社会に与える影響と同様に、個々の、そして国の事情に大きく依存している。

後項には道徳的感覚を伸ばしたり曇らせたり、人としての格調を上げたり下げたり、想像力の逸脱を和らげたり刺激したり、純粹な愛情を広げたり無力化したり、人間の本性の動物的部分を多かれ少なかれ優位にしたりする、性的関係の影響力が含まれている。私たちは道徳的性質の直観によって、これが優位に立っているのは常に不幸な状態ではないにしても、常に品位が低い状態である

ことを知っている。また、ある特定の結びつきがそれまで潜在していた力強く美しい愛情を喚起する一方で、他の結びつきが特別に愛情を枯れさせ人格を墮落させやすいことも、私たちの存在の法則として知っている。

私たちはこうした考察の中に、一人の男性と一人の女性の生涯の結びつきこそが男女関係の普通の、あるいは有力なタイプであるということを手張するに十分な根拠を見出す。それが全体として、すべての当事者の幸福と道徳的向上に最も寄与するものであることを証明できる。しかしこの点を超えて前進することは、特別な天啓による助けでもない限り不可能だろうと私は考えている。このタイプが最有力だからといって、それが唯一のタイプでなければならぬとか、社会の利益のためにすべての関係を同じ型に押し込むべきであるということには決してならない。公然の数年間だけの関係は、常に結婚と隣り合わせに存在してきた。そして世論がその正当性を黙認したのためにパートナーの一方または両方を教会が破門しておらず、これらのパートナーが罪の意識に伴う無気力で墮落した生活を送っておらず、生まれてくる子供たちに適切な備えをしている場合、このような関係が必ず非難されなければならないということは、シンプルながらもそのままの理性では証明できない、と私は信じている。人間の幸福と道徳的健康のためには、生涯の結びつきが盲目的な欲望の衝動に駆られたものではないことが極めて重要である。人生の情欲が最も強い時期に、自分が属する社会的階級の一員として子供を養育できず、従ってそこで結婚すれば社会を傷つけることになるが、

それでも非嫡出子が属することになるより低い社会階層において、その子供に名誉ある生涯を送らせることが完全に可能な人々は常に大勢いるのである。こうした条件下において、この関係は弱いパートナーにとつて有害ではなく、有益なものである。それは身分差別を和らげ、社会習慣に活気をもたらす。そして、それは性的関係の乱れによつて品性を下げることがなく、軽率な結婚によつて社会を傷つけることがない。もしそれがなかったなら、その逆のことが増えるだろう。限りなく多様な環境や性格の中から、功利主義者たちが彼らの立場で助言できるケースが常に出てくるだろう。

異教徒の帝国の法律やキリスト教によつてもたらされた変化を理解しようとするなら、こうした事について詳細に考察する必要がある。帝国の立法者たちはこうした関係をはっきりと認識し、それを承認し、尊厳を与え、統制することを主目的とした。離婚の無制限な自由は事実上結婚という名の下にそれらを含んでいた。それと同時にその名はそれらを汚名から守り、非公認の結びつきの多くの最も重大な悪徳を防いでいたのである。内妻という言葉も、共和国では現代のそれと同じ意味を持っていたが、帝国では厳密に合法的な結びつきを表していた―これは主にアウグストゥスによる革新で、間違いなく独身主義に対する法律の一環であり、また一般的だった放縱な習慣の是正という意味合いがあったと思われる。この結びつきは本質的には結婚の一つの形に過ぎず、内妻を持ちながら妻または別の内妻を持った者は法律上、姦通の罪を問われることになった。最も一般的

な結婚の形と同様に、それは儀式なしに成立し、意のままに解消することができた。その特異性は、法律によって婚姻を禁じられていた貴族階級の男性と解放奴隷の女性の間で結ばれたこと、内妻は自分の地位を完全に認められ、それは名誉あるものだったが、その地位は相手と同じではなかったこと、彼女には持参金がなく、その子供は彼女の地位に留まり、父親の地位と相続権から除外されるというものだった。

このような考え方に対してキリスト教は直接の容赦ない戦いを宣言した。この戦いはローマ法には不完全しか反映されなかったが、教父たちの著作や公会議の布告の大部分には明確に現れている。宗教的教義として、一律に、柔軟性なく、あらゆる功利的な計算と関係なく、生涯の結婚以外のあらゆる男女関係は罪であると説かれたのである。人々はこのことを公理と見なすよう教えられ、それゆえ一時的な関係には厳しい社会的制裁と深い不名誉が伴うことになり、そうしてこの関係はその功利的側面さえも大きく修正され、ほとんどの国において秘められ、偽装されるものになった。おそらく特定の神学的教義にこれほど大きく左右された倫理の分野は他になく、その衰退によってこれほど深い影響を受けた分野もないだろう。

同じ動きの一環として、異教徒の帝国における純粋な市民的結婚は徐々に宗教的結婚に取って代わられた。人生の非常に大事な節目に神の祝福を求めるのは明らかに適当なことである、そして宗

教的儀式との組み合わせは契約の厳肅さをより深く印象づける。キリスト教が結婚に与えた本質的に宗教的で、神秘的でさえある性格ゆえに、聖別は極めて自然に行われるようになった。しかしそれが絶対的に必要と見なされるようになるのは、ごくゆっくりのことだった。すでに述べたように奴隷の結婚では長い間、それは省かれていた。（*ユステイニアヌ法以前には奴隷には結婚制度がなかった）自由民の場合でさえ一般に行われてはいたが、十世紀まで義務ではなかった。結婚を神聖化するという第一の目的に加えて、やがてそれは聖職者の権威を保証するための強力な道具になった。人生の最も重要な契約において、彼らは人々をその制約に従わせることが出来るようになったのである。そして現代において市民的結婚の公認がカトリック聖職者の家庭生活に対する力を大幅に弱めたことは、教会の影響力が受けた最も深刻な打撃の一つだった。

同時に離婚の絶対的な罪深さは公会議によって強く主張され、他の多くの点と同様、この点においてもローマ法とは大きく違っていた。コンスタンティヌスは離婚を夫三回、妻三回に制限した。しかし人々の習慣には法律より力があり、一、二回の法改正を経てユステイニアヌス法典で再び離婚は自由になった。一方、教父たちは妻の姦通に伴うものについては少しためらいを見せたが、その他のすべての離婚に罪の宣告をすることに何のためらいもなかった。そしてローマ法の特権を利用したキリスト教徒には懺悔の規律の期間が課された。この二重の法制度は何世紀も続いた。蛮族の法律は妻を捨てた者に厳しい罰金を科すことによって離婚を制限していた。シャルルマーニュは

離婚は罪であると宣言したが、あえて刑罰を科すことはせず、自らも離婚した。一方、教会は離婚の罪を犯した者を破門にすると脅し、実際に雷を落としたこともあった。そしてようやく教会が勝利して民法が教会法の原理を採用し、すべての離婚を禁止したのは十二世紀になってからのことだった。

この全面的な禁止が、人間の幸福や道徳的な健康にどの程度寄与したかをこの著作で検証する気はない。これは現在もよく擁護されているが、もともとキリスト教の国々において功利的な理由から課せられたものではなく、結婚の秘跡的な性格、結婚はキリストとその教会の永遠の結合の特別な象徴であるという信念、および福音書の有名な一節（*マタイの福音書19章9節・不品行のゆえでなくて、自分の妻を出して他の女をめとる者は、姦淫を行うのである）に基づいたものだったことを、指摘するだけに止めたい。姦淫の場合でさえ結婚を解消することを禁じるカトリックの教義の厳しさは現代の法律によってかなり緩和され、同じ方向でさらなる措置が取られることは疑いなくと思われる。しかし、異教徒帝国の無制限な自由以来、実践と理論の両面にもたらされた大きな変化はすべての人々の前に明らかにしなければならない。

これほどまでに厳粛で、取り消すことができない婚姻関係は自由に結ばれることが不可欠であり、あるいは少なくとも非常に重要だった。共和国末期のローマの愛国者たちは、結婚は国家に子供を

供給するための手段であり、そのような観点から義務としてすべきものと考えていた。そしてアウグストゥスの法律は結婚を控える者に多くの欠格事由を課していた。こうした結婚の誘因はキリスト教の影響下でいずれも消滅した。市民的な徳の衰退とともに人々の感情も消え去った。禁欲的な熱意が独身状態を極めて神聖なものとなし、その法律は廃止されたのである。

神学者たちが理想とする結婚の形を実現するためには、もう一つ重要な条件があった。それは教会のメンバーと宗教的意見を異にする者との婚姻を防ぐことだった。異宗派間の結婚は、宗派同士の悪意と刺々しさを和らげるために何よりも有効である、と言われていることは正しい。しかし、それが可能になるのは相応な寛容が達成された後のことである、と付け加えておかなければならない。それぞれのパートナーが相手は永遠の不幸を運命づけられていると信じ、それを実感しているような結婚に真の幸福も共感も信頼もあり得ない。そして子供たちの何人かがある宗教で、他の何人かの子供たちを他の宗教で教育する、という家庭内の合意は、親たちがそれを何人かの子供たちが地獄へ行くことへの合意と信じている場合には不可能だろう。

キリスト教が導入される前の世界にはおそらく、信仰の違いから生じる家庭内の不幸はほとんど、あるいは全くなかっただろう。なぜなら意見の相違は以前からあったことだろうが、その相違は同様の重大な結果をもたらさなかったからである。ローマ帝国の改宗や宗教改革、あるいは十六世紀

を騒がせたものよりもはるかに深刻な問題が多く、思想家や学者の関心を集め、最も高い教育を受けた男性と大多数の女性の宗教的見解の間の広く深い溝が痛いほど明らかになって、現代など、宗教が大きく変化する時代には、それは特に厄介な問題だった。多くの科学的発見、批判的、歴史的研究、教育改革によって、ものを考える男性たちは極めて重要な宗教問題に直面するようになった一方、女性たちはそれらの影響からほとんど完全に排除されてきたのである。彼女らの心は通常、生まれながらに男性よりも公平さや不安を受け入れる余地が少ない。そして最も知性を鍛え、強化する学問が女性教育からほとんど完全に省かれていることが、その差をますます大きくしている。同時に、それは通常伝統的な意見に対する熱烈な信仰を植え付け、反対意見との接触を一切避けさせることを主な目的としてきた。しかし、萎縮した知識と不完全な共感だけがこの教育の成果ではない。ある種の神学教育の特徴は、常に正常な判断の原理をすべて覆し、知的な遠慮を完全に破壊してきたことである。他のテーマにおいて、正直な確信に重きを置かないことにすれば、重大な論争について意見する資格を有するために必要な知識の量を、少なくともある程度、私たちは理解できる。論争のテーマについての全くの無知は、独断的な自信を制止する。また自分が無知であることに気づいている人物は、教育を受けた隣人が自分が全く知らない領域について多くを読み、考えることによって、その無知な人物が教えられてきた見解を修正したり、否定したりしたことを知って、少なくとも分別や慎みがあれば、より教育のある友人を愚か者と憐れんだりしないだろう。しかし、神学的な問題ではこのようなことは決してない。揺るぎない信仰を第一の義務と教えられ、

あらゆる疑念に通常、罪または呪われるべきものという汚名を着せられることによって、他の分野では類を見ない心理状態が作り上げられる。多くの男性や女性は、聖書批判や歴史研究、科学的発見の初歩の初歩をまったく知らず、非難する人々の著作を一ページも読むことなく、著作の中の一つの主張も理解することなく、自分の信仰を守る論拠についても、それが反駁される論拠についても、まったく合理的な知識を持たないまま、あらゆる論争を最大の自信を持って裁き、彼らが教えられて来たことに異議を唱える人々を非難し、憎み、哀れみ、あるいはその改心のために祈り、微塵も疑うことなく、自分が吟味せずに受け取った意見は真実に違いなく、他の人が吟味して到達した意見は偽りに違いはないと思ひ込み、その根拠を調査する以外のあらゆる方法で自ら異端と呼ぶものを非難することを人生の主目的にするのである。異端とされるあらゆる書物に対して大騒ぎする声の大部分は、その書物を開くことさえ、あるいはその書物が関係するテーマの真の、綿密な、公平な調査に入ることさえ罪と見なす人々のものと思われる。無数の説教壇はこのような考え方を支持し、女性の神経と想像力を刺激するのに適した熱烈なレトリックを用いてある種の見解や感情から逸脱したすべての人々の嘆かわしい有様を描写している。盲目の伝道や秘かな不幸せが無数の家庭に入り込み、家族の平和を害し、夫婦間の信頼を冷却し、真理を探究する者が遭遇しなければならぬ困難を計り知れないほどに増大させ、知的臆病、不正直、偽善を広く拡散しているのである。

こうした家庭の分裂はローマ帝国の改宗の時期に非常に顕著になった。そして改宗者の宗教的正

統性と熱意をそのまま守り、絶え間ない不和を防ぎたいという自然な願いが教父たちを刺激し、すべての教会員以外との結婚を激しく非難させた。また、この糾弾の中には後に曖昧にされた、非常に特異な教義の輪郭を見て取れる。それは前世紀のイギリスにおいて、臣従宣言拒否者、ドッドウェルの興味深く、博識な著作の中で復活した。キリストと教会の結合は結婚と表現されてきた。このイメージは単なる比喻やたとえではなく、明確に定義はできなくとも、それゆえに真実性を減じることのない、神秘的な和合を示唆していると考えられていた。キリスト教徒は「キリストの手足」であり、キリスト教徒ではない人々と結婚によって結びつくことは、文字通りの不倫または姦淫の種である、と言われたのである。旧約聖書は古代世界の選民であるイスラエル人と異邦人との婚姻を汚れた行為としている。そして少なくとも数人の教父たちの見解によれば、キリスト教共同体の非信者に対する立場はユダヤ人の異邦人に対する立場と同じものだった。聖キプリアヌスは「異邦人との婚姻によってキリストの手足に売春させる者」の罪を糾弾した。テルトゥリアヌスは非信者との婚姻を姦淫と呼び、教会の勝利の後、ユダヤ人とキリスト教徒の婚姻は死刑とされ、法律によって姦淫の汚名を着せられた。ローマ法は正統派と異端の婚姻を禁じていなかった。しかし多くの教会会議はそのような婚姻を罪として強い言葉で糾弾していた。

純潔を極度に神聖視し、結婚以外のあらゆる性的関係を絶対的に非難し、結婚を同じ宗教的意見を持つ男女の永久的結合であり、厳粛な宗教儀式によって聖別され、深い宗教的意味を持ち、死に

よってのみ解消されるものとするキリスト教の観念を形成し、徐々に実現したことは、私たちが調査中の倫理の領域に現れた最も明らかなキリスト教の影響だった。新しい宗教のもう一つの非常に重要な成果は、女性において特に優れている資質をそれまでよりはるかに大きな榮譽に引き上げたことである。

男女の特色の違い、そしてその違いが様々な時代、国、哲学、宗教の理想のタイプにどのように影響を与えたかということは最も興味深い研究テーマだろう。肉体的には、男性は強さにおいて、女性は美しさにおいて紛れもなく優位に立っている。知的には、科学、文学、芸術のあらゆる部門において、どれほど男性が独占的に主流を占めてきたか、あらゆる形において優れた才能を発揮してきた女性の数がどれほど少ないか、最も偉大な男性のうちのどれほど多くが最も不利な状況に屈せず偉業を成し遂げたか、その境遇が最も有利に働くと思われる、音楽または絵画においてさえ女性が優位に立つことにどれほど完全に失敗したかを思い起こすなら、女性の劣位を否定することはほとんど不可能だろう。女性のラファエロや女性のヘンデルを見つけることは、女性のシェイクスピアやニュートンを見つけると同様に不可能である。知性において女性は男性より散漫で不安定で、一般的原理より個々の事例にとらわれ、熟慮の上の理論や過去の経験より直感によって判断を下す。しかし思考の敏捷さや速さ、天賦の機転、感情の細かな変化を素早く正確に捉える力において通常、男性より優れている。そのため会話において、また手紙の書き手、女優、小説家としてし

ばしば非常に抜きこんでいる。

道徳的には、全体的に女性の方が男性より優れていることは疑いようがないと思う。警察統計といういささか粗雑で不十分な基準を用いるなら、男女の人口はほぼ同数であるにもかかわらず、通常男性の犯罪の数は女性の五倍以上であることがわかる。ただし、強い方の性として家族を支える責任を負っている男性には、女性より多くの誘惑があることはきちんと言っておかなければならない。一方、飢餓寸前の極貧は、生計の手段が最も限られ、収入が最も少なく最も不安定な女性に最も多く見られることも忘れてはならない。自己犠牲は徳が高く信心深い人格の最も顕著な要素であるが、これは男性では、その一生を他人の意志に従い、他人の喜びに諮る女性よりもはるかに稀である。徳は大きく二つに分けられる。衝動的なもの、つまり感情から自然に湧き出るものと、熟慮の上のもの、つまり義務感に従って行われるものである。そしてそのいずれにおいても女性は男性に勝ると私は想像している。その感性はより豊かで、思考と行動においてより純潔で、過ちを犯した者にはより優しく、苦しむ者にはより情け深く、自分の周囲に愛情を注いでいる。一方、貧しい人々の妻や、窮状にありながら哀れとは言い難い多くの人々の妻の生き方を見るならば、日々の連綿たる自己否定、無数の試練への忍耐、他人の幸福や将来のための自分の楽しみの絶え間ない故意の犠牲に人生のすべてを費やしている人々は、他ではこれほど頻繁に見つけることができない、と認めざるを得ないだろう。しかし女性は男性に比べて放縦や残虐の傾向は少ないものの、一般に卑

小な虚栄心、嫉妬心、意地悪さ、野心に耽ることが多い。また積極的な勇氣においても男性に劣る。彼女らは忍耐の勇氣において一般的に勝っている。しかし、その消極的な勇氣は耐えて抗う不屈の精神というよりは、耐えて屈服する諦念である。知性の倫理において彼女らは決定的に劣っている。私がすでに用いた表現を繰り返すなら、女性は真理をほとんど愛さないが、自分が「真理」と呼ぶもの、あるいは他人から貰い受けた見解を熱烈に愛し、それと違うものを激しく憎むのである。彼女らは公平性や疑念を持つことがほとんどできず、その思考は主に感覚であり、行いにおいて非常に寛大であるが、その見解や判断においてほとんど寛大ではない。彼女らは納得させるよりも確信させる。そして物事の正確な真実としてではなく、慰めの源として信念を重んじる。また男性に比べて、限定的な事情を認識する能力、自分が反対している体系の中に善い要素があることを認める能力、相手の人格とその主張を区別する能力において劣っている。男は正義に、女は慈悲に傾く。男はエネルギー、自立心、根気（*Perseverance）、度量に優れ、女は謙虚さ、優しさ、慎み深さ、忍耐（*endurance）に優れている。私たちに憐れみと愛を抱かせる、実感のための想像力は男性より女性において敏感である。それは特に目に見えないものに、より思いを馳せることができる。彼女らの宗教的、信仰的な実感がより鮮明なことは間違いないだろう。また、父親は目の前の子供の死に最も心を動かされるのに対し、母親は全体的に遠い国での子供の死に最も心を動かされるようである。しかし女性の共感強くはあっても、一般的に男性のそれより幅が狭い。その想像力はより個人に向かうものであり、結果として彼女らの愛情はその主張よりもむしろ

る指導者に集中する。彼女たちが偉大な大義を愛するとすれば、一般的にはそれが偉大な人物によって代表されているか、彼女らが愛している人物と関係があるためである。政治において、彼女らの熱意は愛国心というよりも忠誠心である。歴史においては男性よりも、全体的な大義の進行の中の伝記的な事件や特色だけに注目する傾向がある。博愛においては大きな集団の不幸を和らげるよりも防止するために用いられることが多い慈善事業より、個別の苦しみを和らげる施しに優れている。

「ギリシャ芸術で最も美しいのは、女性ではなく男性である」というのはウインケルマン（*ヨハン・ヨアヒム、1717—1768、美術史家）の言葉である。そしてこの言葉の正しさはペイディアスの時代の作品について近年私たちが得た、より多くの知識によって十分に確かめられた。芸術が最高の完成度に達したのはその時代だった。そして同時に、その時代の卓越した特徴は力強さと自由、男性的な壮大さだった。古代の芸術がシンブルに表現していた道徳的理想についても類似した観察が可能である。古代において最も称賛された徳は、ほとんどが男性的なものだった。勇氣、自己主張、度量の大きさ、そして何よりも愛国心が理想的なタイプの主な特徴であり、貞節、慎み、慈愛といった、特に女性的で優しい家庭の徳の評価は非常に低かった。夫婦の貞節を唯一の例外として、高く評価された徳はどれも明白な、あるいは際立った女性的な徳ではなかった。この例外を除けば、古代の最も輝かしい女性たちのほぼ全員は、主としてその性の自然条件を克服した

がために輝かしい存在なのである。芸術家たちが好んだ女性の理想像がアマゾンだったというのは特徴的な事実である。私たちはスパルタの母（*出征する息子に勝って盾を持って帰るか、死んで盾に乗って帰ってくるよう言った）やグラックス兄弟（*共和政ローマの護民官として改革に努めたが二人とも死に追いやられた）の母が、自分の子供たちが国のための犠牲になったとき、あらゆる悲しみの表情を抑えたことに感嘆し、ポルキアやアツリアの堂々たる勇氣に驚嘆するかもしれない。しかし私たちが彼女たちを称賛するのは、主として彼女たちが女性でありながら、その性の弱さから自らを解き放ち、最も強く勇敢な男性のような英雄的な不屈の精神を示したからである。ハンガリーの聖エルジェーベト（*1207—1231、夫の死後に持参金で貧者の病院を建てた）やフライ夫人（*エリザベス、1780—1845、女囚の処遇の改善に貢献）の高貴な献身と慈愛にも、私たちは同等の称賛を与えるかもしれない。しかし、それは彼女らが女性でありながらこうした徳を發揮したからではない。こうした徳を女性の性質が生み出すのにふさわしいものと感じるからである。英雄的理想から聖人の理想へ、異教の理想からキリスト教の理想への変化は、本質的に男性的なタイプから本質的に女性的なタイプへの変化だった。すべての偉大な哲学の学派の中で、最も忠実にローマの道徳的卓越性の概念を反映していたのはストアイズムだった。そしてローマのストアイズムの最大の代表者（*セネカ）は、それが他のすべての学派よりも最も断固として男性的なものである、と宣言することによってその特徴を一文に要約したのである。一方、柔和、優しさ、忍耐、謙遜、信念、愛を最も顕著な特徴とする理想のタイプは本来男性的ではなく女性的

なものである。常に彫刻が異教徒のものであり、絵画がキリスト教徒のものである理由は、おそらく一般に主張される歴史的な理由より深いものであって、彫刻は男性の美、すなわち力の美を、絵画は女性の美、すなわち柔らかさの美を表現するのに特に適しているという事実によるのかも知れない。そして異教徒の感情は主として強さ、勇氣、意識的な美德といった男性的な資質の賛美だったのに対して、キリスト教徒の感情は主として優しさ、謙虚さ、愛といった女性的な資質の賛美であるということなのかもしれない。キリスト教的感情を最も忠実に表現した画家として、キリスト教圏の宗教的感覚が認めた画家たちは、常に男性の登場人物にさえ女性的な美しさを大いに注ぎ込んだ人々だった。しかし同じ画家がキリスト教と異教徒の両方のタイプを描くことに成功したことは決してないか、稀である。ミケランジェロ（*1475—1564）の天才は力と挑戦の崇高さを展開することを愛したが、キリスト教の理想像の表現には大きく失敗した。ペルギーノ（*1448—1523）は古代の英雄たちの姿を描こうとして同様に失敗した。キリスト教圏の信仰と帰依において、徐々に聖母に与えられるようになった女性の理想像という地位は、女性の徳に加わった新しい価値の聖別、あるいは表出だった。

宗教的感情の強さにおいて全体的に女性が男性よりも優れていること、そして教祖への個人的愛着を中心的な義務とし、彼女らに特有な徳に前例のない尊厳を与え、また前例のない機会を与えた宗教が自然に女性たちを惹きつけたことが、ローマ帝国の改宗という大業において、女性の力が非

常に際立った地位を占めた理由である。女性の影響がこれほど強く、これほど認知されている重要な思想運動は他にない。迫害の時代には女性たちが殉教の先頭に立つことが多かった。また異教徒とキリスト教徒の論者は女性が教会に集まった素早さ、教会のために男性家族に行使した影響力について等しく証言している。聖アウグステイヌス、聖クリュソストモス、聖バシレイオス、ナジアンゾスの聖グレゴリウス、テオドレト（*キュロスの、AD393―466）の母親は、いずれも息子の改宗に主導的な役割を果たした。コンスタンティヌスの母聖ヘレナ、テオドシウス大帝の妻フラチラ（*アエリア・フラビア、AD356―386）、小テオドシウスの妹聖プルケリア（*AD398―453）、ウァレンティニアヌス3世（*西帝、在位AD452―455）の母プラシディア（*AD388―450）は、最も顕著な信仰の擁護者だった。異端の宗派においても同様の熱意が示され、アリウス派、プリシリアヌス（*AD340―385）派、モンタヌス派はいずれも熱心な女性信者群に支えられていた。禁欲主義において女性はほとんど役割を果たさないか、全く男性に劣っていた。一方、慈善という大きな仕事の組織化においては卓越していた。女性にとってこれほど見事にふさわしく、活動的な仕事の場合は他にない。最も古い時代から数多くの信仰と時代において、悩める人々の苦しみを和らげた、その力の個々の事例を見ることができるとは。しかしキリスト教の夜明け前に、彼女らの慈善の本能と才能に完全な活動の場が与えられたことはなかった、というのは本当だろう。ファビオラ、パウラ、メラニア、その他多くの高貴な女性たちは、その時間と財産を主に広大な慈善施設の設立と拡張に注ぎ、その中には世界初のものもあった。フラチラ

皇后は病院において自分の手で病人を看病するのが常だった。そしてそのような仕事をする覚悟はキリスト教徒の妻の第一の義務とみなされた。このように伝達された衝動は、時代から時代へと受け継がれた。どんなに腐敗した時代も、どんなに迷信的な教会も、人々の苦しみを和らげるために生涯を捧げた多くのキリスト教徒女性によって飾られなかったことはなかった。そして、このように興された慈善事業は、それを指揮した人々の道徳的尊厳を高めたほどには人間の不幸の総和を減少させなかった。

異端のコリリディア派（*マリアを神格化するアラビアの女性の宗派）では女性の司祭職が認められていた。正統派はこの栄誉を与えなかったが、彼女らは宗教的な聖別を受け、女性助祭として教会で小さな役割を果たしていた。この聖職は高齢の修道女に与えられ、正式に叙品されて、公会問答の教師や女性の洗礼の付き添いとしての助力や、病人訪問、獄中の殉教者の世話、会衆の秩序の維持、司教との面会を希望する女性との同行、同席に従事していた。いくつかの教会会議の証言によると、この制度には次第に悪弊が忍び込み、ついに女性助祭は単なる修道女に成り下がったようである。しかし東方では十二世紀にもまだ存在していた。この他に、一度しか結婚しなかった未亡人は特別な栄誉を与えられ、教会の施しを受ける特別な存在とされた。未婚や死別のため、この世に一人の男性保護者も持たない高齢女性は、常に特別な憐れみを受けるにふさわしい存在だった。男性に比べて体力もなく、一般的には財力もなく、世の中の知識も乏しいため、彼女らの心や態度

は一種独特なものに陥りやすく、過度の嘲笑を受けることがあった。また多くの場合、年齢によって失われた魅力を補うものはほとんどない。一方の性の老年を尊ぶべきものにして、成熟した知恵の重みと威厳は、他方の性の老年にはほとんど見られない。そして肉体の美でさえも、老いた女よりも老いた男の特徴であることがより頻繁である。教会は女性の人生のこの時期に敬意の後光を与えるために着実に努力した。そしてその宗教的運動は、それを慰め、占有するために非常に大きな役割を果たしたのである。

こうした考え方に基づいてキリスト教徒の立法者たちは財産に関する未亡人の法的地位の向上に大きく貢献し、ユステイニアヌスは母親に子供の後見人の地位を与え、法的には男性だけが後見人になれる、という異教徒のルールを壊したのである。教会の影響力への女性の常の従順さ、裕福な未亡人が財産を、母親が息子を教会に捧げた数多くの事例が聖職者たちの力になったことは間違いないだろう。しかし、これらの措置はキリスト教国において息子の早期教育に大きな、しかし完全に有益とも言えないであろう影響力を持っていた女性の地位を高める、という点において明らかに重大事だった。

あらゆる制定法とは関係なく、女性的な徳を前面に押し出すことによる理想的なタイプのシンプルな変更は、この性を引き上げ、高貴なものするには十分だった。中世の女子修道院長の高い地位、

多くの女性聖人、そして特に聖母への敬愛は同様の効果をもたらした。古代の三大国民の中で、歴史や詩歌の中に輝かしい女性たちを生み出すことが最も少なかったユダヤ人が、世界に最高の女性の理想像を与えたことは注目に値する。またその優しさと悲しみ以外に何も知られていない一女性、異教徒の最も堂々たる女性愛国者も比べものにならないほどの大きな吸引力を世界に対して持っていたことは、女性の最も魅力的な資質を証明する顕著な実例だろう。神学的な妥当性がどうあれ、カトリックの聖母崇拜が女性の理想を高め、清らかにし、男性たちの習慣を和らげるのに大いに貢献したことに疑いの余地はない。それは異教徒の女神崇拜が持ち得なかった影響力を持つていた。なぜなら異教徒の女神崇拜には道徳的な美しさ、中でも女性特有の道徳的な美しさがほとんど欠けていたからである。それは騎士道の時代に女性たちの周りに形成され、後に習慣や信条が変化しても完全には消失しなかった宗教的、放蕩的、軍事的感覚の奇妙な複合体の中に、それを救済し高貴なものにする要素を大いに供給したのである。

十六世紀の宗教的大変動の中で、カトリシズムが女性的タイプに従い、プロテスタントイズムが男性的タイプに傾いたことにはほとんど疑問の余地がないだろう。カトリシズムだけが聖母崇拜を維持した。それは女性的タイプを反映すると同時に持続させるものだった。音楽、絵画、荘厳な建築、印象的な虚飾によって感情に働きかけるその技量、理性よりも想像力に訴え、思考の様式よりも感覚の様式を育てるその傾向、その絶対無謬の確信の主張、とりわけ信者に永久に権威に身を委

ねることを説くその流儀はすべて同じ方向を向いていた。寄りかかるのは女の側で、自立するのは男の側である。取り乱した心に無謬の教会に対する理屈抜きの信仰を、苦しむ良心に赦す聖職者たちへの絶対の信頼を処方する宗教は、特に女性の心を惹きつけてきたのである。人間と創造主との間にいかなる権威も認めず、個人の判断の尊厳と義務を同時に主張し、個人の責任の感覚を限りなく深めつつ、宗教からげげばしい装飾やほとんどの美的な支援を取り除く宗教は、明らかに男性の宗教である。ピューリタニズムはキリスト教の最も男性的な形だった。ピューリタニズムの最も輝かしい指導者たちは、信奉する教義の体系同様、發揮する道徳のタイプもカトリックの聖人たちとは違っていた。カトリシズムは一般に人格を柔和にし、プロテスタントタイプは強くする。しかし前者の柔和さはしばしば弱さへ、後者の強さは硬さへと墮落する。真摯なカトリックの国々は敬虔さ、宗教的なものに対する習慣的で生き生きとした受け止め方、感情の温かさ、性格の親しみやすさ、言葉にもできないほど魅力的な、自然な礼儀と洗練された態度によって際立っている。真摯なプロテスタントの国々は真理への愛、確固たる義務感、その人格の強さと威厳によって際立っている。特に女性的な忠実さと謙虚さは前者で、自由特権と自己主張は後者で、主に開花する。前者は迷信に、後者は狂信的に陥りやすい。プロテスタントは結婚を清め、威厳を与えることによって女性に大きな利益を与えた。しかし、その理想的なタイプにおいても、その教義や帰依の一般的な主旨においても、それが取って代わった宗教ほどには彼女らの性質に合っていないことは認めなければならぬ。

女子修道院制度の完全な禁止もまた、女性たちや世の中のためになるとは到底思えない。貧困や家庭の不幸、その他の理由によって人生の戦いに無防備に投げ出された多くの女性に避難所を提供し、重大な悪徳の誘惑や極度の苦しみから守り、彼女らを活動的で組織的で知的な慈善活動の担い手とするような施設以上に必要なものは考えられないだろう。このような施設は屈強な男たちを力仕事から遠ざける修道院に対して唱えられる正当な異論とはほとんど無縁である。また独身女性に仕事と生計の手段を提供することの困難という、最も緊急で、現代において最も恐ろしい社会問題の一つを大きく軽減することができるだろう。人類にとって最も不幸だったのは、この高貴な構想が当初から曲解されたことである。計り知れないほどの慈善的な価値を持っていたはずの制度は、地上の幸福を促進することではなく、犠牲にすることを目的とする禁欲主義の原理に基づいていた。そして拘束力を持つ誓いが多く、悲惨と少なからぬ悪徳を生み出したのである。女子修道院は父親が財産を贈りたがらない娘や、一時的な情熱や悲しみの衝動に駆られて決して後戻りできない一歩を踏み出した若い娘たちの永遠の監獄となった。そして無駄な苦行や卑劣な迷信が最も有益に使われていたかも知れないエネルギーを浪費してしまったのである。しかし最も墮落した時代においてさえ、女子修道院が与えた苦しみより多くの苦しみを防がなかったかどうかは非常に疑問である。そして「ザ・シスターズ・オブ・チャリティ」(*司祭ヴァンサン・ド・ポールが1633年にフランスで作った慈善団体)によって、カトリックの修道会は全ての中で最も完全な女性のタイプの一

つを生み出した。しばしば教義上の革新に非常に臆病だった宗教改革者たちが、カトリックの女子修道院制度を再生させようとはせず、灰燼に帰してしまったことは近代史において最も深く嘆かわしい事実であると私は考える。

こうした観察をしているうちに私はこの歴史書が取り扱う範囲を超えてしまった。しかしこの著作全体を通して私の目的は、私が記録した道徳的事実がその後の社会の変化にどのように影響したかを明らかにして、その性質だけでなく、その重要性をも示すことだった。私は倫理学のあらゆる部門の中で、男女の関係と女性の適切な地位に関する問題は、その将来が最も不確かなものであることを指摘して、この章、そしてこの著作を締めくくろうと思う。文明が進歩するとともに、人間の慈愛はより温かく広いものになり、習慣はより穏やかで節度あるものになり、眞実への愛はより偽りのないものになることを歴史は教えている。しかし、それはまた偉大な知的啓発と偉大な社会的洗練の時代において、男女の関係はしばしば最も無秩序だったことを警告しているのである。この関係の現在の形には、特定の宗教の教えが非常に大きく影響していることは否定できない。しかし善かれ悪しかれ、この教えは政治の領域では急速に衰退しつつある。また経済学的見解と産業的事業における最近のある革命が、この問題に最も深く関わっていることも否定できない。長い間、人口の急激な増加は常に極めて有益である、という確信が政治家とモラリストの両方にとって公理であり、前者の立法と後者の判断の大半の基礎になっていた。しかし現在では社会にとって最も有

益なのは、結婚や子供の数を増やすことなく減らすことである、という全く正反対の理論がそれに取って代わった。この信念の結果、また贅沢な文明に伴う多くの人為的貧困の結果、男性の保護者なしに人生を切り開くしかない女性が非常に多くなり、また増加しつつある。また彼女らが身体的弱さのために遭遇しなければならない困難は、すべての女性は妻であるという古い前提に基づいた法律や習慣によって最も不自然に、最も甚だしく悪化させられた。男性が持っている経済的、教育的利益を常に奪われ、生計を立てるための非常に多くの仕事から完全に排除され、心ない嘲笑や断固たる非難によって他のコースを妨げられ、結果として何千人もの女性たちが最も過酷な貧困に、おそらくさらに多くが悪の道に追いやられているのである。同時に女性に残された仕事の主要分野において、まだその影響が不完全にしか見えていない重大な革命が起こっている。機械の進歩がその家庭的な性格を消し去ったのである。糸巻き棒は手から離れた。針はたちまち不要のものになった。そしてホメロスの時代から今世紀に至るまで家族の中心で行われていた仕事が、混み合った工場に移されたのである。

これらのことがもたらすであろう結果は、モラリストや博愛主義者を悩ませる最も重要な問題の一つであるが、歴史家を取り扱うべきものではない。女性の活動や教育が大幅に変化すること、こうした変化が性格のタイプに何らかの変化をもたらすこと、男女の関係に関する現在の道徳観念が多くの方面で厳しい敵対的な批判にさらされることは間違いなく予測される。間違いなく多くの荒唐

無稽な理論が提唱されるだろう。おそらく実際にいくらかの倫理的な変化が起こるだろう。しかし私が間違っていないなら、それは限定的な狭い範囲に留まるだろう。純潔と不純の違いに関する私たちのはっきりとした認識、私たちの愛情を支配する法則、生まれてくる子供たちの利益について真剣に考える人物は、他のすべての領域と同様、この領域にも決して取り去ることのできない一定の永遠の道徳的ランドマークがあることを容易に確信することができるだろう。

2023. 3. 31

キーワード… 欧洲道徳史